日本名著全集
江戸文藝之部第十二巻

洒落本集

この巻の装幀――

背及表紙意匠　廣田百穂氏畫
見返し前附・後附　廣田百穂氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

洒落本集目録

（目錄をはり）

解説　その一

山口剛

この洒落本集に收むるところ、すべて三十四部、四十一册、すなはち、百花評林、聖遊廓、月花餘情、異素六帖、遊子方言、辰巳之園、當世氣讓草、婦美車紫鹿、妓者呼子鳥、深川新話、道中粹語錄、大通多名於呂志、愚人贅漢居續借金、教訓乘軌本紀、和唐珍解、令子洞房、通言總籬、古契三娼、田舍芝居、和歌始衣抄、女郎買糠味噌汁、田舍談義、娼妓絹籭、錦の裏、仕懸文庫、辰巳婦言、傾城買二筋道、讃極史、籬の花、郭宇久爲壽、箱まくら、色深狭睡夢、新潟後の月見、金鄉春夕榮、これである。時で分ければ、延享一、寶曆四、明和二、安永六、天明九、寛政七、文化一、文政四、嘉永一、土地で分ければ、江戸二十八、京阪五、新潟一、金比羅一となる。總數約四百部といはれてゐる洒落本全體からいふと、あまりに少な過ぎるもの〻、さすがに、その最も聞えてゐるものを讀み、また洒落本の變遷推移のあとを辿るに足るものは、擧げられてゐるやうである。その一つ一つに就いて、短い解題を左に試みる。

百花評林

序文一丁、本文十六丁の小本、半紙四つ折の常の洒落本形より更に小形である。表紙は黃褐色、題簽は緋

唐紙、すべて唐本仕立である。刊記を缺いてゐるが、序文の末に丁卯春正月之吉とあり、また採花亭主人とあるので、延享四年の作と推せられ、また採花亭主人の著と知られる。採花亭主人の何者であるかは未だ詳でない。

この篇は遊里の諸花の姿と意氣かたを批評したものである。美女を花にたとへる例は多い。今それに倣つて百花と題したのだと巻頭にしるしてゐる。この書の性質はこれでほゞ明であるが、これだけではまだ盡さゞるものがある。すなはち、太夫、天神、鹿戀、月、影、汐、分、引船、遣手、禿、白人、中居、藝子、坂町の妓、堀江の妓、難波新地及び高津新地の妓、こそや、

「百花評林」表紙

百花評林

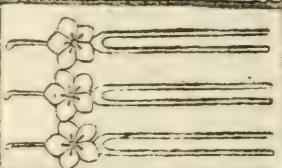
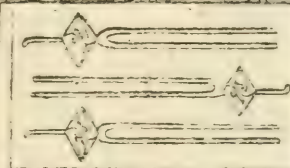
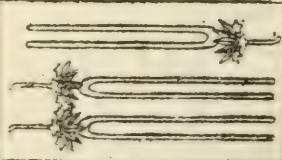
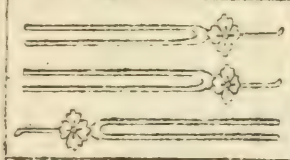
此篇挙平康里之諸花以評其風度意氣古人以美女比花者多故以百花命題云

○太夫

松位者為花木之長高砂尾上之若緑

「百花評林」本文冒頭

はすは、比丘尼、總嫁の二十類を、花に見立てゝ品隲したのである。たとへば、太夫を松、天神を梅、比丘尼を枯野の尾花、總嫁を暗夜の落花といふたぐひである。品隲の辭はどれも漢文で書いてある。つとめて洒脱の體を心掛けてゐる。更にその意を一首に要約した和歌を文後に添へてゐる。

遊女また若衆役者の容貌態度、或は藝風を品隲した評判記は、遊女物の「桃源集」若衆物の「野郎蟲」以來、數多く刊行されてゐる。これ等は、月旦の文詞の外に、和歌また狂詩また狂歌を伴ふのが例であつた。「百花評林」とそれ等の關係は、かなり密接であるといはねばならない。書名さへも、元祿十三年刊行の「[illegible]姿記評林」と一脈の聯絡のあることが考へられる。しかし、それ等の多くは、遊女また若衆の一人一人を品隲してゐる。それと比べれば、「百花評林」が類を以て分ち、品によつて評したのは、いさゝかの新案であらう。花の見立の如きも、作者みづからが自負してゐるやうに、また相應の新案であらう。尤も遊女の見立に花を用ゐるのは、想としては、もとより陳套に屬する。とても「浪花色八卦」の斬新に及ぶべきものでなかつた。この書は八卦を假りて、大阪各地の遊里の風格を說いた評判の書である。「百花評林」より少しく後れて出てゐる。

思ふに、「百花評林」の新しさは、それ等よりも、むしろ漢文仕立といふ點に繫がれる。おのづから江戶の遊里の書「[illegible]兩巴卮言」「[illegible]史林殘花」に呼應する。これ等は漢文の遊里志であつた。共に「百花評林」以前に刊行されてゐる。「兩巴卮言」は享保十三年、「史林殘花」は同十五年であつた。しかし、「百花評林」には和歌もあれば、和文で書いた評もあるので、必ずしもそれ等の書の體裁と一致しない。

この和文の評と聯關する場合も、或は離れて獨立してゐる場合もある。或は和文評の中で批評の批評の形をとる場合もある。評する者は探花亭主人の外に、多くの名が見える。たゞし、どれも假托の人物である。

評林の體を假り、諧謔を弄するために、都合のよい手段であつた。

作者が遊里に關するものを、漢文で書くといふことがすでに諧謔のためである。その諧謔を一段と進めるのが、本文を古典らしく扱ふことである。「百花評林」はもとよりその工夫を忘れない。たとへば、延享度には存在しない鹿戀、月、影、汐の目を揭げ、漢文の評を下してゐるのが、その一例である。しかも、和文の評の方で、それ等はすでに廢されて、今では、小天神の格式がそれであると斷つてゐる。この場合では、和文評はおのづから漢文評に對して、釋義の形をとつてゐる。

この書を、後の「遊子方言」以來の洒落本の型に當てはめることは出來ない。しかし、發生期に於ける洒落本の代表作として、重きをおかれてゐる。

「浪花色八卦」口繪

聖遊廓

奥附に、寶暦七年丑六月吉日　大坂高麗橋筋四軒町書肆泉屋市右衛門梓とある。大坂洒落本の最も古きものゝ一つである。本文二十丁半の小本。この書、後に改題して「雪月花」といふ。書中の三聖を雪月花に擬して、この名を題したのであらう。作者の誰であるかは未だ詳でない。或は相應の漢學者であつたかと推せられるだけである。

孔子、老子、釋迦の三聖が揚屋入をすることがすでに奇抜の趣向である。しかも、合方として、孔子に大道太夫、老子に大空太夫、釋迦に假世太夫を配するなど、巧に三聖の教義を利用してゐる。また揚屋の亭主を李白とし、幇間を白樂天、鐵拐仙人とし、その他、

陶淵明の合方女郎を菊、費長房のを鶴、周茂叔のを蓮とするなど、ある程度の支那通をふりまはし、更に東坡の合方舞戯子として李節推、韓退之の合方影子として孟東野を拉し來つた凝り方など、どうしても、漢學者流の戯作であることが考へられる。趣向はそれだけでない、釋迦が假世太夫と廓を抜け出でゝ心中することまでをしるし、しかも書置を梵字であらはし、道行を妹背の迯り火の淨瑠璃できかせるなど、出板當時の讀者の驚きぶりが推察せられる。享和三年刊、江戸板の「戯作評判花折紙」の評言はやゝ後のものではあるが、幾分の參考にならう。

頭取「寶暦の廿水無月の五日、御當地はじめての御めみへにて、その節ははなやかでござりました、則初舞臺の節、釋尊の役をつとめられ、道行いもせ迯り火といへる淨瑠璃にて、宮古路連中出語り、かりの世太夫との所作事、大入大繁

[illegible]

緡蠻たる黄鳥丘隅に止る[illegible]

[illegible]

冒つかまつりました。ひいき「頭取のいはるゝとほり。その昔ははなやかでござつた。頭取「只今にては、別しての仕打もござりませぬが、御老功故、何をさせても、儒佛老おしへかたがきついもので御座ります。

洒落本の定式ものは、會話体の文章が中心になつてゐる。この書は、その体を巧にこなしてゐる。この点に於いては、「遊子方言」より、ずつと先だつてゐる。後の洒落本の會話の主の名は一々箱印でかこつてゐるが。その工夫は、この書の三角印から暗示されたものだといふ。いふものは、例の「一花折紙」である。頭取の言葉として、から見えてゐる。

當世のしやれぼんに箱をかきまするも、この本の▲の印がござるからの思ひ付でござれば、しやれぼんの先達でござります。

この書に於いて、忘れてならないのは卷末にある「くるは唐韻（からことば）」である。多分の訛はあるがとにかく廓中の用語を唐音で書あらはしたもの、これである。書中にはさうまで必要のないのを、殊に附載したのは、作者及びその周圍が、この種のものに特別な興味を寄せてゐたためであらう。それ等に興味を寄せるほどの者は、また悦んで支那の艶史の類を讀んでゐたやうである。「聖遊廓」の成立には、或はそれ等が與つて力ありはしなかつたか。これはひとり「聖遊廓」だけの問題でない。發生期の全部に亘つていひ得ることであらう。

孔子老子釋迦の三聖が廓に遊ぶ趣向は、續編として、子路が孔子の命を滲じて、日本の遊里見物に來たこと、揚屋吉田屋の亀好のもとで六歌仙だちが子路をもてなして、當時の大坂の穴を語ること、また素人芝居を催すことを作らせた。寶暦十三年板「一列仙傳」これである。著者は先賢卜子夏である。何人の匿名である

かを知らない。序は漢文で書き、しかも、康熙十八年癸未冬十月壬午　七十二叟可亭董寧董沐拜序　南京沈無有識書などとしるしてゐる。作者の好みのほどが知られる。また、この書に當世　穿ちのあるのは、前編よりも所謂洒落本の型に入つて來たことを示してゐる。注意すべき一つである。

唐來三和の作、天明二年板の「通人孔釋三教色」が、「聖遊廓」を典據としてゐることは明である。かの三聖は、これにあつては、孔子釋迦及び天照皇太神宮である。例の「花折紙」にも、「當時のきゝもの三教色丈なども、この藝はだをまなばれましての仕うち」と見えてゐる。いさゝか憚るところあつて、その梗概の記述をも避ける。

通神
孔釋三教色

前座

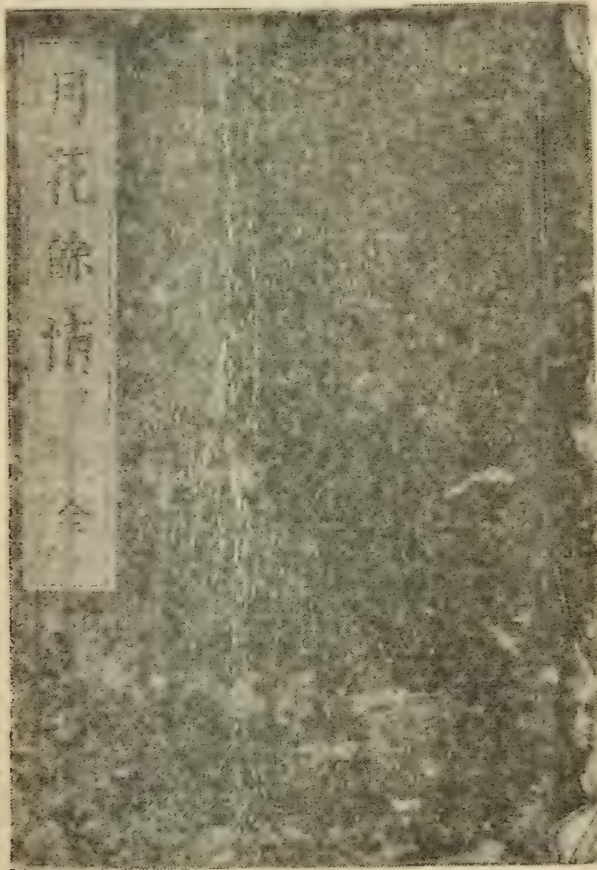
三聖邂逅

四季繁華曰孔子名丘仇名通其先通人父者行了簡毋者俠氏以其女郎二十二歳年明之歳十一月庚子生孔子於此昌平橋水道爲児嬉戯常唱河東節青樓及長成意氣浪浪度度也ふどくこじにけさへ嘘めして鬚長の骨長象小も歯ゆもあ

「三教色」初頁

月花餘情

一序文をこめて二十丁半の小本。大坂板である。作者は序文の署名によつて、獻笑閣主人であることが知られる。その何者であるかは明でない。刊行の年月また詳でない。しかし、寶暦六年以前の作であることは、すでにいはれてゐる。その證據として、八幡大名の作、寶暦七年正月の板、一穿當珍話に
の一節が擧げられてゐる。

〔知曉〕花情丈の事に付て彼是致し御無沙汰申しました、扨花情丈氣の毒で御座ります〔先生〕何と致したな〔知曉〕また餘程盡されましまして此度は松風ではないが、鹽ふみに上鹽町邊へ閑居の身分となられました。

「月花餘情」表紙

月花餘情

此書不知何人之作。初有妓邑之銀次之與蘇蕃者。即詩肉宮之語也。終有談戯幕。秘戯即帷幄之交也。於苑饅頭之耳多良須計之苦。各有其味。非言中味。而贈炙人口者。豈非此書

月花餘情　　二

「月花餘情」本文初頁

とある花情は「月花餘情」の主人公である。「月花餘情」には花情の遊蕩をしるし、「穿當珍話」はその後の窮命をしるしたのであらう。この二書は實は同一人の作であつて、後者に於いて、前者の吹聴をしたのであらう。かういふ見解のもとに、「月花餘情」は少くとも「穿當珍話」以前の刊行と推定せられる。さうすると大坂の酒落本の會話体の先蹤は「聖遊廓」でなかつた。また話の主の名を箱で圍ふ工夫も「聖遊廓」でないことになる。さうすると、作の出來不出來は別として、「月花餘情」は酒落本史に重要な位置を占めることになる。

「月花餘情」の序文は漢文で書かれてゐる。ものいひ、書きぶりの少なからず「百花評林」に似てゐることが、二書共に同一人の作でないかを疑はせる。

月花餘情後編
揚臺遺編　合刻
北閣秘言
戲笑閣藏

本文は三篇から成る。はじめに「江南妓邑記」がある。漢文で遊里島内の情景を記述してゐる。項目を擧げて、妓を說き、中居を說いてゐるが、着眼また甚だ「百花評林」に似てゐる。次に座敷の遊びぶりを、酒落本定式の會話体で書いてゐる。客花情を中心に、女郎、藝子、中居、揚屋亭主、花車などを活躍させる。「燕喜篇」と題する。この篇と前篇との闘

係は、抽象と具象の關係である。努めて具象的態度をとるために、篇中の人物がうたふ流行唄に節附をさへ施してゐる。最後が床の間、「秘戯篇」と題する。尤も、これは題目だけを殘して、本文をしるさない。散佚に托して「而今亡矣惜哉惜哉」といつてゐる。諧謔の筆法である。

「月花餘情」の後編として、「陽臺遺編」がある。「妣閣秘言」と合刻してゐる。「秘言」は前編の「秘戯篇」をうけるものである。獻笑閣主人の作。刊行の年月を詳にしない。

これには妓を詠じ、島内の情景を詠じた漢詩數首がある。それの叙として、漢文の妓品記がある。前編の「江南妓品記」に形質を同じうしてゐる。往々說いて重複するものがある。たとへば、前編の甕子のくだりに、年紀畧限于二八前後といひ、絕不薦寢席、因又稱無色といつてゐるのを、またくりかへして、有接歌調妓者の釋に、原是稱甕子者也、自今以來、呼藝妓稱無色、多以妓之富春秋者、而當此役、然有年及不惑務于此役者、但是百中之一二而已といつてゐる。中居のくだりは辭句全く相似てゐる。その說明ぶりが、いよいよ「百花評林」との關係を思はせられる。殊に有白人者の釋に注意すべきものがある。原是稱白人、史記遊俠傳索隱曰原是稱薄仁而可也、一音訛轉以薦寢席爲務とある。

北州 異素六帖

寶曆七丁丑歲正月吉日　書林東都淺草御藏前茅町二丁目六河赤次郎板本村木町四丁目柴田彌兵衞仝と奥附に見える。江戸洒落本の最古の一つである。上下二册、上卷は十四丁、下卷は三十二丁。形は半紙四つ折。上卷に先々道人の漢序一つ、和亭主人の和序一つ、何遊堂愛歇の跋一つをおさめてゐる。作者の名はしるさ

「異素六帖」表紙

れてないが、澤田東江の著であることは、彼の直話として、蜀山人が傳へてゐるものによつて明である。

東江先生が八丁堀の地藏橋に居た時分、門人の數が未だ少くないので、正月の會はじめに、岡部公修と共に來るやうにといはれて出席した。その折「吉原大全」を作つたとて、板下のまゝ見せられた。また唐詩選と百人一首の下の句を合はせて、青樓の事をしるした「異素六帖」といふ小冊子を著はしたとの物語を聞いた。蜀山人の隨筆には、かうしるしてある。

東江、名は鱗、字は文龍、はじめ東郊と號し、後東江と改めた。程朱の學を林鳳谷に學び、書道を高頤齋に學んだ。書名大に著はれて、その經學文才の名はつひに掩はれてしまつた。彼は美貌であつた。若い頃は放蕩三昧で、吉原に居續のみしてゐた。彼の名はあまねく娼家に知れわたつてゐた。「異素六帖」「吉原大全」の著のあるのも偶然でない。「異素六帖」は彼の二十六歳の折の作であつた。

「異素六帖」は「義楚六帖」のもぢりである。異素とは白きを染めるの義を以て、色を意味する。この書の題簽には「異素六帖」の上に、「北州」の語を冠らせてゐる。すなはち、吉原物なることを標榜してゐる。

上卷には、まづ佛者、儒者、歌學者の色道論がある。論はその頃行はれてゐた講義物の形式のさまで珍しいものでないが、論の決着として、吉原に關する題を出し、それにあてはまる唐詩選の詩句と百人一首の下の句とを引合はせることになる。上卷は、いはゞ下卷に對して惣序の位置にある。

下卷のには五十五題に對する詩歌がある。作者はおのづから分類を以てしてある。下卷のはじめにそのよしを說いてゐる。一、初三全盛の歳をいふより、以下の二十二段女郎のうへをいふ。一、二十三より十二段客の事をいふ。一、三十五より十一段雜事をいふ。一、四十六より五段又女郎をいふて秘事をあかす。一、

五十一、五十二、又客の談笑をいふ。一、五十三より五十五まで總論。すなはちこれである。諧謔なもとめて、わざと事々しい扱ひをしたのであらう。

緣のない詩歌を無理に吉原に結びつけたをかしさを、なほ一段と徹せさせるために、註釋を加へてゐる。作者に牽強附會に最も力を盡して、趣向とした。尤も、この種の諧謔は當時に多少の類作があつて、必ずしも作者の獨創とはいはれない。否、作者はそれ等をも參照して、案を立てた形跡がある。たとへば、「親のためにつとめする女郎」の條に、「花里通商考」を引いてゐるのでも明である。この書を、惣雪隱の條に引いた「漢書地理志」などと一つらにするところが、作者の工夫であつた。「花里通商考」は少し前に刊行された洒落本である。「異素六帖」に引用せられたのは、吉原國の條下である。

……人物至て色白く、甚美なり、齒都て黒む、髮長し、眉は一人々々にあり、臍の下毛なし、風俗地女國に異なり、金入、ひろうど純子、毛織巳下種々の美服を着す、櫛笄は金銀、或は鼈甲、象牙を以て飾り之、酒を呑事猩々の如し、煙草を好む事、紅毛の如く、身に自然の香氣有つて、皆人鼻毛をのばす、口少し甘嗅し――

この中から、たゞ一句だけを裁斷して、「獨在異鄕異客」の註釋に資し、「異鄕異客の異は、花里通商考に云、風俗地女國に異なりといふがごとし」といつてゐることに、細かい用意がうかゞはれる。

遊子方言

本文三十二丁、序文及び目錄を合はせて三十四丁の一冊。形は常の小本。

序は漢文、末に田舍老人多田爺謹書と署してゐる。本文もとよりこの人の作と思はれる。この書刊行年月

を明記したるものがない。しかし、二つの條件を理由として、明和七年の刊行であることが推定されてゐる。
一は明和八年板の「虚實馬鹿語」に、この書名が見えてゐること、も一つは「中古風俗志附錄」に、
明和七寅年、辰巳之園といへる深川の女郎買の事を記したる小册、遊子方言といへる吉原の事を記したる小册版行になる、右二部の洒落本大にはやりたり
とあることとである。
作者かと思はれる多田爺は何人であらうか。平秩東作の「莘野茗談」には、丹波屋利兵衞と見えてゐる。また他の傳では多田屋利兵衞であるといつてゐる。それならば、多田爺の多田は、その屋號から出たことになる。多田屋利兵衞とは、この書の再摺本の奥附に、板元としてしるされてゐる名である。堀江町四丁目の住であつた。
再摺本の卷末には、書林の二字を殘して、その名を削つてゐる。削つたあとに、微かに須の字が讀まれる。その事實と、「莘野茗談」の、利兵衞が遊子方言を著はして、須原屋市兵衞に刊行させたといふ記事を參照することに於いて、初摺は須原屋、再摺は多田屋であつたらう、それもこの書の流行による利益問題がさうさせたのであらうなどゝ推測されてゐる。
「遊子方言」の名が「揚子方言」のもぢりであることは言ふまでもない。方言は、吉原の廓ことばの義を示したのであらう。
發端、中の町、夜のけしき、宵の程、更けての體、しのゝめのところに分れてゐる。發端は舟に乘るところから大門口まで、中の町は茶屋の有樣、夜のけしきは仲の町の光景、宵の程は座敷の體、更けての體は閨の

發端

小春のころ柳ばしで二十四五の男すこしあらきの
そげたる大事な文びらい八掛けを見える羽織。
縮の細き藤の華むすびされ細身のまきざし柄まへ
少しよごれ。黒羽二重の紋付少しよごれし小袖。
あかゞゑハ小紋綾の片袖ちぢみのやうれるへいろう
さめさ緋縮緬のまへだれ。まきかくそでつま。帽びろうの
ちくつ下駄。ややまあり頭巾かぶりあり。鼻紙袋ハなし

「遊子方言」本文

内、しのゝめのころは、朝がへりの體である。夜のけしきを除くの外は、すべて會話體である。江戸に於いて、洒落本の常式を備へた最初のものであらう。

例の「花折紙」では、この書を總卷軸に推してゐる。小書いしやうつけのかい山ともいつてゐる。また、當世の小册子も、皆このしうちを見ならひましたとみへますと評してゐる。この評言は二重の意味で聞くべきである。會話體の文章であることが一つ、内容に半可通を用ゐて、ある滑稽役を演ぜさせることが一つである。半可通が、自分一人通り者めかして、自慢たらたらと、生息子を煙にまいてゐるのが、後に箔が剝げて、野暮の骨頂を現はす。これが洒落本の典型である。この書には、その型が巧みに描き出されてゐる。しかも、最初のものである。當時に於いて、大に受けたのも無理がない。「花折紙」の如きも、主として、その手腕を推稱してゐる。

第一番目、傾城買の通り者の役にて、船中からの樣子、土手の惡じやれ、大門にまでのうぬぼれ、中の町の茶屋にての大塩屋、大てれほうの面白み、平氣な顔のおかしみ、大當り／＼。

辰巳の園

序文及び附錄ともに三十六丁の一册。形は常の如し。

作者は夢中散人寢言先生、漢序一つ、樽閣街紫樓の署名がある。それに明和七庚寅林鐘撰之としるしてある。刊行の年月を知ることが出來る。林鐘は六月の異稱である。また外に作者の自序がある。作者夢中散人の實名は未詳、彼にはなほ數部の洒落本があつたやうである。安永二年の「南閨雜話」同六年の「芝居蟲眼

「辰巳の園」本文初頁

方言」がそれである。

「辰巳の園」の辰巳は巽である、東南である。この書は江戸の東南に當る深川の遊里を舞臺としてゐる。自序はおのづから、吉原深川の比較論となつてゐる。本文は、その七場所の中、仲町の遊びを描寫してゐる。けだし、深川遊びの酒落本の最初のものである。

趣向は「遊子方言」と似てゐる。半可通の如雷が、田舍侍をつれての深川へ行く途中、舟の中で、頻りに流行を說き、また通をふりまはす。それが一度妓樓に上る段になつて、化の皮を現はす。また別に通客の遊びを寫して、深川の騷ぎを見せると共に、如雷の遊びと對比させてゐる。そこに滑稽の味を出さうとしてゐる。附錄として、通言また挾み言葉の說明がある。本文用語の注釋といふ形式をとつてゐる。當時の酒落本はともすると遊里案内の書の格であつた。從つて、この種のものを必要としたのであらう。

この書の再板本は、紫樓の序文に於いて、年號を削つて、林鐘撰之のみを殘してゐる外に、自序また本文の中にも多少の異同がある。この集に收めたものは、勿論初板の本を底本としたのであるが、參考のために、再板本との比較を擧げる。主要のものにとゞめる。

自序。八七頁十二行、禿有は小女子(ちよこ)といふ。再、小女郎(こぢよらう)あり。本文。八九頁上段三行、日暮里(につぽり)。再、日暮里(ひぐらし)。八九頁上段十四行、花の會に屋鋪に鞠。再。花の會にそして屋鋪に鞠。八九頁中段十七行、揚枝屋の娘、美、再。娘の美(うつくしさ)。九〇頁下段九行、かみさん女に、再。かみさん女中に。九〇頁下段十四行、つやめり買に。つやめりやす買に。九二頁下段十六行、京扇子をばちさせ。再、京扇子をばちつかせ。九三頁中段十行、あぶらやへ。再。扇屋へ。九三頁下段七行、風流(はやり)の馬士ぶしをお聞なされましたか。再。風流(ふうりう)の馬士ぶしをお

聞なさりやしたか。九四頁下段四行、馬喰丁の上總や五兵衞。再。馬喰丁の紙屋五兵衞。九五頁上段六行、富八でも豐後なら。再。富八でも豐後ぶしなら。九五頁上段十二行、富田屋と云のが、そだ。再。富田屋と云のが、そだ、今はわきへこしやした。九五頁上段十五行、芳丁に西川重三郎と云人形遣ひ、ぞうしがへやと云て有。再。芳町に人形づかひ西川重三郎がぞふしがやと云て有。九五頁上段十八行、萬屋新萬屋。竹伊勢と云は伊勢太夫が内じや、鹿の子餅は又太郎が見世、向の角の八百屋は大谷廣右衞門いつくらも此類がある。再。萬屋新萬屋は市松竹伊勢屋といふのは隱居した伊勢太夫が内じや、鹿の子餅は又太郎音八と兄弟が見世じや、角の八百屋は大谷廣右衞門、今では人形と錦繪を賣りやす、いつくらもこんな類がある。九五頁下段八行、「お長」何サかみさんの部屋にでも寢て居なさりやせ「志厚」それも久しいもんだ「一「お長」なんでも待つて居ねェ（お長は出て行如雷は廊下でぶら／＼して居）「一「お長」なぜそこに居なさりやす「如雷」酒に醉たから。再板は「　」の間を缺く。九九頁上段四行、「船頭」船はとふに來て居やす「客」サアノ＼そんなら此間に「おてう お中」此間に、「一　利中繁太夫梅太夫」ハイよう御召なさりませ。再板は「　」の間を缺く。

當世氣轉草（きとりくさ）

屛に、金金先生著、當世氣轉草、附瀨川菊之露とある。題簽及び卷頭には、當世氣とり草とある。奧附に、安永二癸巳年四月　書肆安原平助版とある。

附錄の瀨川菊の露、また山陰萬八の序、雲突の跋と共に、六十七丁の一冊物、たゞし、大字で書いてあるだけに、分量からいへば、普通の洒落本よりも短いほどである。大さ常の如し。

當世氣とり草

實にや太平のめでたき御代乃たのしみには弓は囊に刀は箱に納まる。治まりてのつきたしへは曲譜末つて旅まし。若おうろの斜込は擔夫さおつて速し。出る

文本「草聞氣世當」

作者金金先生の傳未詳、金金の名は、立派な通人を意味する當時の通言から出てゐるやうである。氣とりの義は、また通とも、洒落とも解せられる。この書は、通人の眼で看た世相の穿ちの戯文である。初期の洒落本には、往々この種のものがある。

この書の本文はおのづから二部に分れてゐる。はじめのは遊里に關し、後のは劇場に關する。この二惡場所は、江戸の文化生活の中心地、洒落の本源地である。當世の氣とりをいふ以上、どうしても、これを對象としなければならなかつた。遊里に關しては、吉原を主として、客と遊女の穴を說くと共に、その頃盛を極めた岡場所を網羅しようとする。品川、深川、新宿、氷川、神明、根津、千住、板橋、三間堂、大根畠、鐘撞堂、赤城、音羽、いろは、愛敬、猫茶屋、馬道、入船町、三角屋敷、佛店、挑灯店、車坂、朝鮮、鳥越、六間堀、あたけ、菊坂、網打場、赤坂田町、三田新地、猪の堀、どぶ店、万福寺、藪下、市兵衛、鮫が橋、神田田町、大橋橋詰などを數へ、また衆道の惡場所、堺町、吹屋町、葭町、湯嶋、平川、代地赤城、花房町などをも數へてゐる。劇場は、江戸三座の賑ひを說き、また役者一々の評判に及ぼしてゐる。

附錄の「瀨川菊の露」は、この書刊行の一月前に死歿した二代目瀨川菊之丞の追善錄である。

この菊之丞は初代菊之丞の養子であつた。或は實子であつたが、憚るところあつて、養子の體裁をとつたともいはれてゐる。武州王子に育つたので、世に王子路考といはれた。若女方として、一代の人氣を一身に集めた。彼の美貌は、はやく風來山人をして、「根南志具佐」に、閻魔王の戀わづらひを書かせるほどであつた。藝風また評判がよかつたが、三十三歳で病歿した。江戸の人々の哀悼もさることであるが、葬式の華やかさが、耳目を驚した。こゝには、その人氣者の死前の事實に、わづかに、趣向を構へて、一篇の戯文とし

たのである。

婦美車紫鹿(かのこ)

浮世偏歴斎道郎苦先生の作、安永三年の出板。漢文の序一篇共に三十丁の一冊物。形常の如し。

道郎苦先生の實名は詳でない。尤も、天明の再板本のうちには、作者蓬萊山人歸橋と署名したものもあるといふ。それならば、歸橋の匿名である筈である。尤も管見の及ぶところは、再板本にも道郎苦先生の署名のあるのもある。花折紙には歸橋の作としてゐる。

その再板本の中には、「辰巳の園後編」と角書をおいたものもある。角書の意味は、田舍侍が遊所の傳授をうける筋を、「辰巳の園」から學んだためであらう。しかし、これは、深川物でなくして、品川の遊びを書いたものである。

書の大體は、最も多く「遊子方言」に似てゐる。遊女の發端、生美市の出會、九蓮品定、高輪茶屋の段、品川宵の景色、夜中の口舌、しのゝめのてれといつた目錄の立方も、ほゞ同じやうである。「辰巳の園」の志厚は、これの和清に當り、如雷は「遊子方言」の通り者と共に、これの歌橋及び野呂衛門にも當り、龜橋は、「遊子方言」のむすこに當る。人物の出入ほゞ似てゐる。或は道郎苦先生は、「辰巳の園」、「遊子方言」の趣向を合はせて、その世界を品川に轉じたのでなからうか。尤も、品川の地方色を出すために、相應に努力してゐるやうである。僧侶客を配したなども、一つの工夫であつたらう。

この書の價値は、品川の描寫にもあるが、實は、附錄やうの九蓮品定にあらう。少くとも、今日では、そ

「言葉草紫庭」本文

れから受ける風俗史料の價値を大く見つもられねばなるまい。九蓮品定には、當時流行の岡場所約七十ヶ所を、上中下の三品に分ち、それを更に上中下の三生に分ち、九階級に配列し、また平家、白拍子の二類に區別し、一々に就いて、揚代、その他風俗上の特相をしるしてゐる。この平家白拍子の分類のためには、遊女の起原の説明が必要であつた。「遊女の發端」の目を立てた理由である。

作者は、この九蓮品定を、全體の筋の中にとり込むために、田舎侍が夢想に授つたことにし、それを芝明神の社頭で、知合の町人に披露することにした。これなどは、芝居の舞臺の上などでは、くりかへされた趣向であらうが、なほ「花折紙」では、相應の喝采を受けてゐる。

頭取「紫鹿子丈、最初に白拍子龜菊となつて、平家沒落のものがたりを致され、白拍手と遊女のわかちを仕分けらるゝところ、大てい〳〵、それよりつぎに、江戸中の惡所場をかたられまする迄、大骨折のしうちよし〳〵。

當時の岡場所の勃興は、その一つ一つを世界とする以外に、これを總括して評判する洒落本類が頻出した。

「契國策」遊里方角圖

中にも、この九蓮品定に参照すべきものは、安永五年の「契国策」、また九年の「客者評判記」であらう。

妓者呼子鳥（げいしゃよぶこどり）

田螺金魚の作、安永六年の刊行、序と共に三十四丁の一冊物、形は常の通り。挿絵二丁、湖龍斎の筆である。天明七年に再板の折には、「妓者虎之巻」と改題した。

外題で知られるやうに、藝者を題材としたものである。作者の自序はなほ一段とその態度を明にしてゐる。橋町の藝者お豊とお富の傳を述べて、藝者の所謂、艶路の手段、また貞女の操、それにからまる女の嫉妬を、だらく肌に書きつゞけるといつてゐる。

岡場所が勃興する頃に、町藝者もまた一勢力をなしてゐた。これを題材とする洒落本もあつた。「（藝客長舎）四季物語」「（白拍子の文反古）」「誰が袖日記」「咲分論」などがある。しかし、傑出せるのは、この作であつた。

お豊お富は實在の人であつた。蜀山人の「奴凧」に、かういふ記事がある。いさゝかの参考にはならう。

女藝者の事を、昔はおどり子といふ。明和安永の頃より藝者とよび、者（しや）などとしやれたり。辨天おとよ、新富などいひし、橋町に名高し。妓者呼子鳥といふ小本（田にし金魚作後に虎の巻と改む）に此二人の事を記せり。橋町大坂屋平六といへる薬種屋の邊に、藝者多し、俳諧の點者祇徳、其邊に住しゆゑに、祇王祇女がほとりに、祇一祇徳などいひし白拍子の名にたゝへて祇徳とはつきたり。辨天おとよ追善の句に

蛇は穴辨天おとよ土の下　祇徳

といひしもをかし。

妓者呼子鳥

○第一

妓者

三

「妓者呼子鳥」本文

妓者虎の巻

○第一　風俗

「妓者虎之巻」

そのお豐が戀敵お富を呪咀する。お富はまた戀人のために、金を工面するとて、手管で媚びな男をあやなす。と知らぬ戀人は、一時の怒にお富を殺す。さて、事の始終をわかつたので、腹かき切る。お豐は二世まで誓つた戀仲を、寐取るばかりか、心中とは、皆お富めがなす仕業と、悶え惱みて病に臥す。その執念陰火となつて、お富の墓に落ちて、お富の靈を苦しめる。「妓者呼子鳥」の筋立はこれである。

かういふ事實は幾分かあつたらう。たゞ潤飾の程度は知るよしもない。しかし、著しいのは、從來の洒落本と性質を異にすることである。成程、この篇も、他の洒落本の如く、藝者間の穴を穿ち、また當時持て囃された眞崎の狐などをもとり入れてはゐるが、作者の主眼とするところは、いふところの人情にある。はるかに、後の人情本に應ずるものとして、看られてゐるのも理である。

この人情は、金魚の作を貫く精神であつた。この書刊行翌年の板「傾城買虎之卷」と比較すれば、その特質はなほ明になる。題材は、當時やかましく言ひふらされた烏山檢校の瀨川身請事件である。身請された瀨川には戀人があつた。殊にその胤をさへ宿してゐる。戀しさは惡漢に欺かれるとも知らず、戀人のもとに走るとて、誘はれて家出する。途中、脅迫されて、從はず、つひに殺される。その靈が病める戀人の枕邊に出現し、赤子を殘して去る。巷說に基き、人情を主とし、また怪談に結ぶあたり、手法全く似てゐる。「妓者呼子鳥」は再板の折に、改題して「妓者虎之卷」といつたが、題號の選みは、おそらく、この「傾城買虎之卷」と對をするためであらう。「虎之卷」の流行が前著にまで及ぼした影響であり、書肆のさかしらであらうが、內容からいへば、妓者、傾城のちがひこそあれ、扱ひは當然一對として見べき性質であつた。

田螺金魚に就いては、神田三河町邊の町醫の子とのみ傳へられてゐる。詳細を聞かない。

深川新話

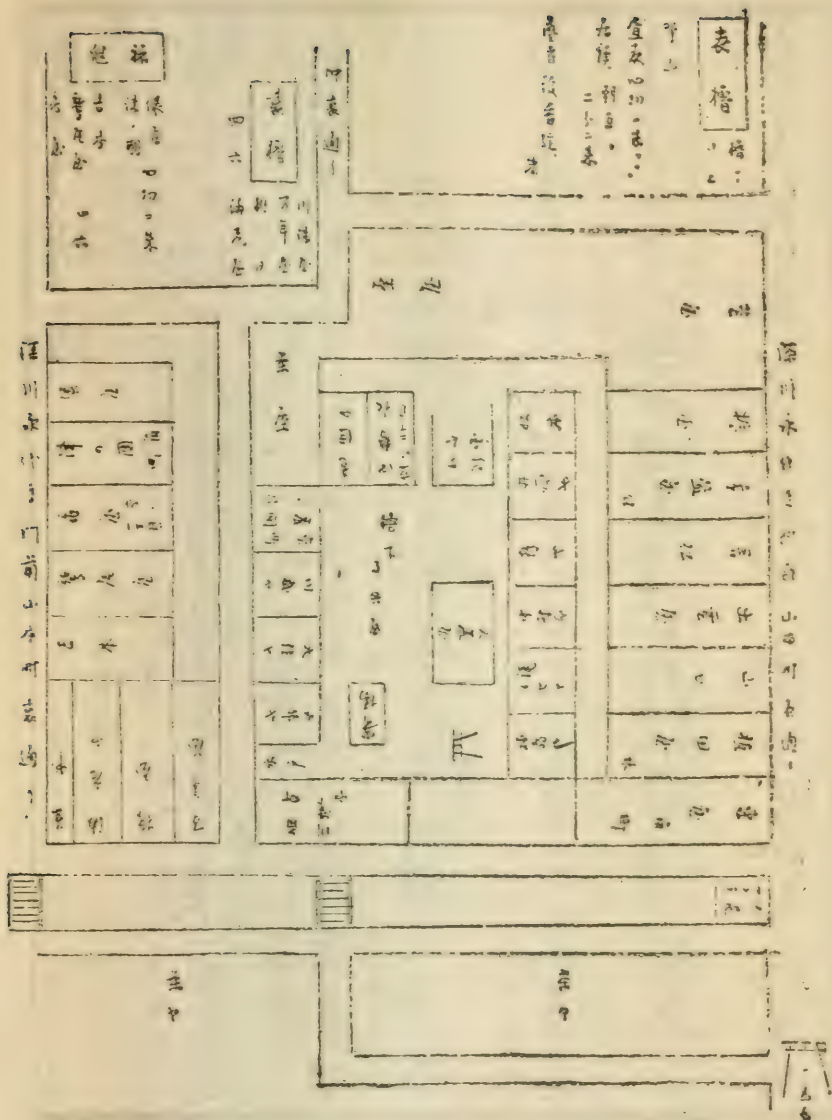
山手馬鹿人の作、安永八年刊行。奥附に、安永八年　江戸四日市上總屋利兵衛板とある。朱樂館主人の序及び千里亭白[illegible]の序がある。外にさし繪一丁、本文三十丁半の一册物、形常の如し。

題號は、その頃の流行書家、深川親和の名をもぢりである。洒落本の題號には、この種のものが少くない。たとへば上野山下のけところに取材した洒落本「山下珍作」が、俳優山下金作の名をもぢつてゐる類である。親和は、井氏、通稱彌兵衛、號は龍湖、萬玉亭、深川に住ひしてゐたので深川親和といはれてゐた。書を細井廣澤に學んだ。相應の書き手であつたが、殊に宣傳上手が、彼をして名物男にさせたのである。その名は、しばしば洒落本の上に散見してゐる。「辰巳の園」の中の會話の中に、「孫兵衛とは」「國で知つてゐる親和の事さ、三ツ井孫兵衛と云つては、手跡はよし、金は澤山あり」とあるは、彼の噂である。

山手馬鹿人は蜀山人の別號である。狂歌狂詩の雄であつた彼は、また數部の洒落本を書いてゐる。とりどりに持て囃されたが、これもまた傑作の一つであつた。世界は裏櫓である。裏櫓は深川永代寺門前山本町西方河岸、「紫鹿子」に中品上生、晝夜四切七匁五分といふもの、これである。作者は、この世界に東里といふ男と、息子斧とを拉れて來た。東里は通り者をきかせた者であらう。その通り者は半可通を振りまはし、息子に遊びの傳授を誇りかにしたもの、却つてふりつけられ、うぶな息子は大持てに持てるといふのが、筋の運びである。筋の上から見ると、「遊子方言」以來の陳套に屬する。しかも、なほ「新話」といふのは何であらうか。

深川新話

「深川新話」本文

「かくれ里」所載表櫓裏櫓圖

沖釣は江戸の民衆の享樂の一つであつた。その歸りをすぐに裏櫓へと運ぶ、羽織も着ずに、合羽姿で乘り込み、客の獲物を女郎達に見せるなどは、まだ洒落本にない趣向であつたらう。それを「一羽衣」の謠ひで書き出すなども、また新しい起筆であつたらう。客の二人をシテワキとするのも、新しい手段であつたらう。船頭仲居の仲を書いたのも、「賤しい勤はしゐすけれども、ついぞ初會から手前呼りをされた事アござんせん」とやり込める遊女の深川意氣を書いたのも、作者の新しいと信ずるところであつたらう。書中、そこここゝに散見する輕い洒落は、さすがに蜀山人その人ならではと思はれ、卷末の道行ぶりに、深川遊所のよみ込み、また作者の得意とするところであつたらう。

輕井茶話 道中粋語錄

一名を「一變通輕井茶話」といふ。本によつて、題簽が二樣になつてゐる。尤も、どれも、序文には「一變通輕井茶話」、本文のはじめには「一變通輕井道中粋語錄」となつてゐる。

山手馬鹿人の作、安永年間の刊行、外に作者の自序一章、春章のさし繪一丁がある。本文三十一丁、一冊物。

輕井茶話は、信州の輕井澤である。輕井茶話の當字は輕い茶ばなしを利かせ、變通は江戸の通と違つた田舍通を利かせ、粋語錄は雙六を利かせると共に、粋な語錄、異樣な田舍言葉物を利かせたのであらう。

作者の序文の一節にいふ、

夫レ輕井澤の地たる川柳傳にあらはれたる一方の色里也、今雪國の肌を探り、飯櫃の底をたゝき、大通變じて變通にいたる、淺黃の裏の裏のうら、紺の布子に白あがり五所紋あり〳〵と、かきしるしたる此

軽井茶話 道中粋語録

「道中粋語録」本文

作者が、かういふ變通の書を成したのは、洒落本中のある要素を特にとり出して、擴充させたためであつた。ある要素とは、滑稽味である。それがために、淺黄裏の田舍侍や田舍客が、なかなか大事な道外役をつとめてゐる。たとへば、「辰巳の園」の新五左衛門などのたぐひである。彼と、通り者と自讃する如雷の會話の中にかういふ一節がある。

如「新五左、かならずつきな事をいふまいぞ」新「何サ、おれもいなかじやアお女郎買だ、今度も輕井澤であそんだら、峠迄おくつてなむし、おかへりにやア、かならずよらつしやりませと、くれぐれいふて大もてゞあつた」如「なんの事だ、人が聞、そんな事は御めんだ〳〵」

作者はこの輕井澤を舞臺とし、新五左衛門の合方であつた遊女を、江戸の客の合方とさせ、また新五左衛門以上の土地ツ子を、變通の代表者として活躍させたのである。

書は二部に分れてゐる。作者は第一部に於いて、江戸客に輕井澤の遊女を配させて、風俗も、言葉もまるで違ふをかしさを寫し出してゐる。描寫の手段として、そこに江戸生の、江戸辯の女中一人を介在させてゐる。細かい用意である。「花折紙」は、それに對して、「おさのといへる女ばかり、江戸詞のしうち、どうもいへませぬ」の評を下してゐる。

第二部を、降座敷として、土地ツ子と遊女の遊びとする。例の風俗の違ひ、言葉の違ひはあれ、手練手管の魂膽は、輕井澤も江戸も違ひはない。作者は、異風によつて、滑稽をうつしはするが、異風の底の實情を棄てなかつた。「花折紙」はまたその點を推稱してゐる。

「眞の道外方の愚は直にして、ちやり敵の愚はいつわれる所なり、いにしへの松嶋茂平次、あらし音八、みな直愚なり、よつて藝とうもきれいなり、道中粋語錄丈この器なり、

「大切彌五左衛門の役にて、傾城田ごとと悋氣いさかひ、口舌のあん梅、またきつついもの、

この作者の洒落本は、他の作者より滑稽味に於いて勝つてゐる。「花折紙」が、この書と共に道外方に加へてゐる「世話新語茶」なども其の例である。

その滑稽は、江戸の通の標準を確守することに於いて成立する。作者が世界を輕井澤にうつしたのも、實は他山の石として、ますます江戸の玉の光を増させる手段であつたらう。表面きつて、江戸の通を禮讃する洒落本よりも、趣向として、一段も二段も工夫を重ねた譯であらう。板元上總屋利兵衛の藏書目錄の中には、

これはぐつとひねつて口合輕井澤の地色客色のこんたんをしるす

と見えてゐる。

作者は、この作から田舍の滑稽味のみを重要視されることを豫期しなかつたらう。たゞ江戸の洒落本として、ひねつた趣向としてのみ迎へられる考のみがあつたらう。

こゝの趣向が、一九の「東海道道中膝栗毛」の三嶋の條に模倣せられてゐることは、最もよく知られてゐる。

この作と、「深川新話」の形は、全く似てゐる。諸ひではじまつて、淨瑠璃風に結ぶところ、隣座敷を利用するところなど、殆ど同じ型である。やゝ注意すべきであらう。

大通多名於路志（たなおろし）

閑言樂山人の作、刊行年月の明記がないが、內容から、安永年中のものと推定される。閑言樂山人の實名は詳でない、或は雲樂であらうか、「花折紙」にはその名をしるしてゐる。

作者の自序、自跋おのおの一章、本文は十八丁の一册物。中に、半丁の挿繪がある。

はじめの三丁半は、節附を添へた謠曲の体。長羽織の通人をシテとし、惣髮なでつけ唐衣裝の唐人をワキとする。シテは遍く娼家巡りをして、なほもの足らず、唐へ渡り、通人とも出會つて、よき趣向を得ようと思つてゐる。ワキの唐人がそれに邂逅して、渡唐をとゞめる、酒落も穴も居ながらわかるが大通人と敎へる。

その後は常の會話体となる。「まちうたひ後シテと云所はすぐにおはなしにしやしやう」とシテがいひ出し、「左やう〳〵是からはやつぱり例の通りサ」とワキがうけて、ワキは、唐人の傀儡傳が日本の酒落を試みようとて、長崎へ來て、その娼家でおごりかけ、窮迫して歸國もならぬ折、そこの漁翁と詩歌を問答したこと、漁翁は實は住吉の末社であつたこと、今は唐には傀儡傳ほどの通人も居ないことなどを語る。

この一節は謠曲「白樂天」の筋を假りてゐる。白樂天が日本の智慧を計らんために來て、漁翁に身を窶した住吉明神に逢ひ、その歌に驚かされて、歸るといふのがその筋である。

さて、思ひとゞまつた通人は、更に唐人から大通の傳授をうけることになる。この傳授は、酒落本に於いて、常にくりかへされる趣向である。酒落本には、遊里の教訓書と見られる性質がある。それがこれ等を必要とするのであらう。あの金魚の「傾城買虎の卷」の卷末には、特に、「やぼに示す傳授事」といふ一章が設けられてゐた。また同じ人の「十八大通百手枕」は一名を「傾城買指南所」といふだけに、その傳授が中心となつてゐる。參照すべきである。

「多名於路志」本文

謠曲まがひも、「白樂天」の翻案も、要は、この傳授にまで誘導する手段に過ぎない。全體の半ばは、それに費されてゐる。合はせ得るものは、原據と對することによつて、知られる滑稽である。作者は一面それを尊重する。故に、「白樂天」の中に引用せる。

青苔衣をおびて巖の肩にかゝり、白雲帶に似て山の腰をめぐる

を、原形に還し、更に狂詩に轉じて、

錢代脫衣否拘レ貸、半分寐レ質顧ニ美艶ニ。

とする必要があつた。また、住吉明神の詠としての和歌、

苔衣着たる巖はさもなくて衣着ぬ山の帶をするかな

を狂歌に轉じて、

苔衣黃なる博多の帶をしてきぬ〳〵に野夫下部をする哉

としたものを、わざと記載せねばならなかつた。

からして、作者は唐人の言葉をかりて、眞の通人は、心意氣にあつて、風俗にあらず、形態にあらざることをいふ。自然と、金魚の洒落本に見える傳授物の否定といふことにもなる。もとより、作者の意は、金魚に對するものでなくして、いふところの通人に對する。この皮肉、罵倒が、「大通たなおろし」と題する理由であつた。

愚人贅漢居續借金

蓬萊山人歸橋の作、天明三年の刊行。歸橋の自序、志水裡町齋の跋、また歌麿のさし繪がある。本文二十八丁半の一冊物。形常の如し。

元祿の頃、雁金文七、庵の平兵衛、布袋市右衛門、極印千右衛門、神鳴庄九郎の破戸者の五人組が大阪市中を荒してゐた事件は、早くから淨瑠璃、歌舞伎の世界に持ち込まれてゐた。中にも、淨瑠璃の「男作五雁金」歌舞伎の「名月五人男」などが聞えてゐる。惡人贅漢居續借金の題號が、五人男五雁金のもぢりであることはいふまでもない。

歸橋の作は、題號のもぢりでなく、內容また五人男物に觸れてゐる。客と遊女の達引が主題である。舞臺は深川であつた。

まづ五人の客が、富岡八幡相撲場前で、遊所行の相談をする。出雲の原作なら、宇治川芝居前といふところである。そこで勢揃して、仲町の松江屋へおしかける。大一座の騷ぎがある、その後が、客對遊女の達引の三場である。

客の燕十は、自分の腕に合方おことの名をほつてくれと賴む、おことが承知する。それをきつかけに、燕十はおことの腕にある他し男の名を消させる。これが達引の一。

客、樂の合方おつうは、初會の雲樂を、うらの客であると、座敷で文句をつけた。それは、年も若く、金もありさうなと見込んだための狂言であつた、雲樂は、その裏をかいて、自分だちは借金だらけの貧窮者だ、それでも呼ぶ氣かときめつけ、おつうが謝罪する尾に附いて、これから、自分が度々來てゐるやうに噂してくれ、そして名を賣らしてくれと賴み込む。これが達引の二。

「愚人贅漢居續借金」本文

歸橋の合方おたよは、他し男の手紙を見せつけて、歸橋に肝癪を起させ、そして金にしようとする。その狂言を見てとられたので、愛想づかしをいふ。歸橋はその手の逆を押へて、自分等の貧乏五人組は、女郎が客を騙してとつた金の敵をとりに来るのだ、といひ込める。これが達引のだ。

歸橋はおたよをやり込めたと思つたのは夢。吉原大ひしやきさかたの座敷で見た夢だといふことで、一篇を結んである。この五人男物にいつも附きものである夢の場の趣向を、こゝにも用ゐたのであつた。

作者歸橋の案は、「五軍金」などに托したと共に、五人を當時知名の狂歌師、戯作者に托することにあつた。勿論、その中には彼みづからをも數へてゐる。彼及び四方赤良、清水燕十、朱楽菅江、朝倉雲楽斎これである。なほ、書中に見える遊女も、幇間も、すべて實在の者もあり、吉原のきさかた亦實在の者であつた。ただし、書かれた事件を、どの程度に信憑すべきかは、今日からは明でない。

その頃の戯作の中には、作者自身が顔を出すのが、随分と多かつた。作者と讀者の間を繋ぐ愛嬌として迎へられてゐた。この書の存在も、さまで驚くを要さない。たゞ、度が少し過ぎる。それも、各々を愚人とし、貧乏者とする事に於いて、まだ愛嬌を失はなかつた。また燕十が志水裡町斎の名で書いた跋文の中に、しきりに、出放題なる戯言とか、卯そでかためたとかいひながら、なほ筆を楽の井の間に採るなどと、實在の吉原の遊女をひき合ひに出してゐるなども、眞僞を曖昧にして、なほ愛嬌にとゞめさせる工夫であつたらう。

さすがに、赤良、菅江に對しては、屏風の中を遠慮し、殊に、赤良を、いろいろの點で立てゝはゐるが、なほ借金五人組に數へてゐるのは、どうであらうか。しかし、これほどの戯は、或は素破抜きは、當時の戯作者、狂歌師にあつては、問題でなかつた。赤良の狂歌集などの中には、もつと自分をさらけ出したはし書

を讀むことが出來る。その頃の世相がさうさせてゐたのである。

なほ、この作は、歸橋の作、天明元年板の「通仁枕言葉」及び梅月堂梶人の作、天明八年の「青樓五雁金」と參照するのが便利である。「枕言葉」は、この作の前篇とも見るべき筋を有つてゐるからであり、「五雁金」は、この作と據るところを同じくしながら、人情本に近い趣向の相異があるからである。

狂訓彙軌本紀

島田金谷の作、天明四年の刊行。

四方山人の序、出鳳臺讓琪の序、四方赤良の題歌、平秩東作の跋、及び作者の自跋がある。本文二十丁半の一冊物。形常の如し。

彙軌本紀は史記本紀のもぢりである。彙軌は意氣である。意氣は通といふに近い。この書は通を論じ、また通の興亡を叙するの作をなした一篇の戲文である。

まづ江戸の繁華の禮讃に端を發し、劇場の賑ひを叙し、市川團十郎の藝を稱揚する。次に、浪華の客との問答体を以て、江戸の流行を說き、客をして、恐るべきは東都の盛なるかな、他邦の及ぶ所に非ずと歎ぜさせる。また客に青樓の曲の辯を請はれて、自傳の体を以て、通人の成長を語る。幼少父母に甘かさるることより、十五歲深川に遊び、お先につかはるゝこと三年、漸く吉原の遊びに轉じて、深川の夷狄なるを知り得たといふのである。最後に、年少輩の深く色に溺るゝを戒め、また江戸節の雅音を重んずべきことをつけ加へてゐる。狂訓の二字を題號に冠する理由である。自跋は、更にその旨を明に示して、

今予が著す棄軌本紀は、全く鉦を進むるに非ず、かれを見、これを聞て以て、其しりのつまらざる事を諭し、此書を世界の息子たちに見せ、居候の難を免ん事を欲す

といつてゐる。しかし、畢竟諧謔のための托辭である。作者の意は、却つて然りといへどもに一轉したる跋文の最後にある。

然りといへども、一槩に古風をしたわば、沈香はたかずして、屁を嗅のどんちやんあるべし。ゆだんすべからず。

江戸の洒落本は本來のものとして、江戸の通を說いてゐる。その中でも、この書ほど正面から說き來り說き去るものはない。序跋の中に、或は江戸の本枝といひ、或は江都の中央、ぎやつといふて生しよりなどといつて、作者を紹介するのも無理はなかつた。

四方山人序
朧誓秋人序
新發幸大寺不實錄
嶋田金谷著
嶋田振袖校
杤面房梓

「新發幸六寺不實錄」扉

島田金谷の何人であるかは詳でない。また著書も多くないやらである。管見の及ぶところ、「棄軌本紀」以

外、天明七年板の「新發幸大寺不實錄」だけである。これもまた一篇の戯文である。前者は、口唐田鳳臺校訂とあるが、これは、嶋田振袖校となつてゐる。この兩人が同一人であることは、前者の田鳳臺署名の序と、後著の嶋田振袖署名の跋に捺した印章が同じものであることから考へられる。その序跋に於いて、共に、金谷の友人といつてゐるが、おそらく架空の人物であらう。この推測は、更に後著に跋を書いて金谷友人と名乘り、金谷と兄弟分といつてゐる腹唐秋人も、或は、金谷と同一人でないかの疑を起させる。もしさうだとすると、金谷は、中井敬義、江戸本町住の書家、狂詩集「本町文粹」の著者でなければならない。

「幸大寺實錄」の中に狂詩一章がある。

今人結交須攤淫、攤淫不須交不深、縱令歡化錢取溜、終是故爲滿借金、

作風を參照する一資料とならう。秋人また狂歌を善くした。大屋裏住に學んでゐたとのことである。「幸大寺不實錄」また裏住の跋を載せてゐる。これもまた考ふべきである。

「新發幸大寺不實錄」

「幸大寺不實錄」にはまた三書の豫告を載せてゐる。腹唐秋人の「繪本丁稚人口」、島田振袖の「當世流行起原」及び大井散人の「靜觀房追善會」これである。三書共に豫告で終つたか、どうかを知らない。未見の書であるが、廣告の上からは、この三人も、或は同一人でないかの疑を懷かせられる。「流行起原」には註して、「此書當世行はるゝ詞の出所を尋ねくはしくしるす」といひ、「靜觀房追善會」には「下手談義の文意をおもしろくとる新作の教訓」といつてゐる。推測は、それ等と「槃軌本紀」の間に、一脈の相通をおもはせる。後の考を俟つことにする。

和唐珍解

大明李ノ踏天従者に向ひて、「李踏天」你們可回大公「従者」領上旨「李」明朝早些来我在這裏等候快些太公了不可路上往廓「通詞和田藤内」多労多労「従」太公つとなくくうゝ「李」你們等一等「従」有何貴幹「李」休要賭錢「藤」崑崙奴有些事故

「和唐珍解」本文

唐來參和の作、天明五年の刊行。朱樂漢江の序、四方山人の序、作者の自跋がある。本文四十二丁の一冊物。形常の如し。

世界は長崎丸山の遊廓である。丸山の殷賑、丸山の遊女の特相は、はやく「好色一代男」その他に傳へられてゐる。日本唯一の異國通商の地、おのづから他國の遊里に異ならねばならない。京の女郎に、江戸のはりをもたせ、長崎の衣裳を着せて、大坂の揚屋で遊びたいとは、古くからいはれてゐる。この書の四方山人の序の中にも見えてゐる。その衣裳も外商が齎し來るものである。丸山遊廓の特相は、畢竟この外商の交渉の上に成立してゐる。

この作は、丸山の揚屋に於ける唐人の遊興をうつし出してゐる。作者は、唐人の詞と、通詞の詞を唐音でいはせ、傍に日本語の譯を附けてゐる。和銅珍開をもぢつた和唐珍解の題號は、それに基づいてゐる。作者は、また滑稽の趣向を立てるために、

「四鳴蟬」扉

書中の人物を「國姓爺合戰」のそれに托して、唐人を李蹈天、通詞を和田唐内、遊女を稱檀などといつてゐる。

例の「一花折紙」には、

和唐珍解丈、このたび李唐天の役にてのしうち、唐音をつかふおも入れ、もつともしんじつ、禪師傳來のとう音にて、唐和纂要などのきりぬきはもちいられませぬ所が大だてものゝ仕うちでござる。

と見える。しかし、書中用ゐるところの唐音の正訛に就いては、しばらく措いて問はず、たゞ、唐人の遊興ぶりは、丸山の實情でないことは考へておく必要がある。

もとは、西鶴の作中にも見えるやうに、またこの書中にも見えるやうに、唐人も丸山の揚屋遊びが出來た。しかし、元祿二年に唐人屋敷が設けられて以來、特に唐人行と限定された遊女のみが、そこに出向くことになつてゐた。その出入はなかなか

之哉山崎余二平嘗恨何日遂情願相偕暢繾綣從事
懷來却亦可恨既慕往時亦復可恨「旦後上云」嗟是為誰山
崎余二平名馳風流身不後人豈想發狂被髮見妾之
面不認出如醉夢裏一般請快醒來則個「生」唯你是藤
家東姐麼唯唯唯唯實可悦也哉「生旦互跪丙」「旦再拜撲蝶科甲乙春」
野雉君不見兀的昆蟲猶雙飛鳳蝶上下不失偶才貌
相攜俱有情飛蟲不分花好醜菜花布金賽春花亦何
瀉解蝶採取蝶也亦何知菜有味嗚呼俺不知趣他沒
深情何至攝魂魄不攝何失心棄擲親恩重虧傾愛姐

四「唱蝶」本文

嚴重に取締られてゐた。書中、黒人の遊興の如きも、もとよりあり得ない事であつた。現に寶暦二年には、寄合町の揚屋で遊興した黒人は捕縛され、手引の日本人は所拂となり、宿の亭主は町預、遊女は譴責せられた事件さへあつた。

作者は、丸山遊廓をたゞ空想を以てうつし出したに過ぎなかつた。いはゞ江戸の廓慣れぬ田舍客のをかしさを、唐人の上に移しただけであつた。通詞が唐人の合方と忍び逢ふなども、洒落本のいつもの趣向である。さまで珍しくない。通詞がすべて唐人を茶にするのも、案内男が田舍客を輕く扱ふのと同じ格である。たゞ相手が唐人であるだけに、鑵巾や褌を高値で賣りつけるをかしさにまで延びたのである。すなはち、作者の趣向は、一に田舍客の田舍言葉の滑稽を、唐音で現はす点にあつた。

才子刊書一百二十

曦鐙記 全本名曰太塔宮曦鐙傳說其曦鐙者今蔵在於山門長府云又太塔王之新札已刻云云或是義與又當時而稱尊謚俱出太平記吉野落城之巻可莫論傳奇之濫觴

替身踊場 浪花義倡譜つ傀儡家移臺昔画橋之義也の詞中吃巧與新兒和語道

内唱增璠調兒王之偶先上 三絃節慶臺臨案寫字科 日月互明懸配天豈偶然

浮雲有覆失光年幼王母后堪憐似楚因可傷焉永井右馬頭宣明領命因監重垣繞廂只渇通信荻蘆扇眷

誰人存問可傷可傷 監人宣明之偶上 今日尊況如何便進席

奉安自字憑机習字讓草國風遺興 兒王 呀右馬頭方今響者晩鐘乎然是秋日短影哉 兒態多悶秀眉甚倦 宣明

「四鳩譜」本文

この趣向には何か手本があつたらうか。手本は、多分明和八年の「四鳴蟬」であらう。現に、書中、通詞藤内が、曦鎧の身替り場の漢譯を唐音で語ることがあるが、それは、「四鳴蟬」の曦鎧記替身踊場の一節であつた。また、李韜天がきゞすを唱ふことがあるが、それも「四鳴蟬」の移松記の一節である。曦鎧記はいふまでもなく出雲の淨瑠璃、移松記は近松の壽門松の漢譯であつた。參和は、更に丁寧に、それに唐音を附して、珍案奇想を以て、みづから誇つたのである。

唐來參和は、加藤氏、通稱和泉屋源藏、もと高家衆の家臣であつたが、天明中町人となり、本所松井町の遊女屋和泉屋の婿となつた。酒落本の「三教色」も亦彼の名作であつた。

令子洞房

山東京傳の處女作、天明五年の刊行、奥附に、「天明五年乙巳正月　通油町　耕書堂蔦屋重三郎」とある。この書また「息子部屋」ともいふ。「令子洞房」の題も、「ムスコベヤ」と訓ませたのである。戀川好町の序、及び京傳の自序がある。さし繪四丁半、京傳の畫、たゞし、彼の畫名政演と著名してゐる。本文四十丁の一册物。形常の如し。

この書はやゝ常の酒落本と異なつてゐる。傳授書の形式である。十二條から成る。なじみの辨、後朝の客五つの見やう、女郎五つの見やう、初會もてたる樣子、床と座敷との事、わるあそびの事、思ひ切の事、女郎虚實を知る事、つとめの事、いろの事、客女郎愼用心すべき事、女郎身のうへの事、これである。これを要するに、客と遊女に對する、細かい觀察が讀まれる。また遊女に對して、深い同情を寄せてゐることも知

「令子洞居」本文

られる。戀川好町が、所謂女郎買の虎の卷と傾城の智慧嚢なりといひ、海内の令子に授け、郭中の花娼に與へよといふも無理はない。僅に遊里教課の書に値する。書中いふことは、多く、京傳の體驗から出てゐるであらう。彼は丁度二十四歳、遊所通ひの狂熱時代であつた。

この書は、洒落本中に、しばしば見えてゐる傳授の趣向、または、「傾城買虎之卷」附載の通の條項の如きものを獨立させ、擴充させたものと見られる。しかも、それ等に必ず伴ふ風俗上の注意を避けて、心意氣をのみ主としてゐる。そこに特徴があつた。京傳の客及び遊女の風采また言葉づかひの觀察は、彼の別著に於いて見るべきであつた。その翌年出板の書、「客衆肝照子」がそれである。これは圖解をまで加へて、遊女また客の風俗を說き、せりふとして、その言葉の僻までを擧げて、穴と穿ちに專らであつた。

京傳の才氣と觀察は、この書をして、大に行はせた。

「令子洞房」さし畫

「令子洞房」さし絵

「令子洞房」さし絵

不言斎主人影鈔之

京傳墓碑

數板を重ねたやうである。中に、二册の中本形として、「廓中奇譚根古埜魔起」としたのもあるが、同じ小本で、さし繪を改めたのもある。畫には署名がない。政演でないことは明である。參照のために、その中の三圖を掲げる。

京傳は洒落本作者の覇王である。讀本、黄表紙の作にも傑出せるものが多いが、最も多く洒落本に妙作が多かつた。寛政三年、禁を犯して、洒落本を書いたために罰に觸れることがなかつたら、終生その筆を絶たなかつたであらう。京傳の生れたのは、寶暦十一年八月十五日、歿したのは、文化十三年九月七日であつた。兩國回向院に葬る。墓石には京傳の弟京山の撰文を刻してゐる。

通言總籬

山東京傳の作、天明七年の刊行。
文京の序、京傳の自序、凡例、及びけいこう署名のさし繪がある。けいこうは雛告、京傳の別號である。
本文三十九丁半の一册物。大さ常の如し。
世界は吉原。殊に松葉屋を中心としてゐる。「總籬」の題名は、それに基づく。松葉屋の人物の詞に、すべて、その家獨特の流行語を寫してゐる。「通言」の題號のある譯である。作者は、凡例に於いて、その旨を明にしてゐる。凡例には、

艶治郎ハ青樓ノ通句也、予去々春江戸生艶氣樺燒ト云册子ヲ著シテヨリ己恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス、氣之介志庵共ニ彼册子ニ出ル所ノ名也

といつてゐる。あの黄表紙の好評をうけて、それ等の人物を、この書にも用ゐて、續編らしく見せたのである。「浮氣花燒」の中にも、わづかながら、吉原のうがちがあり、また松葉屋の瀬川にも觸れてゐた。この篇は、そのうがちを主とし、また瀬川を主要人物とした。かれの滑稽と、これの通と、全く覘ひを異にしてゐる。

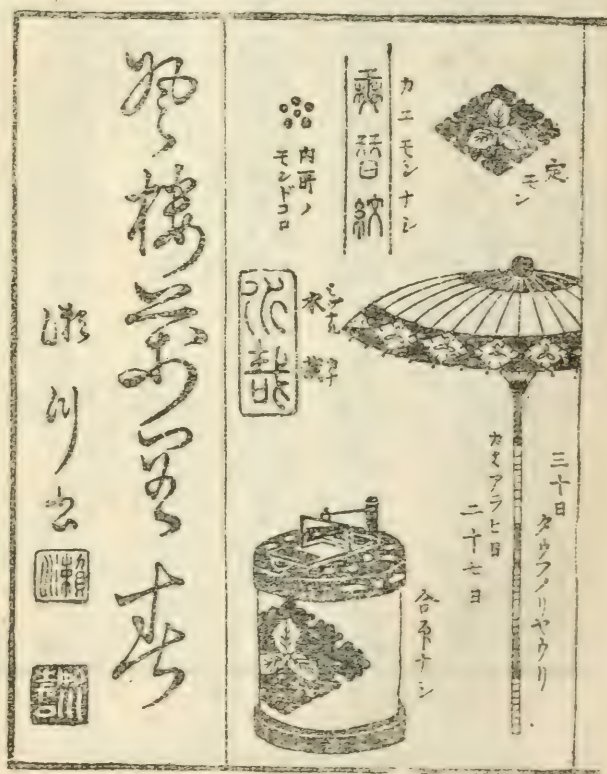
この書は二部に分れてゐる。其一には喜之助の家、そこに艶次郎、志庵、喜之助、及びもと吉原に勤めをしてゐた女房が、一座して、吉原の穴をうがつことになつてゐる。其二は松田屋、おす川の座敷、松田屋は松葉屋、おす川は瀬川である。その他の人物、一々據るところがある。現はれる順で拾へば、川波は川荻、玉夕は川夕、井川は江川、夏里は松里、茶屋の男源兵衛は權平、番頭伊平次は伊平二、禿たのものはこのもとのことである。煩はしければ省略する。その他、すべて寫實を專らにし

插　圖

てゐる。たとへば、おす川の座敷をしるして、

本間の天井には四季の草いろ〳〵、をの〳〵花の手柄をみせ、はりつけには、朱簾を畫て雲上にちかしといつてゐるのも、瀨川の座敷をそのまゝに見せてゐるのであつた。寄木の船底天井、眞中は花の丸金、張付みすに菊花の圖があつたとのことである。

おす川の隣坐敷で、客と女郎の大疳癪が書いてある。瀨川の隣座敷といへば染川であつた。染川は氣强い女であつた。馴染客の一人に對して、扇屋に深いのがあるとて、憤るところがあつた。客は大の疳癪持であつたといふ。して見れば、隣座敷の採めも、京傳が勝手な趣向ではなかつた。これも寫實であつたと解される。

京傳の、天明八年板「傾城觽」は、これと參照するのが便利である。その附錄に、松葉屋、丁字屋、角玉

通言総籬
金の魚虎をにらんで水道の水を産湯に浴て。
御膝元に生れ出ては拝搗の米を喰て乳母日
傘にて長じ金銀の細螺はじきに陸奥山も卑と
し吉原本田の髷の間に安房上総も近し
とす隅田川の白魚も中落を喰ず本町の角屋敷を
なげて大門を打は人の心の花にぞありける
江戸ッ子の根生骨萬事に渡る日本ぼしの[illegible]

「通言総籬」本文

屋、扇屋の通り詞を載せてゐる。當然、「通言總籬」の註脚である。本文は、その四軒の外、鶴屋、大菱屋の遊女の中から選んで、氣質、嗜好、諸藝、紋所、また筆蹟を、載せてゐる。

今、その中の瀬川の條を掲げる。これによつて、その定紋三菱に三栢を知つて、はじめて、志庵の詞「家名は松をもつてし、紋所は栢をもつてし、床柱は栗をもつてす」の解釋が出來る。尤も、ここの註釋としては、瀬川の座敷の床柱は、例として、代々栗柱であつたことを加へねばならなかつた。

附録 扮丁玉扇四家言語解

○松葉屋言

○丁子屋言

「籬 [illegible] 言」

かういふ興味を離れても、客と遊女の驅引魂膽の描寫の巧妙が、「通言總籬」の價値を大ならしめる。例の「花折紙」が推稱してやまないのは、その点である。

「それより仲の町へ參りましてのしやれ、また出來ました。夫より喜之助がおいらんとのぬれごと、影

にていたされまする狂言、きれいごとにて、御見物がたを、嗚呼々々と思はせまするあんばい、きつとうけ取ました。それより大づめ今様のげいごとにて、あそびの魂膽のしうち、ふられた客、もてた客、その外かし居の客のこなし迄、みさはに致されまするしうち、古今獨歩の名人でござりますれば、それゆへ位は大上々吉、立役の卷軸にすへましてござります。

評言、けだし、當を得てゐよう。京傳の洒落本中でも最も傑出するものであらう。

田舍芝居

万象亭の作、天明七年の板。

卷頭に、この作に對する竹杖爲輕、森羅亭万倍かけ合のほめ言葉がある。もとより作者の筆になる。爲輕も、万倍も、實は万象亭の別號であつた。また風來山人門生無名子署名の序がある。これも万象亭の筆であらう。七珍萬寶の後序がある。狐西堂柳亭の跋がある。さし繪一丁、畫家未詳、本文三十七丁の一冊物。

この書五章から成る。芝居がゝつて五ばん續といふだけに、目の立て方も、序開、二立目、三立目、四立目、五立目といつてゐる。

内容は、全く江戸の遊里を描寫する洒落本と類を異にしてゐる。越後大沼郡妻有鄉南鐙坂の田舍芝居のをかしさを寫してゐる。見物の異風、劇場の珍妙、上演された曾我狂言の滑稽に、配するに鄙びたる戀を以てしてゐる。會話の用語は、すべて耳慣れぬ方言である。さきに「道中粹語錄」の珍趣向があつたが、それはなほ遊里の外に出なかつた。これは、遊里を離れて、彼が有つ滑稽をなほ一段と助長させたのである。しか

田舎芝居

万象亭 著

○序幕

「田舎芝居」本文

も、作者に所存の旨があつて、さうさせたのであつた。作者は序跋に於いて、その態度を明に示してゐる。「遊子方言」―「辰巳の園」―以來酒落本の型は固定した。遊里の穿ちに拘はつて、遊女の身の上に迷惑を及ぼすこと少くない。要は寫實が度を失するためである。これは、立役が眞劍で敵役の首を刎ね、道外が褌をはづして睾丸を振廻すが如きものである。戯作の要は、寫實でなくして、寫實らしく見せるにある。酒落本の酒落を見て酒落る酒落は酒落た所が酒落にもならねば、只可笑を專とすべきである。故に、酒落本ならぬ野夫本を著はして、通となく、野夫となく、讀む者をして笑はせ、戯作の正道に還るの途を示さうとする、これがその大意である。

かゝる意見も、反動として起らねばならぬ當時の酒落本界の情勢であつた。酒落本の必須の條件である滑稽は、全く閑却されて、穿ちにのみ專らになつた。少くとも、京傳の「通言總籬」などは、万象亭の主張の前には、最も唾棄すべきものであらねばならぬ。從つて、京傳から見れば、「田舍芝居」は赦し難き酒落本の敵であらう。馬琴の「作者部類」には、二人の間に確執の生じたことが傳へてある。

萬象亭森島氏（名は中良）は蘭學戯作共に、風來山人（平賀源内）弟子也。天明年間戯作の小册二三種出たり。その中に田舍芝居と云酒落本（一册にて）小本尤行はれたり。その自筆序に、今酒落本は睾丸を顯はして笑はするが如しとあり。京傳閲して欣はず、こは吾が事を云る也と思ひしかば、是より萬象亭と交はらずなりぬ（此一條は京傳みづから云る也）文に臨みておもはずも、かゝる事誰が上にもあらん、愼べき事歟

享和元年に、この書の改版が出てゐる。中本二册となつた。奥附には浪華凌雲堂、東都千鶴堂壽梓とある。

千鶴堂は鶴屋、すなはち前板の板元である。この方には、問題の序文及び、七珍万寳の後序を省き、前板のかけ合ほめ詞を改めて、竹杖万倍一人のものとしてゐる。前板の「猿隈小林の朝日に羽をのす鶴屋が板」の鶴屋が板を、これには「鶴の丸」と改めてゐる。またこれには前板にない目録を添へてゐる。

田舎芝居　五番續

段書

一　一册目　芝居見物の大評判は古からぬ新潟の出來狂言
　　田植曾我豊年踊五番續に仕候

一　二册目　關東八十八櫓のてんぺん座本山本作兵衛が當り狂言
　　假名手本忠臣藏幕なしで奉入御覽候

一　三册目　役者中へ進物は御贔屓者様の獨覗おきじ茂作が世話狂言
　　戀女房染分手綱大しかけに仕候

一　四册目　田舎芝居のせりふ帳付違ひのない時代狂言
　　大切かけ合せりふ守山平介内山金三郎兩人相勤申候

千秋万歳樂大叶

体裁が、大坂板らしく出來てゐる。本文は、振り假名を加へた外に、殆ど異同を見ない。わづかに二ケ所、前板で、讀んでうけとられぬところを省いてゐる。一立目のをはりごろに、「見物はとろとろ田舎嗅ども」のところところは、ぞろぞろの誤であらうが、これは、「見物はとろとろ」を省いてゐる。三立目のをはりごろ、

「お姫子さまより花絞りの手拭」の花が、原刻では百とも讀まれるあやしい字体である。これは、省いて、ただ「絞りの手拭」とのみしてゐる。

百人一首和歌始衣抄

山東京傳の作、天明七年の刊行。

この書、くはしくは「百人一首[illegible]講釋始衣抄」といつた。「始衣抄」また「初衣抄」に作る。けだし、初衣裳の義をかけていふのである。後編を「跡著衣抄」といはうとした。豫定にをはつたやうである。

京傳老人署名の漢序、源の傳署名の和序、朱翁鶏告署名の跋がある。皆京傳自身の筆に係る。さし絵一丁。政演の署名、政演はいふまでもなく京傳の畫名である。本文三十六丁。中本形である。

和　明」

題號がすでに示してゐるやうに、百人一首の和歌に戯註を施したものである。尤も、全部に亘らず、十八首を選んでゐる。選擇の意は、趣向の立てよいといふ点にあつたやうである。

この種の趣向は、すでに先蹤があつた。京傳は和序に於いて、

あかれる代の先たて、在中將の歌のさまをたつたの川波のをとしはなしにつくりしも、ちはやぶる事とはなれり。今はたおなじことといはんも、もゝしきやふりにたれで、花さそふあらしの庭のあたらく誹せばやの心つきて、しかしか、

といふのも、みづから先蹤を追つたことを語つたのである。先蹤は、翠幹子の「風流戯註百人一首戯講釋」であらう。寶暦十三年の刊行である。

壹

三升　古 市川團十郎　幼名升五郎　實ハ古三升座頭十郎男ニて　寛保三戌年二月廿七日死

三升　市川團十郎　幼名松本七藏　實ハ古松本幸四郎男　初号松本幸四郎

享保年中娘形松本七藏享保二十卯年松本幸四郎におゝさむ宝暦四戌年顔見せより市川栢莚養子となり市川團十郎と号ス今三ッ津役者の冠首たり

立役　市川團十郎

男女川　松本幸四郎　列ニ出

役者松本七藏は白子の保七年寅の春狂言市村座釜鳴賤曽我第一番目鬼王新左衛門ニて古松本幸四郎ニ此時鹿嶋大宮司ニて子役松本七藏初ぶたいにて[illegible]

武江

業平隅田川のほとりに住ひして、吉原の遊女ちはやのもとに通ふ。ちはやはふりつけて從はず、帮間紙與、すなはち紙屋與兵衞に賴んでも埒があかない。その內、業平は金に困らじて、豆腐屋となり、水に紅葉をちらし、龍田川の三字を染め出した暖簾をかゝげてゐた。日ましに繁昌した。一方ちはやは年明けて廓を出でて後、落魄して乞食となり、或日業平の家とも知らずに豆腐のからを貰ひに來た。業平は與へなかつた、なほ以前の態度を詰つた。ちはやは恥ぢて隅田川に入水した。業平はそのよしを一首の和歌に詠んだ。

翠幹子は、かくも、

ちはやふるかみよもきかす龍田川からくれなゐに水くゝるとは

の歌を註した京傳は、これによつてやゝ趣をかへた。龍田川を角力とした。ちはやが烏川に入水することにした。またなほ「伊達競阿國戲場」にもこぢつけて、角力とりをきぬ川とし、ちはやを龍田川の緣で高尾とする旨をも附記してゐる。

しかし、京傳の創案は、これ等の馬鹿講釋を、たゞ講釋とし、落語とするだけでなかつた。和歌の抄書の形式を、そのまゝに換倣して、わざと煩瑣な故事出典を頭註にすることにあつた。それ等がみな牽强附會の極を盡してゐる。彼の輕妙な奇才は縱橫にその間に動いてゐた。尤も、これによつて古註釋家のこちこちしいのを諷してゐるのでない。古註の体を假りて、あらぬものをあてはめた点に興味を托するだけである。なほ「俳諧觿」の形式に據れる「傾城觿」の如く、また武鑑の形式を襲ふ「明和武鑑」の如きに過ぎない。

この書は、いはゆる洒落本の常式物からいへば、埒外にあらう。しかし、「傾城觿」「娼妃地理記」「評都洒美選」を洒落本の部に入れるならば、これもまたその中に數へるのが當然であらう。洒落本と滑稽本とは、

しばしば交錯する場合がある。これもその一例である。

京傳の作、天明八年の板の黄表紙「小倉山時雨珍說」は、百人一首の歌とその作者とによつて、滑稽の案を立てたものであつた。もとより、この書と性質を異にするも、また一脈の相通を見る。寛政六年板の黄表紙「百人一首戲講釋」は、その類作として參照すべきである。これは芝全交の遺作を、京傳の校合出板したものである。

古契三娼

山東京傳の作、天明七年の刊行。

京傳の自序、かふ義の序、京傳の跋、及び政演署名の三遊女の圖がある。本文三十四丁の一冊物。大さ常の如し。

「古契三娼」の名は、虎溪三笑のもぢりである事はいふまでもない。虎溪は廬山中の一溪。慧遠法師客を送つて、虎溪を過ぐ、虎輙ち鳴く、陶元亮、陸修靜を送つて與に語る、道合す、覺えず送つて、虎溪を過ぐ、因て大に笑ふ、と「廬山記」にいふのが、いはゆる虎溪三笑である。京傳またこの書に、據るところを明に示すとて、扉に、

陶淵明菊壽帶青樓捨僧慧遠遊南驛稱山陸子靜乗猪牙入油堀

と書いてゐる。

京傳のいふ古契とは、古契情である。古遊女である。すなはち、三娼妓の年明けて、人妻となり、妾とな

古契三娼

傾ひくつうとしれ目くなし江戸の花。されむ所江戸の
經営とやらへ。矢引の手わうの助言をするにひとしかる
べし。誠に古一升金一升とやらせハ。歴々揃と雲ても
金のなる木の実生へあるぞかし。立派で揚屋の金蔵ハ
いふもさらなり。大門の仕立場さえて。きぬ飛びこふ
置も刑鞭の捨るあるかと思ひきや。櫓下の火の見
揩ふ風呂の鳶ずるぞ。馬を四つ谷の新宿まで

「古契三娼」本文

つてゐるのが、相寄り集つて、おのおのが勤めしてゐた吉原、品川、仲町の風俗について語るのが、この書の趣向である。作者の自序に、

　さりや、みつの女肆、言風俗各異にして、人情亦異也、今、中、吉、品の人物をこしらへて、その人情をかたらしむ

といつてゐる。作者がさきに「吉原總籬」に於いて、艷次郎、志庵、喜之助が、もとの吉原の遊女、今の喜之助の女房おちせを相手に、吉原の總籬のうがちをなした趣向を、更に、品川、仲町に及ぼしたものである。作者は、書中の人物、およしをして、かうもいはせてゐる。

　わつちもちつとよしはらのはなしをしたふすが、ことし總籬といふしやれ本に書盡しひしたから、いふはむだでおすよ、このぢう旦那がもつてきておきいしたから、よんで見いしたが、すつかり松葉屋ノせかいさ、女郎衆のくせまでかきひした。

この書の吉原の條、すなはち、およしの言葉を、「通言總籬」と參照すれば、發明するところが少くない。「通籬」のおちせの髮は「いなぎむすび」とあるが、この書には、「稲城むすびは扇屋のおかねさんが、いゝはじめた風さ」と見えてゐる。おかねは扇屋の女房である。これは一例に過ぎない。「總籬」には、「羅月が妹は、いづ梅とやうじやのおいくを、そうじめへにしたといふ類だねへ」とある、その羅月が花川戸の住であることは、この書の京傳の、序の末に、「花川戸羅月が別業、松風亭に毫をとる」とあることによつて知られる。

品川、仲町、吉原と、その風俗を異にするにつけ、客の分野もおのおの定つてゐるので、洒落本また互に

優劣の論をなすものが多い。この書の如く、三者を同じ位置において、平等の言をなすのは少い。京傳の用意が見られる。

女郎買糠味噌汁

赤蜻蛉の作、天明八年の刊行。

京傳の序、作者の自序がある。さし繪二圖、千杏の畫。本文二十丁半の一册物。大さ常の如し。

この書、一名を「浮世假宅夕口舌」といふ。柱には「しん土」と見ゆ。何の略であるかを知らない。

赤蜻蛉は何人であるかを詳にしない。京傳の序文によれば、相知る間でないやうである。

天明七年十一月吉原の廓内が殘りなく燒亡した。例として、假宅の營業が許された。大橋詰、深川新地、八幡前、富永町、高輪及び中洲である。

中洲は安永の頃に、大橋の南方の川岸を埋め立てた新地であつた。水茶屋建ちつゞいて殷賑を極めてゐた。洒落本「中洲雀」「大抵御覽」などによつて、概略を知ることが出來る。地はすでに歡樂の境、今また幾軒の娼家が移つて來たのである。客足のしげかつたことは當然である。しかも、客の態度も、おのづから吉原の通の樣式を離れて、もつと輕い岡場所氣分でゐられる。遊女は廓外の空氣に觸れて、どこともなう解放の氣分であると共に、廓内と異なる生活に、一種の寂寥を有つてゐる。この書は、その間の消息を描いて、大きい穿ちを試みようとした。

この作者は、決して傑れた手腕の持主ではなかつた。折角の穿ちも、さまでの冴えを見せなかつた。たゞ

女郎買之糠味噌汁

○発端

日落漲漾三流連とかやいひし小つう

称しならひ江もて八郁瀬の形池とそ

地ぞく抱らく娘さ孫のまんなをいふ

もさふみのうろう徳るよ最高こさ丞下

まちつまりしに旅惠女の異よかくり名よ

文本「汁噌味糠之買郎女」

計畫だけは知るに難くない。作者はまづは發端の章に、三客を拉して來た。彼等は吉原の通の衣を脱いで、仕たい放題の騷ぎをする。吉原の娼家に岡場所氣分を發揮するのであつた。

作者は、三客の一人をして、蘭語を用ゐさせ、一人をして、唐音の唄を謠はせる。或は、「和唐珍解」の趣向を襲ふものでないかと思はれる。

作者は、また秋色庵の段に、遊客遊女の魂膽を書いた。拙い案といはねばならなかつた。作者は、また中洲の娼家に、不通客が役者氣取りで登樓することを書いた。役者は、吉原では例として客にとらない、こゝでも遣手が拒まうとする。その侶はいふ、そんな事は町でいへと。そこに假宅らしいことを見せるのが、作者の腹であつたらう。しかも、その客の化の皮は剝がれる。不通の正體が暴露する。趣向はよいが、描寫の筆の伴はぬ憾みが多い。

「假里擇中」

假宅に關する洒落本は少くない。中に、天明七年度の中洲の假宅を題材としたものに、「假里擇中洲之華美」がある。作者は内新好、天明九年の刊行である。對讀によつて得るところが多からう。「華美」は「はなび」である、烟花である。中洲の舟遊の景物に托して、假宅の一時の盛りを聞かせたのである。同じ見方は、また「女郎買之糠味噌汁」の京傳の序文にも見えてゐる。

こんな世界は唐にもなかず、此川なかにばつと花火の時ならぬさかりを云々

田舍談義

竹塚東子の作、寛政二年の刊行。

之華美」さし繪

「田舎談義」本文

山東京傳の序、東子の自序及び京傳の跋がある。さし繪一丁、本文二十七丁、外に附錄四丁の一册物。大さ常の如し。

この作は、洒落本とよりは、むしろ滑稽本といつた方がよい。たゞ、万象亭の「田舍芝居」を洒落本の中におくならば、これもまた洒落本といふべきであらう。少くとも、作者自身は洒落本として扱つてゐる。この作は、「田舍芝居」の模倣である。世界を田舍の劇場と田舍の寺にかへただけで、全體の構想は全く同じものである。

千住近みの金田村の法福寺に談義がある。それを聞きに出かける村の若者の浮世話、また談義場の光景、それを田舍言葉でうつし出してゐる。すべてが、通の世界から見ると異樣な相がある。作者は、そこに滑稽を期待してゐる。「田舍芝居」には、村の男と女の戀を配してゐたが、これも、またそれに倣つて、鄙びた戀を點綴してゐる。作者の摸倣は至らぬところがない。しかも、努めて原作よりも、あらゆる點に於て、滑稽の度を加へようとする。この戀の場合も、若い男女の外に、後家と僧の一組を添へてゐる。さういふ戀のをかしさを、更に別の方から傳へようとしたのが、附錄の二通の手紙である。村郎村孃の戀文に擬してゐる。

「田舍芝居」の作者が、わざと、洒落本界に田舍と滑稽とを將來したのは、その頃の洒落本作者の穿ちの度はづれに慊らないためであつた。それがために、穿ちの作者京傳と絕交するに至つたとのことである。しかし、「田舍談義」の作者には、さういふ主張はなかつた。彼は「田舍芝居」の奇想を喜んで、その趣向を襲つたに過ぎなかつた。たゞ注意すべきは、洒落本の穿ちは、万象亭の異議を眼中におかずに、なほ段々と穿ちの度を增してゆく一方、「道中粹語錄」から「田舍芝居」さてはこの摸倣作と、漸く滑稽本に近づくものも相應に

到無說人身心寶庄末

出て來たことてある。作柄から見ても決して傑れてゐないこの「田舍談義」を、「田舍芝居」との重複をいとはずに、本集の選外におかなかつた理由は、一にかゝる歷史的意義からである。

こゝにまた、注意すべきは、この書に於ける京傳の序跋である。序跋は本文を中に挿んで、前後相應じて、この作を紹介する形をとつてゐる。あの万象亭との絶交問題に信をおくとすれば、京傳かかうまで丁寧な扱ひをしたことが、かなりの矛盾になる。京傳の態度が變つたためであるか、それとも東子との間に、特殊な關係があつて然るか、疑問である。

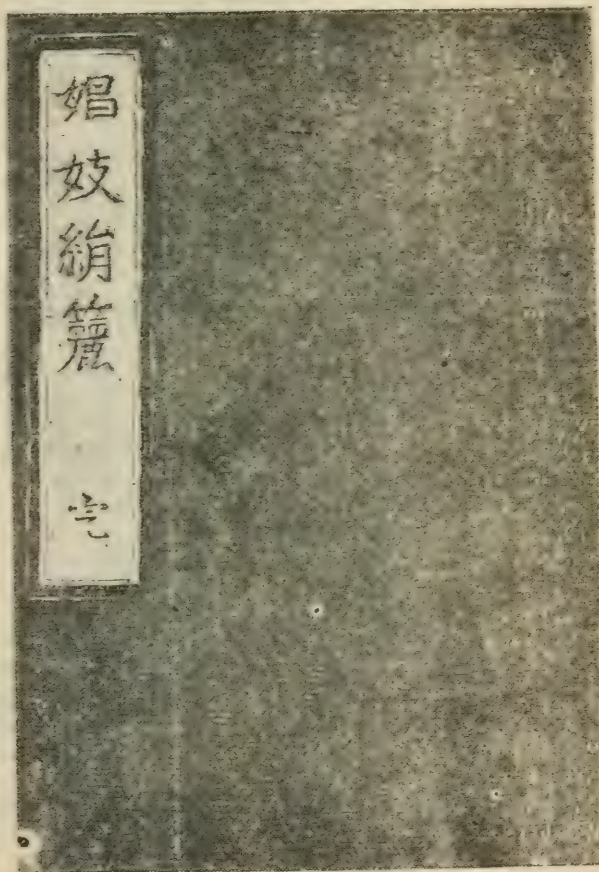
作者東子は一に風水房と號した。千住附近竹塚の農である。はじめ法橋越谷吾山の門に入つて俳諧を學んだが、後戲作に轉じた。「田舍談義」は彼の作の刊行された最初のものであらう。いづれ、當時入銀といつてゐた出板費負擔の下に、京傳の紹介によつて、世に出たものであらう。

東子の模倣癖はなみなみならぬものがあつた。彼の黄表紙の初作、寛政三年板の「高慢昇講至無我人鼻心神」の如きは、最もよくこれを語つてゐる。春町の「高慢斎行脚日記」と京傳の「江戸生艶氣樺焼」を合はせて模倣したものである。また、卷末に、京傳の狂歌を掲げ、それに對する「京傳作」を利用して、作全體のものらしく見せかけようとしてゐる。彼の露骨な賣名ぶりが見られる。

手段詰物 娼妓絹籭

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

柳浪館主人の「西江月」の序、京傳の自序、曼鬼武の跋がある。さし繪一丁、京傳の自畫、本文三十七丁

の一冊物、大さ常の如し。
　この書に數種がある。柳浪館の序、曼鬼武の跋を缺いて、京傳の自序のみがある方のは、さし繪もわづかながら相異してゐる。これは後の板であらう。また、以上の序跋三章を具へる外に、烟花浪子の跋を附したものがある。これと、序跋三章の書は、繪も、本文も、表紙も全く同じものである。また、曼鬼武の跋の紙端には、尾といふ文字が見えてゐる。或は、序跋三章の本がはじめに出來、次に、烟花浪子の跋を添加したのでなからうか。烟花浪子は京傳丹爐食客と肩書してある。おもふに、京傳の變名であらう。印影にも「有

「娼妓絹籭」表紙

手段詰物娼妓絹籭　　山東京傳著

○第一回

義理と情ハ二ッ在ものハ碁子もの
ね梅門が飛車を王を
□泗糖屋の丁兒甘兒をきてし饅頭屋
の猫兒落とての海ど李白一斗詩百篇
といふ秋し底ねるも飯蓋ぐ居風呂を

「娼妓絹籭」本文初頁

後叙

花衢家も才揚として點。
して不覧だち不買賣藥。
も脚を劇て不観ば不売。
況賣情娼妓不おんてもや。
應馬呼牛ふくえだち安る

[illegible]後叙第一頁

愛らるまで。娼妓は既往の季
指あく。自有の盟章し
形し。彼は截って是に誓
ふ才を失わるる学あり帰し。
高飛の鳥も美食に死し。
深泉の魚も芳餌に死す。

同　第二頁

娼妓も亦潘安世に存せず

謾ことあり。豈虚のみ

ならんや。雖然未其付

娼妓ニ正札附情合賣

あることを。余以為其

實を信ぜずして其虚試

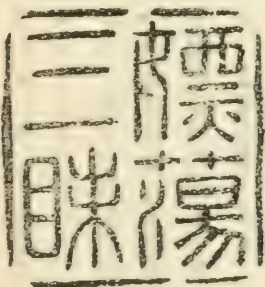
ち一

同第三頁

悪ざくぎの輙是識趣人歟

京傳艸廬食客

煙花浪子跋

同第四頁

名無人」と讀まれる。
「娼妓絹篩」の題は、「將棋絹篩」のもぢりであらう、その頃、さういふ題名の將棋の書があつた筈である、京傳は客と遊女との魂膽手管を將棋の手と見なして、その書名を假りたのである。

書かれてゐることは、いろ／＼の手ではない。義理と情の二道に、どうも動きがつかず、闇湛子さならなはつになつた遊女の飛車手王手である。梅川忠兵衛の世界であるとて、忠兵衛に實意を盡す梅川の心意氣が主になつてゐる。もうこの頃の洒落本は、魂膽手管を描いて、微に入り細を穿つてゐる。これを客の種類で分け、遊女の手管に品目を設けるほどになつてゐる。たとへば、息子株、禿頭醫者、武左、俠客、色客と書きわけた振鷺亭の「自惚鏡」があれば、これと態度を同じうしながら、分野を遊女にかへて、しつぽりとした手、やすい手、見ぬかれた手、そは／＼する手、眞の手を書きわけた京傳の「傾城買四十八手」があつた。「自惚鏡」は天明八年、「四十八手」は寛政二年、二者の間に多少の關係があるやうである。「娼妓絹篩」の趣向は、この順序を追うて成立したのである。すなはち、「四十八手」の眞の手を、梅川忠兵衛の事件に托して、精細に描寫したのであつた。

　京傳は、つい、これまでの洒落本にないものを扱つた。遊女が懐姙して、寮で休養してゐることである。そして、夢の趣向で、さうなるまでの眞の戀を書いたのである。浮き浮きした洒落本の世界に、一脈の哀愁を漂はせたのである。そのやさしみが、「花折紙」をして、若女形の部におかせたのである。評言にも、一抱夢のくるわ揚屋の榮、第一はんめ、頃しもそよふく秋風の目には箕の輪の別莊にいとゞ病氣のものあはれなるしうち、大きにうけとりました」とも見えてゐる。後の爲永春水の作に、少なからぬ影響を與へてゐるほど

に、人情本脈が動いてゐる。

京傳は、一讀すれば吉原であることが明であるにも拘はらず、世界を大坂新町だといつてゐる。また、卷頭には題材とふさはしからぬ好色の戒をいつてゐる。それには、理由があつたらう。

その頃、風紀問題から洒落本に對して取締のありさうなとり沙汰がなかつたらうか。その噂が實現されたのが、二年十月二十七日の洒落本禁止令でなかつたらうか。板元蔦屋重三郎は、發令以前、取締に對する處置を京傳と相談した、京傳はわざと江戸をよけ、敎訓らしく見せる案を立てたのでなからうか。しかし、その案では安全を期し得られないほど厳重な取締令である。板元は、こゝに冒險を試みた。この書を袋入りとして、袋には「敎訓讀本」と題して、翌三年の春出板した。「仕掛文庫」「錦之裏」もまた同じ體裁で出板した。何分にも、洒落本禁止のところへ、この新趣向の作が出たのである。驚くべき流行であつた。事聞えて、京傳も、板元も、處分をうけ、それ等の書は絶板を命ぜられた、京傳の刑は手鎖五十日であつた、三年三月のことであつた。

京傳は、この事あつて以來洒落本の筆を斷つた。けだし、これは、京傳の最後の洒落本として記念すべき書であつた。この書はまた別の意味からも、京傳にとつては、記念の書であつた、といふのは、彼が原稿料を得た最初のものであつたからである。肴代として一兩を得たといはれてゐる。京傳に對する吟味始末書の中にも、「絹篩」「仕掛文庫」「錦之裏」は、作料筆工紙一枚には代銀一匁づゝ、三部代百四十六匁、金に直し、金二兩三分銀十一匁と見えてゐる。

青樓晝の世界　錦之裏

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

自序、附言、及び跋がある、皆京傳の筆に係る。京傳自畫のさし繪二丁、たゞし、その一丁は黄表紙のやうに、本文を合はせ刻してゐる。本文三十三丁の一册物、大さ常の如し。

題號の由來は、自序に見えてゐる。

妄作（むだがき）の茶表紙も、年々歳穴相似て、歳々年々趣向新しからざれば、一ツぐつと捻てみた青樓の晝の世界、夜の景色の花美とはうつて變つた案じの小册、此奴は一ツ新繰ならめと、其儘錦の裏と題す而已

書かれてゐる世界は吉原の五ツ時から四ツ、九ツ、八ツ、七ツ時まで、すなはち午前八時から午後四時までの情景をうつしてゐる。時のおのおのを示すために、時計の圖を挿入してゐる。この趣向が、後に、一九の黄表紙『吉原時計草』となり、また六樹園の戯文「吉原十二時」となつた。また、時計の圖の挿入の案は、そのまゝに、三馬の「浮世床」「浮世風呂」に襲用せられたのである。

京傳は、この書に於いて、最も精しく吉原のうがちをしてゐる。また遊女の生活の內幕を發いてゐる。月の半ばを吉原で遊び暮してゐたといふ彼の體驗があつて、はじめて書き得るものであつた。彼は吉原の日常生活をさうまで書くと共に、それを背景とした非常事件を書いてゐる。遊女が宵のほどから忍ばせておく色客に對する心づかひである。その心づかひが、「四十八手」の眞の手の延長である。尤も、この書と「四十八手」の關係は、書中、ある一事項の說明に、彼の書を參照すべきことをいつてゐるのでも明である。

青樓晝之世界錦之裏

山東京傳戯作

五明鳥ガアヽヽヽヽ　晨鐘ボヲウンヽヽヽヽ

紙砧の音コトヽヽヽ　商人の聲油あげヽヽヽ

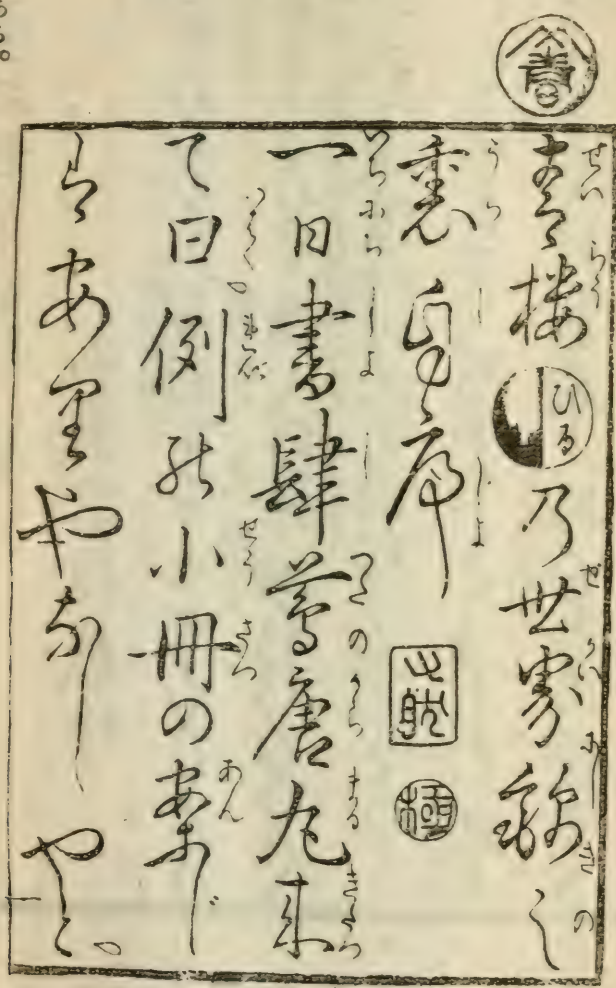
夫神靈矢口渡道行の文句曰たゆふてとゝまる

夜のゆめはまよひてもやまずでもさこそ是密

乃常陸坊よくぞひろき一掛ゑ紛り瀬

珠匡楠子乃梳皿まんわゝ祇ぐ明あそくやし

「錦之裏」本文

京傳は、その客と遊女とを夕霧伊左衛門に托してゐる。夕霧が伊左に對する實意としてゐる。京傳は、また作の表だけを、後一條の御宇とし、神崎の廓としてゐる。少くとも起筆をば讀本らしく見せようとした。例の取締に對する用意であつたらう。その用意はまた附言及び跋に於いて見られる。特に附言に「喜怒哀樂の人情を述て、勸善懲惡の微意あり」といひ、「此小册に教訓の二字を冠しむること所以なきといふべからず乎、覩人宜察也」といつてゐるのは、勿論袋の上の「教訓讀本」に應ずるものであることが明である。

印極の「錦の夜」

京傳及び板元蔦屋が處刑された時、地本問屋行事兩人も連坐した、商賣御かまひにて追放されたのである。寛政二年十月の取締令では、刊行書は行事の改めを受けて後出板すべきこと、行事の改方が不行屆ならば、行事の越度となるといふことがあつた。「絹篩」「青之錦」「仕懸文庫」は、教訓風の序跋、また讀本風の扱ひ、及び洒落本の例である土器色の表紙を、赤褐色、また模様入りなどに變へたことによつて、幸に行事の眼をくらまし得たのであらうか。それとも、行事と暗々裏の諒解があつたのであらうか、とにかく行事等は許可を與へた。それが、改方不行屆として、罰せられたのである。こゝに揭げてある「錦の裏」の序文の中にある「極」の印は、行事が許可濟の印章である。

大礒風俗　仕懸文庫

山東京傳の作、寛政三年の刊行。

作者の自叙、跋がある。さし繪二圖、一丁半、京傳の自畫である。本文四十三丁の一册物、大さ常の如し。扉には、特に「大礒廓中光景、鎌倉遊子傳記」と銘うつてゐる。叙は、その意を敷衍して、頻りに今の時風でないことを說いてゐる。跋は教訓の意を說いてゐる。また目錄は讀本風の題目にしてゐる。すべて、取締の眼を避ける手段である。しかし、一讀すれば、誰しも合點することが出來るやうに深川仲町の穿ちであつた。されば、取締令に觸れて、處罰された折の吟味始末書にも、

仕掛文庫と申は、御當地深川邊料理茶屋にて遊興致候體を合介、並古來より歌舞伎芝居にて狂言仕候曾我物語の趣向に、當地の風俗を古今に準へ書つゞり云々

大選 風俗 仕懸文庫　山東京傳著

第一回

東山に妓を携へし漢土の驕者もいまさ
緑皂舗の出番のちよんきり遊び酒肆
乃枝蘂がつてはなのしき事代知るべし
宮に後鳥羽院の御宇文治建久の者
鎌倉の巽にあたつて一ツの女肆あり大磯
と名づく宮にまりては陶朱猗頓

「仕懸文庫」本文

といつてゐる。

「仕懸文庫」といふのも、すぐに仲町を聯想させる題名であつた。作者は書中に、

仕懸文庫といふは、子どもの着がへを入てもたせて來る文庫なり、大磯にて着物をしかけといふ事人い知る所なり、尤仕懸文庫を持せる事は緹町にかぎるゆへに、此册子の外題とす

とも自註してゐる。大磯の深川、緹町の仲町を意味することはいふまでもない。

さすがに、京傳は曾我の趣向のはめ込みも巧みであつた。朝比奈を深川通とし、曾我十郎を吉原客の深川不通とし、十郎の案内の格で、細い穿ちをいふことにしてゐる。京傳はまた深川の遊女の魂膽をみせる。ために、おてうと色客曾我五郎の交蕩を描いてゐる。色敵に梶原源太を据ゑて、曾我の表面をとり繕うてゐる、おてうは五郎のために、强工面をする、それがために箋の物も少くなり、仕懸の數も減る境涯にあつた。題名の「仕懸文庫」をそこで利かせてゐる。

京傳の深川物が爲永春水に與へた影響は多い。殊に、この書の如く、深川の背景と魂膽とに亙つて、穿ちの細かいものは、春水の御手本として恰好のものである。彼はいさゝかの増補を加へて、「新秋宴語辰巳月」といふ中本三册を作つた。山東京傳舊作爲永春水增補と銘うつた。彼は、「仕懸文庫」の板本を利用の出來るだけ利用した。それがために、丁附が妙にならうが、またお蝶綱五郎の戀物語としてあるにも拘はらず、とんだところで曾我五郎が頭を出すのも構はなかつた。尤も、「仕懸文庫」の後摺本には、裝幀だけを中本にしたものもあつた。たしかに、わづかに仕立かへれば、人情本になり得る素質は、京傳の最初の用意が用意だけに多かつたのである。

石場妓談 辰巳婦言

式亭三馬の作、寛政十年の刊行。

闕東米の序、作者の自序、また純々亭主人祭和樽の跋、式亭門人樂山人馬笑の跋がある。さし繪一丁。歌麿の畫、洒落本としては珍しい彩色畫である。凡例の一丁また彩色を施してゐる。尤も後摺のものには彩色がない。外に「後語」の一章がある。本文四十一丁の一冊物、大さ常の如し。

彩色入りの大い方形の題簽、貸本屋と客の言葉が本文同樣の書式で書いてある。「ハイ新板のしやれ本が出來ました、まだ封切でムり(ござり)」「ム、なんだ、石場妓談辰巳婦言　完　式亭三馬著　新しい趣向だ、こいつは面白からふ」この題簽の趣向は必ずしも新案でないが、まづ類の少い方である。全體として、この書は體裁の上になみなみならぬ凝りやうであつた。

世界は深川古石場である。凡例に「名家の糟粕を嘗て予が分に應じたる新市場の世界を著す」とある新市場は、新石場の假託であつて、新は古の誤である。この後編「船頭深話」の附言にも「先年先人の糟粕をねぶりて辰巳婦言一册を著す、幸に世に行はれり、尤古市場の小說、他に類書なし、依之則ち後篇を作して以て外場所通の一笑に備ふる而已」と見えてゐる。古市場の假託は、深川を鎌倉手越宿とした延長である。

作者は、古石場の世界に、女郎一人に客三人の手くだの智慧競を書いた。「手ごはくかゝれる段」として、高慢客藤兵衞が女郎おとまの手管に乘て金をとられる經緯を書き、「うまくかゝれる段」として、息子株喜之助がおとまの髮切りの手段にかゝる始終を書き、「しんにもてる段」としておとまが色客の俠者長五郎にせる

實意の有樣を書いた。作者はまた古石場の氣分を出さうとして、「あくてん遊び三人一座の段」を書いた。三人の客が女郎の來ない腹癒せに惡じやれの大騒ぎを演ずることである。これ等の事どもを、時間の區分の下に書いた。四ツ明の部、晝遊の部、宵立の部である。なほ、朝直の部、宵泊の部をも書く豫定であつた。

この時間の區分は、おそらく、京傳の「晝之錦」の工夫を摸倣したのでないかと思はれる。それはかりか「仕懸文庫」「四十八手」などの趣向を踏襲してゐることは、少しく對照することによつて、容易にいはれ得る。深川を鎌倉の遊里に託するなども、そこに基づいてゐる。その他一々の例を擧げずとものことであらう。要するに、三馬の例の摸倣癖の現はれである。

さすがに、三馬は、摸倣を

以てこの作をなしたとはいひながら、三馬の三馬たるものを十分に發揮してゐる。會話の洒落までも京傳のをそのまゝ用ゐる場合も、すつかり氣分を變へさせてゐる。三馬にいはせれば、趣向立は先人の糟粕を嘗めてもよい、風俗言語の細かいところを見て貰ひたいとのことであらう。彼の辛辣な觀察が、遊客遊女に對して下されること、なほ彼の他の作品と同樣である。卷尾におとまの出所をいふところなどに注意すべきである。

この書出てゝ七年の後、後編「船頭深話」を書いた。文化三年板である。その翌年三編「船頭部屋」を出した。凡例にいつてゐる。

石場妓談 辰巳婦言

式亭主人著

【半夜鐘】ホヲンく【夜番拍子木】カチリく身にしみて いたくしくたる料理番の俎板を叩くしく 棧橋の声何処へく アイーイの返答ヘエい すごくも聞て船頭の魂廊下に納まる頃を や 屋形の所のごとく お客さまヨウと美音忽ち 鼾眠と寝て梯子のどし〱響く 熟材臭き

「辰巳婦言」本文

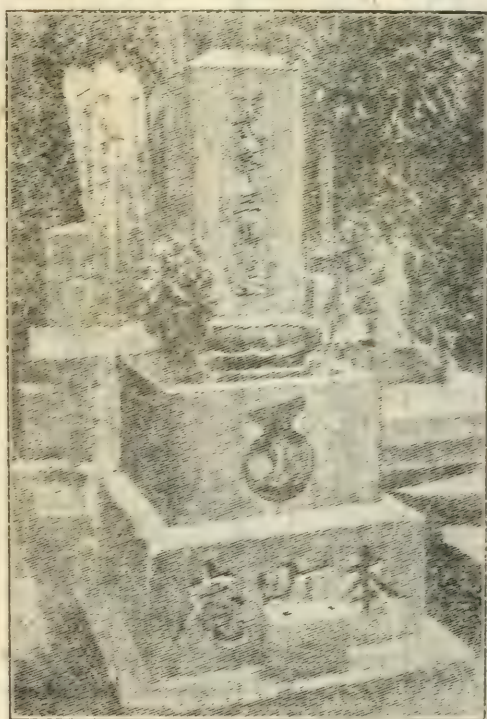
前篇の二書に古市場の穴を穿ち、風俗言語の趣は盡したれば、おとまが眞實を主とし、聊流行をくはふ、
前後參考して其の花實を知り給ふべし。

おとまと藤兵衛、喜之助、長五郎の三巴はいろいろあつて、つひに、おとまは喜之助と一緒になることに終る。洒落本の續物と人情本の關係が明である。この前後三編が、春水の「梅兒譽美」に多くの影響を與へ、殊に、この藤兵衛とかの藤兵衛との間に、太い絲の結びがあることも、最も明白な事實である。

滑稽本作者として聞えてゐる三馬の傳は、今更に一言を要すまい。たゞ洒落本の作は、生涯を通じて、さまで多くなかつた。中に「傾城買談客物語」などの注意すべきもののあるが、「辰巳婦言」を以て第一に推さねばならない。

三馬墓、深川 雲光院

傾城買二筋道

梅暮里谷峨の作、寛政十年の刊行。

京はしの息子署名の序、作者の自序、及び自跋がある。さし繪一丁、雲華の畵、本文四十二丁の一冊物中本形。また小本形のもある。

この書に形の大小に拘はらず。板の變つた二本がある。一は京はしの息子署名の序文があるもの、一は同じ式亭三馬叙と署してゐるものである。前者の京ばしの息子といひ、また印章といひ、共に山

序文の署名

序文の署名

傾城買二筋道　谷峨作

○夏の床

世界ハ小見勢客ハ二千六百のよね屋の乃はよ
さいろ男にて胸どころあきれ悠と己胸の赤途へらぬ
な地巴り同前鳶賓達分ハ二十一二たいていハまこう川
くしくえるそでいうまきぎさんをうてりおあ伝四
五會め
水涸子で（合）夜半の短うえよけれども初め申して
どと深酒の嬉しい口でハいくどえんあつの事也と

「傾城買二筋道」本文

東京傳を聯想させるが、おそらく三馬のさかしらであり、後者はこの書の流行につれて、三馬が本名を現はしたのであらうか。前後の序を通じて「眵羅哩樓」とあるが、これは三馬の別號であつた。多分前者が最初のものであり、後者が後のものであらう。前者の本文は漢字が多く、後者は假名が多い、たとへば、ずつとはじめの方に「廣小路の十哲のうちでは顏淵(がんえん)といふものだせ」と前者にあるのが、後者では「かんへんどいふものだせ」になつてゐる。多分、後の板では、そのやうな洒落はどうでもよい、筋で讀まうの讀者のために、彫り直したのでないかと思はれる。

二筋道後篇廓の癖　梅暮里谷峨著

○序

世界は吉原である。夏の床と冬の床の二部に分れてゐる。夏の床では、俠肌の行すぎが遊女に金の無心を

してつき出されることを書き、冬の床では、醜いけれど深切な男が、遊女にふられ通してあるにも拘はらず、三年も通つて、實意を見せ、つひに深間になることを書いてゐる。作者の意は、客の淺薄と深情とを書き分けることであつたらう、「二筋道」の題意もそこにあつたらう。

例の「花折紙」は、冬の床を評して、

つぎに甚三がい、文里となられてのしうちしつとりとやられまする鹽梅、見物の落涙をゐよふさるゝ所、出來ました〳〵。

といつてゐた。客文里が遊女一重に對する深情は、大方ならぬ好評を博した。そろそろと洒落本界に人情本の脈が強く持ち出した頃であつたからだらう。一度人情本的趣向で見ると、一重がつひに文里の情にひかれて心から契ること、また、文里が女房子供を思ひながら、一重を忘れかねる悪緣のことが、どうしても後編の存在を要求する。その要求に應じて、作者は、翌十一年に、「後編廓の癖」を出し、そのまた翌年十二年に、「三編宵の程」を出した

二筋道三篇宵の程　梅暮里谷峨著

(八)

第一　冬のどん

のである。

後編三編となると、「二筋道」の題號がずつと變つて、義理と情の二筋道といふことになる。文里は一重に熱したために、家の首尾が惡くなつて勘當をさへうける。一重はまた文里の妻に對する義理合から、一日も逢はずにゐられない文里と離れようとする。それがもとで病氣となる。しかし最後は作者谷峨のはからひで、文里も勘當赦免となり、一重も妾としてひきとられることとなる。殆ど人情本の作風であつた。

作者谷峨通稱反町三郎助、江戸住の久留米藩士であつた。江戸本所埋堀邸に住んでゐたので、この戲名があつた。戲作の書ほど二十種、しかし「二筋道」ほどの當りをとつたものはなかつた。

讃極史

千代丘草庵主人の作、寛政年間の刊行。

作者千代丘草庵主人の何者であるか明でない。刊行の寛政年間であることは、書中の記事から推定される。「中洲のはつかふ時ぶん花火を見る船からあんじた謀計サ」といふので、中洲とり拂ひ後、さまで時の經たない時が考へられるし、殊に、「新渡の近世畸人位といふ書を見たが宮奇の竹の圖がでゝゐる」とある「近世畸人位」すなはち伴蒿蹊の「近世畸人傳」の刊行は寛政二年であることから、ほゞこの書の刊行の時を考へられよう。

鶴邊庵さほ丸の序、泉樓主人の跋、外に葛飾北斎書のさし繪一丁、彩色を施したのがある。本文二十五丁半の一冊物。形常の如し。

「讃極史」の題號は「三國志」のもぢりであることは勿論である。講談としての「三國志」の流行は、戯作の趣向にも、題名にも、與へるところが多かつた。これもその一例である。「讃極」の文字は、さほ丸の序では、この書の妙作を賞めたことになつてゐるは、それは戯言で、本來は、時の流行に對する禮讃の意であらう。

この書の趣向は、玄德、孫權、曹操を三通客とし、それ等の會談によつて、時の流行を紹介することであつた。しかも一人を廿黨としたのも、名物の菓子を數へさせる手段であつた。更にまた一趣向があるといふは、「三國志」の戯作である。たとへば、玄德、關羽、張飛が桃林に天地を祭つて、兄弟の義を結んだ事件も、これには、輕い當世風に變

萍水相親爲恨豺狼當道

祭天地桃園結義

「古本三國志」

へられてゐる。

三人共兄弟ぶんさ、しろかね町の川みせの高なはの桃林で義をむすんだのさ。

桃林もつひに高輪茶屋にされたのである。また曹子建の詩も、これでは狂歌にされてゐる。

先生の次男曹子建は狂歌は妙だ、先度角半で一座しやしたが、日本の雛長老、豐藏坊、未得貞柳もはだした、よつはらいながら七足のうちに豆の狂歌をしたかおそろしいよ。

かういふ洒落も、いつもの和漢古典戯作の常であるが、舞臺が舞臺だけに、大きく働きかけてゐる。殊に、當時の流行語、「これは日本だ」が、名物の賞美言葉として、巧みなはめ込みになつてゐる。また、三人が肉

桃園共契頓教龍虎會風雲

を食ふことから、妙な日本自慢も出て來る。「菓子と女と紙は日本がきつい物さ」「どうして」「まづ女が牛はくわねへからくさくねへ、紙はちやのやうにさけやすくねへよ」「紙はいられへが、女は浦山だ、とふもおいらが奥の女中部やでぶたや牛猿の帆立貝をせゝるから、いきがくさくつてこまりやす」などともいひあつてゐる。

寛政といへば、寳暦の支那趣味流行の後をうけて、後土の文人の遊びに倣つてゐた。この書には、それ等の空氣が充滿してゐる。この頃の日本の流行は煎茶の會に、墨蹟の交易さなどとも見えてゐる。その點に於いて、白舟作、寛政十二年板の「昇平楽」を參照するのも面白からう。これは大坂に於ける文墨嬉遊の通人の會談の洒落本である。中にまた支那趣味の動きが著しい。

娼妓美談 籬の花

籬の花後編 廓宇久爲壽

共に、鼻山人の作、「籬の花」は文化十四年、「廓宇久爲壽」は翌年、文政元年の刊行。

「籬の花」には、鼻山人の自序がある。さし繪一丁、北溪の畫、本文三十七丁半の一册物、「廓宇久爲壽」は自序、及びさし繪一丁、英齋白水の畫、本文四十丁半の一册物。二者ともに、大さ常の如し。

「籬の花」は前章後章にわかれる。世界は吉原。梅川は忠兵衛に貢ぐ金のために、心ならずも八右衛門をあひしらつてゐる。これが前章、其角の句、鶯や梅はさほどに思はねどを題とする。忠兵衛はもしかして、梅

嬉遊美談

籬の花

鼻山人著

蘭章ハ宝晋斎其角が秀句
字文為寿や綺ハさればふかきものあるべし
本朝文粋巻の九論文の中にある人いふらく
あるは荊山の璞美なりといへども琢ざれば其の寳と
あらざるは實なる哉蘭姿蕙質傾國の色と
情の仲の町なまめかしき地の文漾今も言葉の
ならけて走る紋湯の風のをりをりに入船の名をたがれ

「籬の花」本文

籬の花後編　山人著

廓宇久為壽

○前章

花街の春色。柳梢の光景。俯て察。仰で親が言語の四季倶ふ紅白妍を争ひて。貴賤を歎き。李ま人を厭ま。その章臺ふ登るの遊者黄金を砕のびと昴おく擲のどくふの擲て斯かる

「廓宇久爲壽」本文

川の心が八右衛門に靡きはせぬかの疑心からぶち打擲する。これが後章、祇徳の句、鶯やあまりに愛でこぼれ梅を題とする。

後編また前後の二章に分かれる。前章は、忠兵衛が梅川に對する腹癒せから、舞鶴をよぶ、舞鶴は初會から忠兵衛をよくもてなす、忠兵衛は、腕に入墨した梅川の名を消す。後章は、忠兵衛が一時の怒からの自暴遊びに、金に困つたのを、梅川から金を惠まれる。二人は和解する。

この書は、はじめから、前後二編を豫定されてゐた。これを四章に分つのも、起承轉結の脚色を期待してゐたためであらう。その企圖があまりに露はに過ぎるほどに、事を運んでゐる。

作者の態度に於いて、また續編を有つことに於いて、洒落本といふよりは、むしろ人情本といふべきであらう。たゞ小本仕立なのが、形式的に人情本と區別させるぐらゐである。その二書を合はせて、本集に選んだのも、畢竟、過渡期に於ける洒落本を代表させるためである。作が傑出してゐるためでないことは勿論である。

娼妓の、誠と、雞卵の四角、あれば、晦暮に大陰(つき)も照(てる)と、謠ひ物せしは、其理を不究(きはめざる)の論、可恥の妄誕也。

と序文にいつてゐるやうに、作者は娼妓の實情をうつし出さうとしたのである。すなはち、京傳のいふところの眞の手を觀つたのである。しかし、京傳の妙筆とは、つひに比較することは出來ない。こゝに京傳を思ふのも當然である。何となれば、この作は、京傳の「娼妓絹籭」に負ふことが多いからである。最も見易い例は、梅川の新造梅ざとが、梅川を庇つて忠兵衛に逢はせるあたりは、「絹籭」の梅春の行方を眞似たのであつたらうし、殊に、事の結びを、箕輪の別莊に病氣保養の引籠中、新造梅春に看護されてゐる床の中の夢と

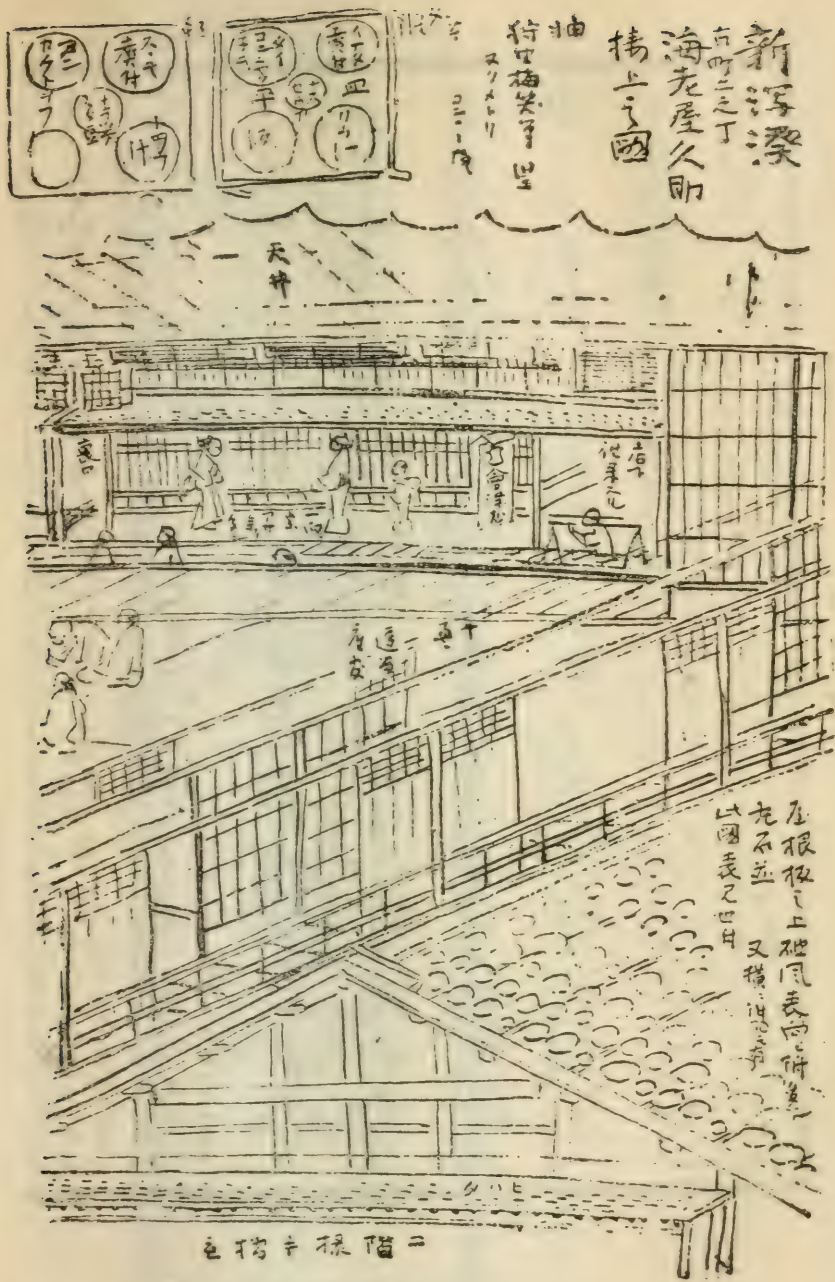
したことなど、いよいよ摸倣の跡の歴々たるものがある。

作者鼻山人は一に東里山人といつた。本名は細川浪次郎、御家人であつた。京傳の門人である。印章を京傳鼻にしたのもそれがためであらう。彼は黄表紙合巻の作も多かつたが、洒落本數種また人情本三十餘種の作があつた。その洒落本も作風大方人情本に近いことは、「籬の花」「廓宇久爲壽」これを代表してゐる。

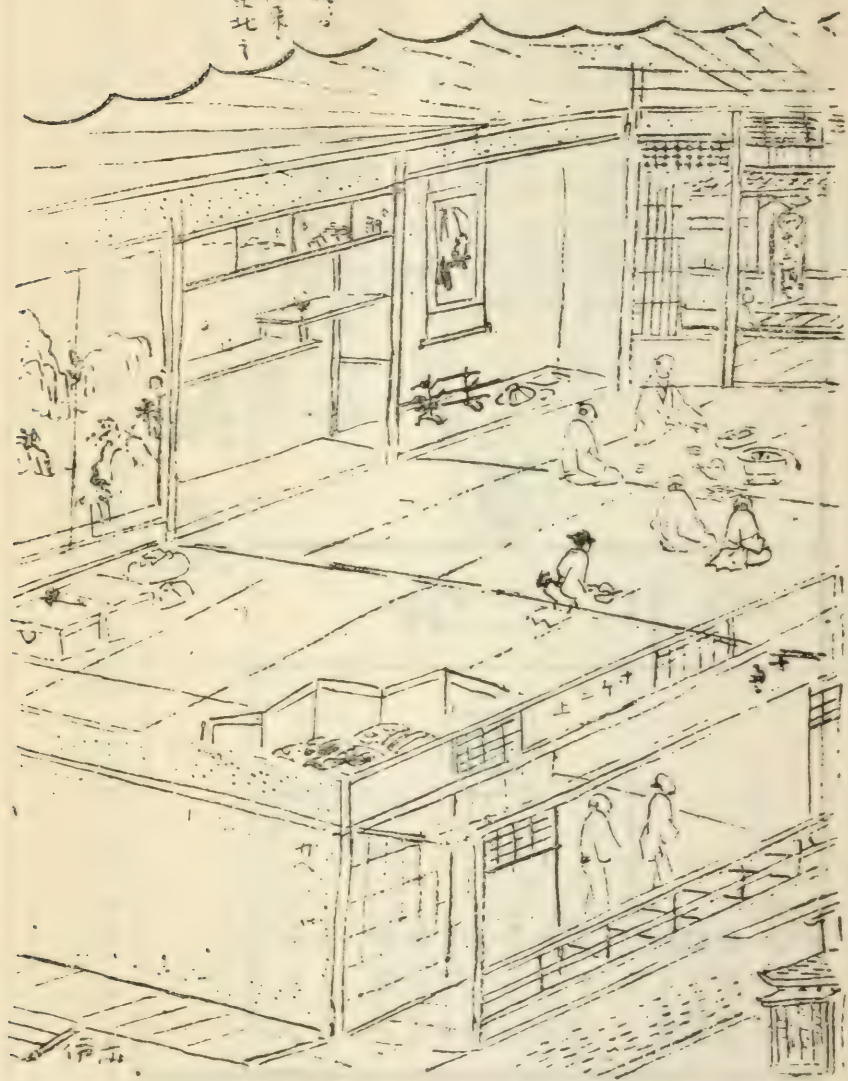
新潟後の月見

作者署名なし、文政二年の刊行。

新潟繁昌記
八百八後家
後の月見 全

「後の月見」題簽

表紙の裏に、鍋輔の書贊があり、巻尾また鍋輔の書贊がある。作者はこの鍋輔でないかと思はれるが明でな

新潟湊
海老屋久助
天井

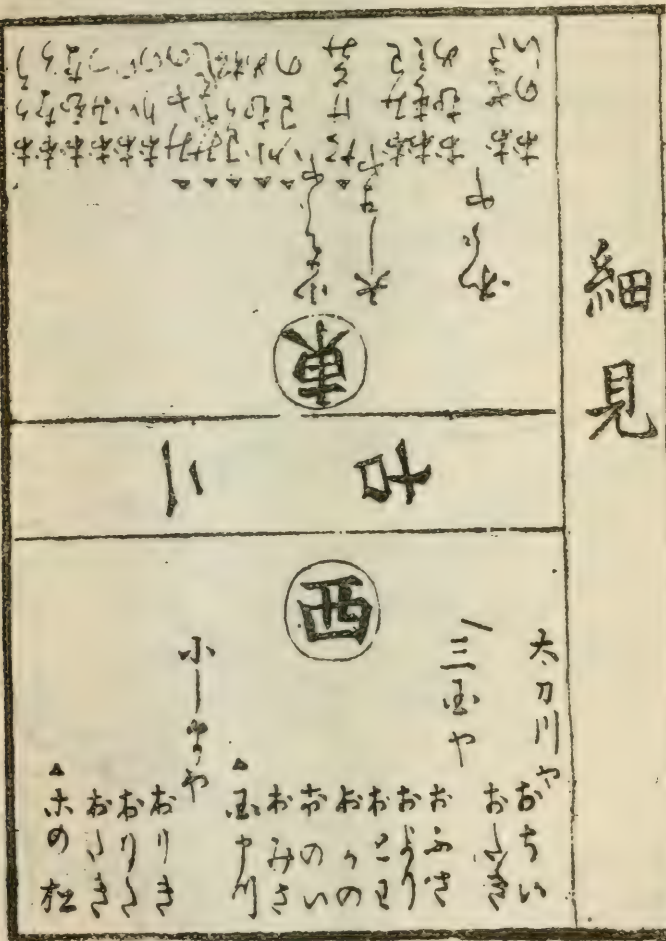
一圖

い。またその人となりを知らない。おそらく、新潟の通士であつたらう。

湊之圖、熊谷小路之圖、鴫の圖、寺町之圖二面、白山祭禮傾城宮參之圖、旅籠町之圖、仲道之圖、鍋輔の書贊二圖と合はせて、さし繪すべて七丁半。本文五丁、外に作者の序と凡例二丁がある。中本形である。作者の自序には、文政二夘の年の春と見えてゐる。

この書には、二度の摺がある。二度目のは、表紙裏の鍋輔の贊ある繪を省き、筑紫甘泉醉翁の序を附してゐる。序には、辰の年初秋日と署してゐる。これは、また作者自序の「文政二夘の」を削

細見

文政二年刊

つて、「としのはる」だけを殘してゐる。本集には、原板を底本とし、更に再板の序を加へた。

この書を洒落本と見るのは、或は當らないかも知れぬ。むしろ、滑稽本の選みとするのがよいかも知れない。しかし、洒落本の意を、「遊子方言」の型にのみ限らないとすれば、これもまた當然その中に位置を占めてよい。少くとも發生期の洒落本には、この種のものも多かつた。殊に、この書の作者の意は、洒落本の扱ひにあると考へられる。

此八百八後家も、あるひはその人のしたにより、またはわかれしひと有さまによりて、あた名をつくる

「見[illegible]淸話」

なりけり、あげておろさぬをやね石後家とよへば、入てしめるを巾着後家と名すくるたぐひ、皆こと〳〵にゆゑよしあれば、此まきをひらき見て、其よしをしり給へね。

と自序にいふが如く、新潟の土妓に八百、後家の名あるを利用して、ほゞ二百の渾名をつけ、これに戯釋を加へたのである、すなはち、見立物の一類である。

洒落本は、その成立の當初から、殆ど遊里を中心としてゐた。遊里のあるところ、必ずや、細見あるべく、案内の書あるべく、また洒落本があるべきであつた。しかも、洒落本界の情勢は、種々の事情のもとに、洒落本を江戸に壟斷させた。たまたま、各地遊里の洒落本があるといふも、その數は少い。この書の如き、その少き中に於いて、かなり注意せられた作である。

八百八後家の名の本づくところを知らない。江戸の儒寺門靜軒、かつて新潟に遊んで、「新潟富史」の著があつた。新潟の遊里について述べてゐる。古町の遊女は最も優れた者がゐる、江戸の妓に比して　必ずしも遜色がない。熊谷小路に住むのは、その次である。脫弃小路に住む者は、江戸の切店同様の賤妓である。かう述べた後、八百八後家の名について、說いてゐる。

昔者無ㇾ有二娼妓一、寡婦無ㇾ依者、陪ㇾ酒奉ㇾ情、是爲二土妓之起本一、今ト後家殆絕ㇾ種、世所ㇾ謂、八百八孀耳。八百之稱、今不ㇾ詳二其由一、或言取二諸八千八水一、或言不ㇾ過ㇾ稱二數之多一、與下呼二薬肆一曰中八百上同、或然。

新潟の地の船着場としての賑ひは、そこの遊里をして、特殊の發達をなさせた。甘泉醉翁の序すでにこれをいふ。靜軒の醉詩吏にこれを盡してゐる。

八千餘水合走洋、七十多橋分界坊、人居稠密何熱鬧、商帆輻湊自方、絲聲鼓韻晩歌吹之海脂粉鄕、嬌摸嬌樣嬌紅粧、坊中多半是女郎、就中、有種老娼妓、所謂八百八家孀、孀婦淡粧娘濃抹、嬋妍鬪媚綺羅香、洞房春暖鴛鴦被、流連莫倚不倒囊、誰憐老客情境冷、且呼一盃潤枯腸、孤枕支醉夢易驚、絲聲猶攪月三更。

靜軒の新潟遊行以前、江戸の畫家長谷川雪旦がそこに遊んで、遊里の狀を描いた。稿本藏して林文庫にあり、その一二圖を拔いて、參考に資する。

「後の月見」が刊行された文政二年には、「新潟細見」も刊行された。醉興山人の序がある。年々六月十六日に改板するといつてゐる。しかし、果して實現されたか、いなを詳にしない。この細見編者と「後の月見」の作者とは同一人であらう。

「後の月見」の原板のをはりには、二編近刻、角力一覽摺近刻と見え、また、口上として、

新かた年中行事ひとり案内と申スおもしろきしんはん出はん仕候間何卒ひとへに御もとめ御らん可被下候樣奉希候、また／＼げい者子供衆のこらず角力にとり組御いちらんにいれ候、

と見えてゐる。刊行されなかつたやうである。

河東方言 箱まくら

大極堂有長の作、文政五年の刊行。

無着舍主人の題言、作者序の、兎鹿齋の題詩、及び作者の跋がある。さし繪二丁半、春川五七の畫である。

上中下の三卷、三册、中本形である。本文は上册十九丁、中册十九丁半、下册三十丁半。中本形。

奥附に、文政五年午六月東都山崎屋平八、浪花河内屋茂兵衞、皇都近江屋治助、山城屋佐兵衞と見えてゐる。作者大極堂有長の名は他に聞えることがない。しかし、傾城情史によつて、粋川子の別號であることが明である。この書は、文學をもぢつた一篇の戯文である。閑亭京鶴の作、天保三年、京都の出板である。その一節にいふ、

扨この書については箱枕

大客

酒氣章句

酒ハ氏氣ハ名なり世ニ大酒先醒と云此一巻の章句とかちたまへる也酒氣章句と早口ニ色欲とよむべからず

酒酊子曰大客古之妓書而初客入道之門也當時可見通人爲客次第者獨頼此篇之存而枕辰次之客者必由是而遊焉則庶乎其不弱矣

此心ハこの大客の書しりへなハ古へ駄通人のかくし妓女のこゝろを知るべし ろん書として世の廓にあそべるの通人とすれ門口なるもちうの通人の廓にあそびし次第を當時知るべきものこれ書の存るゆへなり初心の書についてハ箱枕辰巳婦言の二書を見るべし廓にあそべるのかなめにこの書のそくふに読むわきまへがたき

大客　二

妓お深くたまり身を崩をまちうれきちゃうしとうり酒酊子ハ酩酊先醒なり箱枕ハ粋川子の作なり辰巳婦言ハ三馬子のつくりし也

夫大客之道在通廓中在察妓情在止於酒宴

「傾城情史」

辰巳婦言の二書を見るべし、廓にあそぶものかならずこの書のをしへにしたがひあそびたまはゞ、妓に深くはまり、身を崩すこととなきにちかしとなり、洒蛩子は酩酊先醒なり、箱枕は梓川子の作なり、辰巳婦言は三馬子のさく也

この梓川子は、酔川とも、翠川とも書いた。「徒然酔ヶ川」の著者として聞えてゐる西村定雅である。通稱みすや甚三郎、縫針商として有名な家柄であつたが、遊蕩ゆゑに産を倒し、後には俳諧師匠、戯作者として立つたのである。俳諧は樗良の門下であつたが、晩年の句には、遊里を題材としたものが多かつた。彼の洒落本と興を同じうする「徒然酔ヶ川」の作は天明三年、また彼の若い頃であつた意外の好評が、酔川の號を附けさせ、また續編「眞々の川」を書かせ、なほ「當世嘘の川」などを書かせ、つひにこの「箱枕」を書かせたのである。

「箱まくら」三卷は、一貫した趣向の書でない。毎卷二章、すなはち獨立した六章から成つてゐる。章には着色（いろつけ）、雜魚寐（ざこね）、有意（あたりのある）雜魚寐、許情（できた）雜魚寐、相議（なじみ）、同心（いろ）の題が附けられてゐる。

河東の角書で明なやうに、この書は鴨川の東、祇園の地を世界とする。また、「箱まくら」の題で明なやうに、藝子を主人公とする。箱は三味線の箱を意味する。藝子が藝を賣らないで、色を賣る始末を、主題とする。されば、自序にも、

もろこしの孫楚は流れにまくらして石に漱ぎ、今どきの歌妓は箱を枕にして流に身を沈む

といつてゐる。中卷卷頭の鬼鹿齋の狂體の題詩またこの事を斷つてゐる。

當世藝妓不主皮、此箱作枕稀裴絲、健啖少語偶開口、催促日柄在何時、

「箱まくら」の作者は、六つの題の下に、かういふ藝子と客のいきさつを分けて書いた。客と藝子とその背景との相對による種々相を描き出した。作者は、魂膽手管をうつして、なほ足らざるをおそれた。「野暮輔曰」として、各章に評言を附した。客と藝子の態度の優劣を評する體をとりながら、作意を明に示した。假託の人野暮輔の評は實は、本文の釋であつた。

「箱まくら」の形式は、常の酒落本型である。その會話の中には、もとより當時の通言を用ゐてゐる。作者は、本文中にそれを用ゐた時には、傍線を附し、章のをはりに於いて、細かい註釋を加へてゐる。これが角書して、「河東方言」といふ所以であつた。

京都の酒落本は、つひに振はなかつた。たゞこの書の如きものがあつて、稍氣を吐くに足りた。

色深狹睡夢

華廼屋高振の作、文政九年の刊行。

奥附に、浪速華廼屋高振著述、江戸柳園種春校訂、江戸歌川貞晴畫圖、同和田正兵衞執筆、文政九丙戌年三月吉辰發兌と見える。また江戸大坂屋、名古屋玉野屋、京山城屋、大坂河内屋の書肆連名が見える。

作者高振の自序、梅園主人の序、また種春の序がある。口繪及びさし繪十三圖、九丁半、本文四十三丁、上中下の三卷、これを六回に分つてゐる。五册の半紙本。

この書、四回、上中二卷は、高振の作、下卷は種春の作である。上中は種春校訂、また校合となつてゐるが、その意は校閲、增補を意味するやうである。種春の加筆の部分が少くないかと思はれる。

深色狭睡夢巻之上

葦廼屋高振述
柳園種春校合

第一回

穀書ぬくふ文月も。そよふくの風はたよりなふかしれ
くふあら雨乃こゑめしいちら秋のいろえとさつそひ
みぶらし糸をうれ。ほんふらの葉がすゝげもあれば虫の
井はにふ身をあさん。そゞうらめしき竈のあると二声
奇のむと婦しき隣の子がいがむく三味も。つかぬ葉乃
うへまひしくと。けうらうてはしれ夕間がれなげかそ

「色深茶睡夢」本文

作者高振に就いては、殆ど知るところがない。種春に就いては、わづかに、「京攝作者考」によつて、攝津武庫郡今津の人、小澤氏といふことを知るだけである。また梅園の序には「彼を江戸勤學といひ、奥附には江戸柳園種春といへば、江戸に出でて、戯作の道を修めたのであらうか。或は、その戯名からおして、種彦の弟子になつたか、それとも種彦の崇拝者であつたかと考へられる。いづれにしても、種春、高振ともにさまでの作者でないことは、この作の上から察することが出來る。なほ畫工歌川貞晴のやうな若年者であつたかとも思はれる。

この書の舞臺は、大坂島の内である、かねて坂町にも亘つてゐる。その舞臺の上で、描き出さうとするのは、遊女の手管魂膽である。題號すでに、それを示してゐる。種春は、序においていふ。「題して深色狭睡夢といふは、かの青樓の隙娼は、意金に在て、客を戀るあらざるゆえなり」と書かれてあることからである。廻し男を間夫とする若い遊女が、巧に二人の客をあひしらふ。一人は田舍客である、許嫁のあることも忘れて、國へも歸らうとしない。彼女のまゝに金を貢がうとする。遊女は、その田舍客との仲をわざと見せつけるやうにして、も一人の土地客に嫉妬を起させる。意地づくから、これも金を運ばうとする。田舍客の附人と、逗留宿の亭主とは、早く遊女の奸計を看破して、その實情を田舍客に見せる。彼は悔悟して歸國する。

この趣向は、もう洒落本ではなかつた。梅園主人が、序に於いて、小冊といふのも當然である。筋の運び然り、教訓めかす態度然り、もう立派な讀本である。しかし、これを讀本の部に入れることの出來ないのは、會話體の洒落本型であるからである。作者は一面狂言本らしく見せようともして、よろしく幕とか、舞臺廻るなどをいふほどである。といつても、人情本でもないのは、作者は努めて通がらうとしてゐるからである。

描寫の描さは、ともすると、筋のみが重くならうとする。作者は、評に曰はくとして、一々描寫のあとに說明を加へる。說明は讀本風の教訓を明にすると共に、更に多くの注意を通の解說に當てゝゐる。こゝに、この書が、なほ洒落本といはねばならなかつた。

大坂は、いはゞ洒落本の發祥地である。しかし、後には、空しく江戶のために名を成さしめた。理由は、輕妙な通の描寫を得なかつたためである。この書の如きは、大坂の洒落本の特徴を最も多く有するものであらう。時代のおくれてゐる事と共に、合はせ考ふべきであらう。

金（こがねの）郷（さと）春夕榮

猿赤居士の作、嘉永三年の刊行。

猿赤の題詩、自序、狂迂の序、一笑叟の題辭、安原の夏澄の跋、口繪二圖、鴬物の畫、本文十五丁半の一册物。中本形である。

猿赤居士は讃岐の人、その號は、いづれ伊豫阿國の猿から得たのであらう。金毘羅の住であることは、安原の夏澄の跋に、「象山の麓に猿あなりね」とあるので明である。その傳を詳にしない。

世界は金毘羅である。客と藝妓の關係を主題とする。金郷（こがねのさと）の題號の本づくところである。

若い通客と美しい藝妓が風呂屋で知りあひになる。それが緣のはしで深く契り合ふ。間もなく通客は勘當となる。藝者はいろいろと工夫して、貢いでゐるところへ、大盡客が出現して、身請しようとする。妓は惱み深くして病氣にさへなる。しかし、これは皆、通客が妓の眞情を試すための手段であつた。

金[illegible]春乃夕榮

第一回

狭貫　猿赤居士戯編

島原芳原もろい象山に人を動かす花もさくハ予が友狂迂癡叟がよしこのまて花も解語四季の春むれなる客を松尾街五百の長市と名付しれど、むかしのくれるまで今ハ屋數もア丶三千て奥鱗ふつゞく甍をそろふ小浪花ともいふべけれ朝ひすぐらより燒亡なる混堂へ入なる少年等浄瑠理に京い

文本「榮夕春鶯金」

筋からいへば、いかにも人情本めいてゐるが、會話少なの走り書風のものである。わけて、短さが委曲を盡さうとする作風と異なつてゐる。作者の要求は、この筋を運ぶ舞臺の名を見せるにあつたらう。そこの地方色を描寫するとよりは、金毘羅の地名を出したかつたのであらう。つひに、この作には地方色を見ることが出來なかつた。

金毘羅の地、本來は松尾である。書中にも、口繪にも見ゆる鞘橋の西詰から小坂までのうちが殊に殷賑を極めた。金毘羅十二景の内五百長市といふのがこれである。書中また「むれ來る客を松尾街、五百の長市と名付しは、ずんどむかし／＼の事にて、今は屋敷もアヽ三千て魚鱗につゞく甍こそげに小浪花ともいふべけれ」といつてゐる。地はすでに榮えてゐる。青樓も盛に、妓も美しからぬ筈はない、からも土地の通士は思ふのであつた。巻頭のよしこの、島原芳

鞘橋

「金毘羅參詣名所圖繪」

ら原もない象川に人を動す花もさくは、さういふ通士の作であらう。その誇りがまた、この樣な洒落本を作らせたのであらう。

作者は、江戸の洒落本を摸倣しようと努めた。自序に「藝なし猿のまけぬ氣で、彼大江戸の諸名家にましらと思ふあさ智恵は、手におよばざる水の月」といひ、狂迂の序に、「お關所こさテェ江戸ことばはナンダバカラシとおとがめなく、ア、是ものどかなるみ代の春にうかれ幽谷を出て喬木にはいまだうつらぬ藪鶯、かたことまじりの一曲も同じこゝろの友をもとむる心ざしは、ひなも都もかはらじと云々」といつてゐる。書中の會話は實に土地詞をも用ゐてゐなかつた。摸倣のあとの、殊に著しいのは、挿話として、ある小樓の貧客等の遊びをうつした一段が、三馬の「辰巳婦言」中のものから出てゐる類である。

この書は、もとより拙劣な作である。これを選んだ理由は、たゞ三都以外の洒落本であるといふ一點にある。地方色の出てゐないことは憾みであるが、それだけ江戸の摸倣の色の濃いのが、相應考察の資料となり得よう。

以上三十七部、これを校訂するに當つて、努めて原本のまゝにした。假名づかひを正さず、誤字を訂さなかつた。たゞ、あまりに假名のみつゞいて讀みづらいところだけに、漢字を當て、またやゝ多く句點を加へた。句點は、原本によつて句讀を分つたのもあつたが、すべて一定した。

解　說　一

その二

十文字舍自恐、菊屋藏伎、並木新作の合者である享和二年板の「戲作評判花折紙」は、役者評判記の體裁に倣つて、洒落本百七十一部を月旦した書であるが、頭取之部に於いて、「異素六帖」「兩巴巵言」「華里通商考」「當世箕導記」「百花評林」の類を加へてゐることは、「遊子方言」を評して、「小書（こがき）衣裳をつけの開山」といつてゐることと照應して、洒落本といふものを考察する上に、少なからぬ便宜を與へてゐる。

かつて、「遊子方言」は洒落本の祖といはれた。遊里に關する題材を、會話體の文章で書き、また人物の風俗についても詳細に說明するなどといふ條件々具備する典型的の洒落本、すなはち「花折紙」の評言のやうな意味では、この見解は今もなほ正しい。しかし、その條件に拘はらず、單に態度を同じうするといふ事でいへば、その以前にもかなり多くの洒落本が存在してゐた。「花折紙」はすでに「異素六帖」を擧げ、「百花評林」を擧げ、「兩巴巵言」をさへ擧げてゐる。更にまた、「遊子方言」の小書衣裳附の開山といふ評は、もとより當つてゐるが、これも少しく條件を緩和すれば、この江戶板の洒落本以前に、早くも上方に於いて、この種のものが刊行されてゐた。「花折紙」は、それ等の中から、「聖遊廓」を擧げ、評言には、その先覺ぶりを認めてゐる。要するに、この評判記は、江戶と上方とに亘つて、極めて公平な態度を持してゐた。

「花折紙」によつて、頭取の部に据ゑられたものは、その刊行當時に、殆ど洒落本と呼ばれてゐなかつた。

まだ、その頃は洒落本といふ名目がなかつた。これあるは安永時分からであらう。少くとも作者みづからが洒落本と稱したのは、金魚の「十八大通百手枕」の自序がはじめである。書は安永七年の刊行に係る。あまりに遲いこの名目の出現は、實があつて名のない頃の作を、他の品類と區別することに於いて、かなりの困難を伴つてゐる。洒落本の名目の存在する以前には、通書といはれてゐたが、その通の意義が漠然としてゐるだけに、通書の分野も甚だ明瞭でない。さきに、「遊子方言」を洒落本の祖にさせたのは、「遊子方言田舍老人著　何れもさま御そんじ通書のはじまり也」といふ安永二年の再板「辰巳之園」卷尾の廣告文を證左としたのであるが、それは餘りに、狹義の解釋であつた。本來ならば、江戸の小說の分類は、もつと科學的の扱ひを要求する。しかし、しばらくその慣用を重んじて、洒落本の名目をおくとすれば、むしろ、範圍を廣きに失するにしても、狹きに陷ることを避ける方が便宜であらう。洒落本の起原をずつと古きに溯るて、「兩巴巵言」あたりとする方が、安

戯作評判花折紙
○惣巻頭
極上上吉　傾城虎之巻　金魚作
○立役之部
極上上吉　四十八手恋所訳　京傳作
上上吉　三教色　三和作
上上吉　二日醉巵觶　万象作
上上吉　恵比良梅　六二作

「戯作評判花折紙」

全であらう。少くとも、享和の頃は、それ等を洒落本と考へてゐたのである。「花折紙」に擧げる諸作は、その頃に於いて認識せられた洒落本と見るべきであらう。しかも、洒落本の特質からいつても、それは最も合理的な見解であらう。

二

通は通曉の意である。世を知り、人を知つて、流通無礙に、おのれを處する所以であらう。それが遊里の事情に通曉し、遊里の作法に適應するものと解せられるのは、つひに第二義のものであらう。通は世の動きをまさしく正しく觀察し、その動きに順應する。髮の流行、着物の流行、羽織の丈の長さ短さ、羽織の紐の太さ細さに、どれほどの意味があらうが、なからうが、とにかくに流行なれば、その流行におくれず、人に笑はれないやうにするのが、通であつた。いや、それよりも、通の通たる者は、流行にさきだちて、これを指導するほどの先驅者でなければならない。通とは畢竟自己優越感のあらはれである。通の高きにあつて、不通の境を瞰下し、通の廣きに亘つて、世間の穴を穿つ、こゝにいふところの通書が成立する。通書とは通人が範を垂れるための通の教科書のみでなくして、不通の醜陋を示して、さて通に導かうとする方便書でもある。少くとも「遊子方言」は、かういふ趣向のもとに書かれてゐた。すなはち、通書は一面滑稽本の要素を包含することを必要とする。これはまた通本來の性質にもよることであつた。

何といふ矛盾であらう、通人が、一代の儀軌とする通が滑稽を隨伴するとは。もし、通人が眞意の達人であるならば、もとより、この矛盾はない。江戸の時代相は、通人をして、あまりに、小く、あまりに、狹く

活躍させる。彼等が造次も顛沛も違ふことなからんとする通は、つひに實人生と何等の交渉もない些事に過ぎない。缺陷多き江戸の社會制度、沈滯せる社會生活は、有閑階級をして、あそびに專念させる。あそびが通である。世人はあそぶ人々を見て笑ひもする、通人は、みづからあそびに耽つて笑ひもする。これ實に江戸時代に於いてはじめて見られる變態的現象であつた。

洒落本の洒落は、はじめからこれ等多様の意義を籠めた名辭であつた。洒落は一にされとも解された。されは頭、され板のされの義である。「好色由來攬」に、髑間(しやれま)小女郎の解がある。解して小野小町の故事であるといふ、さていふ、

是を以て按ずるに、當世髑たるといへるは、萬事に達したるものをいへり。是小町死てのち、髑頭の髑たる迄も、歌の道を忘れざるといふ深切の所を、萬の道に達したる者に合て、しやれたると褒美したる詞なるべし。此ゆへにしやれまの小女郎といへるとかや。

京傳の黄表紙「世上洒落見繪圖」は、世の通人が通を念ずるのあまり、つひにしやれて石のやうになるといふ滑稽を描いてゐる。趣向の基づくところは、洒落に曝の義を托するにある。これ等共に諧謔の筆ではあるが、洒落と曝とに通ずる意義を摑むのには、さし支へはない。久しきに亘つて、世の雨風に曝さるるものは、つひに、世故に通曉するものでなければならない。洒落本の洒落は、かゝる過程の下に、通の意義を有つてゐる。

通が優越性の一表現であることとは前に述べた。その感を以て世俗に對する時に、まづ穴を穿つといふ態度になるのが常である。平賀源内の如きは、他の條件も附け添うたために、やゝ異なる態度にもなつたが、本

質はこゝにあつた。酒落本は、彼と共に、世の穴を穿つものが多かつた。故に、彼の書、「風來六部集」を以て、酒落本の根元とさへいふものがあつた。寛政二年の「京傳予誌」に附載した、かの書の廣告は、次のやうにいつてゐる。

此書は當世流行する酒落本の根元にして、古今獨歩の珍書なり。此書の文法を世に平賀ぶりと稱す。

酒落本のうがちは、世間一般に對するよりも、實は遊里の穴をうがことを主眼とした。「大通契語」には、しやればんに「妓穿書」の字を當てゝゐた。いふまでもなく娼妓の穴を穿つの書の意味であつた。しかし、平賀ぶりは依然として、そこゝに鋒鋩をあらはしてゐた。

この優越性は、しやれに秀句の義を有たしめた。一座の中にあつて、前後の機を捉へて、左右を驚かす秀句を吐くのは、綽々たる餘裕がなければならない。餘裕は訓練から出づる。すなはち、洒落の齎らす効果であつた。秀句はもと言語の戯れである。人を驚笑させるのを本意とする。秀句の漸く擴充されて、脚色を立てた一篇をなすもの、實に滑稽本である。酒落本は、しやれの名辭を通じて、また滑稽本でなければならない。酒落本作者の中、しばしば、しやれ本のしやれに滑稽の字を當てる者がある。「三教色」に、「書は細見滑稽本（しやれぼん）に眼をさらし」などと書いた唐來參和のたぐひである。辭義これをゆるし、書の内容、またこれをふさはしとする。この漢字の使用は、しやれ本の全體に及ぼすべきである。たゞ江戸小說史上でいふ滑稽本と、滑稽本（しやれぼん）とは、何によつて、區別すべきであらうか。いろいろの條件も附隨することとであるが、最も手短かにいへば、遊里生活を中心とするか、しないかに歸する。

そこにもまた、考へねばならぬ一要件があつた。遊里描寫の書、當時の世相が產んだ享樂生活の機關であ

る遊里を描寫した書が、よし滑稽本といはずとも、滑稽の字を當てられる理由は何であらうか。なほ通人の生活を滑稽とする實世間の功利人が眼を以て見るからである。洒落、作者亦一面そこを覘つて書きもしたからである。自嘲とはいはないが、みづからを省みて、快く笑ふのが、江戸時代戯作者の通有性でもあつた。

三

酒落本作者が、しやれぼんに、艶史また情史の字を當てたことも亦注意すべき事に屬する。「部屋三味線」の附見大意にいふ、

近來清人の著す所の艶史多く渡り妓戸娼門中國に蕃衍し甚到に及を知る、

五　通虚言

地理志

聖門之徒有司馬牛者乗桴浮海東海之東有東武國其北隅有吉原國是接君子國也妓婦稱遊君子國司馬牛相其攸卜其居孫子世世成一都邑義不食康夷之粟賣職而爲業之通稱龍樓故其國到今稱

「花　暦　林　史」

「遊僊窟烟の花」の跋にいふ、

周茂叔小冊を作ともよも斯情史に過じ

洒落本を支那の艶史また情史に擬することは、必ずしもをかしくない。書の性質ほゞ同じく、作者の態度また似てゐるところがあるからである。寛政度に於けるこの二冊の洒落本が、かういふのは、やゝ銜へるに近いが、洒落本の成立の當初に於いては、支那の艶史、また情史の影響は少くなかつた。

賣妓之長曰繾。益取義於司馬之姓也。稱
賣妓之奴曰千。是亦取義於司馬氏之名
也。其妓有太夫格子山茶梅茶。品其
價有三十七。二十六。十五。五三錢之差。山
茶梅茶者野也。太夫格子者文質彬々也。
或為悅已者。切髮入黒子。[illegible]斷髮文身

支林𤭢花　　逢戊皇

「[illegible]」

「花折紙」が擧げてゐる「𨌀雨巴卮言」は享和十三年の板であるが、吉原の細見に、漢文の序を附してゐる。漢文莊重の體で遊里の記

事を書くといふことが、すでに矛盾であるところに、なほ細見と伴ふのである、一見滑稽をの感を起さゞるを得ない。作者が艶史の類を繙いて、そのあとを追はうとする意は、おのづから考へられる。讀者また漢文に熟して、すでに經典の堅いのに飽きが來てゐるもの、殊には、享樂の時風に乘ずるのである。大に悦んでこれを迎へざるを得なかつた。後二年、「史林殘花」が出で、後三年、「兩都妓品」が出たのである。吉原と島原の細見に、「史林殘花」の漢文を合せ刻したのである。ついで、延享四年には、本集に收めた「百花評林」の刊行を見た。まづ洒落本の起原爭ひをしさうなこれ等の書は、江戸と京都に於いて、皆漢文者流の手に成つ

開巻一笑巻之二

明　李卓吾先生編

日本　張鹿鳴野人譯

懼內經　鴛湖散人

佛說怕老婆經、老婆不是世凡人、他是什麼人、他是天上一座星、他是什麼星、他是一箇黑殺星、白虎星、天狗星、天賊星、天羅星、地羅星、不犯之時猶自可、犯了之時嚇殺人、順則和顏悅色、

「開巻一笑」

たのである。

江戸に漢学者澤田東江の作、「異素六帖」の出づるにさきだつて、大坂には、獻笑閣戯笑の「月花餘情」が出で、無名子の「聖遊廓」が出た。これ等共に漢學者流の筆に成る。あざましいのは、寶暦頃の大坂の漢學者の戯作である。彼等は、幾多の怪談物を書いてゐる。いづれも支那の小説の翻案であつた。彼はまた支那の艶史の類を耽讀した。その結果は、張鹿鳴野人をして、支那の洒落本「開巻一笑」を抄し、それに傍訓と釋義を附して翻刻させたのである。彼等はまたこれ等の趣向を學んで、幾多の洒落本を書いたのである。「聖遊廓」のやうな支那人を遊客とする趣向を立てたのも當然である。

「聖遊廓」の趣向は、單に支那人を遊客としたのが珍しいのではなかつた。孔子、老子、釋迦の三聖を拉し

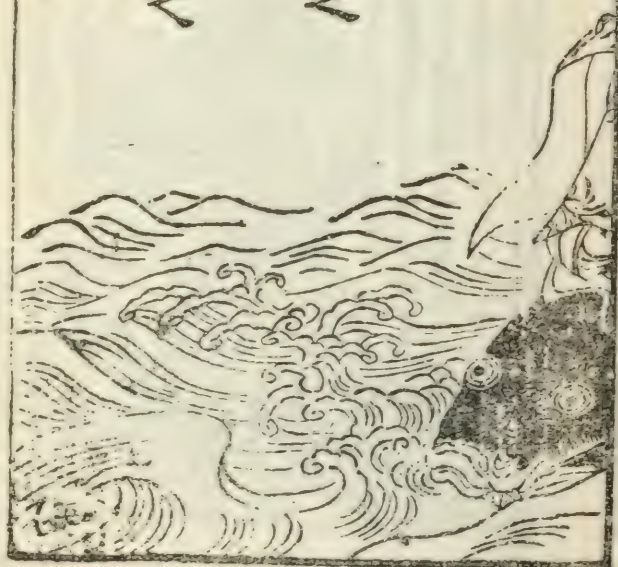
四 [illegible] [illegible] [illegible]」

來つたのが、奇拔の案であつた。世の尊敬しておかざるものを翻弄することは、滑稽感を大にする所以である。大坂の漢學者は、二重三重の意味で、遊里の書を、滑稽本としたのであつた。同じ態度は、江戸の「異素六帖」にも見られた。佛者、儒者、歌學者を揶揄せんとしてゐた。洒落本の性質が、もともとそれであり、漢學者の洒落本運動に參加したのも、そこを焦點としたためである。

よしまた、漢學者でないにしろ、洒落本作者は、いつも經典を利用し、支那の神仙を材料として、しやれを發揮することを忘れなかつた。言葉の多きを厭つて、こゝに「傾城買四十八手」のさし繪を一つの例證とする。

四

慾界之仙都
昇平之樂國

（上 八 丁）

洒落本の洒落が通と滑稽の兩義を擁して、隨分、漢文仕立のものをも棄てないとすると、その起原は、「花折紙」一ノ選みのやうに、「兩巴巵言」を以て擬すべきであらう。會話體のものの起原は、「花月餘情」を以て推すべきであらう。いふところの衣裳つけ、即ち風俗を詳に說明するなどは、「遊子方言」にはじまるといふべきであらう。「遊子方言」は、いふまでもなく洒落本の典型であるが、典型なる理由の一つは、半可通のうぬぼれを發く趣向にある。通は優越性を以て、對者たる遊女を、壓倒せんとする。半可通はたゞ通の假面を附けたに過ぎない。假面は剝がれた。壓倒せんとする勢はどこへやら、さきの優者はあはれむべき劣者と

「客衆肝照子」

なつた。事の變化が讀む者をして哄笑させる。多田爺は、かくして洒落本の洒落の本義を、遊里寫實の態度のうちにも失はなかつた。

後の洒落本作者はこの典型によつて、洒落に含む滑稽の筋を維持したのである。

洒落本は、往々風俗に於いて、また遊びの作法に於いて、讀者を教育しようとするやうな遊びの精神に於いて、しかし教科書風の體裁をとる。それにさへ、何等かの形で滑稽を加味しようとする。あの「部屋三味線」の如きは、更に別風の教訓を寄せてゐる。

夫徽瘡下疳便毒結之病、近世尤盛而貴賤男女罹ㇾ之者、十居ニ其半一、是和華一轍、蓋承平酣歌之都會、人々樂ニ安佚一、內則膏粱厭味、常充ニ口腹一、遂生ニ濕熱瘀血一、外則沈ニ匿柳巷花街一、以動ニ蕩淫火一、一醸ニ成此病一、遂傳ニ之妓妓男娼一、則娼

妓男娼之傳ニ諸之一也、不レ知ニ其幾千百一或傳ニ之妻妾ニ或遺ニ之孫甥ニ而終身爲ニ癈痼之疾一、豈可レ不ニ恐謹一哉、予非ニ醫家ニ是雖レ非レ所レ關、姑記爲ニ世之鑑戒一噫房勞野合者深戒レ之戒レ之。

この教訓は、最も深切を極めてゐる。たゞ通の生活を描ける洒落本に、この言を添へてゐるのは、あまりにいたましい幻滅であつた。しかも、これを漢文で書いたのが、多少の滑稽を將來するものであつた。

しかし、洒落本の上乘なるものは、この種の滑稽を必要としない。むしろ、現實描寫を極度にまで、運んで自然の微笑を求めようとする。いな、時に苦笑をさへ作はせようとする。平賀ぶりの執拗を棄てて、京傳ぶりの輕快でうがちをする。洒落本全盛期の傑作といふのは、大方これであつた。

京傳が大なる自負を以てその序文に、山東京傳二十五歳之曉ニ書とまでしるした天明六年板「客衆肝照子」の如きは、

みづから、遊女また客衆の人物を描き、更にまた風俗、態度及びせりふまでを記して、微に入り細を穿つてゐる。

しかし、この書に於ける京傳のうがちはこゝに止めてゐるが、このうがちの趣向をうけいれて、それに魂膽手管の内容を盛つたのが、振鷺亭の天明九年の作「自惚鏡」であつた。これは、客衆を息子株、幸頭醫者、武左、侠客 色客に分ち、それに一人一人の遊女を配し、その遊女の風俗、態度を圖解してゐる。

京傳は、また、その趣向をうけて、魂膽手管の方から分類して、「傾城買四十八手」を作つた。このやうにして、洒落本は、ある範圍にとゞまるとはいふものゝ、ある程度の心理的解剖にまで入つたのである。洒落本の最も至れるものは、これであつた。

洒落本の通と、浮世草紙との間には、極めて大きい距離が存してゐる、時代の相異である。今はその説明を省くことにするが、洒落本の通は、「まこと」を問題としないで、「あそび」を主眼とする。客と遊女の心理的解剖は、その「あそび」と「金」との微妙の關係を覗ふことであつた。互に手段と魂膽の裏をかから、かからうとする勝負が作者の手腕の見せどころであつた。そこを、露はな趣向としたのが、關東米の「取組手鑑」であつた。關東米は振鷺亭である。こゝに、振鷺亭

「取組手鑑」

に就いて、例を引くことの多いのは、彼また有數の作者で、少くとも、その一二部は、この本集中に收めたい作の持主てあつたからである。

趣向の一々をいふことを煩はしとして、たゞ卷頭の一二圖を掲げる。大體の仕くみを推察するに難くはないと思はれる。

しかし、洒落本の世界でも、「あそび」が「あそび」で終らぬ場合が多い。あそびの心を裏切る「まこと」の迷ひを奈何ともなし得ない。さういふ趣向立は、ずつと前から現はれてゐた。田螺金魚の「傾城買虎之卷」などがそれである。その作風をうけた、「傾城買二筋道」あたりから、「籬の花」などを經て、つひに人情本の世界へ移つて行つたのである。

「取組手鑑」さし繪

五

延享から幕末にまでひき續いた洒落本推移のあとは、おのづから三期に分れてゐる。延享から明和まで、これを第一期とする。安永にはじまる第二期と、第三期を區別するものは、寛政二年に於ける洒落本禁止令である。すなはち、安永から禁止令發布までが第二期、その後が第三期に當る。

尤も、禁止令は洒落本にのみ限つてはゐなかつた。一切の書の風紀に關するものが禁止せられたのである。

寛政二年十月二十七日には、

書物之儀毎々より嚴敷申渡候處、いつとなく猥に相成候、何に不寄行事改候而繪本繪草紙類迄も、風俗の爲に不相成猥ケ間敷事等勿論無用に候云々

と地本問屋行事等に申し渡された。さういふ書物の中で、當然問題になるのが洒落本である。この申渡しの前には、洒落本はもとより影を潜むべきであつた。ところが、その翌三年の春、板元蔦重は京傳の作「仕懸文庫」「絹籭」「錦の裏」を出板した。果然、板元作者は勿論、改方不行屆の理由で行事までが處分を受けた。こゝに、洒落本は全く姿を隱した。古い作にまで絶板の命令が出された位であつた。

それも當然の處置であつたらう。一體洒落本の存在、いな洒落本に描かれる通の生活が、すでに江戸の社會の變態性を語つてゐるのに、安永後の洒落本に、當時の社會道德がゆるさぬほどの變態的興味を縱橫にしはじめた。遊女と客のあそびに對するうがちの細さもさることながら、閨中の描寫がかなりの度はづれとなつたのである。第一期に於いては、いふところの平賀ぶりの一面で、廣く世間の穴を考へてゐた、遊里の穴をうがつのもさうまで深くなく、閨中の祕をうつすのも、あつさりとしてゐた。それが、第二期となると、時代の廢頽氣分と共に、一段の濃度を加へたのである。さすがに、京傳の如きは、さういふところを覗はずとも、他に重要點を保持してゐたが、多くの洒落本作者は、ともすると、それに力を致さうとした。岡場所の存在をゆるさぬほどの當局の嚴令の下にも、たしかに道理はあつた。

しかし、三日法度の江戸時代である。取締の弛むにつれて、またぞろ、洒落本は芽をふき出した。通の生活

なしに生きてゐられない當時の社會人には、どうしても讀まずにゐられない洒落本であつた。たゞ前期との作風の相異はめつきりと目立つた。讀本の影響もうけたことであらうか、筋の變化と、「あそび」を裏切る「まこと」の發露が中心になつた。いはゞ、洒落本の特質である「しやれ」を失つて、人情本らしくなつて來たのである。

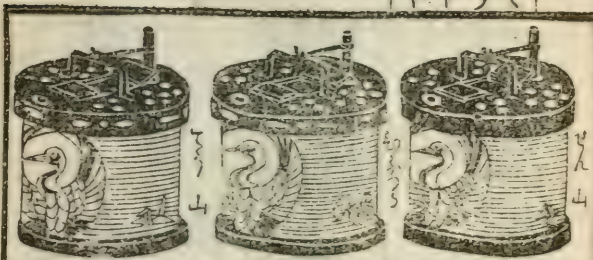
洒落本の歷史からいへば、寛政二年の命令は、極めて重大なる事件であるが、これは外からの力であつた。ところが、同じほどの、或はより以上の重大性を有つ力が内から爆發したことがあつた。天明七年の「田舍芝居」の刊行である。もし、このものゝ力が、更に强かつたなら、洒落本の作風は一變したであらう。一變して、再び風來山人式に、穴の穿ちを遊里以外の世界にまで擴げもしたらう、また虛實を錯綜して戲作の妙こゝにありとしたのであらう。しか

し、京傳はじめ寫實を主張し、遊里の穴に專念する作者は多く、世もまたそれならでは洒落本でないとした折とて、万象亭が師匠風來山人を表にかざしての努力も わづかに、京傳との絶交を贏ち得たに過ぎなかつた。竹塚東子は万象亭の作意に倣つて、「田舍談義」を書いた、しかも、京傳はこれを世に紹介すべく、序跋を書いてゐる。何といふ矛盾であらう。或は知らず、京傳はかくして、万象亭の當時の洒落本に對する反抗を揶揄したのでなかつたか、それほど風來山人の餘威も今はものにならない爲實ばやりであつた。事は第三期に屬するが、あれほど風來山人張りの三馬も、その洒落本でも辛辣ぶりは見せながらも、寫實に沒頭せねばならなかつた。「辰巳婦言」の如きも、後編また三編も、どこか人情本らしい趣向を立てゐるぐらゐであつた。

記」さし繪

さすがに、万象亭の努力も空しくはなかつた。たゞ効果は洒落本の世界に現はれずに、滑稽本の世界に著しかつた。おそらく、彼は豫期せざるものを、滑稽本の道中物との聯絡に於いて見出したのであらう。彼の苦笑を考へざるを得ない。

まさかに、洒落本の洒落を失はない洒落本作者は、寫實に伴ふうがち以外に、また様式の滑稽に考慮を拂ひもした、さうして出來た別格の洒落本は、おのづから第一期のものと性質を異にする。こゝに擧げる二例、「娼妃地理記」「滸都洒美選」の如きは、いかに纖細な趣向に於いて優つてゐるかを示してゐる。しかも、依然として、うがちと契合してゐる。

六

「滸都洒美選」本文

「雨巴屁言」はしばらく措く。洒落本の洒落本らしい發生の先驅は、上方、殊に大坂にあつた。しかし、發達は江戸に俟たなければならなかつた。ともすれば、洒落本とさへいへば、江戸を以て代表しようとする。また事實作の優秀なるものは、こゝにあつた。洒落本の性質として輕快を重しとする。輕快を誇る江戸の作者が洒落本の筆に適してゐるのは當然である。

しかし、通の生活のあるところ、都會享樂の機關のあるところ、遊里のあるところ、自らこれを描寫する寫實の書、洒落本がないことはない。大坂にも、京都にも、よし、優れたものはないにしても、その土地土地の洒落本があつた。それを通して、そこの文化を考へ、地氣を察する好箇の資料であつた。

江戸の遊里は、もとより吉原を覇とする。深川はやゝこれに抗するに足りる。しかも、一時岡場所の盛な時には、その重なるものには、おのおのゝ洒落本があつて、異相の描寫に力を致した。そこに却つて、吉原に得られぬ通もあれば、また不思議な變通もあつたらう。とにかくに、とりどりの面白さが、そこの通書として存在してゐた。

或は、これを吉原、新町、島原と比較したなら、岡場所めくかも知れないが、三百諸侯の城下町、さては港また合の宿に、遊里がある。從つて、土地の通人の筆になる洒落本がある筈である。そのあるものは出板された、あるものは纔に傳寫されて好事の者に讀まれた。これ等は、大方、三都いづれかの作者の影響の下にあつた。なほ、そこの遊里が、三都いづれかの遊里の儀軌を範とすると同樣であらう。地方の洒落本と、三都の洒落本の交渉は、また江戸時代文學一般の考察の上に、少なからぬ問題を提供するかも知れない。地方文學と都會文學の關係を、俳諧などの上にのみ限つて、考察の焦點をおくべきでなからう。山手馬鹿人の

「道中粋語錄」の如き、三馬遺稿の「潮來婦志」の如きは、その點に於いては、少しく價値を減ずる。むしろ、價値は本集に收めた「新潟後の月見」「金鄉春夕榮」の如きものに求むべきであらう。本集わづかに、この二部の地方物を收めたに過ぎないのを憾みとし、またわづかながらに收め得たることを喜ぶものである。

あまりに等閑視されてゐる地方洒落本であつた、おもふに、江戸の洒落本を讀む者は、作のよしあしは別として、大阪、京都のものを合せ讀むべく、更に地方のそれをも合せ讀むべきであらう。元祿の頃の浮世草紙作者が、ある作意を以て、一部の書に收めたそれぞれの特相をば、今の讀者は、ある考慮の絲で繫いで、それ等を讀むべきであらう。片々たる小册子であるだけに、かういふ綜合的讀法をも必要とするやうである。

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸一分
本文枠	ヨコ	二寸七分
	タテ	四寸

百花評林叙

花ノ花トス可キハ。常ノ花ニ非ズ。多情ヲ把テ閬苑ニ喚ビ。芳心斯ニ訴ヘ。一味三弄シテ。花ノ花トス可キハ。常ノ花ニ非ルコトヲ知ル。既ニ之ヲ知ルトキハ。則チ百花春苑ヲ閉ヅルト雖。自ラ其ノ情ニ通ズ。而シテ後探華ノ三昧盡キタリ。百花評林甫メテ就ル。因テ聊カ歳月ヲ記シテ。以テ之ガ叙ヲ爲ル。

丁卯春正月之吉

探花亭主人題

百花評林

此篇擧平康里之諸花以評其風度意氣。古人以美女比花者多。故以百花命題云。

○太夫

松位者爲花木之長。高砂尾上之若緑。契千世万代之春。貫四時至盛之松色。還稻葉山之昔於今。不變不易之風姿。威而不武位而不嚴。諸分意氣不凡下。交謀擧動不野鄙。式部情深而小町張强。實花中之聖者也。傳云万花榮春一紅同。不同處在三冬時。其斯之謂歟。

年さむき松の心もあらはれて花さく色を見する雪かな

○椀久先生評して云。此君を物にたとへていはゞ。富士の山を筑山とし。近江の水海を泉水とし。松嶋象潟の風景を取よせて。庭をかざり。更料の月を不断に詠むる風情ならん

○山崎先生が云。太夫なればとて。あまり結構過たる見立は。かへつていやみ有もの也。たゞかるくはづみたる所に。風雅の味ひあれば。それがしが存ずるは。音羽瀧を液汁にして。吉野の櫻を一輪うかべたる吸物の風情なるべし

○探花子が云。わん久は其姿の。大びらなる所を評し。山ざきは其風情の。ゐならぬ所を見付たるなるべし

○天職

梅位者風流第一花。自冬籠逐難波津之春。濃染色深而匂干袖。色干心染之傳之。以生田之盛則一枝花。鬘飛千百媚。業平暗尋香。頼政開窻而待之。姿與情不劣太夫。宿鶯囀全盛之辰。春譽添此花之清艶也。古人爲百花之兄。誠花中之賢者也。傳云梅無雪則不精神。雪與梅併作十分春。斯之謂歟。

うちつけに身にぞしみぬる梅花にほひは袖に色は心に

○藤伊先生評して云。此君を物にたとへていふ時は。みよし野の花盛に。龍田山の紅葉をこきまぜたるを。衣裳として。姨捨の月に打きせ。道中させて見たる心地なるべきか

○探花子が云。此君は雪の夜のあけぼのを。驗にして。花の春を。盛分にしたる風情ならん

○鹿戀

鹿戀者如櫻花乎。縱三芳野之春如月彌生之盛。八重九重之色深。交常盤松友三春梅。俊成攀白雲採姿。定家凌霞尋色。諸分意地不減天職實花中之達者也。傳云花色

悩人。暗香奪心。其斯之謂歟。
みよしのに入てぞ見つる山櫻うき世の外の花の色をも

○山樂評して云。今は別に鹿戀といふ君はなし。今の小天神。見世天神などいふ君達は。むかしの鹿戀の部ならん。近き比までも大天神につゞきて。小天神と各段の位ありしが。いつの比よりか。大天神といふ位の君さへ見へわたらず。鹿戀といふ古き名斗残れり。又近年。見世太夫といふ君ありしが。是もいつしか名のみとゞまりて。今はなしと聞侍る。扨此君をたとへて見れば。惣金の屏風に。極彩色にて。八景を繪がきし風情ならん。古びても。直打はあるものとぞんじます

○採花子が云。たとへば山里の。柴の庵の奇れいに住なしたる所にて。琴の爪音けたかくほのめくに。心まよひて。其主をゆかしく思ひて。立さりがたき心地の君といはんか

○月

月君者似淺茅生菫菜。淺紫色有艸縁由。赤人誤此花色。結一夜夢於春日野。但恨色香乏耳。
かすが野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにけり

○春夢評して云。此君はうき藻をかきわけて。池水にうつる月を見るがごとし

○採花子が云。龍脳の過たる薫物のごとし。少ししつこき所は。其御位なれば是非なし

○影

影君者如澤邊杜若。濃紫色奪朱。八橋之花盛。業平駐馬。小町寄此花而乞琴。實花中之媚者也。
八はしのむかしの跡のかきつばた同じ心にこひわたるかな

○哥夕評して云。此君は花見に行たる時。思ひもよらぬ人の來りて。酒を飲つくされ。ぜひなく日の内に。花を見すてゝかへる心地の君也

○採花子が云。此君は安南の伽羅ともいはんか。すがりまへに。少し殘りおゝき所あり。是も其御位なればせんかたもなし

○汐

汐君者似井手棣棠。一面金色粧玉川之春。八重花葩含幽香。蔚陰露薫下行水。則蛙愛色香。而吟三月之盛。世人比之光次印通。誠花中之淸艶者也。
もろこしの人に見せばや焼金のこがねの色にさける山ふき

○露情評して云。此君も今の小天神の格式にて。鹿戀の部なれども。むかしより月は一ッ。影は二ッに。みッ汐とい

ひならはし。各段の位をさだめ來るゆへ。本文にも。月影汐の三品をあらはして。それ〳〵の評判をするとはいへども。前にもいふごとく。此君もむかしの鹿戀の位なるべし。扨此君はしだり柳に海棠の花をさかせ。梅が香をふくませたる風情ならん

○探花子が云。無疵のさんごじゆの。心ほど賛のひろき心地かとぞんずる

○分

分君者垣根槿花也。花脆無匂。纔半日之榮不待暮。師兼深怜此花之下紐。固花中之短者也。

とくるかと見る程もなし朝がほの夕かけまたぬ花の下ひも

○吟之評して云。此君は庭にふるあは雪の。むらぎへしたる風情なるべし

○探花子が云。此君をしやくしかけとやらん。けちとやらんいふは。あまり成惡口也。此君も花の中なれば。あしさまにいふべきやうはなし。伽羅の焼がらともいわんか。いにしへはいかなる人やらん。小町がゆかりやらしれぬはさて

○婢娼

引船者似村濃藤花。常纒常盤松。紫緣由色契千尋之春。因松與藤甚睦。古人曾詠此意焉。花中之順者也。

むらさきのゆかりの色にふちの花かゝれる松もむつましきかな

○其風評して云。此君はおし出してのつとめといふにあらず。太夫にはぜひ付もの也。たとへば月に陰あり。花に香のあるがごとし。祝言の夜の嶋臺ともいふべき君ならん

○探花子が云。うつくしき下女に。櫻の折枝をかたげさせ。旦那の供につれたる風情也。外の目に。どふやらこのもしく見ゆる心地なり

○鴨母

遣手者似殘菊。雖有餘波色而三冬霜枯。姿荒嚴寒雪風色埋。又不免鬼薊之譏也。

色かはる秋もすへのゝ霜枯にうつろひ殘るしら菊の花

○千風評して云。此人は色のさめたる。むらさき縮緬のどし。むかしの色ぞ忍ばるゝ

○探花子が云。年久しくなる挽茶のごとし。色も香もどこへやら

○香兒

禿者其品頗多矣。有松若緣。有梅櫻蕾。開上頭而後定其位也。今常言之則類倭瞿麥歟。二葉藏金錢之色。寖及生長而八入錦誰

叢之。依三五之春云。

まきしには同したねぞと見しか共ちくさに咲る大和なでしこ

○三鳥評して云。たとへば巣だちのうぐひすの。梅の花をおもしろがり。枝にたはむれあそぶ風情ならん。可愛らしきものなり

○探花子が云。香敷にのせて出す伽羅のごとし。焼ざる内がいのちノ\。むかしより玉子にたとへ。花のつぼみに見立るは古ければ。今あらためて評する事右のごとし

○素人　一名呂州

白人者在南嶋及北濱之新地。共花桐壺牡丹也。不唯花之富貴。一段風流姿。兮太夫之妖態。一等之艶色。驕天職之妖治。益清蘭美。四方之雜花無敵之者。古人賞之爲花王。識不虛矣。傳云一枝白牡丹。費四五日刻。人不敢知之。共斯之調氣。

さきしより散りはつるまで見しほどに花のもとにて廿日へにけり

○南風評して云。此君を物にたとへて見る時は。三井富山の土用干を見る心地ならん。至極見事なる中に。ぽつとりめきてじみなる模様もまじわり。端手なる中に。くすみたる色もあり。品めきたる所に。地道なる氣色もあり。郭の君達と。地女をつき交にしたる也

○探花子が云。上々の白米のごとし。上つかたも召あげられ。地下人も食す。上下おしなべて賞翫するものゆへ。白米にたとへたり。なんといづれもそうでは有まいか

○厨娘

中居者如八染紅葉。平日之紅味。秋深染盡。龍田姫風容。一段洒分。無花不見開落。但三秋之栄也耳。

わかす見る心にわくる色はなし枝の紅葉のこきもうすきも

○秋思評して云。日ぐれに菅笠かたむけて。足ばやに通る女中のごとし。色あひさだかならねども。心にくき風情といわんか

○探花子が云。虎屋の焼まんぢうのごとし。見かけからどふやらこのもしく。喰て見れば。根が地女なれば。各別のうまみありと。つまみ喰したる人の評判なり

○歌兒

藁子者百花之生茅也。不競色。不爭香。故曰無色者。夫有色者。不在此限。

いろノ\に薄くもこくもおき渡る花とつゆとの中ぞゆかしき

○春夕評して云。雨あがりの虹のごとし。色は見へながら。其色が手にとられず。

菓子になづむ人の心を。くみ分て見れば。大かたかくもあらんかとぞんじます

○探花子が云。金五を引がごとし。十二三までが花なり。十五を過れば。ばれ氣が見へるものと。ある人の見たて置れしなり

○坂　町

其町花者似芙蓉。清則清艶不衰。牡丹之艶色。而此花求之。因古人爲小牡丹花中之譲者也

朝なけに染る心もふかみ草うへしかひある花の色哉

○寄情評して云。此君は川むかひの花をながむる風情なり。わたし舟はない事か

○探花子が云。難内の絵図に。茶[illegible]子の裏付たる心地す。少し斗くすみて見ゆ

○堀　江

堀江花者男山女良花也。其花如[illegible]。[illegible]名雖落聘。行如踊人之口号。頼風妻之縁由哉。花中之翳者也。

をみなへし多かるのべに宿りせばあやなくあたの名をや立なん

○芝山評して云。此君は香の淺き。にほひ袋のごとし。しめやかならざる薫何ほどか殘多し。

○探花子が云。蔵さきの干物か。少しうつとしくぞんずる

○難波新地　高津新地

二遮之花共似富墳野花。雖有富貴色。而帰愛之者少。因花中之[illegible]者也。

人はこぬ草葉のとこのつゆの上にかたしくねたる我か花のまゝ

○花吟評して云。此君達は打つゞく五月雨の心地ならん。しつぽり過てさびしき風情あり

○探花子が云。平にも煮にも味噌をつかひし。こつてり料理を喰がごとし

○街　子

街子花者如谷陰蘭。雖有採花之人逐色。問花中之不嫌者也。

つま木にはもれしつゝしも山陰に心と花のたくほかけかな

○探花子が云。いたづら後家の。ひぢりめんの内衣したるがごとし。ほのめかして見せとふもあり。又人にしられんもいかゞと。つゝましく思ふ所もある風情ならんか

○私料子

遊女者似[illegible]。[illegible]行得[illegible]。[illegible]作。[illegible]者也。

よるべなき身はうき草の根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

○探花子評して云。夏の火燵といふべし。何とやらあつかましく見へます

○比丘尼

比丘尼者枯野之小花賤綠花鬟空散而不見下草之餘殘無春色者也。

霜をきて色なきのべのむら／＼に見ゆるや殘るお花なるらん

○探花子評して云。頭は出家にて。姿は遊女。手足はむかでのごとくにて。なく聲ぬれに似たりける

○辻君

總嫁者暗夜落花也。色消姿亡失春氣。不足賞美者也。落花浪藉者斯之謂乎。

やみの夜のすがたあやなしちる花の色もなければ香までかくるゝ

○楽水評して云。此君はうぐろもちのごとし。日の光をおがむ事はなりませぬ

○及之が云。此君の中にも近年は。ひらひ子といふもの出來て。牛なしに自身二役せらるゝと也。夏の蚊といわんか。日ぐれからさは／＼出て。餅つきに行るゝはさて

○探花子が云。竹田の木戸口のごとし。十文づゝじや。どなたでもござれ／＼

百花評林終

表紙　ヨコ　三寸六分
　　　タテ　五寸一分

本文枠　ヨコ　三寸
　　　　タテ　四寸二分

序

天窒し地臺る所。物一等といへども。又物の等しからざる遊彊とて。婦の市あり。此地を踏ば粋と成。是まつたく地理の所爲所以の法也。纔を隔て江南の樹を江北に移せば。乍その轉變すると。宛も御月さまと泥鼈と準ふに等し。されは此書を覽に孔老釋の三聖彼

遊彊に遊ひ。日轉し夜に叫ひて欠をしらず。二人枕のねはんより黄泉の道行。果は漢土の言語に腹を抱へし。窪に靈鷲山一代の説經にも則妙法と說き。法とは則チ乗るの訓。声妙の字は女の傍に少の字を从ひ。女に少し乗の心を示し。後世此道をしらされは。人粋なく愛なく。土

氣に成ル則ば自五常を失ふ事を考へ。三聖一致に家ゝの期果に。尺氏は三界猶如火宅の斷に。假の世太夫に涎し。孔子は明德の大道太夫に信鼻毛し。諸分手管に入の門也の謀計奇哉々。里仁爲美。擇不處仁焉得知とあれは。早孃妃ある遊彊の里を

擇(えら)んで。諸分手管(てくだ)を學ひ明らめたまへかし。これ時寶曆丑水無月娘に宿る五日。燈下に俛焉して是が端し書して。諸君に訴るものならん。

揚屋亭主 李白　女房 瀧

孔子大盡　合方 大道太夫

釋迦大盡　合方 假世太夫

客 五柳先生陶淵明　合方女郎 菊

周茂叔　女郎 蓮

韓退子　影子 孟東野

客 日連

同 阿難

たいこもち 鉄拐仙人

書置の事

尺八 かりの世 道行

くるは唐韻

中居 なつもん

老子大盡　合方 大空太夫

右之外客名寄セ

費長房　合方女郎 鶴

東波　合方舞臺子 李節推

客 文殊

同 賓頭盧

たいこもち 白樂天

其外略之

同 辭世

風流酒花

目錄終

聖遊廓

緡蠻たる黄鳥丘隅に止ル。とゞまるところに止まらざれば。鳥にだもしかし。といふ四角な文字の廉取て。鳥は木に住ム。魚は水にすむ。人は情の下にすむと。臼つき歌にうたはすは。これも和國の道ならめ。郭の哥は客の浮氣をたねとして。万のはうたとぞなれり。長歌。短哥。せんどう。馬かた。たけき悪者の心をやわらぐるも。ゆかりのつきの一ふしぞかし。さればこそ。銀猫は抛ども。江口の君のなげぶしには。腰をぬかせした。しゝあり。爰に聖人のかよひたまへる郭あり。揚屋の亭主は。李白とかや。中にも孔子はくるわにて。すいといはれて端手ならず。ゑちご縮のかたびらに。もんろの羽織すそながく。深あみかさにあわざうり。古金買の目利にも。太夫かいとは見へざりし。李白がかたへ御入りあれは。

▲亭主李白　是は仁さま。おめつらしい。サア〳〵奥へ。ともてはやす。▲孔子　ナント李ス。此中は久しいの。無事て珍重〳〵。と座敷へ行。▲李白女房瀧　是はおめつらしいおかほ。おうはさばつかり申ておりました。▲中居なつ　もし仁さま。此中横堀でお見うけ申ましたゆへ。大かたお寄なさるであろふとぞんじましたに。よふまたせなさつたの。▲孔子　ヲ、よりたかつたけれども。行時に徑によらず。そちをちらりと見たゆへ。太夫にことづてしたかつたけれと。十目所視十手所指。其時馬喰町の方へ人かはしつたが。何事じやとおもふたれども。君子は危にちかすかずと。すぐにもどつたが。なんであつたや。▲仲居なつ　そのときは馬やが。ちとやけましたげな。▲孔子曰　人は怪我はせなんだか。といふて馬をとはず。▲中居　イエ〳〵けがはござりませなんだ。▲孔子　ヲ、それは可也〳〵。久しうこぬうち。ざしきがきれいになつた。富は屋を潤ん。どふでも李白。出來たの〳〵。▲亭主李白　おまへさまがたの御贔屓ゆへ。だん〳〵仕合つかまつりましてよろこびます。▲孔子　ヲ、よいことじや。シタガ瀧。親父にすいぶん酒をとめたがよひぞや。酒ははかりなけれども。乱に及さず。すぎぬやうにしたがよい。▲李白　イヤモ朝からばんまで。さけのたゆるまがござりませぬ。▲孔子　イヤサ座敷はつとめにやならねども。終日百盃すれど

も三盃に過キずで。心でひかへるがよいぞや。▲亭主　どふでなる口でござりますれば。一盃〳〵又一盃。とふでも過ます。▲孔子　イヤそれが座しきばかりではない。內證でもたきが顔を見てはのみ。瀧を見てはのむゆへ。瀧見の李白といふて。よふ繪に書ぞや。▲ていしゆ　ハテわるじやれなと笑ひのさいちう。うら口から。ひろそでのゆかたに丸ぐけの帶。じたらくに前にはさんでくるを見れば。老子なり。▲瀧是は老子さま。うら口からおこしはめづらしい。仁さまもお待なされてゞござります。▲老子　ヤアおやぢはさきへ來たか。といふを聞て。▲孔子　玄子。これへ〳〵。なんとしてうら口から御いでぞ。▲老子　イヤ藏の間の切戶があいてあつたゆへ。是はさいわいの道があると。裏から仕かけたれば。こゝの久助めが。くらがりから牛の出たやうな。とおれをうしにしをつた。人我を牛といふ時は。我にうしの性ある事を知ると。腹をたてぬそ一德なり。かゝる所へ。釋迦はかりの世といふ太夫と相合駕籠にて。だいどころまでかきこませ。▲李白見るより。コレハ　釋迦大盡の御來迎。太夫さまとのあいごし。コリヤムマイありがたい。まづ〳〵是へ。とかごのたれあぐれば。しやかは紋紗のかたびら袷にりんぼうの紋所。金襴の帶に異香くゆらせ立出給ひ。ナント李白まめなの▲主　アイおまへさまにもおかはりなく。いつとても御二人つれ。比翼の中。とそやすれば。▲尺迦　ハチ何をいやるぞひの。今此やうにつれ立ても。會者常離臨命終時不隨者ぞいの。▲太夫かりの世　あれ李白さん。聞て下んせ。あのやうに無常な事ばつかり。いふてゞござんすわいな。▲亭主　ハテわけもない。仁さまも。玄さまもおまちかね。サア〳〵おくへ。ともなひゆく。▲孔子老子一時に。尺迦す。是へ。とあいさつあれば。▲尺迦　コレハ御兩所。おまちかね。瀧　ナント久しひの。▲たき　ホンニけふは　マアおそろひなされて。よふおこし遊ばしました。孔子さま。大道さまをかりましにあげました。老子さま。大空さまを見せましに人遣はしました。といふ內に。▲大みち太夫來る。尺迦す。老子す。御出遊はしませ。孔子す。けふはよふ御越なされた。李白瀧へも。それ〳〵のあいさつは。さすが孔子のあひかたとは。かたくろしいでしられけり。かゝる所へ。大空は座敷へ來り。何のあいさつもなく。老子す。けふはこち風が吹たそふな。といへば。▲老子　けふは少し南風がふきつけた。▲太夫　ホンニどふでそんな事でござんしよ。おまへの所に。さかつきがあるそふな。

ちとまはしなんせんか。▲老子　イヤけふもまはしはせずにきた。▲太夫　エヽわるざれな人さんじや。と諂もなきあいさつは。老子の好ふうならん。▲主李白は。鯉のさしみを。　そう〳〵けふはあなた方のおいりとうけ給り。琴高が方から鯉をさし上たいと申て。私か方へ持せてこしました。と小皿に入て前におく。　是は琴高が志過分〳〵。としやうくわんあれば。▲主李白　折ふし此方に酢をきらしましたゆへ。となりへ貰いにやりましたが。酢がきゝますればよふござりますが。▲孔子やはり鯉はこくせうがよいに。此酢はきぶひ酢じや。▲しやかは。コレハ甘たるい。▲老子はにがいかほして居たまへば。▲李白は氣のどくがり。是はふかげんにござりますか。▲孔子曰　イヤ〳〵酢はすいが酢のあじしや。釋迦のあまいといわるゝは方便也。苦イトあるは老子のすねなり。心こゝにあらざれば。喰へどもその味をしらず。酢はすいにきはまつたものじや。くるはですいもあまいも知つたもろをつすいといふは。此時よりぞはじまりけり。▲老子　けふは荘子が來るはづじやが。ナセおそひぞ。▲大道　荘子さんはおまへのおつれかゑ。ホンニお氣質がよふ似なさつた。なんじややら。ゆめに蝶になつてくるわへ來たとやら。よふ寓言らしい事をいふおかたでござんす。▲仲居文出て。勝手へ白樂天どのか來ていられますが。酒のお相手にざしきへおよびなされぬか。といへば。是はさいわい。樂天が國太夫ふし久しうきかぬ。これい〳〵。といふよりも。白樂ざしきへ出。何もさま久しうおめにかゝりませぬ。御きけんよふござります。▲皆々　久しう見へなんだが。どふじや。▲樂天　さればでござります。私も一生のおもひでに。嶋原へいてのんで見たいとぞんじまして。此中夜舟で牧方あたりまでてかけましたれば。なにが夜のほの〳〵明に。八幡山に雲のかゝりし氣色。そのおもしろさ。白雲帯に似て山の腰をめぐると口ずさんで。一盃のみかけましたれば。いづくともなく。白髪老人壹人小舟に乘て。わたくしが舟を目がけこぎ付。牛蒡くらへ。酒くらはぬかと申ましたが。中々叶ふものではござりませぬ。伏見までいかぬうちに。けん酒にまけて。道から逃て歸りました。共酒にあてられて。此中にはねておりました。▲太夫大道　そんならばむかい酒に一ッよかろ。とさす。▲樂天　おさかづきはいたゞきますが。御酒は今のじやおゆるし〳〵。したが此間めづらしいはなしを。乘合で聞てまいりました。費長房は御そんじでござりますか。といへば。▲客　それは鶴とねんごろしていた費長房か。といへば。ナルホド

その鶴を連て。かけおちせられましたが。京のすゞみて長崎壺わりといふ菓子を仕出し。唐人姿で。ほり〳〵齒もろふてあまいと。京中うられましたげにござります。▲仲居文　そふであろふとおもふたてや。どの繪本を見ても鶴に乘て飛あるいて。たいていいやらしいお方ではなかつた▲孔子ノ曰。幾ばくの人。爰におゐて平生を誤と。朱子が胡丹安をしかりしも無理でない。周茂叔は蓮をうけ出したといふか。ほんかや。▲樂天　イエ〳〵茂叔さまは蓮を愛してはござれとも。遠く見るべし。馴翫ぶべからずとやらいふてござつて。中〻手いけにして見る御心はないそふにござります。柳子は御ぞんじなさつてござるか。といへば。▲孔子曰　柳とは陶淵明が事か。▲樂天　アイ五柳さまの事でござります。あなたは菊にきつい打こみで。此中も絃もない琴を彈眞似して。さわいでござりました。

▲太夫大そら　樂天す。此中身なげ心中が有たといふが。じやうかへ。▲樂天　イエ〳〵心中ではござりませぬ。美生といふ男が。近所の娘と溉流ノ橋にて出合約束いたしまして。橋のうへで待てゐました所に。なにが此中の大白雨で。にわか水が出て來たに。爰をさつては心中が立ぬといふて。やつぱり橋のうへにいたげにござります。其うちに上のつゝみが切れて。水が一時にすさましふ出て。はしが落てながれてしんだげにござります。それを娘が聞て。そのやうなおろかな男なら。あはひで。よかつたといふていますげな。

▲太夫大道　義によつて命をはたすは。人たるものゝ道なり。美生もやくそくを變せずして。義のためにいのちをうしなひしは。かわひらしい心じやナア。▲太夫かりの世　ソウトモそれはみな前世からの。やくそく事。過去ノ業因でござんす。ノウ大そらす。▲大空　ナンノイナア。その美生とやらが。せまいさゝの葉のよな心から。その女子壹人におもひつめるといふかちがひ。其ばんにやくそくがちがふて。いやといふなら。廣いせかいに。たくさんな女子。どれなりと合點する女を。女房にしたがよいわいな。（三人の評判は。孔子。老子。尺迦。三聖の氣うつりとしられけり）

▲樂天　其美生が河流を風流求女塚といふ狂言に。女伊達を取組。明日から角の芝居ていたします。▲くろ舟には誰かなるぞ。▲忠右衛門ニは。竹林の阮藉でござるげな。阮藉が青ィ眼。海老藏が目よりすさましいと申す評判。蝦蟆仙人の非人かたき打。きついあたりでござります。東婆さまは李節推といふ若衆方にきつい打込で。花みちから李節推が馬ニ乘て出られましたれば。

馬に乗少人勝美なりといふ譽とば
は。東坡さまでござつたげな。馬をつ
ないで。岸に花落るを知るといふ詩を。
其時つくりて遣はされしとて。それを
やはらげて。駒がいさめは花がちると
いふ小哥が。只今大分はやります。韓
退子様は孟東野といふ影子にきつい打
込で。韓雲孟龍のちかひといふ事があ
ると申て。御名が立ます。▲釋迦聞た
まひ。漢の裏帝が御衣のたもとを斷し
も。男色の心中なり。此道はふかいも
のそふな老子すこそ。うらみちを好れ
そうなものじや。と笑ひになりぬ。▲
太夫大空　コレ樂天す。南にめつらしい
大こ衆が出るといふが。付合なんした
か。といへは。▲樂天　申。それは誰が
事じやな。▲大空　イエ名はきかぬが。
口からいろ〳〵のかげ繪をふき出すげ
な。▲樂天　エ、それは鉄拐が事でござ
りましよ。といへば▲瀧聞て。　是。な

るほどそれは。此中此方のお客が手ま
へゑ。つれて見へてゞござりました。其
時花の高尾と傳七とを。吹てゝござり
ました。それは〳〵おもしろい事いな。
▲大空は。　なんとそれは。しやほんで
したら。なりそふなものではないかい
な。▲釋迦はかぶりふり。　中〳〵その
やうな事ではない。此方の善導大師が
三尊を吹た時。きつふむつかしい事じ
やなかつた。紙を玉子にしたり。はな
へ釘を入たりするが。合点のゆかぬも
のじや。とはなしがしめば。老子は大
欠。▲瀧は氣をつけ。　是は老子さま。
お氣がつきたそふな。あちらに床もと
らして置ました。大空さん。つれまし
ておいでなされませ。▲大空　イャさつ
きにから。こちらで日がらの事をいへ
ば。あのやうにあくびして。まぎらか
してござんすわいな。▲瀧　日がらの
事は。あちらでしつほりとおやくそく

あそばせ。と二人リを奥へすゝめやれ
ば。▲樂天は氣をきかし。　わたくしも
勝手に用がござります。皆さま。のちほ
どお目にかゝりましよ。とかつてのか
たへ立てゆく。▲亭主李白　此おさか
づき。まづわたくしがあづかりましよ。
ととさん持そへ入ル。▲瀧はざしきを
取つくろい。　かりの世さま。尺迦さま
をちとおくへつれましておこしあそば
せ。▲孔子曰　コレ釋迦す。ねはんに入
て。寂滅已樂たのしみ給へ。△しやか
コレ大みちゝ。又おやぢが男女席を同じ
うせずなとゝいふて。ひぞりかけたら。
つめつておかしやれと。惡口いふて。
次のざしきへ入ル。跡には孔子と大道
さしむかい。　なんじやいな。かだくろ
しい。その羽織もぬぎなんせんか。ち
とおやすみなされぬか。△孔子ねるに
そばたゝず。ドレ〳〵其まくらおこし給
へ。と東枕にね給ふ。△大道　おまへ

はこちらまくらになんすかへ。孔子も東首したまふ。禿よ。予が手をさすれ足をさすれよ。△太夫　さすれなりやわしがさする。コレおまへに見せるものがある。コレ見さんせ。わたしか心底は此通りでござんす。と肩をぬげば。孔子命といふ入ぼくろ。△孔子　ハテわけもない。身躰髪膚父母に受たり。損ひ破ざるをば孝のはじめといふに。いかに弁しらぬとて。やくたいもない事をしやる。△太夫　なんぼふ孝になつても。おまへゆへなら大事ない。△孔子　イヤ孝弟忠信。其道わきまへざるは人にあらず。と口說のさいちうに。△瀧あはたゞしくはしり出。申。尺加さまのねやより。御手のなるやうにぞんしましたゆへ。さんじたれば。尺迦さまもかゝりのよさまも見へませぬ。御二人のまくらもとに。こんなものが。と斗といき。△孔子驚き。トレ。△亭主李白。びつくりしてとんで出る。▲老子越中褌ひきずりて出る。▲みな／＼。何事。と書いたものくりかへし／＼見る。ナンシヤ是は九重のまもり見るやうな文字ばかり。どふもよめん。いかゞせん。と互に顔を見合。氣をもみあせる。かゝる所へ。△ちやんのはのよな白ィ氣を持ちやんな。黑ィばいたらばの氣を持ちやれ。トンチリチンテンチヤンホラホ。すいつく。とりつく。すつてん／＼。いしふし。ゑんれん。きりふくりん。とんな。チリンテトン。しやん／＼よい／＼のよい。おどりさわいで。△阿難文珠△目連賓頭盧つれたち來る。　どふじや／＼。李白はうちにか。北のかたはどこにぞ。今夜もぞめきに出たが。道からしゆこうが付た。とどや／＼とわめき立る。△李白たき　是は／＼よい所へ來てくれなんした。しゆこう所じや御ざりませぬ。▲尺迦さんがかゝりの世さんつれまして。欠落なんした。大ていのことではござりません。皆ちやつと奥へ來ておくれ。▲四人のらかん　これはすさましい。と驚き。ざしきへゆく。▲瀧　先此かきをき讀んで見ておくれなされませ。とあなんにわたす。

▲あなんよむ。

カキヲキ
ウレシカラヌミライトテ
モナガヲヘリイモナラベ。
ママナラヌ。アカヌシヤバ
ナレドケフヲカギリノイ
ノチリトデモヒナチラメ。
シスレモクゴノメビコロ
ヲ。ココロサクママ
ナマナカニ。ナレマジヒ
トニナレリメテナバロ
リノコス。フミヅキノリ

ラ
イツマデモ。リヒカフベ
キトラモヒシニ。ラセヒ
シカヒモ。ンデノヤマナ
ニ

南無三寶。欠落所でない。死ヌるかくごののこし文二人の辭世。サア大事〳〵。といへば。▲老子はあせ手ぬぐひで。頭からげる。▲ていしゆうろたへ。是はマアなんとせう。▲孔子　なんと所か。サア〳〵文殊とうぞ。是にはよきちゑはないか。文珠〳〵。是はしたり。文珠か見へぬ。もんじゆ〳〵。イヤ是に居ります。そふあらふとおもふて尺迦子の寐間を見に行しが。まだふとんのぬくさ。片時もはやく手配してをつ手〳〵。たづぬるより外に分別なし。といひつゝ。コレ李白。▲李白　ヘイなん

でござります。▲もんじゆそのせに十貳文持ておじや。▲李白　かしこまりました。ソノなつよ。小遣せにもつてこい。▲なつ。小遣せに持て來る。▲李白とつて十二文よむ。其間に。▲文珠　ふところよりはなかみ壹枚とり出し。十貳文のせに包み。これ目連。貴様は神通の名人なり。こんな時の重寶。いそぎ清明の師匠の白道のかたへ行。方角の八卦たのんできたまへ。とわたせは。▲もくれんせに受取て飛ふがごとくにはしり行ク。〔座中みな〳〵よこ手をうつて。

さてもぬからぬ〳〵。さすがもんじゆの分別。とてん手に追手の。用意のてうちんこしらへするやら。わらんづのひもすげる内。▲瀧がさいかく。賓頭盧の兩足のふし〳〵。こむらおさゆるやら。うへを下へともてかへす。

道行妹背の迯り火

されば にや。釋尊はかりのちぎりもかりの世と。ふかきいもせの中となり。くるわをぬけて只ふたり。越路のそらを跡に見て。十万億へと心ざす。道はどこやらあとさきも。涙の雨のはれまなく。ぬれてかわかぬ沖の石。つれ彈にしたその時に。わたしがばちをもちそへて。いとしひぞやといわしやんした。その一トこがえんのはし。愛別離苦の世のならひ。おふはわかれと口くせに。あじきないことといはしやんす。それでわたしがこのつかへ。天上天下唯一人。おまへならでとおもひつめ。此世はおろか後の世も。かわるまいぞと六道の。ちまたにまよふ戀のやみ。ころしもけふは文月の。中の六日はなき魂を。しやばへむかへておくり火の。おくれさきだつ死出の道。往來の人のしげければ。くさ葉のかげに身をひそめ。立たずみたまふぞいたはしき。かりのよなみだにくれなから。かならずつま子の有人と。すへのやくそくせぬものと。我身のうへに聞くつらさ。やしゆたらさんのさそやさぞ。わたしをうらみてござんしよと。たもとにすがりなきければ。ア、おろかの人のくりこや。色卽是空ときくときは。自他平等にへだてなく。共に一蓮托生ぞや。アレ〳〵アレ あれを見や。ぐせいの舟の乘合に。おもひなき身の女夫づれ。二世のちぎりのうらやまし。一むらそびへし深山こそ。つたへ聞つる劍の山。地ごくの里はあれかとよ。經かたびらのなが袖も。偏袒右肩此まゝに。是ぞ卽身成佛の法のちかひのたのもしく。夫婦は二世のちぎりぞと。手に手を取てゆく程に。三津の川の舟よばひ。女渡得船のさをさして。彼岸にこそ着たまふ。

白樂天船中之拳

壹ヲつうャといふ　二ヲかくャといふ
三ヲたつャといふ　四ヲますャといふ
五ヲてんャといふ　六ヲすいャといふ
七ヲしんャといふ　八ヲはいャといふ
九ヲもうことといふ　十ヲかんなといふ

三聖廓中之戯言

廓そうじて遊所の事をなんくわんといふ

女郎を　にいくんと云　若衆を　れんつう
娘を　にいつう　女を　にいしん
尼を　にいするん　亭主を　じうてい
仲居を　にいとう　引舟を　にいはん
火車を　にいくはん　禿を　ぢよてい
客を　きや　大じんを　くうてき
すいを　そうちん　色を　きん
ぶすいを　ほうちん　うそを　へんな
つとめを　すいこ　ほれたを　ていら
交台（あいこと）を　すてき　のいたを　はん
寐（ねる）を　すん　おきるを　とう
銀子を　ばんづう　金子を　らんつう
たばこを　ちやうこ　きせるを　すとん
酒を　ちう　肴を　こん
吸物を　しゆせん　盃を　ちうはん
青を　せた　黄を　ぬく
赤を　めんる　白を　ほう
黒を　こう　歌を　かん
三味線を　てんきん　琴を　りきん
こきうを　ちよきん　尺八を　げん

うつくしいを　ほう　好（すいた）を　れん
わるいを　しう　すかんを　けまな
盃さしたを　めんとん　間（あい）を　ちよん
おさへを　りやん　助（すけ）るを　ごうてん
此外委は記しがたし有増をとゞむ

寶暦七年　丑六月吉日

大阪高麗橋筋四軒町

書肆　堺屋市右衛門梓

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	二寸七分
	タテ	三寸九分

月花餘情序

其殘先生ノ曰ク。蓋シ聞ク天ハ日月ヲ以テ枕トシ。地ハ四海ヲ以テ褌トス。四結ハ解ケ易ク。神關ハ深ク閉チタリ。孔子詩ヲ刪ルヤ。關雎之ガ首タリ。宜ナル哉。君子ヤ。小人ヤ。何ゾ斯ノ道ニ由ルコト莫ラン。由ル則ハ耽ル。耽ル則ハ恍惚トナル。余曾テ江南妓邑ノ俗ヲ見ル

月花餘情序

其殘先生曰。蓋聞天以日月爲枕。地以四海爲褌。四結易解。神關深閉。孔子刪詩也。關雎爲之首。宜哉。君子也。小人也。何莫由斯道也。由則耽。耽則爲恍惚。余曾見江南妓邑之俗。大低有鄭衛之遺

ニ。大低鄭衛ノ遺風有リ。此ニ由ツテ知ル其ノ笑止。辛氣。肝積ハ。則チ亡國ノ音。我飲。拳酒。無息ハ。則チ内損ノ基。有色ノ君子。豈夫レ愼マザランヤ。採色子傍ニ在ツテ曰ク。是其殘樣何爲謂乎。夫レ色ノ色トスベキハ常ノ色ニ非ズ。若シ其ノ色ノ色トスベキコトヲ知ラント欲スル者ハ

風。由レ此知眞笑止。辛氣。肝積。則亡國之音。我飲。拳酒。無息。則内損之基。有色君子。豈夫不レ愼乎。採色子在傍曰。是其殘樣何爲謂乎。夫色可レ色非常色。若欲レ知其色可レ色者非常遊妓邑劇場之間。則何能知彼其色可レ色乎哉。月花餘情成

常ニ妓邑劇場ノ間ニ遊ブニ非ズンバ。則チ何ゾ能ク彼ノ其ノ色ノ色トスベキコトヲ知ランヤ。月花餘情成ンヌ。因ツテ其ノ端ニ題スト云フ。
是其殘樣何爲謂乎ハ釣り行燈曲中ニ見ユ
獻笑閣主人題

因題其端云。是其殘樣何爲謂乎八。見釣行燈曲中。

獻笑閣主人題

月花餘情序

月花餘情序

此ノ書。何人ノ作ヲ知ラズ。初ニ妓邑ノ記有リ。之ニ次グニ燕喜ヲ以テス。燕喜ハ即チ詩ノ閟宮ノ語也。終ニ祕戲ノ篇有リ。祕戲ハ即チ帷幄ノ叓也。於菟饅頭ノ甘キ。多良須計ノ苦キ。各其ノ味有リ。味中ノ味ニ非ズ。人口ニ膾炙スル者。豈此ノ書ニ非ズヤ。

月花餘情

此書。不知何人之作。初有妓邑之記。次之以燕喜。燕喜即詩閟宮之語也。終有祕戲篇。祕戲即帷幄之叓也。於菟饅頭之甘。多良須計之苦。各有其味。非味中味。而膾炙人口者。豈非此書耶。

江南妓邑記

浪華江南有妓邑。故嶹陽之地。今屬島内。其地也帶二江之雙流。一長堀。一道頓堀。望高津之本社。劇場前張。櫓高懸。木戸常喧。幟大連。有歌舞妓。有操。有唐繰。有見世物。終于此。初于彼。徘徊于其間者。則男女老少坊主神主。目迯者。顧眄者。呼者。應者。趨者。蹶者。見招牌者。運弁當者。衆口囂々。有喧嘩。有千話。絡繹不絶。凡人之往來千百人。而莫有同者焉。其間有妓。通稱白人。於妓之中。又有新造者。年增者。皓齒者。若詰者。異体而同致。有御所出者。有屋敷出者。後家出非愧。見兩夫。尼出何得持五戒。帽子。被菅笠。則適其宜。至衣帶之美。與頭上之飾。不遑勝論。匿衣服風呂敷。曰包子。從妓奴輩曰廻漢。迯迎必乘駕

籠一妓。凡畜レ妓家。曰二置屋一。妓在二置屋一不レ侍レ客。々來二酒樓一。則使下レ人至二置屋一招上レ妓。凡買レ妓。一一日一一夜曰レ揚。如レ吝客。九二分晝夜一。買二其一或二三一。炷二線香一占レ刻。謂二之坐切一。妓來曰レ送。歸曰レ迎。如二馴染而逢者一。不レ俟レ駕行矣。有下稱二藝子一者上。彈二三一味一線。而佐レ酒。年紀略限二于二一八前後一。絕不レ薦二寢席一。因又稱二無色一。取二于情竇未レ開之義一。然而今稱二無色一者。則無色。而大色也。酒樓邦俗稱二茶屋一之婢。稱二中居一。於二其選一也。不レ論二美與一レ醜。專貴二妖態一。凌二于世。重二于客一。赭兮麻前垂輕翻。緇兮繻子帶高結。袖レ手振レ腰甚二於轎夫一。向二斜日一則反レ掌障レ影。醉二生于小歌曲一。夢二死于淨瑠璃一。唯酒無レ量不レ及レ乱。劇場則不レ欠二初日一。而定二評判一。如二時花曲一因循藉レ口。中居未レ染レ齒者。稱二小女郎一。雖二夙儆一レ鬉。首筋之產毛未レ除。爪垢猶黑。至二其染一レ齒。則婉妖異レ常。詩曰。螟蛉

有子。螺贏負之。其斯之謂乎。紋日則不移子所謂。從于門松立旦。于桃于柳葺菖蒲。檐灯籠二度月。菊佳節歳暮。是矣。其他至如彼岸庚申之類。凡三百六十日之間。而有二百餘度之日柄。噫夫此邑之華也。燕喜之娯也。秘戯之味也。遊此境。則不懼親父之折檻。而致居續之長。太鼓酒闌忘吐血之朝。中居賞頻思醮醮之夕。至問夫狂之手段。通殷勤于格子。忍人目于檐下。歡然相見。私情相語。於此也。引替寒聲之昔飛雪。而恨野側幽僻之地。詩静女所謂城偶之類之書出。食言于鉄漿付之客。盡情于深間之夫。與離此全盛之邑。而受出彼江湖千里之屋暮作。寧作權助三助助左衛門稱鄙賤之人時花曲中之語之下嫁乎。凡百君子。敬而聽之。

燕喜篇

〔客花情來ル〕どふじや。いかふ寒いの。〔中居とよ〕花情さんよふおいなはつた。サア。おあかりなはれ。これお久米どん。御茶あげまさんせ。サアマ。御上りなはれ。〔廻シ左助來ル〕わたしが所の。ちよと。お尋なさつて。下さりませ。〔とよ〕はやいぞや。〔客〕いかふにぎやかなの。神棚のもてなしがよひとみへた。〔とよ〕ナアニおつしやるやら。是おなつどん。花情さんのおいなはつたぞや。〔中居なつ〕ヲヽよふおいなはつた。御まへ。マアせんどは。きつう飲ましなはつたぞへ。今ン夜は。きつとしかへしせにやならぬ。〔客〕それ。おれが知つたとか。ろしうが飲ましたのじや。〔くはしやつや〕奥より出さまに。これ喜八。中の間へ大こんの塩煮出しや。ヲヽ花情さん。よふおいなはつた。とよ。なせ奥へやりましやらんぞいの。サア御こたつへ火をいりや。マア奥へおいなはれ。〔客〕いや〳〵。今ン夜は。いなにやならぬ。そして。マア何處へおいなはつた。〔くはしや〕何のこつちやいな。〔客〕ちと此邊え用があつて。〔くはしや〕そんならよいわいな。マアちよとおいなはれ。つい戻しますわいな。ちと御咄し申事が有わいな。ほんに是。くめか。とよなと共狀さしみてたも。哥夕さんの。御みが。きて有ッた。〔中居くめ〕アイなんじやいな。花情さん。奥へおいなはれといふて。手を取。〔中居くはしや〕諸ともに。いや〳〵マアちよつとおいなはれといふて。おだてを塩に。〔客〕アヽ御意がおもひ。然らば奥へといふ露の。すつてん〳〵。ヤア喜八。髮高ふゆふたな。大分能ィ男じやといふて。あたまをちよつとたゝく。〔料理人喜八〕ハア是はいたもとじや。〔客〕やつはり我商賣で。口あい。やりおつたと。いひ〳〵。奥へ行。炬燵にもたれ狀よむ。〔とよ〕たばこ盆持出ル。御こたつの火はよふござりますかへ。〔客〕ウヽよいそふな。〔とよ〕夕ァ申シ。ろしうさんのおいなはつて。何やらぎやうさんに。御かんしやくで。〔客〕てきは常かんしやくじや。またそして飲んだであろ。エヽ夕ァきたら。よかつたもの。〔とよ〕サア夕ァおいなはるとよいわいな。たいていおまへを。戀しがりなはつた事じやない。又大びらの覆になつてな。わたしも。喜八どんも。とんといきついてな。〔客〕そふであろ。よふのむやつじや。〔くめ〕とさん持出テ申シ。哥夕さんへしらすぞへ。〔客〕いや〳〵。あの婆いやじや。〔くめ〕ナアニをつしやるやら。そんなわる口おつしやると。告げるぞへ。〔客〕大事こざらぬ。日がらのへんがへするよりましでござろ。〔とよ〕又やつはりわる口じやわいな。サア一ッあがれ。〔客〕どれ一ッ飲もふか。そ

りやくめさいたぞ。【くめ】ハイ おとよどん。こなんにさそ。わしやちよつと。哥夕さんの所へいてくるぞや。【とよ】いてごんせ。【客】どふでもか。人身御供にとられたと思ふていよわい。【とよ】ヨウおつしやるぞ。【くはしや】罷出。いかふさみしい事じやナア。夕さんへ。お知らせ申しやつたか。【とよ】アイ おくめどんの。いてゞござります。【くはしや】申。御まへは此間。桔梗屋ェおいなはつたかへ。【客】ちと付合か有ッて。【くはしや】それにマア。よふ御寄リなさらなんだの。そして。おまへは何ンぞ。悪性なんしたそふなの。夕さんのきゝなんして。夕ァわたしが所へちよッとおいなはつて。大てい腹立ていなんしたことじやないぞへ。【客】いや。それはてきが間遠ふたゆへ。付キ合ヒに。何やら新ぞうがきたが。きつふ。酔ていて。何じややら覺へぬ。【とよ】いへおまへそふじやなかつたげな。【客】もふよいわい。飲もふじや有まいか。【くはしや】御てうし。なをしておじや。そして喜八に何ぞ爰でたくものしておこしやといや。【とよ】アイ。【くめ】罷歸リ。夕さんおいなんすぞへ。【客】よい事の。【くはしや】是くめ。あんどもひとつ持ッておじや。【くめ】アイ。【とよ】てらし直し持出て。片手に煮梅持來ル。しばらく呑内。かつてより。疊がさわ〳〵なりて。【女郎哥夕來ル】座に付。直にこたつへ當タる。【女郎】おつやさん。夕ァは。【くはしや】ハイ たんとべゞきなんしたの。【女郎】アイとつとわたしや。今宵は。いかふさむいわいな。【くはしや】マア 一ッあがれ。【女郎】アイ。又しばし盃事あつて。亭主【佐右衞門】紙子のそてなしの綿入羽をり着て出ル。花情さん。御出遊しませ。【客】すつきりあはぬの。【佐右衞門】ハイ今宵は。橘屋へだいもく講に參りましてござります。扨精進酒はどふもゆるせでござります。壹ッのみ直しますでござりませふ。これは。マア何ぞ御吸物出さぬかい。といふて。手をたゝき。中居をよぶ。【くめ】アイといふて出る。【佐右衞門】こりや。喜八。さいぜんの雲腸を。ちよつとすましにして上ケませいといふてこひ。扨。マア。あがつて御覽じませ。むかいの京升屋が。此間京へ。仕かへものについてゆかれまして。その土産に。若狹の鱈の。雲わたを。けふもらひまして。御座ります。きつと。じまんで上ケます。【客】そりやよかろ。【女郎】雲腸とは。どふやらこわいよふなものじやナア。へ、、、、と。手のかうを口に當る。【くはしや】わたしもあないな物は。いや。それ申。猿のこしかけといふものが有ナ。てふどそれいな。【女郎】ヲ、いや。きみのわるひもんじやなァ。【客】ヲ、。きさまのこうぶつの。りうきういも程かわいらしいものは御座るまい。【女郎】ヲ、にく。といふて。きせるでせなかをぽん。【客】そりやあれるは。【佐右衞門】おまへにきせるでたゝかれた引。ハ、、、〳〵

／＼〔小女郎さん〕料理なべに。せりやきしてもち出る。〔くはしや〕ヲ、あぶないもちようじや。爰へおこしや。〔とよ〕火ばちの火たをし。鍋かける。〔さん〕何やらくはしやの耳ねぶる。〔くはしや〕ヲ、そこへいこといや。〔客〕何ぞ。大きなものにしやうか。〔佐右衛門〕よふござりましよ。これかいと云て。吸物わんの覆。〔客〕よかろ／＼。先はじめ給へ。〔佐右衛門〕ハイ。北の方つぎ給へ。〔くはしや〕よしになんせいでの。だいもく酒がよほどあるそふなぞへ。〔佐右衛門〕ア、そふいわずと。つぎめされ。ヲ、。上かんじや。旦那上ヶましよ。〔客〕ちよつといほゝか。〔佐右衛門〕南無有がたし。夕さんはゞかりながら。ちよつとなさつて。おくれんか。〔女郎〕ハイついでくれなんすな。夫より酒になる。又〔中居かね〕出る。〔客〕どふじや。ねからかまわんな。〔かね〕イヘ。よいから申。御客に付キまして。岩田屋へいて。おりましたといふて。客のみゝねぶる。〔客〕しまいにしておけ。〔かね〕ハイといふて。かつてへたつ。〔くはしや〕申げいこさんなと。ちよつとよびなんせんか。〔客〕いかさましめ野。よびにやつてみや。もし内にいずば。さんごなと。〔くはしや〕ハイといふて。たつ。〔佐右衛門〕申。ちよつと一ッけんさんじましよか。〔客〕そしたら。此大びらの覆にしよ。〔佐右衛門〕これはきつい。ア、。まゝよスウ。ロマ。サンナ。無手。リヤンコ。ロマ。おはね。イッコウ。スウ。トウライ。〔客〕サア。どふじや。〔佐右衛門〕イヤこれはきつい。〔げいこしめの〕来ル。〔客〕すつきりあわぬの。〔しめの〕アイ。夕さん。さむいな。〔女郎〕アイ。かはひらしう髪いひなんしたの。〔しめの〕こちのお春どんの。結ふてくださつたが。どふじややら。ぶら／＼して。悪ひわいな。〔とよ〕たばこすい付やる。〔しめの〕おとよどん。わるい色じやぞへ。〔とよ〕二日ゑいじやはいな。〔しめの〕二上リ哥チンシャンそでにつゝめど小笹のあられこぼれやすさよわがなみだツンテレヽツトンロンともになきつれかへるかりチンチテツトツトツウテチリヽよそに見なして思ひこそやれなとや心のなかるらん。〔客〕しめ野ひとつのみや。〔しめの〕アイ。〔客〕小便しにたつ。其間ニしめの夕さん。夕ァ新さんにあふたぞへ〔女郎〕アイ。わたしも八ッ過にしまふて。あふたわいな。〔しめの〕楽しみなんすの。〔女郎〕ナンノイナ。何じややら。むしや。くしやじやわいな。それ。せんどのナ。煙草入レの事でな。たいてい腹立てじやないわいな。アノ。そしておまへの所の。妻木さんは。やつはり文五郎さんかへ。〔しめの〕アイ。此間は。なをしこりじやわいな。〔女郎〕ゑいやうに。心得てくれなんせへ。〔客〕小便を手水鉢のまへゑしてもどる。〔しめの〕哥うたふ。〔佐右衛門〕所作する。〔客〕ねころぶ。此所しばしさはぎ。〔女郎〕茶ゝひとつ。くれなんせ。〔とよ〕アイ。茶もつてきて。夕さんちよつと。たいなんせ。〔女郎〕アイといふて。勝手へたつ。〔佐右衛門〕勝手へ

引。【くめ】しめ野さん。仕廻なんせ。【しめの】アイといふて。先ッたばこのみて。三味線しまふ。【くめ】はな哥にこよひあをとてよもないかどを行つもどりつしめ野さん。おまへのたばこ入レ。見せなんせ。ア哥がるたにしたものじやな。天神さんかいな。【しめの】なんのいナ。公卿衆じやそふなわいナ。鳥もなく。かねもひゞかぬ里もがな。ふたりぬる夜の。かくれ家にせむ。【くめ】かわいらしい哥じやなァ。【しめの】さばへ。【客】近日〳〵。【くめ】おゝしやうしめのさん。ふり袖が。ひッくりかへつて有わいな。【しめの】わしやいやいなと。いひ〳〵。勝手へはいる。其間に。次の間に。屏風のぢごく揄へある。其外。枕のせめ道具有。【くめ】申。ちよつと御休被成。【客】寐て居る。【くめ】おゝしやうし。申。あちらへいて。御やすみなされ。申ゝ。【客】ウヽ。アヽ。よふた。どりや小便してろくにねよか。

【くめ】ナァニ。いゝなさるやら。【女郎】かつてにて。おつやさん。わたしが。つゝみは。何處にあるぞいな。【くはしや】それとよ。夕さんの。つゝみ上ヶましや。どふじやいな。正月の。衣裳は。大かた出來たかへ。【女郎】さいな。すつきりわたしが。思ふやうにならぬわいな。わたしや。黒縮緬の。しろあげもやうに。しやうといへば。こちのお熊さんが。そら色ちりめんの。無地がよかろと。いゝなんす。どふで。思ふやうにならぬさかい。わたしやもふ。かまやせん程に。どふなとなんせと。うそ腹が立たさかい。ぐつといふたわいな。そりやそふじやが。花情さんに正月五日出てくれなんせといふてやつたが。まだ何とも返事なんせん程に。おまへも。そふいふて。くれなんせ。【くはしや】アイ。わたしも。そふ申そふほどに。おまへも。そふいゝなんせ。そして。おまへは。いつが勝手じやへ。【女郎】まちなんせやといふて」鏡袋より。のべの疊帳取出し。こうつ。マア。五日と。九日と。十三日と。十七日と。廿三日とが。わたしが。勝手じやわいな。【くはしや】もつとよい日を出なんせ。そりや。おまへ。惡い日。ばかりじやぞへ。【女郎】さいな。それもまた。どふなとするわいな。マアおまへも。そふいふてくれなんせ。【くはしや】アイ。マア。奥へ行なんせ。まゝ上りなんせむか。【女郎】いゑまゝは嫌じやが。ちや〳〵一ッをこしてくれなんせ。塩いれてへ。そしてわたしが所の。源七が。見へたら。たばこ持ッておじやと。いふておくれなんせ。といひ〳〵屏風の内へ。

秘戯篇

此ノ篇。蓋シ帷幄ノ事ヲ記ス。而シテ今ハ亡ビタリ。惜シイ哉。惜シイ哉。

秘戯篇

此篇蓋記二帷幄之事一
而今ハ亡タリ矣惜哉惜哉

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	三寸八分

異素六帖序

世之在宇宙者也夥焉陰陽之煦蒸萬殊之區別苦樂渾清情變逼迫悪可勝言乎放心六合巻悟密室蟻動為牛鳴者聽之乖也蚊足為鬼腥者明之異也若夫知乖異之所以為乖異則豈無乖異歟

六帖　序一

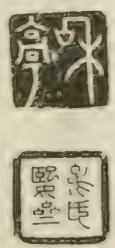
近覧異素六帖太素可以滦哉滦而後為萬々多々之色如夫有色則必有想有想則樂亦在其中矣二十五有之中有北鬱單越又名北倶盧州翻勝處勝東南西之三州大樂長壽無憂管弦之絶地也事見寶雲經當今謂之北

州者方語之畧也於爰乎序
寶暦七丁丑載孟春良辰
无々道人

異素六帖序

世の宇宙に在る者や夥し。陰陽の煦蒸。萬殊の區別。苦樂の渾淆。情變の逼迫。悪んぞ言ふに勝ふ可けんや。六合に放心し。密室に巻悟す。蟻動を牛鳴となす者は。聽の乖なり。蚊足を鬼腥となす者は。明の異なり。若し夫れ乖異の乖異たる所以を知らば則ち豈に乖異なからんや。近ごろ異素六帖を覧る。太素以て染むべし。而る後に萬々多々の色を爲す。如し夫れ色あれば則ち必ず想あり。想あれば即ち樂も亦其中に在り。二十五有の中。北鬱單越あり。又北倶盧州と名づく。勝處と翻す。東南西の三州に勝る。大樂長壽無憂管弦の絶地なり。事寶雲經に見ゆ。當今之を北州と謂ふは。方語の畧なり。爰に於てか序す。

寶暦七丁丑載孟春良辰

無々道人

異素六帖序

本邦の色を通暁したるものはおほく。異邦の色を轉翻したる書は鮮し。今この六帖は。青樓の精微と北州の全盛とを折中す。しかもその秋毫の末をいふすら実に綾なすの一事たり。こいねかわくは。黠聖ありて。和漢の情相おなしき数々をあらはさば。野暮をして。活物たらしめんもの歟。將枠長の鳳凰臺上に。飽悶せるものをして。蝸廬にうづくまらしめんもの歟と。中氏嬉斎自序。

此のあゆみふそき日
めでたきはしめ

和亭主人 印 印

異素六帖

發例

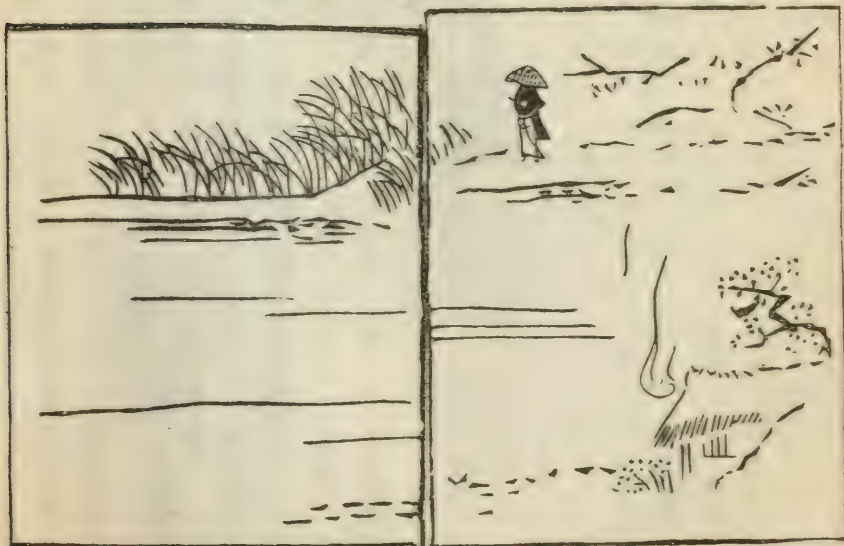
三つの徑踏わけがたき葎か宿。ひとつ竈は寒食の家を欺き。米櫃の中は塵積て山姥に似たり。いさかふべき妻しなければ。摺小木も柱にかゝりて。蛩の聲に睡り。野分の外に立ましわるべき人なきに。壁を隔て聞ゆるは。みたけしやうじにもあらで。いと喧しくいゝ訇るに驚てさし覗けは。あやしのおのこ三人ありて。ひとりは歌學者とみえて。一人は儒者なるやらん。今ひとり浮屠の道にかしこきにて。口／＼爭つのり。心の浪たちてさわかしきも。おつればおなし谷川の。流れの身の事とそなりけるおかしさ。忍ひかねて吹出してもきこえばこそ。いよ／＼つのる言種を、筆おつ執ば。

仏者すこしせいたる氣色にて。いへ／＼今も申通り。街賣女色といふ事がござるはさ。哥學者たばこをつきながら。そうおつしやるな。天地ひらけ初りて。あなうれしとの給ひし。又は出雲八重垣の神詠より。陰陽和合自然天然の色事は。傾城買ては濟ませぬ。諺にさへ誠なしといふものを。正直の首にやどり給ふ。神國の操ではござらぬ。ハテみほつくしの巻にも。仏者がいわく。これ／＼これ。その源氏物語の憂樂も。皆無常の夢のうき橋と成りはてるではないか。此間二人も臆に思ひ入あり。そこじやに依て。其著を離れるための遊女十御聞なされ。既に經にも引導衆生令離諸着と御說なされたは。衆生を吉原へ引つれて。諸の執著をはなれ。彼と三昧に入るべうにとの。御心遣ひでござる。といふてあたまの汗をぬぐふ。又若一日。若二日。若三日乃至七日とあるも。皆居續事で。哥學者吹からあらくはたきながら。いやもふこなた。それほど賣色御執心ならば。仏者相應によし町へでもこされ。仏者云。わるい御了簡。わたくしが賣色好はかりでいふてはこさらぬが。無心所着の德は。遊君淺妻のうへではござらぬか。とたゝみをたゝく。哥學者。いやさそれでは。仏者。ハテ。まだ合点さつしやれぬ。哥學者。いゑ／＼／＼。儒者扇を又にはさみへて。片手をあげ。おふたりともおだまりなされ。既にかた／＼よらずかたよらず。是を中と申す。そなた衆の樣にかたよりたがるへんくつではまいらぬ。しかし遊ひといふ事を論すれは。仏道ておつしやる北俱盧州。また北州とも申す樂第一の所。色の中に遊びあり。遊ひの中に色ある事。聊まされりともいふべきか。それゆへ十に八九は。北／＼とうなつきます。

去なから。遊ふ事必方ありと申て。方角のきわまりてある事でこざる。もし鼻ても落るやうな所は。かならす御無用になされ。とすこし分別あり良なり。哥學者。貴様のやうに。和らかにいわるれは。我等も岩木にあらされは。いなとは申さぬ。成程古哥のうち。北州の法にかなふたがこさる。儒者云。オヽサ。詩にも我等それのみを。よふ覺へて居ます。仏者鼻をひく〳〵して笑ふ。エヘヽエヘヽ。詩哥になくて何といたそふ。サア〳〵論は無益。先承りたい。儒者いわく。笙歌日暮能留レ客と申は。仏者いわく。アヽ。おつしやるな。鄽の景色すかた。やかて目の前に見るよふでこさる。哥學者云。身を盡しても逢んとそ思ふ。仏者云。是はうまいことだ。儒者云。時々來往住ニ人間一。仏者云。ハヽア。茶屋船宿のすがたをよふいふた。儒者。さりとは貴様のやうに。心を付てもらへは本望しやのふ。なん。といゝなから。哥學者にむかふ。哥學者うなつきなから。乙女のすかたしばし。といゝなから。ふたりニむかい。是は太夫の揚屋入りをよませられし歌しやが。とても事に題をきわめて。詩と歌とを引合てみたらは。どふこさらふ。仏者儒者云。是は至極〳〵。サア題を出しますぞ。

六帖目錄

その題のみをしるし。詩歌并に註釋次の巻に具ふ。

△太夫の揚屋入
女郎の裲の内
三月の中の町
番頭女郎
年明の近い女郎
けんたいふる女郎
欠落した女郎
指を切し女郎
はやる女郎
はやらぬ女郎

心中した女郎
心中をいやがる女郎
俄に客のへつた女郎
素性のよい女郎
性あしき女郎
横に來る女郎
いやな客に請られし女郎
工面のあしき女郎
工面の出來ぬ女郎
賣られて來る女郎
親の爲に勤する女郎
お茶引き女郎

△初會能みへる客
初會切りの客
ふられし客
旅へ立つ客
早く歸らねばならぬ客
醉つぶれた客
もらわれた客
喧嘩買の客
夜道をこはかる客
戸まとひした客
無緣法界の客
物に成てもいやな客

△子を賣りし親心
勤の身
たま〳〵逢ふ間夫
雨ふりの禿
牽頭に揚つた新造
月見の臺の物
面白く逢ふ夜
夜番
船宿
惣雪隱
揚屋の紙屑籠

△質を置女郎
わるい病の有る女郎
床のよい女郎
居すまいのわるい女郎
床で骨を折し女郎

△水上の客
年寄し客

△大門の懸行燈
大門の番所
吉原の眞実

といふまての題にて。ふたりともに流るゝごとくにいひしは。我も聞覺えし唐詩と。百人一首の哥にて有けり。此時仏者感心のよだれをなかし。合掌して曰。誠とんの蓮臺に座し。有緣の衆生を救ひ。に黄金の肌をみがき。二つ蒲團三つふ夜みせの行燈は迷の衆生を導き。昼となく夜となく。黄金の光たへすのア、彼金光明所と說き給ふ事。ことむべなり〳〵。といふ時。淺草寺の初夜の鐘。ごん〳〵と響。おもてに人の足音おほく。ヤツツア コレサといふ聲箕し。三人は顏を見合て。サア。といわれしより。各袖形頭巾とり出し。みな〳〵かしらに打かつき。何れへか出られし。我ひとり忙然となりて。はしめて筆は硯箱に納りぬ。

異素六帖上の卷終

異素六帖跋

百敷や舊代の拾遺集には。遊女の歌を入れ。人惜人恨の聖主は。淺妻の咏をのこす。加之。唐紅の中將は。著倚馴仁志嬬を戀ひ。加古知顏の法師は。江口君が爲に大悟を得たり。者足曳の大和言葉。諸越の芳野の里に。白雪の積る文筆裳。いづれか娼家妓郭の風流に洩んやと。松裳むかしの友達の咄を集めて。異素六帖と題し。光融和き春の日の。閑を助くる物ならんと。其後に跋する事しかり。

何遊堂爰歌

北刈

異素六帖

下

六帖五十五段通計

一 初三全盛の威をいふより次下乃廿二段女郎のうへをいふ

一 廿三より十二段客の事をいふ

一 卅五より十一段雑事をいふ

一 四十六より五段又女郎をいふて整更とおく次

一 五十一五十二又客の誹笑をいふ

一 五十三より五十五まて総論

太夫の揚屋入

紫陌紅塵拂面来
無人不道看花回

乙女のとうき
志りしさもん

紫陌紅塵とは唐の太夫の名なり
しはくハむらさきのみちとよむ胡には花紫
小むらさきといふて太夫の通り名とす紅
塵とは和名にてちりしす
きるかしき是も太夫の名とし我朝にて
和朱の名ありて高尾と名附貴ぬこの
ゆく人は素足の人は恋と見てかつる
ふ地なりとぞ

女郎の襟の内

冷艶全欺雪
餘香乍入衣

此は九重の小袖ひめる郎

冷艶とは清らくやさしといふまうく
あさむなる云おろし餘香にて雪にさゝ
肌の色の雪伽羅乃かほり揺さしに
はへきうさ有し

三月姓中の町

名花傾國両相歡

わ心乃かすてきを語るあるまん

名花傾城武説ていろく有るとおつくるところ
黄金身銭のすとらふ又傾城は傾動
の傾にあかすとて今日いつれもあし〱まうく
女郎と襟と大またのしむところへし

床で背をむけし女郎

孤城遥望玉門関
黄沙百戦穿金甲

みなれぬ客ハ背を向け思へ
孤城ハ一軒立の城々黄沙ハ功者と言
通ひ客今甲ハ軍士甲冑を帯し
客中を破らんとゝ時をうかゞふ
戦よく孤老なへし

水上の客

此夜断腸
人不見

口拵ても
来訪
いかさんもおかぬ

断腸とハなかはせてむかふをいふ
人ふ見えず来れとも人ハ断腸を
見むしらぬといふ事なり

寶暦七丁丑歳正月吉日

東都淺草御藏前茅町二丁目
六河亦次郎板

書林
本材木町四丁目
柴田彌兵衛仝

表紙　タテ四寸九分　ヨコ三寸六分

木文枠　タテ四寸五分　ヨコ三寸二分

遊子方言叙

花之美多則多矣不若花街花之美且情桃李雖然美不言不語牡丹海棠雖然艶不笑不歌此花也不唯能言語笑歌其色一過目則奪精蕩魂其香一觸鼻則飛心斷腸加旃霜露不凋風雨不摧取之無禁用之不盡春秋晝夜莫時不芳菲奚爲與艸木花同榮枯哉艸木花猶且賞之況於此花乎北州之遊嗚呼樂夫因以序

田舍老人多田爺謹書

遊子方言叙

花ノ美多キコトハ則チ多シ。花街花ノ美ニシテ且情アルニ若カズ。桃李然ク美ナリト雖。言ハズ語ラズ。牡丹海棠然ク艶ナリト雖。笑ハズ歌ハズ。此花ヤ唯能ク言語笑歌スルノミニアラズ。其色一タビ目ヲ過グレバ則チ精ヲ奪ヒ魂ヲ蕩カス。其香一タビ鼻ニ觸ルレバ則チ心ヲ飛シ腸ヲ斷ズ。加旃霜露ニモ凋レズ。風雨ニモ摧ケズ。之ヲ取レドモ禁ズルコト無ク。之ヲ用フレドモ盡キズ。春秋晝夜時トシテ芳菲セズト云フコトナシ。奚爲艸木ノ花ト榮枯ヲ同ジウセンヤ。艸木ノ花スラ猶且之ヲ賞ス。況ヤ此花ニ於テヲヤ。北州ノ遊ビ嗚呼樂シヒカナ。因テ以テ序ス

田舍老人多田ノ爺謹書

目録

發端　附り　友の参会。舟の弁。姫の様子。土手。大門口。

中乃町

夜のけしき

宵の程

更て乃体

志らけめのころ

畢

發端

小春のころ柳ばしで三十四五の男。すこしあたまのはげた。大本多大びたい。八端がけと見へる羽織に。幅の細き嶋の帯むなだかに。細身のわきざし柄まへ少しよごれ。黒羽二重の紋際もちとよごれし小袖。あゐ着は小紋無垢の。片袖ちがひのやうに見へ。いろのさめた緋縮緬のじゆばん。はきにくそふな。幅びろのひく下駄。やまおか頭巾かた手に持。鼻紙袋はなしと見へ。小菊の四ッ折すこし出しかけ。我より外に色男はなしと。高慢にあたりを。きろ〳〵と見まはして。あてどなしにぶら〳〵と行むかふより。二十才ばかりの人柄よき柔和そふな子息。わきざし立派に黒縮緬の綿入羽織。五ッ紋しろ〳〵と。丹後嶋の小袖。した着は御納戸茶縮緬

の兩めん。琥珀じまの袴。なかぬき草履をはき。供にかゐきの風呂敷づゝみと生花をもたせ扇子かざして來る。

[通り者]これ〳〵色男〳〵。[むすこ]いやこれはどふでござります。此間先生と御噂申ました。[通り者]先生はさへぬはゑ〳〵おまへどこへ行なさる。[むすこ]私は本所邊へまいります。[通り者]行ねばならぬ事か。何しに行ッしやる。[むすこ]伯父きの。病氣でおりまして。見舞にさんじます。[通り者]伯父病氣ならば。ぐつとながしたいわい。[むすこ]なせでござります。[通り者]あんまり。つがもない。よい天氣じやによつて。正燈寺とくらわせよふと思ふ。[むすこ]なるほど。私も正燈寺ゐは參りたう御ざりますが。行て來て本所へ參られませうか。[通り者]行れます〳〵。そして。本所は大流に。ながしてもよしさ。[むすこ]何にもせよ參りましよ。[通り者]そんならぐつと。供を歸しがよかろを。あれが行たとても。紅葉がおもしろくも。何ともないわさ。それよりは。內へ歸つてゐた方がらくだ。角平な。すとんだ通り者か。これ色男袴を〳〵。[供角平]それとも御用がござらば。參りましよふか。[むすこ]いや行ずともゑい歸つて。言をうには。あなたに道でまい・御目にかゝつて御同道申正燈寺へまいるによつて角平をば歸します。かならず御あんじ被成ますな。[供]かへる。[通り者]あゝゑい。これで大きにゑい。船中にてだん〳〵。つもる物がたりがある。おしい色男が。埋木となるによつて。だん〳〵おれが。傳授で。善二坊のやうな色男を。揚卷の助六がやうに。つくり直さにや。ならぬこゝは。みんなが乘伊豆屋といふ舟宿だ。每日おれも乘所だ。こつから。のろを。かみさん猪牙舟。ちよつきり。ぐゐづくり。はやく出しとしたいわい。[舟宿の女房]はい御出なされませ。猪牙舟はござりますが。も一艘なんとやら。おつしやるふねがござりませぬ。[通り者]いやさ猪牙舟ばかりでよしさ。[女房]どつち迠で。ござります。[通り者]どことはどふだ。堀さ〳〵。[女房](かしへいづる。船頭は今かへりて。休もふとおもふて舟をかしへ付てゐる。)これ五郎どん大ぎながら。も一艘こいで下されよこれさどふぞ。さしつたか。[五郎]どふも仕やせんが。はらが。へり。やした。腹も。へるはづで。ござります。松さきへ上下を二どこゐで。堀ゐも二はい。あげて。來やんした。[女房]そんなら。茶づけ一ぱい。かきこんで。はやく行てください。いそがつしやる。[通り者 むすこ 二人](舟宿のみせよりもふ舟はできたかと。くわへ煙管にていづる。)[女房](氣のどくそふな顏で)ちと。おまち被成て。くだされませ船頭が。みんな出はらいまして。よう〳〵只今かへりました船頭が參りますが。大ぶ。はらが。へつたと申て

茶漬を。たゞて參ります。〔通り者〕そりやゝとんだ事ッた。〔女房〕さやうで御座りますけれど。汐時がよう御座りますから舟は。たちまちで御ざります。〔通り者〕そんなら。ま一ぷくのみましよ。○といふて待うちに。まへの河岸へおどり子二三人のりたる。やね舟がつき。男三四人あかれば。通り者は煙草の。のみやうに。思入ありて。其ふねから。あがる人は。みなしつた顏のやうな。見へをして物をいひかけられた。そふな顏にてゐる。其〔通り者〕ど中に年ごろな。ぢゞいが。默禮して行。いつもみんなおれが知らない奴だ。あん中にしつた顏なやつは。たつた二人ばッちやない。〔むすこ〕今おまへに。辭儀して。いッた。達者そふな。ぢゞいは。折ふしこゝらで見る人じやが。〔通り者〕あれはおれが久しい。近附だ。やぼなぢゞいさ。ありや鎌地屋本次郎といふ。ぢゞいだ。跡のにた山。本多の。いきに見へる。やつは翌助といふ奴だ。あいつはおれを。しつた顏して。

いつたが。おら。つゐど。あッた事ない。兎角おらを。知つた顏したがる人のあがるを見るにつけても。はやく行たい。どふだ。○河岸から。〔船頭〕さあお召しなはりやせ。○二人はさあといふて舟に乘。〔船頭〕舟をおし出ておくんなはりやせ。○女房二人をおくり。ふねおしいだす。〔女房〕御きげんようお召し被成ませ。○舟は大川へ出る。〔船頭〕お平におめしなはりやせ。〔通り者〕これ色男。猪牙舟の乘やうから。傳授しましやう。猪牙舟といふものは。あぐらをひッかき。うしろえひぢかけの。首うなだれの。煙草。ば・く／＼とくらはせねば。舟がこぎにくゐ。まず船頭がうれしがる。これ／＼此おかの。むかふがそれ身をする一瓢が内だ。いや彼此ゆってゐるうちに。肝心の相談をわすれた。正燈寺へは。しよせん行れないによ。貴樣。ほんに正燈寺へ行と。おもつていたか。〔むすこ〕あい／＼

正燈寺へはいかさま。もふおそふ御座りましよ。〔通り者〕さあ其事ッた。しよせん正燈寺とは。かりの名。よし原へ。行ふといふかねてたくんだ腹だ。吉原へ行ッても。よからうが。〔むすこ〕あいはやく歸りさへすれば。よう御座ります。〔通り者〕行からにや。早いの。遲いのと。いふこつちやない。おれと行といふと。堀ッてもはやく歸られぬ。やぼな。奴等と行ッたと。ちがつて格別おもしろい。其はづだ。吉原中の太鼓持はもちろん。其外みんな轡の通り者や何かゞ。おれが行といふと來る。此中もきかつしやい。來る者に事かゐて。釣瓶そばの。こりや大ぶむすこまで來てしやれる。舟がおそいは。やう／＼首尾の松じやないかの。〔船頭〕首尾の松は。よつぽど跡に通り過やした。〔通り者〕なるほど。よつぽど來た。あこゝは。此君山ぶしが河岸だ。〔むすこ〕此君山ぶしとは。な

んの事ッて御座ります。[通り者]これに段〻。こうしやくの。ある事た。吉原は男ぶりよりも。肝胆がかんじんだといふ事がある。此河岸に八十ばかりになる。なで付があるが。これが此君と大きに色事だ。それゆへに此君が客は。みんな。皆無ぶつぱらッて。きれた程の。肝胆しだ。それを。おれがむかふへ廻して。たび〳〵色事をしたがおれも。悪くすると。叶ない事がある。それに付ても。あつたら色男が。形や作りが。どふもさへぬ。吉原へはいる形じやない。とかく吉原は黒仕立がよい。髪がとんだやぼだ。どふぞ もう五ぶほど。根をあげて。刷毛先を。すつと。ひつこきとしたい。額をもう多くの事ッちやないか もう五六ぶ。抜きあげて。どふぞ形や何かを。意氣に。さつしやい。そして。會へちッと。出るやうに。したい。[むすこ]あい新交が會の時にちよと。まいりやした。[通り者]新が會の時にや。おら行なんだ。すべて此ころは。通り者が會をながす。それで。おれがせんども。藏前の弁魚に。川崎屋の雷同が所で。みんなが。ゐたによつて弁魚に。そふ。ゆった。是からは會をみんなが。流ないはづだ。何をいふも。みんなが。錢のないしよゐだ。錢がないといへば。おれが丸角ゐ あつらへて。おゐた。花がん袋がある。とんだ。ゐきな。きれだ。小はせ斗貳分ほどに。當ッてゐる。きれは。阿蘭陀のむしろをり。貴様。見ると。ふるへ付ほどな。きれだ。おれが錢のある時に。あつらへて置た。丸角の亭主が。おれと心やすいによつて。いつでも亭主にあつて。あつらへる亭主も。じよさいはなけれど。忙しゐによつて。とかく丸角は。ながい。されども十日ほどの内に拵へて。やろうとゆつた。其内に皆無錢がなくなつたによつて。三十日ほどに成が。今に取にいかん。貴さまいつそ。買ないか。出來てゐようから。[むすこ]そりやどふぞ。私が買とう御座ります。どふぞ。おまへつれ立てゐつて。おくん被成ますまいか。[通り者]おゝつれ立て。いこ〳〵。貴様たばこ呑ゑないの。[むすこ]あいさやうで御座ります。どふもたばこを。呑んはわるいもので御座ります。それで此間ずいぶん煙草。のみならをうと存ます。たばこ入も。拵へとう御座りますから。どふぞ。つれ立ッて御出被成て下されませ。[通り者]たばこ入は。堀安で見て置た。とんだいゝよい更紗がある。それを。拵へ。さつしやれ。堀安めもおれと一しよに行と。すとんだ懸値は。いゝゑない。煙管は。どふしても住吉屋がゑいによ。とんだ能かたがある。[むすこ]せんど折太夫に。あいやしたとんだ大そうな煙管を見やした。それ

に小田原町とやら。新場の人とやら。來てゐやした夫も。とんだ大そうなで御座りやした。［通り者］折太夫といふはなんだ。［むすこ］義太夫をかたる。［通り者］うゝなるほど。いやおれがものずきは。又ちがう。なんでも住吉屋をよんで。まあ是からは。なんでもおらが内へ來さつしやい。そつちへ手紙がやりたい事があつても。どふもやりにくい。若ゐ者を。そゝなかすやうで。名にしおふ。おれが事たから。どふもしにくゐ。貴様表徳があるか。［むすこ］あいどふぞ。おまへの字を取てお付被成てくだされませ。［通り者］そんなら。おれが番町の番の字を取て番景とつけよ。後にや。おれがやうに。方々から番景様〱といふやうになろ。夫につゐて。はなしがある。此中も中の町の松屋の見せで。おれが。どんで。きれゐな。形で勿論。ふと煙管で。たばこを呑でゐると。そのそばに淨留理をかたる東洲が來て。はなしてゐると。さる内の奥座敷の女郎が。東洲にあだつゐたおれに。あだつきたい。けれど。おれには。おそれて居て。おれは。此くらゐな。うは氣な。ものだと。いふ事を。しらせたがつて。何が色〱な事をして。其うへで東洲に。ぬしの名は。なんと。ゆッと。そつときゐて。すると東洲がぬしの名をおしりなんせんか。番町さんと。申やすと。いふと。番町さんと。いゝたそふな顔で。つんとして。これに御出なんせへといふて。立てゐッた。客が來たそふで。そこで。今夜そこの内へいつて。新造かいとして。夜ふけ人しづまつて。其女郎が所へ。しのびこみの。口説かずとも。じきに。そふいふ調子だによつて。直に出來る。出來るといふと。しよての。新造に引かへて。三ッぶとんのうへ。ひそかに茶づッたり何かして。腹一ッぱいに女郎ぶちころしのしのゝめ。さつと明わたる時分まで。ゐて歸る。なんときつい色男の筋じやねいか。おらが吉原は、みんなそふした事だ。これは埒のあかない舟だぞ。いや〱よう〱着そふな。［船頭］どこへおあがりなさりやす。［通り者］ほんにそふだ。け。一川屋には勿論かりがあり。吉野やの。きやつめは。うぬぼれで。いま〱し。どこにしよふなてそれ〱此ごろ逢た。山本は。まだおれを大臣とおもつてゐる舟宿がある。［船頭］どこへ。つけますゑ。申。［通り者］そんなら山本の。さん橋へつけろ。［船頭］山本屋〱。［山本や］はあどなたかお出なさつたそふな。と。さんばしへ出むかう。これはおめづらしい。お出で御座ります。おあがり被成ませ。あゝこッちらへ付ればよいに。［通り者 むすこ］いや〱こちらでもよし〱。と。つつとあがる。

[山本や]一ぷくまづおあがり被成ませ。○通り者。むすこ二人ともに腰をかける。[山本や]ました。[山本や 女房]よふお出被成ました。[山本や]あなたは番町さんといふおかただ。せんど朝。水道橋まで。めしたお客だ。[通り者]これからは心やすく。來やんしよ。かみさん。刷毛先が。そゝけはせぬか見て下んせ。[山もとや女房]いゑなんとも御座りません。[通り者]手のごひを。ちよと。あつい。湯で。しぼつて。ください。[やまもとや女房]はと。浅黄の手のごいを出し。ゆでぬれたるを取。しぼりて額をふく。髪きはを大事にふく。

[通り者]手のごい。おれがやろ。ぐつと。これで心持がよくなる。ふか。しやらんか。どふもやぼな形だぞ。[むすこ]さあ〳〵さあ參りましよ。と。ふたりは出てゆく。[通り者]急ぎましよ〳〵。[山本や][同女房]申明あさおより被成ませ。[通り者]さあ〳〵まあ土手へ來た。これ〳〵こちらだよ。こゝの。うちにも功者と。不功者がある。こちらを通ると。かくべつ。ちかい。これは土手が大ぶ。寂しいわい。こ。はなの。さきへ。つばきを。つけ。さつしやい〳〵。[むすこ]なぜへ。[通り者]いやなぜでも。つけ。さつしやい。今におもひしる事がある。それ〳〵もふ來たぞ。[むすこ]ほんにおかしな。匂で御座ります。[通り者]こりや死びとをやく。匂だ。じやが。土手で。かげば。死びとの匂も。ゑゐ。ものじやないか。今夜は大ぶ土手が。永やうだ。と。いふて。しやんと小づまを鳥かぶとと。上るりを。功者らしき声にてかたる。まだ。意見をいゝ殘た事がある。うたを。ならうげなが。同じ事なら。うたは。よさつしやい。今やぼな。侍がうたをうたう。河東ぶしを。ならはしやい。おらが内には雅十はじめ。段次も。筆次郎も。來るもんだから。誰に。ならをうもすきだ。それに河東が。此ごろは聲がかれて。おらが内へ來てゐる。それに筆次郎は弁四郎と改名した。これも會の。たくみが。あるから毎日來る。いや通り者に。なると此會ばかりも。うるさいものだ。摺物ばかりも。大ぶ。たまつてゐるぞ。そうこう。いふうちに是は。衣紋坂。やつぱり。こゝは古風にこゝで。ずいぶん。衣紋を。つくろうがゑい。時にこゝから。しづかにしていかふ。どふも人が見ると。みんなが來て。あんまり。そうも〳〵しくなる。今夜はしつぼりと。手まへと。おれと。たつた。二人で。あそぶ事に。し。よ。といふ中に大門をはいりて。はて。こう。寂しくては。どふも。ならぬわい。茶屋は。どこに。しよふ。あんまり。しつた所が。澤山だから。どこへ。いかふも。目うつりがする。それにおれは茶屋を定て行が。きらいだ。そこは何屋だ。のうれんを。見ささッしやい。[むすこ]小田原屋といたして御座りま

す。〔通り者〕あゝ又が所か。ゑゝあゐつは。おれがいッたら嬉しがろ。さあ〳〵はいりましよ〳〵。と。づつと。はいれば。茶屋は女房ひとり座敷にゐる。かみ様ンどふで。ございす。〔茶や女房〕あいお出なんし。お上りなんし。〔通り者〕上りましよ〳〵。と。づつと。あがり。見せのまん中へ大あぐらにて。すはる。大ぶ今夜は。しづかだの。〔女房〕いゑまだ二階にお客が御座ります。〔通り者〕いつでも。にぎやかで。ゑい事だの。久しぶりで。こゝの内へは來たぞ。といへども。女房は何か始終。わからぬ顔にて。〔女房〕ぶしつけ。ながら。おまへ様は。お見わすれ申しいんして御座りますが。あなたは。どなた様で御座りましたね。〔通り者〕これはどふだ。これは〳〵いかに久敷こないとて。見わすれた顔は。ねいは。しかしそふだあろ。久しぶりだから。御亭主には。折ふし途中であうが。成ほど内へは久しぶりだ。そして亭主はどつちへで御座ゐす。〔女房〕今日は江戸へ參りました。〔通り者〕あゝ今こゝを出て。いつた人は。だれだ。〔女房〕あれは筆次郎様ンで御座ります。〔通り者〕あゝ筆か。なぜおれを見て。見ない。顔して。いくしらん。成ほど〳〵ゆふべ。おらが所へ來るはづで。こないによつて。それで見ない顔したそふな。〔女房〕ゑゝゆふべ。あなたへ參るはづで御座りましたか。〔通り者〕此ころは河東が來て、ゐるに。よつて。咄に。こうと。ゆッた。それに。筆がこないによつて。ゆふべは龍千が來て。誹諧で。夜をあかした。○此間。盃。すゝりぶた。酒出て。女房がさし圖にて吸物出る。今日も河東が來て。ねてゐったから。吉原へ行。あゆばないかと。ゆったれば。無精な奴。吉原よりはどふぞ。寢てゐたいと。ゆって。いったけ。〔女房〕河東様ンは。ゆふべから。こっちへ。來てゞ御座ります。〔通り者〕河東が。と。膽をつぶし。きのどくそふな顔にて。はて。それはいやな事。魂魄じやないか。○女房はあいそをつかして。勝手へ立。つんとしてかまはぬ。○臺所には男どもが。〔茶や男〕おかみさま。あれは何か。おかしな者で。御座りますぞへ。大がいに挨拶をして。お歸し被成ませぬか。〔女房〕おゝさ おれも。そふおもふよ。何にしろ。だんなが。歸ら。しやつたら。ゑゐやうに。さつ。しやろ。まあそれまでは。かまはずに。おかつ。しやい。もし又。つとめの。請合引なら。かならずさつしやるな。おらは。二階の客人の方へ行から。平さんと川さんが。御座つたら。あのふたりをば。中のまへ。置て。おれへはやく。しらさつしやゐ。と。いふて二階へ。あがる。〔むすこ〕こゝの女房は。あまり愛相が。よくないじや。ござりませぬか。〔通り者〕されば其事ッた。ぜんたい。つきのわるい内だ。何か知つても。しらないよふな。顔してゐる。こゝへ今

よい女郎が來ればよいに。こふしてゐる内にしやれて。やろうもの。と。見へをいろ〳〵いふたりして。烟草。ばく〳〵とのみゐる。[客平くる]男ぶり大きく。人柄よく。合びんにて黒羽二重のあたらしき小袖。黒縮緬五所紋白〳〵と鼠縮緬のあゐぎ。きれゐに。大きた声にて。御亭主はもふ歸られたか。○臺所より若イ者かけ出て。かの通り者むすこにも。かまはず。とんで出る。ひやうしに。通り者の足に。わかい者の足がさはる。

[通り者]ぞんざいな。野郎めだ。○わかい者はごめん被成ませともいわず。客人平にむかい。[わかい者]御出あそばしましした。[平]おゝ二階へとをろうか。[わかい者]ちとおまち被成ませ。と。通り者とむすこにむかい。おまへさまがたは。中の間へ御出被成て被下ませ。[通り者]どこでも吉野木〳〵。これ色男。こつちへ。來のめ田樂〳〵。と。しやれをいふ。[わかい者]盃もち出。客人平のまへに出して。大分おをそう御座りました。[平]御亭主はまだか。御内しやうは。[わかい者]只今二階におります。おまち申ておりました。はやく。さやう申ましよ。[平]大分いそがしそふだな。[通り者]これ色男みせの客を見さつしやい。あいらがふられずば。ふらるゝ者はあるまいじやないか。あゝいふものを見て。おいらを。見たら。女郎の心でも。ほれるはづだ。と。高慢をいふて。むすこに見へをいふ。[女房]二階よりおり。見せへいで。大ぶおをそふ御座りました。[平]そふで。あッたであろ。今日同役の所で。少し祝儀事で。呑かけ山と。して。ゐたらば。亭主の見へられて。あつた。[女房]さやうで御座りましよ。今日のはきふな御用のお為そふで御座りましたによつて。外の者では。間ちがうと申て。自身に持て參りました。それでも。お目にかゝりまして。よふ御座りました。川さまは御出被成ませぬか。[平]これも大かた見へやうかな。御亭主も歸られ。そふなものじや。尤これは虎の門の方へよるといふ事であッた。[女房]はいさやうで御座ります。いつでも虎の門へよりますと。永ふ御座ります。せんども。よりまして。虎の門の御客さまは。此方へお出なんしたのに。歸りませんで。直に品川に參りまして。其朝ゆるりと歸りました。しかも。其ばんは。いそがしいばんで御座りましたのに。歸りませんから。歸りますと。大きに。ふり付て。やりんした。[平]んまいな〳〵。そふした。實な女郎に。あいたい。ものじや。[女房]山さんがあらほど實なうへに其やうに被成ます。[平]されば其事じや。あゐつも。氣のしれぬやつじや。ずんど實な。やうでもあり。又何やら。おかしなものじや。いや此やうな事。いわずと一ぱい呑ましよ。[女房]一ッおあんなんせ。といふてはじめる。[平]これはきつい小盃な。今日一日。よつては。ゐるけれど此やうな小盃では。少し。くす。ぐッたい。やうじや。例の大物を〳〵。女房さや

ういたしましよふか。といふて。女房は。勝手へ。盃。取に立すいものをいゝ付る。客人平。大分酔た風情にて。扇子ぱち〳〵ならしゐる。〔通り者〕むすこにさゝやきて。袂の内より。何かとりて。これ。かみさん〳〵。ちよッぴら。あいたい〳〵。〔女房〕はいなんで御座ります。取込まして。ろくに。おかまいも申ませぬ。〔通り者〕かまはずとも吉野葛。これはせ左衛門なれど。久しぶりで来た。しるしとか。なんとか。いふやうなもの。そつちへ。しまつて。翁草。〔女房〕はいこれは。と。ばかりにてたゝんとする。〔通り者〕これ〳〵まだ用がある。松葉屋の染之介を。きゝに。やつて下さい。〔女房〕のみこまぬかほ付にて。はい。といふてしあんし。はい。染之介さんは。おわるう御座ります。さつき。むかふの内にお出なんした。〔通り者〕はてどこに。しような。丁子屋にしようか。〔女房〕角町に。しんみせが御座りますが。お出なんして。ごろうじませんか。〔通り者〕角町はさへまい〳〵。むすこにむかひてかの。色事の所へ。いこふか。あゝしんぞふ買では。気がつまるぞ。〔女房〕まあどこぞ御相談被成て。御ろうじませ。〔通り者〕なんにもしろ。挑灯付さしてくんなさい。といふうち。みせの客人〔女房〕はいとれぞ。おともしやれ。〔女房〕あい只今もつて参ります。盃をまつ。〔平〕大物はどふじや〳〵。といふて大盃もちきたる。〔平〕さあ〳〵これじや〳〵。と。ぐつと引うけのむ。〔通り者〕行べし〳〵。と。むすこをつれ。ふたり庭へおりる。〔女房〕明あさ。およりなんし。〔通り者〕あいあすも。もし。ふらば。ぶんながしの。久しぶりで。ゐつゞろうも。知れやせん。諸事は。今夜の女郎の腹にある事。と。いゝながら。むすこを少し。さきに。立て行。〔平〕は。此始終を見てゐて。女房にむかい。ても大そふな髪じや。所謂。本多ふうじやの。〔女房〕あいさやうで。御座ります。何かしれぬ事ばつかり。おつしゐんすから。あいさつが。しにくう。御ざりんす。〔平〕いや時にこよいは。気をかへて。見る。つもりじやぞへ。〔女房〕なせで御座ります。〔平〕いやちと新町辺に。見そめたのがある。これへ今夜はゐて。ちと。たまには。もたせるも。面白かろうでは。ないか。〔女房〕なんさ。それは。およしなんし。私共が大てい。なんぎ。いたす事じや。御座りません。せんども。ちよッと。江戸町まで。お付合で。お出なんしたのさへ。大てい。やかましかつた。事では御座りません。あれ〳〵そふいう内。新ぞう衆が。おむかいに。お出なんした。そうで御座ります。〔平〕おれは。かくれるぞ〳〵。〔新ぞう〕申〳〵わつちを見て なぜにげなんすへ。〔平〕いやにげは。いたさん。公のおむかいに。出たのじや。さあ〳〵あがり給へ〳〵。〔新ぞう〕あ。も。せはしのう。おざんすは。といふて。こしを椽に半分。かけて落そふにしてゐて。おかさんに。お

ゐらんで。おッしやりんす。晝ほどは。ゆるりと。お目に。かゝりんして。おうれしう。おざんす。平様ッお出なんしたそふで。おざんすのに。なせ早く。およこし申シなんせん。おうらみで。おざんす。と口上いゝしまい。なせ人をよこしなんせんへ。〔女房〕あいさどふで。さはッてお出なん事を。ぞんじておりんすから。まあゆるりと。そふ申て。あぎんしよと。おもふて。おりんした。それにつゐて。おはなしが。御座りんす。さッきね。平さんのおッしやりんすに。よ。と。客人の顔を見ていわふとする。平は最前よりも。酒よほど。まはり大げんきとなり。うたい声にて。〔平〕さやうな事は船中にては。申さぬ事にては。〔新ぞう〕ても大きな声だぞよ。〔平〕声が大きいかな。へうた大きなものを。持ながら。新ぞ。買とはははゝ。これは／＼。さし合じやの／＼。とやかく。いわふよりは。はやく。ゆかふでは。ないか。今宵は。名代じやによつて。はやく行たい。〔新ぞう〕ぬしや大ぶ氣がなをり。なんしたね。〔平〕いや名代には。ふかい。意味のある事じや。はやう。いこう／＼。〔女房〕お吸物をお吸なんして。お出なんし御膳のしたくも。いたして。おきんした。〔平〕いや／＼中／＼飯所ではない。はやく參りたい。と。いふて。草履を。片ちんばにはき。かけ出しそうにする。拍子に大きな。鼻紙袋。おちかゝり。背の紋所も肩さきへ。まはり。挟ミ帶のとけたを結びながらにてかけ出る。新ぞう袖を引とめ。〔新ぞう〕いつでも。いゝ出さっしやると。せわしない。まあまちなんし。〔女房〕はやく。おちやうちんを。付ろ。申 おざうりが。ちがいは。いたしませんか。〔平〕草履どころではない。はやく行たい。と。いふて。とかくかけ出す。〔新ぞう〕まちなんし／＼。と。いふて。ひつそい行。〔わかい者〕此挑灯は。わるい。と。みせまで持て來た挑灯を。又おくへ持てゆきそふにする。〔女房〕はら立顔にて。はやく。行ッしやいな

夜のけしき

いつのまに。峯の松風かよひ來て。いづれの緒よりしらべ初けんすががきの。軒をならべてひくふねよ。泊りさだめぬ河竹の。流れても身はすみた川。むかふの人／＼。尾張屋に人。こんな／＼。二帖の紙を持て。來さッしやゐな。いッけするい。はやく。來さッしやゐな。緑どう／＼と。いふは友よぶやゐな。愛らしき禿の声。わゐら狂ふて斗ゐずと。座敷へ。うせあがらないか。すかない。餓鬼どもだぞよ引は。やり手なるらん。猶もすがゞきの音にうかれて。五ッの町をめぐり。いづれ。あやめと見れば。昔を友とする顔に歌書を讀ば。後の月見に逢そめ見そめと声高くよむ。箒を立てまじなへば。疊算に待侘び。來れるゐを巻かへせば。送るゐを

封じ。こなたより覗ばかなたより覗く。白眼あれば笑うあり。物やおもふと見れば。さゝやきて悦ぶ。緑の柳腰。紅の下緒いろ〳〵行こふ人そゞろなる中に。けしからぬ声の按摩はり。鮓賣が鯵のすう鰶のすうと呼も。しやれとやいはん。義太夫ぶしは頬を押てかたり。江戸ぶしは行儀に行。二人三人友どち左右へ別れ。さぞや嘸〳〵。さぞ今ごろはと諷ひ。巻舌にて。コッちらへ廻りやれ〳〵と。睦敷は。其邊の人かと見ゆ。温飩。蕎麦切。汁子餅。雑煮のあんばい。よき。キの字屋の名も高く。彼鵲の橋ならず。白きを見する名物は。山屋の軒の水にすむ。ゆかりの月やすがゝきを。まだひく四ッの拍子木も。それかあらぬか駒下駄の。音に色めく。ありさまは實に夜の錦なり。

宵の程

大勢つきそい。挑灯三張にて。はしごを上ル。新ぞう客の後に付。〔新ぞう〕はしごをば。しづかに。おあがりなんせ。〔客〕よほど酔ている。心得ました。〔新ぞう〕こはばからしうおざんす。人の座敷でおざんす。コッちらへ。お出なんし。〔客〕又せまい所へ入るのか。〔新ぞう〕なにせまい所じやおざんせん。せんどおまへの酔なんした所でおざんす。〔客〕あのおくのか。〔新ぞう〕あいおくのでおざんす。はやくお出なんし。と。廊下を行と。方々の座敷より名をよび。誰さん〳〵といふ。客うれしそふな顔見ゆる。〔舟宿〕〔茶屋〕これでまづおめでたふ御座ります。御座敷も定りました。〔客〕全体こよひは。おれ。ひとりじやによつて。此座敷がよいではないか。〔舟〕〔茶〕さやうで御座ります。此うちに。盃。てうし。硯ぶた。吸ものや。くわしやたばこ盆いづる。〔女郎やの若ゐ者〕旦那一ッ召上られませ。〔客〕さあ〳〵座がメッて面白くないではないか。なんと此ふたではそふでは。ないか。〔みな〳〵〕よふ御座りましよう。〔客〕とかく。おればかりが。いつも呑かぶだ。おみよや。お秀を。呼にやらんか。〔茶屋〕只今参るはづで御ざります。〔客〕今夜は。後には大ぶ賑に成ろうぞ。さッき道で呂州に逢た。これも來よふといふた。それで今夜は藤兵衛を呼ん。こゝがおれが粋じや。呂州が來てゐるに藤兵衛に。うたわせるは。互におもしろくない。よつて呼ん。〔茶屋〕成ほど万事に。あのやうにお心がお付なさる。〔舟宿〕あい左様さ。〔茶屋〕私はちよッと。行て。さんじましよ。〔客〕まゝそんなら一盃のんで。行やれ。〔茶屋〕また私は今の盃を歸しもせいで。ふせります。〔客〕はてねたがよい。しかし。其やうな事で。酒はのめる物ではない。さあ〳〵わしも呑ぞ。〔新ぞう〕もしにもふ。それ切で。かならず呑なんす

なへ。客 これはつれない。事じや。

新ぞう おゐらんで。いゝなんすには。かならず上申なといゝなんしたに。よつて。留申さにや成んせん。客 はてこまつた。ものじや。と。いふ内に。五六人ざは〳〵と來て。すはりながら口〳〵に。新ぞう 御亭さん御出なんし。兄さん。どふなんした。客 これは〳〵美しいぞ。これはいかい事。客ひとりに。むこ八人じや。賑で。どふもいへぬ面白う成た。さあ〳〵君たちちと呑給へ。あどれへさし上やうやら。新ぞう わッちに差なんせ。と。引うけ。うまそふにのむ所へ。やりて 來る。いやのみなんすの。と いふて。客に。むかいて 御出あそばしましたか。すッきと御足が御遠く成なんしたの。客 いや これは〳〵かゝさま。どふじや〳〵。一ッ呑給へ〳〵。茶屋をよび。ひぞ〳〵いふ。茶屋 これ申。御しうぎが。御ざりましたぞへ。やりて ははは ゝ お有がたふ御座りんす。私はまあ行ッて參りましよ。

新ぞう 今のお盃。あぎんしよ。〇此所へ。臺の物。菓子。重箱のふたを。とれば。あたゝかそふな物。方ゝより持來る。客 さあ〳〵これほど。御肴が出た。おさへます〳〵。いやおみよ。お秀 いやあ 呂州丈さあ御出〳〵。なに今の盃は。こふおまはし〳〵。かぶろ 兄さん。其三みせん箱。あちらへ上てくんなんし。あれ御亭さん。くるひなんすな あれよびんす。おう〳〵。みな〳〵 旦那は大ぶお醉なさつた。休ませ申たら。よかろう。

更の体

女郎さし合名だい廻り部や。平 あゝ今夜も又。此やうなせまい所へ。とう〳〵入られた。いつその事ねようぞ。あゝ醉もさめる。あぢな心持に成た。と。夜着半ぶん程着て。ねころび。ね入もせずにね入たやうにしてゐる。新ぞう。けちな。三味線にて。ぽち〳〵とひく。客目のさめた顔。平 ううう。これ〳〵。三味線をひかすと。こゝへは入てね給へ。新ぞう いゝゑこうして置て。おくんなんし。又しかられんす。平 其やうな。大きな声をするからわるい。こそ〳〵と。ちよッと。といふて手を取て引ばる。新ぞう おかみんすにへ引。と。むきに成ていふ。しかたなく。手をはなし。しばらく腹のたつ。おもいれ有。すつと立て。帶を〆なをし。かしこまり。思案をして居る。平 これさッきの。どこへか持てゐッて。しまッた花がん袋と。羽織を持て來てくれろ。新ぞう どうなんすへ。平 歸る。新ぞう 今ごろ。つゐど歸りなんせんに。なぜ歸りなんす。平 いやもふ七ッ過でもあろ。新ぞう いやまだそらほどでは。おざんせん。今におゐらんで。お出なんす。ぬしの。いゝなんすには。必ちよッとでも。ぬしを。いごかせ申なと。いゝなんしたから。いごかせ申事は。成いせん。じつとして。ゐなんし。平 今に來るか。新ぞう たッた今お出なんす。氣を短くせずと。ちッとゐると。ゐなんし。平 でもあまり。おもしろ。

ないぞ。今來るか。と。またよこになる。

〔隣座敷〕客は田舎座頭。女郎は新ぞう。たわいなくねてゐる。手を打ても。たれも來ず。ひとりごとに。あゝおもしろく。ない事だと。たばこ盆を。いぢりゐて。七ツを打て。よほど過るに。さきから。おこすが。とかく。埒があかん。と。いゝ〱枕をほち〱はぢきながら。〔座頭〕これ〱おきなさい〱。大事がある〱。枕もとへ火を。こぼした。おきなさい〱。〔新ぞう〕こはなんだへ。と。ねむたそうな躰。〔座頭〕何にもせ。ちよッと。おきなさい。〔新ぞう〕おきて よく。いびりなんす。〔座頭〕宵から大体おこしたこッちやない。もう七ツ半でもあろ。〔新ぞう〕びやうぶをおしあけ。方々のやうすを見るふりあり。もふ夜が明たそふな。〔座頭〕いや〱まだ夜は明ん。七ツを打て。半時ほどだ。〔新ぞう〕おまへは見なんせんからで。おざんす。とふにからりと。明んした。〔座頭〕でも。まだ烏が。なかん。〔新ぞう〕座頭の。あたまくらわす。まねをして口のうちにて。

ゑゝ。すかんといふ。〔座頭〕きゝ付て。何が。すかぬへ。〔新ぞう〕隣座敷の。客人の事ッて。おざんす。いつそ。も。しやれて。どうも。すきんせん。

〔隣座敷〕〔通り者〕これ新や。どこへいッてゐる。これ新〱。〔新ぞう〕なんで。おざんす。あんまり。其やうに。大たばにいッて。おくんなんすな。〔通り者〕あのさッきの。むすこをおこして。きて。くれろ。〔新ぞう〕今きなんす。〇むすこ。ねむそふな顔で。來る。〔通り者〕色男どふだ。とんださへないじやないか。〔むすこ〕はづかしそふな顔で どふも。ねかさないで。何か。ねむふ御座ります。〔通り者〕そりや。とんだ仕合だ。此しんなんざ。宵にちよッきり。頬を。つん出したまゝ。やう〱今に成ッて來た。もふ吉原も。ふたゝびないわい〱。〔むすこ〕又あさッて。お出なさんせかい。〔通り者〕なぜ。〔むすこ〕わたしや。あさッて。約束いたしました。〔通り者〕すとんだ事ッたの。おそろしゐわい〱。こゝの内は。とんだ。わるい内だによ。〇むすこが女郎は。部屋持にて。よほど人がらよき女郎にて。ねむた。そふにしんぞうと。ならびゐて。

〔部屋持としんぞう〕すかん。といふてにらめる。〔通り者〕これ新や。茶づらせろ。〔新ぞう〕何けづらせろとかへ。〔通り者〕これさそんなに。しやれずと。はやく。持て來やな。のら色男。ちつくり茶づッてゐこじやないか。〔むすこ〕あいよう御座りましよ。〔部屋持〕もうお歸りなんすのかへ。〔むすこ〕あい。〔部屋持〕もちッと。ゐなんせ。まだはやう。おざんす。〔通り者〕もしわたしをば なぜとめなさんせん。〔部屋持〕おまへをば。ぬしがとめなんしよから。わたしがとめ申さずと。ようおざんす。〔新ぞう〕なにすかない。ぬしのやうな。ものを。とめ申。もんで。おざんすか。はやく出てゐきなんせ。夜があけんす。〔通り者〕此新はおれをば人間じやないと。おもふそうな。〔新ぞう〕その新が宵から。すかなく

て。なりんせん。【通り者】それは。そふと奥座敷の女郎衆に。ことづけをしてくれたか。【新ぞう】あいそふ。申んした。なれば。ぬしや。そんな。おかたは。しらんと。いゝなんした。【通り者】はてにくゝするの。それでも廊下座敷の女郎衆は。よもや。おれを。わすれはせまい。【新ぞう】あいこれも。さッきそう申んした。なれば。おまへの小ように。いきなんすとき。あとから。見てゐなんして。そふいゝなんした。どうも。おもひ出されないと。いゝなんした。【通り者】さすれば爺に成ッたか。何事もさへぬ〳〵。只〻帰りましよ〳〵。【新ぞう】はてさても。ちゐとお出なんし。おまへが帰りなんすと。わッちや死にんす。と。いゝながら廊下へ送り出ル。【むすこ】【部屋持】あとへ残り。ほち〳〵はなしをしてゐる。【通り者】色男きたないぞへ〳〵。【新ぞう】人の事に。かまはずと。早く階子を下りなんし〳〵

しのゝめのころ

【隣】【平】あゝやかましい。宵からの口きゝが。やう〳〵出て行そふな。さッきからも。くどりのあく音で大ぶのぼせた。【名代の新ぞう入かはり。馴染の女郎】おしつけ奥座敷に替んすと。此やかましいが。よくなりんす。夫までが大体のくろうじや。おざんせん。【平】はて扨。宵から。あらほど。おれがゆって聞せる通り。其様に。気が。よはくって成ものか。新ぞうを出すほうはどふ成とも。おれがしてやろう。今の座敷のほうの事ばかりじや。それもおれが様子しだいで。どうともしてやろ。【女郎】さりとは。おうれしうおざんす。といふて。いろ〳〵おもしろき事有。おまへのやうな客人が。もう一人あると。わたしや大体。ゑゐこッちや。おざんせん。平 はて気の多やつの。とつめりてあぢな身有。【女郎】ほんに。わッちや。此ころは夜もひるも。ねられせんが。今宵は宵の客人が帰ッてから。おまへの所へ来んしてから。心がとけて。よくねんした。それでも。宵におまへの機嫌のわるふおざんした時には。いつそ。こわう。おざんした。今度から。どふぞ腹を立て。くんなんすなへ。【平】もう腹は立ん〳〵。おゆるし〳〵。時に もうおれは帰らふ〳〵。女郎 まあもちッと。ゐなんし。【平】いやもう 夜は明よう。そこを。ちよッと明て見てくれな。○女郎れんじを明る。夜は明はなれたり。きもをつぶし。南無三宝 さッきから烏がないたろうが。ちつとも。気がつかなんだ。高い声にて 若い者〳〵。はやくはきものを。下にやつてくれ。扨も〳〵あの茶屋めが七ッに。むかひをよこせと。いふて置たものを今にむかいを。

よこさいで。［女郎やの若ゐ者］さきほど。おむかひに參りました。［平］扨〱。これは。と。帶〆るうちに。又もからす一どきにかあ〱。［女郎］かならず後(のち)に。晝(ひる)まつたゐいんすにへ。［平］いやどふもかへりが。おそいから。合點(がつてん)がいかん。さりながらどふぞこよふ。［女郎］そんなら。わッちや中の町までは參りんすまい。［平］そこ所ではない。あゝおそく成ッた〱。［女郎］かならずお出なんせへ。またからすかあ〱。心しらずや明(あけ)の鐘(かね)

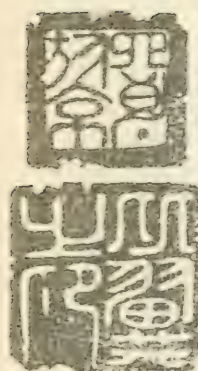
表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸二分
	タテ	四寸四分

辰巳之園叙

京都辰巳鹿社住。江戸ノ辰巳有ニ極樂一。夫者宇治山。是者深川。富賀岡之邊遊情婦之鄕也。勤悉〻書集吉原ニ北國之名有レ學ヒテ之辰巳之園。題シテ書肆何某任レ望ニ。北國之美君ノ噂モ不レ顧。如ニ井之內蛙ニ吉原雀ノ閉レ觜。深川參人述レ之。

明和七庚寅林鐘撰之

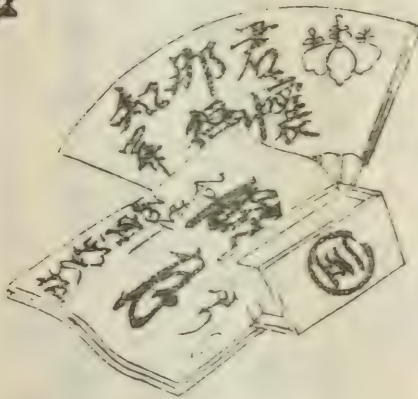
櫓閑街

自序

富賀岡八幡宮は。鎌倉鶴ケ岡を移し奉り。貴賤老若の信〻日々に彌まし四季折〳〵の賑か。二軒茶屋其外楊枝見せ葭笛茶屋とうの。美婦は紅粉を粧ひ。品形の美きを見れば樂は外にあらじとおぼゆる。さるにより此土地に樂遊民は。北國の面白キを知らず。美國の吉原くらぶれば。九牛が一毛とやいわむ。去ながら。餅好酒の酔事を。そねみ。酒好は餅の。風味を悪む。吉原の位あつて靜也ル遊びお。知らずして。此所の素人らしき。娘風を悦び。又此土地の。わつさりとしたる樂を。吉原好は知らずと。深川好北國をにくむ。吉原客は深川は下卑なりと笑。いかであらそふ時は水掛論とやいわむ。吉原に晝三あれば。仲丁土橋あり。打附有ば櫓下佃嶌あり。壹分貳人六寸には新地入船石場三間堂を譬て。爰に樂む。姉女郎あれば。年廻有。禿有は小女子と云あり。花車有ば。送迎男あり。牽頭持藝者ト云。淺草観音にくらぶれば。八幡大菩薩を信ずる。聖天は則。永代寺の寺中に有。九郎助稲荷に。仲丁のいなりを譬。松田稲荷は。黒江丁のいなりをいわん。又朝日如來には。永代寺の本尊を。なぞらゑん。大雲寺前あれば。永代寺門前有。大門あれば。大鳥居有。土手あれば。永代橋有。衣紋坂

には。櫓下の火の見を譬ん。此火の見を見て。衣紋を作る。櫻の代りに。山開といふ有。燈籠の賑かあれば。八幡の祭り有。船宿を呼は。むかふの人を。よぶにひとしく。引け四つの静あれば。四つさ。きなとト云事有。吉原に。意氣地あれば。此土地に達引有。丁に振と云事あれば。爰に照すと云事有。照と降との事にや。姉女郎御亭様ンの替名あれば。茶屋の女房を。一流に伯母様ンと呼。其外お針隱居さんなどの。通言あり。爰に略して。末にこと〴〵くあらわす。誠に落れば同し谷川の水のどく。若衆好も。吉原好も。深川好も。遊びにかわる事はあらじ。諺に云立臼も二階へ登るの。道理なり。さりながら此所の疵には。晴たる遊里あらざれば。北國より禁ずる時は。勤暫休と云。百日餘りの大紋日あり。されど。丁ゟ禁ずるとも。深川客。吉原へはゆかず。并に水なき時は。川水の。たすけ有。既に慈童は。菊の露に長壽を。たもちしと。聞傳しなれど。此艸帋は深川の。くわしきを。書集たれば。吉原の目を。忍ぶ巳而。穴堅(賢)〳〵

大坂枕に
樂の夢は
盧生が五
拾年の夢
とやいわ
む

自弓菴
祇桑

邯鄲と
同し枕や
花の夢

春風は。花のあたりを。除て吹。心づかしや。うつろふと見む。上野飛鳥の花盛り。日暮里の風景。所〻賑なる折から。如月中の頃茅場丁。藥師如來の參詣。おびたゞしき群集の中に。藝者八丈の羽織に。黑繻の小袖。八丈代り縞の下着八反掛の。立横縞の帶。鼻紙袋小菊三ッ折。丸角やが骨折の。利久形。髮は本多にあらず。茶洗坊にあらず。出ず入らずの。男女好と結。雪駄は鼠綟の下り皮。細身の脇指をさして。伊勢やが床机に。腰を懸る。〔伊勢や女房〕志厚さん。きついお見限りで。ござりやす。〔志厚〕此間は石燕が花の會に屋鋪に鞠がありやして。散〻にわか氣づめてぶら〱心。是ではいかんと。親玉隱れのちよんの間と。出かけやした。〔女房〕それはきつい御心勞。今日もおさへかへ。〔志厚〕久しぶりだに。鳥渡參ろふかと。思ひやす。〔女房〕おはやう。御歸りなさりやせ。刷しの内に髮を。大本多に結。飛八丈の。小袖の少しよごれたるに。黑繻子の袖口に。幅せまの帶に小短大小を。落指にさして。山岡頭巾を。横丁にかむり。日和下駄をはき。大キなる顏にて來る。〔志厚〕かみさん見ねェ凄ひ男だ。〔女房〕まだぬしを。知りなんせんか。如雷樣とか云て。てェ〱やかましのしや。ござりやせん。裏門の方から。御國染とみへて。花色小袖に。淺黃裏を付。洗ひはげたる。黃むくの下着。黑紗綾の帶に。郡内縞の袷羽織に。海黃の裏を附。袖頭巾を。ひら〱とかむり。尻をちん〱ばしよりにして。き木綿の足袋に。わら草履をはき大小を門指にさして。もへ黃羅紗の。柄袋を掛ヶて。楊枝屋の娘の美に。氣をとられ。傘の澤山なるに。きやうをさまし。猪牙船の早きに。おどろき。金魚の數に。あきれ。植木の青〱としたるに。目を覺し。楊弓の。カッチリちりりんに。胸をびくつかせ。からくりの太鞁に。きをぬかれて。大キなる鼻紙袋の。落そふなも知らず。うか〱と。來掛り。如雷が顏を見ると。きよろ〱顏にて。袖頭巾を取て。貴公にわ。いづかたへお越なさる。〔如雷〕こりやァめづらしいぬしやァ。獨りか。〔新五左衛門〕イヤ下拙も。はつの出府ゆへ。方角もぞんせず。藥師とやらが。今日は。賑じやと。扁才老のすすめにまかせ。賑な町を。通りぬけて。漸〱尋て。參りました。〔如雷〕そんな事なら。連立て。來よふものを。どふだ。此賑事は。おそれか。〔新五左衛門〕いやはや。とつぴやうしもねェ。こんだァむし。〔如雷〕主は。なんと深川え。いくきはなしか。〔新五左衛門〕どこへなりと。行ますべい。〔如雷〕そんならもつと。身重をして來やうものを。イ、知たやつらに逢たら。づい隱れの。ずいにげにし

やう。ちつと用もあれど。用事流しの。ちよんの間遊びと出やう。船に乗ふか。日本橋へは遠し。江戸橋の田村やにしやうか。但し西村のおさよが所で乗ふか。いや／＼。此間大和やの息子と乗た。渡し場の中村屋にしやう。【新五左衛門】そつちへ行のかへ。（是ゟ如雷新五左衛門を連て鎧の渡しの方へ行。中村やにて。）【船頭 次郎】船か／＼。【如雷】なんの事た。船か／＼と他人がましくするな。（次郎ついぞ來ぬ客なれ／＼しくするを。上手ものなればなじみ顔に。）是はお見違もふしました。おつやどんお茶を上ねヱ。【船頭 長吉】そんならおれはいつて來よふ。イヤ稲荷堀は何番が出たな。【次郎】七百廿一とでた。【長吉】なむさん。薬師のもかきを喰。此頃は七百六百か。いゝわへ。【次郎】今日はどこへ行。【長吉】九十九里の。旅のしまいが有。【次郎】早くしまふたら。めくりをうとふ。【長吉】後に／＼。【如雷】あいつはどこの船印じや。【次郎】横丁の。西村におりやす。【如雷】西村の船頭か。あいつも見わすれたそふな。きつく年寄になつたそふな。（女つや茶を持て來る。）【如雷】イヤ美しくなつた。久しく見ぬが。とんだ茶がまに成おつた。どふだ地色でも出來たか。（知らぬ客ゆへ氣味をわるがり。勝手へ行ば。引替女房出る。）【女房】やう御出遊しました。先御上り遊しませ。次郎どん。船を。はやく拵さつしやい。（如雷たばこ呑付る。女房火入へ手をあて。）お火がござりますかな。【如雷】ありやす／＼。【次郎】かみさん。仲丁の龜山への。爲がありやせう。【女房】今見てやろふ。（船頭次郎。火繩箱など手に持て。くわへきせるにて船場の方へ行。）【女房】是次郎どん。くわへきせるはあぶないによ。【次郎】アイ。（女房此間に勝手へ行て。肰指を等る。如雷手拭を出して額をふく。）【如雷】新五左。かならず。つきな事を云まいぞ。【新五左衛門】何せ。おれらも。いなかじや。お女郎買だ。今度も。輕井澤であそんだら皓まで。おくつてなむし。お歸りにやァ。かならず。よらしやりませと。くれ／＼云て。大もてで有た。【如雷】なんの事た。人が聞。そんな事は御免だ／＼。【次郎】船が出來やした。【女房】（勝手より。）ふねが出來ました。お出遊しますか。【如雷】さあ新さんめヱり。やせう。イヤかみさん女に。西宮が所の。長唄を。買にやつで。くんねァ。【女房】ハイ。つや新六さんの所へいつて。めりやすを。買ふてきや。【如雷】（ふところゟ錢を出し。）はやくかつて來。くれ木川岸／＼。（つやはめり買に行。女房先に立て。如雷新五左衛門船へ行。）【次郎】さァめしませ。【如雷】（船へ乗る。）新さん乗やすぞ。【新五左衛門】（猪牙は初而乗は。やう／＼とりつき／＼。）アヽこりやァ。ぶ細工なもんだ。【如雷】ころびでもせまひぞ。獨りでころんでぬれ

るやつと。出まひぞ。〔次郎〕うそわねエ。もしかみさん。船縄をとひておくんなんせ。〔女房〕先ちつと待な。めりやすがくる。下女つや、めりやすを買。いそかしそふかけて來る。〔女〕朧月と。五色丹前を。買て參りやした。〔如雷〕ヲ、きまり。すひめ。重さんどうでも。はだしじや〳〵。〔女房〕船のへ先を持て押出ス。お歸りに。おより遊せ。〔如雷〕アィいつて。めエりやせう。〔女房〕イヤ次郎どん。白木やの清助さんの。夘を。〔次郎〕夫〳〵。そつからなげて。おくんなんし。〔女房〕そんなら。なげるによ。そりや。〔次郎〕おつと來やした。文をふところへ入。船はよほど出る。〔次郎〕とりかお〳〵。やんわりと〳〵。エ、べらぼう。跡先。見てこげ。〔如雷〕新ぼう。此新川筋の。藏どもを。見やれ。是が皆。酒だによ。〔新五左衛門〕大けなものじや。〔如雷〕是より又油堀の。孫兵衛が。貸藏が。見せたい。〔新五左衛門〕孫兵衛とは。〔如雷〕國でも。知つて居る。親和が事さ。三ツ井孫兵衛と云ては。手跡はよし。金は澤山あり。孫兵衛さんの事だ。船は永代橋の近所へ行。〔次郎〕もし旦那。お頭巾。〔如雷〕頭巾取て。新さん頭巾を。とりねエ。〔新五左衛門〕頭巾をなせ取。〔如雷〕爰は。船改の。番所だ。見ねエ。暮方からは。是に火を燈す。此橋が。永代橋と云のだ。橋下から。見へるが。仙臺川岸。こちらの。火の見の下を。這入と。八幡の裏。二軒茶や。櫓下などへ行て。〔新五左衛門〕櫓下とやらは。國元での咄しには。燒たと聞たが。〔如雷〕燒たとて。出來ねエで。なるものか。仲丁も燒たが。立派に建た。櫓下などは。前かたは。隱し窻で。あつたが。惣格子になつて。すとんだもんだ。土橋斗。燒なんだか。又燒たから。燒ぼこりと。やらで又。立派に。出來やう。〔新五左衛門〕此ちよひりと。した所は。なんじやへ。〔如雷〕是は八左衛門嶌と云。此向が。佃嶋。〔新五左衛門〕にゝにも有か。〔如雷〕イヤ爰は。獵師斗居る。女郎の有は。八幡の向のさ。新地も近し。石場もちかけれど。新地などは。下卑じやて。のふ船しう。〔次郎〕イヤ其やうに。きたなくも。ござりやせん。しんちの播磨や。などは。よくいたしますよ。子供は。揃ふて居るなり。女共も。能いたします。ちと御出なんし。〔如雷〕こいつは。播磨やに。色が有な。〔次郎〕つがもうせんでも。かぶるな。ねエ。そんな事。するのじや。ござりやせん。旦那どこへ。御出なんす。〔如雷〕さればどこがよかろふ。仲丁にしやうか。土橋にしやうか。河邊の娘が。半四郎を。まねるも。久しもんだ。山本にしやうか。山本は腹がちいさいから。尾花やにしやう。〔次郎〕いつそ。龜山へ。御出なんせ。〔如雷〕イヽャ小花や〳〵。

〔次郎〕新葉や。おなじみなら。先へお出なんし。〔如雷〕さ新さん。あがんねエ。〔新五左衛門〕早いもんだ。夢のやうに。きた。〔如雷〕そんなら。先へ行ぞ。新さん。こつちへきねエ。（如雷と新五左衛門は。新道より小花やへ行。又猪牙来り。川岸へ付。）〔センドウ忠五〕亀山〳〵。エヽふ景氣な。亀山〳〵。（やう〳〵。亀山にて聞付て。女來る。）〔女〕忠五どん御苦勞。蝶卿さん。お出なんした。〔蝶卿〕此間は。御世話。〔女〕御影で。おもしろふ。芝居を。見やした。〔蝶卿〕これは。御禮で伊丹。諸白。（蝶卿は女と連立て。亀山へ行。忠五船をしまいて。）〔忠五〕是〳〵。次郎そしらぬ。顔をするな。〔次郎〕どふだ。忠五久しいの。いゝ事でもあるか。〔忠五〕とんと。いけねエ。ゆふべも。屋形に。能のが有から。いたりや。手ふりあみ笠に。なつた。〔次郎〕おいらも。裾つきの丁子やで。めくりを打て。六七百まけて。夫からおちての。春岡で。こまか有がら。廻したら半分斗。まけはかへつた。〔忠五〕そりやア。まづよかつた。なんとそつちの吉は。どこにいるの。〔次郎〕此間聞ば。のぶと船を。乗ると。聞たが。ついぞ。見掛ねエ。〔忠五〕あいつも。いけねエ。唐茄子だよ。〔次郎〕とうなすだか。茶がまだか。わからねエやろうだよ。客が。まつていやう。後に來やれ。〔忠五〕どのやうな。客じや。〔次郎〕何だか。雨落の。きしやご。見たやうに。しやれのめすよ。〔忠五〕そんなやつも。苦界三年と。附合て。勤たがいゝ。〔次郎〕のちに〳〵。（次郎は新道から。小花やへ行。忠五は船をしまふ。）〔小花屋娘お中〕どふだ。次郎どん。きついものだねエ。前の。お松どんが。居ねエけりや。亀山へ斗。いきなさるな。〔次郎〕こりやア。めいわく。客衆さへ。來やうと云ば。いつでも參りやす。〔お中〕うそァつきねエ。（嘲しの内に奥から女來り。）お中さん。志厚さんの。鳥渡きねエと。〔お中〕横座鋪でか。（お中は座鋪へ行。次郎も勝手の火にまたがつてあたる。料理番も。客大勢ゆへいそがしそふに。）〔料理番〕八助どん。水を。頼やすぞ。〔八助〕アイ。水汲もてエ〳〵ではねエ。〔料理番〕おまつどん。硯蓋持て行ねエ。奥へまだ吸物が。でるによ。（客四五人來る。若イ者料理番。）お中さん。お松どん。お客があるに。〔女〕是は。五郎兵衛さん。ようお出なんした。〔五郎兵衛〕けふは御屋鋪から。御出遊した。随分麁末の。ないやうに。〔女〕あい〳〵。さあ。こつちへ。御出なんし。〔五郎兵衛〕旦那。お上り遊せ。（客はのこらず。奥座敷へ行。）客の風躰は。御大名の。勝手用人とも。云かつこふにて。お納戸茶。羽二重の。小袖に。淺黄。むくの下着。茶色の帯。立派なる。大小にて。京扇子を。ばちさせ。髪を合せびんにて。元結を。四角に巻。宗十郎頭巾を持來る。跡につゞいて。貳人來る。是は勝手用人の。下役手代と。云なり

の男ぶりにて。郡内縞の。綿入羽織に。小紋の秩父絹の小袖。獨りは。太織の羽織に。上田縞の小袖。はるか跡ゟ。棧留の布子に。小伯縞の帶。手に海黄縞の。風呂敷を持。勝手に。居やうと。するを。〔客〕これ〳〵長助。酒でものみやれ。〔長助〕ハイ。（跡について行。是は勝手用人の小使。手附中間なるべし。）五人ながら。座鋪へ行。〔客〕さあ。みんな平に〳〵。〔四人〕ハイ〳〵。（此間に。たばこぼんなど出る。）〔客〕是〳〵。屋敷はやしき。爰はこゝじや。平にし給へ。〔四人〕ハイ。（女鉢肴硯ぶた出る。娘お中てうし持來る。）〔五郎兵衛〕旦那。壹ッ召上られませふ。〔客〕しからば。初て。（一ッ盃のみて。次の男へさす。）〔次の男〕傳六殿。お先へ。（酒を呑所へ女來り。）〔女〕五郎兵衛さん。お百さんは。さして居なさり。やせん。〔五郎兵衛〕ア、たれこれはねェ。美しいのを。揃てたのみやす。〔客〕是は。ざんねんびんしけん。五郎兵がお馴染を。見やうと思ふたら。〔五郎兵衛〕又旦那。悪門斗。（吸物出る。女郎あね來る。障子のかげゟ小聲ニ。）〔女郎〕お中さん。（お中サアきねェ。女郎四人來りて並ぶ。客一盃呑て女に渡す。女盃を上座の女郎ニ渡ス。女郎盃を横にまげて。ちつと斗呑て女に渡ス。女は次の男へ盃を持行。次の男呑て小聲になりて。三人目へといふて女に渡す。女三人目へ持行。女郎呑て女に渡す。又女三人目の男に盃渡ス。三人目の男呑て女に渡す。女二人目の女郎に盃差ス。女郎呑て五郎兵衛へ盃來る。五郎兵衛はさしづめ四人目の新造へきまる。）〔客〕長助〳〵。どこへなと。いつて樂め〳〵。〔長助〕イエ御酒戴たで。やうございます。〔五郎兵衛〕西宮の船頭と。堂前の。あぶらやへいかんせ。〔長助〕イエモ。〔客〕いけ〳〵。〔五郎兵衛〕サア〳〵。（無理に長介をひつたて。船頭と。一ッ所に。堂前へやる。）〔五郎兵衛〕賑に藝者を。呼ませう。是おまつどん。たれぞ頼やす。女羽織に。しやせうか。男藝者に。しやせうか。〔五郎兵衛〕梅太夫が。よかろふ。〔お中〕おまつどん。梅太夫さんを。聞にやりねェ。〔女〕アイ。（女は梅太夫呼に行。跡は女郎と客別〳〵になり。座も少ししらけて居る所へ。梅太夫來る。）〔梅太夫〕是は。五郎兵衛さん。お久しぶりで。〔五郎兵衛〕間違つて。久しうお出會も。致ぬ。山でのんだ。まゝかな。〔梅太夫〕左樣さ。宮本いらいで。ござります。〔客〕ちかづのため。さそう。〔梅太夫〕是は。ありがたふぞんじます。〔五郎兵衛〕なんぞ面白ひものを。頼やす。〔梅太夫〕風流の。馬士ぶしを。お聞なされましたか。〔五郎兵衛〕よかろふ〳〵。〔梅太夫〕豊丸さん調子を。合せねェ。〔豊丸〕よし〳〵。（梅太夫身をかみせきばらいなどする。座頭豊丸三線ニかゝる。）〔梅太夫〕エヘン〳〵うたいわ知らず。儀太夫は。しらぬわれらが。ふつゝかに。唄は元より。しら糸の。難波の。〔お中〕五郎兵衛さんへ。梅太夫さんに。此間はやる。おいらを狐が。はらませたと云。唄を。あて身ふりを。させなんせ。〔五郎兵衛〕梅さん〳〵。狐がはらませたに。しなさい。〔梅太夫〕ハイ こいつは。ちとつらいねェ。

[客]しよもう／＼。梅太夫ぜひなく。狐の身ぶりをする。[梅太夫]豊丸さん。うたいねヱ。ツ、テン／＼。△おいらを狐が。はらませて。御亭になろとは。わしや。やです。やです。やです／＼。やでもです。しんぢつやあでは。なけれども。人目はづかしけりや。わしややです。やですと云事は。いわねヱもんです。[大勢]ハ、ア。[客]是は一ッ興／＼。[梅太夫]これは／＼。盃をいたゞく。お中酒をつぐ。おつと。ござんす／＼。[お中]梅太夫さんの。久しい。もんだ。[梅太夫]いやもう。とんと。酒が。いけやせん。ゆふべも。二見やで。拳酒の。相手をしたりや。聲は。大ヱなしに。なりやした。[五郎兵衛]一ッ斗は。よかろふ。[梅太夫]イエ一ッござります。[女]五郎兵衛さん。ちとあちらへ。お出なんし。[五郎兵衛]なるほど／＼旦那ちと。お休遊せ。客少しめれんのていに見へて。ウ、先／＼。お中お松梅太夫口揃て。ちとげしなり。ませ。五郎兵衛始客はみなく／＼床へ行。[女郎]梅太夫さん。つき出しの。子と。一チ座。しなさつたか。[梅太夫]イ、エ。一チ座はいたしやせんが。此間仲川て。後から。見掛やした。[女郎]すかねヱ。子だがねヱ。[お中]まだなれねヱからさ。[女郎]いけるのじやねヱ。[梅太夫]おかんさんの。くさすも。久しいもんだ。大勢口をそろへて。ア、らつちもねヱ。みな／＼床へ行。客床にて小聲に。[客]此さゝら。さつと捨てさそふらへばア、ブウ。女郎来り。客そらねいる。[女郎]もし／＼。[客]ア、きうく酔ふた。女郎たばこのみて。客にのみ付て出ス。[客]これは／＼。たばこのむ。一チ座の女郎三人ながら来。あなた。御休なんし。おかんさん。お休なんし。[女郎]アイお休なんし。皆／＼床へ行。お勘びやうぶ打まわして。まだ。お寒ふござりやすねヱ。[客]されば朝晩は。はだ寒ひ。などゝいひて。色／＼おもしろき仕打有。[隣座鋪][如雷]新ぼう面白ィか。[新五][左衛門]田舎とはちがつたものだ。といゝながら。やま半紙を出して鼻をかむ。[如雷]是／＼。主の紙はそでねヱ。小菊にしねヱ。小菊を買ふなら。馬喰丁の上總や。五郎兵衛が所が。いゝ。たばこも。兩に四斤くらいの。國分がいゝによ。匂ひ袋の。やうなものは。な。室町の。桐山三了が。所からとりねヱ。又きせる張せるなら。池の端より米沢丁の村田が。所がいゝ。主は誹諧もすこ。やらかしたな。[新五左衛門]國で。ちつと斗して見たが。[如雷]そんなら宗匠へ。弟子入をしねヱ。存義でも。金羅でも。祇徳在轉なりと。湖十なども。よし。菊堂なりと。氣の有にしねヱ。みなおいらが。心安。するからつい。出來るこつた。朱肉や。唐墨の。やうなものは。古梅園が。所から。通でとつて。やろう。ろう石を。買なら。四日市より。親父橋の。彌五郎が

所で。買ねェ。筆も思恭か。流なら。御成小路の。せんちんしと云が。有。[新五左衛門]そんな事より。三味線が。ならいたいものだ。[如雷]そりやァ。なを〳〵安ひ。こつた。儀太夫三味線なら。五八でも。富八でも。豊後なら。文字豊でも。文字久なりと。芳丁の。竹澤園も。よし。[新五左衛門]文字清と。やらは。どふしたの。[如雷]何。文字清か。今では。中村秀松が。女房になつて。子を持て。かみさんかぶだ。[新五左衛門]どこに居るの。[如雷]川岸の。富田屋と云のが。そだ。[新五左衛門]役者が。茶やをするかの。[如雷]するの段か。高麗藏が内は。こうらいやとゆふ。芳丁に西川重三郎と云。人形遣ひ。そうしがへやと云て有。其外に中村や。嶋五郎。蔦屋新万や。竹伊勢と云は。伊勢太夫か内じや。鹿の子餅は。又太郎が見世。向の角の八百屋は。大谷廣右衛門。いつくらも此類がある。(しつたちまんに。色〳〵の事咄ス所へ。女郎来る。)[お長]是おとよさん。ゆふべはねエ。[お豊]面白かつた。ねエ。[如雷]どこで。[お豊]梅本でさ。[如雷]梅本は。ごうせいなもんだ。櫓下などは。のこらず。梅本の地だ。根津にも。店があり。芳町では。子供屋也。[お長]豊國さんの。内だねエ。[如雷]豊國を。どふして知つて。居る。[お長]いつぞや。拳角力の時。出なさつた。ねエ。[お豊]それ〳〵。梅の紋を付て。[如雷]豊國が。拳ときては。凄ひもんだ。[新五左衛門]日が暮じやねエか。[お豊]まだ七ッ過で。ござりやせう。(障子引たて。びやうぶ引廻し。)お長さん。お休なんし。(廊下ばた〳〵と。)[女]お長さん〳〵。ちよつと。きねエ。[お長]何ンだエ。(お長はしごきのなりにて出る。)[女]志厚様が。きなさつたに。[お長]見通しにか。[女]イヽエ横座鋪で。(お長横座鋪へ行。如雷は氣を廻し。廊下に立聞する。)[お長]お前は。さつき。來なさつたじやねエか。[志厚]裏の關口に。清兵衛や。忠公が。居るゆへ。付合に。今迄居た。[お長]又おいかさんを。呼なさつたか。[志厚]おいかは。脇へ出た。[お長]聞にやるやつさ。[志厚]歸りそふもねエか。[お長]武サだから泊りは。しやせん。[志厚]そんなら。また裏へでも。いつて來よふ。[お長]何サ。かみさんの部やにでも。寐て居なさりやせ。[志厚]それも。久しいこもんだ。[お長]なんでも。まつて。居ねエ。(お長は出て行。如雷は廊下にぶら〳〵して居。)[お長]なせ。そこに。居なさり。やす。[如雷]酒に。醉たから。(寐所へ行。すめぬ顔つきにて唄うたふ。)△かあい男に。逢ふ時は。すかぬ。こちらが。しこなしに。(又女來りて。障子ごしに。)[女]お長さん。あけてもよしか。[お長]なんだねエ。明ねエ。[女]セケントコノヲコヒキノ。カヽテケヲ。トコリキニ。キツタ。[お長]イキマカニ。シキコヽウクサカンカ

ガ。モコッテ。クヽルクカヽラカ。ソコレケマカテケト。イキウクテ。ク、レケ。ナカサカイキ。【女】そう云。やすよ。（女障子引立歸る。又間もなく來り。）【女】お長さん。鳥渡きねェ。【お長】なんだの。（お長は出て行。如雷てうしの口より酒をのむ。）【お長】ヲ、能呼事だ。（と云て。お長床へ入ル。如雷まじめになりて。すめぬ顔にて居る。お長心付て。いろ／＼とつとめる。）【お長】たばこ。のみなさり。やせんか。（如雷返事もせずにらみ付て居る。）【お長】お前の。顔にやァ。何かきつく出來。やしたねェ。是にやァ。和國橋の。實路孝を。付なさりやァいゝ。【如雷】そりやァ。色男の。する事だ。（お長指にて。如雷が額をつきながら。）【お長】お前ほど。色男なりやァいゝ。【如雷】何ンの事た。此ふんばりめは。いゝかと。おもつて。喰のめすな。（といゝながら。手を打。）【お中】あいゝ。【如雷】是お中さんとやら。此賣買女。さげて。くんねェ。【お中】どうなされます。【如雷】あんまり。

心いゝとおもつて。何ンのかのと。茶にし。やァがる。其上野郎の。根づけを。見るやうに。蒲團と。おれ斗置て。廊下斗。そゝりやァがる。【お中】お長さん。お前もどこへ行なさつた。【お長】どつこへも。行はし。やせんが。隣座敷で。煙草のんだ斗さ。【如雷】何ンだ。こいつは。うぬがいゝやうな。事斗。打殺されんな。（硯ぶたをふり上る。）【お中】お長さん。お前はあつちへ。いきねェ。（お長は勝手へ行。女共來る。新五左衞門。褌とりはだかにて出ル。）【新五左衞門】どふだ／＼。【如雷】マアきゝねェ。ぬしも知つて。居る通りだ。其上。今も。隣で。煙草のんだの。馬を呑だのと。おれが目をば。こんぺいとうの。附目。太藏二だと。思ふそふな。人を附にした。（皆口を揃て。）何サ。あの子も。そのやうに。悪癖する。氣もねェけれど。【如雷】何ンだ。うぬらまで。上ゲ下ゲを。取な。（次郎。勝手より聞つけ飛んで來る。）【次郎】どふ

でござります。あの子が。氣にいらざァ。外の子でも。お呼なんし。先。氣直しに。ひとつお上りなんし。【如雷】爰の。どふ酒か。くらわれるものか。（といゝながら大さらをほふり出ス。次郎新五左衞門。やう／＼だきとめければ。）【如雷】留るな／＼。（次郎新五左衞門。やう／＼とだまして。むりにかたにかけて連行。）【如雷】ぬし達は。どこへ連て行。此分じや。男が。たゝねェ。【次郎】そんな事いわずと。佃の。ひがしやへでも。行ませふ。【新五左衞門】いやもう直に。歸ろふ。門がやかましひ。【如雷】門が。どふするもんだ。喰付はしよまひ。【次郎】それでも。主が。氣をつかい。なさりやす。【如雷】氣を。つかつても。いゝ。打捨ておけ。煤掃には。出る。【次郎】まあ。なんでも。お出なんし。（漸／＼とだまし。二人して船場の方へ行。）【若イ者】どふもいけねェ。客だ。【志厚】とんだ賑な。客じや。【お中】いゑもふ。いけるのじやござり。やせん。サア二階へ。御出なんし。

お長お中志厚三人。二階へ行。〔お長〕お中さん揃た。とんちきだねエ。〔お中〕お前が。何ンのかのと。云なさるから。わたしや。そばで。氣をもみ。やした。〔志厚〕野良買と。見へる。おまつ来りて。〔女〕わたしも。芳町の。俵屋にも。居やす。新道の。二文字やにも。三四年居やしたが。あのやうな。若衆買は。見やせん。〔志厚〕ひやうたくれ。お長。お中口を揃へて。ついゆふてくの。揃ひだ。ぞねエ。〔お中お松〕志厚さん。お長さん。お休なんし。〔志厚〕もちつと。咄シねエ。〔お中お松〕後にめエり。やせう。お中。お松。勝手へ行。お長障子を引立て。〔お長〕忠兵衛様ン清兵衛様ンはまだ幽口にかエ。〔志厚〕今日は。おかるとおりゑと。一チ座して。梅太夫で。さへて。居た。〔お長〕お前は。誰を呼なんした。〔志厚〕誰を呼ものだ。お長。志厚がひざを。したゝかつねりながら。〔お長〕さあ。いゝねエ／＼。〔志厚〕アヽいおう／＼。〔お長〕誰を。呼なんした。〔志厚〕爰からいつた。大坂女郎さ。〔お長〕あの子は。どこに居るねエ。〔志厚〕何屋に。居るか。〔お長〕名は何と云ねエ。〔志厚〕お鶴とか云た。〔お長〕何。名を。わすれるものだ。などゝいゝて。色々面白キしうち。ことゝく有。折から廊下はた／＼と。〔客〕どうだ。又さしかな／＼。〔お中〕アイ昼から出て。居なさりやす。〔客〕又。出ものか。〔お中〕お前は又。今までどこに。居なさりやした。〔客〕表櫓に。〔お中〕表は。永楽屋にかエ。〔客〕何サあのやうな。變化物屋敷へ行ものだ。〔お中〕何〆。今じや出やしねエ。〔客〕尾張やで。珍ひものを。呼やした。〔お中〕誰をエ。〔客〕このごろ名代の。六部女郎さ。〔お中〕おつな子だねエ。そして。つれ衆はエ。〔客〕外の者は。土橋の。鶴やへ。いつたから。おれ獨りきやした。〔お中〕そんなら誰ぞ呼なんし。〔客〕藝者を。拾人斗。呼んで。くんねエ。〔女〕とんだ事云なさる。よし／＼。わたしがいゝやうにし。やう。〔客〕おまつどんで。なけりや。ならねエ。おまつわ。げいしや呼に行。〔客〕おいせさんは。どうしたねエ。〔お中〕あの子はねエ。七さんと色をしてねエ。かふつて。居なさりやす。女お松来る。〔女〕七兵衛さん。こふ呼にやりやした。利中さんと。繁さんと梅太夫さんが。来なさりやす。〔客〕よし／＼。〔梅太夫〕豊丸さん。こつちだ／＼こりや七兵衛さんお出なさりました。利中。座敷へ行と。[illegible]り角力のまねをする。〔利中〕すまふとろふ。ならこう。〔繁太夫〕かない／＼。かないません。めく／＼らに。〔客〕とんだ事だとんだ。茶釜。〔梅太夫〕茶釜／＼がま。がまたりの大臣。〔繁太夫〕大臣／＼大臣の所へ毛がはへた。〔利中〕はへた／＼。はへたとは物くさ太郎が娘かへ。〔大勢〕ハヽア。〔梅太夫〕お肴一トツ。

出ます所が中村の。仲藏。【大勢】よかろう〳〵。【梅太夫】△皆様の。御ひきにて。一チ郎別當と。たいにんしたる。左衛門祐經。【大勢】いよ〳〵。【お中】秀鶴さんとは。おそろしい。【客】繁さん一トツ賴やす。【利中】私が。出ませう。△藤兵衛さんがお花さん。〳〵と。云なさつても。お花さんは。やです〳〵と。云なさります。【大勢】きつし〳〵。【客】聞か〳〵エヘン。△こいつは〳〵。これで。やぼなら。しよう事が。ねエ。【繁太夫】旦那の。又八は。利中さんのよか凄ひはエ。【女】もし七兵衛さん。誰ぞお呼なんし。【客】今夜は。さへ一ト通りにしやう。【利中】さへ一ト通りの名方。ホヽホヲ。【女】呼やすよ。【梅太夫】お呼なさるのさ。【繁太夫】呼ねエ〳〵。【客】さわぎねエ〳〵。（女は女郎呼に行。）（利中。豐丸。繁太夫。梅太夫。達ぶしにて。うとふ。）△とうなすほどの血のなみだ。落て。かぼちやにやァなり

やしよまい（キタ）きた〳〵きたさのさの〳〵。讃岐の金びら。（女郎來り障子の外より。）【女郎】お中さん。【お中】サア〳〵きねエ〳〵。（女郎來る）（七兵衛酒を呑てさす。）【女郎】ちと御上ゲ申や。せう。【客】まづ〳〵。【利中】おこうさんには。まだ私は。間違て。【女郎】ハイ御頼申やす。【利中】是は〳〵。【客】利中さん。一ッ拳。【利中】サアめエり。やせう。【客】まいろふ。ゴウサイ。【利】ロマデエ。【客】バマ。【利】ロマとつてエ。【客】キウヤア。【利】トウライとつてエ。【客】かなわぬ〳〵。（お長小便に行て。隣座敷聽なれば。そつと見ければ。馴染の七兵衛なり。名代の女郎居るゆへに。客は知らぬふりにて。座敷へ行。）【お長】おゆるしなんし。【お中】お長さん。のみねエ。（おこう。煙草のみ付て。お長にやる。客盃を持て居ければ。）【客】一トツ。あげやうか。【お長】ハイ。【繁太夫】お長さん。中川では。ひどひ目に合せ。なさつたねエ。【梅太夫】何拳か。（お長煙草のみながらむねをなでるまねしながら。）【お長】何。そうもねエのさ。（お中。きせるをふりあげて。お長をたゝくまねして。）【お中】髭なでの。き

ん〳〵か。にくいの。【お長】イヤいつてめエりや。しやう。あなた。ゆるりと。おこうさん。お中さん。皆様ンこれに。（お長は床へ行。）【利中】問ひませう。【梅太夫】とわしやれ〳〵。【利中】刀は。【梅】政宗。【利】小袖は。【梅】羽二重。【利】羽織は。【梅】ちりめん。【利】男は。【梅】權左衛門。【利】女は。【梅】權助。ハヽァまけた。【利中】どふだ。凄ものか。【繁太夫】變化るで。まいろう。【利中】來給へ〳〵。【繁】ばけるは〳〵。【利】茶釜は。【繁】やくわんと。【利】息子は。【繁】とつざま。【利】かぼちやは。【利】とうなす。【利】娘は。【繁】かゝさん。【利中】ハヽァおそろ〳〵。【繁太夫】どふだ〳〵。（鐘なる。）ゴン〳〵。【客】明るそふな。歸ふ〳〵。（女郎お中口を揃て。）まだ〳〵。もちつと。お出なんし。【梅太夫】歸ろ。ぴよこ〳〵三ぴよこ〳〵。（豐丸三味線引掛。繁太夫。利中。梅太夫。）△六ぴよこ。七ぴよこ。八ぴよこ〳〵。九のぴよこ〳〵。十ぴ

よこ／＼。しよんがヱ引。【客】歸ふ／＼。粂太夫。梅太夫。利中も。とも／＼。まだ。おそくは。ござりません。【客】いや／＼。歸りやせう。どや／＼と勝手へ行。先へ行て。せん頭をおこす。お中は【船頭】船はとふに。きて居やす。【客】サア／＼そんなら。此間に。【おこう お中】此間に。【利中粂太夫梅太夫】ヘイよう。お召なさりませ。客は船にのり歸る。藝者はのこらず勝手に囃して居る。【隣座鋪】客手をうつ。【女】ハイ、。【客】歸るから。五郎兵衛を。呼でたもれ。【女】ハイ五郎兵衛さん／＼。【五郎兵衛】ヲイ／＼。【女】お歸りなされ。ますと。【五郎兵衛】よし／＼。駕籠は來て。居るかの。【女】アイとふから。待て。居やす。【五郎兵衛】サア傳六さん。新介さん。歸りやすぞ。客羽織など着て座敷へ出。傳六。新介。目を揩ながら。【客】眠そふな。顔じや。【五郎兵衛】お中さん。御酒を持て來て。くれねヱ。【客】酒より歸ろふ／＼。客先に立て行。跡ゟ女郎不殘送る。【女】お腰のものを。銘々脇差などさし。駕籠にのる。五郎兵衛あとへ立歸り。【五郎兵衛】是。おまつどん。長助さんが來なさつた。なら静に。跡からきねヱと。云ておくれ。【女】アイ／＼。【女郎四人】アイおはゞかり。串やした。【お中 お松】よふ御出。遊しませ。客はみな／＼歸る。よこ座敷にて志厚も目を覺す。もふ夜が明た。【お長】けふは。居ても。よかろふ。【志厚】歸らにやならねヱ。お長帶しめて。志厚に羽織など着せて。二人小廊下へ出る。【お中】お歸り。なんすか。【志厚】此間にめヱりやせう。【お中】そんなら。船を云付や。しやう。【志厚】船じやアイ目立から歩行がよふござりやす。【女】お歸りなんすか。ぞうりをなおす。【志厚】是ははゞかり／＼。志厚出て行ければお長何か用有げに。【お長】志厚さん／＼。【志厚】何／＼。志厚立歸る。お長及びごしになりて。耳に口を當て。ナ、。【志厚】よし／＼。烏啼。カア／＼。烏の声に。目は覺て。殘は枕斗なり。邯鄲は五拾年。是は一チ日一チ夜の樂も。きへて跡なき夢となりにけり。

有の類。専に。用る外に。唐言と名付て。五音を以て。云事人の知る所なれど。爰にあらわす。

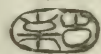
○アカサタナハマヤラワ
○イキシチニヒミ井サイ
○ウクスツヌフムユルウ
○エケセテ子ヘメエレヱ
○ヲコソトノホモヨロオ

右の如く。カキクケコの。五音の字を付云也。譬ば。客と云時は。キキヤカクク又。おんななど丶はねる時は。付字にてはねる也。女はオコンナとオの字へつく。コの字を。はねる也。清濁は。本字に。直に濁也。此外に。し付き付。など丶云て。共時に。おうじて。一チ字置に。付る也。知れざる事を。云時。はやく此事を。考べし。又此通し言葉も。口付て云時は。いかやうにも。はやくいわる丶也。諸人知る所なれども。知らざるもの丶便にと。爰にあらわす。

○とんだ茶釜の辯

是は谷中。笠森に有し。おせんが。美しきを見て。額と。額と。見合。能女とも。譽られず。茶釜に。なぞらへて。とんだ。茶釜ト。云出したると也。

○同藥罐と變化る辯

おせん。引のいて後。山下に。水茶や出る。又此美し女に。聟とんだ。茶釜がやくわんと。變化たと云也。

○獨りでころん(て)啼と云辯

是は。丑の顔見世。狂言に。坂田佐十郎。云し事也。是を。今事云は。女藝者。又茶や船宿の。女房娘。女郎の目を。忍びて。ころぶと云。通言有。なくと云は。泪を出すと。いふ事にや。くわしく。あらわす時は。下戀りとなる。由而りやくして。あらましを。記す。

表紙　ヨコ　三寸七分
　　　タテ　五寸一分
本文枠　ナシ

金金先生著

當世氣轉草

附 瀬川菊之露

序

鐵炮子曰。休腰富嶽。蒼天為笠以釣渤海之鯢焉。其巨靈之謂乎。今　金金先生之逸群亦然矣。如此戲言。能採娼婦之　悉蕩子之情又論妖童評妓男諸家之藝風卓然大之極可使天下遊冶子之傑謂然諸諸也諺曰。嘗乎盡矣哉。如　先生嘗則盡舐皿而未止者也。頃聞路考下世彼之鳴於宇宙也。如有鬼神助之則我儕所不能下筆也。

序

鐵炮子曰ク。休腰富嶽。蒼天ヲ笠ト為シ。以テ渤海ノ鯢ヲ釣ス。其レ巨靈ノ謂カ。今金金先生ノ逸群亦然リ。此ノ戲言ノ如キハ。能ク娼婦ノ　ヲ採リ。蕩子ノ情ヲ悉ス。又妖童ヲ論ジ。妓男諸家ノ藝風ヲ評ス。卓然タリ大ノ極。天下遊冶子ノ傑ヲシテ然諸諸ト謂ハシムベシ。諺ニ曰ク。嘗乎盡矣哉。先生ノ如キハ嘗レハ則チ盡シ。皿ヲ舐メテ未ダ止マザル者ナリ。頃路考下世ト聞ク。彼レカ宇宙ニ鳴クヤ。鬼神之ヲ

因請追善於　先生。先生不辭曰。夫路考天下無比也。無論十目所視。十手所指。閻王已開地嶽釜蓋。而來此土。顏色憔悴形容枯槁。呻吟瀨川瀨川。則開闢以來未曾有之人也。李白一斗詩百篇。金金一斛書一篇。買酒一斛。即把筆也。則命清酒。左擧觴右揮毫。須臾而成。余受而讀之。嗚呼佳矣佳矣。衆人左袒沽之哉沽之哉。夜以繼日。合刻成則出焉。有射錢利。善哉善哉。

助クルコト有ルカ如クナレハ則チ我儕筆ヲ下ス能ハサル所ナリ。因ッテ追善ヲ先生ニ請フ。先生辭セスシテ曰ク。夫レ路考カ天下比無キヤ。無論十目所視十手所指。閻王已ニ地獄ノ釜ノ蓋ヲ開キ。而シテ此ノ土ニ來ル。顏色憔悴形容枯槁。瀨川瀨川ト呻吟スレハ。則チ開闢以來未曾有ノ人ナリ。李白一斗詩百篇。金金一斛書一篇。酒一斛ヲ買ハハ卽チ筆ヲ把ラン。則チ清酒ヲ命ス。左ニ觴ヲ擧ケ右毫ヲ揮フ。須臾ニシテ成ル。余受ケテ之ヲ讀ム。嗚呼佳

安永二癸巳閏三月
山陰萬八言書ニ于千三堂ニ

シ佳シ。衆人左祖。沽ハメヤ沽ハメヤ。夜以テ日ニ繼キ。合刻成ツテ則チ出ス。有射錢利。善哉善哉〳〵。

安永二癸巳閏三月

　山陰萬八言千三堂ニ書ス

印　印

當世氣とり草

實や太平のめてたき御代のためしには。弓は袋に刀は茶屋に。沖中までのつきだしへは。曲駒來つて賑わひ。藏前からの乘込は擔夫きおつて速し。出る嚢。喰めしを待たぬ世の習ひ。由來洒落のために。片時もとゝまる日月なければ。いけよ。おごれよ。飲や。謡へや。めれんに騒けよ。いきの俠助。しやゝらのしやれ藏。なめたかすんはい。一寸さきは闇の夜に。啼ぬからすの音きけば。拾はぬさきの金が戀しく。百兩富を付てみれば。鼻毛は延れと。花も取らす。一かふやけの北里は。やけ石に水で。けつく營作の結構は。昔に十倍し。其繁榮スットコ　サイく。太夫格子の九十目六十目には。地下の貧客手さしもならず。是天上の豪客の樂と見ゆ。中三は貳朱銀出來てより。勘定小ずいこに。つけ廻しは六十目。晝夜は貳角若クハ一角。河岸は六百。此六寸も他の六本とくらぶれば。お月さまとなべふた程の違なれば。其外は云ふもくだなり。絳帳の百女には。供部屋の僕腰を輕くす。品川の十匁は古今に廉く。錦の衾の損料にも引當らず。十匁の女郎に壹分の男妓。駕ちんの壹貫もおかし。橋向ふの四寸は。四文錢で懐にしやすく。てつきうは波文錢の五十女かと疑はる。中町。土橋一角に晝夜は壹兩。此地の遊。外ゝの脱勢局とさらに別なり。妓女の六ツはやぐらより高く。たかいやぐら下は却て貳朱。羽織の娼妓。地女の眞似をして。通りものを誑す。去年新宿にごまのはい出來てより。六百七百四百女。家並まばらに女郎又少し。只ある物とては。糞培馬と甜瓜や落蘇の問屋なり。其風其くらい品川深川をくだる事はるかなり。氷川見せ付十匁。二間もちの女郎なく。時ゝ疊をたゝいて鼠を呼もしん氣なり。神明は四六。根津は四斗。千住の四六は外と前後し。板橋。三間堂は共に貳朱。大根ばたけには奴のもやしの名をとり。鐘つき堂には角べ獅子舞こむ。赤城十貳匁に音羽六百。いろはけころは貳百。三百。裾つきは貳朱。あいけふの貳百。四百は。いつか五十。猫茶屋。馬道。入船丁。三角屋敷に麥飯の名高く。黒門通りに佛店。挑灯店に。車坂。てふせん。鳥こへ。六間堀。あたけ。菊坂。綱打場。赤坂田町。三田新地。猪の堀。どぶ店。万福寺。やぶ下。市兵衛。鮫が橋。數ある中にひとり煩惱のきづなを離れたる

は。神田田丁に大橋はしづめ。其さま其風俗ならす。又その味淡く。水の如にして。無味の所より。自然と微妙の味を生ずるは。光野山にて廣法大師。涎を流して考られし衆道なり。其衆道。廣法大師はじめ給ひしにや。お初穂の賽銭殊に尊く。堺丁。ふき屋丁の太夫子は。太夫棧敷の打ぬきより有難く。なみの娼童に樂屋新道は春宵斗でなく。いつでも一刻價壹分。則辰年の石工と同し。葭丁神明は其風ひとしく。湯嶋。平川又同しからず。代地赤城に花房丁は。常に葭丁のゑらみくずなり。概此衆道は。どこもかしこも。お初穂には替る事なし。堺丁。吹屋丁。木挽丁ばかりは。其お初尾異に。其風も又別なり。名代新下りの總角も。お初穂はかはらねども。行るゝに従つて。其冥加錢は參詣の心もち次第なり。しかはあれども。前とうしろのちがいばかりで。其通ひゆくものゝ戯家の情は。みな一なり。暫時の逸樂に甚しきは家をわすれ。身を失ふも有。少年せき込ては。爺なければよいがとかこち。お屋敷たらされては門のかぎりをうらむ。家業のいとまに我身をぬすみ。家の出入に人めを忍ぶ。自ら稱して通りものと。めつたに云酒落と氣とりと。髪のものずきは。後ろの中すり。さんたはら程剃ひろげ。鬢の毛ねずみの尾に似たり。自ら云瘧疫本多と。華蓋石佛の眉より細ふして。自ら稱す癘風眉と。腰にたばさむ細身の河鮫鞘。右に帶一ツ蘂瓢。梅花鞘はさながら水萊菔に玉蜀黍を貼たかとうたがわる。印華布の細帯敵骨をしめ。細毛布の三德鳩尾へさし込。柳條縠の小袖も酒かびあらはれ。八丈の襦も少し色さむ。鼻に見へる色男。顔は黒ふしてきせるは白し。三まいの箯輿も翅なきを恨み。双艪の猪牙も鰭なきをもだゆ。潮引てはつき出し石垣高し。月皎々と照ては。其俤ます／＼床しく。雪ちら／＼としては。其すがた髣髴。土手の風景海はらの眺望も。心こゝにあらねば目に見へず。程なく入込茶肆のもてなし。牽頭妓女のしやれ頓作。下戸は硯ぶたの佳味へ付こみ。上戸は水肴の淡きをこのむ。興たけなはに時移り。下戸も上戸も泥の如くに。牽頭。船舎。茶屋。藝者。とも／＼およぎ出す縱横十文字。初會の見せのまばゆきも。牽頭末社にくるめられ。よふやく篇子廊下へかゝれば。拍子木なふして女郎ひざをなをす。子どもやお茶を汲めの聲あれば。若ともの付來り。愼んで手をつかゆるもおかし。見たてさし名のおもいれに。心まちわるいの咡あれば。のろま胸をいたむ。おしへしさしぬきわり付とてより。待事しばらくにして。出てくる

外面如菩薩。本多髷には何本もさす。かんざしは金。櫛は奇南香。たばこ盆さかづき臺は禿のせいとひとしく。初會の盃事は。其おもむきふるく。お定のツッチャタヘンセテヒ鉢。硯ぶたにくくらひ物のなき。妓女末社がしやれの數々。長哥のキイ〳〵聲。こはいろのわれ聲。三絃の高音。とり〳〵さま〳〵。お客は鼻毛を算れる最中。喜の字弁天臺來り。新造もる事しきりなり。牽頭末社に飲且くらひたのしまれ。お客は卓とする。女郎は目をすへる。やゝ時うつり料理出れば是をきはとし。娼婦は坐敷つんたち廊下ばた〳〵。隣り部屋での偸嘴且茶碗酒。お客初めてためいきをつき。嘗て志す處の硯ぶたにかゝる。程なく床廻り新造かむろ來つていざない先たち。初て入芝蘭の室。まづ長持のどふばらで。おてきの定紋を覺ゆ。床ちかい棚の巧は。いかなるやつの物すきぞ。掛物おき物飾りもの。香鼎いけ花丁子風呂。料紙硯に唐卓子。源氏湖月に万葉抄。樂器投壺に琴三絃。鼓弓尺八長行局棊盤。吹雲太鼓に將棊盤。衣桁にはかく羅綾のころも。長持にはつむ錦繡の衾。金壁の画は誰が筆ぞ。席の上のかびはどこの奴の反吐ぞ。なんのかんのゝお定り事も濟て。りきんでわざと嫌がるよふなふりするものを。無理に屏風の中へおし込。新造かむろなぞたばこ吸付る間も久し。牽頭末社に茶屋舟舍は。明ケのむかいの刻限を約し。跡しら川で下へおり。女郎とも〳〵寄合て。客の鼻毛のかず〳〵を云たて。わらひなぐさみなどするもにくし。お客はたばこもよつ程廻り。湯茶もとつくり循環し。屏中褥上獨りためいき。欠し。伸し。長くなり。短くなり。待事良久して。モゥ來そふナ物だ。坐敷の内から何もきらう躰も見へなんだれは。いかなモゥ來そふな物じやと。待ど。くらせど。いかな來ず。よふ〳〵歩檐に上草りの音すれば。イャ來たぞ。是なんめりと。ちやんと寐たふりなぞして。かたづを呑て居て見れば。新造め來つてたばこなぞ出し行。へ是はすこたんだと思へども。しかたもなく。又たばこ湯茶なぞ用ひかけれど。淋しさはさみしく。家の首尾なぞの事が。いとゞ氣に懸り。いろ〳〵と獨り述懐し。臥し居ける所に。又しも上草りの音すれば。是こそ急度て來たり」と。又前の如くそら寐入なぞして。少し鼾の音鼻へぬかして居ければ。又今度もそれにはあらで。隣り部屋の女郎めが。もふはや掃除にいつて歸るなり。いとゞいま〳〵しく氣をもがき。これはマどふしたものだ。何をしてどこにけつかるかと。獨り切齒思へども。さながら呼びにもいかれね

ばᵒどふも仕かたもなく。こんなずるいやつに取あたつたが。今夜の不運なれば。いま〳〵しい。いつそ今から茶屋めを呼にやり歸ろふか。いや〳〵ひよつととめてなく歸された時には。あらほどの玉を得ながら。から手で歸るは何とも殘念。今しばらく辛抱せんと。むねの動氣をなでおろし。とやかくして居るところへ。思ひがけなくすつと來られたれば。南無三寶とずつと寐たふり大鼾。おてきは例の定り口上ヨウ寐なんしたそふなね。目をさましなんし。ヮツチャ今まで下の坐敷で。投壺の稽古を見ていゝしたと。云と客めは寐入たふりウ、ウ、ウウンくらい目のさめたふり。細目におてきをちよひ見れば。また寐をらずに枕もとで。よふ〳〵さの字なりくらゐの事で。たばこくゆらせいるも大キな思はせぶりなり。よふやくにして屏風たて廻し。夫より後はいさしらず。元より予が筆力も及ばす。

明ケの七ツが鳴ると間もなく。茶屋出むかいと聞よりも。女郎は嬉しさ年ン明の思ひ。のろまは名殘おしけれども。初會といゝ茶屋のまへ。是非におよばず起上り。手水其外衣紋なぞ取つくろい。ウジカハすれば。むかいの來し上からは。其間もうるさく。ちつとも早く歸したけれど。東方未明モチット居なんし。と云ながら。羽織手づからうしろへ懸るも。ちつとも早く歸したいこゝろなるに。そふは氣とらず。のろまは天女に羽衣をさづかりし思ひ。然りもとからぞつとしながら。紐取むすび。別れのさかづき姿みそに乾梅を味ふ。漸夜もすでに明ちかければ。のろまは心殘れども力およばず。階子をおりれば。女郎は夢中で送り出す。見せさきの不寢番。草りをはかせ。ガラ〳〵ヒッシヤリトントン おろせば。女郎は是から本の女悅に趣るも有。又はそこゝ寄合て。

夕ァの客のとり〳〵噂。たがひにいひならべて笑ひのゝしるもにくし。むま事棚さがしと号しては。硯ぶたのつまみ喰。鰤のあたまをかんざしでかちつては。茶盌のひやざけ。重さかな。硯ぶたこと〳〵く喰盡し。蠟色の衣厨より取出すざせん豆。崑崙瓜つけ。蒔繪の椀にも。雪花菜の烏麻いり。蠔蜊のむきみは藥玉のふた茶碗へくすね。小たんすの鎖前引出しには。甘藷のいてころばし。櫛匣のかけこにも青脊のでんがく。神主の吸物は行燈の下さらであたたむ。きのふ三人でもやいし豆腐。今喰ふ價の實。たらふくうんと喰込て。初めて寐れば。風呂わひて見せさき掃除最中。一睡二眠寐ておきる四ッ半。九ッ前。寢おき湯上り。其つら飼面だらけ。麥麩鐵漿は二人もやつて壹文づゝ買。鏡は在ばかりで鏡架に飾し

近年女かみゆひ行れてより。或は月極メ。あるひはふり。ふりの本結は貳百に極る。本多は百に。なで付は五十。口利雜談かしましく。身しまいはかどらねば。下からさいそくしきりに來り。漸粧成て又見せ坐に着く。茶碗酒にかいくらひ。間夫のちよひ逢ひ。質のやりくり。其奥。その穴。其實を知ては。餘り骨折て命から二番めの金銀をついやし。御意得る程のものとも思はれず。去ながら。人の好惡は人のおもての同しからざるが如くなれば。只其人のおすきな事をやらかして見らるゝが幸甚ならん。ましていづれ遊戯の事。戯氣たわけをつくすのも修行なれば。是も一時かれも一時なり。

誠に太平のしるしとて。昔も今も變らずに。日に増し繁榮するものは。東都に三ッの優戯場なり。則ち樂の餘風にして。寔に治世の玩び。人を和するの器。善をすゝめ惡をこらし。憂をわすれ鬱を散し。治平に居て乱世のおもむきをしる。少年も仁義のはしくれを嗅つけ。女童も自然と古人の姓名をきゝかぢる。先つ霜がれの霜月にも。年ゝかわらぬ顔見せの賑はひ。中ゝ他の事の及ぶ所にあらず。此地よりまつ一陽來復す。入替り定れば。妓男つけ四方に廣まり。下り役者の乘込は廿七日を極とす。來る人逢人迎の人。めつたに祝ふおめでたいと。祝ふて一ッ打ませふ。初謡のさかづき。肴の一角。千早振神無月になるやいな。所ゝ方ゝから棧敷の云こみ。前後をきそふ。積物幾ゝとして山をわらひ。やぐらの幕のあたらしき。招牌はたちまち數頭の彩雲をあらわす。來る人。行人。止る人。見物の群集はさながら籬にごにやつく讀饒の如し。行んとすれども行れず。引んとすれども引れず。足地を踏ざるにおされてすゝみ。もまれて戻る。實に容錐の地なし。木戸の仕着せは定紋そろふて鮮に。仕切場とめ場の俠風俗。棧敷番のおとなし顔。半疊中賣火なは賣。左右の看棚は鰶魚のすしの如く。內みす太夫新格子。向ふさぢき土間さぢき。中の間追込切落し。羅漢臺はさながら人で造つた階の如く。戯臺のすき間は木曾海道の蠅のごとくに集る。茶賣の不遠慮に大股なる。割込酒直を取て却て人のひざを痛む。饅餅おこしみかん/\。めりやす長うた新浄瑠理。しばらくのせりふはへ。みかん喰盡して皮を投る事。恰も蜂の起るが如し。幔あけ少しおそければ手を打事。百千の雷も一度に落くる斗にて。貴賤老若僧俗男女。魂飛び胸さはぎ。耳へ指の栓をこむ。棚屋は元より花美を盡し。大臺

の造り松は枝をさかへて五尺間口へはびこり。くわし臺八寸盃臺。さかなすい物硯ぶた。香盃かけはんおき巨燵。器物調理の潔き。女中は夕ア一かふ寐す。夜通しのしたくの鉛華は。中入を待すに斑に。棧敷うら道狹ふして髩さし邪广になる。茶屋に壹分の擲あれば。若ヒ者來て御機嫌を取る事しきりに。せまい所で汁吸物をもるも。ならひしよりなれわざ。切落の雜入は。茶を呑事も隨意ならず。棧敷の吸物のいけを美む。お國侍は間戶明りのかたふくを見て歸る事しきりに。地廻り下駄組空色合羽はこゝをせんどゝ入込。ヘイモシちつと入れてくんねい。今出ていかあなには。いかなる飯にかへての好も。おのれが膝をかゝへていれる。ひざの上の尻にふせうのならぬ喧嘩あれば。留場來てつかみ出す。鐘鳴やめば道具立揃ひ。裝束出來れば拍子木かちつく。間もなく讀立る妓男かへ名の次第。花道の出端には祝ふて手を打。引合の株廣めの口上。家ゝの風得手／＼の藝。實事あら事惡和事。おやま方娘方小詰中詰色子たち。根元の中村座は。しは／＼出す二のかわり。三の切。親玉海老になつて臭氣絕へす。市紅物故しより一座評判寐入る。秀鶴が高名日ゝに天に沖り。おすもへすも仲ゝでありしに。一朝病に臥してよりとり／＼さま／＼の評。又は此世を悟りきり。黑のころもに身を染て。狂言綺語を離れしといふもあり。あるひは狂氣乱心物の氣なぞと云なせしが。幸なるかな恙もなく快氣有て近頃より出勤。此上もなき世上のよろこび去ながら。病後の事にてさしたる仕打なく殘念。しやれの先生は松本になつてもしやれ。あんばいよしの煮賣は事にさじきへうれ。淸玄か謀叛は念珠のきれしよりおこる。みた次郞さまにはロツチヤ眞實心中車。五郞は株の拔萃。まづ評判一座に鳴る。芳澤が阿古屋は慶子をもとき。氣どりは春水の漲るが如し。岩井がおはつはいつもぼつとり。外のあたりに杜若なく。仕打の乱れぬ一輪咲。その香かふばしいと斗の評判。大谷の友印は革たび賣の門兵衛であて。かみなり瀨平で今に雷鳴。月の輪の傳三は天幸ちもなく大きな聲でいさぎよく。あいこの若はいと海丸し。市村が土木は大器の晚成。けつく元よりよいとの評判。太夫梅幸が三役四役は覺悟のまへ。景淸五郞は元よりお家。梅幸が十郞。かぶの重忠。雷子は臍をさらつて二十五丁さかつていよ／＼鳴。吾妻で仕込だあこ屋は傀儡女の巧者な仕打。お寺小性の吉三は菅原八重巳來の當。民ともになんしをよろこぶ。かわゆらしいお七は。師匠うつしと江戶中で雄二郞。

十町が五郎丸はいさぎよく。杉暁が輿吉は。目黒の先生の跡だから不羈。跡をはねさせんと欲する團三郎。同三が仕打はまづのはね。松は久しいものなればとて。松助が仕事し輿丁久しいもの。いまだ太神楽の曲はちほとはねず。探丁吹屋丁を去る事二十五丁にして。妓男もしげる森田の座。中富此地へ下つてとかく兩座の入を奪ひ。古今の當りを取妙術ます〳〵あらはる。僞勅使の二度出は体めつらしく。初めは悠美に後はおかしみ不淺。女景清の闘手づよふしてしかも愛あり。椀久の所作は殊さらに妙に。女由良石なみの仕打は落着てりきみなく。當時たへて仕手なし。付添ふ野鹽が艶色。見る女中には上氣せぬものもなく。万蔵のさいわかは五郎の堀出し。草摺引の勇猛なる。三ッはた姫の泣出しそふな。判官の奥方では山の非へ賄賂二千兩。山下が艶情には誰もゑりもとから。そつと秩父の重忠の奥さま。しりと藝とは飛んだもの。素袍大紋の出立は。うしろの挑灯さながら山の手の火事の如し。みやぎのゝ花のたては。又一入の花やかさ。いつもかわらぬ艶仕打は。本に今でのきん〳〵作。三舛が三階の羅漢は。どふやら如重卵。工藤の死裝束はめづらしく。初春といゝちといな物。お家の外郎も此春はうれず。十藏が鬼王はさながら兒雅の爭走くら。例の友きり丸をさがしては打擲せられ。水激龍躍り。名劒尋ね得るに至ては。其勇壯江戸中の目をおどろかす。石堂は勇美にかたく。寺岡平右衞門は女房のあたまを。足でおさゆるもおかし。雷子が朝比奈は飛んだ思ひ付。みやこ言葉を楚語になまるも面白し。又京ノ次郎の旅すがたは餘りやすく。三ッはた姫と姪の仕打はお家。百姓次郎作で頓氣の度兵衞。上下での舛とりもおかし。是業か同三も續て勘平となれば。鐙を取られてさわぎ。二ノ宮判官は山の井ぬにけしめられ。思はぬはらきり。御家老の長十は竹べらて一入の苦痛。魚樂强盜をやめ人がらを繕れば。却ておちを失ひ。翻風が九太夫も刀をぬきかくれば。久しいものかびがはへると笑わる。笠やが佐五たい飛脚の本田。いき引きらぬに吃奴の立往生。三國が山の非は。コッサ工ミの山事おのが名よりも高し。ジイノ〳〵に至てもその樞機はあやまたず。切幕上ゲみす上ゲ紙格。拍子木引幔道具たて。囃子方は呂律を極め。作者は智ぶくろの底を振。年〻新下リ入替り。其さまその態を盡し。顔見せ程なく二の替り。後日の曾我に曾我祭り。土用やすみ秋狂言。又顔見せの入かわり。四季に絶せぬ見物はエイトフ〳〵又エイトフ實に治世のたのしみなり。

附録

瀬川菊の露

高明は鬼神かならずこれをにくむとかや。去る程に路考は其藝才艶色。みな世のしるとおり。千万人にすぐれて。世上に古今獨歩ともてはやされ。染もの帯にも路考茶の名をとり。櫛搔子かんざし糸まき手拭ひ團扇までも。ゆひわたの紋あるをば。男女老若ともにまづ嬉しがり。世のあいけふ贔屓しり持大かたならず。爰に過つる卯の年四月頃よりも。何となく風の心地にて例ならざれば。醫療祈念におろかもなく。元より路考王子の稲荷は故有て信心の事なれば。祈誓をかけまくも。何とぞ此度の病氣平愈致し。ふたゝび戯臺へ出る様に〳〵にと。身内近き何がしを頼みて。一七日の内通夜をなし。一心不乱に祈念淺からざりければ。神も納受やし給ひけん。一七日に滿ずる夜。ねむるともなき枕の夢に。社檀俄に鳴動し。稲荷大明神御聲高く。

出さいでどふせふ。出さいでどふせう。もとが王子の稲荷の子じやもの。出さいでどふせふ。出すとも出すともと。あり〳〵との夢ごゝち。さては今のは正しく稲荷大明神の御告ならん。嬉しや祈りし甲斐有て。出さいでどふせふ。出すとも〳〵。との御託宣は。全く病氣平愈いたし。早速出して下さるとの御事と。誠にありがたさ肝にめいじ。社檀にむかひて三拜九拜。其まゝ宿所へ立歸り。昨夜一七日に滿ずる夜。眠るともなき枕の夢に。かく〳〵の御告ありければ。程なく病氣平愈あつて。やがてめでたく戯臺へも出るやうになるべしと。路考聞よりコハ有難き御告かな。稲荷の御神いまだ我身を御見捨なふ。出してやろふとは有難い御尻もち。妻子の歡び大かたならず。座本までの大よろこび。いよ〳〵祈念怠らざりければ。誠に御託宣の加護によつて。

日に増し病苦くつろいで。顔色もいつとなく直り。朝夕のものとても次第にすゝみければ。全く以て稲荷の御蔭斗で。今度の長病恙もなく平愈したれば。何かを差置ても親玉稲荷へお禮參りと。頃しもはるの事なれば。天氣も續てうらゝかに。四方も霞て飛鳥山。八重と一重を咲ませて。淺からざる興もあれば。駕供の者なぞ。それ〳〵に云ぐし。携重提爐なぞ取とゝのへ。賑しく參詣し。猶も祈念をぬきんでゝ。日も夕陽を限りに宿へ歸り。彼や是と快氣の程をこゝろみるに。いよ〳〵の全快なれば。さらば近日日がらを撰び。出勤せんといゝければ。家内は元より座本までの大よろこび。路考は猶も親伯父の跡をくみ。瀬川のながれを深ふせんと。久しぶりにて辰の二月廿日より出勤。サア出るやいな俄の大入。其評判天下に鳴り。貳度の顔見せ。古今

に稀なり。時に仕打は女朝比奈のやつしにて。實は傾城舞鶴を勤らるればとて。裃のもよふに舞鶴を繡せられしか。其鶴しりきれ鶴であつたやら。出ると其まゝ十日も立ぬに双方丸焼となる。是非に及ばず。路考もまづ深川邊の妾宅なぞへ引うつり。そこゝと病後をいとひ居られしが。時なる哉。命なるかな。又しも同しき夏の頃より。心地例ならず。深くいたわる所ありとて病の床につき。其體さらに輕くも見へず。氣遣はしきよふすなれば。妻子厄介のこゝろの內。初めに増る一入のうき思ひ。路考病氣日に増しつのる難病にて。醫療醫藥も驗なき事なれば。今一番むしかへし地ぎりになろふと云はらで。稲荷さまへ祈誓をかけずはなるまいと。身うち其外皆寄合ての評議。座本市村よりは猶さらの事。是までの病氣と云。又今度のむしかへしと云。とかく一通りの病氣と見へねば。何とも安堵ならず。もしや此人に若ジもの事でもあつた時には。たとへ此節芝居の普請出來たればとて。此さね柱ない時には火の入とても心もとなく。彼是以て内外のため。是非に今度も。王子の親玉でなくばいくまい。あなたは外とも思しめさぬ事じやに依て。あまへるぶんな大事ないから。ひらに親玉への祈誓をこそと云つのれは。妻や子ともはなる程と直に其意に任せつゝ。いそぎ王子へ代參として。身內の何がしをぞ遣しける。程なく王子の宮居へ參拜したれど。たん／＼のむし返しの事なれば。胸はどき／＼しながらも。神の告をも待て見んと。まづ六日七日と通夜し。今夜は勝負聲の懸る夜じやと。角大師のよふになつて。七日の夜をはりつめたれど。夜通し何の御沙汰なし。是はいかなる御事やと八日めの朝。本に狐に玉を取られたよふになつて居るところへ。路考が宿所より人來り。昨夜七日に滿ずる夜なれば。定てめで度御告あらん。其よし委敷聞たしといへば。いゝへ。夕アは集をかへられたか。こつちへは何の御沙汰もござりませぬ。是もわるい事でもござるまい。坪ふりの役じやから。勝負聲の懸るまでは。いつ迄なりとも待ませふ。かならずこちらをばお案じなされますなといゝ歸し。猶も一心不乱に籠り居て。程なく二七日とたちゆけども。うんともすんとも。更に御告なかりしかば。いよ／＼信を取て。今一七日合せて。三七日通夜しなば。などか勝負の付ざらんと猶も祈念をこらしつゝ。程なく三七日に滿ずる夜。はや丑みつも程近く。社頭の神燈瞑ゝと。いともの凄くすみ渡り。眠るともなく夢ともなきに。社檀虛空に光りを放ち。珠の扉をおしひ

らき。白髪たる老翁稲の若穂を擔ひ。階の下におり立給ひ。善哉〳〵われはこれ。是まで路考がかけ身をはなれす。加護なす所の王子稲荷大明神なり。先に彼が病氣のところ。我を祈る事の切なるにめで。通力を以て本復を得させ。則戯臺へも出せし處。又候今度の打返し。是全く天の赦さぬ命數なり。今儞何ほど信をこらすとも。只一たびじや。一たびじやと。宣ければ夢の内にも。さては再應の願とては御納受もなき事かと。稲荷大明神の御裾へすがり。アヽラお情なの蒼稲魂ヤナ。祈誓ねがいも只一たびは御納受有て。二度と叶へて下されぬとは。それは餘りお胴欲さまよ。去ながら。無理にコフいゝあら立ても。こつちは凡夫のすべたの身。おまへは通力變化のおや玉。腕をししてはコリヤ叶はぬ。馬矢の振舞喰ぬ内。尻引からげて歸りましよ。去ながら。只此上のお情には。是ぞといふて家内へ見せる。慥な證據を下されかし。それを規模に立歸り。路考初め家内のものへも見せ申度候と。いと念頃にねがひければ。稲荷大明神重ねて宣はく。善哉〳〵。神妙なる今汝が願。尤に思ふなれば。いで〳〵印をあたへんと。内は何かはしら紙に。封じこめたる御符のてい。いそぎ宿所へ持參なし。早〻封をひらき見よ。内に三字の文字ある程に。其意を考へ判讀せよ。ゆめ〳〵疑ふ事なかれと。聞とひとしく夢さめて。忙然と起上り　四方を見れば。件の御夢想に授りしところの御符。我枕もとに有。是こそ物よと。とるものも取あへず。早〻宿所へ立歸り。昨夜忝くも稲荷大明神我枕上に立給ひ。眞ツかく〳〵の御告あつて。則ケ様の御符をこそは。夢中に授り候と。事もくわしく云立れば。家内をはじめ宿老も寄つどひ。取る手もおそしと披き見れば。何とも御符らしくも思はれす。一タヒとばかり片假名交りに三字あつて。外に何にもなかりけり。是はかはつた御札かなと。皆〻不審しながらも。誰有て一人判讀するものもなきに。漸〻一人言出せしは。此御札の三字の意味。皆さまには何と思しめし候や。我等不及ながらも。漸此三字の意味を考付申候。只今判讀致べく候得ども。甚以て歎かはしき御事に候へば。此場で考の趣申演候とて。今となり詮もなき事に候あいだ。判讀の義は御用捨に預りたい。さて〳〵是非に及ばぬ御事かなと。涙ぐみて見へければ。家内のものはこゝろならず。たとへいかなる不吉不善の御告なりとも。神慮いかでか疑ひ申さん。はやとく〳〵と御判讀。承りたいと有ければ。なる程左様ござりそなもの。只お歎の所を察し

入ゝ申兼はへども。私とても親戚の事。申さぬ時は伏藏致すに似て。且は本意にもござらぬから。さらば私考の通。判讀致ましよふが。何もさしてむづかしい判談でもござりませぬ。一タヒと申す三字の字畫を一ッにして見れば。死と云文字になりまする。これ全く病終に平愈せずして。死すると云御告なりと。いへば家内を初めとし。一坐に在あふ人ゝも。なる程〳〵其御判談。少しも神慮にたがふ事あるべからず。此御告を聞上は。最早看病介抱にも力なく。妻子は正體あられもなく。取乱したる其有さま。路考も苦しきまくらをあげ。せつなきいきの下よりも。最前よりの委細の樣子。我日頃信心なす所の王子より。今其通りの御告ある上は。いかで病の平愈すべきよふもなし。とても人間の定業は免れ難し。今歎くとも甲斐なき事。是までの命數ならめとありければ。妻子は元よりあるにもあられず。吉次雄次もいだきつき。迚も叶はぬ御命。御身まかり給ふとも。われ〳〵かくてある上は必しも。跡の案じは、給はず。未來佛果を得給へと。いと念頃に臨終を見とゞくれば。さも嬉しげにうなづきて。何かいはんともがけども。はや絶脈に舌こわり。次第に落入るだんまつま。嗚呼昨なるかな。命なるかな。行年三十三歳を一期となし。安永二癸巳年閏三月十三日終に空しくなる。人ゝ夢の心地にて妻子はわつときへ入斗り。目もあてられぬ有樣なり。扨しも有べき事ならねば。野邊送の葬儀取行ひ。本所押あげ大雲寺へぞ葬むりける。法名正覺院響譽十阿方順居士と。石のしるしはいちじるく。ひいきの人のなみだ雨。くちぬたもとはなかりけり。

去にてもさしも名高き路考。すでに此世を去ぬれば。此後芝居もさぞや。物たりぬ風情にやあらん。誠や路考は幼年の頃よりも。數おゝき妓男の内をひとり拔んで。人のひいき世のあいけふ。隣り芝居でも追善野送りの狂言をし。向ひ町でまで。慶子が石橋を追善にすると言ほどの事。餘り希代の名譽を取し樣。全く凡人とは思はれず。かねてより沙汰しはべるは。路考幼年ゟ何やらん。鬼神の付添居て。生涯の内命後までも。力を合せ加護なし給はるときく。是は定めて路考故意の王子稲荷かと思へば。なか〳〵左樣のまだるい神ではなきよし。大形は天狗のつき居たならんか。何にもせよ。よいめでたい神さまに見込れしゆへ。一生死後までの仕合せ。野邊送りなみの日にも。此御神末社けんぞく夥しくあらはされたり。また其外にも病中命後まで。此御神の加護奇特。及ばぬ筆にも書の

へたき事どもなれど。神罰とがめ恐れあれば。中〻こゝにはしるしがたし。又ッタ元より。瀬川の流れは廣ふして。末汲ものゝ多ければ。跡の路考も見へてある。又二代めの評判を。松のうら葉のすへまでも。恵みのふかき君が代は。さかへ〱てめでたけれ。

跋

金々先生既ニ此書ヲ編シ終リ。嘆シテ云ク。世人皆癡（バカ）ナリ。余獨リ哲（リカウ）ナリ。鼻ノ高キコト三千丈。舌ノ長キコト一萬里。其ノ極。億兆ノ金ヲ得テ。日ニ天竺ノ頑童ヲ犯シ。紅毛ノ戯場ニ徘徊シ。時ニ中華ノ青樓ニ遊ビ。以テ壯年ヲ樂マント欲スルナリ。豈愉快ナラズヤ。昧僧（マイス）嘗テ謂フ。天上天下唯

我獨尊ト。想フニ當ニ二千七百九十五年

前。金々カ爲ニ道フナルヘシ。

雲突題 印

安永二癸巳年四月

書肆 安原平助版

表紙	ヨコ	三寸七分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸一分
	タテ	四寸三分

夫蓋色着志按之保假與謂諺
實哉考遠異國於夏桀有多輪
戲殷紂有置掌氣夢相次而周
幽唐玄之有邉羅望優倭朝二
二是皆傾城傾國
之不覺眞僞而得馬鹿之俗況
下下之於四民于哉豈可不懼
矣故先聖禁無自女色大平婦

遊婦共深破魔留則者寧受是
等浮名雖然誇今並太平之杲
四隅于有遊廓而貴賤重代賎
寶家國於墮落彼一々千號是
於謂百百之太魂歟因茲當世
戯婦風俗高下之太槪記号而
謂婦美車紫鹿與于時安永三
甲午孟春　浮世偏歴齋道郎苦先生述

婦美車 紫鹿目録

艶女乃夏帽

生姜市れ出會

九蓮ふ定

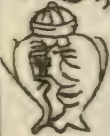
ゑる梅茶屋の旅

ふ川肩衣色

夜中の口舌

書ちてあのてき

以上

附り御隠島ん亂

遊婦之譜并招婦之辨

遊婦といふは。人皇七十六世の皇帝鳥羽の院の御治天に。嶋の千歳。和歌の前を大内裏に召れ。男舞を叡覧有しより。公武の權門政家。又は地下の百性町人迄も。專ら是をもてあそび。しゆゑんのあいてとなしけるに。おりにふれては。露の情もありしよりはじまれり。いわゆる男舞は。水干に立烏帽子。太刀を帶き立まふをいふ。其後磯の禪師娘しづか抔にいたつて。水干に立ゑぼしにて舞。これを白びやうしとなん唱へり。其外仏。妓王。妓女。力士。力女。數多あれど略す。時うつりて元曆年中に。平家の一門讃州八嶋にてほろびうせ。妻子半をつくして浪にしづみ。中にも生殘りたる女嬬。采女。青女房は。つまなき下部に嫁ぎ。又は賤敷土民百性に嫁し。その便りなきものは。長州赤問。文字。下の關。あるひは播州室の津。江口。神崎の津〳〵浦〳〵の旅驛に身をよせ。玉の笄はいつしか賤の小櫛にさしかへ。ひのはかまは布のまへだれにかわり。心にあらぬ浮ふしに。行かふ旅人の袖袂に引ぞわづらふ川竹の。一夜〳〵の手枕に。情をあきなひ。つれなき命をつなぎしより。人の遊びものといふ心にて。遊女とよぶ。故に今の遊女のはじまりは。旅驛の招女をもつて根元とす。しかふして遊女に白拍子のすへ。元曆の平家の流のおじやれ二類あり。くわしくはすへに記す。

生姜市の出會 并神明緣起。九蓮品定。高輪茶やのだん

抑芝飯倉神明宮と申奉るは。人皇六十六代一條の院の御時。寛仁三年九月十六日にあたつて。御神幣と大牙壹枚此所にふる。人民奇異のおもひをなす處に。七歲の少女口ばしりて。是は忝も伊勢渡會の兩宮の神なりと。詫宣ありしより鎭座なし奉る。その後ほどへて。建久四年源二位家。下野の國那須野發向の時。祈願あつて寶劍を納め。一千三百餘貫の神田を寄附なし給ひ。神職軒をならべ。神光いやまし。日〳〵にさかん成しに。時うつりて明應三年。伊勢新九郎氏茂。相州小田原の城主大森實賴を亡し。關東に力をふるふのみぎりに。當社の神領を掠領す。それより神殿大破すといへども。修造する便もなく年月を經る。しかるに天正年ン中に。諸寺諸社の絕たるを繼。すて果しを興し。神領寄附なさしめ給ふ。其後寛永十一年。御祈願によつて御修造をくわへさせ給ひ。和光のひかり利益の花ぶさにほひふかく。むかしに替らぬ靈社となれり。舊記曰。宣化天皇詔而。為レ民設二于諸國穀倉一救二洪旱一

とあり。此故に飯倉の名あるか。又此御祭禮は。九月十四日より十六日迄祭にて。市の産は曲物の小櫃。菓。生姜。是等也。本朝圖方傳日。姜去ニ穢惡一通ニ神明一云々。頃しも秋の末つかた。木〳〵の梢も紅葉顔。きのふ迄は高輪洲崎の。凉しきかぜにむかひ興ぜしも。今日はむきかへ。そよ吹も風いとわしく。襖の下にふさん事をおもふ。誠に暑往寒來のことはり。むべ成ルかな。爰に飯倉神明の生姜市とて。濱風はいとすさましくはだへを通すに。貴賤老たるも若きも宮詣でし。下向にはおかわの様なる飯櫃形の器に。土生姜を求め。おのがさま〳〵にかへるとなん。此御やしろの御祭とかや。參り下向のその中に。年の頃四十四五と見へ。せいひきく色黒く。ほうぼねあれたる侍。御納戸茶絹の小袖。裏は萌黄絹を付。下ぎは紬嶋の餘程なれ過たるに。繻半

はなしとみへ。羽織は空色絹の昼頃なるに。丸に二ッ引の。ぼた餅ほどなるを五ッ所に付。髪はじびんとみへ。油たくさんに。かきたまり所〻にあり。大小は大てい直打のありそふなを。わんぬきざしにさし。ざうりは十日ほど跡にかいしとみへる中ぬきをはき。うすがきの足袋をはき。はながみ袋ははゞつたそうなを。むらさきのふくさにてつゝみ。ふところ一はいに入。きよろつくつらつき。物言の鼻にかゝるあんばいは。どのやうなほんあみにみせても。奥諸侯の國詰の武ざが。江戸見物ながらのぼりしとみへる。野甫田野呂右衛門といふ侍。三嶋町の造花。鳥毛細工のきれいさに見とれ。名古やがうち物の。おびたゞしくひかるを見ては肝をつぶし。大好庵が万金丹。貞冠香の匂ひに。大きな鼻をぴこつかせ。飴やが傘をみては。おらが殿のかさよ

り大きなもんだとつぶやき、生姜を山のごくつみあげ。おかはのやうな器にふじの花をゑがき。おみやげ〳〵と。せい一はいに賣るにたましいをとばし。ほどなくおてうず〳〵にてうずをつかひ。御社にうちむかひ。鈴から〳〵ふりならし。ふし拜み。それより御社の後へまわれば。コリヤ〳〵はじまり〳〵。これは此度唐より渡りました る。虎のいけどり〳〵に。はいつてみれば。三毛ねこをくちなしにて染たるにあきれ。あそこゝと見廻り。足もくたびれ。精もつきし處に。十六七が。お茶あがりおやすみなさんせに。涎をながし。立よれば。〔茶ヤ女〕おいでなさいせ。茶をちいさいふるひにてこし。くんで出し。たばこ盆に火をいれ。もつてくる。〔侍〕是あねい。もふ何時だア。〔茶ヤ女〕アイもふ八ツでござりやしやう。〔侍〕はゝてな。日はみちかいこんたア。煙草ずば〳〵のんでゐる所へ。

年かつかうは三十内外とみへ。唐桟の小袖に裏は空いろの絹。あい着は八丈の替嶋。下着は空色縮緬の小紋無垢。じゆばんは白羽ぶたへ。羽織は黒ぐんないのあわせ。紋は丸にちがひ鷹のは。鼻紙袋は唐さらさの小菊尺。帯は八丈の幅せま。かみは中橋本田の出ずいらず。足袋はなく。すあしに裏付をはき。脇ざしをさし。人がらずつとよく。内しやうのあたゝかそうな町人。調市に風呂敷包をもたせ。しづかにあゆみ來りしが。野呂右衛門を見るよりも小腰をかゞめ。コレハ〳〵野呂右衛門様。よふ御さんけいなされました。【侍】大和屋か。きどくだな。さあ〳〵こゝへ〳〵。

【大和】ハイ御めんなさりませ。（と腰をかくれば女茶をくんでだす。）

【大和】あなたは今日いかゞおぼしめしまして。【侍】インヤサみどんもゝ今日はひばんだアから。ぶんら〳〵と出申たがア。

【大和】ハイ左様でござります。ちと高輪まで用事が。イヤあねさん。大ぶにぎやかだね。【茶ヤ女】アイ何モ人ばつかりで。ねつから錢になりやんせん。【大和】ハテナ。どうしても此春の燒がじやまにならふて。それでもこゝは繁昌だろふ。（と後のほうへ指さしをする。）

【茶ヤ女】何さ。あそこもいふ客はね。もし一切おあそびなさんせ。ふるみせの柳屋にいゝのが出やした。【侍】これ大和屋。一切あそべとは。ありや何の事だア。

【茶ヤ女】ヲヽアノやぼらしい事ばかり。（とおかしがり。口へそでをあてる。）【大和】あなたは御存ござりませぬか。此地内に女郎がござります。夜とひるを四ッに切まして。一切が七匁五分つゝでござります。【侍】ウヽハアテナ。そふいふ事は。身どもはかつてしり申さぬ。今の切のはなしでおもひだしたア。これをよんでみやれ。（とくわい中のはなかみ袋よりちいさき本を大じそうにとり出す。）【侍】コレ是は大せつな本じや。心信をしてみやれ。【大和】ハイ何でござります。はいけん仕ませう。（と請とつておしいたゞき。高らかによんでみる。）

九蓮品定

一此書は。東は靈岸嶋。深川。本所に限り。西は赤坂。内藤宿にかぎり。南は芝三田。麻布。品川にかぎり。北は本郷。音羽。板橋。千住にかぎり。都べて御曲輪外に有處の色廓淨土を集む。尤當時の情婦に貳類あり。白拍子のすへ。又招女のすへ。これら也。故に色好初心の輩の。專ら修業の仕やすからんため。假に九品蓮臺に部類をわけ。其人物の貴賤巨細にわかつ。みる人笑を予にめせ。

上品上生之部

（此部は吉原にはじまり。江北馬道におわる。）

（直段付は細見にゆづる）

此淨土。隨分古風にしてうまみあり。ぼつとりと

平家
新吉原

和らかく。髪の風はでならず。外八もんじはむかしの風義あつておもしろし。五町廓の内に。河岸つぼねありといへども。部類をわかたず。

チョンノマ一分
白拍子
馬道

此浄土は物事しづかにて。人柄髪のふう。地娘といふたて。いたつて人めをしのびつゝしむゆへ。さわぎはならず。

上品中生之部 此部は江南の品川にはじまり。江東回向院南ニ終

六印
十匁七匁五分
七百文五印
平家
品川驛
江府四驛
之隣一

此浄土は大てい吉原をまなぶ。しかしおよばざる事は。外八文字。客を一人ㇼ寐させる事。茶屋を御亭さんといわざる事。人がら尤次也。其外なんす。りんすの言葉つかひは。大かたちがはず。八ッ山に大門をたてたし。

チョンノ間一分
白拍子
一ツ目

此浄土は。大方浅草馬道といふたて。髪のふう人がらよし。此所はなかんづく。ひとめをいとひ。遊びに尤むつかし。但此所をば世人獨茶やといふ。

チョンノ間引ハリ
白拍子
回向院前
但シ土手がはと云。

此浄土。人がら髪衣裳のきこなし。一ッ目にちがわず。尤さわぎならず。但世人此類を呼んでヤマネコと云。

上品下生之部 此部は仲町にはじまり。江南氷川におわる。

晝夜四ツ切
一切り十二匁
白拍子
深川仲町

此浄土は。素人といふたて。甚花車風流を好しが。今は一向に衣裳髪の風伊達に成り。人がらも尤あまりよくなし。しかしさわぎ一事は。爰にこす所なし。

右同斷
白拍子
土橋

此浄土は。大方仲町におなじ。何れ甲乙なし。世間時花髪風は。仲町土橋よりまづ初る。伊達を専ら表とす。

晝夜四ツ切り
チョンノ間一分
白拍子
赤城

此浄土。風義回向院前におなじ。髪の結様衣裳武家をまなぶ。あまりさわぎならず。但此所山ネコト云。

拾匁
白拍子
麻布氷川

此浄土。仲町。土橋にならぶ。髪の風衣裳着こなし及ばず。其外余りちがわず。

中品上生之部

此部深川表櫓ぐらに初り。江西の行願寺に終る。

壹夜四ツ切 七匁五分 白拍子 深川表櫓

此浄土。髪の風衣裳着こなし。大がいは仲町を眞似る。しかし人がらおよばず。音ぎよくさわぎは。大がい仲町におなじ。

右同断 白拍子 同裏櫓

此浄土。大てい表やぐらのごとし。その外さわぎ同断。

右同断 白拍子 同裾継

此浄土。裏やぐらより少し次なり。

拾匁 平家七匁五分 四谷新宿 江府四駅第三之宿

此浄土は。やう／＼今春じやうじゆし。しば。品川。三田。あるひは深川。所／＼より入込。いまだ風俗きわまらず。大ていは品川をまなぶ。しかし人がらおよばず。

壹夜四ツ切 一切七匁五分 白拍子 芝神明地内

此浄土。髪の風衣裳着こなし。大方三ぐらを眞似る。しかし人がらおよばず。爰に新みせ古みせとあり。古見せの方よし。

壹六印夜四印 平家 南品川駅

此浄土は。髪のふう衣裳着こなし。大がい本宿新宿を眞似。はりつよし。しかし人がら不及。なんす。りんすの言葉つかひ遂わす。但シ橋手前は甚だ吉。向ふは少し次なり。

壹夜四切リ 一切七匁五分 白拍子 牛込行願寺

此浄土は。大かた赤城にならぶ。髪のふういしやうつきおなじ。ひとがらすこしつぎなり。

中品中生之部

此部は江東深川佃に初り。江北上野山下におわる。

壹夜四ツ切 引ハリ 巻頭白拍子 深川佃

此浄土は。三櫓にならぶ。かみの結ふう衣裳の着こなしおよばず。其うへ座鋪にて時花歌をうたふ。人がらはよくなし。

右同断 白拍子 同新大橋

此浄土。三やぐらを眞似る。かみ衣裳。つくだにおなじ。しかしわかいもの女客を引はるゆへ。米のくらいやすし。

右同断 白拍子 深川新地

此浄土は。佃に物ど皆准ず。但シ髪の結ふう。どこぞ安し。其うへ此所は。分て時花哥をうたふ。

壹夜四ツ切 引ハリ 白拍子 深川石置場

此浄土。大がいは新地におなじ。衣しやう髪あま

りよくなし。

右同断 白びやうし 八幡御旅所

此浄土。石場にちかひなし。但シ人から同前。

右同断 白びやうし 霊岸嶋 築立新地

此浄土。漸く去春よりじやうじゆす。髪衣しやう新地におなし。いまだしかとひやうなし。

昼夜四切 一切六印 市ケ谷八幡

此浄土。まへ〳〵は人がらよかりしが。今は下品なり。衣裳髪大てい御旅に類すべし。

右同断 外ニ五印七印 白びやうし 三田同朋町

此浄土は。髪のふう衣しやう。たいてい神明を真似る。ひとがらおよばず。但シ五印。七印は人がら少し次也。

右同断

此浄土は。前〳〵は下品

外ニ四ツ切 白びやうし 大根畠

なりしが。去夏末より改り。三田に類す。人がらはとこそ安し。但しこゝに四六見世あり。尤人がら次なり。

チヨンノ間二印 白拍子 浅草柳下

此浄土は。たいてい山下のるいなり。髪のふうひとがらおよばず。尤同朋町の上に置べきなれども。きやくをじしんよぶ所安し
但シ興とく寺まへに少し此類あり。

チヨンノ間二印 白拍子 上野山下 巻続

此浄土は。素人めいてはつとりとうまみあり。髪のふう。むすめといふたて。しかし衣裳は。綿ふくおゝし。尤人がらは佃に類すべけれど。きやくをよぶゆへ安し。右柳下此類を。ケコロバシといふ。

中品下生之部 此部は江東三十三間堂に始り。江北千住に終る。

巻 昼六印 夜四印 不家 三十三間堂

此浄土は。佃にならぶ。しかしかみのふう衣裳着こなしおよばず。其うへはやり哥をよくうたふ。故に人がらずつと安し。此處去八月中の嵐ゆへ。破壊して。とうぶん休なり。

四六 不家 音羽町

此浄土。髪のふう衣裳大ていに三間堂に類す。人がら下ひん也。そのうへはりつよく。顔で人きるの風。部屋もちめあるゆもおかし。カノヤ。中ジマヤ。サドヤ。これらなり。

四六 平家 深川入船町

此浄土。大てい三間堂にかわるとなし。さして外に評なし。但シ爰に昼六印夜六二三間あり。人がらよつほどよし。

右同断 平家 市ケ谷愛敬

此浄土。大がい音羽に類す。人がらは少よき方。

右同断 平家 赤坂田町

此浄土。大ていは愛敬に類す。評外になし。

四六 平家 三田新地

此浄土。髪のふう衣裳大がい赤坂に類すべし。評義さしてなし。

右同断 平家 谷中いろは

此浄土。衣裳髪赤坂より少よし。但シじしん客をよぶ處いたつて安し。

右同断

此浄土。三田新地に類す。

平家 麻布藪下

外にひやうなし。

右同断 平家 板橋驛 江府四驛の第四

此浄土。髪のふう衣裳人がら。ともに音羽を真似る。但シ爰は言葉づかひ田舎めいておかしみ有。但シ近きころ。大ていよし。

四六 平家 浅草どぶ店

此浄土。髪衣裳何れ外に評なし。藪下に類す。人がら同せん。

四六 平家 世尊院門前

此浄土。たいていどぶ店におなじ。外に評なし。

四六 平家 根津

此浄土。髪衣裳音羽に類せしが。近き頃は人がら衣裳下品也。但評 藪下におなし。

四六 平家 千住驛 江府四驛の第一

此浄土。髪衣裳は吉原の河岸を真似。たいてい高慢なる處也。しかし人がらはおよばず。尤橋手前ずつと人がら次也。

下品上生之部 此部は江北の朝鮮長屋に始り。江西の赤坂におわる。

チヨンノ間コロリ 平家 朝鮮長屋

此浄土。髪のふう衣裳着こなし。たいてい柳の下に類す。但シ モウシノ\ と呼所いたつて安し。

チヨンノ間コロリ 平家 音羽裏町

此浄土。髪衣裳ともに大見世をまなぶ。しかし人がら及ばづ。モシモシとよぶ。

昼二夜二 平家 品川三丁目

此浄土。髪衣裳裏町に同じ。爰を世人テツキウト云。

チヨンノ間十二 平家 萬福寺門前
此浄土は。髪衣類朝鮮に同し。但引コトナシ。

右同断 平家 本郷大根畠千坪
此浄土。髪のふう衣裳甚下品なりしが。去秋改りしより。大てい万福寺同前。まへ〳〵のごく今は引はらず。

右同断 平家 大橋六間堀
此浄土。髪のふう衣裳大ていよし。よぶばかり。引ハラズ。

右同断 平家 麻布市兵衛町
此浄土。大てい六間堀どうせん。よぶ事は甚し。長屋によりて引ハル。

右同断 平家 赤坂田町
此浄土。髪衣裳ともに六けんぼりどうせん。但シ長屋によりて引ハル。

下品中生之部 此部は江東の安宅に始り。江西の鮫がはしにおわる。

チヨンノマ五十 平家 安宅長屋
此浄土。大てい六間堀をまなぶ。但し衣裳人から次也。ヨブばかり。引ハラス。

右同断 平家 直助長居
此浄土。大ていあたけどう前。引ハラス。

右同断 平家 麻布藪下
此浄土。髪のふう衣裳人から。ひやうなし。淋しき時は引ハル。

チヨンノマ半 平家 浅草どぶ店
此浄土。髪衣類直助におなじ。人から少し次なり。爰も折〻引はる。

右同断 平家 本郷丸山
此浄土。髪衣類人からどぶ店におなじ。此所引ハル事甚し。キルモノ御用じん。

右同断 平家 三田同朋町
此浄土。髪衣類共にあたけに類す。人から尤同前。引ハラス。但シ爰ニ金平長屋。高砂長や。念仏長やとあり。金平長屋よし。

右同断 平家 三田新地
此浄土。髪衣裳ともに丸山におなし。但し引ハラズ。

右同断 平家 浅草堂前
此浄土。髪衣類人からどぶ店におなじ。引事はなし。

チヨンノマ半 平家 深川網打場
此浄土。髪のふう人から。大ていどぶ店に類す。引事勝れて甚し。

チヨンノ間半 平家 高稲荷
此浄土。網打ばに同し。評なし。

右同斷
平家
四ツ谷鮫ケ橋

此淨土。髮衣類まへ〳〵は能かりしが。今はずいぶんわろし。引ハル事甚し。此所より廿四字のきり賣いづる。いわゆる牛込櫻の馬場。槇河岸。加賀原。四ツ谷堀端。あたご下。切通シ。采女が原。外櫻田。御堀端。京橋比(丘)尼橋をさかいて。鮫ケ橋の場所なり。

下品下生之部 此部は西ちく谷に始り。江東猪の堀に終る。

チヨンノ間半
平家
市谷ちく谷

此淨土は。髮衣類人がら鮫がはしにおなじ。引ハル事甚し。御用心〳〵。

但シ此所は谷町といふ。しかれども常中往還道あしく。いかなる日でりにも。かはいた事なし。かるがゆへにちく谷の名あるか。

右同斷
平家
佃こんにやく嶋

此淨土。やう〳〵ちかき比あらたまり。しかと評なし。大てい綱打どうせん也。

右同斷
平家
本所入江町
外四六アリ

此淨土。衣類人がらちく谷に同し。但引事甚し。こゝに四六見世三四家あり。わづか故略す。人がらとぶ店に類ス。

チヨンノマ半
平家
吉田町

此淨土。入江丁にかわる事なし。もしも通りかゝりつかまへらるゝと。雷がなつてもはなさず。おそろしき處也。こゝより切賣いづる。兩國向藥研堀。柳原土堤。筋違橋。駿河臺。護持院はら。飯田町。石町河し。四日市原。御堀ばた通。京橋びくに橋迄。本店の場所也。

右同斷
平家
吉岡町

此淨土。吉田町に替事なし。切賣同前に出る。但吉田町。入江町。此類を世人兩口といふ。

右同斷
音羽鼠坂

此淨土。さして評なし。吉岡町に類す。引ハル。

右同斷
世尊院門前

此淨土は。鼠坂にちがはず。引事甚し。

右同斷
品川鈴森

此淨土。去夏にやう〳〵じやうじゆし。しかと評なし。但鼠坂どう前。

チヨンノマ三十二字
平家
井野堀

此淨土。髮のふう衣裳着こなし人がら。大てい大つへのどし。其うへ達者

成は少し。病者おほし。但シ舟によくのる。夜みせは行徳がしへはる。雨風の節は。永久橋または永代橋の下へ。みせをはる。此るい三人八丁堀稲荷ばしへいづる。世人是を名づけて。船マンチウトヨブ。

類拔

チヨンノマコロリ 新大橋袂

此浄土の風俗。頭に黒き頭巾を以たゞき。衣裳は常のごとく。其かたち仏躰也。モウシモウとよぶとしきりなり。

チヨンノマコロリ 三嶋門前

此浄土。新大橋の類。人から衣類少〳〵次也。世俗此類をマルタといふ。もつとも此所大橋出ばり也。神田大工町。田町。おゝくはあたけ御船藏前よりいづる。

或人問曰。此類拔。白拍子なるや招女なるや。予答て曰。是白拍子なるべし。其故は往古平家はんじやうの時。大政入道妓王妓女といふ白拍子を。深く寵愛せられしが。此頃都に仏となんいふ白拍子時めきける。平相國めして。妓王妓女をば仏に見かへられしより。二人の白拍子いとまを乞ひ。あぢきなき世を見限り。北嵯峨のおくに引こもり。かみをおろし染衣の姿となり。行ひすましてゐたり。故に今のマルクも。かたちは仏をまねび。假に情をうり。衆生をあまねくさいどする。利益のほうべんならんか。

女郎買道具

衣裳　大てい黒き類を用ゆ。紋所中くらい。凸凹これらをいむ。肌着は紅類をいむ。匂ひ袋はごめん。帯はあまり細きはわろし。大てい中ぐらゐ。

髪　油をあまり付べからず。光るはやぼらしし。丸まげ本田くづし吉。月代そりたてをいむ。ひげはやすべからず。そるべし。

頭巾　高祖づきん。袖頭巾をいむ。其外よし。鼻紙袋は。今様の細くせばきは。あまり行過たり。中位を尊む。

はき物　大ていはうら付をはくべし。下駄。足駄はぬりたるいむ。

木地よし。

初會 随分おぼこらしく見せ。口をおゝくきくべからず。盃の時會方の顔を見るべからず。

床花 三會目に女郎にやる物也。あからさまにやるべし。陰して煙艸ぼんの引出しなぞに入置く事。當世にあわす。

露 是は女郎屋の廻し。やり手。船やど。茶屋なぞにやる花の事也。女郎屋の若ィ者には。大ていうらにやるべし。又此一物時分おそくやる時は。此者どものつら。三角四角になつて見にくきもの也。随分一寸〳〵と打べし。

但シ露といふは。此者どももひかるものをいたゞくと。俄に追從輕薄のありたけ。のみたくない酒をのんだり。きゝたくもない口をたゝいたり。客の機嫌をとる。たとへばかれしぼみたる草木も。露をうくれば元氣ぐつとよくなるゆへ。此ゆへをもつていふか。

此ほか女郎かいには。心持幷道具あまたありといへども。古のどうらく先生たち。世にほどこし給ふの書あまたなれば。かれにはぢて其一二をこゝにあらわすの已。

九蓮品定　大尾

[大和や] ハアテこれは面しろくて。そして私どものやうなふあんないの者には。まづ重寳でござります。どふして。[侍]さればさ。これについて。すとんだはなしがある。夕アとろ〳〵といねむりし夢こゝろに。さもやせおとろへたるぼうずの。身には所〻やぶれたる。絽の十德をたゞ一まひ引はり。肌あらわにみへ。右の手には。銭にてこしらへたるしやくじやうを持。左の方には。夏箱とやらをもち。忽然としていわく。善哉〳〵。我はこれ江府橋本町に住せし者なり。元はわれ芝因緣山にて。一文字の席にもつらなりし。了間といふものなるが。ふと南里の香ばしき色香にまよひ。なは手茶屋の吉川といふ古狐にばかされ。仏のいましめの五戒を破きやくし。師のめいにたがひしゆへ。山を追いだされ。かなたこなたと流浪し。諸方をへんれきし。ある時は大凡俗の奴となり。又はのたなき賣主となりつら〳〵とあんずるに。われ師の命に違ひしも女郎ゆへなり。何とぞ今江府中の遊くわく。米の尊卑をあきらめんと。おもひし事もむなしく此世

をさる。されどもさいごの一念によつて。色欲界に生じ。どうらく如來と改名す。然るにわれ一端おもひたつたる大願空敷せじと。通力をもつて。尊きは上品の吉原。卑は下品の井の堀のむさき所まで經めぐり。終に一巻の書に録す。則だいして九蓮品定といふ。さりながら。此書の仇にくちなん本意なさに。今其方にあたふる也と。汝此書に眼をさらし。野呂田野甫右衛門を通粋とも變名せよと。いふかとおもへば跡方なく。そこで身どもも目さめて見れば。枕元にこれがある。よんでみても四切の一切のが。どふもしれなんだが。今貴様のはなしで落付た。と惣身よりあせをたらたらと流しはなせば。大和屋茶やの女も調市も手を打てふしんがる。侍はそばにひかへし茶をがぶがぶ。侍 あねいもひとつ。大和や なる程。きめうなお夢でございます。何ンとそのいわゐに一切は。侍 イヤ おれは其切とやらはきらいじや。とかく吉原か品川がいゝてな。大和 ハイさやう。しかし吉原はまだできず。いつそ今から品川へおいでなされませんか。おとも致しませふ。侍 アノ貴様がふるまふか。そんならいかふが屋しきがさ。大和 ハイそれは。ついさらさらと一筆かいてつかはされませう。くわ中矢立を出しあてがへば。侍 そんなら。あの小僧にもたせてやつてくれめされ。とさらさらとかき。大和やにわたす。大和 そんなら。これ長松。われは内へかへつていわふには。だんなはこん夜おやく所に御用ができ。おとまりでござります。明日の朝むかひにこいと。おつしやりましたといへ。そして此お手紙はかへりがけに。お上屋しきの御門へおいてゆけ。かならず高輪へ行たなどとみせでいふな。口上をわすれるな。調市 ハイかしこまりました。さやうなら私はさんじませう。と調市は手紙を取て。ふところへいれ立かへる。大和 サ、おたちなさりませ。あねさんお世話でござりました。ときんちやくより錢をいだしおく。野甫右衛門立いづれば。大和やもつゞいて増上寺の表門へはいり。天神。谷山。下谷打過。ほどなく車門をいで。あかばね橋。しんあみ。四こく町過。三田を打通り。漸ともと札の辻にさしかゝる。大和 アもふまち合へさんじました。侍 フンはておもしろい名じやなあ。大和 ハイ 元此待合と申は。登り下りの旅人の待合せるのでござります。今では品川がはんじやういたす故。此名がおもしろく聞へます。侍 フウなる程。イヤおれは貴様におれ入た無心があるて。大和 とは何ンでござります。侍 ヤ 別の事でもない。今夜貴様のもめで品川へいつて。御ン女郎をかつても。ふるとやらふられるとやらにあいでもすると。ぼうにふる事だアて。なんと女郎にかわいがられる仕方をおしへ給へ。大和 ハテ 又めつそうなとばかり。おまへよりわたしが。たれぞにどうぞ傳授いたしとうござります。しかし女郎かいは。心

持が第一とぞんじます。世間の人が皆女郎をかふて覺へて。わるじやれをいつたり。したりいたしますゆへ。金銀おたくさんにつかつて。ふられるがおほうございます。まづ女郎をかふは。向ふにかわれた氣で。あまりくちかずをいわず。あなをいわず。外の色里の噂をせず。女郎にもたれるが客の穴さ。しかしのみたい酒をのまず。食もくわずしよしんぶるは。けつく鼻毛をよまれるものさ。ぐいのみは大がいにして。ちと惚れたやうにみせかけ。あまりびたつかずくろめると。高尾をみるやうなはりのつよひ女郎でも。ふるといふ事はござりませぬ。〔侍〕フンハテナア。そして初ての盃が。大ぶんむつかしいといふが。どふするなア。〔和大〕アイそりや一座の多い時のとさ。なるほど品川は客をみくだし。かいこなすに大ぶんほねがおれると。女郎に好者な人が申ますが。今では結句吉原か。米がやわらかく。客を大事にいたし。かいよいそふにござります。〔侍〕コレ御ン女郎をかふには。大ぶん講釋のあるむつかしい物じや。深川は又どふいふあんばいだなア。〔和大〕ハイ深川は。しんびやうな者が行と。氣ちがひになります。わたくしも此春燒まへにさそわれて。仲町へまいりましたが。先深川の客は。さつさおせ〱きたさのさとさわぎて。せんかうがたち切と。ずいと歸るが深川のたて。そこで女郎もうは〱うはついて。なか〱しつほりと落ついた遊びはなりませぬ。何かと申うち七間へまいりました。〔侍〕これが七間茶やといふのか。大ぶいゝ女がみへるの。こゝはれこさができるじやないか。〔和大〕イヤノおまへよく御ぞんじでござります。それで高輪のころび茶やが。きついけんひきさ。十八町の内ころびでないのは。數ゆる程ほかございませぬ。〔侍〕ヲウサ。とかく色のよの中だて。是は何といふ寺じや。〔和大〕ハイ是はせんがく寺と申て。かの四十七騎の石塔がござります。何かと申うち石橋へさんじました。是からみんな茶やばござります。〔侍〕何ンじや。大きないへかばねじや。茶やか。〔和大〕さ樣でござります。石橋萬と申ては。留守居茶やのてつへんさ。〔侍〕フンときに貴樣は。寄つけの茶やがあらふなア。〔和大〕ハイもつとさきでござります。モシ高輪の大佛と申は。此寺でござります。本尊は五智の如來。こゝに名作の石の仁王がござりましたが。くづ(れ)て今はないそうさ。〔侍〕ハテナ。高輪の內には大分いゝ寺があるて。とかく品川の客は。坊主が多イそふだてなア。〔和大〕ハイなる程。坊主が五分。武家方が三分。町人は二分ほかございませぬ。そこで女郎があつかいにくい武ざと。是はしたり。武家

と坊主とくろめてゐるから。深川なぞとは違て。あそびいゝほうでござります。（はなし／＼行に。きた町もすぎ東禪寺まへもうちとをり。仲まちへさしかゝる。）【大和】モシ野呂右衛門様。奴がなじみの茶やへ。程なくさんじました。さあおはいりなされませ。【侍】まづ貴様さきへ。【大和】さやうならば御めんなされませ。（とずつとはいれば。茶やの女むすめくち／＼に。）和清さん。おいでなさい。さあおあがり。おつれさんおあがりなさいせ。【大和】どふか久しぶりできたせいか。上り口が高い。【娘】和清さんの久しいもんさ。（とくち／＼とりはやすに。野呂右衛門。大和屋も座鋪へあがる。女ちやをくんでくる。むすめ煙草ぼんをもちてくる。）【大和】かみさまはどこへ。【娘】嬶さんはおくの座敷におりいす。（大和やは娘をつかまへ。じやらくらとして嫌がらせている所へ。女ぼうおく座敷よりいづる。）【女房】これは／＼和清さん。あなたもよふおいでなさりました。和清さん。お前さまはなせ久敷おいでなさいせぬ。

おゆかりさまからは日ぶみ。けさはわたしがとこへまで恨のお文。（といひながら立て。酒樽にはさみたる文七八本渡す。）【大和】何ンのおしきせの長口上。すき紙にでもしな。（となげいだせば。女房とつて。大和やがふところへ無理に入る。）【女房】モシおまへさんがたは。二かいへおいでなさいせ。【和清】おつとよし／＼。サ野呂右衛門様。おあがりなさりませ。（野呂右衛門はさいぜんより。物をもいわず。目をひからし。肩でいきをし。めくりにあつかいくつた心にて。うつかりとしてゐたりしが。ふせう／＼に二かいへあがる。和清は跡にて何やら女房が耳へ。小聲にて呼けばうなづく。和清も二かいへあがる。）【女房】新介は宿からまだかへらぬか。かへつたら松坂やへしまひにやらにやならぬ。なんぞ二かいへ出す肴があるか。【女】アこちのにたと芝海老がござります。【女房】ア芝海老も久しいもんだが。（といふてせわをやく。此内二かいへ。盃酒肴いづる。おく座敷よりかみさん／＼と呼。）【奥座敷】年の頃四十二三と見へ。せい高く色黒く。高慢づらなる坊主。黒郡内の少〻あかじやれたる小袖。合着は飛色紬の。古着やにみせたらば。見で十七八の直打くらいの小袖。下着ははい毛色の白無垢。帯は紫のひらぐけ。鼻紙袋は毛留の利久形。黒ちりめんの衣を脇に置。いけもせぬしほから聲にて。あふ坂とら抔と。盃臺にてひやうしをとり諷ふてゐる。今ひとりの客は。年の頃廿斗にみへ。にうわなる坊主。御納戸茶郡内の小袖。下は白無垢を着。随分人がらよい客二人。一ざと見へ。さいせんより酒をのみている。【若僧】わたしは酒は。そのやうにたべぬ。これ／＼／＼。落る。【茶ヤ女】何ンのとでござりやす。多くは。すけてあげやせう。【年マ僧】エヽうまいな／＼。どふしても若者は格別ちがつたもんだ。（茶ヤ女ぼういづる。）これはおかまい申も致しやせぬ。宜敷おあがり。あなた。お合でもいたしいせうかね。おまへさ

ん方は宿へおいでなさいせぬか。〔僧マ年〕其氣も少〳〵ありまさいくさ。まづかみさん。一ッさしやしやう。と盃をさせば女房取ていたゞく。女つぐ。のむ。〔僧マ年〕何ッと松坂やの初かせはいやんすかへ。〔女ぼう〕おいでなさいす。おなじみでゞもござりやすかへ。〔僧マ年〕イ、エあいつも大きなつらだ。龜坊。どこにしやう。〔僧若〕ハイ わたしやどこでも大事ござりませぬ。おまへのおなじみの處へ參りいせう。〔僧マ年〕おれがなじみの所は宿中がみんななじみだ。どの女郎やでも。あがりだんにおれが顔がみへると。哥橋さんが來なんしたと。家内がそうにたつけれども。今夜はちとふうをかへて。顔かくしのずい行さ。おれがいつたとをしると。こは色の長治や。八百彦だ事の。吾妻だの。三蝶だのとてくると。だんな串一ッつかいませうの。

やれ語りませうと。たのみもせぬにおはい〳〵をぬかすと。やかましくて肝心のしつほり遊びがだいなしだ。もう〳〵げいしやや役者に近付がおゝいと。錢銀がいつてならねへ。〔僧若〕モシ其三蝶とやらは。浮世がいゝじやござりませぬか。〔僧マ年〕ウ、てまへよくしつてゐるな。何さ。いゝとてろくなとはいへいねい。浮世が聞たか。兩國しぼりを呼なさりませ。みたがいゝ。長哥なら露友でも。音藏でも。市十郎でも。三味線なら。金藏。六三。喜三郎。作十。豐後なら。もぐさやでも。いつきでも。文字でも。又若太夫でも。儀太夫も。人形つかひも。みんなしつてゐる。こわいろなら。こまでも八百でも。十町。魚樂。三芝居の太夫元を始。のこらずくるから。正じんの身ぶりをさせてみたがいゝ。〔女ぼう〕モシあの。おまへのとこへ。八百藏がまいりやすかへ。わつちやどうぞ扇子へ。哥をかいてもらいたふござりやすよ。〔僧マ年〕ハ、ア、嬶さんがきつい延さ。何よしねへ。八百めはねつからかけねへ。此中もさる所のおむすが。あせ手ぬぐいに哥をかいてもらいたがつてよこしたから。八百めにかいてやれといふたら。迷惑がつて。どふぞおまへ。書てやつてくださりませとぬかすから。おれがかいて。そして八百がかいた分にしてやつたら。それをうれしがつてもつてゐるげな。それともせひほしか。かゝせてやりませう。八百はさておき。梅幸でも。慶子でも。親玉でも。おれがいふとならゝんでもなら芝さ。のふ龜ぼう。〔橋龜〕おいさやう。もし。もふ日がくれます。どこになさります。〔橋哥〕ハテどこでもよしのくず。まづ道〳〵しあんしやう。〔女房〕アイさやうなら道で御さうだんなさい

せ。新介はかへつたかの。と女房かつてへいづれば。新介はとくよりかへり。おくざしきのはなしをたちぎゝして小ごへになり。新介 モシおかみさん。あのきやくは合点のいかぬ物でござります。あんまりあいつけずと。いゝがげんにしておきなはりやせ。ゑてあげくには。勤がねへなどゝいふ物でござりやす。女房 ウ、おれも如才はない。しかし。わかい坊主がもめるのだ。そうさ。人の物で遊ぶさまで。いけもせぬ高慢ばかりいつて。そしてなりをみさつしやい。さんごじゆとりの黒ん坊をみるやうだ。二人してうはさをしているおくざしき二出所をしてゐたる女。かつてへいづる。女 モシおかみさん。客衆が羽織を二ッかせとさ。女房 ム、それたんすの引出しにある。ふるいちりめんのわた入を持ていきやれ。どれ和清さんはまだゞろふ。と女房二かいへ上る。下二人倩 奥座敷の客哥橋。立て帶をしめなをし。女持きたりしくろ縮緬のあかしやれたる羽織をき。袖を一ふりふつてつつとつき。ふところより紙をいだし。額ぎはより顔をふき。いなふやれ〳〵わがおもふかたへなぞと。いけもせぬちよ〳〵らをいひ。袂より袖づきんを出しかぶり。あつばれおれこそ。三國一のいろぼうずと。すました顔で立いづれば。龜橋もおなじくづきんをかぶり。はながみ袋をとりいだし。何やら女に渡し。跡につゞいていづる。女 さ新介どん。お出なさるよ。新介 ヲイもふともしてもよかろふなふ。と新介はてうちんをいだし。火をともし。庭へおり。二人のはき物をなをせば。哥橋 これはわかいの。太儀だの。おねい。かゝさんへよろしく頼んす。女 アイおゆるりと。おむかひは何ン時に上ませふ。哥橋 明さ〳〵。もしふつたらゐつゞけさ。龜橋サいきの松原。龜橋 アイまいりませう。と二人りは若い者をさきにたて。いでゆく。娘 コレさつ。ちやうちんをつけや。和清さんがおいでなさるよ。和清。野呂右衛門は。最早宿へ行んと二かいをおりる。女房もおりる。和清 アノ新すはどふした。女房 宿へまいりました。さつをおつれなさりませ。和清 それはなをよし。これおむす。行かんか。うまいおいどだ。とむすめがしりをつめる。娘 エ、和清さんわるい事を。二かいでもいつそ。和清 これ〳〵。そのやうなる事は。せんちうにては申さぬ事にて候。女房 モシありや。おまへに氣があるそふさ。いつそ上やしやう。娘 また嬶さんが。久しいもんさ。和清 イヤアもらいませう。もふおれが女房だぞ。侍 コレサ大和や。もふ行ふじやないか。和清 アイさんじませう。侍 イヤ御内室。お娘ご。終日お世話でござる。侍 野呂右衛門もおなじく下女さつは二人のはき物をなをせば。和清ひよろ〳〵としてはく。はき、かど口へいづる。女房 モシ和清さん。大ぶあがつたね。又はつさんが大ていの事じやござりいすまい。和清 エ、何。あのべらぼうめが。こんやはさつ。どこぞへ初會に上るぞ。女ぼう 娘 ヲ、角がはへやしよふによ。お二人さまともおゆるりと。おむかいはいつもの通りに。おかごに致や

しやう。御機嫌よふ。のしりのながいを聞ながし。いでゆくあとは。むすめがしらこへの。寄ておちやおあがりなさいせ。おやすみなさいせの。しりのないのも。所のふふとぞかわゆらし。

品川宵の景色

南山岨レ雲遠帆歸レ西。と詠めしもむべなるかな。高輪より見晴す空は精/\と。東は上總。下總の。安房につゞける山/\に。深川。櫓州。洲崎まで。波にうつろふ沖津浪。西は羽田平間まで。見へ渡りたる浦/\に。網引つりする蜑のいさり火は。星辰おちて浪に入かとうたがはれ。八ッ山より冷しささそふ風には。あたら酒の酔をさまし。松風の音は信濃五印坂部にさゝ並木。五印坂部だんなァ竹籠にめしませんかと。ひつらつこく聞三玉五印坂部の神は。岸野五印坂部九郎助ならぬ倉のいなり。幾千代もかはらで客のおいでをと。うつ拍七匁五分。十匁。かうし。大みせ。手も佐渡や七匁五分。十匁。かうし。大みせ。ざしき。客は竹籠にゆらる柳五印坂部こし。これや此山崎七匁五分。十匁。かうし。大みせ。寺の寳おとり。待藏し田七匁五分。十匁。かうし。大みせ。るも。湊七印新宿と。一座を駿河七匁五分。十匁。かうし。大みせ。是は當分舞。やすみ。吾妻あそびをけふやあす。またいつきなんすと。通ひくるはを松坂や。七匁五分。十匁。かうし。大みせ。數多き紋日をば。どふやかうやと信濃七匁五分。十匁。かうし。大みせ。なる。淺間/\にうすけふり。ちゞに心は村田屋七匁五分。十匁。かうし。大みせ。の。和泉七匁五分。十匁。かうし。大みせ。きとてか戀しかろ。客は伊豆藏七匁五分。七印は小みせ。いつとてか。又の御げんを松本や。七印。小みせ。黒門前。すへの契りを若松や。七印。小みせ。黒門前。山城七印。小みせ。黒門前。しろともれいづる。額の月は福山十五匁附廻。七匁五分。七印黒門前。か。おぼろげならぬ御殿山。彼越前十匁。七匁五分。黒門前。の永平寺。それは越路や。これは又。武さしあぶみの東海寺。香のけむりか女郎たちの。そらだきかほる丁子七印。七匁五分。小みせ。の香に。客は攝津の國十匁。七匁五匁。かうし。大みせ。難波津の。よしあしいわぬ心をば。いわでおもひを新叶七匁五分。七印。小みせ。初夜の鐘のひゞくにぞ。數/\ならぶ家/\に。てらすともし火煙草盆。津川十匁。七匁五分。かうし。大みせとならぶは花あやめ。梅か櫻か杜若。いづれ花とぞ引わづらふ。客はほうろく宗十郎。がん盗頭巾や袖頭巾。くち/\ぞめきのほうかむり。あんまはりのりやうじ。蛤/\大蛤と。けしからぬ大聲も。さとからめいて面白し。ヤッサコリヤサと持込竹籠は布引に。見通しに引三味せんは。わが魂をうばふかと。浮れうかるゝ弁天屋。きのじや。千代をとぶくだいの物。

若い衆たのみいすと。みせへ持ちくるたかつきの。菓子は金澤きのじや。くわしや。色〳〵の。なかにうまいもあるへい糖。と花ほうろなる伊勢屋きのじや。ぬけ参り。とをれ〳〵の聲は村田屋きのじや。むらちどり。高の字に家〳〵の紋付たる挑灯は。西や東や行ちがひ。黒ちりめんのいきなふう。誰さんじやないかと。のびあがる。いたづら髪や疊さん。かくながぶみに引かれよる。客は即心成仏の。屏風のねはんに入る跡は。いかなる夢をかむすぶらん。實品川淨土のにぎわいは。帝釋天の住給ふ。喜見城のたのしみも。爰にはいかでまさるべき。

夜中の口舌

【新造】和清さん。よふ酒を呑なんすによ。今あねさんが來なんすよ。【和清】あねさんがこわい物か。唐なすでも喰へといへ。

【新造かふろ】おやあんなこと。いつつけやすによ。和清があいかたは部屋もちにて。年のころ廿一二。きりやうよく。座敷二間。床違ひ棚。琴三味線。碁将碁。双六盤。其外は夜具萌黄地の錦。紺地の錦。紫縮緬の夜具蒲團三通り。長持重箪笥は何れも鎭鍮鐵物。衣桁迄も立ならべ。きれいさ實に吉原の中三にもおとるまじきてい。今宵は茶屋より和清が來りしをしらせ。しまい居たるに。なじみの客來るゆへ。新造を出し置。もはや夜半ゆへ。和清にわけをはなし。かのきやくの所へ横に行。今廊下をはたり〳〵とかへる。【女郎】また呑なんす。よいかげんにしなんせ。これ。てまへたちはいてねや。そしてあすの朝。無粋さんがかへる時しらせやよ。【新造かふろ】あい〳〵。和清さん。おやすみなんせ。もし。あの羽細工の鶏と。芥子人形をわすれなんすなへ。ふたりはつれたち出て行。【和清】あいつらが。鶏と芥子人形を買てくれろと。宵からやかましくてならねい。【女郎】おまへも。またいつからか。だましなんすからさ。買て來てやりなんせ。もふ八ツでござりんす。ろくにねなんせ。【和清】イヽエわたくしは。これが勝手でござりいす。そして早いおかへりさ。もちつといゝ夢をみればいゝに。【女郎】何ンのことでありんす。よふどくをいひなんす。と和清をむり無たいに床へひきずりあげ。女郎も同じく夜着へしごきをときてはいる。【女郎】おまへはそんな事をいひなんして。わつちをいぢめなんすけれど。なぜ此中内は久しくきなんせんで。藏田やへ行なんした。此言譯があるなら云なんせ。どふだ〳〵。【和清】あれか。あれは何よ。あのな。【女郎】それみなんせな。言譯はありんすまい。そしてまた今夜も行ふと。茶やでいひなんしたと女がいつた。【和清】何さ。それはうそだ。ほんに此中は。屋敷の役人衆にさそわれて。附合斗りに行た。【女郎】ソンナラ今宵行ふと。なぜいひなんした。と和清がふとも〻をふつつりつめる。【和清】アイタヽヽ。あいた〳〵今夜はうらに行ふとおもつてさ。【女郎】エヽにくい口だの。その口を。と和清が口のはたをつめる。【和清】イタヽヽ。大ぶ今夜はいたいぱんだ。さやうならこふいたしいせう。とあちらをむく。【女郎】エヽ押のいゝ。おまへの

すきにさせる物か。と和清を。てまへゑ引かへし。外をつまんだり。こそぐつたり。いろ〳〵の面白きしうち。跡は小粹のぼちや〳〵はなし。何かほかにはしら紙の。のべの紙やしりぬらん。【侍座】野備田野呂右衛門は新造をかい。宵よりはやく床に入りねたりしが。此新造床へ九ツ時分に來たり。元來大ねぼうにて。七ツ時分までぐつと寐。そのうへ肝心の所にてふり付しゆへ。大きにはらをたて。おきてしたくをしてかへらんと。和清が座敷へきたりておこす。

【のろ右衛門】和清〳〵おきめされ〳〵。おれはもふもどるから。跡からゆるりと歸りめされ。【和清】なぜへ。まだ夜は深ふござります。もちつとおやすみなされませ。【侍】イヤ〳〵。夜があけないでも大じおりない。【和清】ヘテ扨おまへがおかへりなされば。私も歸ります。まづおまち成ませ。和清はおきて帯をしめれば。あいかたも同じくおき。煙草すいつけ。のろ右衛門へ出ス。【女郎】そしてあの女郎衆は。どふしんしたへ。【侍】女郎衆はよく寐入てゐられます。大和や。おれはかへるぞや。【和清】でもお前は御門が。【女郎】もしおまちなんせ。女郎衆を呼で來やんせう。あのこもあの子だ。どふしたやら。女郎立て野呂右衛門が新造を呼に行。合方の新造は目を覺しみれば。野呂右衛門がゐぬゆへ。めをこすり〳〵和清が座敷へ尋に行所。廊下にて和清が合かたに逢ふ。【合方新造】わつちが客衆は。おまへの座敷にいやんすかへ。【女郎】いやんすかじやないはな。さつきからわつちが座敷へきて。歸らふといざをいふはの。それだからわつちが宵に。薩摩とあのやしきはむつかしい。なげなんすなと。あれ程いふて聞せるのに。なぜあつかひなんせぬ。そしてうらをよんで三會めをくると。おまへのためにもい〻。氣のとふらぬ。【新造】何さ。わつちがちつとねたとて。それから何ンのかのと。エヽモしみ〴〵きざだ。と二人してはなすうち和清がいろ〳〵だませど。野呂右衛門がてんせず。いよ〳〵こは高になれば。和清もてあます。【和清】コレ申。其やうにおつしやらずと。まあ私が申事をおき〻なされませ。【野呂】イヤ〳〵。何もかもいらぬ。宵よりのしかたが氣にくわぬて。爰のていしゆをよびやれ。【和清】ハテおまへ。これ敷の事に。ていしゆがよばれますものか。若もの時には若イ者といふがござります。【野呂】まづ宵からあの女郎めが。おれが一言物をいふと。ぐづ〳〵わらひおつて。そして夜食をくひに行とて。どこへか行おつて。おれをば九ツ迄煙草盆のばんをさせ。うせおるがさいご。寐るとはあしかのやうで。あげくのはてには。むしがかぶるの何ンのかのと。むつかしい事をぬかしをる。ふとい女郎めだ。何ンと和清。仏のやうなおれでも。腹がでんぐりかへるまい物かテ。【和清】アイなる程。段々御尤でござりますけれども。あの子がわかいから氣がつきませんのさ。【野呂】ソシテ第一大せつな金銀を出して。一夜なりとかへば此方のすきだア。それにどふまいつた。かうまいつた。隣のばあさま茶をまいつたと。しつか

い身共をば。今お江戸ではやるおちやとやらにしおる。何でもそうたいのしかた。一ノ＼吟味せにやならぬ。和清。其若いものとやらを呼びやれ。[和清]ヘイかしこまりました。とかく何もかも私に御めんじ下さりませ。そして又あの子がむしのかぶるも。客にわけのいわれぬ。何ンぞかぞが。 と和清。野呂右衛門が耳へ口をさしよせさゝやけば。少しくしづまりがてんする。 [野呂]ウヽそんなとなら。はやうぬかしおればよいに。 [和清]が合方の女郎は。野呂右衛門が合方の新造にのみこませ。やう／＼だましつれ來り。廊下にて立ぎゝせしに。少ししづかに成し故。座敷へはいる。 [女郎]モシエおはらもたちんせふけれど。あの子が年がゆかぬからね。おまへさんのやうな粋な客衆へは。わけをいひなんすりやいゝけれど。そんなともいひなんすずに。ねたり何かしなんしちや。すみんせぬけれどね。今ぬしが歸りなんすと。和清さんも歸りなんすし。そふなるとわつちらが。茶や衆へたちんせぬから。モおつつけ夜があけんしよふ。それまで一ねいりおやすみなんせ。あや梅さん。つれ申ていきな。[新造]アイおせわでござりいした。おやすみなんせ。モシわつちが部屋へおいでなんせ。[野呂]イヤア身どもは。夜明まで爰にゐませう。[新造]おや。ばからしうありんす。和清さんも。はつさんも寐なんすよ。[和清]モシそれではまだどふか物があるやうで。氣味がわるふござります。先あれへおいでなさりませ。、 といふにいやじやの。何んのかのと。しやくばるを。和清女郎新造みんなして。いろ／＼だませば。ぐにやとなり。新造に手を引かれゆく。 [和清]ヤレ／＼うまひさい中おこされて。大事の夢がひへかたまつた。これからちつと見なをそふじやあるまいか。[女郎]アイそれもようござんせう。 と女郎はしごきをときて床へいれば。和清もまた／＼をびとき。よぎへはいる。 [和清]何んとあの野呂は。はくのついた不粋だの。[女郎]アイそれはそふだけれど。あのあや様がわるふありんす。ぬしが宵にいひなんした通。たいていいひふくめた事じやありんせん。それにまあ。[和清]ヘテ扨それも道理じや。なりをみたがいゝ。しつかいたかまがはらといふ身だ。そこでつい虫もかぶつた物さ。[女郎]エ馬鹿らし。よしなんせ。もふ鶏がうたいんす。ねなんせ。 の屏もひそ／＼とあとしらなみや床のうみ。びようぶのうちやいかならん。ねずのばんがうつひやうし木も。きぬ／＼つぐるとおどろきて。かぞへてみれば。一イ二ウ三イ四ツ五ツ六ツ。

東雲のてれ

[illegible] [幇間]もふ何ン時だ。やれ／＼。さつきからやかましくて。寐られるもんじやない。ありや。誰が客だ。[女郎]誰が客か何ンだか。わつちやねつから知りんせぬ。[幇間]ホこりやきついはめだ。ずるたいさへぬは。もふ茶屋が來そふなもんだ。 といふてあんどうの火にて。烟草をすいつけ香てゐる所へ。ちや屋のわかいものは。どし／＼と廊下をむかいにくる。 [新介]お迎ひにさんじまし

た。とせうじの外からいふ。[哥橋]タットこつちへはいつた〳〵。大じなしちの煙草ぼん。[新助]ヘイさやうならごめんなさりませ。とせうじを明て内へはいる。[亀橋]先生明るのかな。[新助]ハイもふ明ケましてござりますが。少しほろついてさんじました。[哥橋]ハテいきだな。けふはゐやうかしら。[新助]ヘイどふぞ。けふはおいでなさりませ。[哥橋]まア亀とそうだんしよふ。これ若いの。年が寄とおへねへわへ。いにしへは女郎にもとめられたが。[女郎]タイこりやおかしいせ。居なんすなといやしまいし。ゐなさるなら。いつ日でもゐなんせ。わつちや。おまへのやうないきでしやれた客衆を。色にほしい。[哥橋]エ、何ンの事だ。おきねへ。[女郎]ほんにさ。いる事がありんすよ。[哥橋]エあんまりかけてくんなんすな。そして又何ンにしなんす。[女郎]アイわつちがかわいひ男の。根付にしやんす。トロへそでをあてゝわらふ。[哥橋]イヤあてこともねへ。此女郎はおれをばしつかい角ざいくの達摩だとおもふさふだ。ト大きにがうをわかし。起きて帯をしめなをしてゐる所へ。一座の亀橋はもはやしたくをして。哥橋お座敷へきたる。合かたの女郎は中どしまにて。きりやうも大てい。人がらもよく。亀橋がおぼこにみへ。おとなしきになづみこすへ〳〵はよんでみたき心にこそうていり。[亀橋]哥橋さま。かへりませう。[哥橋]さ行く。こんな内へふたゝびくるもんじやねへ。といへば。二人の女郎横めにて哥橋をじつとにらみつける。[哥橋]これから又亀をかへて。けふは居つゞけさ。[亀橋]何にいたせ。茶屋までさんじませふ。[亀橋合かた]どふぞ。このごろに来なんせへ。[哥橋]きついきまりだな。さあ。およびや。[合かた]きついおゝせさ。おまへはどこぞへいつて。いゝ女郎衆をかいなんせ。おまへのやうな業平の毛のないやうな色男を。きやくに取女郎衆はしあわせだ。[哥橋]やかましい。あんまりしやべるなェ。いま〳〵しいやたい骨だ。といひながら。廊下へでゝ。はしごをおりる。亀橋はあとにて。何やら合かたとはなしをし。女郎二人も。亀橋もはしごをおり。みせへ出れば。若イ者ざうりをなをす。はく。[二人女郎]わかさん。このごあにへ。[女郎若者]よふおいでなされました。また此間に。茶やさん。御世話でござります。[illegible]にしのゝめつぐる朝がらす。かわい〳〵の聲ばかり。くゞりをあける音ぐわら〳〵。またぐわら〳〵。

婦美車紫野 大尾

安永三甲午歳春陽月吉日

表紙	タテ五寸三分 ヨコ三寸七分
本文枠	ナシ

叙

天に乙女の踊子あれば。地にまたお豊とお富在り。妙音を以て弁天と呼。容色によつて小町と称す。聴人暗に魂を飛し。見る人忽忙然となん

ぬ。今也雨
婦の傳を述
て。妓の所
譯。戀路の
手段。放蕩
者の身の上
語に。臥猪
庵が魂膽も。
花に嵐の
兆となりけ
る。よ町が
亭の酒宴に。
入黒を滅す

貞女の操。是を恨るお豊が終始を。どうらく肌に書つゞけて。呼子鳥とは。なづけはべりき。

安永六のとし酉の孟春

田にし金魚題

目録

妓者呼子鳥

○第一　俠風俗

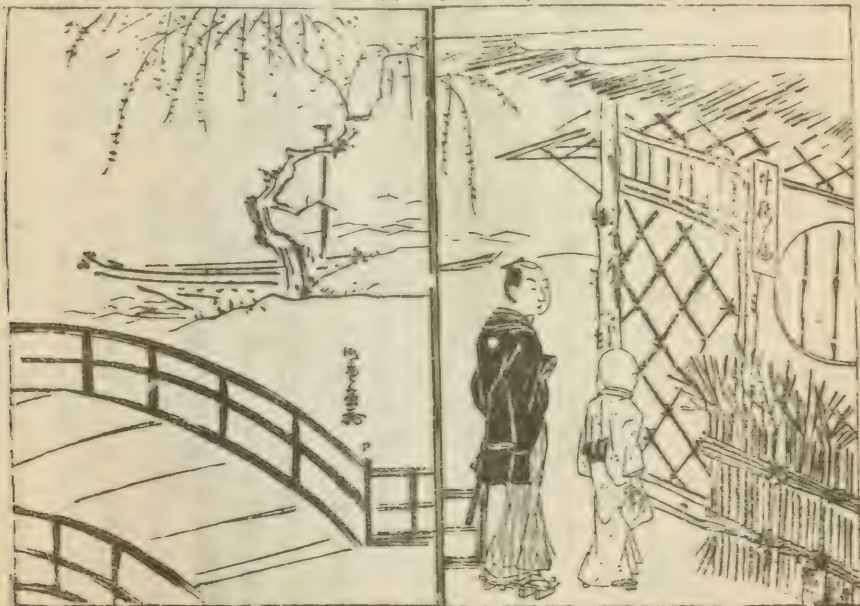
両国元柳橋のほとりに。舩の枝おもふ物あし。脉猫庵とよばるる茶みせあり。さいく入り来る一客は。露路与とつて雑男。年ころ四十ばかりなる人物なれど。大くわきかるく。上ゝ生まれしが中る八家の下がり。よ俤の懐。生れのまゝなれば人づつ目俗なるものなり。あまどんそのとびとあわい。きみよりの俤のぞう

着て。ほそからず太からぬ鮫鞘をおとしざし。大八寸の下駄をはき。人柄のよききやんしたて。左りつまにて。そともより。

〔露じう〕先生おうちか。（トずつとは入。）〔ふすい〕どふだろじうし。ねつからあわぬな。〔ろじう〕きゝな。松葉屋に五日ながして歸りがけに。藏前の和菊が所で。今までめくつておりやした。〔ふすい〕松葉やはだれだな。〔ろじう〕染之介さ。〔ふすい〕初會か。〔ろ〕ゥ、。〔ふ〕どふだ。殺したか。〔ろ〕いんにや。指を切らせてきた斗りだ。〔ふ〕そいつはかけるはイ。〔ろ〕何おもしろくもねい。〔ふ〕大ぶお袖がほころびた。どこでかおたわむれの筋があつたナ。〔ろ〕なに。こりやアかつらやに用があつて。今よし町を通つたら。一文字屋のおせんめが。よびこむからちよつと寄つたら。今吉めがきてイヤアがつて。何ッだか氣なしにくるやアがつた。アイツも此頃おきうの吉と色事だといふうはさだ。〔ふ〕アノ馬道のおせんが。なせよし町へみせを出したか。〔ろ〕ゥ、あいつもおつつけ三十にならふが。まだうつくしい奴だよ。〔ふ〕ャ今吉めは此頃橘町へきたといつけが。またよし町へこしたかな。〔ろ〕やつぱり同朋町にゐるとさ。又深川へ歸るといつけ。あいつもよく方〻へ巢をかへるやつじやねいか。〔ふ〕あいつが馬道にゐる時分よんだまんまだ。やはりよし原にゐる方がよからふに。〔ろ〕なによし原もいかぬのさ。あいつも深川にゐる時の元氣は今じやアさらになしさ。〔ふ〕そふだらふ。しかしあいつがおもひ付とやらで。此橘町のげいしやどもが。きやうげんをするそふだ。先度も三田のやしきとやらで。二ッてう〳〵をしたげなが。おるいは濡髮。およねは放駒で。ふたりともあてたそふだ。〔ろ〕ャそれにつけて。おらアおとよにきれみをやつてしまつた。〔ふ〕そりやなぜ。〔ろ〕此頃どこのやらうめにかころびやアがつたといふ事だ。それじやア。どふも外ぶんがわるい。〔ふ〕なに。そりやうそだらう。よく聞いて見たがいゝ。そしてそのきれみの返事はなんといつてよこした。〔ろ〕きゝな。とんだふといあまめさ。きられる覺へはない。殺してしまへの。氣がちがつたかのと。小むつかしいだら〳〵みよ。面倒だから半分もよんじやア見ねい。それに聞きねい。こびき町のおとみめが。此頃はどうもならねい。せんどもおれがわづらつたら。客をやめて引ぐして。十四五日看病したが。まい晩三どづゝ水をあびて。七日がうち鹽だちで。よるひる寐ずについてゐたが。大ていきついやつじやアねい。それにとんだきせんなやつよ。ャこんな事アむだ。それといへば十日迄に二十兩ない

となられい事があるか。五兩でもあてがねい。なんと本ざいもく町の金かしはどふだらふな。もふかすめいかしらぬ。[ふ]あいつも永沙でこりはてたものを。何かすものだ。ぬしやきり山が息子と心やすいじやねいか。[ろ]何あいつもいかぬよ。[ふ]ヘテそりやアこまつたものさ。ろけもな。できねい時は出來ねいものだ。此頃は富や無盡斗りつけてゐる。きゝねい。第六天のとみも十四五まい付ケておいたが。今よつて見て來たが。花へでも出てゐねい。どふぞ一工面してみて下さい。こんなに困つた事アねい。トいひながら煙管たばこ入をしまひ立んとする。[ふ]もふおそい。泊らつしやいナ。ちつと話したい事もあるから。[ろ]いんや。今夜はかへらにやちつとすまない事がありやす。トいひながら立歸る。上野の鐘がごん引/\。[ふ]こぞうサアねろよ。[小ぞう]旦那お床をとりましやう。

第二　おとよが嫉妬

濱の眞砂げいしやの中に。も。神田のおかね。中村お國。平松町の文字たみなんどは。そのわざのよきのみなれども。わざと心とやうしよくと。三ッ拍子そろふたる。その香も高き花たちばな。橘町になにしあふ。弁天おとよときこへしは。飛燕があいきやう貴妃が媚。虞氏が風俗。西施がやうぎ。わが朝のそのむかし。小町。衣通。女三ノの宮。天津おとめのすがたにも。おさ/\おとらぬ容色なれば。勿體なくも異名して。弁天おとよと名にたかし。されば町

方やしきをわかたず。くしのはを引座敷のかず〳〵。猶いやましのおとよが心。露時雨が切れぬ氣にかゝり。なんでも逢ふてこのうらみ。なんと云わふやこう云わふと。心みだるゝうきおもひ。此夜の座敷はことさらに。ぐんじ兵衞。一藤太。與三左衞門なんどゝいふ。すこびたる一座なりしが。中になまぎゝ。半か組。いやみぞろひの茶道の文南。酒たけなわに及べるおりから。

【文南】コレ〳〵おとよ先生。きこうの手の。ほりものを。すことはいけんいたしたい。【豊】イ、エわたしらが手にやァ。そんなものはついぞ覺へがありやせぬ。ト何もなき方の手をまくつて見せる。中にくにして雪をあざむく。さもこまやかなるはだゑの。しろたゑ。【文南】そつちの手を。ト見にかゝる。おとよはさま〳〵見せぬこなし。皆〳〵たかつて。無理無體にまくりみれば。達筆に。二世も三世も露時雨女房。【文南】さてこそ〳〵。とんだ大キなほり物だ。これをほる時ァさぞ痛かつたらう。似た事もあるものだ。木挽町のおとみが手にも。やつぱり露時雨とほつてゐたが。よもやその露時雨ではあるまいさ。【軍次兵衞】露時雨とほるが。はやるかも知れない。【藤太】おとみとはせんど木挽丁のはらで アノみた娘か。【文南】それ〳〵。あれはもと。佐々木幸八といふ。三味線引の娘だが。中ばしから芝までの。女げいしやのとう〳〵だ。【與三左衞門】ろじうとは。かの評判の色男か。【文南】さやうさ。ほんににくいほどいゝ男さ。第一鼻筋目のうち涼しく。唇うすく。いろ白く。まる顔でなし。瓜ざねでなし。ほんにうのけでついたほども。言分なしのいろおとこさ。それに。いきななり斗りしてありくから。江戸中で今助六と。評判のたわらでござる。【與三左衞門】文南しはよくなんでも。穴を知つてゐ給ふとかな。【文南】なんでもわたしが知らぬ事は。大方ござりませぬ。お聞きなさいその露じうと。おとみがとんだいろどだね。指きり。かみ切り。血酒。日きせう。キゥらんちき騒ぎといふ事さ。それだから露じうもぐつとのぼりやァがつて。女房に引ずりこむそのつもりにした所を。露じうがかうしみい。おばとやらが。もつてのほか不承知だげな。それでおとみめが。此頃にかけ込むといつてさわぐげな。

ト聞くよりおとよは髮逆立。身におぼへない無理いひかけて。おとみにみかへてきれぬか。だまされしか。殘念など。年ふれば石となるくすのきの床柱へ。ひばちの火ばし逆手ににぎり。エ、くちおしいと歯ぎりなせば。くだんの火ばしはくすの木の石の柱へ八寸ばかりさしとをしける。その有様。見る人おもわずぞつとせしが。おとよはたちまち氣はき

やう亂。形相かはつてすつくと立。炭烈ふとおこつたる。猛火の火ばちをふり上ゲて。そばにしやれゐる文南に。たまりもあらず投つくれば。火ばちはあたまにかぶせられ。何かは知らずまつくらやみ。それ灰は雪に似て飛んで散亂し。人はまつ白になつて這て徘徊すといへり。いかに文南はさぞくるしくや思ふらん。これや茶番の火ばちのばけ物。兩國にほしき男也。一藤太は手練の早縄。おとよが小手を高手にからげ。駕へおしこみ橘町へ。そう／＼おくりかへしけり。それよりおとよ食事もたへて。二三日打ふせしが。二世の男を寐取られし。そのあだ人にそわせじと。いのる心もわれながら。げにあさましやはづかしや。アヽ物うしの時參り。戀とうらみとねたましと。三ッのかなわに蠟燭の。もゆるほむらも胸掛の。鏡にみちはてらせども。心はくらき川ぎしづたひ。水漂茫と物すごく。そらふく風もたゞならぬ。多田の薬師にならびたる。秋葉の宮のしん／＼と。しげる一ト木の神木に。石をひらふてうつ釘の。おとちやう／＼とこだますれば。おもわず耳を打おゝふ。さすが女のあどなさも。戀にはつのる一念力。一七夜がその間。木にうつくぎも人につうじ。おとみは毎夜物のけに。せめなやまさる苦痛のありさま。ふしぎなりける事どもとかや。

第三　まつさきの狐

上がた店の息子雷義といへるできぼし。臥猪庵におとづるゝ。

[らいぎ] どふじや先生。けさは早うおきなんしたノ。[ふすい] コレハらいぎ子か。今お歸りがけだな。[らい] イヤ／＼内からわざ／＼來たのじや。[ふ] それにしてはとんだお早。シテ此頃のおたのしみは。[らい] 氣をかへてげいこじやわい。それについてちと智恵を。からねばならぬわけといつぱ。アノおとみめろが事じや。わしやゑらふほれたさかいに。なんとくどいておくれんか。[ふ] いつぞあつたら話して見やしやう。[らい] イヤ善は急げじや。ハテじきにやつてこましたい。[ふ] ソレヤアあんまり急なこつた。そふなら呼びにやりなさい。したがあいつもはやる奴だから。呼びにやつても居ればいゝが。ト云ながら。裏のゑづかいを呼んで。おとみを急によびにやる。[らい] 此廣いお江戸じやが。またおとみほどゑらいやつも。とんとこちやみあたらぬ。どふ思ふてもこちや女郎より。藝子がてつつりとするやうだ。[ふ] 私もげい者は好きだけれど。心いきは女郎より。もつと惡いもんでござります。それに客と一ッになつて。いかもの食ひをしてしやれる所をみると。

くつとあいそがつきる。〔らい〕いつぞ聞こふとおもふたが。女げい者はなせ客よりも船頭を大事にしをるな。〔ふ〕深川げいしやなぞと違つて。江戸げいしやは。せんどうににくまれると。いろ〳〵の。あたをする故の事さ。〔らい〕時におみつが兄めは。くつきりとしたよい男じやはい。〔ふ〕何。アリヤアあいつが亭主さ。〔らい〕デモあにさん〳〵といひくさつてじや。〔ふ〕藝者の兄さんは大かた亭主さ。トはなす中。おとみおさか來る。〔ふ〕サア〳〵さきから待かねた。さぞくつさめが出たらふ。大體わるく云つていた。こつちやァない。〔おとみ〕なにそれでも。大きに急いで參りやした。のふおさかさん。〔おさか〕アイあんまり急いできたいへ。いつそのぼせやすよ。それにかつさんが來て。又れいの芝居ばなしで。ほんにじれッとうござりやした。〔とみ〕それだが。勝さんは氣のいゝ人さ。いつぞや向島で ツレ八さんが喧嘩の時も。三味せんや何かの世話をして。ほんによくきのつく人さ。〔ふ〕コレそつちの話ばかりせずと。ちつとこつちへも。はなしを廻してくれろ。時にらいぎさん一ッのんで參りやせう。〔らい〕それもよござんしよ。〔とみ〕お坂さん。三味線をとつてきてくんな。〔ふ〕さみせんはむだゞぞへ。それより酒にしや。〔とみ〕夕部あか坂のおやしきで。夜明るまでのんでいやした。〔ふ〕外の所でのんだ酒を。何こつちで知るものか。なんでもけふはのませにやァならぬ。ナアらいぎさん。〔らい〕いやであらふと今日は一ッすごして下んせ。たのむぞへ。〔ふ〕コレ小僧。燗ができたら持ッてきや。小僧銚子をもつてくる。サアらいぎさん。こつぷにしやせう。これで一ッのんでまはすよ。〔らい〕コレなんにも肴がないぞへ。〔ふ〕さかなはさきで上やせう。梅ぼしでももつて來や。サア おとみぼうさしやせう。一ッのんでらいぎさんへあげや。〔とみ〕アノコレでかへ。〔ふ〕何そのやうに。きもをつぶす事はない。のむ所じやのむだらう。〔とみ〕アノ そんならたべやせう。〔さか〕おとみさん。またのみなさつたらあたるによ。〔ふ〕又おさかがそばから。それがてうしのさしで口。ドレ おれがつぎやせう。トつぐ。おとみのんで。〔とみ〕らいぎさん上ゲやせう。トつぐ。らいぎのんでおさかへさす。〔さか〕わつちやねつからたべやせぬ。〔らい〕それでも半分のまんせ。〔とみ〕モウあの子はのむといつそねて斗り。いやすによ。〔ふ〕コリヤア面白い。三味線ひかずといゝから。サア一ッのみや。〔さか〕そんなら半分たべやせう。トのんで臥猪へさす。〔ふ〕チトおさへませう。〔さか〕コリヤむりだね。そんならららいぎさん。おあいをお頼み申やせう。〔らい〕お手もとゝいひたい所じや。〔さか〕モウおがみやす。〔ふ〕こりやァほんにあんまり肴がない。小ぞう。角の酒やへいつ

て。ちよつと玉子をとつてきや。[とみ]玉子をたべたら仕方がござりやすまい。[ふ]そつちやァしかたもあらふが。おれが仕方があるまい。しかしおさかぼうがのむとねるといふが。ちつとたのしみだ。さかから笑いながら いつそもふ目がとろ〳〵して來やしたよ。[ふ]おきやァがれ。[らい]なんと先生モウおいでんか。[とみ]どこへいくのだへ。[ふ]まつさきサ。[とみ]また狐は出やすかね。[さか]アノ犬がおかしいね。[らい]おさかぼうおあいをたのむから。先生へあげておさめとし給へ。トのんでお坂へさす。[さか]手酌にいたしやせう。[ふ]それでも半分。[さか]コレごらうじやせ。半分たべやす。トのんで先生へさす。[ふ]一ッうけて。どふかおれ斗りのんでゐるやうだ。[らい]まだおとみぼうはねつからあがらぬ。[ふ]イヽエおとみぼうにやァ話があるから。今日はのまされやせぬ。モウこれでお納やせう。時に小僧舟はどうだ。[こぞう]さつきから待つておりやす。[ふ]そんなららいぎさん。サア參りやせう。トみな〳〵ふねにのる。[舟頭]おとみさんお久しうござりやす。とみ たれかと思つたら桑名屋の人だの。おばさんはおかはりもねいかへ。ホンニせんどのしほばまのまんまだね。[ふ]おとみさん。あんまりかゞみすぎるぞへ。[とみ]又わる口ばつかり。ちつと三味線を出しやしやう。トおとみ。おさか。八重がすみの哥を引。程なくたどの藥師の前へくると。おとみ引かけし三味線をやめて。俄にくるしむけしきなり。[ふ]おとみ坊どうした〳〵トみな〳〵驚く。此内に舟すぎぬればやう〳〵と心づいて。[とみ]わつちやどふしやしたつたへ。もし向はたしか藥師さんでね。アノとなりの森は。なにさんでござりやすへ。[ふ]あれは秋葉さ。[とみ]アノ森をみると思はずぞつとしやしたが。ほんにこはい所だね。[ふ]何こわい所だろふ。春さきは。大體にぎやかなこつちやない。トはなす中。舟はまつさきへつく。皆々舟より上る。[らい]まづ稻荷へまいつて來やう。[ふ]お前はお坂ぼうをつれて。まいつて來なさい。わたしやおとみぼうと話があるから。はつたやに待ていやす。トらいぎはおさかをつれ。稻荷へまいる。ふすいはおとみとはつたやの二かいへあがる。[とみ]モシいゝ見晴しだね。[ふ]おとみよふがある。こゝへきや。[とみ]笑いながら。なんだへばからしい。[ふ]ばからしい事でもなんでもねい。話といふは アノらいぎが事だ。[とみ]らいぎさんがどふしやしたへ。[ふ]あいつがてもなく惚れてゐるのだ。口說いてくれろとうるさく頼む。それゆへけふ此處へきたのだ。定ていやでもあらふけれど。ハテほれた顏さへすれば。てまへのためにもなる事だ。[とみ]それだとつてばからしい。いやだと思つてそんな事がなるものでござりやすか。そして マアよくつもつてもごらうじやし。どうわたしが。ハテそんな事が

なるものでござりやす。〔ふ〕手まへのいふのも尤だが。ハテ手まへの内しよのわけもしつてゐる。おれがこふいふもわかるまいが。こゝをよくきいてくりや。露時雨はともだち。れいぎはついとり。どつちのひいきといふ時は。ろじうがひいきならしやしない。畢竟こういふも。つまる所はろじうがためだ。〔とみ〕なぜ又ろじうさんのためになるへ。〔ふ〕あれがおとよに切れにくい。内しよのわけを知つてゐるか。〔とみ〕なる程露じうさんのはなしではきゝやしたが。何かきれるにもきれにくい。むつかしい事があると。いひなさつたが。その事かへ。〔ふ〕サそのわけといふは。此まへ露じうが内を出た時に。薬研堀に店をもつてゐるうちの何やかは。みんなおとよがすごしておいた。それに手まへもしつての通り。ろじうがすきなァノなぐさみ。その時分は。わけてあれもしあわせわるく。おとよがきものや頭の物まで。みんなあつめて一時に。廿両といふものかりた。今切るにはそのかねを返さねば男がたゝぬ。それでろじうも。この頃は。いろ／＼とくめんすれど。廿両のとはおいて。十両もできぬそふだ。なんとてまへ。らいぎをだまして。金をかりてろじうへわたし。おとよへかへさせ。さつぱりと切らせたくは思はぬか。〔とみ〕さあ切らせたさは切らせたけれど。〔ふ〕サそこだによつて得心しや。〔とみ〕らいぎさんをだましてもかへ。それでもどふもそんな事は。〔ふ〕ならぬといへば。おとよは切られぬ。それではろじうへまことがたゝぬよ。〔とみ〕サそれは。〔ふ〕いやならばいやと云や。トおとみしばらく思案して。〔とみ〕そふいふ事なら。〔ふ〕どふともするのか。トいふ所へ。梯子ばた／＼。らいぎおさか上りくる。臥猪次の間へ出て。どふだらいぎ子。なんぞうつくしいものでもこなんだかノ。〔らい〕おさかぼうが狐をみたで。それでゑらうひまどつた。時に内ふのやうすはの。〔ふ〕ハテ先生がする事だ。如才があつてたまるものか。〔らい〕エヽ、ありがたい。とおがむ。此うちおとみは奥座敷より立出て。らいぎに向ふ。〔とみ〕らいぎさん。だいぶ遅かつたね。なんぞおもしろい事でもあつたも知れぬ。ト少しやくきみ。〔らい〕ニ何犬と狐を見てきたばかりじや。〔ふ〕サ一ッたべやせう。ト手を打。女來る。サ早くなんぞ持てきやれ。一ッのみたい。〔女〕かしこまりました。トいふ内吸物。銚子。すゞり蓋いろ／＼と持はこぶ。〔らい〕なんとこゝのげい者でも。又呼びにやろふかな。〔ふ〕なにむだゝ。よしたがいゝ。〔とみ〕おさかさん。三味線を。トいふ内おさか三味線をとつて來る。調子を高くさはぎを引。此うち酒事しばし。先生立ておくのざしきへ行。おとみを呼。同じく立て行ク。〔ふ〕さつきいつた通り。らいぎをこゝへよこすから。いゝようにあわせ

ておきや。[とみ]それでも。とんだおんまりきうだね。[ふ]ハテ今日あうといふこつちやァなし。口さきで例のちよ/\らさ。[とみ]そんならマァどふともしやせう。[ふ]よこすぞよ。と又こちらの座しきへ來て。らいぎし。一寸あそこへおいで。[らい]行きはいかふが何ッじやいの。[ふ]なんでもマァ早くいきなさい。らいぎうれしげに立ておくへゆく。おとみ奥のすみにうつむいてゐる。[らい]なんのこつちやしらん。あそこへいねといふから來たのに。あほうらしい。トひとりごといふ。[とみ]もし一寸こゝへおいでなんし。[らい]何ッじやナ。[とみ]さつきから段々。先生さんのおはなしじきゝやしたが。ほんの事でそふおつしやいすかェ。わたしどもがやうなものを。そふおつしやるはづがございせぬ。おだましなんすでござりやしやう。[らい]だますとはあきないめうり。夷大黒かけ奉り。わしやとふから先生を。大ていたのんだこつちやないわい。定めてお氣にやいるまいが。心の内で手をあわする。[とみ]こふ申しいす上からは。こつちに嘘はござりやせぬが。おまへちやにしておくんなんすなへ。[らい]そふ思ふて下んす事なら。どんな心中でもして見せませう。[とみ]ほんにかへ。といだきつく拍子に。[さか]おとみさん/\。トよぶ。[とみ]よびやす。あの子は口のわるい子だから。こんな事がひよつとしれると。大體わるくいふこつちやござりやせぬ。トゆかんとする。むりにすそをひきとめて。[らい]コレまだはなしたい事があるはい。[とみ]アレたれかきやすといふに。トふりきつて座敷へゆく。らいぎもまぬけたつらつきにて跡よりざしきへ出くる。[ふ]なんとらいぎ子あんまりおそくなつたなら。内がわるくはないかへ。[らい]たとへわるくとも大事ないのさ。[とみ]何それじやわるふござりやす。サアモゥお歸りなされやし。[らい]モ一ッのんでいにませう。ト手をたゝき女をよぶ。なんぞさかなをもつてき給へ。トいふよりも。れいの菜飯。田樂。大ひら茶碗盛のるいをいろ/\もつてくる。らいぎはけしきどつて何もくわず。先生はむしやうにうちくらふ。らいぎはおとみがくいかけの汁をとつて。これをうまそふにすい。舌打しながら。わがくいさしのしるをおとみがぜんのうへにをく。おとみはこれをかつてくわず。[らい]おとみぼうはなせしるをたべやらぬ。[とみ]わつちや。蟲氣でしるはきらいさ。[らい]そんなら。此平をくふてたも。ト又わがくひかけのひらをおとみがひらととりかへる。おとみこれをさらにくわず。[らい]そのうちでなんなと一しな食ふて下され。[とみ]皆わつちがきらいな物だよ。[らい]それともその松茸はくふだらう。[とみ]何それもなまのでなけりやァたべやせぬ。先生にこ/\笑ふ。[らい]そして手前は何がすきだ。[とみ]わつちやなんでもみんなきらいさ。[らい]それでも芝居はすきだらう。[とみ]いゝへ。それも猶きらいさ。[らい]そりやうそじやらふ。役者はたれが贔負じやへ。[とみ]お前に似てゐるァノ市山傳五郎とやらが。ほんにしみ/\すきやした。[らい]その傳五郎

といふは。かたき役か色事師か。[とみ]いろ事師でござりやす。[らい]それが。わしに似たといふのか。[とみ]しがみ火鉢を。わらずにそのまゝ。[らい]何やらを。[とみ]イヽエうりを二ッにさ。[らい]よい男かの。[とみ]外にやァござりやせぬ。[らい]どふぞ市山を見たいものだ。ャ聞けば此頃橘町のげいしや共が。狂言をするそふだ。おれが此頃のこらずよんで。アノ白木やをさせてみたい。役割はさしづめ先生。[ふ]ハテおとみはおこま。お前は才三さ。[らい]わしがにも出來やうかの。[ふ]出來ねいでどふするものだ。なんでも髮結のまねをするのと。おこまにだきつかれる斗リだものを。[らい]こりやァどふぞしてみたいものだ。筆太夫をよんでほんまにやらかしてこまそう。　トはなす所へ。吉原より先生をむかひに來り。先生は此所に名の高きおこんとおるいを呼にやり。二人の藝者を引つれて吉原へいそぎゆく。らいぎはおとみ。おさかとともに。かのぼく水に舟を浮ぶ。又つれ引のびんがの聲。舟はほどなく柳ばしにつく。[らい]おとみばうあしたすぐによびにやるぞよ。[とみ]あしたもあさつてもおやしきへ參りやす。どふぞあさつてのそのあしたにしておくれなんし。[らい]それはちつと待びさしいが。明後日はそんならきつとじや。　トこれよりらいぎは舟を上り。駿河丁へかへりけり。おとみおさかは此舟にてすぐに木挽町へかゑる。

第四　おとみが手段

よ町が亭と聞へしは。前に蒼海漫々と。總房二州を見晴して。風色類まれ也けり。雷義は此日の約束なれば。墨水玉河の友を誘ひ。此所に傲遊なす。[玉河]呼にやつたは雷義子。誰だ。[らい]おとみさ。[玉]アノ木挽丁のか。[らい]ウ、夫さ。

〔玉〕あれには。つがむない色があるが。知つてゐるのか。〔らい〕何そふいふ事はない筈じやが。〔玉〕貴公はそんなら何ンにもしらぬな。あれにやァとんだ咄しがあるよ。〔墨水〕そふいふ咄しをおらも聞た。弁天おとよとそのおとみと。色あらそひだといふ事だ。〔玉〕そして指を切たり。ほり物をしたり。おとみめはいつそ氣ちがひの様になつて騒ぐげな。其色男の名は。たしかなんとカ云つたつけ。〔墨〕なんでも藥研堀の方のものだ。おとみが來たらば。手をまくつて。ほり物を見るがいゝ。

二人つれ立ち朱ぬりの駒下駄。雪をあざむくかよわき素足に。黒びろうどの細ばなを。さて上着には黒ちりめんに染出し紋の秋しの牡丹。茶襦子の裏にすそ廻りは。金いとのつぼ〳〵縫い。下ぎに二つ重しは。江戸むらさきのちりめんむくに。江戸づまに白あがりに。あきの千草をそめなせり。緋縮緬の長じゆばんに。同し色のきりたていもじ。山ぶきの紋がらのもよぎどんすのはゞひろをび。いはがたの丸ぐけに。柳の腰をしめきる如く。おさかも。ついのはて衣装にて。よ町がもとへ來り。〔とみ〕おばさん此頃は。おとう〳〵しうござりやす。〔茶屋のかゝ〕きついお見限りだの。さきからお客が待かねてだよ。〔とみ〕二かいへ。トおさかをつれ立。二かいへ上る。〔墨〕サア〳〵まちかねた。まつほのさしみ。〔とみ〕いつそいそいでくるとつて。ついあそこでころびやした。〔玉〕おらァ羽をりげいしやにしたいものだ。〔さか〕なんの事だへ。わつちらァ。そんな事ァぞんじやせぬ。〔墨〕サおとみさん。こゝへきなさい。トらいぎがそばへよぶ。おとみ。らいぎがそばへすりよる。〔らい〕あんまり側へよらつしやるな。叱てがあらふぞよ。〔とみ〕おかしな事をおつせんすな。なんだかねつから通りやせぬ。〔墨〕コレおとみさん。やげん堀からことづけがあつたッけ。〔とみ〕そりやァおきせさんじやァございやせぬかへ。〔墨〕いんや。そんなもんでなしさ。〔とみ〕なんだかねつからおかしいね。いつそ酒にでもいたしやせう。けふはなせか。雷ぎさんがねつから元氣がござりやせんね。〔らい〕なんじやかもや〳〵。心持がわるい。あたいたいな。いつそ酒でものんでこまそう。ト茶碗をとつて手じやくにぐつと引かける。○おとみその茶碗をとつて。〔とみ〕なんだへ。あんまりおゝきすぎやす。わたしが半分すけて上ゲやせう。トらいぎがのみさしをとつて。おとみ半分ほどのみ。〔墨〕やんや。あやかりものめ。ャらいぎさん。さつきの事を。ソレ聞て見なさんねいか。〔らい〕コレおとみ。藥研堀のほうのことづけは。手まへ心におぼへあらふが。〔とみ〕アノおるいさんかへ。おふねさんかへ。〔らい〕インャそんなものじやァない。〔とみ〕そんならおたみさんか。お銀さんか。おかねさんか。おまきさんか。あの子たちよりほかに。ことづけをされるものは。〔らい〕何女じやない。男じやはい。手まへの手にある男じや。〔とみ〕わつちが手に何があるへ。〔らい〕何があるか。まくつてみさんせ。〔とみ〕ばからしい。わつちやァいやサ。〔墨〕そんなら何か見せられぬ

事があるな。[とみ]なる程ほつた人もありやしたが。そりやとうに切れてしまつて。さつぱりとした身の上さ。ナァおさかさん。[さか]あのこなら。とんだふるいのさ。今じやそふいふ事はござりやせぬ。[らい]そんなら。こゝでけしてみや。[とみ]ずいぶんけしもいたしやせうが。わつちひとりばからしい。いやさ。[さか]人の身斗りあらためずと。らいぎさん。おまへの手をおみせなんし。[らい]さァみせませう。トもろ肌ぬいて両手をぐつと改めさすれど。胸に毛のあるばかりにて。ほり物などさらになし。なんとどふじや。あるまいが。きれいな物であらふがの。[とみ]そんならお前。わつちが名をほつてさへおくんなんすと。わつちが手のも消しんしやう。[らい]おれがほつたら。こなんは消すか。幾つでもほりたい物じや。[とみ]およしなんし。わつちが名を。ほりなさつたら。外聞が悪ふござんせう。[らい]そんな事をいわんすなら。今じきにほりませう。[玉]こりやァおもしろかろう。ドレわたしがほつてやりませう。トはりをとりよせ。ほりにかゝる。おとみ其針をとつておりてすてゝ。[とみ]もふいゝかげんに。じやうだんをなさりやし。しまいにやァ困りなんしやうぞへ。[らい]そんならてまへ。けす氣がないの。[とみ]随分けしもしませうけれど。そふはなりやせん。こんどの事さ。[壘]らいぎさん。それじやァおまへ。すんめいぞへ。[らい]コレおとみ。どふあつてもそんならいやか。[とみ]アイいやでござんす。ト雷ぎむつとする。[らい]そんなら消さずとまゝにせうは。どふぞ手なのを見せさつしやい。[とみ]みせる事もなをいやさ。[らい]そんなら見ずとをきませう。トてれる所へ。女ぼうさかなをもちきたり。[女ぼう]なんだかお前さん方は。くぜつ斗りいつておいでなされやす。ちつと御酒になされませぬか。おとみさん。ちつと引なさいな。トおとみ三味線をとりよせて。さかもりのうち。うたを引。女房はおくの間へふとんを持。枕を置て。[女]おとみさん。ちよつとお目にかゝりやせう。トおとみをよんで。こゝにちつといてくれな。トざしきへ行。らいぎが背中をつく。雷義はならうたにておくの座敷へ行。[らい]おとみ。なんだ。[とみ]けふは何ンとおもつてか。だいぶ。いろ〳〵の事をおつしやいすね。[らい]なんと思つてもゐやせんけれど。聞けばこなんは色事があるそふな。そんなら今迄のは皆うそじやの。だましたのじやな。[とみ]なぜだへ。[らい]ハテほり物もけすまいし。わしにもほらさぬからは。これうらみじやぞや。おとみさん。あるならあるとかくさずと。なぜにいふてたもらぬぞ。さりとはつまらぬ。むごい仕方じや。ト涙ぐむ。[とみ]それほどにまで。思つてくれなんす上からは。何マァおかくし申やしやう。わけをお咄し申いすと。長い事でござんすが。ほんにぎりでばつかりしいした。また消されぬといふわけは。此春わたしがはしかの時。

いつそつまらぬ事斗ゥござんして。その人のまへから。廿両かゝりやした。それをかへしてしまわぬうちは。どふもけすにもけされやせぬ。あそこでその譯をはなしたくても。みんなが聞いてゐなさるまへ。わるく思つておくんねんすな。らい そふいふわけとは露しらずに。むり斗ゥいひやした。そのかね私がかすさかいで。ほりもの消して金かへし。さつぱりときれさんせ。ト懐中より金を出し。廿両おとみにわたす。とみ 御しん切はわすれやせぬ。金さへかへせばどう成とも。らい サア。金かしたうへからは。ほり物をけしてたも。トのつぴきさせずもぐさをとりよせ。手をとらまへてけすほり物。かゝるところへおさかきたり。さか 御膳が出やした。あがつてまた。ゆつくりとお咄なんし。らい 今いくといふてたも。トすゆるもぐさのやけ入るも。露じうがためとこらゆるおとみ。一間のそとには玉河が高聲。玉 コレ〳〵あんまり幕がながい。切落しで手をたゝく。飯でもくつて腹へちつと。身を入てはなすがいゝ。何かゞさめる。早來給へ。とみ そんならマア いつてから。後にまたはなしやせう。トおとみは向ざしきへ。らいぎもあとからにこ〳〵出る。墨 らいぎさん。どふだわかつたかな。らい 大わかり〳〵。玉 それでもほりものをけさねば。すめぬぞ。らい それもわかつたて。墨 わかつたと斗ゥいつても。すまぬものだ。らい おとみ。その手をださつしやいな。とみ 何だへばからしい。わつちやアしりやせぬ。玉 それみたか。何消すものだ。トゆふゆへに。らいぎは見せたがり。色ごときをもめどもみせぬ故。こらへかねて。らい いんや。けしたよ。墨 何けした。おきやアがれ。こりやアおかしい。きついうそだぞ。おとみさんどふだ。消す氣は。さらになし地の重箱だらうが。おとみはろじうへ知れやうかと。此事を二人へ隱し。けさぬふりしてらいぎをじらす。とみ かあいゝ男の名だ物を。めつたに消しちやアなりやせぬよ。玉 消されまい。尤な事だ。しかしそのやうに。なんぼ思つてゐなさつても。此頃露じうは立ゥかへつて。毎晩おとよが看病するげな。その證據には此ごろは。おまへのほうへは來めいがの。ト聞よりおとみはおどろきて。とみ そりやアマア ほんの事かへ。玉 ほんの事くらいか。藥のせわや何かをして。毎晩ねずについて居るげな。とみ どふして知つておいでなんす。それがまあほんのこつちやア。らい ほんのこつちやどふするつもりじや。とみ おとよさんがさぞ。嬉しうござんせふといふ事さ。さか 墨 それをきいちやアおとみさん。そふしちやアいられまいがな。とみ なぜへ。墨 かくしなさんな。よく知つてる。何ンでもほり物をけさぬからは。四も五もいらないろじうがかゝアだ。らいぎさん。むだゞぞへ。おもひきつてしもふがいゝによ。らい ほり物さへ消したなら。言分はあるまいがの。玉 そりやア

またしれた事さ。〔醫〕どふしてあの子が消すものか。〔らい〕出してみせてくりや。〔とみ〕イ、ヱわつちやァいやさ。〔玉〕これを消せばとんだ事だが。らいぎさんぢやアけされまいさ。トいふ故にらいぎはいよ〳〵氣をじらし。おとみがそばへ立よつて。〔らい〕これおとみ。みせてくれねばわたしがたゝぬ。〔とみ〕ヱ、もふわつちやアいやだといふのに。トいひながらおとみはたつ。らいぎこれを引とめて。いろ〳〵手を出させんとす。おとみ是をみせまいと。二階の上り口まで逃てゆく。あとより追つかけ狂ふはづみに。らいぎは二階をふみはづしまつさかさまにずでんどう。うんとばかりに氣ぜつなす。腰をぬく。茶やの夫婦は大きにおどろき。醫者などよんで氣つけをあたへ。やう〳〵いきをふきかへせば。無理無體に駕にのせて。駿河町へかへせしは。氣の毒ながらおかしかりき。

第五　生たるおとよ死たるおとみを惱

露時雨おとみがかよふかみ。ものよりよければ先生より。たがいにつうろなしけるが。かの先生はまつさきより。よし原に大ながし。四五日宿へ歸らねど。かゝる事とはおとみはしらず。ろじう方へおくる文も。先生かたにとゞこほり。ろじうがおとみへやる文も。先生への手紙かと。留主の丁稚がとゞけねば。たがいにからむるいぶかしさ。惡事千里はふせぎがたく。おとみとらいぎが色事と。しやくり手あれば露じうはせきこみ。此ごろやる四五どの文も。用事あるのに返事もしをらず。不思議とおもひゐたりしが。又もや外へくされあい。人もしつたる此ろじうが。つらをけがすか性惡め。そふいふ奴とは知らずして。おとよにまで切れた事。はやたれ知らぬものもなきに。人に笑せはちかゝす。思へばにくきアノ女。どうしてくれうざしきよたかと。兩國の叅しまより。おとみをにはかによぶ使に。もし座敷へ出おつたら。いつた先まできいてこいと。せいてやる人はやたちかゑり。おとみはよ町に。客はらいぎと。きくよりろじうは心ならず。じきによ町へふみこんで。ことの實をたゞさんと。いそいでわたる。きやうばしを。二人づれで高ばなし。

〔玉〕アノおとみめは。なんとほんにほものを消したらうかの。〔醫〕ヘテかゝアめが床をまわして。らいぎとおとみを呼びやァがつて。うすぐらい一間のかたすみ。屏風をぐつとひきまわし。物おとたゑてしめやかに。ほりものを消すもぐさの匂ひ。なんでもあいつは。きまつたに違ひはないがその罰で。ちわがこうじて二階から。ころがりおちだアノざまは。おかしかつたじやァなかつたか。ト

はなしきくより露じうはせきこみ。歩むともなく銀座町。右へまわれば

弓町の。つる打やが向かど。おとみはよ町を立出しが。らいぎがつれのしやくりしを。女心にまそゝ心へ。これほど思ふ心にみかへ。またもおとよに立かへる。ろじうが悪性うらめしく。顔でしらする心のしつと。露時雨をみれどつんとして。物をもいわず行すぐる。

[ろじう] コレ待ておとみ。と声かくれど。ひぞつてみせる鼻唄あしらひ。[ろ] ろうぬ。此頃いろどが。出來たと思つて。あいそのつきたそのつらァ。うぬなんだ。[とみ] エ、こつちであいそがつきたはな。いけあつかましい。そりやァわつちにいふのじやあるまい。おとよさんとの門違かへ。[ろ] こいつは云わせればとほうもねい。うなァそれがおれが前で。ぬかされる事か。それに今きけば。うぬほり物まで消しやァがつたな。[とみ] 消さないでどふするものだな。嘘じやァねい。これみてくんな。ト消したほり物を腹立まぎれにまくつてみせる。本より一徹短慮のろじう。おとみがもとゞりひつゝかみ。氷の刃ぬきはなし。わき腹から胸元まで。ぐつとつつこむ一ト刄ぐり。おとみは苦しき息をつき。[とみ] エ、うらめしいろじうさん。きけば此頃おとよさんに。又たちかへる性悪の。邪魔になる故殺すのか。死ぬる命はおしまねど。だまされたが口おしい。そふいふむごい心もしらず。明暮こがるゝ胸のうち。先生さんのはなしには。にわかにお前の身のうへも。金のいる事があつて。苦労さんすと聞た故。雷義さんをだましてから。廿両かりとつた。その義理づめにほり物まで。けすもお前に心ゝ中の。心も身をもけがさねど。女の身にはづかしいおそろしいだまし事。その罰ゆへに此死にやう。ぬしにまかせた此命。お手にかゝつてしぬ身は。うれしいといひながら。一人の母のゆく末の。頼りに思ふそのお前が。心がかはつて殺すとは。おまへは鬼か露じうさん。たゞうらめしいはおとよさん。心にかゝるはひとりの母上。わたしが死んだそのあとで。たれを力にうき月日。泣き死にゝ死になんす。その介抱の死に水を。取るこのわたしがさきだつて。歎きをかける不孝のつみ。ゆるさせ給へ母うへ様と。南無あみだ仏も四句八句。しどうをきいて露時雨はおどろき。そふとはしらずはやまつたか。くちおしや残念や。人のしやくりと間違ひとで。むざんにそなたをさし殺し。何めんぼくにながらやう。アレ町内ィは十え二十へ。のがれかたなき此場のしぎ。死出三津をもともなわんと。おとみをつらぬく刄にて。腹十文字にかききつて。たがいにひしと抱き合ヒ。おとみはにつこと打笑ふ。かほも蕾の花の色。二人の春もまたずして。散りてむなしく成にけり。おとよはかくと聞よりも。前后正體なかりしが。やう/\と心づき。二世まで

ちかふ戀中を。寐とりしのみか心ッ中とは。皆おとみめがなす仕業。口をしや怨めしやと。ふししづみたるやまふの床。おとみが母は悲歎のなみだ。氣もさかのぼつて狂乱し。小石をひろふて袂にあつめ。相引橋よりまつさかしまに。そこの藻屑と成にけり。おさかはしんみの兄弟に。別れしよりも猶かなしく。おとみが死骸をほうむりて。なみだのしるし七卒塔婆。七日〳〵のとひともらひも。こゝに一ッの怪談あり。時丑みつる頃おいに。夜な〳〵もゆるおとみが墓はら。陰火の中にわたる泣聲。衆僧これをしづめんと。あらゆる法を修しけれど。さらに此とやまざりし。此寺の境内に。世をのがれ住む浪人あり。かのなき聲のいぶかしく。仔細ぞあらんとうかゞへば。風蒻々と物すごく。めざすもしらぬ眞の闇。手まりほどなる一ッの丸き火。橘町のそらよりとび來て。おとみが塚におちると見へしが。陰火たちまちもへあがる。中におとみがその姿。かげのごくにあらわれて。さも切ふたる聲音にて。あら恐ろしのおとよさん。ゆるし給へゆるしてと。おめきくるしみ泣きさけぶ。浪人とくと見すまして。來國光を引ッこぬき。眞向にさしかざして。おとみをなやます心ッ火の玉を。まつ二ッにきりくだけば。右左へぱつとぞ消へにけり。青きほのほももへやみて。おとみと見えし(は)六角の。一ト木の卒塔婆と成にけり。怪力乱神はかたらじと。浪人ふかくもこれを隱し。かつて此さたせざりしとや。此夜はおとよもとり別けて。ものくるわしくみへけるが。もだへつかれし苦惱のひまか。正體もなく打ふしぬ。ともにつかれし看病の。人もいねむる牛の刻。くさ木もしづむをりからに。おとよがわつと叫びし一ト聲。みな〳〵驚き目をさます。心ならずも母親は。コレおとよ。うなされてか。氣がつきやいのとゆりおこせど。なんのいらへもあらいぶ(か)しく。いだき起せば息たへて。氷のごくひへわたる。母はおとよが耳に口。おとよいノフと呼びいくれど。はるかに隔つ娑婆冥途。二十の坂もまだこへで。無常の秋の夕しぐれ。知るも知らぬもきゝつたへ。しぼらぬ袖ぞなかりけり。されどおとよが一念の。瞋火となつておとみが墓を。惱ませしその證據は。彼浪人の一刀に。くだんの瞋火をきりける時に。アツト一こへさけびしが。そのまゝおとよが息たへしも。不思議の中の。不思議といふべし。もとより死したる執念の。生きたる人をなやませし。類は古今におほけれど。生きたる人の一念の。死したる人をなやませし。前代未聞のありさまを。春の眠に夢けれぱ。そのあらまし

をしるし侍る。
安永六ッの春
めでたき月

妓者呼子鳥終

表紙　ヨコ　三寸六分
　　　タテ　五寸三分

本文枠　ヨコ　三寸二分
　　　　タテ　四寸四分

序

爰に山手の馬鹿人といふ人あり。むだの聖也。叉肩のごとくひど丸といふ人あり。むだはぞつこん得手也。ひど丸は馬鹿人が上にたゝんとかたく。馬鹿人はひど丸が下にたゝんとかたくなん有ける。ひど丸も御好なれば。はかひとも御好。日さへくるれば往〳〵と鳴。鶏は

もとより助兵衛島。一たび垂天に羽うつて野父天を睥睨す。されば山の手の西より深川の東のはて。蟻の穴まで仔細に見きはめ。一巻の書を著す。名づけて深川新話といふ。予蓬蒿の際よりちよびと閲して。これを如在の序の字とす。

安永八亥とし

正月

朱楽館主人題

て野父天を睥睨す。されば山の手の西より深川の

東のはて。蟻の穴まで仔細に見きはめ。一巻の書を

著す。名づけて深川新話といふ。予蓬蒿の際より

ちよびと閲して。これを如在の序の字とす。

安永八亥とし

正月

朱楽館主人題

一夜かぎりかもいちやも御ざれ。新し船のせん頭殿。せんどの拯はとゞひたか。もう乗かゝつたふな玉の。つやではなひか手めへのとゝ。天窓もつかへぬ猪牙のうち。四ツ手といふ身で大そうな。きせる斜にやに下り。ぎちこ〳〵と漕行ば。むかふよりくる潮さきの小ぶね。何やらいふをよく聞ば。ばか〳〵〳〵〳〵馬鹿人が。書あらはせし魂膽秘密。もとより好の義理とふんどし。これはかゝずばなるまいと。いきちよん脇差の小尻に書す。

千里亭白駒撰

深川新話

ついかさまのねつから喰ねへせへ。[舟頭安]ナニサ爰ほどよく釣る所アごせへせん。[東]まだけつく今の所がいゝノウ息子。[文言]アイそれでも。マアもふちつと爰で釣て御らうじやし。[安]きのふなんぞも。爰で斗り二歳三せへが懸りやした。[東]そんならきのふ。みんな釣て仕廻たのだらう。[安]そんなことだも知れやせん。[文]來た〳〵。[安]アレみなんし。[東]ほんに。こいつも二歳ぐれへだ。ヲットござつた。エヽいめへましい。又とられた。[安]なんだ。とつてもお前のやうに餌斗とられちやア。はじまらねへ。ドレお出しなんし。わつちがちつとやらかして見やしよう。[東]ヲヽそのうち一盃氣を付よふ。少秋の暮だ。（筒を出して二三ばいのみ。）[文]いゝへ。[東]舟州は氣はなしか。[安]わつちもたべんすめへ。[東]それでもも一盃はよかろう。[安]アイまあ今にいたゞきやしようよ。いやさ是御らうじやし。一寸とおろしてもけへづさ。[東]こいつア恐ろしい。[文]おれも負やアしねへぞ。[安]ほんにきつい〳〵けへづのつらだね。[東]どれ〳〵おれも釣てみせよう。[安]マア〳〵もふちつとわつちにお釣らせなんし。[東]インニヤ〳〵おれもけへづをあげねへけりやア口が利ねへ。[安]ナニ又お前さの攝待だろう。[東]ナニサ見給へ。アレもふきた。エヽごう腹な。[安]そりや〳〵わつちが言ねへ事か。[文]あんまり上なさりようが早へのだろう。[東]どふも久しく止ていたから。調子がしれねへ。おとゝしあたりやア凄かつたよ。一時の間に二三束とるにやア骨は折なんだ。[安]そりやアおめへ。胴二がむせうにすべたで踏下ケたろうから。[東]こいつアいゝ事をいつて吳た。[文]どつこいな。[安]若旦那ア。よくおあげなせんすね。[東]くやしい事だの。[安]アレそこでさ。[東]爰か。來た〳〵。エヽたま〳〵釣たらだぼうだ。[文]それでも懸れば張合に成やす。[安]ようごせんす。口が直りやせう。[東]ホンニ口が直るといへば。此中驛の何泉とかいふ所へ一晩往たら。とんだ事の初會から帯紐解の身の上咄しといふ幕さ。[安]そりやアとんだことでごせんすね。[東]サアそれから聞ねへ。そいつがまんに成たかして。此頃じやア何處へ行ても鉢卷をしねへ助六といふ身で。意休にかくれの間夫遊びさ。[安]成ほどあれもかわつたもんで。ひよつともてると。何處へ往ても感通するもんでごせんすよ。[文]ほんにお前大文字屋のはどうな

せんした。[東]ナアニあいらアずつとながしさ。[文]それでもかわいそうだね。[東]ナニサ色男と升屋の代物にせうの有のはねへのさ。[安]大文字やのはどういふ理屈へ。[東]ナニよくもねへ女郎だが。ことし年が明とやら何とやらといふ注文の所へ。野郎がずつと乗込さ。始終せわにもしようといふ風で。小袖二ツがりの直ぶち殺し。去る所で居續なんぞはどふだろう。[安]そりやアあんまりむごひね。[文]ヱ、わたしも餌をとられやした。[東]ナニもふ釣所じやアねへ。[安]咄しがしこつてきやしたね。ナントいつそ今から何所へぞ付ようじやアごせへせんか。[東]こいらもはやりそふな作者だ。むすこどふだ。[文]アイ親父に釣といつてめへりやしたから。どふも。[東]ウ、流石文公有がたてへ一言だが。すくないかな方便さ。ねつからはせつ子も持て歸らねへようじやア惡ひけれども。モウ取集て四五十もあらふから。けふは凪はよかつたが。なぜか不獵でとか何とか。そりやア又ふるなの弁で。をれもとりなすから氣遣のきんのじもねへはサ。[文]いやでもないと見えて。そんなら往うかね。[東]むねへ手をあて。しよじ爰に有よ。時に舟州。何所へ往かう。せんたく島か。お旅か。[安]ナニサやつぱ櫓か。すそつぎがよふごせんす。[文]なんでも舟着のいゝ所がいゝ。[安]そんならうらやぐらさ。[東]いゝ内が有か。[安]わつちがいゝ所へ連申てめへりやす。[文]そんなら羽折を着て來ればよかつたね。[東]ナアニ有てへに釣に往たと白狀するとさ。[安]アイサ此頃の昼お客は。みんな合羽でお出なせんす。[東]千崎彌五郎といふ風も中〳〵さへだろう。[安]そんならモウ極りだね。[文]よし〳〵。[東]こゝをどこふか。[安]きつひせき込さ。どれわつちが。ともやいを解き。うらやぐらへとさつさおせ〳〵。[文][東]つり道具を仕廻。手などあらふ。[東]手をかいて。エ、いつそ鮮せへ。精進日の女郎衆ア買れねへ。[安]咥アねへ。[文]わたしがのもいつそ鮮ふごせんす。トキニ何時だの。[安]もふ八ッ前でごせんしよふ。[文]まだそふはなるめへ。[安]ナニおめへ初而の河岸で弁當をあがるとき。九ッウ打やした。[文]とんだ日がみじけへのウ。[安]アイなんでも追かけくらアするよふでごせんす。さし汐の猪牙といふものさ。[東]ハ、、、商買柄でたとゑるもんだの。[安]ヲ、あたる〳〵。とりかぢ〳〵。[先ノ舟頭]ヲ、安か。何處だ。[安]裏よ。[先ノ舟]をらも今まで表の高砂にいた。舟行違ふ。[文]あれも往たのだね。[東]店ものでゑへだ。膳なしの床廻し。ちよんの間契りのすい歸りといふやつさ。時に息子。主の注文は新か。としまか。[文]中としまがようごせんす。お前はへ。[東]おらも中さ。[安]そんならなんでも。中としま衆ウ二人とい

ふがよふごぜんす。[東]とかく美なるをもつてたつとしだせへ。[安]そりやァ如才ごぜんせん。夕ァもこつちィお客ゥ連中て來やした。[文]何處から。[安]山の手のおきやくでごぜんす。久しぶりでこつちィお出なせんした所が。何か大の極りで又あしたお出なんす筈でごせいます。唄がとんだよふごぜんす。[東]山の手でよく謳ふやつは誰だろうの。里州か仙橋か幸次なんぞだもしれねへ。[安]いゝへ。そんなお名じやァごぜんしなんだ。[東]ハテ誰だの。いろ〳〵はなしのうち。うらやぐらへ着く。[安]ヲヽイ若松や〳〵。[若い者伊八]アイ〳〵。ヲヽ安どんか。[安]アィ上申てくんねへ。[伊]サアお上りなさりまし。[東]ヲイさあ息子。[文]あい〳〵。[伊]お危ふござります。お静に。[東]よし〳〵。二人とも上ル。[文]そこの物をたのむよ。[安]何もかもわつちが持てめへりやす。とふねの中をかた付て上ル。[伊]おそのどん〳〵。お客だよ。[中居その]ヲイ〳〵さあお二階へお出なんし。[東]どこだ〳〵。[そ]こゝに致しませうかね。[文]何處でもよしさ。[そ]さようなら爰がお静でよふござりませふ。[安]も上り來ル。ナぜ見通しにしねへ。[そ]ヲャ安さんか。見通しはあんまりお寒かろうとおもつて。[安]それもそうだの。[東]みんなかたづけてくれたか。[安]アィ何もかもひとつにして下ィ預ケやした。[文]びくゥはどふして吳た。安あれも持て來て。水ィ付て置やした。[文]よし〳〵。[そ]あなた方ァおなじみでもござりやすかへ。[安]いゝにやお初會〳〵。そして何だよ。おふたりながら巾としま衆だよ。[そ]そんならお照さんお哥さんかの。[安]ゥ、そんなとがよかろう。[東]なんでもおらァぬしに似たのがいゝせへ。[そ]ホ、、、〳〵。わたくしに似た女郎衆ァ。柳原の土手でなくつちやァござりませんと。いゝながらろうかへ出しが。立かへりて。安さん。一寸と來な。[安]なんだ。同じくろうかへ出ル。[そ]小ごへにて。夕ァの事ァどふも出事そふもねへによ。[安]それじやァとんだ詰らねへ。なんでもそこを働てくりやナ。[そ]どふもそれだとつて。わつちが手にもねへもんだから仕方がねへ。よく〳〵だとおもひな。今朝おふみさんにまでそふ云てみたけれども。急にやァ出來ねへ。[安]出來ねへじやァ。もふ大かぶりだよ。[そ]どうしたらよかろうの。マァ〳〵往て來よふ。[安]ゥ、早く女郎衆ゥ云てやりや。[そ]は下へ。[安]はざしきへ。[東]なんだかいちやつくもんだの。氣がもめるせへ。[安]ナァ=そんな事ちやァごぜんせん。[東]いゝにやサ。なんぼかくしても。ノゥむすこ。[文]アィそどうりで裏やぐら〳〵といつてすゝめたの。[安]わらひながら。何サお前。[子供小市]茶わんを二ツぼんにのせて。あい。お茶ァ上りやし。[文]ゥ、さあ東里さん。[東]いゝにや。をらァ呑めへ。[小]そんなら安どん。呑ッしやら

ねへか。[安]こいつまづいやつだ。おれにやァ賣れあまりを呉るの。[小]余りぢやにやァ福が有からさ。[安]そんならのもふか。[小]へ、あたじけねへの。（といひすてゝにげて行。）[安]なんと云た。（とかけ出す所へ。）[そ]（すゞりふたてうしを持て。）なんだな。そう／＼しい。これ小市どん。まだおたばこ盆がこねへそふだよ。そしてお火鉢をもはやく持て來さつせへ。[小]どふも火鉢ァわつちがのにやァ持れゐせん。[そ]へェ役に立ねへの。そんならまあおたばこぼんを持て來さつせへ。[小]（ふせう／＼に。）あい。[安]そふいつてやんなすつたか。[そ]そふ云てやつたがの。おてるさんは出てだとさ。[安]そしてどふした。[そ]夫でお哥さんと何にした。おぬひさんに。[安]ゥ、おぬひさんもよかろう。[東]そんなら。息子かおれが内で賴風が出來よふといふ物だ。[そ]ほんに左樣サ。ホ、、、／＼。[小]（たばこぼん持來り。だまつて置て行。）[そ]さあ御酒ゥ上りませんか。[文]あい。[そ]さやうなら。わたくしがお燗を見てあげませう。ハイ憚ながら。[文]おせへようか。[そ]いゝへマァ上りやし。さあ。[文]つぎなさんな。[そ]なせへ。[文]どふも。ちつと呑でも。直に眞赤になるよ。[そ]よふ御座りますはナ。[文]是さ／＼。[そ]ほんに上りませんかへ。[東]ゥ、呑ねへ／＼。[文]サァ東里さん上やせう。[東]アィさあ理詰で。おれにもつゐでくれざァなるめへ。[そ]ついで上やすとつて。[東]ヲット ある／＼。さあ安ぼうさすよ。[安]あい。[哥]（ろうかより。）おそのどん／＼。[そ]アィよふごぜんす。お出なせんし。[安]（かほを出して。）さあ／＼。[哥][縫]どなたもよふお出なんし。[縫]安どんどふさしつた。[安]アィ御きげんよう。[哥]ほんにおとふ／＼しいぞ。[安]こゝの内ィはめへりやすが。まちがつてお目にかゝりやせん。[そ]お盃はへ。[東]コレ安ぼう。手めへにさす筈だつけが。急に入用に成たからさゝねへせへ。[安]こりやァ。もふ御如才のねへ御あいさつでござります。[東]ハ、、、／＼／＼。[そ]サァお出しなせんし。[東]これは／＼。度／＼有がたへの。[そ]（小ごへにて。）どつちらへ。[東]（同しく小ごへに。）むらさき／＼。[そ]ヱあい。（と哥がまゐへ。）[哥]わつちかへ。（と盃とりあげのむまねして。）あなたはゞかりながら。[文]ちつと上ヶやせうか。[哥]マァおとりあげなんし。[文]アィそんなら。アレサ又つぐよ。[そ]ホ、、、／＼。ほんにそふだつけね。[文]あげてくりや。[そ]アィさあおぬひさん。[縫]ちつとお障りもふしんしよふか。[そ]何さ。ねつから上りやせん。[縫]そんなら上んすめへ。（これもさかづきを。銚子の口でがつちりいわせて。）サァ安どん。久しぶりで。[安]ほんに久しぶりでやう／＼廻つて來た。[哥]さるにならねへでよかつたね。[そ]ナニ今に猿のやうに赤くなるのさ。[安]せんてへおめへがたが。もふちつと遲と。

とふにわたしが所へ来る盃だつけね
へ。[文]そふさ〳〵。[安]サアついでくん
な。こひつァむごひぞ。[安]ナニ直に酔
てせつながりながら。[安]それでもこり
やァあんまりだ。[そ]そんなら半ぶんの
みなせへ。[東]なんだか。むつまし過て
いめへましいぞ。[そ]又わる口をおつせ
んすよ。[経]それでも。きまつた中ァい
われるのは。結句嬉しいよふなもの
さ。[そ]なんとへ。といひながら。立て来そふにする。[経]ァ、
あやまつた〳〵。こつちの事たよ。[そ]
よし〳〵覚へてお出なせんし。[経]おぼ
へて居ねへでさ。ノウお哥さん。[哥]ほ
んにいつかのヿをいをふかの。[そ]又お
めへまで。[東]いつかの事ァなんだ。聞
てへの。[そ]何サ。みんな嘘でござりま
す。[経]あのね。[そ]又〳〵おつせんすと
聞やせんよ。[小市]吸もの持て。あい。そこを
ちつとお頼申やす。[そ]おすひ物か。爰
へ出しや。[安]ヲツト爰へもよこしたり。

サアおすひなせんし。[東]サア文公どふ
だ。[文]わつちやァ安どんにゆずろう。
[安]ナゼ上りやせんか。[文]いや〳〵。[安]そ
んならいたゞきやせう。[東]盃はどふ
成た。[安]こゝに御ざります。憚りなが
ら献じませう。[東]こりやァちつとおせ
へよふ。[安]そんなら。お哥さん。一寸
とおあゐとやら。何とやら。[哥]こりや
ァもふお見立で迷惑いたしゐす。[安]御
酒はともかくもさ。[哥]そんならおその
どん。つがつしやんなよ。ヲツト、、、
〳〵。アイおあいを給いした。[安]こりや
ァありがたふ御座ります。ハイあなた
お押を給ます。[東]どれ〳〵一盃有か
の。[そ]一盃つぎました。御ろうじまし。
[東]ウ、よし〳〵。[経]火ばちのそばへすりよりながら。お前
方ァ釣においでなんしたね。[文]あい。
[経]たんとお鈎なんしたかへ。[文]ナアニ
けふはねつから不猟さ。[経]ふりやうと
はへ。[文]ちつと外ァつりやせん。[哥]ど

こにおせんす。おみせなんし。[文]下ニ
置やした。[東]ナニはせか〳〵。とりよ
せよふ。と手をたゝく。[そ]子供は何處ィ行て居
るの。[安]わつちが取てめへりやせう。
モシお押のお盃ァ上ゲやしたよ。[東]ヲイ
来た〳〵。かみさん又つゐでくんな。
[そ]そんなヿをおつせんすと。一盃つぎ
やすよ。[東]そりやァ猶勝手にいゝ。[そ]
ほんにそふだつけね。ちつとつぎます
よ。[東]そんならうそだ。いわねへ〳〵。
おめへお近づきのために上ゲやせう。
[経]わつちかへ。ちつとお障りもふしい
せう。[東]そんなら。かみさんじやァね
へ。姉さん。あいをしてくんな。[そ]お
手元と申ませうかね。[東]そりやァむご
ひ。まあ〳〵。[文]どれ。おれがつごう。
[そ]アイ是は憚でござります。あなた
のお酌なら。一ツ給すは成ますめへ。
[東]いめへましい。とかく息子にやァ給
がつくの。ア、むかし戀しいなァ。[そ]ア

イ給ました。【東】御くろう〳〵。【文】おめへにもつゐで上ゲやせう。【東】をらァぬしの酌じやァ氣がねへ。【そ】そんなら。お哥さんのお酌ではへ。【東】そりやァもふいくらも呑るのさ。【哥】ほんにかへ。いつそうれしいね。（と少し嘲す氣味也。）【安】コレどふも水が垂てならねへ。早くなんぞ出してくんな。【そ】お前また盆ィでものせて來なさればいゝ。（と硯ふたの臺をはづして出す。）【哥】どれ〳〵お見せなんし。【縫】おや〳〵。かわひらしいのが有ねへ。【東】けゑづが三ッ四ッ有筈だ。【縫】ほんにねへ。こりやア黒鯛とやらの子だとねへ。【安】ほんにかへ。わつちやア。はせめて聞やした。【東】（工藤が身ぶり。玉がこわいろにて。）おや黒鯛の子供等。はせ珍らしい對面じやナア。【安】こりやァいゝ〳〵。【縫】どふもいゝねへ。そおめへも何ぞおつせんし。【文】おらァはせかしい。【哥】とんだよふおせんす。【東】なんだとつても藝者揃へだもの。【安】（ひく〳〵指をまたさして。）びくまれ口をおつせんすよ。【東】（めくらのまねして。）びく〳〵びくらには。何も後生とおぼしめし。【一同】ハ、、、〳〵ホ、、、〳〵。【安】どふもおそろ〳〵。【縫】いくらも出るねへ。【文】ほんにびくらも出る。【そ】ホ、、〳〵。出るつゐでにお膳が出ましたよ。【小山】アイお食をおあんなんし。【そ】ソレお膳がまがる。お汁がこぼれるはナ。【小】どふもそれでも足元が見やせん。【安】そふだ〳〵。手前のが尤だ。【そ】よしなんし。只でせへ口ごうせうだに。サアおめへがたァ。めし替てお出なせんし。【哥】あい。【縫】左樣なら徃てめへりやせふ。お頼んもふしんすよ。【哥】おゆるりとおあんなんし。（二人とも下へ。）【そ】サア御ぜんを上りまし。【東】まだねつから喰氣なしだ。文公どふだ。【文】わたしもまだ給たくごせんせん。【安】それでもちつたァ上られやせう。【東】ナニ弁當を喰て間がねへものヲ。【文】それに日がみじけへからの。【そ】お茶漬にでもなすつて上りまし。お茶ァ持て來や。【小】あい。【安】どふでごせんす。お氣に入やしたか。【東】とんだ可愛らしいのゥ。息子どふだ。【文】お前のがよふごせんす。【そ】おぬひさんもよふごせんすせへ。そしていつそおとなしい子でごせんす。【東】おれが奴ァちつと高風だの。【そ】ナニそふでもごせんせん。安さん。お食ァ。【安】おらもいや〳〵。ア、酔た。【そ】ツレみなせへ。けしからねへ。目まで赤く成てさ。【小】アイお茶ァもつてめへりやした。【そ】どれ〳〵サアお茶づけになさりまし。【文】そんなら一盃喰ふか。【そ】ハイさあ。【東】おらァいや〳〵。【安】一ぜん上りやしな。【東】どふもいけねへ。茶ばかり呑ふ。【文】爰へも茶ァくんな。【そ】もふちつと上りまし。【文】どふして〳〵。【そ】上りませんかへ。【文】もふいや〳〵。【そ】そんならお膳どもをさけや。【小】エあい。（ぜんを下ル。そち

つと藝者衆でもお呼なさりませんか。【安】ナア二 直にお歸りなさる。すぐにお床を廻さつせへ。【東】ゥ、諸事寐の幕／＼。【そ】そんならお床を持て來るから。こゝを片付てくんなよ。【安】合点だ／＼。【文】そのぴくゥは。又水ィでも付て置てへもんだの。【安】アィ今にもつてめへりやせう。【東】コレ例剋ゥぬしに渡そふ。【安】アィ今あの女がめへりやせう。【東】いゝにや。ぬしやつてくりや。【文】遣やせうか。【東】イヤまあよし／＼。（とつよめを出して渡す。）【そ】（とこを二つゝみ引ずり來ル。）どふせお座敷が明てをりますから。おひとりはこちらに致しませう。【東】そりやァなをいゝ。何事もよろしひやうにお頼申やす。【そ】ホゝゝゝ／＼。左樣ならあなたは。こちらでござりますよ。【文】おれか。よし／＼。【そ】左樣なら。御きげんよう。【安】コレおつとめはいたゞいたよ。【そ】あい。コウ一寸とこつちい來な。（と見通しの方へつれて行く）【東】斎類め。【文】どふでも只じやァねへ子。【東】知れしさ。【文】わたしはあつちい往て寐やすよ。【東】急ぐもんだの。マァあいらが來るまで咄しねへナ。そしていゝ序だから。今の内女郎買の穴ァをしへよふ。【文】エあい。先第一初會に上つた時に。髭なでのやに下りで居る所へ。どなたもよふお出なんしと云て來ると。誰でも皃をみるが。あいつが悪ひ。しかしねつから知らん顔をして居るもよくねへ。あいと言ながら。顔を見すに腰から下をみるがいゝ。又女郎といふ物ァ。そけへ來て居ると。まづ客の面ァ見るもんだから。その内ァこつちからァ見ねへよふにして。茶やか舟宿に挨拶ゥする時分に成てみるがいゝ。それも見立て揚た女郎なら見ねへでもいゝけれども。呼出しなんざァ。揚てからが見たてだから。見ねへじやァ済ねへ。盃を手に持て。どつちらにしよふと皃をみるは。不出來なものだよ【文】それでもわたしがやうに。跡で盃をする時ァ仕樣がごせんせんね。【東】サァそこにまた口傳が有。なんでも大一坐のときなんぞに。先ィ盃をしてへと思ふなら。酌に出た女か若へものに。はやく言ばを懸て。なんのかのと咄をしかけるがいゝ。そふするとはゞかりながら始て上ませふといふ時に。先心安そふに見へる方ィさすもんだ。【文】それでも。さつきはあの女がわたしが方へ先ィさしやしたせへ。【東】ありやァどふも向ふに氣どりのねへのだから。仕かたがねへ。それに又伏玉でねへとこじやァ。女郎の來るまでにやァいくらもさかづきの廻るとも有から。そかァめかりと云ものさ。そしてあの床ィ這入て寐て居る所へ。敵が來た時に得手ねた振をして。寐なんしたか／＼といわれて。ア、とろ／＼とした。何時だね

なぞとやるもんだが。あれが大の野暮のする仕內だ。ねなんしたかと云て來たらば。どふして獨でねられるもんでごせんす。なんぞといふがいゝ。文アノ貰へ懸られた女郎は。直にやるがよかろうね。東ゥ、所詮もらう氣のやつなら。やるがいゝようなもんだけれども。そこにやァ異心傳心があるて。二三度も往た上の貰引なら。直にやるは惡ひ。もちろんもらう氣からは。すなほにやつたらうれしいとも思ふが。おとなしくやる客に。金を遣ふ奴はすくねへもんだから。詰る所がこつちの懐を見さがされるやうなもんだ。全躰女郎買といふ物ァ。初而のうちは。成たけきん／＼の見えをもしィ。金の有風にして。物事溫和に見せるが肝心だっげいしやなんぞを揚た時に。唄でも。上るりでも。一心に聞て居るは安く見えて惡ひ。彈たり語たりするうちは。わつわと騒ひでいて。てつんちやんとやつても。直にほめずに。とき過てやんやなぞと有べかゝりに譽るがいゝ。諸事其氣味合でむかふからも。ちつと來たと見たなら。隨分やきもちもやき。ひつこくもするがいゝ。ハテそれでうるさがるやつなら。早くきれて仕廻が勝だ。おとなし遊びにして居ては。いつまでも先の氣がしれねへ物だ。なんでも春に成たら。傾城買の穴と氣取を本にして出そふと思ふ。文そりやァ流行やせふ。縫ろうかにて。おそのどんは何處へ往たの。おそのどんや。哥おそのどん／＼。そ奥ざしきより。あい／＼。縫おらァ。呼んで下さるかとおもつたら。そわたしやァ。又お膳が下つたら。お出なんすだらうと思つて。哥ナニおせんは直に下つたから。大かた知らせて下さろうと云ていたはナ。そ堪忍しておくんなんし。安どんにちつと用が有たから。縫そうだろうとおもつたよ。安どんを責てやろうじやァねへか。何所にだ。そナニサいつぞ酔たとつて寐て居やす。哥又かぶろうせへ。そナニ惡ひ事でもしやァしめへし。東惡ひ事ァしめへが。いゝとをしたろう。そヲヤまだおよりやせんかへ。せうじをあける。東どふして男斗でねられるもんだ。そほんにそふだね。サア／＼お二人ながらおよりやし。お火は御座りますかへ。文有／＼。東火は有が。なんぞ着せてやらずは。風を引ふせへ。そ誰がへ。東誰がとつて知れたとよ。そナァニかまひねへのさ。いひすてゝ下へ。東サアお前がたこつちひ這入な。縫あい。サアあなたこつちィ來ておよりゐしな。文あい。東ほんに。サアいきな／＼。文そんならお休なせんし。サアおめへも寐なさらんか。哥あい。お休なんし。縫ハィあなた。後ほどおめに懸りいせふ。東ハイお頼ん申やす。縫

お案んじなんすな。サアお出なんし。〔文〕待な。たばこ盆を一ッ持ていかう。〔縫〕ドレわつちが。〔文〕いゝにや。よし/\さあ/\。と〔文〕〔縫〕は又隣のざしきへ入。〔東〕手前もねねへか。〔哥〕ェあい。火ばちの火をいぢつて居る。〔東〕サア寐やな。〔哥〕あい。と床へ入ル。〔東〕なんだか。済ねへ顔色だの。〔哥〕なぜか。いつそ虫がかぶつてなりやせん。何ぞにげへ薬があらばおくんなんし。〔東〕はんごん丹が有たつけが。〔哥〕そりよをおくんなんし。〔東〕久しいのだから。利かどふかしれねへす。はな紙入より出してやる。〔哥〕みんな呑のかへ。〔東〕それほども呑ねへけりやァ利ねへ。〔哥〕ヲ、にげへぞ/\。〔東〕にがくなくつちやァさ。〔哥〕こりやァもふ湯ゥのんで來ねへじやァならねへ。と又出て行。〔文〕今そこを通たのは。だれだの。〔縫〕哥さんさ。〔文〕もふ小用に行のかの。〔縫〕ナニまだいかな事ても。何ぞとりに行たのさ。〔文〕紙でもわすれたといふやつかの。〔縫〕おめへもまた。よくこみづに氣を付なんすね。そのやうに何角に氣が付なんしちやァ。おかみさんに成る者ァ仕合だ。〔文〕そんならおめへ成てくんな。〔縫〕どふしてわたしらがよふなものが。御新造さんにやァ及びもねへが。ほんにせめて食焚にでもしておくんなんし。夫ァそふと。ぬしやァいくつにお成なんすへ。〔文〕十八さ。おめへは。〔縫〕主よりやァ一ッうへさ。〔文〕十九か。〔縫〕アイそれだものヲ。どふせ叶ねへ事た。〔文〕それでも一ッ増の女房を持と。仕合がいゝと云からいゝ。〔縫〕ほんにかへ。とうれしがるやつさ。あつかましいのゥ。お歸なんしたら。噺はなして笑ひなんすだろう。〔文〕ナニわらうもんだ。〔縫〕それでももふ來やァしなんすめへ。〔文〕又此頃に來やせう。〔縫〕だましなんすなよ。けふも宵のうちお出なんしな。〔文〕どふもけふは。釣に出たから居られやせん。それにまた五ッになる妹が有がね。わたしが釣に出ると。肴を見るとつていつでも寐ずに待ているから。どふも歸らねへじやァ成やせん。〔縫〕そりやァほんに可愛らしいねへ。そして外に御兄弟さんがたァなしかへ。〔文〕姉が一人有が。こりやァもふ片付ていやす。〔縫〕まだ御兩親ながらお達者かへ。〔文〕あい。〔縫〕いゝお楽みだね。わつちなんざァ何もなくつて。たつたおぢさん一人でおせんす。よそのかゝさんも夏中から煩つて居ゐすから。いつそ心細くつて成ゐせん。それに今年ァわつちが。厄年だから。なをおもひ過しがされゐすよ。〔文〕ナニ厄年だとつて。結句やく年にいゝとも有もんだ。そして今年はもふちつとだからいゝ。〔縫〕ほんに。どふぞ御方便で。何ぞなくはやく春にしたふおせんす。ヲ、さむひ。もつとこつちひ寄ておよりゐし

な。[文]こふか。[縫]そふさ。ヲヤ堅くるしい寐よふをして居なんすね。是を解なんしな。[文]どふも帯をとくと寒ひよ。[縫]何さ。わつちが寒くねへようにして上ゐす。[文]そんなら解ふ。[縫]そ　でわちも　ず　さ。なんと寒かァおせんすめへ。[文]ゥ、寒かァねへが。おかしな心持に成た。[縫]ドレ待なんし。マァ此　を　の　ィ　んし。[文]どふも前の　が。つめたく　さ　つてきみが悪ひ。[縫]よくいろ／＼なことをいゝなんすね。サア是でよしかへ。[文]よし／＼。[東]安や／＼。（大きな聲にて。）安／＼／＼。[安]（おくざしきの方より。）ヲヽ、寒ひ／＼。モシお呼なんしたかへ。[東]ゥ、てめへもモウゐへかげんにねたがいゝせへ。[安]なんだかいつそ酔て。ぐつと一ト寐入にやりつけやした。何は女郎衆はへ。[東]さればその事たよ。なんだかしらねへが。一寸と來たつけが。虫がかぶるとぬかしたから。こいつもある風なせりふだとは思つたけれども。やぼらしく調べるでもねへとおもつて。眞に受た振で藥をやつたら。湯ゥのんで來るといつて。往たつきり今にうしやァがらねへ。來ねへぶんは頓着もねへが。湯じやァ有めへ。前の川ィ這入て水でも喰て居るもしれねへ。馴染だけに見て來てやらつせへ。[安]そりやァまた。つまらねへ詮議でごぜんすねへ。と（ろうかへ出る所へ。）[哥]出安どんお目覺かへ。[安]（目まぜしながら。）お目覺所じやァごぜんせん。何所へ往てお出なんすな。[哥]ナニいつそ虫がかぶつてならねへから。今までかん所にいたもの。[安]マア／＼這入なんし。ぬしが腹ァ立てお出なんす。[哥]ヲヤついぞねへの。[東]なんだ。ついぞねへ。此やうにあつかわれた事ァついぞねへ　ヘイ。[哥]何をぬしをあつかいゐしたナ。[東]ヘヱあんまりおしがおもてへ。モウ押付迎だらう。馬鹿／＼しい。[哥]そんなら何かへ。わつちが來よふが遅へとおつせんすのかへ。[安]遅へくれへはごぜんせん。モゥ今にお迎でごぜんせう。[哥]ナニサさつき來て寐たけれども。どふも虫がかぶるから。手水に往たのだハナ。夫をそのやうに腹ァ立なんす事ァごぜんせん。[東]なんだと。手水に往たと。手水か行水かしらねへが。大概ほどの有たもんだ。ゐんこうぼうあげくの居風呂でも。そふ久しく懸るもんじやァねへハイ。[哥]そんならわつちがわりひから。堪忍なせんし。[東]その誤りよふが遅へよ。いゝにくひ事たが。裏やぐらとやら。巨燵櫓とやら。こんながたひしする所へ來た事ァねへが。つゐにこんなに安くされた事ァねへせへ。[哥]安くしたとおつせんすりやァ。わつちも申ゐせう。賤しい勤はしゐすけれども。ついぞ初會から手前呼りをされた事ァご

せんせん。[東]そんなら手前と云たが奇怪か。なんだ。イケ子細らしい。呼出しだの。引出しだのとつて。書出しが聞てあきれらァ。[安]モシ〳〵。そんな事をおつせんしちやァ。お人柄にもお似合なさりません。太平樂のやうで。悪うごせんさあナ。[東]いゝわナ。うつちやつて置せへ。人柄だの。ぬけがらだのと。立だをしはごせんすめへ。[安]ナお前を立だをしに致すもんでおせんす。たとひ一日でも斯してお供をすれば。旦那でごせんすハナ。まあ〳〵何にしろ。わたしに下さりまし。[東]サアおれも折角。主の注文で連て來たもんだから。縱令長竿にされたとつて。たかで岡場所の公界しらずだと。こつちが非に見て居るのだから。おとなげなくいふ氣もなかつたが。あいつがいきなりに。ついぞねへの。腹ァ立た事ァねへのと。手めへ勝手な事をぬかすからの事よ。[文][縫]もきたる。[縫]アイサわつちも聞ておりゐしたが。おうたさんの云ようもよくおせんせん。なる程さつきから。虫がかぶるとはいひしたつけよ。[東]何のお前達ァ起て來ずともいゝに。むすこねていやな。[文]いゝにへ。よふごせんす。[安]さあ〳〵もふ何もおつしやらずに。東里さんもちつとおよりやし。[東]ナニもふむけへだろう。[その]ハイおむけへでござります。[東]そりやこそ。サア歸ろう〳〵。こんな所にいて。どんな目に逢ふもしれねへ。[縫]おめへ合羽はへ。[文]今の所にあろふ。取て來てくんな。○鷄鐘ならねど。きぬ〳〵告るお迎ひの一ト聲に。己がさま〳〵別路もきまつた客は裏櫓の裏やくそく。必ずよと〆る手に。莨にやく島のぐにやとなり。お近ひうちにと夕汐も。そりや仲町のあいそづかし。裾つぎならで。すそつぱりの舟頭が。廊下に呼くかね言も。土橋かさねはかぶらん事を恐れ。おさらばさらばの出來不出來。當はづれも時の興。榮花の夢の樂しみは。淺くはなひぞや深川〳〵。

輕井茶話 道中粋語録

表紙	ヨコ	三寸七分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸二分
	タテ	四寸四分

變通輕井茶話序

學者の足下。藩中の貴殿。俠者のおみさん。通のぬし。何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ。身どもといひ。おれがといひ。わつちといふ。いづれも拙者は拙者なり。べい〳〵詞がやむべいなら。借りても三百つん出すべいとは。古よりの諺なり。夫輕井澤の地たるや。川柳傳にあらはれたる。一方の色里也。今雪國の肌を探り。飯櫃の底をはたき。大通變じて變通

にいたる。浅黄の裏の裏のうら。紺の布子に白あがり五所紋あり〱と。かきしるしたる此一巻。あまねく世上にうり詞として。その買ことばをまつはたそ。山の手の馬鹿人なり。

婕捨山人書 印

春章画

輕井茶話 道中粋語録

始めて旅を信濃路や〳〵。東へかへる道急ぐ。馬追分も過來つゝ。暫しとゝめて打替る。沓懸の宿あとになし。泊り近づく足元は。何所ともなしに輕井澤。旅籠屋ちかく成りにけり。[馬士]旦那。何屋へをろしやすへ。[旅人嘉兵衛]織色もめんに黑縮紗の裝束した半合羽を着て。ばつち尻はしをり也。着物は合羽で見えねども。ゑりの所より唐ざんとめの縞入と見え。下着はつむぎのかはりじま。じゆばんのゑりは黑紗綾と見ゆ。基肌かけたる細身の脇差一本さし。もちろん三度笠をかむる。 何屋でもよいわいな。[馬士]跡の方へ向ひ。大キな聲して。お供さん。どうしやうね。[供伊介]黑きもめん合羽を着。布目がへしの股引をはきて。下に大しまのゆかた。上には青梅じまの袷と布子を重ね着して。しんちうの太刀拵を一本さし。これも三度笠をかむる。 なんだ〳〵。といそゐでおひつく。[馬]今夜ア何屋にしやうといふ事さ。[伊助]旦那はもちろん。おらも木曾路ははじめてだ。何處でもよさそうな内ィ付てくんねへ。[馬]女のゑへうちにしよふね。[嘉兵衛]ウ、おやまの美しい所がよいわい。[馬]そんなら津川屋にしやせう。〇所〳〵のはたごやよりこゑかけて。お泊りかへ〳〵とよぶ。[馬]津川屋だ〳〵。エ、畜生め。モウちつとあるきやアがれ。めんよう姉を見ると足が遅へ。おれに似たさうだ。と笑ひながら。いそいで行ば。程なく津川の前へつく。[馬]サアお泊りだよ。[津川の女さき]江戸者と見へて詞もかはらず。 おはやうお着なさりました。それ與八どん。お湯う取らつせへ。[與八]あい。とゆをくんで來り。おいて行。[さき]サアまあおみ足を。[嘉]イヤわしはよいわいな。[さ]そんならお前。サア。[伊]アイさうして置てくんな。[さ]ドレもゝ引を解て上やせうか。[伊]いゝにへ。よし〳〵。[馬]旦那。なんとゑへ内でごせんせうが。[伊]とんだ事た。[さ]馬士どん。茶でも進ぜうか。[馬]いゝにへモウ。呑ずと。こんたのその一言で。そこいら中がしめつて來るはナ。[さ]ヘエ久しいものさ。[馬]久しい物じやァねへ。ほんの事さ。アイお供さん。小付が四つ。よしかへ。[伊]ウ、よし〳〵。大に太儀だつた。酒手を出してやる。[馬]アイ是は御きんとうでござりやす。そんなら御きげんよう。おさきどん。御馳走さつせへよ。ヘエいめへましい。見レば見るほどゑへけつだ。ト尻をたゝく。[さ]アレサよさつせへな。そんなら休まつせへ。[馬]アイどう〳〵。エ、此くたばりめが。又尿をこきやァがるか。唄女郎をかう氣で一番勝負の長がから半と出て。ごう腹まぎれ。かゝが面ァ見りや。目玉が丸く。やつと夜明のぴんぞろが出た。しよんがへ引。うたひながら行。[伊]どうぞ。

こぼしてくんなよ。〔さ〕アイさうしてお置なさりまし。〔伊〕おらが旦那ァ何所だ。〔さ〕アイ奥の八疊ィ。夫おつれ申さつせへよ。〔子共初〕サアこつちらへ來さつしやりまし。〔嘉〕おくざしきより。皃をだして。ヲヽ、爰じやはいの。〔伊〕此荷物共ゥ。〔初〕そりやァ打遣て置つしやりまし。今に私どもが持ていぎますべへ。〔伊〕そんなら頼んますよ。とざしきへ行。き麗な內でごぜんすね。〔嘉〕ウ、ゑへ內じや。お山を呼うかいな。〔伊〕アイ咄しの種にようごぜんせう。今に大かたよべといひやせう。その內あんのどく。〔さ〕もしへ。女郎衆ゥ出し申ませうかね。〔嘉〕ウ、おらァ女郎衆より。こなさんがよびたいわいナ。〔さ〕それはもう有がたうございます。ほんにお前がたはお江戸は何處でございます。〔嘉〕あてゝ見な。〔さ〕下町かへ。〔伊〕きついもの。あたり〳〵。〔さ〕下町ときけばお懷しうござり

ます。〔嘉〕よう知てじやの。〔さ〕私も久しくお江戸に居りましたが。ちつとした事で。今こんな所ィ來てをります。〔嘉〕色事出入だの。〔さ〕何にお前。〔嘉〕インヤさうじやろう〳〵。〔さ〕マア夫そらそれにしてお置なさりまし。そして女郎衆はとしま衆かへ。〔伊〕もちろん〳〵。〔嘉〕イヤわしは新造がよいぞや。〔さ〕アイそんなら。としま衆としんざう衆にいたしませう。と勝手へ入。此間に〔初〕干物のむしりざかなとてうし持きたる。〔嘉〕此肴を見や。〔伊〕とんだ事。ぶゑんの干ものだの。〔初〕いんね。ぶゑんじやァございましねへ。あじの干物でござりますよ。〔嘉伊〕ハヽヽヽ〳〵。〔さ〕先に立て。さあお出なさりまし。〔二人〕あゐ。一人は。〔刈藻〕年二十四五と見へ。黒もめん紋付の布子。もゝ色の木綿うらふき二寸ばかり出したるを着て。花色太織のはゞのせまき帶をしめ。きせるを手に持ながら來る。下着は三つ四つ着たやうに見ゆれども。皆ゑり斗とぢ付た物にて。どう方下はわた入一つなり。是此所の風俗と云々。一人は。〔浮舟〕年十六斗。花色もめん惣もやうに。あかねうらの綿入。扇屋ぞめのもめ

ん帶を尻こけにして。是又ゑりは四つ五つ着たやうに見へ。ざしきへこは〳〵出て。片ひざ立てすはる。〔さ〕さかづきとりあげ。アイ憚ながら。と嘉兵衛へさす。〔嘉〕あい。のんでおく。〔さ〕こゝろえてうきくさが前へ。〔うき〕ヤレわしにかへ。遠つたんべへによ。〔さ〕こゝろへてうきくさが前へ。〔うき〕ヤレわしにかへ。遠つたんべへによ。〔さ〕わらひながら。イヘお前でございます。〔うき〕どなたもお早うござります。とあゐさつしてのみ。さああげますべへ。〔伊〕わつちかへ。のんで。あい。あげんしよう。とかるもへさす。〔かる〕ひとつへせへますべへかの。〔伊〕をかしさこらへて。へせへッこなしさ。〔かる〕そんだら。とうけてのむ。此盃ぜひ加兵衛にさす筈の事なれども。所がらにて。其樣なきまつた事もなければ。〔さ〕こゝろえて。お盃はわたしがお預り申ませう。とをさめる。〔伊〕なんぞ肴アねへかね。〔さ〕お前がた御酒ゥ上りますかへ。〔伊〕旦那ァ無地だが。わつちやァ呑やす。〔さ〕そんなら何ぞあげたらよからうが。爰らには何もお肴が。玉子

はへ。［伊］其卵よかろう〳〵。［さ］左様なら今に。（といひすて勝手へ入。）［嘉］サアお前がた。ちつと咄しでもしなさらんかい。［かる］はじめてといふ物ナあじなァもんで。これぞといつて語るべゑ事もおざんねへものさ。それにハァ。お前がたの様な江戸衆にやァ。何をいつてもわらわれべへと思つて。語るべへと思ふ事もかたられねへぢやあ。ノウうきさん。［うき］さうだァ〳〵。それにハァ わし共がやうに年のすけねへ者ァ。猶さら笑われべへとおもつて。口さァきかれねへ。何だか怖いと思ふせへか。げへにさぶいようだァ。［伊］ナニ江戸者だとつて。何もそんなにこはがりなさる事ァねへはナ。［嘉］さむゐのは。窓の明て居るせへだ。たてよう。（と立て窓をさす。）［かる］窓たァ あんの事だかおもやァ。さまの事だもし。［うき］何をいふにも。でかゝ遠へ申すよ。

よんべもお客がてうちんがめつからねへとつて。さがさつしやるから。何だと思つたら火俗の事さ。［さ］（膳を二膳持て來ル。）あい。お吸物が出來ました。［伊］是はおせ話〳〵。サア旦那。［嘉］（ふたを取て。）これは變の。コレ見や。（とわんの内を見せる。）［伊］あれが爰の卵か。江戸じやあぼた餅といふせへ。［さ］ホヽヽ。あなたァ御酒をあがらんさうだから。それで。［伊］そんならゐへ。（とこれもふたをとつて。）ウヽ、是は正眞のたまごだ。［かる］なにハァ 玉子に精進なァござらねへ。皆なまぐさへもし。［伊］いゝにや。よし〳〵。［嘉］コレ此箸を見や。［伊］なんでも今夜ァへんちきさ。［うき］ヲヤ寒竹の事を。お江戸じやァへんちくといふげだの。［初］お客さんがた。湯ゥあびさつしやりませんか。［さ］ほんに今の内風呂へおはゐりなさりまし。［伊］あい。旦那サア。［嘉］そんならさうしようかいの。［初］サア

來さつしやりまし。（と先へたてば。［嘉］も立て行。）［うき］（もつて行。）［伊］サア一盃呑なさらんか。［さ］いゝへ。マア后にいたゞきませう。［伊］後といはずと呑なせへナ。［かる］ナニよさつしやりまし。まだいそがしかんべへ。［さ］アイ又今におまんまを出しますから。忙しうござります。［伊］そんなら行てきな。［さ］はい左様なら。水いらずに御咄しなさりまし。（と立て勝手へ行。）［伊］お前のみなさらんか。［かる］いゝへサ。ちつとでものむとハァ面が猿のように成申よ。［伊］それでも今夜ァさむいからよかろう。［かる］何ハァ さぶい折に呑と。一倍さぶくなり申スよ。［伊］さむかァもつとこつちィ寄なせへ。［かる］最前からさうはおもひますが。わしらが様な者ァ さぞいやだんべへと思つて。遠慮のヲします。［伊］ナニいやな事があるもんだ。ずつと爰へよりな。［かる］そんだらゆるさつしや

りよし。どうでハア。お江戸サの女郎衆のやうに。何もおもしれへ事ア おざんねへが。其代にやァ寐て見さつしやりまし。天竺までも　げて見せますべへ。〔伊〕笑ひながら。夫は何よりさ。かれこれはなしのうちに。〔嘉〕湯より上りきたる。サア伊ス。はいらんかい。〔伊〕エあい。〔かる〕サアいきますべへ。うきさんはどうしました。〔加〕今そこい。といふ所へ。〔うき〕ちやをくんで。サア茶ア進せませう。〔加〕あい。〔かる〕そんだらサア。〔伊〕いかう／＼。と立て行も一所ニ。〔かる〕〔うき〕コレかるさん。浴衣ゥば竿サアイかけておゐたによ。〔かる〕おい／＼。〔加〕湯へはゐつたさかゐ。いかう腹がへぷたようじや。〔うき〕今におめしが出ますべへ。マア酒でも呑つしやりませんか。〔加〕わしは酒は根から呑やせん。お前のみなさらんかい。〔うき〕わしものみましねへ。〔嘉〕そんなら是がよかろ。たべなさい。ぼたもちをやる。〔うき〕是ァはあ好だもし。アゼ食つしやりませんか。〔加〕わしはモウいやじやはいナ。くはんせ／＼。〔うき〕そんだら。と手づかみにしてくふ。〔加〕はんにお前はゑらう好なさうで。うまさうな食ひやうじやわいの。〔うき〕げへに好だアもし。〔加〕大槩いくつほど給なさる。〔うき〕何さ。お江戸衆なんだア。信濃者とつて大喰ノするやうにいはつしやりますけれども。私どもはそんだアじやアござりましねへ。此位のぼたもちだら。十七八もくへば澤山だもし。〔さ〕あい。おまんまを。ヲヤもうお一人のお客わへ。〔うき〕今湯サアいかつしやりました。〔さ〕そんならマアお隣イ出さうかね。〔うき〕いんナア。さつきからげへにひだるいといはつしやるから。マア爰へ出しなさろ。〔加〕ほんに先イ給いせう。さ　さ様なら。さうなさりまし。お一人は又お跡でも。と膝をすえる。何もござりません。〔加〕是はお世話／＼。〔さ〕お前。お頼んまうしますよ。〔うき〕あい。〔さ〕又おとなりへ出さねへけりやア成やせん。〔うき〕お隣は誰だアもし。〔さ〕田毎さんの彌五さんでごせんす。〔うき〕フウ彌五左衛門さんが來さつたか。夫アハア田毎さんナア。うれしかんべへ。〔さ〕この頃じやア。追分の松屋とやらイいきなさるとサ。〔うき〕さうだアとよ。何でもハア男といふ者ア。まづいもんだアよ。〔さ〕夫ならお頼ん申やすよ。と起て行。〔うき〕それでもハアめしびつが。〔さ〕おはちは今によこしやす。その内に。〔初〕アイめしびつと。と持來り置て行。〔うき〕サア替さつしやりまし。〔加〕アイそんなら。コレサかるく盛てくんな。〔うき〕アゼ。ひだるいといはつしやりましたじやア おざんねへか。〔加〕まだ食やすが。そんなに盛付ちやア。くひにくいわいな。〔うき〕どうでもお江戸衆だおナ。

わし共が方なんどじやァ。絶食だァといふ病人が。此位にもつたのヲ三盃斗アくひますよ。サアお汁のゥ進せませう。〔加〕そんなら憚ながら。〔うき〕アニはゞかり。あせハア なんぼかき立味噌だアとつて。干葉斗じやァ惡かんべへ。上けのヲも入ますべへ。〔加〕おかしながら。どうでもよいわいな。此所へ〔伊〕湯より上り来ル。〔かる〕もきたる。〔うき〕わしがお客がひだるいと云はつしやりますから。先サはじめましたよ。〔伊〕よし／＼。〔うき〕お前チの膳もさういふべへナ。〔伊〕アイさう云てくんな。〔かる〕手拭ひはどうさつしやりました。〔伊〕ほんに置てきた。一寸と取て來てくんな。〔かる〕ャレはあいくちもねへ事だァ。と取に行。〔伊〕なんぞくへる物がごせんすかね。〔加〕いゝにやモウ。やつぱり夕の通りじやはいナ。〔伊〕そいつァいけねへ子。〔初〕膳を持。〔うき〕は汁をもち來ル。〔うき〕サアお前もくはつしやりまし。アゼ刈もさんわへ。〔伊〕ィヘ今一寸と手ぬぐひをとりに。〔かる〕是だんべへの。〔伊〕ゥ、それ／＼。〔かる〕うきさん。大におせ話よ。〔うき〕何ハア せわな事もおざんねへ。あつちにもお客が有から。お崎どんがいそがしかんべへと思つて。〔かる〕ほんに彌五さんも來さつたとの。〔うき〕さうだァとさ。〔初〕アィお食を替さつしやりまし。〔伊〕ゥ、さあ。〔かる〕アゼついて居ずともゑへぞい。〔初〕そんだらお頼ん申ますべへ。〔うき〕めしびつゥはそこィ打置たがゑへ。〔初〕湯サ持てきますべへ。と立て行。〔かる〕何ぞ替さつしやりまし。〔伊〕いゝにへ。モゥ旦那。なんと木曾路はむごいネ。〔加〕とんとさかなのない所じやの。よう何所でも出すもんじやが。アノうづわとやらもないかいな。〔かる〕アィうづわも少へげだで。高遠の御殿様が此前も廿兩とやらで買つしやりましけ。〔伊〕わらひながら。ハテ高い物だの。〔うき〕ほんに。わしも一度鳴所を聞ましづけが。きつくはい／＼と鳴ましたつけ。めしすみ。膳とれる。〔さ〕おくたびれなさりましたらう。お床にいたしませう。サアお前がたも着けへてお出なせんし。〔かる〕そんだら サァうきさん。〔うき〕あい。二人とも着替ニ行。〔加〕こなさんの物云斗リは。かわいらしいわいナ。〔さ〕ほんに。初では無をかかしうござりませうネ。〔伊〕イヤもうとんだ變よ。〔さ〕さうでござりませう。私共がきゝ馴て居てさへをかしい事がござります。〔伊〕時ニ旅籠代は。〔さ〕アィ明日でもようござります。〔伊〕そんなら。あすの朝一所に勘定しやう。〔さ〕床を取て。あいだを仕切らずは惡うござりませうネ。〔加〕ゥ、まんさらではいなもんじやナ。〔さ〕左様なら斯いたしませう。戸板を横にして仕切ル。〔伊〕屏風の氣取はどうでごせんす。〔加〕と

んと侘た物じやナ。[さ]ハイ御きげんよう。[伊]そんならあすは七半立だよ。[さ]ア[イ]かしこまりました。[加]おさらば〳〵。[伊]今夜ァゑへ江戸みやげでごせんすせへ。[加]ほんにはなしの種じやナ。[伊]うづわの間ちがひなんぞはきつい事ヲ。[加]イヤもうやう〳〵こたえて笑はなんだわい〳〵。そしてマアあのわしが女郎が。ぼた餅を十七八くふといふたわいナ。[伊]ほんにかへ。ハヽヽ〳〵。[かる][うき]一所ニ來ル。[かる]サアお前がた。そべらつしやりましな。[加]サア寐よう〳〵。[うき]夫だらわしは先ヰねますよ。と床へ入ル。[かる]おめへもそべらつしやりましな。[伊]アイ今に寐やすが。あすの朝まごつかねへやうに。何かをちつと取あつめて置てねやす。[かる]そんだらわしは。その内お客の連衆がきてござるから。一寸といつてきたくござりますが。夫ともハア悪くおもはつしやるべへだら。いきますめへ。[伊]ナニサよし〳〵。いつてきな〳〵。[かる]そんだらいつて來ますよ。と出て行。[加]廻しといふ所かいの。[伊]そんなこつたさうさ。[うき]まあしたァ何の事だへ。[加]回しとは何さ。アノ何さ摺木の事さ。[うき]その摺木がどうしたもし。[加]いゝへナ土産に買た摺木をよう仕廻てくれといふ事いの。[うき]アゼお江戸にやァおざんねへか。[加]江戸にも有はあるげれど。名物じやから土地にするじやわいナ。[うき]何所サアの名物だァへ。[加]アノ何さ。東海道の薩陀峠の名物さ。それじやさかゐ。碓井峠の孫杓子。さつた峠の孫すりこ木といふわいの。[うき]はてなもし。アノ孫杓子ア。疱瘡の呪ひに成げだの。[加]ゥヽ孫摺木は麻疹のまじなひサ。ほんに疱瘡といへば。お前のつむりはとんと疱瘡疾のやうじやわい。[うき]あせへ。[加]櫛もかうがいもみな赤いさかひにさ。[うき]よくあんでもいろ〳〵の事べへいはつしやる。憎らしいの。とつめる。これはいづくもかはらぬところ也。[加]ヲヽ痛いわいの。[伊]なんだかもてるといふもんじやァねへヲ。[うき]聞つしやりまし。さま〳〵の事べへいつてなぶりやる事よ。[加]ナニなぶるのじやないわい。コレ伊ス。はやう仕回て寐やいの。[伊]あいもうふせります。おらが女郎衆ァどうしたか知らん。[うき]今に來さりませう。[伊]ねて待ふかのと。といる。[加]かるもさんとやらは客衆でもあるかいナ。[うき]どうかしりましねへ。アゼあの人にかまはずとも。もつとこつちらィ寄つしやりましな。ヤレハァげへに氣のつまつた寐ようだもし。さあ解つしやりまし。[加]お前も　な。[うき]わしやァハァ所じやァおざんねへ。コレ見さつしやりまし。　で居申よ。お江戸の女郎衆アなじみにならねへけりやア。おびさア

アとかねへさうだが。わしらアハア三味のウかぢる事もならず。江戸ぶしナア知らず。何も面白へ事アおさんねへかはりに。サ這入ちやア。勤とやらアおつはなれて女夫逢だ。モシ。[加]そんなら解かいナ。[うき]サも。サもおつ取て。らサ割込なさろ。夫からアはあ。わしがゑへやうにすべエさ。[加]是でかいナ。[うき]もつとさろ。ソレかんべへか。しばらくこゑなし。咄

[かる]来ル。うきさん／＼。ヤレハア寐たさうだア。わしがお客さん寐さつしやりましたか。[伊]今まで起て待たが。あんまりお前の来様が遅へからねやした。[かる]そりやアはあ氣の毒だ。もしサアわしもねますべへ。入る。へ今夜アでかくさむい晩げだ。ちくとあしさあつためて呉さつしやりまし。[伊]ヲ、大分こそつばい足だの。[かる]あせかハアわしやア冬になると。かゝとサ口があきますよ。こそばくつてわるくば。よしますベエか。[伊]ナニ能のさ。コレおつちの女郎衆ア。かになつたさうだが。なんとぬしやアどうだ。[かる]そりやアハア安い事だアけれども。何とか思はつしやるべへと思つて。扣へて居ました。お前もノウとかつしやりまし。[伊]ほんにぬしやア幾つだ。[かる]わしかへ。今年取て二十五だもし。[伊]夫にやア若へようだ。[かる]アニはあ若へ事アおざんねへよ。[伊]やつぱりこつち生レか。[かる]余ぼど阻て居申よ。[伊]どこだ。[かる]諏訪世郷でござりますよ。わしもハアこんなア所へ来る筈じやアござんねへが。とつさまがどうらくで江戸サいつて。行衛が知れましねへ。それからハアかつさまとわしがすべへ事がねへから。カラこけへきました。不便だあとおもつてくれさつしやりまし。[伊]そして其をやぢ殿ア。江戸に居るのか。[かる]さうだといひますよ。どうぞハアお江戸サア下つて。尋ね度思ひますけれども。すべへやうも御坐りましねへ。[伊]江戸は何處だの。[かる]あんでもあま酒のヲ見るやうな名だつけもし。[伊]どうもそれじやアしれねへ。斯と醴なれば。ウ、何か麹町か。[かる]ヤレそのかうじ町よ。[伊]糀町といつても。廣い事たから知れねへ。[かる]そりやアはあ仕方もおざんねへから。マアこつちイねさつしやりまし。うきさんなんだアモウ夜中だアもし。[伊]いゝにや。今まで咄しごゑがしたつけ。大かた例刻だらう。[かる]例刻たア。何の事だへ。[伊]例こくとは例刻の事さ。[かる]ウ、何だかへ。ゑ比須様の兄弟ぶんの事だんべへ。[伊]マアそんな事たさうさ。サアむだアやめて寐よう／＼。又あすがはやいから。[かる]アゼはあ今から寐かしはしましねへ。いやじ

やァあん心へけれども。さいせんからの約束だァから。天竺まで　ねへけりやァ心がすまねへもし。伊ナニもうあつちの客の所で　來たらうから。おもしろくねへ。かる何はあ外にお客アござんねへ。お江戸サのやうに八重賣とやらァしましねへ。伊そんならよしさ。此　かう　な。かるどうでもつしやりまし。今夜一晩げはおめへの女房だァもの。これよりきりにて咄しはなし。

隣座敷客彌五左衛門 空色木綿紋付のたけみじかき布子。紋は石餅のごとく上の方は中形の小もん見へるを一ッ着て。帶はときへてわからず。裏は裾廻しと見へ。茶色木綿にゐて有ゆへ何かしらず。白もめんに黒きぬのゑり。袖口かけたるじゆばんあらはに。うこん木綿のふんどしも少し出しかけ。床のうへに大あぐらかゐて居ながら。是さ／＼こつちよゥむきなさろ。相方田每 是もねまきすがたにて。いせじまの油しみたる布子に。黒ぬめの如く光る色の丸ぐけをメ。背中をむけてすはりゐる。よさつしやりましな。そんだァきげんじやァおざんねへ。彌五左マァちよつとさ。是／＼。田每ヤァはあよさつしやりましよ。彌少しはら立ゥこゑニて。扨はァ。おれがいやになつただァな。そんだらどうすべへ。おつふられた所に居べへ筈もねへ。と立て帶をメさうにする。田その帶をとらへて。ヱ、もう何の事だもし。彌あんの事じやァねへ。こつちよゥむきなさろといつても。嫌だ／＼といふじやァねへか。田サア夫もわしがあんまり小腹がつつ立たからの事だァもし。アゼはあそんだら追分の松屋サいかつしやりました。彌そりやァはあ。おらが惡ゐでも有べへが。ガラさそはれたァからの事だァよ。それもはァ友達だらば斷もゆんべへけれども。名主殿の猶子の云れる事たから。やあだともいはれねへから。二三度ァいつたァけれ共。何お身様に見替べへ。田そんだら。さつきの文さァ。あせ見せさつしやりましねへ。彌おらも見せべへと思つたァけれども。さつきやァはあ。張合に成つたァからの事よ。何もむづかしい事ァねへけれども。でかく文者だァよ。田どれ見せさつしやりまし。彌ソレ見なさろ。とこくら縞のはな紙入より出すを。田とつてひらき。こりやァはあ。わしがにやァ讀づれへ。よんできけさつしやりまし。彌そんだらおれが。と取てよむ。〇こうびんにまかせ一筆申入まゐらせ候。過しよべは久／＼物かたりのふ申たあだはあ。其のちはそれ様の事べい。思ひくらし手のものもからら。うちやるやうだつちう。よんべもきやるべいと申事だゆへ。よふとへ待ちもふけのし申た故。けさあはあ淺間山ののふびんのみるやうにむねが。がた／＼つんもへ申こつたつちう。たゞはお早く對面のしたく。がんのふかけてまち申まゐらせ候。田成ほどハァおもしろく書たァな。返す書の

ゥ讀つしやりまし。[彌]ァニ是ァはお讀にやァ及ばねェ。言傳だァよ。[田]ドレ名サ見せさつしやりまし。[彌]名ァ見ずとよかんべェ。[田]いんにや〳〵。何でも見せなさろ。[彌]そんだら見なさろ。[田]これであんだもし。[彌]千年だァよ。[田]ャレハァ可愛らしい名だァな。[illegible]さァ上手なり。惚さつしやる筈だモシ。それだァとつても。こな様とわしが中ァ。きのふやけふの事じやァござんねへハサ。互に根性骨ノゥ打明て。女房にすべへ。成べへとつて。やれハァ御勿躰無。天照皇太神宮様のゥはじめ。神さま達を證文ニも書入た中じやァおざんねへか。今と成てこな様の氣が替れば。わしはハァ何としますべへ。余りと云ァ。むごつちねへ人だァよ。[彌]ャレ何でもそんなに氣サもむ事ァねへ。おれだァとつても申合のゥしたもんだ物ヲ。如何様の事が有たとつても。替るべへたァ思はねへよ。ャレはお泣事ァねへはよ。[田]なき聲にて。そんだら。どの様ナァ事があんべへとも。替つて呉ますなよ。[彌]何ハァ。菌柄杓のゥ手にとらねへ法もあれ。かはる事じやァねへよ。[田]ほんだかへ。そんだら私ァ何も云べへ事ァござんねへ。どうしたもんだァかハァ。此様にでかく可愛く成たと云も。約束事だんべべよ。夕もお江戸衆ゥお客に取たら。床花だァとつて大錢のゥ一本くれさつしやつたから。何でも今夜ァ仕回て居て呼にやるべへと。思つた所ィ來さつたもし。[彌]そんだら。夕のお客にやァ。げへによく　たァと見へたァな。[田]アぜ さうじやァおざんねべ。マァよく積つても見さつしやりまし。こな様と申かはしのゥしてからァはあ。どんな美人男でも。目サ付筈ァおざんねへ。只ハァ明ても暮ても。こな様の心がかはるべへかとおもつて。苦になり申よ。[彌]おらァはあ替る事じやァねへから。お身さま替らねへやうにして呉さつせへ。[田]そりやァはあ。氣遣ひさつしやりますな。[彌]そんだらをつぱじめべへか。[田]わしははあ待かねたもし。[彌]もつとこつちィ寄なさろ。ホンニ碍たァで思ひだした。約束のふんどしサあしたでもよこすべへ。[田]まだ遅くつてもゑへが。色ァあんだァへ。[彌]强がよかんべへと思つて。手織の木綿のゥ上紺に染させたァよ。[田]そりやハァ四五年はこてへべへ。[彌]あせだかハァ今夜ァげへに寐づれへやうだ。[田]本とうに起さつしやりましな。[彌]ゥ、　か。[田]わしが　ァひきくしてくれさつしやりまし。しばらくありて。[田]蒲團の下に　があんべへ。取てくれさつせへ。[彌]げへにくなつた。[田]夜着サ逆さまに着ますべへか。[彌]ゥ、それがよかんべへ。[田]モウ今度から追分ィはいかつしやりますな

よ。［彌］アニハアいぐ事じやァねへよ。モウなん時だァか。となりじやァ起たァげだ。［田］隣ァ旅人衆だからおきたんべへ。まだでかく早へ一ね入しますべへ。［彌］そんだら。ちつとの内ねべへかゐ。［田］わしが能時分におこしますべへ。［隣かる］何も落しやァさつしやりましねへか。［伊］いゝにへ。よし／＼。［嘉］わしが柄帒はそこかいナ。［伊］いゝにへ。爰にやァごせんせん。どうして又なくなりやした。［嘉］いやァノ。さ、せん小刀をつかふた時に取たさかゐ。［伊］そんならごせんせう。よく御覧じやし。［嘉］ヲ、あつたわいナ。［うき］わしやァ又。何の事だと思つたら。脇指の革頭巾の事だァね。［き］來。はい。お荷物はみんな付ましたよ。［伊］アイおせ話／＼。［嘉］何でも夕から皆こなさんのおせ話じやの。［き］ナニお前。［伊］サア參りやせう。ア、大におせわに成やした。［かるうき］一同に。そんだら。

きげんよく立つしやりまし。［嘉］アイおさらば／＼。［さ］どなたも又お上りもなせんすなら。必お尋ねなすつてくださりまし。［伊］そりやァもう恕在はなしさ。みな／＼表へ出れば。［亭主］をはじめこゑ／＼に。左様なら。御きげんよう。お靜にめしまし。［嘉］アイ湯治にでも上つたら又よりやせうハイ。［さ］ハイ。あなたお笠を。○あいと手に取菅笠の。白きを見れば夜ぞ明にけり。東雲の心うきたつ衢の音。夢に見てさへよいといふ。その春駒に乗初の。仕合よしや木曾始。商ひはじめ。筆はじめ。笑ひはじめになれかしと。はしめて馬鹿を又つくす。盡せぬ春のお目出たに。愚作は堪忍信濃新板／＼。

大通多名於路志

表紙　タテ五寸一分　ヨコ三寸七分

本文枠　タテ四寸三分　ヨコ三寸三分

多名於路志序

大哉通や。通哉大や。大と通とは二枚の屏風。雌雄あはせて遊里に行ふ。鈍作何ぞ大通の蹴轉ばせを知ん。友人大通濃根原を問。愚謂逸知己哉。意氣知己なるかな。雄氣の一心野鲁麻の雞卵。海男子となりし覇王樹有。日外下の竈祭の夜。諸君さむ方藝者衆。多の中に藻麗た事。好た道故端〻を。小耳に挿んで質意となし。妄た弥八と万八の。其尾に取附赤耻を。黒〳〵と書集。澁柿を串柿にせん物と。卷て見す帋に包で有。敢ておしむべきにあらずと。小册を與ふ。友人歡で曰。どふせふのふ書林えやつて見いせふと。外題は大通たなおろし。笑の種を卷んとて。にこ〳〵持て起ッ處を。押て向ふつらえ廻り自序をなすと左のごとし。

閙言樂山人 印

如龜〻 如虎〻の 夜なべ述

發端

ワキ長はおり。ひわ茶のひも。銀きせる持。シテ 惣髪なでつけ。唐しやうぞく。扇子持。

次第 猪牙やよつ手とかわれとも〳〵。おなし穴なる遊ひ哉。詞是は意氣の國より出たる通丁と申ものにて候。我よの中のはやり事に心をはこび。普く娼家を巡り。馬鹿の道をも修行仕候。此ほどは丁國

の床よし原に候ひしが。かくべつ新らしきとあらまほしく候間。承りおよびたる唐へ渡り。通人とも出會仕。よき趣向をもおもひ付かばやと存候。道行ワキ床よし原をふりすてゝ。くゝ。隅田の川のにごりなく。今日眞崎よそにのみ。三圍り土手の鳥居迄。實にも粋なるけしきにて。人の

心の瓦しと。昼はみゆれと夜な／＼は皆地廻りとかわるとや。手拭下駄は新らしく。ふら／＼あるくその風情居候とは是やらん。／＼

ワキ詞 そろ／＼まいり候ほとに。是ははや向嶋とかや申候。國分ばく／＼にいたさばやと存候。

シテ詞 のふ／＼それなる通人へ申べきとの候。見申せばそ

のたけ衣物(きもの)のごとくなる羽織(はおり)を着(き)給ひ。さながら帯(おび)ひろはたけの姿(すかた)にて。當時のいきちよんおもひ深川(ふかかは)の遊(あそ)びをよし原(はら)に品川(しながは)。唐人酒落(とうじんしやれ)を一見(いつけん)とは。とんだおあんじにて候もの哉。よく〳〵御心(おんこゝろ)をつけて御覧候へ。おのぞみの唐(から)は則(すなは)ちこゝもとにて。唐人(とうじん)もやはりそれがしにて候ぞや　ワキ詞

是はけしからぬ事を承り候もの哉。只御と葉を万八とおもひ候さりながら。御身の名は何と申候ぞ シテ詞 唐人と申うへからは。權兵衞八兵衞にてすむべきか。その名も陳芬漢歸來 ワキそも日の本の地に住て。唐と嘘つくそのいわれは 詞 花火のからか雞卵のからか。たゝしは我をぬけがらと

おもひ。南無からたんのらにし給ふか。シテ詞いや／＼夫は悪ずいなり。山川万里をへたつれど。人の心のおなしき事　シテ詞唐も倭國も。ワキ詞四國も　シテ詞佐渡も。地みんな天地一枚の。／＼。日月は是同じ。一盧の船のうき世なれ。何國のうらの角からすみ。洒落も穴も

居ながらに。はかる人こそほんとうの。大通人とあおぐなり。わざ〳〵行て見る事はよし丁にするが丁か傳馬丁本丁の事也。おせわとおもひ給はずとも。よく〳〵耳に入レ給へと。陳芬漢はそのまゝに。あたりの茶やへ腰をかけ行衞もしれて見へにけり〳〵

シテまちうたひ後シテと云所は。すぐにそはなしにしやしやう。ワキ左やう／＼。是からはやつぱり例の通りサ。今までの事は發たんかゝさん。扨時に通人。唐へ行とはそりや。おまへほんかいなア。アイ何でも行かゝつたから行かにやァすみやしねい。アヽわかい／＼。若イがやうなおたふくに。唐へゆかふなどゝは。どの三徳から出た事だへ。ヤイ／＼通丁なんじ。その心ざし有ル事を。我通りきをもつてよく知り。此處にまちうけ。留ルとは虛當ずいりやうで留ルのだ。唐へ渡るはなんでも。大の点ちがい。ぐつと詐直しと出たまへの。むすこかぶ。むかしもさる茶めし有。豆腐の太子のでんがく。傀儡傳と云男。日本の洒落を試んと。三兩一分をぐいがりして。路銀と溫め船に乗り。長崎迄は來りしに。かの倡家でおごりかけ。みんな舐て仕廻たゆへ。江戸へ出よふにや銀はなし。唐へ飛ぶにやァはねはなし。川留メではなふて。唐留メに成り。科のない俊寬と來て。足ずりの替り石摺をこしらへ。やすく賣ッてくらす内。海の岸へすゞみに出かけた時。釣をして居タ翁と心やすく成りて。おとし咄や口合を。一ッ二ッ互に國のおもしろいはやり事を聞問して。唐では詩がきつい流行やふ。私が友達の李白と云ッ男は。一斗酒を飲ンで。百篇の詩を作るなどゝ。唐みへを云。日本じやァ。マア何がはやりますと。翁もこゝぞと。哥がゑらく流行ます。人ばかり讀でもない。蛙鶯その外。猫も杓子も。哥で暮し。夫斗か。東埔瓜。甘薯なんぞが。笛をふいてははやすやら。挑灯がものを云。うつし繪がはたらく。四國の猿が。讀うりに出ルやら。とんだ賑やかなとたと云へば。どふらくも肝を潰し。そんならどふぞマア。哥を一首たのみの。腹つゞみ。イヤ／＼先ッ詩から先へ聞ウかるかやおみなべしと。口合のしたから。

錢代脱レ衣否拘レ貸
半分寐レ鴛願ニ美艶ー

ト云ければ。面黒／＼日本の哥も只こふ云とこさト。

苔衣黄なる博多の帯をして
きぬ／＼に野夫下部をする哉

トよめば。扨／＼その身はいやしき釣人で。こんないきな哥をよむとは。どふりでひわ茶がとふさらさと。譽るうち。彼傀儡傳もろこしへ。一時に吹返して。四五日頭痛をわづらはした所。朝鮮の弘慶子が藥で。なおつたとさ。跡で聞ケば。扨／＼日本は大通國。おれが長崎で無錢に成ッたを。能呑込風を起して一時に。路銀入らずにかへしてくれたは。去りとは情の有ル國だんのふと。感じ入つたとサ。又彼翁は住

吉大明神の末社とやら。大鼓打とやらだそふさ。こふ云事も有事だから。妄ッたに唐へ行ッても。今では傀儡のよふな通も居ず。とんだ悪洒落ニでも出會。訳もきかずやりばなしに。昔の意趣がへしでもされたら。大の屈たく其上。怪我でもしてはきつい損。こゝをおもつてわたしが留ルのだ。なんと無理かへ。成ほどどふでも先生だ。故事を引ての御異見。有難〳〵。エヽ所で御對面いたし。ぶなんそく才で暮そふと云もの。迚ものお世話次手に。彼大通の近道手ばやい所を御講釈が承りたいサア〳〵。ねがい〳〵ねがいものの新造禿。コレハ〳〵いたみ入ッたおとば。下官など大通の道そんしたなどゝは。いかな〳〵。當時。表子買仕打恰好。さま〳〵小本に出板の事故。どなたもよく御そんしで。さりとは御功しや。洒落たくさんな世界。角ドのとれたると。髪の有坊主も同前トハ申セ。弘法にも筆のあやまりで。少しづゝは落こぼれも見へますから。悪洒落達も出來たがりますテサ。御評判のよしあしは後篇の事。先ッ一ト通り御耳へ入れやしやうか。エヘン〳〵。まづみへでも四重でもござりやせんが。私も若イ時は一ッて十五匁の。帋たばこ入。一本で一貫する松魚は。あんまりめづらしくもおもひやしなんだ。そして何ンでも闇雲洒落にしやれのめし。新五左どのや。野夫太郎さんが。咄してもすりやァ。不二山を詠て反魂丹を丸める心もちでごせいした。扨表子買も人の氣ゞ。おとなしくするものと。侠を好人と。色身で遊ぶと。さわいでばかりたわいもなく。うかれる客人と。夫〳〵に變りは有レど。道行の所で行付。先は皆ンな粋不粋はねいとの御神詫。したがその行ク道にも近道。廻り道の不同が有ッて。損徳二ッの境有馬山。もちろん女郎買の道は。ふんだん金を蒔繪にして。下卑なく大まかに遊ぶものとの夢想なれども。こりやァ云はずともしれしッ事。女郎の氣取り次第で金のあんまり入らぬ様に。内幕で馴染とも出來やす。コリヤアかの通の仕事サ。マア〳〵ちよつとした投入の處は。初會の女郎で聞まちの時。少シばかりのおそいを氣をもみ。狸寐と出かけ。またぬ風で御出なさる事は。決して御無用。とんと孫子の代迄させぬ事サ。女郎買に行キながら。これいとて直に寐入様ナ情なし。付合しらずでは埒が明キやせん。女郎が來て主ァ寐さしつたそふだと。立ッて行時コレ〳〵と呼れもしめい。また初くわいから待くたびれるほどの事なら。とんとうらなどに行事ァねいから。むり寐入もりきみもなし。ぐい寐のずい起。奇麗に

歸る事サ。夫も女郎を寐ごかしなどはおよしなせい。何ンでも空寐入で閨へ來るを待かけとは。氣のしれたしやれ。マアこんなこゝろへちがいから。諸事不洒落と名が付やす。又とても三會や四會でうまい所は出來やせんのさ。その出來るのは。よく／＼向ふからのぼつて來てか。但し大極の通でなければねいとおぼしめせ。万事情の違ッた事をしちやァいゝ事ァなしサ。こりやァ女郎買の道ばかりでなし。常の付合にも有る事。うつくしいばかりで実情がねいと。居風呂桶へ金ばくをしたやうなもの。とかく化粧のない実付合は。唐でも倭國でも味みが有ッて變りやせん。先ッ大通の根元は是から生れやすよしかへ。我身をつめつて。人のいたさをしれとは通のこと葉。野夫／＼と口きたなくおろし。跡のつゞかねいみへなど云事は。通人のせざる所。どんな通達でも二日でも。はじめは皆ンな野夫。生れながら通人は千人に一人も有るか無シ。通は通でとおり。野夫は野夫でもてる事サ。筋のいゝ野夫は惡洒落さんよりかわいゝトサ。當世と葉はやり着もの。中ずり大キく髪は少し。まみへ細しの水茶やしやれは。少しばかりけいこすると。取りたての信濃どのも出來やす。もてた／＼とはなしをすりやァ。ふられた敉取りとさとられるにこゝろつかす。形りの洒落に屆たくして。心の通は闇の礫。人のまね斗してくらさずと。てん／＼の思ひ付で。ぶしやれでねい衣類も有。似合ぬ人も有。又出來ねいものも有ルに。いきちよん姿でなくつちやァ通でねいと心得るは。本の蝙蝠眼といふものサ。こんなのちやァまた／＼大通の道へはよつぽと遠い／＼。抑通と云事は身六藝に通するもの。七十二人との御觸より。大通のことば流行出し。通の字の付たもの並大躰の事かいなァ。中／＼小サな事ぢやァごせいせん。隨分大キな用に立ねいければ大通とはいゝやせん。先ッその印は。通し馬でも通し駕でも心やすくはねい事サ。通夜をするは大願有ル人。燈にあり通し。神通といィ天眼通と云。錢に通寶の銘有レば。三十三間堂に通し矢の高名有。街にも通り丁は人のしる所。大門通りもその名は廣し。うら店でも通りぬけはむつかしい。諷に通小町有レば風呂のうらに通ふ神。座敷に見通し。法印に見通し。足をはこぶを通行と云。仙人に通力。千兩金を取ルものは大通辞なり。通俗ものはよく分り。通用散有レば。通和散あり。是等の通の字でよく／＼御考へ。手前から通などゝは。おもはぬ事／＼。人が付た通の字でなければ。交りなしの通とは云ハぬ。人をおろしぶ

ち格子。穴を云たかるお通人は。女郎かいに行く時も。いろ〳〵工夫して。公事訴訟に出る氣に成ッて。氣もみ入道でいやがられる。大の野夫頭。かわいがりやうとおぼしめさずと。にくがられんよふにするがかんじん。通のまなこ爰を。よく〳〵修行して大の情しり。大通人となりやす。とは云へ。やつかれなど講しやくは高慢でも。何んとしてもて株とおぼしめしてはきつい間違。

そんな世界はついぞねい事サ。アヽ喉がかわひて來た。まづお茶でも給べヤしやふ。

大通多名於路志　大尾

跋

傳曰。士は賢下省となく。大門に入て洒落られ。女中は美惡となく。洗湯え行も駒下駄を躡。誰か云。異娼家驚動なくんば。大青樓俳優徒錢たらよかろふと。卷舌は俠世の門口。秀句は套語の飛石なり。河豚の勢鮟鱇を茶になす。其茶店娘妓女を徒足にするどく。秖がどく精神を脫焉がことしとは。夫諸之をいふか。男女各洒落を異にし。童子格子の汗を流し。蘸納の嘆息。嗚呼隨意ならぬこそ浮氣なれと云爾

	ヨコ	タテ
表紙	三寸六分	五寸二分
本文枠	三寸	三寸八分

序

男子傾城はじめてひらく十七の頃とは。綿と扇の春駒より。三千三百三拾三日ほどまへの事にして。當世は。后の月にも足らさる年に鷄卵をくらつて。細腰に仕ん叓にくるしみ。禮は枩の内の仕まひを迯ん事を楽じ。楽は三國の堂に日をおどろかし。射は三絃筥の大家と心得。御は肴の名乘と思ひ。書は夕〳〵に。みよしの半切を費し。數は生玉子に手際を見せ。六藝の内一ッもしらず。只忙然と月日をおくれ共。予が大望は深川に三年。吉原に三とせ。新宿に三年。四季のもやうをむねに納めて。世を蟌蛇と思へども。既に兵粮盡て。樓情もむなしく。妓婦に後をみせければ、西驛の企も止まりて。今は書出しを丸めて枕とし。たのしみ此中に有。冨貴我に於て。浮める雲のどしと倣強ては見ても詰らぬ故。うそと慾とを二タおもて。兒手柏をどう取ッてと。ちゑ袋をも〆木にかけしぼつて見ても出來ぬは金。愚人贅漢の借金組と。仕まひは父母に拂ひの尻。拭はせるのも是非もなく。是も世の中なんと。正月筆をとりぬ。

かにはどの尻をぬぐつてやう〳〵と
育れば又紙華のしり

天明十三を
卯たぬ春

蓬萊山人歸橋述

（蓬萊山人）

愚人贅漢居續借金

諺に女郎買のぬかみそ汁といふ事を。いかなる事と尋るにぬかみそ汁にはあらず。我高慢知るといふ事にて。人にすれれば世の中も角ひしなく。高ひ面もせずに付合もよく成といふ諺なり。又可愛子には旅をさせろといふも。足袋をはかせろと云まちがひにて。板じめのふとんのうへも。はり／＼といわぬやうにといふ諺也。是はみな世俗の心得違にて。太平の代のけむ印には。傾城といふ得手ものに魂をとらかし。父母に苦労をかくる息子に。醫を忝く思ふはすくなし。多くのその中に。世上を知つたでもなく。又しらぬでもなく。しならぐならと。しやぼんの玉のゆうれいにひとしく。日を送るへんてこは。いかなる者ぞと其名を見するに。山の手の大先生。四方の赤良。燕十。菅江。雲楽。歸橋。此愚人男。今日はめづらしくも。富が岡八まん宮の地内に。晴天十日の大角力有ければ。札はいたみの酒きげん。是も小川を菊の後。見物に氣は棒さじき。小角力關脇まくの内。勝肩は墨もかわかぬに。賣る勝肩の番附は天にもひゞく打出しの。太鞁に木戸を出る人は。佛餉袋の綻たるにひとしく。大入此うへも有るべくやと。行かふ中に五人の作者仲間は。一ッ所にこぞつて。何やら相談におよびぬ。[赤良]角力もおもしろいがちつと。土佐衛門が蹴合やうで。いきな事はねへもんだ。虫歯の爲にはよつほどわりい。[菅]むしばで思ひ付た。小柴が所へでもよつて。鼻の下のこんりうと出やうじやァねへか。歸橋子。[歸]人の所へよつて飯をかすりのはげた膳とも。先生をつれては出られめへ。なんでもかでも絹もみのふとんに。ねやうもんと出るのさ。[燕]とてもいくらいなら。仲丁の葵江屋がいゝ。娘はごうぎによく出る紙よ。[雲]此論。妙也。とにかの地には。歸橋子の婦人も聞キおよひしなれば。[歸]とんた事をいふ。仲丁へいくと。尾花屋から。手のねへはち巻をした人形も來る故。左へ土橋を定むべし。（と此相談いつけつせすして。石橋のきはに立ている。）[赤]ヘテやぼな事を歸橋子いやれ。錢がなければ孔子さへ。顔濁鄒やなんぞか内に。居候にさへなられたれば。里の金とろくろ首が。きらずをくふときはへまるかならい。少しもはぢにあらず。赤良がいくから氣遣ひねへはナ。[雲]歸橋がいやがる所なら。なを面白いが。又せんとの竹屋の染の江がやふでは。あとにのこりし者は。大難儀の物さしだせ。[歸]よし／＼何でもかでも。きもをなけ出すからは氣遣ひなし。サアいかふ。

と相談きまり仲丁の松江やへは入。〔娘きよ〕これはおめづらしく歸橋さんゑん十さん。角力が打出すと。外へ出てまつて居やした。とうぞ。なげたす。見通しはかた付て有かへ。サアとなたもおいでなさりやし。〔歸〕見通しはわりひ。ちんが明(あい)ているか。〔き〕あいていやす。サア。と。みな〳〵見通しが裏のちんへ行。女はぼんに茶をのせて來り。〔女豊〕となたもお茶を。みな〳〵手にとる。〔ゑん〕茶の色をみて。とんだいゝ茶だ。名は馬の爪(つめ)か。新宿(しんしゅく)のみづたまりはみんなこんな色よ。〔歸〕はのんでしまひ。いとそこをみて。お茶わんは何だの。こうたいの〆りのやうす。はぎと見へます。おしき事にさくやろうそくを。戦場(せんじゃう)におゐて立テしあと。こうだいの疵(きづ)なり。〔萱〕やかましい。吸ものが出た。だまらつせへ。とみな〳〵吸もの〻ふたをとる。是が酒事有れと。年〳〵の本に有れば。のべずして略ス。〔娘竹〕としまなり。歸橋さん。おめへさんはいつものかへ。ゑん十さんはお琴さんだつけね。あとの御三人さまはェ。〔歸〕ゑん十子どうせふ。〔エン〕たれがよかろふか。おゝこよも。三輪(のわ)へ引ッこんだし。お今は。いせ市の女房になるし。どうもだれもねへす。それよ。土橋で娘をして居た。おつうと。おとへと。おやゑがよかろふ。〔竹〕どれもよふごせへせう。おとよ聞て來や。ノ女立て行を。歸橋はよびかけ。〔歸〕コレ〳〵やくしやをはじめから口をかけるとがんづくから。廻しにみんな口をきらせておゐて。かつて來さつせへ。女はよせばへ行。〔竹〕おたよさんの廻しはかわりやしたから。せんどほとじやァごせへせん。〔赤〕コレ歸橋子。いやだの。おゝだのといひながら。此ころも來たそうで。はなしがあじだの。〔燕〕みんなにいつて聞かせる事が有る。今日は何でもおめへたちも。もてる

といふかんさしはつたりをやめて。あくてんのヲ、あついといふ所をいひぬきねへ。わつちは又お琴にあつて。二はんめをかきそくなふか一ッ。人を入るか一ッ。わけてみるつもりさ。雲樂の色男が心もとねへ承知かへ。〔雲〕委細がつてんのねじめに。かん菊といふ所をやめて。又此方にも仕かた有りさ。（といふ所へ。）〔女〕となたもおゐでなさります。モシゑん十さん。お琴さんはちつと。〔エン〕心まちでも有るか。跡でも有るか。〔女〕何さッレ初くわら（と何とをいひさうにするを。）〔エン〕跡はいわずとよし。京都なら赤ィきれでまげ結いか。〔歸〕やぼッてへしらて。下にけいこのたてもようか。〔みなく〕ぬい之介とは有がたい。（此酒事しはし有。）〔赤〕コレ歸燕さん。たれぞ賑なたいこもちはどうだろふ。〔エン〕まだたいこもちだけ人からだぞ。歸橋だれがよかろう。〔歸〕たれでもいゝが。コレおきさん。扇蔦も伊八と組んで出るそうだの。居るか聞にやつてくんねへ。〔きよ〕角力たからどふでごせへせうか。（きゝに行所へ。女郎五人くる。おたよ。おとは。なしみゆへ。仕かけをきづに。上田しまに黒きはんゑりにて。すくに火ばちのそばへすわる。跡三人はおびに煤のつくもかまわず。籬のそばへすわる。）〔沓〕モシ去年の本にも出た。おたよさんとはおめへかへ。お噂をばふだんいひやしたが。今日ははじめての對面。聞及びしよりはきれゐ／＼。時に深川へくればじきにおめへのみかた。さつそくいふ事有り。歸橋さんには。とんだ事が出來やした。いわふかの。（と歸橋か良をみる。）〔た〕大ひしやの久かたさんとやら。馬かたさんとやらの事かへ。よしさ。ちつとは女郎買もさせねへければ。歸橋さんも。いのちがつゞきやすめへ。（ときなづらて。しらをきる。）〔沓〕そんなにおめへか高く出ても。久かたが名を。歸橋さんがほつたせ。（とほりもせぬに。しやくる。）〔た〕それもよしさ。久かたさんのほり物をしなさるくらゐならば。月見の殘りかゑびすこうまへの。狂言の元手でごせへしやう。（と女郎にむかひ。）おそんな事はどうでもいゝが。おつうさとへさんも。おやゑさんも。おつうさんも。火はちのそばへ來ねへな。そして。（客の良をみて。）おめへ盃を。〔女〕（赤良がまへえ盃を持行。）どなたへ。〔赤〕どうせうの。（とエン十が良をみる。）〔エン〕順がいゝ。〔女〕（盃をもち行。初手かたに居るおつうに盃をやれば。うけずにすッと立。廊下へ行。みなく\きもをつぶし居る。おたよはわけぞあらんと思ひ。廊下へかけ行。しばらくさゝやき來る。）〔エン〕おたよさん。どういふ譯だ。〔た〕（雲樂にむかい。）もしへ。おめへもつまりやせん。アノ子を一度よびなさつたじやァねへか。それならは。うらだといゝなさりやァ。赤良さんも盃をさしなさりやせん。わつちも膽がつぶれた。〔雲〕（きもをつぶし。）とんだ事をあの女郎もいふ。なんの年ン忌が有つて。いつ仲町へ來るもんだな。わつちやァ何でもしりやせん。〔た〕それでも。おつうさんは一度出たとつて。ぬしの盃はうけられぬといゝやす。又こんなわからねへ事もねへもんだぞ。（と蔦のか

んさして髪をかく。【雲】そんなら。こゝへ呼ン　。開てわつちが見やせう。とましめになる。【赤】此世界一ッ向わからず。赤良はさるものにてしようを承知して。座敷を丸くおさめんと思ひ。所詮いつた所が。金を出して不ふうがを尋るやうなもんだ。そんなに額へ。海参をみるやうな筋を出した所が。川向ひの立聞。やくにもたゝぬ事だ。おれさへ合点すれば。へんくわ龍液のどく。先のすきに何人でも。もちいられるが世の中。アヽいゝ所へ藝者が來た。扇蔦伊八來ると。むだをいふ内。赤良はおやゑ。菅江はおとへ。雲樂はおつらとやう／＼きまる。【扇蔦伊八】今日は角力のおかへりてこざりますか。うづと谷風がせうぶは妙さ。ソレ谷風がいつもの左をさして。土俵の際まて。もつて來た所を一ッどつこひと。こたへた形ッは。釘ぬきのやうだつたがかあいそうに。うづが形かちいさひ故。仕まひはびちや／＼まけても。よく取りやす。さかいの。角力などは見ッ物事さ。と見たやうにうそをつく。【こと】何やらもの思ひすがたにて。火ばちの炭をいぢつていたりしが。扇蔦さん。おめでたふごせへすね。おりさんはおかわりもなしかへ。此おりよは色でもちし女房なり。【扇】此ころは。ばゝアじみやして。けふもけさから白髪をぬきやした。わつちが事もやう／＼と濟て。みな／＼笑ふ。まづ二三日はあたゝかき御膳。モシおたよさん。ちつと見ぬ間に。あたまがにぎやか。そこを見込ッて來る人も有。と露僑が方をしり目にかけて笑ふ。此內。伊八は三弦を出し。二ッ三ッヘン／＼とお定りのうた有。小册にして有れは略す。伊八は赤良をみて。【伊】あなたさまは。【扇】天が下に知たる御方。今楠が在らば。さぞはしがらんほとの。ねぼけな人さ。【伊扇】是は又かね／＼お目通りをも。願つておりますところ。けふはいかなる吉日ぞや。ともふ少し茶をまぜる。此末ともに。おめを下さりますやうに。ねがひまする。先日はふと藏前の御方さまの御供で。大もんじやへさんじましたが。とり／＼の御噂。けふ思はずも御目通りを致しますも。通の此世におふ晦日もおしつけ。さて／＼くろふがたへません。としまいは。うぬか田へ水を引やら。茶をいふやら。とりしまらぬ雜ばなし。女は火ばちの火を火入へいれながら。【女豐】ちつとあちらへと。いふも古ひけれとも。またふるきをもつてとやらで。たばこ盆もつてさあ／＼。とみな／＼を引立る。五人の者。生德ならねば。まだいゝといふ古きせりふもなく。坐しきをふさげるも氣のどくと。手ン／＼にたはこ入やきせるを持。床に入にけり。

燕十屏風の中

燕十は。けふかき狂言のたね有つて。床へ入つても。ねずに煙草を呑てかんかへいる所へ。おとは。紙をかみながら。屏風をあけてはいり。【と】燕十さん。昨日は。くわしきお爲。とつくりと見やしたが。なを分りやせん。今となつてすむの。すまねへのと。水切れの井戸じやァ有るめへし。又わたしが。是ほどに見せる心いきが。よもや知れねへ事も。ごせへすめへ。【エン】かわつた事をいふ。分かるの。分らねへのと。寶引をぎみはしめへし。手めへの事をいつ云つた。是からはそつちの氣のおち

付くやふに。昨日もいつてよこした通り。なんとなりとほろふは。[こ]その様にほりたがりなせへすだけ。なをおかしいと思ひやす。なぜといゝなせへし。おめへが内に斗居て。風呂敷の。なくなつた世話や。せうじの切はりでもするやうな人ならば。承知もしやうけれど。毎日のやふに。蔦重さんの内や庄六さんの所に。ふんごんでいるものを。どんな事があつちに有るか。どふして爰までしれるもんた。所詮。そんな事をなまなかして。どうだの。かうだのといつちやァ。おめへも濟ます。わたしも濟まねへ。いつぞ永ひ月日の内にやァ。おめへの心もしれやせう。[エン]そんなおかしい革足袋の裏へ。黐をふみ付たやうな事をいつては。どうで分らねへ。なんでもかでも手めへの手で。書てほつてくれたら。心いきのしれねへ事は。有りそうもねへもんだ。[こ]それほどに。いゝなさる事ならば。ほつて上やせう。と硯はこと針をかりに行しあとに。エン十は思ふやうに行しと思ひ。心によろこび。狂言のくだけの。末のすゑまでかんがへて置し所へ。おとは硯と針を持て來ル。[こ]硯はこも針も。持ては來やしたが。ほんにほるつもりかへ。しれた事よさあ。と手をまくつて出し。おとにかゝせければ。おとは針を三本糸で卷。何心なくすぐにほらんとせし手を。エン十はおさへて。是まつた。手めへ眞實はつてくれる氣か。[こ]なせへ。急に嫌になんなせへしたか。[エン]インニャそうじやァねへ。むりな事だと思はふが。てめへが右の手の。鬼十と書たをけして仕まへ。そのかわりには。おれがほろう。閏四月の蜜柑をみるやうな野郎でも。そう/\こけにやァまはされめへ。とぐつと手をしまい。三朝今市の善右衞門といふ身にて。鉄のきせるのがん首をやうじにて。高慢にほぢり。國分のたばこを脂さがりに吸ふ。お琴は狂言とはしらず。たゞほりたがるとのみ思ひかゝりし所。鬼十がわけ合ものこらずしつてかゝれし仕事なれば。此返事にこまりしが。とつくりと思案をきわめ。[こ]なるほど。よくしつて居なせへす。此通りさ。とまくつて見せて。もし又わたしが。此ほり物をけす事がならぬといつたら。どふするつもりだへ。[エン]どうするとつて。外にしやうが千ッも万も有ものか。いやといへば。手めへをやめて仕まふ斗りよ。[こ]それではおめへの良がすみやすめへ。[エン]おれが顔をつぶして。又立る法も有り。[こ]どふして。[エン]藝者を大勢よんで置た。其中へ廻しを呼でいわふには。お琴は右の手に。鬼十がほり物が有るから。いやだといつて。外の子供をよんだならば。手めへの良が立そふもねへもんだ。と二王立にて。大やうに出る。[こ]は是にたを/\いきつき。そふいふ事なら消さふから。おめへはほつてくんなせへし。[エン]おきやァがれ。此はつゝけあまめ。大門通りの長もちを見るやうに。情のねへうぬが名を。めつたに手にやァ付ヶさせねへ。せがきの札を見るやうに。やすく書のも。事による。かたじけなくも此からだは。母の腹の三階來ひ。一ッぱいのむ。

雲楽屏風の中

〔つう〕は雲楽がそばへ居り。とんだ寒(さぶ)ひねへ。〔雲〕モシおつうさんとやら。さつき坐(ざ)しきで。あじな事をいゝなせへしたね。どうもわつちがには知れやせん。おめへをいつ。呼ンだ事が有るへ。〔つう〕わらひながら。どうでもよふごせゑすはな。〔雲〕それじやァすみやせん。一ッ洗(あら)つて見せてくんねへ。〔つ〕おめへも一度呼たものか。ついぞみた事もねへものか。そのくらいな事は。しれそうなもんでごぜへすねへ。〔雲〕そのくらいな事はの口上が。むねにあたり。きこへた。わつちにほれたといふ㒵で。おめへの方から盃をさしたのかへ。〔つ〕マァそんなもんだそうさ。〔雲〕モシおつうさんとやら。頭つうさんとやら。ちよつと見た所はむじかゝつきりの。小ぬかでそだつた人じやァねへとみへるが。腮(あご)をいごかせてみれば。おへねへさつまいもの油揚(あぶらげ)だぞ。さつき向ふ四ノ二まへ五三で。ざしきへ出た所が。合点が行ねへと思(おも)つたがきこへた。けふの内では。としもわかし。遣ひごろなひだらだと思ッてした事かへ。そうもはかなく。風見のからすを見るやうにやァ廻りやせん。今日の五人の一座は。南鐐(なんれう)一片さへくふうが出來れば。此世の女郎は女房とおもつてくらし。ふられた事は雨乞の見物に出たおりと。しつぽのかるひ奴凧(やつこだこ)を上た時斗。なんだめづらしそふに。ほれたつらが氣にくわねの。やき蛤と古ひ地口を。いふじやァねへが。さぼてんといふ手なしでも。春の末にやァかつほもくひ。半夏が入れば竹の子も。くわぬくらゐにうき世を渡り。東中庵のお民には。どこのうちから聟が來る。花扇が新ぞう出すに。十人客も迯たとさ。こんな事も聞て居やす。最中の月や巻せんべいは。近所(きんじよ)の子供のむしの種。岡場所くらゐのちよぼくれが。一ッ二ッのさやあてを。承知之進ととるでもなし。銭や金のすくないは。こつちのたての借金(かり)組。着物も是ぎり立チのまゝ。内にやァわたのは入ッた物は。山からもらつたこぶ巻の。ふなより外には何ンでもなし。是をきいたらあきれるだろう。〔つ〕は一言の返事も出來ぬやうに。先をくどられへ。しゆたん／＼の事。一ッとして。むりじやァごせへせん。重ゝあやまりやしたが。夫に付ちやァ此事を。おめへのほうから洗(あら)はれゝは。わつちは此ころ來た者で。とうも外の子供衆のめへゝ。顔がすみやせん。まつたくおめへを。こけに廻すの。てうすのといふ譯でもねへから。一ッ料簡(れうけん)して。おくんなせへし。〔雲〕さうおめへが。顔を立つてくれろとすなをに出れば。わつちも㒵づくだ。おめへのつぶれるやうにもしめへが。そのかわりに。いやらしい事たが。

おめへにたのむ事が有。どうも足をちかく來られねへ所を。ふだんくるやうに。雲樂さんがいつ日に來た。塩どめであつたの。堀井町で見かけたのと。うぬほれのやうだが。作者の名のうれるやうにしてくんなせへし。〔つ〕すいぶん承知さ。もふ跡はいゝなさらずとよしさ。どうぞちよつ／＼と。足をちかく來てくんなせへ。しかし此足のつめたさでは。合点がゆかねへ。〔雲〕あしをぐつと引。おつとそいつはいやみぎんさんだ。ねずにもいられぬ。と夜着を首きりきて。ヲヽ寒ひ。

歸橋屏風の中

おたよは寐ずに。歸橋かねているよぎへよりかゝり。やうしをつかひながら。〔た〕歸橋さん。けふは何とおもつてへ。きさかたさんは御きげんいゝかへ。おやゑさんのかくしやはやみやしたかへ。〔歸〕今もつてかゝァは。すはといふと。大肝癪きさかたも。てめへの所へ折ふし來る事を。太郎やなんぞかはなすから。やかましくつてならねへ。〔た〕せんどあつちに居つゝけをしなすつた時。兄さんや内のしゆびが。とんだ悪かつたそうだね。〔歸〕そんな事を。どのやろうかいつた。〔た〕かめ山のばけものが。〔歸〕おもひつき所じやァねへ。おれがくるを内でもしつているか。〔た〕此ころじやァ。おめへに出るを。知つて知らんふんよ。〔歸〕そうたろふよ。手めへが根性骨が。乞食角力の廻しのやふに。ねぢれたから。かまわねへもつともさ。おたよは歸橋が貝をのぞきこんでよくみて。手まへの胸をひろけ。のぞひて見て笑ながら。又こわひもんだね。小袖の上からも。腹の中がみへるそうさ。爰にこうして居て。どんな目にあわふもしれねへ。と手水場へ行しあとに。状をおとし有りければ。歸橋はひらく。其状に△きのふは御状だん／＼と御申こしの段。いさゐ承知いたしたり。いよ／＼おしへのとをりになされけや。近ふにさんじ。とつくりとこうやくの下をあらため申べくとそんしけ。又春のしかけの雛かた御こしらけ存たり。じきに京へ遣し可申け。何事も御目にかゝり申さんとあらし。とかきし状を見て。いつものかんしやくをおこし。おたよが來りたらは。白ひ共。黒ひとも。かたを付んと思ひしが。又心づき。此状を落せしは。たしかに狂言のすじ也。何でも狂言のうらをかゝんと工夫している所へ。おたよ來る。〔歸〕手めへの行た跡に。文か有つたが。少とあけてみたれば。何かこんたんが有りそふだから。やめにした。よくしまつて置けばいゝに。おたよは。歸橋にやかましくいわせんと思しが。何の事もなければ。〔た〕これはそさういたしました。と状を手にとり。ひとりてよんてみる。もし歸橋さん。そうはいゝなさるが。みんななみなすつたろふの。〔歸〕見ればとふだ。〔た〕此文に有ル事に付て。だん／＼の永ひわけさ。おめへもしつて居なさろふ。麻布の屋敷のゑんしさんが。やかましくいつて。どうもならねへ上に。正月の事も有り。何やかやで。おめへのほりものもけして此通りさと出してみせる。〔歸〕どふともかつ手にしたがいゝ。手めへ。手をいたい目して。又あつゐめをするものを。こつちのかまはぬ事さ。たよはけしたるほりものを。歸橋が目のまへにおしつけ。歸橋が貝を見ながら。〔た〕もし。歸橋さん。どこの馬の

ほねか。なしのしんが知れねへ客に。おめへの手でりつぱに歸橋と書たほりものを。火あぶりにあつても腹は立たねへかへ。もし。目ばかりはち／＼せずと。能く見なせへし。ごうはらじやァねへかへ。かんしやくはおこらんかへ。是申歸橋さん。（歸橋は久しきなしみなりしが。少しのわけ合にて遠ざかりし故。かく有らんとは。かねて合点のうへなれ共。是ほどにあいそつかしをいわふ共。思はざりしが。思案をきわめて。）【歸】嬉しひとこそ思へ。何腹がたつもんだ。其訳をいつて聞かそふ。能くつもつても見ろ。ゑんしがそのほり物を消せといつた時。いやだと。手めへがいつたなら。よもやゑんしも。來やァしめへ。其うへで外の子供をよんで。正月もきれいにしまつたり。茶屋の娘にまへだれでもして遣つて見ろ。どのつらで。何の錢が有つて來られるものだ。ゑんしがいふなりに。ほり物をけしたのは。やつはりおれに。金をつかはせめへと思ふから。そういふ事もしたろふ。さりとはしんに頼もしひもんだ。（といへど。心はつきがねのとくなれば。しんぼうする。）【た】おもひ付なら。おきやれ／＼と。いわぬ斗のせりふだね。夫ほどに深ひ心もなく。また金づくでもなく。慰みにけしたのさ。【歸】しれた事よ。手めへたちの。鮑のへそほども無へたましいで。きつとした事は。出來ねへはづよ。去年の仲町の。月見なぞとはちがつて。きさかたが月見なぞは。みんなあいつが工面づく。又よし原の傾城はたのもしいよ。【た】深川の女郎にも。いろ／＼は有るけれと。此ほりものをけしたのは。金づくても。木兎てもなく。歸橋さんといふ名にあきて。ゑんしさんといふ色男に。せけへをかへて見たばかりさ。（歸橋はかんしやくのふくろがきれて。）【歸】コレおたよ。こつちを向て面をみせろ。人にも久しく。だまされたが。けささんまの干もので。めしをくふまでも。てめへ斗はそういふ心いきだろふとは思はなんだ。まヿに玉子の四角と。女郎のまヿはないといふが。近ころは玉子もやきなべにかゝつて。四角になるが。女郎の誠はまだ出來ねへ。是で思ひあたつたは。去年逃そくなつた時。新七も。（是は子どもや也。）へらほうだ。おれが内でもねへよふに。何のかのとやかましく。お仲もすさきに居たじふん。客をだました事も有つて。がつてんづくの事なれば。二人がせうちで手めへをにがし。あとでゆすれば。そうおうに。金にもなろふ大仕事をかんを付て。つまめへる。やぼな仕方と思つたが。今かんがへて見る時は。初手から出て來る心はなく。にげるといふつらで。おれには点をかけさせて。大引でどつこいと。つかまへられたも狂言だな。犬めこじきめちよぼいちめ。けぬきとまさの日和下駄。通ひで遣ふ。此五人男の中壹人の歸橋

をば。日なたのうるしをみるやうに。今までよくもかき廻した。けふの愚人(ぐにん)の借金(かり)くみは。女郎を買にあるくじやねへ。此だゝひろい江戸中に。みじかい羽おりにお太刀(だち)をさし。ちろりのかげ干(ほし)みるやうな。形りのおきやくは女郎のくいもの。金をしぼつてとるゆへに。敵(かたき)をとりに女郎をはぐのだ。から。揃ひのひやうしぎちやん〳〵で。まづ初幕からのたくり出。おきやがれ〳〵と。ないて産湯のたらいへは。千川上水の源をくんで。此藏は家主。三升はおやぶんとおもつて。此世のやくしやに出たからは。うぬらが歯じやァとをるめへ。此ころ内もあんまりな。ごうきにほれたの。よめるのと。印判屋がねんきやろうでもおくやうに。人をだます程が有。きりぬいた鬮とりじやァ有るめへし。大きなからだをひら〳〵と。輕(かる)くうぬらがするからな。彫ものさはざも。こつちの山。うそでもきねでもつくほどな。箔の付た此びんぼう。しめへのくだけもしりながら。ァ、いま〳〵しいつらのかは。おきにしろよしにしろ。すかねへ。氣がねへ。茶もねへから。くんでうぬが落したあの灰も。みせて小言をしつかりいわせ。夫から手(しゅ)段(だん)に手段(しゅだん)をつけ。しのぎの数でもふやすのか。今じやァ。そうはとらが石。矢でも。灰でも。通らねへ。こふいふからはやぶれかぶれ。歸橋さんが。どつこひと。金のいかりをおろしてからは。此仲丁のたるぬき女郎。雪かすみかのかりを切り。無ざいにするか。おりやつて。客がせうぶと手をきるまでは。しらみがくわふが。地しんかゆらふが。五分でもうごく五人でねへ。ひよつとうなぎにかたが付くと。此やかばねはけいどうのむけへ火に。みなたきしまい。女郎を置たる古跡には。へん〳〵艸にかやつり艸。角力とり艸。女郎花。今でもはやす法は有り。返事はとふだ。是おたよ。だれでも相手をまつゐ屋で。けんくわ賣ルなら買て遣ろふ。くせつが入るなら賣てやる。みんなもおきてサァごせへ。此深川のいざこさも。今年で三年ァ、つがもねへ。

[大ひしや。きさかたざしき] 歸橋はよくね入て居たりしが。冷汗をかいてうなさるゝ故。[きさ方]歸橋さんおきなんし。とふぞしなんしたか。歸橋は目をさまし。たはこを呑ながら。[歸]とんだ夢をみた。深川での。大いさこざ。いま〳〵しいあまじやァねへか。[きさ]おこし申たが。それほど腹がたつかへ。[歸]おめへの事じやァねへ。[きさ]おたよさんの夢か。[歸]そんなものさ。といふ所へ。茶やの男迎にくる。[きさ]長吉どん。[長吉]ハイお迎(むかい)でござります。どうしたへ。歸橋さん。[歸]おそくなつた。こんど來てはなそう。[きさ]ちつとでもはなしなんし。[歸]何でもこんどの

事／＼。といひながら。羽おりをきて出る。きさかたもはしごの下までおくり。臺所の上りはなに腰をかけ。[きさ]おさらばよ。[歸]此間に來やしやう。と門を出れば。からすがカア／＼。又内のしゆびも惡く。親るいのやかましきをきかん事をあんじ。

吉原の大の鈍金無(ごんかねなし)卿の御哥に

どらむすこれ　の血のあまり

ゐけんで赤くなるも月／＼

後序

大門に伏勢有る時は。新造禿面をみだるとは。鴻厂の杜撰にて。厂は嘘八百。智恵の菜は。三みの我朋歸橋なる者。一文錢か生爪の智恵をふるなの辨舌で。東深州の愚人男の大一坐。夜は何時ぞ引四ツの拍子木もせはしなく。歸橋にてうど大びしや。光り長閑き象潟と。出放題なる戯言も。いゝじやアねへじやアねへしやアねへかと。御評判の敉かづさやか。利へいを蒲と儲溜。蓬莱山人と積重ねたる表題を。愚人贅漢居續借金と題して。其後尻に。是も他生の燕十が。筆を染の井が。閨に採る事しかり。

卯そて
かためた春

志水裡町齋

表紙	ヨコ	三寸七分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	二寸七分
	タテ	三寸六分

彙軌本紀序

昔者司馬仙人登龍門撥禹穴與天下之豪傑游作史記本紀方今島田金谷入大門撥二階與天下之通人游作彙軌本紀彼唐人竊語也此江戸本枝也彼松江之鱸不如日本橋之初鰹彼新豐之酒焉及隅田川之諸白乎夫不窮河源者未睹崐崙不飲水道水者惡稱所謂大通者乎中立而不倚通哉通敎訓而不仕彙軌哉彙軌本紀之名本不虛矣因染如在之序字以冠于手拭之端云爾

天明甲辰松王正月

武部源藏高第四方

彙軌本紀序

昔者司馬仙人ハ龍門ニ登リ。禹穴ヲ探リ。天下ノ豪傑ト游ンテ。史記本紀ヲ作ル。方今島山金谷ハ大門ニ入リ。三階ヲ探リ。天下ノ通人ト游ンテ。彙軌本紀ヲ作ル。彼ハ唐人ノ寝語也。此ハ江戸ノ本枝也。彼ノ松江ノ鱸ハ日本橋ノ初鰹ニ如カズ。彼ノ新豊ノ酒ハ焉ゾ隅田川ノ諸白ニ及バン。夫レ河源ヲ窮メザル者ハ。未ダ崑崙ヲ睹ズ。水道ノ水ヲ飲マザル者ハ。悪ゾ所謂大通ナル者ト稱セン。中立シテ倚ラズ。通ナル哉。通タリ。教訓シテ仕ラズ。彙軌ナル哉。彙軌タリ。本紀ノ名本ニ虚ナラズ。因テ如在ノ序ノ字ヲ染メテ。以テ手拭ノ端ニ冠ラシムルト云フ

天明甲辰松王正月

武部源藏高第四方山人書キ初メ

彙軌本紀序

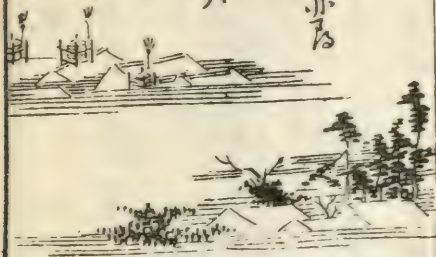
一圓之木持千緡之屋三分之金求傾城之美矣嗚呼東都之盛焉哉此言擧之亦宜乎扶桑橋之魚閙不過四時而靡一匹青樓之娼妓不待時而靡一人矣辱以永道之小倉產湯自與窓觀於鯡而居長之德者則雖孰之以資於彙咲於息子株乎不可不響乎老子曰貴大金若遣小錢是東都子之所顯氣情乎如入島田金谷著於彙軌本紀一卷繫於當時之竅從聰之記於西落以詰序之余亦同好之狢與應飲四山之寡鴨倶足繼於燈伺矣

彙軌本紀序

一園ノ木ハ千鈞ノ屋ヲ持チ。三分ノ金ハ傾城ノ美ナルヲ求ム。嗚呼東都ノ盛ナルヤ。言ヲ以テ之ヲ擧クルモ亦宜ナリ。扶桑橋ノ魚市ハ四時ヲ過ギズシテ一匹モ靡ク。青樓ノ娼妓ハ。九時ヲ待タズシテ一人モ靡シ。辱クモ水道ノ水ヲ以テ産湯ト爲シ。曳窓ヨリ鯱ヲ觀テ長リタルノ德ハ。則チ孰ニ之クト雖。何ゾ引氣ヲ養ラン。況ヤ息子株ニ於テヲヤ。甕テズンハアルベカラズ。老子ノ曰ク。大金ヲ費スコト小錢ヲ遣フカ若シト。是東都子ノ氣情ヲ顯ス所ナリ。友人島田金谷。お彙軌本紀一卷ヲ著ス。槩ソ當時ノ竅ヲ扒シ。胞ニ泛ムノ洒落ヲ記ス。以テ之ニ序センコトヲ請フ。余モ亦同穴ノ貉。應ト飲込ミ山ノ寒鴉。倶ニ倥侗ヲ繼グニ足レリ。

天明四甲辰歳孟春

口唐　出鳳臺　讓琰撰

印　印

狂訓彙軌本紀

雲筑 島田金谷 纂輯

口唐出 鳳臺 校訂

天照太神素盞嗚尊天津罪を侵したまひしことを憎ませたまひて。天の岩戸を閉て隠れさせたまひしかバ。天下やみくもとなりぬ。されバ八百萬の諸〻の神達太神宮をすかし出し奉らんために。庭燎を焚神樂を奏して囃ならしけれバ。岩戸少しひらきて御覧しなさるに。世間明らかに人の面白く見えけれバ面白といふこと此時に起る。また岩戸を細く

日に勝て寝より目出度といふ詞もはじまると。斎藤俗談に外正しき書に載る所にして今流行の詞。日本といふも此ことより出たる訳。此面白と目出度といふことを扶桑廣しといへども東都に止る名としるの日本橋の側奥店軒をならべ四時にかはらず日に千金を商ひ。賑わかまん百かまんの唐音ハ怪子呼ぶ巻舌と争ひ。物松魚價百貫としても遠近に飛。鯰鰊ハ珠玉に換る東西に走る鯛を諸侯に奉じ鯑を下賤の食となす。買よる何豚販

倉屋乃廓。棒手振ハ生鰯鮭の
鰒我售て妻子を養ふ。人物活て
としても弁昇天の龍乃如し。二合
五夕の酒ハ酔ても源ハと闘
譁うなび。親分柔訣を制すれハ
雙方口を閉て止む。和睦の河偏
めるまハ異客前帯と殷勤なり。

さんざんくみ燈灯を両國橋より
長く。納太刀を梁よりも大なり。
なんまいだぶのん佛乃大音てハ佛も
耳を塞れ。六根清浄乃騒劇てハ
不動も逆上すなく梵天万度
乃振やり張の大平を親分の流
義て隠ふ遠慮延引の間違先

刹先晄乃誤応言手もよく通す。
仙の字の手拭半顔をはしみ紐み
禪宗風なり鬮る。般若の面女の首
の入墨。乱髪長髪ハ仲間乃總
なり。相傳ふ顔見世乃積物扇屋
が蒸籠りんびしの空樽大路に山と
なし。着者中乃張札帳屋が筆

跡も見事なり。縫こ乃手拭を
木戸銭とらすまも。しておれ手
梅子近隣て響て鳴雷をとゞめ
まうる。木戸番海老蔵仕着とおう
留場をハおのきり立花道を歩
行す桟敷乃見物人をおろ。すり込
人中を割て山之手乃客ときにれ

なる。新小蒙る朧に聴囃窈に
張たる口紅の色を失ふ。太夫
内簾の綿帽子を降積む雪に
と疑ひ。五間續に黒仕立西落
上時なく向表る翡翠屋か衍南鐐
二片とはなし。去年の梅子木に
衆客色を直し。頗が口上さしに
閙へす。幕明に下り葉に兵當の
箸を投る聲の一聲吉例の角蔓
主膳か上瑠理を獅子乃吼る小異
おしず立出る柿乃素袍悠々と
して花道に到れば響る聲
異口同音くして積上る蒸籠
乃山に響く。年々歳々みきり姐

花柳ぞくり。打驚く歓俊聴し
て進むことを能はず。なりおどる金
巾説り冠は天幸も無こことく
姫君の危難を救ひ奉て一刀の
下に首百級を伐る大なる哉
東都の親王株眉ときも八百
八街風来散人飛びの噂を許して
彼が氣象を賞す。極遊は昔時の
傑足下を今日の勇奇なる哉
市川の藝術嗚呼汝が子へと。獨
ここにて頷を鼓ば借に浪華に
客なりもつとして曰。汝出る僕の
東都自慢を上る。我聞に何そ。
當世流行するとは何ぞや。答

曰。其一二を擧てみれば。三升繫親
和染。ゐ日紫とび色太名縞短脇
差。長羽織因果地藏之富の札巢立
妓者に手折何備。画艸帋画落本重
絃笛吹按摩女医者まで画ること
豆藏の如し。亦同今俍華小和歌
寿し行る。東都にて誰くが答曰

四方赤良朱樂管江かし衣橋洲平
原屋東作。とうしもく細。智恵の内子
其外何者てか挙へからし。あ誹諧ハ
解庵 獨庵木犀庵 獅子眠を始とし
是まで云も挙さまず寸画艸帋の
作者いかん。喜三二春町芝全交
此三子を上手とす。上瑠理の方

[illegible]。鬼外光生没して後。紀の
上太郎。烏治萬象貫四欄黛鬼
眼と兴ろす。捌狂言ハ次助重助
專助馬霊。河竹金井を休とかゞも
云ふもの像出し。松盤春章
清長湖龍斎・とありてハ如小。
得られく料理家ハテ食撰

とるおもとろ綺し。擲三味線六級
屋葛西太郎に大黒屋浮瀬杭像
山藤庵樂庵百川四季庵の四季
おりくれ献立と善ト挙しまお
もり容目ををゆてを手を折て曰。
恐ろ當き支東都の盛なること。
他郷の及ぶ所に非ず。長袖鉄薪

到る。角力取の木偶を買ふ
帰り来ッてまた坊様に戯ず。衛
寛爾として床の間へかざり置
長座を相手にして喜氣満
面になぶ。父母が進を見て涎
を流し。戯場事のまねするあ
代。裏店の噂に傳ふ。誉るあ
まじ小兒の馬のみ如く父母是
に乗しるにまあるとも使しる
騒劇なとゆるす。菖蒲刀八ッに
の間と塞ぎ。畫草帋長持に
餘る長松買うやて錢を掠
て飴棒をとりちり大轉達す
糖の下鼻く至て湯帰れ

鼻唄按摩を太鼓をけしかけて八
手下の伊之助にかゞませ。坊様の
御氣に入ッて。傍輩など笑ふて
す。髪置袴着の御祝儀大丸
越後屋より来ッて錦繍を會か。
定紋を俗な事として篆字に
壽の文字を縫せ當日明神へ
詣て密に往来の評判をきく。
帰て味噌を上るゝと火の見
櫓より高く乳母が鼻天狗に
倍す八歳の頃義之流の筆道
を学ばせ四書の素讀もすまさ
ざるに唐詩選より太平なり。坊
様の幼号は西風に吹散じ軽

瀟子来つて若旦那と稱す嬖ハ
頭上に曲し羽織を地せ掛つて
長く自讃して曰。匪直せ人柔
心塞備と野暮を見ること上
野より下谷を見るが如し。然を
千家をまねび俳諧を和泉街に
まさぐりいまだ百韻一集もまさ
ずとも發句を諸集に載る室。
十有五にしてこれぞめて御出入の
卜庵老と深川の土橋にいる室。
チンチ、律の調子に乗悪劇する
こと甚しく。娼妓役者に通すれど
する案内をまねすお先につりて
おくこと三年。牽頭持の不風流

若ひ者の生存在て船頭ハ詩僊
の如く。客を倍臣に等しく。吉さん
源さんと吾長なり。おてうさんお
まつ川さんの割床。新川の義兵衛
に隣つての終夜悪口の巻軸銭
さく口說なるの喧嘩なる鼓鉦
須よりうかがず。八幡の鐘声耳を
聾す。閙しく形容を正し深川に
出てさん橋にいそげバ。蝙蝠衛
往り。多吉さん此間にの一句に
しるす言を紛無情なるはしと
澁としり。昇なるに深川の
遊び檜木舞臺を踏ずんハ
里み汚瀰を免るまずとも。叢将

しけり。一日知己相伴ふて青楼に
至る中之街にして沽妓酒なと
嚥して。洒落なるを数刻客を
具て相集る徒ハ蘭甬東洲
五調嘉隆目吉藤兵衛等。啌八
百をならべ。大声笑語して盛に
なり。茲に龍て魂をしめて宿
替す。宴終りて娼家に至れハ窮
窕たる老乱。婢妓なる雛婦琴
を弾絃を鳴して。館中塵埃を
拂ひ。およしなんし馬鹿らしいの
鄭言ハ。十寸見か曲声と争ひ高
楼銀燭の光を白昼の如く
並立たる臺のものハ座上に

島なるかと疑る食類を積ミ
船屋か風流をきわめ酒ハ清繁
の下流を汲む。鑓手なる髭なる
亜襟を着なる廻僕を雛妓ハ
探索なる戒む閨中綾羅の三つ
ぶとん。金屏ハ雪舟採幽か玄
上なる容ハ使者なく傾城は
鄙俗なく。濱御先生の筆意を
学び唐机に和漢の書を飾て
王章法らしき温和をもしるゝ
諸芸伴頭雛妓に任す。調度の
物の價を知らず。孔方をもて数量か
知らざるハ是を性悪の奥様に
たとへても知る深川の庚戌

あることば只の人の異見として曰。傾城に誠なしと鶏卵に方なるなし。答此両品けしば晦日の䰟に月の出ることありと俗徒の談として。いまだ娼婦に真ある證を見ざる故なり。古語曰。臨淵而羨魚不知退而結網されの真偽を論ぜんよりも。己が傾城をなぐさむる才なきを歎べし。又謂傾城に誠があるは運の続と。俳諧にいへるごとく。伴頭を顧みれば傾城に疎く。傾城に親しからんとすれば家おさまらず。されば是なることとかしこく非や非を非とさとりて非を

なすは。傾城の誠心を見れば有り。商人の金を出して物を買ふ銭の儲をもとむれば有り。其ままならばふしてこひすることの是一なり。頃に鉅者を識べからず。なかしく俗は最上青なうのたいしメ。智者となり愚者となり。通となり野暮となりあるも何ぞ正に金の多少による無翼而能飛無足而よく行ヤツサコラサの二百も猪牙は船州のさんぶまで。せめ来るすりとぬけて山をさしてぬくぬく名広る會所句の席河内屋が高みからみくおほくお羽織を見ては戴きもせん

三升が手拭をまき〳〵巻てしていく
さて話世話を焼栗の杜撰は呵々など
追栗坐栗なかりけん誤白云爾

彙軌本紀跋

盍晋須といふ華人の詞に
曰、居ハ氣を移し春画ハ情を
寫すと凡大作ハこの天下に
三ツ、西京ハ堂塔伽藍なり

浪花ハ交易運漕なり智恵
と膽氣とハ金乞ハ東都を除
てまた何國ハかあらんや吾友
島田金谷子具、　江都の
中央ゑど川といふて生しより

おへ性根の七歩を進め、後へ
野猫の七歩を退き、難陀が口
より雨落を吐跋陀が口より雪
自慢を吐、武藏野の原を腹
とし、富士お山を準とせり。

聰明叡智いはぬ義知生れ得
る智恵の甲折、奉頭ま社り
育られ、身丈三寸三分大、数
の老翁ナ、ふんとこ云せ放屁儒
可謂さうさ、こそめても尽ぬ智

恵の海硯を載せバ一句となり
墨を摺れバ一章となり兎成
角なり瓢かしがましとて捨る人
有難とて拾ふ人ぐつと鵜飲
の玉川鮎水道の水のそれナン
とやら平原屋東作筆
を酩酊の中に揮ふ
天明三癸卯歳春めでた
き日
へいげんや

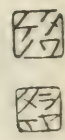
彙軌本紀跋

孟晋須といふ華人の詞に曰。居は氣を移し春書は情を寫すと。凡大なるもの天下に三ッ。西京に堂塔伽藍あり浪花に交易運漕あり。智恵と膽氣とに至ては。東都を除てまた何國にあらんや。吾友島田金谷子。其江都の中央。ぎやつといふて生しより前へ性根の七歩を進め。後へ野狐の七歩を退き。難陀が口より洒落を吐。跋陀が口より自慢を吐。武藏野の原を腹とし。富士の山を準とはり。聰明叡智。いさゐ承知。生れ付たる智恵の甲折。牽頭末社に育られ。其丈三万三千丈。白髪の老翁にうんと云せ。放屁儒に誤たかと。きめても盡せぬ智恵の海。硯を載せば一句となり。墨を摺れば一章となり。兎成角なり瓢。かしがましとて捨る人。有難とて拾ふ人ぐつと鵜飲の玉川鮎。水道の水のそれ。ナンとやらと平原屋東作。筆を酩酊の中に揮ふ

天明三癸卯歳春めでたき日

天明甲辰孟春

島田金谷述

自跋

清貧は常に樂しみ。濁富は常に患ふとは。往昔老夫山に柴刈。婆ァさま川に洗濯するの時代にして天びん棒上へそりたるの定矩にあわず。貧者は甘塩のさんまを賞し。富者は鯛のみそずを奇なりとせず。一升の米に追れて腹中さびしく。百斛の美酒をくらつて寒夜をしらず。豈たのしみ貧者にあらんや。もし古語を常世にあつる時は。婆ァ様山に柴刈。老夫川にせんだくし。桃太郎鬼が嶋へ渡って。若衆にさるゝに及ぶべし。箱根からこつちに野暮稀にして錢儲からず。化もの出ずして怪談の書廢れたり。此二ッの外に至って微なるものは何也。山吹の色事也。今予が著す彙軌本紀は。全く銅を進むるに非ず。かれを見。これを聞て以て。其しりのつまらざる事を喩し。此書を世界の息子たちに見せ。居候の難を免ん事を欲す。かせぐに追付貧乏なし。盡すに追付富貴なし。然りといへども。一粲に古風をしたわば。沈香はたかずして。屁を嗅のどんちやんあるべし。油斷すべからずと。まじめになつてしるす事しかり

天明甲辰歳孟旬　島田金谷述

タワケノ　スヤタマ

表紙	ヨコ三寸五分	タテ五寸
本文枠	ヨコ三寸	タテ四寸三分

和唐珍解序
かねて長崎は
繁華なところ
で。すぐれて
よい所と承わ
る。就中(なかんづく)。丸
山寄合町(まち)は。
よい女郎多く
衣裳などもよ
いと申す。そ
の上ものいり
もほかノヽよ

和唐珍解序（ホウーン チン ケイ ジヨイ）

素聞崎乃繁華之地（ソウ ウエン キイ ナイ ワン ハア ツウ デイ）

景勝之郷也就中丸（キン シン ツウ ヒヤン エ ツエウ チヨン ツン）

山寄合之間名妓多（シヤン キイ キヤウ ツウ チン ニン ギイ トウ）

り心やすひげにござる。われ等一度はまいつて。遊んで見たらござれど。途い遠いに。いたし方がござらぬところに。此度唐來三和和(とうらいさんなわ)唐珍解(とうちんかい)といふ草子を作られ

少(ヤウ)而(ル、)粧(チヤン)扮(バン)好(ハウ)了(リヤウ)客(ケ)貨(ホウ)

くいきやうすがたもよしとおもてそのうへの

此(ピー)他(ライ)三(サン)一(イ)佑(リウ)一(イ)佑(リウ)也(エ)我(ゴウ)

ひもわろくよりところやそひげはござる それ

們(ポン)久(キウ)思(スウ)一(イ)遊(ユウ)焉(エン)万(ワン)里(リイ)

らいつもどハまいりてあそんでござるがそらのとをい

行(ヒン)路(ロウ)無(ウ)奈(ナイ)今(キン)般(バン)唐(トン)來(ライ)

子ゆくしりさろござらしねところみこのたびとうらい

たから。これこそわれ等が大仕合と。くりかへし見てはられしがり。くりかへし見てはられしがり。朱樂館主人序す。印印

三和作和唐珎鮮戲
文是私的大造化閲
一閲歡一歡来樂舘
主人序

序

夫支那の地まはりは漢に游女ありとうたひ天竺の貝多羅は街賣女色とかきのめす。わが日本の二ばしらは床柱にもより給はず。蒼海原の青傘に萠黄さなだの紐といて。出合のひとつ穴にえやと天神七代五代參地色ばかりをかせぎ給へば。人の代となりて。伊勢源氏の物語にも。指切髮切のまことなく。二條后。若紫もおいらんの意氣地心えなし。今や京の女郎に。江戸のはりをもたせ。長崎の衣裳をきせて。大坂の揚屋で遊ぶ自由自在の樂をす

る時にあひて。和漢の人の大一座。晦日の月のまん丸山に。むすび卵の四角な文字を。唐來參和といへる中位な色男。あらゆる贅にかきねの外。ふらりとさがる瓢簞で。鯰をおさへた大あたりは。慥なる物から。我等請人にたつものならし。

四方山人

和唐珍解

唐來參和著

雲想衣裳花想容と。清平調の詞の華。花艶とて不如容。人老て不如花。華あれば人。人あれば華の都も余所ならぬ。仇の浮名をなかゞ崎の。色の丸山角とれて。和らぐ國も異國も。かわらぬ戀の道芝を。喇叭哨吶。吹立てそゝりぞめきの華人。旅館の夕の徒然に。通詞諸とも打連て。うかれくるわの娼家入。是客中の客ならん。

大明李蹈天從者ニ向ひて。李蹈天 你們可回去。從者 領旨。李 明朝早些來。我在這裏等候。快些去了。不可路上作脚。通詞和田藤内 多勞多勞。從 去了。と皆々かへりかゝるをよびとめ。李 你們等一等。從 有何貴幹。李 休要賭錢。藤 崑崙奴有些事故。不要去。崑崙奴 領旨。從 明日再來迎接。と皆々かへる。くろんぼうひとりのこる。藤 若者若者は居らんか。わかひ者〱。若者 ハイ〱どつつさまだ。どなたさまだ。是は藤内さま御案内とは。きよといぞ〱。と飛下りしやれる。李蹈天はこれを見て腹をたちて。李 沒規矩奴。藤 コレ〱若ひ者。兼てそういつて置に是はどふしたものだ。唐の客人には。そのやうにしやれては腹をたつ。翻身便拜すといひ。又撲地拜下などゝいつて。天窓を地へほりこまねへければ。合點せぬよ。若 ホンニそうで御ざりました。是は大きに不調法。李 得罪我了我饒不得他。崑 苦哉苦哉。藤 請息怒他的不是了。李 狡猾的人。下次再須要小心些。若 マア〱二階へ御あがりなされませ。藤 請上來坐。李 樓中有蜘蛛網。藤 蜘の巣だらけではないかとおつしやる。若 是はまた悪口ばかり。まづ〱皆様御通りなされませ。藤 崑崙奴你跟著我來。と皆々娼家へ入り。二かいへあがる。くろんぼうは供アへ入る。藤 李君且上面坐了。李 怎敢。若 今晩は能ふこそいらつしやりました。李 初相見。藤 始てあふたとおつしやる。若 ハイ是はありがたう御ざりますト申ても。しかし通じますめへ。藤 ソリヤアどふでもいゝ。夫よりちと談る事がある。ちよつ彼處へ來てもらおふ。トたちあがる。若

哥哥那裡去。【藤】有些事情。【李】去了來。藤内は廊下へ出。若者にむかひ。【藤】コレ外の事でもないが。けふつれてきた唐人は大明の李蹈天といふ金持だから。あいかたの女郎は栴檀を出してへものだ。そこいらは手めへも。ソレよしか。【若】しかし。ちとみかたみぐるしいね。【藤】コレ家萃をいわつしやんな。手を出さつせへ。ト金を壹分はづむ。【若】コレハありがたう御ざります。シテおまへさまのは此間の通り。【藤】新造さ〳〵。【若】よふ御ざります。何事も方寸にありで御ざります。【藤】しんの賴みだせ。ト藤内は座敷へ来る。禿【禿】藤さん。お出なんしたか。【李】個裡來。【藤】爰へこひとさ。【禿】わつちやアいや。氣味がわるひ。【李】沒有可怕的事。【藤】マア側へいつてみや。【李】椒住他。【禿】ヲ、こわ。エ、モウ。【李】爲甚去。使不得。トだきつく。【禿】アレよしておくんなんし。いつそ顔をなめさつしやる。【李】休要囉嗦。【禿】エ、モウ うるさい。トふりきりにげて行。【李】休要跑脫。姐妓面前。不可許知。わかひもの酒さかなを持きたる。【若】ちと召あがりまし。【藤】いかさま。李哥喫一杯。【李】好了。あいかたの遊女兩人出る。【栴檀】どなたもよふ御出なんした。【藤】きつい御もつたいだね。【栴】ナニそうじやァおざんせんけれども。【李】這箇杯兒。奉献娘子。ト此所和漢かわらず。古風の通り盃事あり。略之。【李】今日暴始相見。【新】モシ主がなんとかおつせんすせ。【藤】はじめてお目にかゝつたと。おいらんへの挨拶さ。【若】どふでもからのお客さま方は御町嚀で御ざります。【栴】こつちからも。何とぞ相應にいつておいて おくんなんし。【藤】せうち〳〵。初接高風。不勝欣躍。若蒙不鄙棄感謝不盡。【李】這般殷勤折殺俺也。【若】なんだか唐音と申物は。むつかしそうな物で御ざります。【李】敢問娘子尊名。【藤】喚作栴檀。【李】青春多少。【藤】今年二八。【李】衣裳齊整。容貌嫖致。生得出衆。【藤】當時名妓。數一數二【李】多虧得名妓。眞正多謝得緊。【若】恐ながらあなた。ちとけんじませう。【藤】壯客奉敬一杯哩。【栴】ソレ二葉お酌をしやな。【禿】アイ〳〵。【李】滿灑一盃。【藤】しつかりつけとさ。【新】せんてへ。あつちの客衆は酒が强ふおざんすねへ。【若】せん頃御出なされました朝鮮の御客さまは。どふなされました。【藤】ム、功慶子か。此頃は寄合町へ斗のぼせていく

よ。【梅】主なぞもお出なんせうね。【藤】ずいぶん折ふしめへりやす。【李】娘子喫烟。【藤】客から女郎へつけさしもありがてへ。それおいらん。たばこを呑とさ。【梅】よしなんし。そんなことを言なんすな。【藤】吸口を折て呑と腹をたつせ。【梅】見つけなんせんから。よふおざんす。【李】藤内哥哥。敬你一盃。【藤】どふも此酒はちと廿口だ。是その子。アノ供部屋へいつて。くろんぼうにそふいつて。持參の酒があるはづだから持てきや。【禿】アイ。【若】只そふ斗では不通で御ざりませう。【藤】ホンニとういんでなければ幕が通らねへ。いつたらの。那箇四角酒快些將來といふと。拿進去とか。何とか言つてよこすよ。【禿】なく子がすきだとへ。【新】ホ、、、。ナニそふじやアねへわな。【禿】それだつても。おかしくつて。どふもいわれやせん。【若】エ、役にたゝねへ。唐音も何もいらねへ。おれがいつて取て來よふ。ト立て行。跡へ朋輩女郎。【青柳】藤さん。【藤】なんだ。【青】たゞ。【梅】青柳さん。おはいんなんし。【青】アイ。トそばへ來て。藤さん。わつちが客人はなぜ來なんせんへ。【藤】ム、呉三桂か。けふ誘つたけれども。用があるとつてこねへ。とによると跡からこよふよ。【梅】たばこを呑なんし。【青】アイ。【藤】毛唐人でも。アリヤア色男だから。がうてきにのぼせるの。【青】よしなんし。きざな。【藤】ハテそういひなさんな。あれも八九年も續てこつちへ來たろうが。此國の女郎買の馬をりは。ソレおめへだは。よしか。あれも日本の言語を覺へ。おめへも唐音をおぼへるほどの久しい馴染で。床のこんたんにも何かゞわかつて。書合をしようといふものだから。ソレ一ト をりじやねへよ。【青】どふだか。しりいせん。【藤】ナニしらねへ事がある物だ。アノ線香の匂ひをかぎしめるが。最後のすけ。【青】此通詞めがいわせておけば。コレから哥さん。そつから撲つてくんなんし。【新】アイ。【藤】ア、あやまつた／＼。コレあんまりさわぐと。此唐人がてれてゐるから。また機嫌がわるひ。【青】ナニ唐人にかまふ物だ。【李】藤哥不可插口。喧嚷得緊。【藤】請恕請恕。ソレ見たがいゝ。叱れた。【李】俺的性兒不喜歡鬧動。只喜歡閑靜。【新】なんだとへ。【藤】てめへに惚れたとさ。【新】くちをまげて。ヘエ、。【藤】サア青柳さん。一杯呑ねへ。ト盃をさし。唐人に向ひ。你認得他麼。【李】我竟不認得他。【藤】呉三桂的妾也。【李】敢領尊盃。

[青]わつちかへ。そんなら憚り申しいせう。[梅]なるほど青柳さんは。よくあの言葉を聞とりなんすぞ。[李]酒壺。酒壺〳〵。[藤]在在。朋輩女郎。廊下よりそつとぬきあしして來り。藤内が目をおさへこ[錦州]あてゝ見なんし。[新]アレサだまつて押へなんすりやァいゝに。[藤]ハテナ是斗は。誰だかしれねへ。[錦]ホ、、、何にもならぬ事をした。今夜はよく來なんしたね。[藤]サア下に居ねへ。[錦]ぬしやァへ。[藤]あれは。せんど咄した李踏天といふ毛通人さ。[錦]ヘエ、。唐人にむかひて。モシおはつにお目にかゝり申しんした。[李]獨言 今日天色好。[錦]どふぞ。是からこつちへも御出なんし。[李]阿阿、酒醒了些。[錦]さやうさ。[青]ホ、、、、、、。錦州さん。そりやァまァ何の事だへ。[錦]なぜへ。[藤]おれもあまり合點がゆかぬから默つて聞てゐたが。こ

いつは大わらひだ。[錦]マァ聞なんし。あのわつちがね。こと葉をかけいしたら。近日どふとやらいひなんすから。あてづつぽうに。どふぞ御出なんしといひしたら。ア、あつひとやらいひなんすから。さやうさといひしたが。遠ひしたかへ。[藤]氣がちがつたそふさ。[梅]そして。ぬしはなんといひなんしたのでおざんすへ。[藤]せんたい。唐人がこの子の言葉をかけたを聞つけねへで。獨言に。けふは能天氣とか何とかいふと。どうぞ御出なんし。ア、醉がさめたといふと。左樣さ。なんのことだかねつからおかしい。[ミナ]ホ、、、ハ、、、、、。[李]笑甚麼。休要唉話我。[藤]休要惡猜。コレみんな。笑はねへがいゝ。手めへの事かとおもつて。此毛むしがあつくなつた。[李]敢問笑甚麼。[藤]此妓好

唉得緊。[李]新來的在個裡。頑要則箇。[青]錦州さん爰であそべとさ。[錦]アイ。若者酒を持きたり。[若]サア〳〵御酒をもつて參りました。[新]ヲヤいかい事持てきなんしたねへ。[梅]その中に居るのはなんだねへ。[藤]こちらのは蠑螈。これが蛙。その次のは蛇。[清]きみの悪ひ。生ていゝすかねへ。[藤]何こしらへ物さ。[李]硝子透亮了好看。[錦]此酒をマァ呑なんすか。いやだノウ。[禿]モシアノ此事斗ふらそこといふと思ひゝしたら。天井の事もふらそこといふねへ。[清]ナニばからしい。そりやァふな底だはな。[李]我喫酒出酒鍾。[藤]酒を呑ふといふ。ちよくを出しや。[禿]アイどこにへ。[梅]エ、この子も。ぢれつてへ〳〵。[禿]アイ。いつもの引出しにあるわな。[李]最好。ト引出しより。こつぷを出し。唐人にわたすと。さけをのみて。

且請試用一盃。香氣妙極。[藤]好了。[青]わつちやア。一寸いつてきいせう。ト立ちあがる。[李]再坐唉談。[錦]そんなら後にきこらい／＼。[青]バア／＼。[藤]覺るもんだの。[青]ホ、、、、、、、。ト笑ひながら出て行。藤内はさけをのみ[藤]不但香氣好。味道絕妙。[若]此酒を女郎衆がのむと。むせうにそい客人が。かわいく成といふ事では御ざりませぬか。[新]おいらは飲むめへよ。[李]担火來。[藤]それ火がなひとよ。[禿]アイ。[李]少此拿來。不要多。ヒイレイヒイレイ。[錦]ヲヤ唐でもあの事は。火いれといひすかねへ。[藤]何。日本の言葉を覺たを。じまんにいふのだ。[若]どれ。いつて火をいけておかふ。子供。とりにきや。ト立つて行。[樹]ア、言葉をおぼへなんすから。めつたな事は言はれねへねへ。[藤]ナニこの唐人などは。今年はじめて

來たから。鼻の先で惡くいはれても知らねへ。[李]俺嘗認得那个娘子。[藤]錦州さん。おめへをばみたと言が。おめへ知つてゐるか。[錦]いゝへ。[藤]ム、夫く。此中備前屋へつれていつた時。おめへが見世にゐたから。それでだらう。[樹]ナゼあつちへは行きなんせんへ。[藤]鷄をぬすみにかゝつて。見つかつて逃る拍子に籬の溝へ落て。それから面目ながつて行ねへべらぼうなやつさ。[李]ハアクッサメ喫糞了。[新]ヲヤくしやみは唐でも同じ事だねへ。[藤]ひとりでに出る物だから同じ事さ。[李]ハアクッサメ那箇說我事也。[藤]先刻そばでわるくいふものを。くさめも出ねへでどふするものだ。[李]ハアクサメ傷風不耐煩。[藤]是不好了。ト羽織をぬひて。李蹈天にきせる。[李]多謝多謝。量尺正有了。分寸不錯了。眞正相

像了。[錦]ヲヤ羽織を着なんしたかたちは。よくふくさんに似て居なんす。[藤]福とは福輪主が事か。あれは紅毛人だ。[李]像不像。比一比看。[藤]どふしたか今の言葉が知れたそふだ。[李]娘子休要客套。[藤]モシ何さん。客じんにするなとさ。[樹]ついぞねへ。[李]喫此酒麼。[藤]他是淺量。[李]愛的甚麼東西。[藤]最愛彈唱。[李]藤哥彈絃。[藤]請免。[錦]なんだとへ。[藤]おれに三味せんをひけとよ。[新]彈なんし。[錦]コレ二葉。そこの三味線を出しや。[新]サアひきなんし。[藤]どふも久しくひかねへから。なぞとうぬぼうも。うつとふしいか。苦辭不脫。[李]又來自負了。[樹]モシいつそね。唐の唄を彈て聞かせなんし。[藤]面白くねへやつの

てつぺんだよ。トちやうしをあわせて。

一更裡天。一更裡天明照紗窓人也末
眠被襖兒寒凍得渾身上腫。我的肝肝
我的心肝何處貪花撇下了我。撇下了
我。你在花街上闖。【李】越更感。【錦】モヒ

それでしまひかねへ。【梅】いつぞ。ばからしゐもんだねへ。【李】唱得妙。端的是聲清。韻美字正腔眞。另外好聽。【新】それより日本の淨瑠理をかたつて聞かせなんし。【藤】それでは。またこいつが訳がしれねへからてれる。【錦】ソリヤアよふおざんさァな。【藤】そんなら斯ふしよふ。此中あれが淨瑠理をのぞむから。唐音に直して置た。それをかたつて聞かせう。【梅】それは又こつちで訳か知れへすめへ。【新】なんでもマァ語つてきかせなんし。【藤】何にしようなム、曦鎧の身替り場にしやう。【李】快些唱來。

【藤】又調子を直して。日月互明懸。配天豈偶然。浮雲有覆失光。年幼王母后堪憐。似楚囚可傷焉。永井右馬頭宜明領命囚監。折から若者きたりて。【若】モシおつれさまがお出なされました。【藤】呉三桂か。【若】さやうで御ざります。【李】那箇來了。【藤】呉三桂的。【李】他也來得好。【藤】是ふた葉。その三味せんをかたづけや。【李】アイ。【藤】わつちやァ行つて來いせう。【藤】ナゼマア遊びなせへ。錦州はかへる。呉三桂はづつと通り。座敷へ入。【李】我等兩人老早到這裏。等候先生。先生却如何恁地來遲了。【呉三桂】飛也似奔將過來了。越急越不明白。列位早至等久了。恐懼不過。【梅】今夜は能お出なんした。【呉】多福。【藤】那廂坐。【呉】列位在這裏。我豈敢占上坐。青柳來りてざしきへ入。【青】今夜はどつち風が吹たか。よくきなんしたの。【呉】僑居冷淡。過日如年了。【青】それで來なんしたかへ。大かたそんな事でなくは。きなんすめへ。うわ氣だらう。【呉】小生不過來。【青】ソリヤア寄合町の事かへ。【呉】浮浪之徒。不勝戀慕。所以特地走將來。【青】俺曉得。你今宵內有些障礙。却來這裡戲弄我。【青】よしか。そんな事を言なんすな。たれも客はおざんせぬ。【呉】莫說慌。【李】彼此難辨可否。【藤】我自心裏曉得了。今夜差不多好了。【呉】信不得。【若】今晩はよふこそ。【呉】怎樣久不相見。【若】ハイ〳〵鳥渡マアいつて參りませう。トたつて行。【新】呉三さん。約束の小

人島をもつてお出なんしたかへ。〔藤〕小人嶋とは。〔新〕イ、エアノ枕筥の引出しへかつて置いすからさ。〔吳〕一兩日內拿來了。〔新〕まただましなんすな。〔吳〕不敢說謊。請勿生疑。〔禿〕おいらは小人島も何もいらねへ。手長嶋になりてへよ。〔梅〕ナゼ。〔禿〕高ひ所へ手がとゞひたり。また酌や何かをするにいゝからさ。〔吳〕少妓。是有件要相托之事。〔藤〕是ふたば。よぶせ。〔禿〕エ。〔吳〕拿茶來。〔青〕お茶をあげや。〔吳〕溫々的好。不要大熱。〔藤〕ぬるひがいゝとよ。〔禿〕アイ。ト立て行。やりて肴を持來りて。〔ヤリ〕ハイ內所から。〔藤〕從家孃出甚麼。〔ヤリ〕藤さま。此ごろはすきと御出なされませんの。〔藤〕俗用にかまけてさ。〔吳〕常常壯健。〔藤〕おかわりもなしかとさ。〔ヤリ〕ハイありがたふござります。〔李〕要與婆々陪話。〔青〕モシ近付にならふとさ。〔ヤリ〕ハイどふぞこれからお目をかけられて下さりまし。禿茶を持來り。〔禿〕ハイモシそこをちつと。御茶を持てめへりました。〔藤〕どれ〱爰へよこしや。〔ヤリ〕御膳はまだかへ。〔新〕イ、エ。ヤリ埒のあかぬ。どれいつてせついて來よふ。ハイ後ほど。ト立つて行。〔藤〕吳哥。一盃喫得大醉也好。〔吳〕宿酒未醒。請免請免。〔李〕要和你化拳。〔吳〕這樣事尤好。請李哥在對面坐則箇。〔禿〕おいらは見ようや。〔李〕走開去。休要在個裏纏繞。〔青〕コレふた葉。もちつとあとへ下りやな。〔吳〕〔李〕一。五。十。兩。七。無。四。九。三。八。六。二。〔吳〕那裡了。〔梅〕モシこればかりは日本のと。あまりちがはねへじやァおせんせんか。〔藤〕せんたい唐土から來た物さ。

〔吳〕我不敢當。〔李〕錯過了。氣苦不迭。此所へ若者しつぽく臺をもち出て。〔若〕ちとそこを。〔藤〕これは跡へさがらざァなるめへ。〔吳〕衆皆個裡來。〔若〕どふも何もさしあげる物は御ざりませぬ。〔李〕調理好。甚麼東西。都好喫。〔藤〕把宦路當人情。沒什麼欵待。有罪有罪。〔吳〕半東感激。〔李〕是大明了。〔藤〕李蹈天。葱菜猪兒怎麼樣。〔藤〕料理がいゝとつてほめるよ。今いつたタア、シンリヤウとは。こつちでいふ。日本だといふのと同し事だ。〔若〕それは有難ふ御ざります。まことに何もあげる物は御ざりませぬが。その牛のあんかけが御馳走でござります。ふるせでは御ざりませぬ。〔藤〕いかさまこれは新しそふだ。〔吳〕牛兒煮了吃更妙。燒的滋味不好。〔藤〕失陪請飯。

李 要喫。 若 鷄の血はそのちよくに御ざります。こちらのは羊の油でござります。 奚 先生飯桶剩此。 藤 又來弄舌。 新 モシ口のはたにまんまがついてゐやすよ。 李 講甚麼。 新 イ、エヽサ爰にまんまが。 李 越鑷越生。我也厭了這個髫髮。 藤 てめへがあごへ手をかけたから。髭の事だと思つてゐるやつさ。 李 莊客吃一杯如何。 奚 他是海量。 李 喫了。 青 和介どん。それ酒を呑なんしとさ。 若 ハイありがたう御ざります。 李 賚發他。 藤 ソレ花をくださるとさ。 若 はなとはありがた山櫻。しかしこれはなんで御ざります。 藤 銀錢だよ。おれがほうへ持てきや。いつでも金と取かへてやらう。 若 ハイこれは有難ふござります。 藤 コレ／＼そこが例の通り三拜する所だ。こうかね。 若 ホンニそうで御ざりました。 梅 ヲヤばからしいなりだね。 若 ホヽヽヽ。 若者あまり辭儀をするひやうしに。たもとより玄つ中ふんどしのまるめたるを落す。りとうてん手早く取あげて。 李 什麼了。 彩 ヲヤ見なんし。此人はいもじを落さしつたよ。 青 けしからねへ。 若 是はとんだ物をおとした。 ト赤面す 青 先生是什麼了。 奚 我也不知。 李 藤內是什麼東西。 藤 なんだ／＼とつて聞にはおれもくたびれたぞ。日本頭巾。 新 アレ見なんし。紐の結び目を口でくわへて解なんすはな。 若 是はどふもたまらぬ。穴へも入り度なつてきた。 李 好這一頂新頭巾。 トあたまへかぶりて。紐をあごの下でむすぶ。 青 ヲヤどふせうのふ。かぶんなんした。 藤 おれも言やうがないから。日本の頭巾だといつたによつてさ。

若 モシ藤さま拜みます。お返しなさるやうにおつしやつて下さりまし。 彩 いつそおかしくつて腹がいたくなつた。 李 這个頭巾甚麼價。錢賤則我也要買。 藤 價金三兩二分。 李 價錢賤。 藤 爲什麼。 若 奉獻大明皇帝。 藤 わざはひも三年とやら。アノふんどしを何買たがるせ。 若 是はとんだ事になります。 藤 國へ持ていつて。あつちの大王へ献上物にするとよ。 青 いかな事でも。 李 我强買了。好好說一声。 藤 あれをむりに買といふか。堀出しといふものだ。いつそうつて仕廻わねへか。 李 怎麼樣。准不准。 藤 備細說知他說道。現金賣不賒的。 李 算還價錢。 トふところより。三兩二分金を出して渡す。 奚 好枉費了錢財。 藤 サア／＼若者此金

はやまわけだせ。【若】それでも。【藤】ナニサかまふ事はねへ。そつちへマア金をばしまつておいたがいゝ。【若】ハイ〳〵。【李】買着了利市。【藤】アレいつそ喜ぶはな、人をちやにしたせんきだ。【梅】ついぞねへ。【呉】崑崙奴在那裡。來吃酒。【藤】いかさま〳〵くろんぼうめを爰へ呼んで、ちと酒をのませてさわがせう。【青】なんぞ藝がござんすかへ。【呉】他是手藝極多。專做幇閑過日。【梅】何をしいすへ。【藤】かるわざがきつい物だよ。【若】是はついぞ見ませぬ。よんで參りませう。【禿】わつちがいつてきいせう。ト立て行。【梅】輕業ならむかふの舞臺でさせて。こゝから障子をあけて見なんし。【藤】それがよかろう。そこの三味せんをとつてよこしや。【新】アイ。【李】煎個燭心。再明亮此。【青】らうそくの心をきれとさ。【若】ハイこゝいらへ置ませう。【崑崙奴】餘外有什麼客人。若太拘禮。我要辭了。不敢去。【禿】アレサそつちではおざんせんよ。いつそ眞黑だから。どこに居さつしやるか。知れねへ。【崑】那里那里。黑地裏。是個難走。【禿】一所に來なんし。サアはいんなんし。【崑】有何事情。【李】來來喫一杯。【崑】感激不盡。【藤】ぐつと大きな物で。おをらせるがいゝ。【呉】儘着飲得。眞個大海量。【新】はやく輕業をさせて見なんし。【若】マア跡でさ。かさねてあがれ。ソレお酌。【李】異樣好看。【藤】你做輕捷。【崑】領旨。ト酒をかさねてのみ。立あがりて。舞臺へかゝる。藤内は三味せんをひく。皆〳〵けんぶつ。【呉】娘子們。這技最有趣。請看一看。【青】せんだんさん。見なんしとさ。【梅】アイ。【李】大手係得緊。【呉】有趣得了不得。【藤】衆位請喝采。【呉】【李】妙極〳〵。くろんぼうはいろ〳〵みことを仕廻て。【若】なるほど。おそれいつた物で御ごります。中〳〵日本の人などには出來ませぬ事で御ざります。【梅】わつちやア。あぶなくてろくに見いせんわな。【新】いつそおもしろかつたねへ。【崑】阿阿疲倦。【藤】多勞多勞。【禿】アレ見なんし。此人は鼻の下をいつそ撫でさつしやるよ。【藤】あれは今の輕業の高慢さ。日本ではあごの髭をなでるが。唐土では何ぞといふと。鼻の下のひげなでさ。【梅】けしからねへ。【李】再喫酒。【呉】滿灑。【崑】沒道理。【李】豪傑勉强。【若】せんたい。つよい酒で御ざります。【呉】使賭氣飲了。好個海量。【崑】此等歡喜事。難再有了。【新】アレきたねへ。此人は鼻くそをとつて肴にさつし

やるよ。〔皆〕ホヽヽヽ。〔藤〕あのさけをのんだら。又おどりをおどらせう。〔青〕どんな踊でござんすへ。藤 此比日本の踊をおぼへてへといふが。それよりはいつそこれが得手なかぼちや踊がよかろうとおもつて。ふしも手も其まゝにして。文句ばかりこつちの言葉に直して教て置たよ。〔梅〕見たいもんだね。〔藤〕おどらせて見せう。崑崙奴來做戯文。〔崑〕領旨。トまた立あがる。〔李〕什麼了。〔藤〕他是一味裡用心。學日本小曲。〔吳〕好了好了。くろんぼうは立あがりておどる。藤内は三味せんをひく。崑 へいきんのさまきの。そのきのさまは。じしんさまきの。そのきのさまよ。〔藤〕小曲差了。雪の柳の。その樹のさまは。如斯唱。崑 いきのさまきの。そのきのさまは。如此也。不差麼。

〔藤〕兀自差了。〔李〕大酩酊。舌頭也不肯轉。且罷休了。〔吳〕使得了。〔青〕モシありやァしやみこ踊といひすじやアおせへせんか。〔藤〕暹羅といふ國に。甘波邪しやむろなどゝいふ國が類してある。其國から出たおどりだから。かぼちや踊ともいふ。又しやむろ踊といふべきを。皆人がいひ誤まつてしやみこ踊といふのさ。〔新〕モシあの人の脊中のぼち〳〵白ひは。何でおざんすへ。藤 アリヤア今夜灸をすへるはづで。ごふんで点をおろして置たのさ。〔梅〕ほんにかへ。ばからしい。〔崑〕阿阿爛酔如泥。請免請免。ト足をなげ出す拍子ニ。銚子がころぶ。〔藤〕これはしたり。なんぞ拭く物を。〔若〕ハイ〳〵。〔李〕崑崙奴可惡。〔崑〕有罪有罪。請免請免。〔吳〕初始相會不得無禮。須要小心些。〔崑〕請恕〻〻。〔若〕サア〳〵雑巾。〔李〕不要拭。ト雑巾を引たくり。紙を出してふかせる。唐 有趣綿巾。藤 爲什麼。〔李〕要做盛烟袋。青 ヲヤあれを煙草入にしなんすとさ。梅 どふしてねへ。〔藤〕大方指ていつてぬはせるのだろう。崑 這个雛妓十分標致。忍耐不住。ト禿に後からだきつく。〔禿〕ヱヽモウ此人はいやらしい。よさつせへな。〔藤〕手めへにほれたぜ。〔禿〕すかねへ。〔崑〕吃驚了。扭轉身來。不要惱。不要惱。〔禿〕アレしつらつこい。脊中に鼠が居るはな。〔藤〕どれ出して見せや。〔禿〕ヲヽくすぐつてへ。まだ子でおざんす。〔梅〕モウ目があいたか。〔吳〕什麼了。〔李〕請一看。〔青〕ねづみの子で御ざんす。李 見せろとよ。禿 わつちやァ嫌。梅 お目にかけやな。〔禿〕アイ。新 それにげた。〔藤〕どつちだ。〔若〕たしか。こつち

ほうへ。〔崑〕鼠兒在這裡。ト鼠をつかまへ。そばへいり酒をつけて。くつてしまふ。〔新〕ヲヤ。〔哭〕休做沒良心的事。〔崑〕美味〳〵。〔新〕けしからねへ。此人はくわじつたよ。〔若〕これはとんだ事で御ざります。〔禿〕エ、モウにくい人だ。折角人がかわいがつて。飼つて置く物を。ト泣聲になる。〔藤〕なく事はねへ。今度おれがいゝのを持てきてやろうよ。〔李〕怖物事。動不動要癡呆。〔崑〕ゲエ〳〵〳〵。若これはどふかしたそうで御ざります。〔藤〕マア廊下へつれていくがいゝ。〔青〕脊中をさすらつせへな。若者かをたゝくと。鼠の首玉と鈴を吐キ出す。〔哭〕嘔吐。〔李〕是醒醒得緊。〔若〕くびたまと鈴を喉へひつかけたそうで御ざります。〔崑〕硬礫咬不碎。〔新〕わつちやァ胸がわるくなつた。

〔禿〕いゝきびだ。いつそ今ので死んでしまへばいゝ。〔藤〕あまり酒がすぎたから。鼠を食つたり。ふざけたりするから。モウいつそ寐かすがよかろう。〔若〕ホンニきついゑひよふだ。蔦いろになりました。サア〳〵つれて參りませう。〔哭〕崑崙奴去房裡罷。〔崑〕多承厚款。感謝不盡。列位安置。〔若〕サア〳〵一所に行かつせへ。ト手をとりてつれて行く。〔李〕崑崙奴。這廝跟跟蹌蹌的去了也。好笑。〔藤〕くろんぼうで大笑ひをした。モウ何時だか。ト藤ハ根付時計をみて。モウ九ツ半時だ。〔哭〕夜深了。〔李〕我也倦了些。〔哭〕角落頭房裡去。睡一覺也好。若者來り。〔若〕さて今ばんはいろ〳〵と面白い事をみました。ちと彼方へいらつしやりまし。〔藤〕よかろう〳〵。〔哭〕去了去了。〔若〕是子ども。

見通しへおつれ申しや。〔青〕なにさん。ついでにそのたばこぼんをあつちへ持て行なんし。〔新〕アイ。〔李〕那里那里。〔禿〕サア御出なんし。是より三人共床廻り。藤内は一人ふとんの上に寐ている所へ。新造來り。〔新〕藤さん。ちよつと耳を出しなんし。〔藤〕だれも居やァせず。なんだ言やな。〔新〕イ、エ子。まだやりて衆や何かゞおきてゐるから。おいらんは後に見あはせて來なんすとさ。そつとおめへさんエそういつてくれろといひなんした。〔藤〕ソリヤアそれでいゝから。ちよつと火を一ツ持て來てくりや。〔新〕火がねへとへ。アイついでに茶もくんできいせうか。〔藤〕ム、それも一ぱい。〔新〕汲んできいせう。ト立て行。李踊夫は奥の座敷にて。退屈になりしや。きどすを唱ふ聲聞へる。〽兀的昆蟲猶雙飛。鳳蝶上下不失偶。才貌相携俱有情。此所へ禿來り。

【禿】藤さん〳〵。あのね。おいらんの客人が。さつきから。ニヤンヅウニヤンヅウと言なんしたがね。またいま大きな聲をして。何かおつせへすが。何の事だかちよつと御出なんし。【藤】ム、そりやアおいらんを呼べといふ事だ。【禿】アレお聞なんし。何かいつそ大きな聲で。【藤】ドレ。へ蝶也亦何知菜有味。嗚呼俺不知趣他沒深情。【藤】ム、ありやア。退屈したから。きざすをうたふのだ。嫌な奴の。【禿】うつちやつて置てもいゝのかへ。【藤】ム、。【禿】おやすみなんし。ト出て行。新造來り。【新】サアおあんなんし。【藤】ありがたう〳〵。【新】モシそれもどうか唐音のやうだね。【藤】ナニ唐音ではカンキといふ。【新】モシとふぞわつちにも唐音をちつと教へてくんなんし。【藤】ずいぶん〳〵。【新】さつきしなんした猜は。あんまり違はねへやうだね。アレをマア教へてくんなんし。【藤】アレもむつかしいのさ。ダリだの。ガレンだのロンジだの。サイナンだのとつて。急にやァ覺へられめへ。【新】ナニほんとうのを教へてくんなんし。いつそね書付て。こんど持て來てくんなんし。【藤】持てきてやろう。其代りに手めへに無心がある。きいてくれるか。【新】なにをへ。【藤】おいらんに隱して。氣をやつてさせねへか。【新】アレわつちやアいや。【藤】いやな事はねへ。おれがあいかたは手めへだから。爰へ入て寐させねへけりやァならねへ。【新】アレサモウよしなんし。藤さん。しつぶかなァ引。おりから廊下にて。【梅】から哥さん〳〵。【新】アイ。【梅】爰へちよつときなんし。【新】アイ。ト立て行。屛風の外にて。兩人さゝやく。【新】アノ香爐のかへ。【梅】そつと引かへて。【新】アイ。ト新造は出て行。せんだんはあたりを見て。内へはいり。夜着をまくつてぐつとねる。【梅】ヲヤ此あつい夜に夜着をさかさに着なんし。何をそんなに腹を立なんして。挨拶もしなんせん。【藤】盗人たけ〴〵しい。腹をたつた譯は。手めへの胸にある事だ。【梅】ナゼニ。わつちが胸にどふも。【藤】ヲ、どふも言わけはあるめへ。【梅】ナゼエ。あるのさ。此中もいふ通り。ソレアノ客は画踏衣裳をねだろふといふ所だから。【藤】タキヤアガレ。画踏衣裳は。アノ髭むしやにさせるつもりだから。それで今夜狂言をかいてつり出した。是程手めへを思ふとは知らねへで。それにくつつゐて。【梅】よしなんし。それだによつて。あの客は何でもねへ事にあいそつかしをして。切てしめへやした。せんてへ、この比は。ぬしが氣があだになつたよつき合の。なんのといふは附たり。より介町に。おもしろい事でも出來たか

う。〔藤〕そんなら。寄合町へいけば。おれを長棹にして。つき出してしまをふといふのか。〔梅〕どふいへば。かういふと。ソリヤア。ぬしが邪心といふ物だ。〔藤〕邪心だか。おんりやうだか。女の心はしれねへ。〔梅〕（むなぐらを取ぐつと引よせ。）コレぬしは。〔藤〕氣が違つたそふさ。〔梅〕アイ氣が違つたのさ。よくつもつて見なんし。ぬしが客なら突出すの。長棹のといふ事もおせへせうけれ共。かうして苦勞氣兼をして。人の目顔をしのんで逢ふ中じやァおせへせんか。ハテ突出す氣なら。おむつさんといふおかさんの有をしりつゝ。かうして。〔藤〕かうしてどふした。〔梅〕待なんし。たれか來た。（ト夜着の外へ出る。から哥來る。）〔藤〕誰だ。〔新〕わつちでおざんす。〔梅〕そんならいゝに。出そんをした。〔藤〕其持てゐるのはなんだ。〔新〕おいらんが此せん香の匂ひをいやがりなんすから。下の仏だんの蘭花香を持ていつてそつとすりかへてきいした。〔梅〕唐人はモウ寐言でも言ていなんすか。〔新〕ナニ色〻の道具をかざつて。ふとんの上に待てゐなんした。（折から。りとう天郎下にて。）〔李〕白日地等到幾時。娘子〻〻。梅檀婦人那裡去。娘子〻〻。呉哥〻〻。（聞つけて來り。）〔呉〕有何貴幹。〔李〕梅檀那裡去。〔呉〕我也不知。〔李〕藤哥〻〻。（ト藤内が座敷へはいりにかゝる。あかりをふきけす。）〔皆〕ホイ。

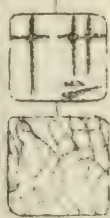
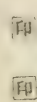
跋

九州郭中の五人に。變窮變知氣の二人を加へて。七人一座の間違ひだらけも。時にとつての滑稽ならん。其こつけいかうと。鳥がなく東の人のはらに合せて。嘘と實の合の宿。著〻羅はおきに支那もろこし。きいた風土の風俗にざつと小菊のはなをつまんで。珍ぷんかんの鍋の耳に。殘りし事を中は丸山。唯まろかれとおもひ机に向ひしも方〻に筆の誤あれば。御さげすみもあらんかと。眉おしみやら言譯やらちよつとしりへに。此事を鋸屑もいへばいふ。

唐土乾隆五十
日本天明五年　乙巳初春

唐来参和

唐土乾隆五十
日本天明五年　乙巳初春

唐来参和
印
印

狂言鶯蛙集　全二冊
ムスコヒヤ　全一冊
狂詩選諺解　全一冊
新義人合自筆鑑
味唐弥解　全一冊
新板　東海道狂歌人名所雙六　全一冊

耕書堂　江戸通油町　蔦屋重三郎　梓

表紙　ヨコ　三寸六分
　　　タテ　五寸二分

本文枠　ヨコ　二寸九分
　　　　タテ　四寸一分

令子洞房叙
京傳に水破の革の息子部屋あり是を
胴乱にせんとすれば放蕩の唱にかよひ
これを巾着にせんとすれば彼欠債に
音あひ近し其欠債に勞せんより寧
放蕩に遊ばむにはとすき〳〵しき心の
すさびに古し雨夜の品定を摸しかみ
の品しものきざみ有趣人の規矩につき
てとあればかゝりあふさきるさにあしと
いひよしとさだめよし原女郎衆のはりを
烝らみ遊子のあなを穿ぬればとみに一箇の嚢入と
なれり予嚢巾を探て作者のもと代を窺
に意味は仙袂の巾着よりもかるく論は
珊瑚樹の巾着よりも尊し所謂女郎買
の虎の巻と傾城の智恵嚢と也

令子洞房叙

京傳に水破の革の息子部屋あり。是を胴亂にせんとすれば。放蕩の唱にかよひ。これを巾着にせんとすれば。彼欠債に音あひ近し。其欠債に勞せんより。寧放蕩に遊ばむにはと。すき〳〵しき心のすさびに。古し雨夜の品定を摸し。かみの品しものきざみ。有趣人の規矩につきて。とあればかゝりあふさきるさに。あしといひよしとさだめ。よし原女郎衆のはりを烝らみ。遊子のあなを穿ぬれば。とみに一箇の嚢入となれり。予嚢巾を探て作者のもと代を窺に。意味は仙袂の巾着よりもかるく。論は珊瑚樹の巾着よりも尊し。所謂女郎買の虎の巻と。傾城の智恵嚢と也。

計都て十二篇壹兩二部を一巻として以て
新吹の楠廷尉が櫻井の巻に比して海
内の令子に授郭中の花娘に與よと進
む書肆何がしそれを奪へるがごとく遂に
ひつたくれんげの革細工をなすいんでん
や此世にうまれたる士農工商入込の遊
冶郎是を佩て廢ざる事助六が印籠の
ごとく然らば期月にして通と成女郎の
涙を緒〆とし四角な玉子を根つけとせ
ん豈贛々洒落本の胡麻胴亂此息子
部屋に逮んやと貴賤上下おしなめ
てみなかんせん縱のいとくちをしるすの

戀川すき町

底を叩て口訣を説疊を抑て口舌を辨ず通計都て十二篇壹兩二部を一巻とし以て新吹の楠廷尉が櫻井の巻に比して海内の令子に授郭中の花娘に與よと進む書肆何がしそれを奪へるがごとく遂にひつたくれんげの革細工をなすいんでんや此世にうまれたる士農工商入込の遊冶郎是を佩て廢ざる事助六が印籠のごとく然らば期月にして通と成女郎の涙を緒〆とし四角な玉子を根つけとせん豈贛々洒落本の胡麻胴亂此息子部屋に逮んやと貴賤上下おしなめてみなかんせん縱のいとくちをしるす

戀川すき町

自序

革の極品なるを。ムスコビヤといひ。女郎の革羽織なるを。ミジマイベヤと云。粧餝部屋の仇口に客の名たてば。息子隔室の無多口に。女郎の魂膽をはなす印傳ならぬ京傳が面と皮を製したる。虚言の皮を。又名號て。無粋語歴夜といへども素より遣手が前巾着の。名代をも勤ず。むなしく箱に久しきを頻にこうしよ堂の主人が。提物にあたふ

作者　京傳述

目録

馴染の弁

或人問曰。女郎買は貳十會位にすぐべからず。あまり心やすくなりては。内證の相談。何かのもめ合。諸わけ。手くだ。こんたん。りくつ。心をつかうばかりで。慰みはなし。しかればなじみふかゝらぬうちがあそびの花ならんか。答曰女郎買貳十會くらゐまではあそびのうわ水也。そのうわ水をながし。すいひしあげたるこんたん。諸わけ。むづかしく搦むが遊びなり。なんぞうわ水をよしといふ事あらん。又問女郎はせんたいなぐさみにかふ物なれば。おもしろく興になるこそあそびなれ。こんたん。諸わけ。心づかひがあそびとは。答曰されぱよ。其花をとるものあり。其實をとるもの有。女郎の虚實にかまはず。我ひとりのあそびに。新造をいくらもあけ。藝者をよび。牽頭持をつれ。どつとさわひでずつとかへる。是たのしみの花なり。かやうに花やかならずとも。座しきもしづかに遊び。たがひにかざる心なく。くめんごと。諸わけ。万事かたりあい。ともに樂しみ。ともにくろうする實情をたのしむ。是あそびの實なり。此ふたつは客の心にあるべき事なれども。其實をたのしむは客の心ばかりでゆかぬ事なればなりがたし。花をたのしむはどこでもなる事なれば仕やすし。同事ならば初會やうらよりなじみの所にてさわぐは。家内も心やすく。ひとしほおもしろかるべし。なじみなきをあそびの花といふ事非ならずや。又問床をこのむはやぼらしく。座敷の内があそびなりと云人有。いかゞ。答曰是もおなじ道理也。座敷は遊びの花。床はあそびの實なり。いづれあそびならざるはなし。又問しからば其實をとらんか。答曰花も實ともにとるにしかず。たとへば座敷のあそびは風袋也。床のあそびは正味なり。床にて我實情を見せ。女郎の誠を掌に握らば。座敷のあそびも求ずして面白かるべし。是正味多ければ。風袋おのづから重くなるがごとし。問人揖て去。

後朝の客五ツの見やう

もてたる客と。ふられたる客と。口舌したる客と。あやなされたる客と。一通にあそんだる客とは。歸のやうすにてしるゝなり。其見やうはもてたる客は。おとろへてねむそうな顔にて。物あんじ姿にて。粹らし。ふられたる客は。腹立そうな顔にてつかれもみへず。茶屋。船宿などのなんでもない事をしかりなどして。やぼらし。あやなされたる客は。何かうれしそうににこ〳〵して。つれか茶屋などにふつゞかなは

なしをしながら。そかためいて見ゆ。口舌したる客は。腹は立ずして。連か茶や船宿などゝ。しづかに理屈をいふ。一通にされたる客は。顔色常のごとくあまりねむそうもなく。いそひでかへる躰也。見わくる人はゆびさして評すべし。はづかしき事なり。もてゝも。ふられても。かけられても。口舌しても。平氣にて有心し。平氣にてゐれば。口舌しても。理屈能わかり。もてゝもはまらず。ふられても腹立ず。かけられてもわやなしにのらず。四ツの德あり。是身をまつたふする寶なり。

女郎五ツの見やう

凡。女郎の氣質は百人百色なれども。其大がいを見様あり。見世に居女郎を見るに。表に人の名をよべばきよろ〳〵し。立てかうしより覗く。又かうしへ人來。女郎の名をよべば。につこりとわらひうれしそうにうろたへて。立てひそかにはなしなどするは。ふかき色客有女郎としるべし。おもてにうた上るりの聲。あるいはこわいろ。尺八。ふへなどの音をきひて。見世に居ながら。そとをさしのぞき〳〵見るは。地色のあるなり。又むだ口をきいて。高わらひをし。だまつて居れば。口などをあき。鼻をいぢつたり。そこらをかいたり。身持の愼うすきやうに見へるは。とりしめて色をするにもあらず。色せぬかせぬにもたゝず。たいもなきむだ女郎なり。笑うにもすましたやうな顔をし。物を言にもつくり聲をし。なんでもない事を何からしくいひなし。流し目をし。むしやうにつんとするは。見へをこのみ。知つたふりをし。其くせ智惠のなひつくろいものゝ浮氣女郎なり。もとかこしらへもの故。きようこつに見へるものなり。あまり物もいわず。いふときは小聲にて。よそ見をすれば横目で見。笑うときもにつこりとした斗で聲をたてず。眼の内に色をふくみ。物事たいそうになく。しつぼりとをちついて見へるは。大躰ものにあらず。此女郎に實あらば。譏のいろにて末をもとぐべし。かけられたらば。身代分散におよぶは目のまへなり。おそるべし〳〵。

初會にもてたる様子

初會にて座しきへあがり。たばこぼん。燭臺。盃。すゞりぶたなど出て。茶や船宿などはなしして居るところへ女郎來り。客を見てすこしわらひの色をふくみ。座になをりてかたちをとゝのへ。酒をもおほくのます。客しいればこわそふにすこしわらひながら。半ぶんものみ。煙草などのむにも麁相なきやうに諸事をつゝしみ。うれしさうなてい

あり。笑う時は脇をむいてわらひ。口に手をあてなどする。客のいふ事。みなきにいりたる様子にてわらひ。はづかしそふなていありて。くらき方へ顔をむけ。そばへよりたけれども何とか思われんと。斟酌して見ゆるなり。是ほどなれば客の酒のむを。其やうにのみたまふななどゝとめる事あり。其時のあいさつ先の氣にあたらぬやうにすべし。彼是するうち。床おさまるなり。扨床になりてもはやく來。かぶろに行てねよといひ。そつとはな紙を出させ。ちよつと座敷を出。隣ざしきなどへ行。鏡にむかひ。おしろい。目にに[illegible]。心をつけて見てくる也。扨こわそうに床へ入。たばこをつけて出す。また外のきせるにて四五ふくものみ。客の枕をつけるを待。客[illegible]をとれば。へ[illegible]女郎もはな紙を取まくらにふて まこし客の方へよせう

つむく。ねるにあらず。顔ばかりうつむひてはづかしそふなり。是は上〻の出來なり。わが　ゑの　た　り　。つ　をしむ　は。あやなすのか知らねども。こつちの物と思ふべし。

床と座鋪の事

座敷にてよくて。床にてあしき事あり。是は外になじみある事などか。またはあしき人なりなどゝつげる者あれば。座敷にてはよくしたれども。其噂を聞て床にてふる事あり。ざしきにては悪しく見へても。床にてうつてかわりしやうに能事もあり。是は何ぞやすく見

たか。わるく氣どつたか、氣味がわるひかなれども。床になるまでに。あしからぬ樣子のしれたるなり。又何ぞ氣のもめる事があつて。座敷つきあしくとも。それがすみて。氣がすみたるゆへ、床にては能なる事もあり、又一座あれば。座しきにておしくとも。一座の女郎と相談のうへ。床にてよくする事もあり。生れついてあいそうわるき女郎にても。至極我氣にいれば。笑顔になるものなり、又女郎の氣によりて。うちつけて物いふもあり。たとへば。某がごときものは。御氣にいらぬはづなれども、せめて今一度御こし下されかしなどゝいふ事よろしきなり。しかれどもこふした女郎は。すへのほどたのみかたし。またあやなしかもしれず。能々心を付。あやなしならば。はやくきれて仕廻ふべし。先からつき出されたるは見ぐるし。

惡遊の事

此あそび。今は世上にあまねし。其行跡一樣ならずといへども。まづは日和下駄の類なり。此惡病をうくる女郎は。ながく丸裸といふ病となる事。女郎の難病也。うらか。三度めくらいに。夜見世へ來て其女郎を呼出し。なれ／＼しい咄などしかけ。とめられたそうなくちぶりをいふゆへ。義理にもあがれといわねばならず。其所へ付込。工面がないの。ふところが中の丁の。そこは御しんにある事などゝからんで見たり。どふぞするならあがらうなどゝ。厚かましく仕かけられ。ぜひにおよばず。そのばんは女郎の損となり。平の色に仕かけて。口先ではまらせ。のつ引ならぬ無心をいゝかけ。無理にこつちから色事にこぢ付て引たをすなど。情の。戀の。といふ沙汰にあらず。又茶やの男。船宿。又は友達なぞにたのみて。いひこんでもらい。むりに色客にこしらへてあがり。こすく斗立まはり。物いらずにあそび。たま／＼物まへなどに。わづかな事でも相談しかければ。さま／＼にからんで逃げたがり。ぜひやらねばならぬやうになると。色を物どりにするの。慾心女郎のと。難癖をつけて。それぎりでおさらば。其うへあの女郎をば。とんだやすくかつたなどゝ。拂物でも買たやうに。手柄そうに。我耻をふれあるく。人情をしらぬといへば人らしけれども。つらの皮あつき獸なり。中にはどふもくめんも出來ず。友達中をかりあつめて。紋所の黒つむぎの小袖。すりこ木程な袖口。繩のやうな縞なゝこの帶。すこしは綿もちらつくを内の方へ廻し。黄色でこそあれ。緋縮緬の襦袢。毛はなしとも黒天鵞絨の半えり。赤くなつて

も其むかしは黒ちりめんの頭巾。あたらしい物にははゞの廣ひ日和下駄。やう〳〵形は出來ても。嚢中をのづから錢なし。せひにをよはず襦絆と頭巾をぬぎ捨てもたらず。友達の母。近所の女房などをなげき。布子帯などをかり出し。やう〳〵こしらへて行など。はかなき遊びと言ながら。女郎をはぎさへせねば。哀なる方もあれども。かやうの身のうへの者に。女郎をたをさぬは稀なり。にくむべし。くわしく云たけれども。筆とるもうるさければ。あらましにてやめぬ。

思ひ切の事

或人問曰。四代めの高尾が詞に。此里へきたらぬものこそ粋なるべし。來るはみなやぼなりといひたるよし。當世の通者といわるゝ人の。新造かいてむだにしやれるは。よく此詞にかなへり。奥州がてうちんに。てれんいつわりなしと平假名にて書せしも。客におもひつかせん爲なるべし。さすれば。傾城にまことなきに極りたり。答曰けいせいの一代にあふ客。何千人といふ數の内。實にほれるは十人か。貳十人なり。其内にもうわ氣も有。男の方からだますもあり。緣のないもあり。眞實に一生の身の上をまかす所は。壹人にとゞまる。その外の何千人に。ぬしの所へいきいすよは。みなうそなり。爰にて傾城にまことなしといふ事。至極尤なり。おゝくの中にて。一人に誠あるを以て。けいせいに誠ありとはいひがたし。しかれ共。誠をつくす時に至つては。娘子ども。げいしやなどの色をするとちがひ。めつたに脇へはふれず。其代に實とおもつてだまされる事。またげいしやや。地女よりあやうし。是をいやがりて。女郎をこのまず。地女をうれしがる色師は。町人の商をきらいて。盗するを好と同じ事なり。もとでをそんをせんとあぶながり。只取の算用なり。かく云へばとて。女郎に誠ある事をよく知りても。安堵するはゆだんなり。我に實有女郎と思はゞなを〳〵心を付て。色の出來ぬやうに用心すべし。右も。左も。色の中なれば。我に實あれば。外へ心はうつさぬものといふ。たしかな證文もなし。年久しく馴染たるうへは。かくべつ。さもなきうち。しばらくも遠ざかれば。其内に了簡のかわる事有ものなり。又問女郎のほれるは。いかやうなる所へほれる物にや。答曰まづ初會にあがり。うらに行。三度めにも行。女郎もずいぶんよくつとめ。段々なじみがかさたるにしたがい。そばからきまつたの。ほれたのといわれ。もとがあまりいやでもない客ゆへ。つい本にほれたやう

な氣に成。段〻と馴染はかさなるわきからは何のかのといひ立られ。しばらくあわぬとよびたいやうな氣に成もい也。そこを久しくゆかねば。眞實ほれぬいたといふではなし。いつか其やうにもおもわぬうち。又外にそんな物が出來。もはや初手のはわすれてしまい。いやに成物ぞかし。いきな人じやの。男がよひの。すいたのとて。ほれるはうわ氣にて。中〳〵すへはとげず。見へがよいの。金があるのとて。ほれるは。慾心なり。ほれたにはあらず。この女郎は。年より。出家。あさぎうらなどをすく物なり。名の高ひ人じやの。通り者じやのとてほれるは。名聞なり。いづれも末頼みがたきほれやうなり。すべて。はやくほれるははやくさめるはじめなり。貨さかつて入るものは。またさかつて出る道理。じるべし。いづれ此方に實なくては。女郎にも實はないと思ふべし。又間しからば。此方よりほれた時にもてなし。實らしくするに粋なるへしや。答曰粋といふは。そふした物にあらず。女[illegible]いかゝす事を知りても。しらぬていにてすまし女郎に不實な事あれば。さつぱりときれ。わけの立た事は。何もいわずにをんくわにして。此方の實をもつて。女郎の實を得る。天然自然の徳あるを粋とはいふなり。女郎のあなをいひ。ほれもせぬにほれたふりをし。口さき面白く。女郎をはまらせるをすいとはいわず。女郎も同じ事にて。だますばかりが女郎にもあらす。もとより情を賣物にす

る身なれば。うそもいわねばならぬは知れた事ながら。うそもうそによるべきなり。すかぬと思ふ客にてもよくあいしらい。おもしろく遊ばするが商賣なれば。にくいと思ふてもかわいそふな身ぶりをし。そつちへ退けといひたい口から。こつちをむきなんしといひ。横面をくらわせたい手でだき付は尤なうそなり。此處はうそにてうそにあらず。勤の道をまもるのなり。かくつとめるも何の爲ぞ。世渡りの爲なれば物日を仕廻わせ。物まへのそうだんねだり言。客の身分により。相應〱のことは有うちなれども。あいたる時には弁にまかせてかけのめし。歸つた跡では。あいつが人の氣も知らずにこんな事をいふの。あんな事をきくとくやしいのと。悪くいひ。しかも地色の仕きせをする金迄をひつたくる。いかに勤のならいなればとて。あんまり惰いしかた。天道ゆるし給わんや。かやうなる不實の心なきものならば。たとへ闘場所端々の女郎なりとも。高尾薄雲が下に出べからず。いかなる荅儘の太夫なりとも。とうよくな實なし女郎は。うその皮はく穢多の女房となすべきなり。女郎をさへ其不實をにくむ。いわんや客の身として。ほれぬ女郎にほれたふりをして。勤を出させ無心をいゝ。口さきで一ぱいくわせしまいはたゝきばなしにするなどゝは。あんまり情ないやつなり。しかし客にどろぼうあれば。女郎に追剥あり。罪は五分〱と云べし。凡客の心得女郎にほれたらば。實をつくし。ほれずばはやくやめてほれた所へ行べし。いか程實らしくほれたふりをしたればとて。嘘は末にあらわれぬ事なし。ほれた共ほれぬとも。我生の通りにして。それ〱氣の合女郎にあふべし。我持まへで。そりの合ぬ女郎ならば。やめにして脇へ行に手間もいらず。女郎も我も。互に氣が合實があらば。勤の身なればとて。戀も情も有べし。是天の道理。荘子が所謂造物者のあたふるなり。女郎いかほどどんくくするとも。折〱心を付て見べし。實しや〱と思ふ内いつかほんとした目にあをふも知れず。何ぞ心にすまぬ事あらて。一通りりくつをいひ。女郎の方よりいゝわけなどして。譯とくしんしたらば。はやく機嫌をなをすべし。一旦腹立にてきれてしまふはそゝうなり。腹立たらばまづ心をしづめ。とつくりと考て。いよ〱心すまずは。其時にきれべしきれるからはいかやうな事ありとも。立かへるべからず。いかほどほれたりとも。女郎に實がなくはむだなり。其女郎ばかり。女郎にもあらず。氣のすむ所へなじむべし。しかし。きれ怨を

おくるは大事なり。よく考へ了簡きはめたうへにてやるべし。きれみやるからは。いかやうな事にても。ふりむきもせぬが思ひ切の第一なり。きれみやつたら。あやまるであらうと思ひの外。女郎はあやまりもせず。行たくてもしほがなし。をしい事をした。とくやしがる遊人の鼻毛の寸尺。いまだ知らず。

女郎の虚實を知る事

女郎の虚實をしらんとならば。まづ其所帯をしるべし。座敷不相應に夜具あしきか。禿見ぐるしきか。或は年たけたるか。衣裳とゝのはざるか。又はうわ氣に見ゆるか。地色のあるやうすか。ふかひ客があるか。此るいはあやなす事多し。うそか誠かを知るは。まづにてあいたる後。はやく　を取はうそなり。しかし。若取はづしたる時は。客の心をかねて手廻しをする事も有。是は女郎の氣質による也。又あつて仕廻うと。おふあついなどゝて。うしろをむき。あるいはぢきに煙草をのみ。又はさつそく小用などに行はうそなり。ぢき立もせず。はづかしそふなるは實なり。小用に行て。おそく來るはうそなり。横に行ておそき事も有。心付べし。口にまかせてほれたといふは皆うそ也。實にあふ女郎は。ことばに花はさかせねども。此方に思はぬ事にも心付。しせんとふびんの情あらはれ。さま〴〵の心遣ひして。かへしたる跡にては物をおとしたやうに。うつかりとなり。昼見世をわすれて。俄病などを

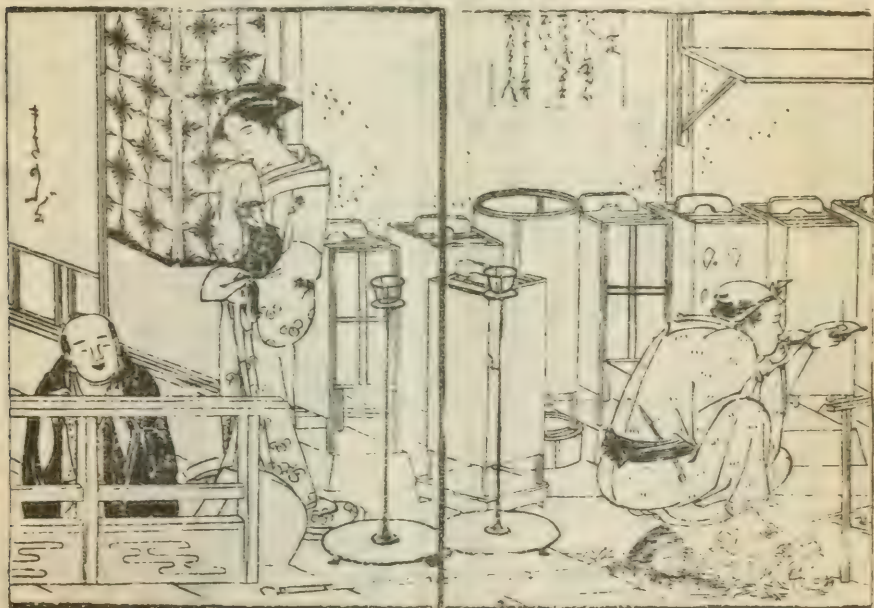
おこし。やりてにうたがはれん事をおそれて。いたくもないあたまに鉢巻をし。翌日迄の氣あつかいもぬしゆへなればと。苦勞はかへつてたのしみとし。傍輩にもしのびて。跡や先に成たる文をかいて。半切の一巻もつかひ。かへす／＼と書てもたらいで。おつて書をかき。それでもたらぬゆへ。書添をする。あけて見れば。みなをなじ事なり。きのふの嬉しさ。宵からのくたびれ。心はもだ／＼。いひたい事はやま／＼。人めはつゝむ。氣はてん／＼するゆへ。かんじんの事は落して。やくにもたゝぬ同じ事をいくらも書くものなり。是は實なり。又わが座敷へ女郎多くあつまり。てん／＼の色客のはなしをするはよし。一通のはなし斗して居るはよいにもあらず。これにはいかふわけあり。又夜見世の出ばなに格子よりそつとのぞき。見世におらば。つれに我名をよばせて見べし。其時急に立て。さはぎまはるは實なり。少しも急ぐけしきなく。ふせう／＼に立て。あたりを見るは。いかほど座敷や床にてよきとても。にせものなり。つれもなくば。自身格子より其女郎の名をよびて見べし。實なれば。につこりとしうれしそふに。とる物も取あへず立て内へ入り。ぞうりも片あわせにはいて。客そとにをれば早ふかけ出。御無事かいかゞと問。客をば我座敷へいれ。其身は外の座敷へ行て。鏡を出し。白粉をぬるやら。ふくやら。べにを付る。ゑもんをなをす。氣違ひのやうになり。人のいふ事も耳にいらず。とんだ挨拶などして。いそがしそふに座敷へ來り。たばこ入も。鼻紙もわすれ。今思ひ出したやうに。禿をよび。見せより取よせ。すわりはすわつたが。なぜか人が居ては。はなしがないやうにして居る。皆實なり。心をとめてあいとぐべし。さりながら。女郎の氣により。是程にしても。又外へうつるやうなうわ氣もあり。あてにならぬは此里ぞかし。心こゝにあらざれば。くらきにまよふ戀の闇。これで闇ならしやうとがない。

つとめの事

ふかくなじみたる女郎に。ふぐ汁。葱。あさつきなどすゝむれば。女郎も心よくくふを。客うれしそふにうち笑ひ。我にへだてる心なきゆへと。うちとけて。二人が床のかねごとを。友だちなどにはなしてよろこぶなどこけらし。此女郎は何の氣もなく。只はしたなくくいたるおかし。又かねごなど相異して。さもなき方へ實をつくし。つい其方へ二世かけたるを。はらたちいかる時のありさま。ばからし。かんざしに客の紋を付たるを何本もこしらへ置。

客によりて敎所ちがうも。是皆世渡りなれば。もつともな事なり。しかしすゞ女郎のことばに。客のはなしを聞て。そりやほんにかへといふ程つまらぬ挨拶はなし。いつでも客はうそをつく物と心得たるもおかし。つまる所。女房にして見ぬうちは。たがいにいつ迄ろんじても。疑ははれまじ。又女房にする氣もなく。とうきい思ひにかゝ客は。しをさり。いゝ加減に疑つておくべし

色の目

あわでやみにしうさを思ひ。あだなるちぎりをかこち。夜をひとりあかし。とをき雲井を思ひやり。あさぢが宿にむかしをしのぶこそ。色このむとはいわめ。とあれど。逢はでやみにし心ほどうき事はあらじ。春の夜の夢ばかりなるもながくおぼへ。おなじ里に近くすまひても。しばしたよりも聞かざれば。とをきくもゐの心地こそせめ。あいおやくの道。其根ふかく。源とをし。六塵の樂欲多しといへども。皆厭離しつべし。その中にたゞかの迷のひとつこそ。座敷持も。部屋持も。廻り女郎も。新造もかわる事なし。はじめはたがいに忍んでの事なれば。內證のしゆび。傍輩の手まへ迄つくろいしが。色は分別の外といふ事が。身にしみ〳〵と聞おぼへ。孝行のために身をうりし親の事も。世話にして貰ふてかたじけないと思ふたなじみの客も。恥も。人めも。きこへも。おもわれず。あんまり

よい男とも思はなんだが。なぜこんな心になつたやらとおもひながらも。思ひきられず。忘れんと思へばおもふほど。おもひ出し。どふも思ひなをされぬものなり。そこを思ひなをすは。元があんまりほれぬのなるべし。思ひ切たる後は。ふたゝびいろをせぬこそ。誠に女郎一匹なり。はじめは深くおもひても。つい遠ざかれば。さるものは日ゝにうとく。昔の貞女は今のたわけと思ふが當世。女郎の十人並の心なり。心やすひからおこり。つい手がさわり。足が障り。はじめきたないやうに思ひし顔も。見れば見るほど。すいたやうで。其男のわるひくせ迄よく思はれ。無心いわるれば。結句うれしいやうな氣に成り。くめんして。裸になるをしらぬは。傾城の氣しやう。それをそまつにする客は。ばちがあたるべし。又客をわるひと思ひて見れば。見るほどいやに成物なれども。色といふ名がつけば。はじめいやと思ふても。色といふ名にひかされて。つい嫌でもなくなるものなり。女郎の口さきでほれて。心で舌を出して居るをば知らず。實になつてかよふ客を。すこしはむごいともおもひそうな物なり。それを思はぬ女郎は。とても行末よかるまじ。さりながら。兩親は下に居る。二階て出合。屋根舟で色をし。親をば納へ出して。竈の番をさせ。飯焚同然におもひ。しかり廻して。不孝するとも思はぬ床藝者。踊子などからくらぶれば。傾城ほど。まこと有ものはあらじ。と思へども。色をも。香をも。しる人ぞ知るなるべし。

愼の事

客の愼べき事。名代とりてはら立はむりなり。女郎の仕方によるべし。ちらひかけたる女郎をやらぬはわるし。きれて又。つれか。茶や。船宿などをたのみ。手をいれて立かへるまじき事。同じ家の女郎と色ぐるいせまじきなり。我氣にぬけめがなくとも。顔へいだすべからず。かほはやぼらしく見せておくべし。我あいかたの女郎とちわするはやぼらし。新造。やりて。廻方。禿などを。詞きたなくいふはやすし。ゑもんをつくろい。帯をなをし。あせ手拭などをゑりにまくはいやみなり。青黛をぬり。をしろいをつけ。つくり聲して物いふは。ばかゝゝし。髮。さかやきはせずとも。身に垢を付べからず。髭爪のびたるはきたなし。身のうへ。身代。諸藝。衣類。男ぶり。自慢顔なるはむねわるし。ぢんちやうなるは初心らし。心にもなき末のやくそくすべからず。外の座敷のうた上るり。三味線などそしるべからず。よくねたる女郎

をおこすべからず。初會にふられては ら立べからず。女郎のたんすの中などあけて見まじきなり。名代の女郎に手を出す事なかれ。横に來たる女郎。久しくとめておくは心なし。客をせくは心せまし。金銀の約束まちがはぬやうにすべし。はじめより我身のうへをあかす事。當世の女郎買多くする事なり。よろしからず。女郎のおさな名はやくとふべからず。長居つゞけすべからず。
女郎の愼べき事。第一地色すべからず。げいしや。たいこもち。茶屋の男などゝあまり心やすくすべからず。疑うけるたねなり。色になづみ。客をそまつにすべからず。色にかまけ氣のもめるにまかせ。髮かたちとりみだす事たしなむべし。腹の立時。すかぬ客。科もなひ新造。禿などにあたるべからず。はしたなし。禿の行義詞いやしからぬやうに仕付べし。我新造の人がら。禿の行義にて。姉女郎の身もちまでしるゝ物なり。髮を切。起請をかき。爪ははなすとも。ゆびを切。ほり物はせまじき事。一生の疵なり。ほり物はたとへやきけしたりとも。あとはきへがたし。わかいものゝこ贔屓すべからず。むり酒。ひや酒。きまゝ酒。第一身の毒なり。茶碗ざけのむ事。客の氣によりてあいそうのつきる事もあるべし。はづかしからずとも。はづかしきていをするは。女の情なり。大口などきくはさがなし。すそ高くまくりて歩くべからず。客のまへにて。耳こすりすべからず。女郎の氣によりて。なじみもなき客の見る所にて。外の客へやるふみをかく事あり。よからぬ事なり。客の紙入。ことわりなしにあける事愼べし。
女郎の用心すべき事。初會よりふるくほれたやうな事をいふ客。はじめより我身の上あしきといふ客。初會にくらうそうな顏色。又は至極色あしき客。女郎をはやく寐入らせたがる客。口先の至極おもしろき客。女郎のお所帶のあしきか。よきかを知りたがる客。
客の用心すべき事。口へ出してほれたような事をいふ女郎。宵から女郎のそわ／＼する夜。度ゝ座敷をあける女郎。内のこしもと。あるひは茶やの女。若ひものなどゝ耳こすりする女郎。裏茶屋と心やすひ女郎。男げいしやをよばせたがる女郎。小用に行ておそく來る女郎。はものを手ちかく置女郎。

女郎の身のうへ

花は櫻木。人は武士。なぜけいせいにきらわるゝ。其行義たゞしきを。このまぬ情を云たる付合の句なり。女郎の身うへほどあわれにおかしき物はあらじ。朝夕のめしに物のいらぬばかり。その外は世帶もちにかわらず。それさ

へ。あぶらげ。なすびづけ。そば切なんど。座敷持。部屋持も。襖障子のはりかへ。疊がへ。部屋座敷の代の算用迄。いづれか身のあぶらならざるはなし。もとより手道具。調度はいふに及ばず。油。元結。紅。白粉。櫛。笄も。さすがまがいはにげなし。折／＼時／＼の小袖も。同じものきては。中の町いぶせく。夜見世もつらきものから。禿つかへば子もちのごとく。鼻紙。煙草は。いもと女郎のまで。重荷にこづけとやいわん。まわり女郎や。新造に。いかい事。部屋ばいりさるゝも。來るなとはいわれず。心よく呼ば。りくつのきつうちがう事なり。帯や。上着をかりらるゝも。ならぬとさすがいひにくし。大事にでも着ればよいに。と小言いふさへ小聲なり。提灯。長柄のはりかへ。こま下駄。上草履まで。よくはやくわるくなるもうるさし。茶すみ。らうそくのかんりやくのならぬも是非なきならい。茶屋のつけ金。船宿。わかい者。やりて。お針。かぶろ。かみゆひまで。折にふれての心づけ。衣の奉加はまだしも。上るり太夫の會のすり物も。つらやくにもらうはうし。とおもひきや。親方の祝ひ事。あるひは法事のそなへ物も。まさかすてゝもおかれず。女衒がゆすりは。しめ木にかけらるゝ思ひこそせめ。ことに親里のかなしき便。きけば一入つらさもまさり。むかふの人とよぶこどり。禿がつかひのやりくりも。あわたゞし。やう／＼客が一人ついたと思へば。うろたへたら。はかれそうなと。油断せぬもくるしきぞかし。わけて紋日のうきかづ。湯豆腐の胸にこたへる晦日／＼のかづかさなりて。大つもごりの提灯は。むねをこがすほのほとや見ん。たのみし客のくめんさへ。まちがいの灸見ては。流に楫をたへたるおもひなるべし。いかにぞや。胸つぶるゝ身のうへかな。と未練がおこると。はまるが一時。人間萬事中用にしかず。

徻幸

客衆肝面鏡（きやくしゆきもかゞみ）　全一冊

山東京傳作
北尾政演画

出来

耕書堂
白鳳堂
合板

天明五年乙巳正月

通油町

耕書堂　蔦屋重三郎板

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸

通言總籬叙

彦國佳言を吐こと。鋸木屑の如く霏々として絶ず。こゝに京傳青樓の通言を酸痟に呑こんで。頓に茶表紙の一冊を吐。是鉄拐が仙術にあらず。放下師の小刀にあらず。閲之象

通言總籬叙

彦國佳言を吐こと。鋸木屑の如く霏々として絶ず。こゝに京傳青樓の通言を酸痟に呑こんで。頓に茶表紙の一冊を吐く。是鉄拐が仙術にあらず。放下師の小刀にあらず。閲之象恍中に聴之言文面にとゞまる。

牒中に顯れ。聽之言文面にとゞまる。闇に引出す牛臺の蹕廷り。中街に髀る駒下踏の音耳にちかし。實にも籬といへば。朝顔の泣腫たる清楊に昨夜の疳積を殘し。二十七明の長を慷慨ては。花の蔫を

愁ず。逢夜の短を悵望ては穠久しき花を羨。且々の笑顔晩々の泣貌も。色無垢の衣領にさし入たる容に。鼓子花の閃屍も壺盧の色白なるも纏ひ咲。總籬は善化街に通じて然も花實相對し眞に腸を斷。

晩る花泣白も。色無垢衣領にさし入る容に。鼓子花乃閃屍も壺盧花色白なるし纏ひ咲。總籬ハ善き衢に通して然も花實相對し眞に腸を斷。我か籬花下に居三澁花一を折て。[illegible]特の美を知るに至らすといへども。二と

我かの籬の下に店
三絃の一チを打て。
番新の萬を知るに
至ずといへども。
二と三ンの緒を
筆。猿人郷と共に
京傳を愛の一曲
を唱て。糸巻をチト
ひねること爾
文きやう自書
印　印

三絃緒を筆。猿人郷と共に京傳を愛の一曲を唱て。糸巻をチトひねること爾
文きやう自書

自序

我嘗いへること有。青樓は我爲の雪隱なりと。夫如何なれば。持たが病の腹痛に脳金屎をひらんが爲。屁をぼつ立て。此郷に通ふこと繁。故也。若貧客我屎を喰ば。驀黄金の蛆蜋とならん。一日例の長屎に退屈の餘り。此妄作書をなしてかた屎の竪をして。びり屎のずるきに和らげ。世に其屎の撒様を傳ふ。通客といふとも我膀を覗ずして。何ぞ屁の穴の廣きことをしらん。吁屎が惘にあらずや。于時天明七年丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ

京ばしの傳述 ㊞

其屎の撒様を傳ふ。通客といふとも我膀を覗ずして。何ぞ屁の穴の廣きことをしらん。吁屎が惘尓にあらずや。于時天明七年丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ

京ばしの傳述

通言總籬凡例

○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス蓋總籬ト題セルハ流行ニ後タル古句ノ雜无ヲ以テ也

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春江戸生艶氣樺焼ト云冊子ヲ著シテヨリ。已恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志菴共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也

○妹妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記ガ故ニ。訛ヲ不改假名違ヲ正ザルハ。其音ノ訛ヲ知シメンガ為ナリ

樓上奇談　吉原楊枝　京傳作　全一冊　來春出版

通言總籬凡例

○此書ハ論語ニ所謂。損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總籬ト題セルハ。流行ニ後タル古句ノ。雜无ヲ以ッテ也

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春江戸生艶氣樺焼ト云。冊子ヲ著シテヨリ。已恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以ッテ。此書ニ假テ名トス。氣之介。志菴共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也

○妹妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記ガ故ニ。訛ヲ不改。假名違ヲ正ザルハ。其音ノ訛ヲ知シメンガ為ナリ

樓上奇談　吉原楊枝　京傳作　全一冊　來春出版

金の魚虎をにらんで。水道の水を。産湯に潜て。御膝元に生れ出ては。拝搗の米を喰て。乳母日傘にて長。金銀の細螺はじきに。陸奥山も卑とし。吉原本田の髪筆の間に。安房上總も近しとす。隅水の鮊も中落を喰ず。本町の角屋敷をなげて大門を打は。人の心の花にぞありける。江戸ッ子の根生骨。萬事に渡る日本ばしの眞中から。ふりさけみれば神風や。伊勢町の新道に奉公人口入所といふ。簡板のすぢむこふ。いつでも黒格子に。らんのはち植の出してあるは。芝蘭の友を旦那と稱す。江戸がみの。北里喜之介が住居。鮑魚のいちぐらに同じ門口。くだすだれの外に。仇氣屋のひとりむすこ　ゑん次郎

黄の無地八丈に。けんぼうにてとめがたの小紋をおいた上着。三ツついに鶴かんとうの下着。こんちりめんのらせんしぼりのじゆばん。下着はみな黒なゝこのうらゑり。うらは花色ちりめんのすそ廻し。胴うらは白羽二重。身はゞひろき仕立。あはせはおりくろの無地八丈。まへ下りなおき仕立。五丁ひもゝあやまるとかいつて。黒のひらうちのちょんがけ。帯はおなん戸茶どんすの小もよう。頭巾をゑりまきにして。中の町ぞうり。八わたぐろのくつたび。花かいらぎのわきざし。かみはよし原ほんだ。すは町のおやじがぬいたひたい。二日めのさかやき。　おしやうさきへはいらつせへ。　ゑん二郎かたへ出いりのたいこいしや

【わるゐしあん】　くろちりめんの小袖。おなんど茶なゝこのはおり。酒さびにてはないさきあかく。近眼なり。あさがほのあふぎにて。くだすだれかたむけ。　苦いぼう。お宿か。ゑんさんお來さしつたよ。トうちへはいりみれば。あがりはなに女ばうのさしづをうけながら。あをちやのはけた布子に。もん所のついているきれで。はんゑりをかけたやつをきた。小女。しもやけだらけな手で。たゝきつちのながしの上で。狗に湯をあびせている。【小女】こうしているもんだよ。ぢつとしていや。アレごろうじまし。いつそうれしがります。女房【おちせ】つやなしうへだ。あぶらじみた小そでに。くろなゝこのはゞのひろいはんゑり。こびちやなゝこの帯。わきのほうへまわし。まへだれのかわりに。さらさのふろしきをおびへはさみ。かみはいなぎむすび。おはぐろをおとして白歯。これはばんに。おはぐろを。つけやうといふ下地也。まだ左衛門というふ字のつかぬかゝあ。此女房もとは松ばやのきるおいらんのせわしんぞうなりしが。ねんあけの後。かねて久しいゝろきやくにて。喜之介が女ぼうになりし也。かみの毛のうすい所と。みゝのわきのまくらだこにて。里はれず。まだ里の言葉がやまず。　そのまんま二かいの日あたりへつれていつてほさせや。　アヤ志庵さん。よくおいでなんしたね　ゑんさんかへ。此間はお早さでござりやした。うちでござりやすは　ト仕かけた仕事をかたよせる。【ゑん】こゝのうちのながしは。松ばやの湯どのといふもんだの【しあん】本町の棚したちおりやす　喜之助は中じきりのはしらによりかゝつていて。さみせんをしのびごまでひいている。なりはつむぎじまのそで口のちときた。うらゑりの小そで。まへぎさなだの。下タじめを帯にしている。三味せんを下に置。【喜之介】これはおそろいなすつて。さあこちらへ。【ゑん】でへぶ。ねむそふなかほの。【しあん】客をにがした新造

といふかほだせ。丁子屋だと帳場でしかられたといふかほだ。喜のゆふべはつまさんの茶ばんで。升屋へめへりやした。けさ八ッにけへりやして。今をきやした。〔ゑん〕つまさんはやつぱり。深川のせかいかの。〔しあん〕おみなもごふてきなやつだよ。このごろも。どこのか番頭にかゝへを仕て。もらつたそふだ。深川にて。かゝへをしてもろふは。吉原でしんぞうを出すに。ひとしきことなり。〔喜の〕此間も御供で尾多喜やの。およふ。五介。鶴太夫。長二。むんす。仲吉。なぞといふ。うぞうむぞうを引つれて。むこふじまがござりやした。〔ゑん〕ときやうさんや。ぶんきやうさんと。ちがつて青ろうへはとんとござらねへの。はいかいと義太夫はきついもんだそうだの。トいゝながらこしから。ゑち川屋が仕立の。あんぺらの。内ぬひ。りうさのねづけの。ついたさげのたばこ入からきせるを出し。すい付る。女房はせんとくの火ばちにかゝつている。ひろしまやくわんの茶をついで両人へ出す。喜の介はよりかゝつている。たはらや宗理がかいた。きくのはん戸だなから。豆のはいつたこんぺいとうをいだし。〔喜の〕これでもあがりやし。トゑん二郎がまへゝをく。〔しあん〕ゑんさんが酒をのまつしやらねへは。玉にきずだよ。〔喜の〕めいよう。今の通は下戸さ。トうれしがらせる。しあんさんにやあ。いゝものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から。隅田川をもらつた。おちせかんをさせや。しかしさかなが何も。あんめへす。〔しあん〕かん見まいのこぶ巻はなしか。あの鍋のはなんだ。〔ゑん〕よくげひをいふやつだ。〔おちせ〕おいしいものではなしさ。けさのおつけでござりやすは。〔しあん〕ずつと立て。なべのふたをあけ。おきやあがれ。とうふ汁がかじけている。きつい松葉屋の晦日どうふだ。こいつァ。冷くちやいかぬや

つだ。〔喜の〕おうたがひは。はれやし
たか。〔しあん〕うなぎをとりにやりは。
〔ゑん〕どうだらうといふ事か。もふい
ちめるの。ト金唐革のきへさげから。なんりやうを一片ほうりいだす。〔喜の〕
青か。白か。〔しあん〕やつぱり。すぢ
を。長がやぎの事さ。あを。白。すじ。みならなぎの名なり。
うなぎくひのつら言也。女ぼうは小女にいゝつけて。ほりへてうへとりにやる。〔おちせ〕
早くよ。〔喜の〕ときに。ゑんさん。京
町の新造けへの色事も。見だしになつ
たじやあござりやせんか。〔ゑん〕それ
でふさいでいるのさ。二かいのうち
に。こゝのわりひ女郎があるからよ。ト住よし屋がはつた書きんとやきがねの。ぬのめぞうがんの。のべの煙管でむねをたゝいて見せる。
〔しあん〕せんてへ万ぎくにしよさをつ
けて。とつしが相手にするから。はい
らねへわな。トちやかすやうに。うれしがらせる。〔ゑん〕け
さもおわりやの男が文を持てきたが。
けいせいも内せうとたて引になつて。
引込でいるそうよ。何かあはれなくさ
ぶえ入のうしろでよまうといふ。ふみ
だつけ。トふたへづるの雨口の引かけのかみ入レから。やけばのゑづをみるやうにみ
よしへ紅ずりの半切へ書た。文をほうり出す。喜
の介はとつてひらき。として書た所からさきを
よんでみる。何かいろ／＼なてんとりを書。しよ
せん中の丁でのあい引もきをつけるだろうし。わ
たくしもたて引だから。江戸丁のかたをつけて。い
つそはれてきてくれろと云ぶんてい。末にぜひ／＼
といふ事が十斗かいてある。じつは番新とのなれ
合で。ゑん次郎をいろじかけでよぶ狂言。此ごろ
はやる手也と。さとつていれば。きのす
けは。ふとい女郎とおもひよんでしまひ。〔喜の〕
出戀のすへせん。何かありがてへ何
ね。あの女郎はたしかに半殺しに仕て
置なさると。仇をしやすにへ。〔ゑん〕や
りてがいふにやあ。はれてお出なさる
とも。二かいを御遠慮なさるともと。か
わ羽をりのひもをみるよふに。兩方へ
くゞらせていふから。どふもならねへ。
こふなつてみれば不便だよ。きついと
をきりかけもしめへから。江戸町のか
たを付て。いつそ表むいていつてやら
うかとも思ふよ。〔喜の〕そふなされば。
きついくどくさ。〔しあん〕戀つれてむま
い所。ア、いろおとこには何がなる。
トそはにある三味せんをとつて。哥〽水無月も。
爪のさきでめりやすをひく。
流れはたへぬ浮世のきしに。夜舟こぐ
てふふり袖の。かほにまがきのあとつ
くほどに。はでなうきなの手習も。く
さめ／＼のやるせなく。〔おちせ〕モシそ
のめりやすが此ころ弘めのあつたすが
ほとやらかへ。そのあとはどふだへ。
〔しあん〕泰琳がみやうに節をつけたよ。
哥〽逢みいさきめの口べにも。ほかへうつ
さぬ心とは。神／＼さんもどこやらも。
とふにせうちであろけれど。合方ほれ
た證據をいつみしよと。思やかたきし
わすられぬ。わすられぬ身はおもひ
だしもせぬほどに。思ふているぞへわ
しやほんに。さつしてくだんせわしが
名に。おのじを付ていつかさて。つくろ
ひのなき夏のふじ。〔喜の〕京傳がいつ
ばいに。うがつた文句だ。〔ゑん〕かな
やの白妙が追善のめりやすは何とか

いつたつけの。〔しあん〕それはなつ衣さ。〔おちせ〕花ぐもりは。四代目の瀬川さんの。追善だそうだねへ。〔ゑん〕まへの瀬川はどふしたの。〔喜の〕かんのんの地内にいやしたが。かこわれたそふでござりやす。〔おちせ〕玉の井さんは。やつぱり仲町にいるかね。あの子もふしやわせだねへ。〔しあん〕そふだそうさ。ちめへだそうだから。相應な所をみたてに出て居るのだろう。このぢう。いくよしのおいさに。言傳をして。よこしたつけ。〔おちせ〕せんてへ。うわきから。おこつた事さ。〔しあん〕おめへのやうに。喜のさんに情をつくした人も。あるにノウ。〔おちせ〕ヲャばからしい。〔しあん〕よしはら以來ばからしいを。ひさしぶりできいたわへ。トわらふ。女房は。はごいたの茶ほうじで。志庵をしたゝかたゝく。此うち。ゑん二郎は京町のいろ事のうぬぼればなし。喜の介は。ウヽありがてへ。ウヽそうさと。いゝかげんに挨拶している所へ。下女はうなぎをかつてくる。女房はかんをする。〔喜の〕御心安ひから。そのまんまだしや。〔おちせ〕ヲャそれでも。〔ゑん〕いゝわな〳〵。トいふゆへ。はかまのないちろりがまゝいだす。〔しあん〕こいつァ着ながしのちろりだの。しやれたもんだ。此あいだ。酒になり。うなぎもあらかたたいらげてしまふ。〔喜の〕ホンニ住よし町の川治から。茶入を持てきておきやした。ごろうじやし。ト戸棚から。茶入を二ッだしてみせる。土ろ。糸ぎり。くすりのかゝりあんばいをみて。〔ゑん〕こいつあ。京がまだはへ。新兵衛か。万右衛門だらう。金一枚くらいかの。こつちらはいつかふなものだ。とんだねき物だ。此ぢう。数寄屋川岸の伏甚から瀬との玉川と。瀧波を見せによこしたが。尤遠州の書付があつたが。四十兩だいだ目がでるの。袋は白地の小ぼたん。一つは權太夫だつけ。どれもはくさきはよかつた。〔しあん〕此間橋場で江月のよこ一行をみやした。一片の雲自西自東といふ語さ。ひやうぐもようござりやした。天地はやつぱりふとじけだが。風帶一文字はゑんらくあんさ。〔ゑん〕それにゆづつてくれめへかの。〔しあん〕はなしやすめへよ。喜の角町の惣六がかうらいの御所丸きんかいをもつていやしたつけ。品川の万千がもつている松花堂のほていはとんだ出來のいゝものさ。萬千といへば。モシまだおめへさんにはなさねへが。柳郊さんが村田屋で大いろごとさ。何とかいふ女郎でござりやした。此比は村田屋の部屋は扇屋といふもので。萬千もおつまもうたをよみやす。〔ゑん〕あそこのの哥といふ女郎をおれがかつたよ。新宿からこした橋本は。又あつちへかへつたそふだの。おいろといふいゝ女郎があつたつけ。妙國寺の仁王にてふちんがあがつていたつけ。〔喜の〕たゞあさのけしきばかりの所だよ。問屋ばで馬のいなゝくには。あやまるて。〔ゑん〕大木戸の石がきに。せきだの金のはさ

んであるのは。なんだの。〔しあん〕あれは何ンのか願をかけるのさ。〔ゑん〕おいらは。あの土地におひては不通だよ。ちつと旅もしてみやうす。とうじにいつた時。賀達が所へ。いつたまゝだ。〔喜の〕御ぞんじなくつてもな所さ。〔しあん〕しかし。夷狄だもきみありだよ。吉原ならつけとゞけの外をやろうといふ所へ。臺の物をおくらやす。〔喜の〕いやもふ臺の物がきちやあおゝさわぎさ。こわがるものはお鷹匠の御留。いやがるものは。五ッかばりに正めんをはるい。にぎやかなのは夷講さ。みこしをこしらへて。二階中をかづく内もあり。めしたき男をゑびすにこしらへて。はやしたてゝありく内もありやす。ぜんてへ。しろうと芝居のはやる所さ。〔おちせ〕モシまへかたは松ばやでも度ゝ狂言がござりやしたねへ。〔しあん〕丸ゑびやなぞにもよくあつたよ。〔おちせ〕ぼくがさんが工藤で。玉屋の山三さんが五郎で。大門の四郎兵衛さんがすけ成で。おかしい事がござりやしたつけ。〔喜の〕狂言といへば。宗十郎松が六けんのおさくをされて。ふる石のとよくらへこつて行くそうさ。おかしいじやあねへかチエ。〔ゑん〕あいつが。中洲でめつかちの地ごくをかつた時ほど。をかしい事はなかつた。〔おちせ〕モシ大分きなつくさいよ。さんや。そこじやあねへか。〔ゑん〕ほんに芝居のゆきが。らうそくへふつたといふにほいだ。それ和尚。ぬしのはをりだそふだ。〔しあん〕さあ／＼こいッア大さはぎだ。かゝあに叱られることを仕だした。〔喜の〕もちつとの事で。もろせをたのみにいく所だ。〔しあん〕しやれ所ではチエはな。〔ゑん〕やけぼこりでいゝのさ。（此間。女房の手りやうりにて。たまごのあつやきにわさびじやうゆ。古なすに。もり口のかくや。梅ざけのあんばい。ゑん二郎しあんへ茶づけをいだす。）〔ゑん〕なるほど和尚はよくくふぞ。ぬす人には極つた。〔しあん〕もし。松ばやじやあ。小梅の青いのを出すノウ。〔喜の〕あれはつけめさ。扇屋のせんべいの。丁子やのてうあしのせん。四ッ目屋のかすていら。竹屋の水貝。しづか玉屋のゑましむぎ。こいらはつけめさ。〔しあん〕丁子屋じやあねへが。はてなといゝてへ所だ。〔喜の〕はやり言葉もあぢなものだ。ちよつといゝだすと。むしやうにはやるよ。此ごろのはやりは。扇屋のきかふさん。丁子やがはてな。ぶしやれまいぞ。おたのしみざんす。松ばやが。じやあおつせんか。玉やのおにのくび。大文字やのしらアんもよくいふよ。さまといふ事を。せといゝやす。ゑちぜんやは。しんにといふ事を。たんといふね。〔ゑん〕丁子やの日てんさんと。きれいでざんすよと。松ばやの山寺と。さかことは。

いつの間にかすたつたの。[喜の] 今でもぼう〳〵ていふものは。しつたかさ。[しあん] おちさん。おめへはよく知つてるだろう。大かなやの正月の仕着はなんだつけの。[おちせ] たしか。地が黒で色入の花たてわき。角のつたやが鷹のらやうさ。わかなやが若松にかすみ。中あふみやが花ごうしでござりやす。鶴屋はぼたんの裾摸様の時もあり。ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はぼたんさ。松がねやがさくら川さ。松ばやのくじやくしぼりと。大ゑびやの鳳凰がよくまちがひやしたつけ。[ゑん] あふぎやの十二ひとへ。丁子屋の若松にがくはよく人がしつてる。[おちせ] 瀬川さんのつき出しの時は。いつでもかれいで。八ッはしにかきつばたのもやうでござりやす。大文字屋のつき出しはいつでも。とかくさかなのもやうさ。[ゑん] 正月元日に礼にでるのは。大びしやばかりだの。[おちせ] さやうさ。[喜の] つき出しの時へ屋もちばかり。うちへのこるはどふしたわけだしらん。[おちせ] あれはさ。わかりやせんよ。松ばやはせんてへかてへ内でござりやす。女郎衆に上草履をはかせやせん。今でもはくものは。瀬川さん。松人さん。へ屋もちで二人ばかりござりやしやう。そして。れい日にはみんなぞうりさ。くしかふがいも。中座迄ぞうげまきゑでござりやす。さんや。でへぶいぶるによ。ちつとさしくべればいゝ。[しあん] 丁子屋もかてへ内だよ。客のまへはうはぞうりを手にもつてとふるの。客のこねへ女郎はつるしがとぼると。中の町へださねへね。二かいに小便所の二ところ有と。はしごを庭からあがるやうに付てあるは。丁子やばかりだ。[喜の] まるゑびやにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど遠ひのはあるめへ。さむい時分なぞはてへぎだよ。半七がかつぱを着て。とこをまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてへうちさ。そしてはやく見せをひかせる内だよ。松ばやじやあ。あね女郎の事をわつちらんといふね。扇屋じやあざしきでといゝやす。丁子やじやあ。あね女郎のそのあね女郎の事を。おはきいおいらんといゝやす。[ゑん] 玉屋といへば。紫夕が（小むらさきがことなり。）将棊はあがつたかの。[喜の] こんちう。我物が香角のませで。二ばんまけたそうさ。[ゑん] 琴棊書画をやるきだの。傾城にもいろ〳〵なくせがあるものだ。ささかたが。水かゞみのめりやすがすき。瀬川が茶のゆ。哥ぎくが地ぐちのてんとり。すがはらが梅をたち。わかづるが俳諧。ひなづるが團十郎びいき。松人がどふしたのだへ。丁山がちよつとみな。たき川が三ッ七寶の紋所をかへす。九重

がかふろの外に男の子をかゝへておくことなどは、今でのうかちだ。〔しあん〕こんちう。今戸の墨賀がりやうへめへりやしたら。いづゝ屋のせつぺい。くわれき松屋のぎよみん。いづみやのこゑん。いの字いせ屋のせいら。長崎屋のこはん。おはりやせつ久　かんぼくといふいしや。宗匠のとりう。なぞがきていて。梅枝点の　はなしとはすがはらが事也。　はいかいをしていやした。いなぎも源氏の書入にこつていやすよ。地内のおたみがしんで。ちからおとしさ。ぼくがもつりに斗かゝつていやす。〔ゑん〕けふは廿六日だの。あさつては三河じまの不動へいこうせへ。喜のぼう。〔喜の〕めへりやしやう。〔ゑん〕あと月の不動ほど。けいせいのでた事はおぼへねへ。ノゥ喜のぼう。まづきさかたか。たはらやのよしの。にしき戸の若づるがでるし。七こしがでるし。七里がでるし。扇屋のうたかたがでる。〔喜の〕岩越もでやした。からこともたしか見かけやした。げいしやも大分見かけやした。あさをに　駒次　おりせ〔ゑん〕ひやうごやのおくにもきたつけ。なるほどげいしやは繁目だ　けんばんにそばがたへぬはづだ。ざしきへ十ゥでると。けんばんて一分がそばをかふなり。〔しあん〕もし羅月がいもうとはいつ梅と。やうじやのおいくを。そうじめへにしたといふかほだねへ。あれで。うすいもがねへといゝ娘さ。〔ゑん〕何。いゝものか。うすいも所か。ひめじかわの紋がらといふつらだ。時にちよつとよつて。大ばなしになつた。ちよふどいゝ時分だの。もふ昼みせのおみきどつくりもひけたらう。喜のぼう。あいばつせへ。こんやは一町目のつもりだノゥおしやう。〔しあん〕おちさん。喜のさんをあづかるによ。おれといつちやあ振新のいちやつきでもさせるこつちやあねへ。いろ男のていしを持と心づかいだよ。おちせだいじのもんだが。おかし申やしやふ。トはいへども。此ごろよしはらからきた紋を。ちらとみたゆへ。喜の介がいろ事のできた事をしようちている。〔喜の〕お供をいたしやしやう。おちせ。着物をだしてくりや。ト喜のは一町目ときいてあいた口へもちなり。女ぼうはつうゆへいふめにもださず。立て戸だなのかさねだんすよりひき出しから。ゆうきじまの上着。くじやくしぼりに。せきちくあられのへりをとつた下着。ひぢりめんのじゆばん。くろ上田のはおり。これはゑん二郎にもらつたのゆへ。女ぼうのつうにて。おはむきにきせてやる。喜の介は着てしまい。かみ入をふところへ入レ。〔喜の〕ちよつと鬢をなでつけてくりや。女ぼうはさしている。二分ほどするつげのくしでなでつけ。絵ばかんざしで。びんの所をまきこむ。〔しあん〕喜、むすぼれし。千すぢをわけてみだれがみ。手にとりゝへのもの思ひ。〔喜の〕おきやあがれ。〔おちせ〕サアよふござりやす。あれせわしない。〔ゑん〕こゝのうちの戸だなは。丁山がつぎの間といふもんだの。喜の介はゆかうびやうぶにかゝつている。若松屋のわかづるが出した。もちつきのてぬぐひをとつてたもとへいれ。〔喜の〕サアお出なさり

やし。ゑん二郎。しあん。立てかつてへいづる。[おちせ] ヲヤシあんさん。やけあなが目にたちやせんは。モシづきんはよしかへ。[喜の] こふと。もし四蝶さんの所から人がきたら。たつの口へでもいつたといつておきや。それもよし。これもよし。トそこらを見廻しながら。かつてへいで。何かわすれたやうだはへ。ト少しかんがへて。ヲヽそれ〳〵。ふくい町の豊國が所から人がきたら。わすれずに此ちうのやしきのを二分やるのだよ。トだんばしごの小引だしから。うら付を出し。こいつもはかなくなつたす。トはいて出る。猫が跡について出そうにする。小女はだきながら。ゑん二郎としあんがぞうりをなをす。[しあん] これゆびぬきがをちてるよ。[ゑん] ちかめがとんだ物をみつけ出した。おちさん。いつてきやす。[おちせ] さやうなら。ごきげんよふ。ヲツト おつむりがあぶねへ。[喜の] サアおさきへ

此間。柳ばしより大さんばし辺。船中の

しやれ。よしはらやうじのふさならで。あまり長〳〵しければこゝにもらす。

○其 二

けふ此比は。いたこやかるい沢ではやる時分。きうへ田ぞろいにゆかたを下タ着。こひ茶ぞめの袖くち。もへぎさなだのうら付で。とんだあやまるなり西のくぼのがせんぼう谷や。本所のわりげすいあたりで見かけるてあい。くら宿でいやがられるなま通ども二三人。両方へわかれて土手のはしを通りながら。ひとりのにほんざし。くわへ煙管をはたいて。[里風] アレ〳〵みさつせへ。田中の方から二三まいの早かごがくるが。いまじぶんなせあねへに。いそがせるだろうの。[花暁] ほんに何者だろうの。こいつはげせねへはへ。トいふうち。早かごはや土手のきはまできたり。また田中のほうへ。かづきもどす。[友次郎] あれみさつせへ。かつぎもどすぜ。へ、きこへた。あれはたしか。かごをかき習ふのだ。

[里] なるほどそういへば。中にへんなやつがのつて居る。[花] なんにならひのいることだの。これ公が所に。孔方は少〳〵なしか。小ぎくを一帖かいて〳〵をれば すこぶる秋風だて[友] 青楼のきやくが。そんなげびなものを持ものか。きんならいつくらもある。傾城のわるがみを。かすりごうしとさつせへな。[花] それでもかみがねへと。何かふところがいねへやうだ。[里] コレかみをほしなら。こゝの髪結床がいゝせ。こつちらのかみいどこは。へただせ。[友] 此高札場はよく〳〵できたノウ。八十両かゝつたといふことだ。どふいふもんだろうの。[花] こうとくじの門じやあねへか。トしやれながら来る。跡よりわるいしあんてゑん次郎。きたりうのでんがく帰にて。夕日をよけながら。きれいごとにてゆう〳〵と来る。なまつうどもは。跡をふりかへり〳〵見て。ゑもん坂をゝり。中ゆびとくすりゆびで。ひたいをくるりとなでゝみて。はなをちんとかみ。うはまへのゑり先を一ツひつぱり行すぐる。○川竹

の流れはたへずして。しかも元のきやくにあらず。さとにうかるゝむだ人は。かつきれかつなじみて。久しく來る事なしといへども。つき出しからなじみて。年のあくる迄くるきやくも。またすくなからず。何がどふだかわからねど。たゞ人のきをつりあぐる大よせ小よせのくるはの名とりが。すらりとおならびなされて。よい中の町の夕景色。左りの竹村に比して。右側の七けん軒をならぶ。はでな遊びを駿河屋がまへ。此時まじめなるらんとしやれながら。門口より。〔しあん〕此間はおせはでござへした。〔ゑん二郎〕おしやう。むかふの兵庫やに居るのが。丁子屋のつき出しだ。よつほど瀬川といふばがあるによ。〔喜の〕かほるとは先名がうつくしい。ト いゝながら。三人あがる。下女は手をふきながらいで。〔下女〕これはおそろいなすつて。よふ御出なさりました。モシゑんさんがお出なさりましたよ。女房おふじかつてより出る。おゑんと茶つむぎのふとで。黒七子の帯。かみは京ぐる。女房 よふお出なされました。〔ゑん〕主人はどこだ。〔女ぼう〕たゞいまお座敷へ。まいりました。ホンニ江戸てうから度〻お人でござりました。よほどお久しぶりでござりますね。〔ゑん〕久しぶりもてへそふだ。〔しあん〕吉原じやあ。四五日こねへと。久しぶりのよふだそふさ。〔女房〕モシゑんさん。京町に何かおせかいが。おできなすつたそふでござりますね。あんまりお浮氣をなされますな。それでお久しぶりだと申ますいさ。ト三人がこしの物をとつて。中ごしになつていて。ねへ。きのさん。〔ゑん〕いんにやよ。それにもわけのある事。どふでしまいはろくな事には。なるめへと思つて。こつちへは沙汰なしにした。〔女房〕それはよふござりますが。もし江戸丁へでもしれましては。ト少しまじめでいふ。〔喜の〕そのおせけへもすんだ事だそうだ。もふこゝ切りの事さ。〔女房〕さやうなら。よふござりますけども。ト立て神だなのよこ手。かたなかけへわきざしをかけ。しよくだいをともし。手あぶりをかたよせて。盃だいをまん中へ出ス。〔ゑん〕いのじいせやの二かいに。うしろを向いているのは誰だ。女房 扇屋の扇のさんで御ざります。〔喜の〕ぶたいはなれたものさ。〔しあん〕つたやのさんしう。鶴屋の在原。此春のつき出しはどれもあたりだ。丁子屋の名山を此中向嶋で見かけやしたが。七越といふきみがござりやす。〔ゑん〕丁子やといへば。みさ山もとんだうつくしくなつた。〔女房〕松ばやのをはやく見たうござります。此内吸物すゞりぶた。どんぶり。いろ〳〵出る。〔しあん〕サアはじめなさへ。ちつとおすいなされまし。女房「さやうなら。ト酒になる。とゞゑん二郎へ又盃まはる。女房へさし祝義をする。みな一通り盃すみ。此間ニ松田やをしまいニやる。〔ゑん〕むかふ通る は藤兵衛じやねへか。〔しあん〕藤兵衛〳〵が三人通る。〔喜の〕おきやあがれ。〔ゑん〕コレ

〱藤兵衛〱。〔しあん〕でたがねへ藤兵衛〱。〔喜の〕藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉哉。〔ゑん〕これちつとだまらねへか。藤兵衛はいのじいせやの前あたりで。きゝつけかけてくる。〔藤兵衛〕これはどなたかと存じました。ごきげんよふござりますか。〔ゑん〕どこぞへ行のか。〔藤〕ひなづるさんのおざしきへ参ります。〔ゑん〕ざしきでなくば話そうと思つてさ。〔藤〕それは残念でござります。松藏。藤二。三味子や。我物がまいつてをりますから。ぬけ憎うござります。今晩はやはり一町目でござりますか。モシきのさま。とらけんはどふでござります。〔喜の〕又まかさうと思つて。いそぐならいつて來ねへ。〔藤〕さやうなら御めんなされまし。ト何かせわしく。又かけて二丁目へはいる。二町目より竹屋の哥ぎぬ出てくる。跡より哥菊出てくる。〔ゑん〕和尚。むかふから來るのはだれだと思ふ。〔しあん〕竹屋の哥衣さ。〔喜の〕こいつはきつい。それでは近眼とは思はれねへわへ。〔しあん〕顔も提燈の紋所もわからねへが。禿がみゝのわきへ黒い糸をさげているのは哥衣と。大文字やのはた卷斗さ。ゑん あじな所にめきゝがあるの。〔女ぼう〕お二人ながら竹屋の千兩箱で。ござります。しあん 哥菊が地口はどふだの。〔女房〕もふ一ツあがりませんか。ゑんさん。お茶漬わへ。〔ゑん〕腹中まん〱さ。しあん銚子をいぢつて見て。〔しあん〕もちつと熱くしてくんなさへ。鰯ときすのほうろくやき。かわりの吸物出る。ふたをとつてみて。〔喜の〕イヤアかもせんば。葉付大根。ありがてへわへ。〔しあん〕料るもんだよ。ト云所へ瀧川がかふろ來る。〔めなみ〕若へ。お藤さんに。おいらんでおつせへす。あのけさのふみをとゞけておくんなんしたかと。のれんをひつぱりながらいふ。〔女房〕ム、そふ申てくりや。けさ程三保藏にもたせて遣しましたが。おるすだと申て御返事は參りませんと。トかつての方へむき。ノウ三保藏。御返事はこなんだのう。〔めなみ〕勝手より。〔三保藏〕まいりません〱。〔めなみ〕そんならあの。そふ申しいしやう。〔女房〕ちつと遊んでいかねへか。〔めなみ〕しかられんすよ。〔ゑん〕コレあの子や。〔女房〕めなみ。あなたがなんとかおつしやるよ。〔めなみ〕なんでおざりいすへ。〔ゑん〕おいらんと。とふちさんによくいつてくりや。〔めなみ〕アイそふ申しいしやう。ト出てゆく。〔女房〕とんだ利口な子でござります。三保藏や。其迯り物は。玉やのたが袖さんのおざしきへ行のだよ。そしてみつさんは七ッにかへらつしやるそうだから。かごやがきたら三てふだよ。そつちこつちするうちゑん二郎があいかた松田屋のおいらんおす川。むかいに來る。眉如二翠羽一。肌如二白雪一。腰如二練素一。歯如レ含レ貝。嫣然一笑。惑二陽城一。迷二下蔡一。其ふぜい。田丁のかたばみや久兵衛がぬつた。からいとの縫ぬひにだてもんのうちかけ。白じゆすのへりとりむく。かみは手がらわげ。かみのうへは小間物屋の見せの如く。禿のかみ一人は。はりうち。一人はやつこしまだ。うつくしくかみゆひの長二が手際をみ

せ。ふり袖しんぞう。川波。せわしんぞう玉夕。つきそひきたるばんしん玉夕。おいらんのゑもんをなをし。打かけの下りたるをなをし。ゑんさきへこしをかける。おす川につこりとわらひ。〔おす川〕おふじさん。どふなんしたへ。トいつたばかり。〔女房〕さあおいらん。お上りなされまし。〔おす川〕こゝがよふすよ。〔玉夕〕ゑんさん。よくお出なんしたね。〔喜の〕いつもうるはしいおかほつきね。〔しゑん〕何かむしやうにきれへでござりやす。〔玉夕〕なぶつておくんなんすな。おがみんすにへ引。トいふうち。松田屋わかい者清二。てうちんをけし。おたのみ申ますと出て行。玉夕は茶地のろきんの長づゝから。きせるを出し。たばこをつけておいらんにわたす。又つけてゑん二郎みな〳〵へやる。おす川。禿のみゝへ口をつけて。何かいゝつけてやる。〔おす川〕いの字いせ屋に。ときやうさんがいさつしやるから。おれが言ふとつて。よくお出なんしたといつてきや。禿はむかふへ行。あげゑんの下から犬がのびをして出る。〔川波〕ヲヤアわつちといへば。びつくりしいしたよ。〔女房〕此お盃はわたくしがおあづかり申ましやう。お雪や。すぐにつれ申しや。〔ゑん〕五町の万里と。おしづ。八百吉をよびにやつてくだせへ。〔女房〕かしこまりました。下女てうちんをともし。先へ出る。けいせいも立。みな〳〵いづる。〔女房〕さやうなら。おいらん。〔おす川 玉夕〕おやかましうござりいした。〔女房〕どなたも御きげんよう。みな〳〵一町口へまがりさきへ行。喜のはちよつと松田屋のみせ先へより。〔喜の〕井川さん。夏里さん。どふなすつた。何かしんに成ッてかきなさるね。〔井川 なつ里〕でへぶ。道がちかふおすね。〔喜の〕こんやはゑんさんの附合さ。トいふ所へ。ぢ廻り二三人みせさきへきたり。〔地廻り〕ナンだ。あかいべゝに。青いべゝに。白ひべゝをきこ。こゝの見せはなんの事はねへ。げくわの薬箱といふもんだ。トあくげんをはき行過る。〔夏里〕エ、すかねへぞよゥ引。〔喜の〕後程お目に懸りやせう。ト松田屋へはいる。みな〳〵のうれんのそばを行。うちはどん〳〵とにぎやかにて。ともべやのまへにおいらんたちの提燈ならべてあり。長柄はかべにおいをかけてならべ。廻しかたはたき火にあたり。大がまのうへの十二のとうみやうはけんびし。山十五とびやうの山をてらす。〔茶や女〕源兵衛どん〳〵。トいゝながら。みな〳〵のはきものをそろへる。そら花の札のはつてある下の。帳ばにて番頭伊平治いで。〔伊平治〕源兵衛〳〵。お客人だぞよ。みな〳〵はしごを上る。階じりにて女郎四五人のこへで。ゑんさんよくおいでなんしたと。くち〳〵にいふ。〔源兵衛〕すぐに座敷へいれ申そう。ト先へ立てゆく。だれぞ禿大ふうじの盃を。ひやうし木にうちながら。禿 たのもどゥ引。そつちでさきつから呼ばつしやるぞよ。ひとりの禿 こんたあどけへ行。〔禿〕長崎屋へ行は。〔禿〕さがりい引す。おす川はいつの間にか。どこへかなくなり。ばんしん玉夕。ふりしん川波。つきそひざしきへはいる。かふろはおいらんと。しんぞうと。じぶんのこま下駄をもち。梅ばちを書た。天水をけのうへゝをく。

〇そもおす川が坐敷のこのみ。中の間の飾夜具は錦の山の如く。一面の琴は遙に見る瀧に似たり。閣の常釜は松風の音かと驚き。ゆこうの小袖は楓の紅葉したるが如し。本間の天井には四季の艸いろ〳〵。をの〳〵

花の手柄をみせ。はりつけには朱簾を画て雲上にちかし。ちん金彫の机に。義之の墨帖をちらし。湖月萬葉のそうしを並べ。異香四方にくんじて。大盡の紙花こゝにつき。龍のくびなる玉。つばくらめの子やす貝も。こゝに持來るべしと思ふばかり。座敷の眞中に銀しよくをてらし。朱蒔繪のたばこぼん。さんぼうの盃臺。かけばんなをしてある。

[しあん] 家名は松をもつてし。紋所は柏をもつてし。床柱は栗をもつてす。[喜の] サアむづかしい事をいゝだした。此からかみはだが書た。[玉夕] 弁州さんがおかきなんしたよ。[ゑん]もふとまりは知れたから。大のみにするがいゝ。

此うち廻し方盃てうし持來り。らうそくのしんを切て行所。お定りの通。なかい吸物持來る。茶やの女てうちんをけし。はきものと一所にらうかへをく。喜の介にあがるふりそで。

[夏濱] 政さんよしなんし。いつつつて階子へ札をはらせんすにへ引。ト いきをきつてかけ來る。[しあん] 休日の湯屋を見るやうに。でへぶはしやぐの。[喜の] そんなにさわいだら又。やりてがみせ三味線の一といふ聲で。りくつをいをふが。[夏濱] それでもからかいんさアナ。ゑんさんよくお出なんしたね。お雪どん。どふした。ト茶やの女のかたへとりつく跡より。しあんにあがるふりそで夏いろ來る。[ゑん] 此子達二人りはむしやうに美しくなつたよ。[玉夕] あいさ。いつそ色氣づきんしたよ。礼日もふり袖の跡おさへは。ぬしたちふたりさ。[ゑん] 早くつき出しになつた所をみたい。其時はしらぬかほだらうの。夏いろさんの初日は。大方和尚がするだろう。[しあん] アイサその時になると。着物の案じがござりやす。上衣はまぐろの瀧のぼり。むくはぼたもちのちらしさ。[夏いろ] よしておくんなんし。ばからしい。[玉夕] お雪どん。一ッのまつせへナ。[夏濱] どれ。おれがついでやらうよ。[茶女] イヽエこゝへおくんなさりまし。[夏いろ] 一ッのまつせへ。[喜の] おいらんはどけへ行しつた。今迄いさしつたやうだが。もふどけへかみえなくなつた。ほとゝぎすのようだ[ゑん] 松田屋のけいせいも。駄蠟燭を見るやうに。折ふしたちぎへがするて。あやまるよ。[玉夕] わつちらんは。今一生のきやく人の所へ。あいさつに。下ざしきへお出なんしたよ。琴のやよび申てきや。川波さんたばこを出しておくんなんし。[川波] 此引だしかへ。おつせんよ。[玉夕] エヽじれつてへ。そこにあるからお見なんし。[しあん] きゝようかるかやをみなへしと聞へるはへ。でへぶ地口が御上達だ [玉夕] それでもじれつたふおすアナ。ト云所へ。するがやの男。おくり物もち來る。朱のちんきんの丸ぼん。あらい朱のかくひらはたまごほり。さんきてのどんぶりには。はづけに生醤油をかけたやつ。これでおやづれといはぬばかり。傾城へゐて

んとり。ちや屋がつらなり。〔茶や男〕ゑんさんに七右衛門申ます。こんばんはよふお出なされました。只今玉やのお客人を納ましてそれへ参ります。まつぴら御めんなすつてくださりましと。申付ました。そして玉やで小紫さんがあなたへよろしくと。をつしやりました。トもだく〜してかへる所へ。表ざしきのをいらん。かみはしのぶわげ。さゝりんどうのへりとりむく斗。うちかけにして来る。〔とめ山〕ゑんさん。よくお出なんしたね。〔ゑん〕イヤアとめ山さん。どふなさりやした。話があるからちよつとこゝへお出なせへ。〔とめ山〕マアちよつといつて。後に参りいしやう。ト肩のあたりでちよいといろけをみせ。おく二かいのほうへゆく。入ちがつておす川みすのはなかみで。むねをあふぎながらきたる。〔おす川〕もふ何だかわからぬ事のきゝてになつて参りした。〔喜のしあん〕おいらん。これはどふでござりやす。〔玉夕〕これ〳〵は。まいりましたかへ。〔おす川〕きいした〳〵。〔玉夕〕じやあおつせ

んかへ。〔おす川〕あいさ。〔しあん〕おめへ方は。しやあねへかの。蚊はねへかのと。大音寺めへのとふじやあ。あるめへし。みな〳〵わらふ。〔おす川〕もしへ。下タでめりやすの本をもらつて参りした。長崎屋でぶんきようさんが。おひろめなんしたのでおす。いつそあだでようすよ。〔玉夕〕ヲヤおみせなんし。すがほとやらいふめりやすかへ。早く覚へとふすねへ。〔おす川〕まあのちにおみなんし。此うちぜん出る。きうるしのわん。せいひつむしくいのくわいせきぜんにて。二つき松田屋ゆへしよく物はびなり。こん立はこゝにりやくす。ちよくばかりは松田屋のつけ目にて。れんこんの、らん切也。はしは箱根からとりよせる。箱の先をけずつたの也。これも今のりうぎ也。みな〳〵はらはよきゆへ。茶びんとともにならべたばかり。ぜんはざしきの捨小舟となる。こゝへ女げいしや。八百吉おしづ。たいこもち五町万里。するがやてい〳〵しゆ。七右衛門来り。大さはぎになる。此所みしやれ。あまりそう〳〵しくて。きゝとれぬゆへ。こゝにりやくす。そふこふするうちひけをうつゆへ。ゑん二郎がとこをおさめ。喜之介。しあんも。それ〳〵のざしきへ行。げいしやたいこ持みな〳〵かへる。おす川が次の間をたてきり。てうあしのぜんをとりまき。しんぞうども。げびぞうをはじめる。す

どりぶたの上に。くわへの丸には。こほうかのゐしやのあたまの如く。しゝたけのうまには。手習双紙を引さいたるに似たり。ようらくでのふた茶碗のなおは。ふるなすのつけたのに。きじやうゆをかけたやつ。〔川浪〕志庵さんはどふなんした。〔夏いろ〕いつそもふ酔いきつてねてしまいゝした。いつそ。すかねへ近眼坊主でおすよ。〔川浪〕おやばからしい。何もたべる物が。おつせんよウ引。〔夏いろ〕となりへ梅づけをとりにやればようしたねへ。これ〳〵。その子はだれだ。此土びんへ茶を一ツもつてきてくりや。いゝ子だぞよウ引。トいゝながら。はしのかわりにした。松ばみかんざしを。行燈へつゝさして。ふいてさす。おす川がかぶろは前ざしをぬいて。りやうしのふたへ入レて。ちがいだなへをき。ねまきを帯へはさみ。おいらんの櫛笄をしまひ。火を入レて来り。そこらをかたづける。〔玉夕〕もふいつてねや。また長火鉢へあたつてべん〳〵と起て居めへよ。○長火ばちといふは。惣花のあたるひばち。もつとも下にあり。〔花ことの〕さやうならお休なんし。くろもじのやうじをくひながら。〔鳴浦〕玉夕さん〳〵。〔玉夕〕何ン

でおすへ。〔嶋うら〕あのね〳〵。これ〳〵がさつき見せへ參りしてね。あさつて來やうと申しいしたよ。ぬしにもよく言てくれと申て。おしやべりをだしきつて參りした。ぬしにもとんだうらみがある言のはのと言て參りした。よろこんでおくんなんし。〔玉夕〕わつちといへば。かたつきし主のきなんすのを待切てをりいさアなア。此中の怨を届てくんなんしたと。おつせへしたかへ。文さんもあんまりすかねへ不人情だよ。〔嶋浦〕はらをおたちなんすなヘ。ぬしがつれ申てきいすとさ。あさつてはしまつていろとつて。參りした。〔玉夕〕ぬしといへば。うれしがりきつているの。〔嶋浦〕それでもうれしうおさな。〔玉夕〕それはそふと川波さん。さつき山崎の人に。ひな形をやつておくんなんしたか。〔川波〕もつてまいりしたよ。〔玉夕〕けふは廿六日だね。うれしうおす。あしたは髮洗日でおすよ。ト云所へ。しんぞういつてふ。積をおさへながらきたる。〔いつてふ〕玉夕さんへ。ごしやうでおすから。なんぞ藥をおくんなんし。いつそもふ積がいたくつてなりんせん。トかほをしかめていふ。〔嶋浦〕わつちらんの所に。きわう丸がおすから。まあ座敷へお出なんし。〔玉夕〕ぬしのきやく人は。お歸んなんしたじやあねへかへ。〔いつてふ〕松さんはかへりしたが。太兵衛どんがをくりにしてやろふから。でろとつて。夏花さんと民の戸さんと。一座でおすよ。〔玉夕〕ムヽ、はつか。〔いつてふ〕あいさ。ざとうの坊主で。酒をよくのみひすよ。さつしておくんなんし。わつちといへばなせこねへに。病身ンになりいしたらうねへ。〔嶋浦〕ゐいじんさんに。見ておもらひなんしたかへ。〔いつてふ〕やつぱり積だとおつせへしたよ。それでもあんまり引込と腰元にするとおつせへすから。けふも無理にみせへでへした。〔玉夕〕しま浦さん。こゝの次の間へしのびをおこめなんせんか。〔嶋うら〕よしいしようよ。

トはなすうち時はうつり。八ツもすぎて。倉まはりのひやうし木かつち〳〵と打ッて廻れば。皆といづくへかなくなつてしまひ。小便所のきわには。かけばんと。盃たい。おくり物のおふ。山のごとく、水だいのかめつんとして。うしろをむき。江戸丁二丁目相生屋御ぜんめんるい所と書た。そばのせいろう。れんじにさみしく。二てふつゞみ。ごばん人形のさはぎも。いつしかしづまり。奥座敷にて琴のね。さへわたる。菊慈童は。たつんどがつま音ト。今迄しやれたるざしきもたまりの天神。いびきのおとは鼓のなきごゑにまぎれ。火の用心のかなぼう。按摩のこゑもしづまり。くさも木もけいせいもねて。ばけものと時鳥と猫ばかりおきているころ。夜はしん〳〵とふけわたる折。よしとしんぞうがあいづに。けいせいのうしろ姿。きたり喜之介がびやうぶの内へはいる。此所の妙意作者しばらくあづかるなり。此本をみる人。たいてい御すいさつあれかし。むかふざしきは死ね死なふといふ中とみへ。廻しびやうぶの太公望もよだれを流すばかりのむつ言。ほつち〳〵のはなしごゑ。

〔女郎〕それおみなんし。ふとんの外へおちなんすな。マアこつちらをお向なんし〳〵。〔客〕あやまつたら。ふしようながら向てやろう。むかせられるは恩ならず。向てやるのを恩にしてだ。

〔女郎〕男心のにくいのも嬉ほどのやぼとなりいしたのさ。サア誤すから。お向なんし。さみしうおさアナ。ぬしにきゝ申しいす事がおすにへ。ゆふべ。どけへお出なんした。京町かへ。〔客〕フゥおつな事をいふの。京町のねこがあげや町へ通つたうわさは聞たが。おれが京町へいつた沙汰はまだ聞かなんだ。〔女郎〕よしておくんなんし。とめ川さんが中の町で見かけたと。おつせへした。サア本とうにおつせへし。／＼。おいゝなんせんと。くすぐりいすにへ。〔客〕これさ。よさねへか。ぶちのめすぞよ。〔女郎〕そりやあ。うそでおすが。ほんに主ア。わつちを呼んでおくんなんす氣かへ。〔客〕此比はでへぶ。ぐちになつたせ。〔女郎〕それでも若。ぬしのとつさんやかゝさんが。不承知な時は。どふしんしやうねへ。それを思ふと。死たふおすよ。〔客〕それよりまだ。先が丸二年三月といふ物だから。其中にはそつちに。とんだ事ができるだらう。〔女郎〕よくつもつておみなんし。五年このかた。わつちが身のためにもわるし。ぬしのためにもわるいと。たび／＼あきらめて見ても。思ひ切れんせんものを。ほんにあく縁でおつしやうよ。ぬしもそふ思つておくんなんし。あれさ。また寐なんす。鼻へ小よりを入レんすにへ。〔客〕これさ。おやまつたよ。こんやは無性にねむい。たばこを吸付てくりや。てめへおれが事ばかり。そんなにいふが。をれが顔のたゝねへやうな事をするなよ。こんなのろい句を出すやうになつちやあ。たまらねへ。〔女郎〕まだ其やうにお疑ひなんすなら。此うへゝゆびの二本や三本は。いといゝせん。〔客〕てめへに指を切てもらつたとて黒焼にして。むしぐすりにはなるめへし。塩をつけて燒てもくはれねへ。〔女郎〕そんなら。どふすればよふす。じれつたふすにへ。〔客〕何かあじにゑきもねへ事をいゝ出した。少し腹がきたはへ。さつきそこにあつたのは何だ。仕切場とは。〔女郎〕仕切場でおすよ。鶯もちの事也。〔客〕そいつはあやまる。れいの小梅のかり／＼するので。茶づりにしやう。〔女郎〕これ／＼。太兵衛どん／＼。これさ。ごしやうになるからの。茶づけせんを一ぜんこさへてきて。くだせへ。かゝる世界に引かへて。となりざしきは大かんしやく。〔女郎〕あれさ。およしなんし。積がいとふすよ。さわつてもおくんなんすな。けがれんす。ぬしやあ。わりいしやれだよ。〔客〕そんならどふしても。あの客をきれる事は。ならねへな。〔女郎〕それが氣にいらねへで。主がお出なんせんでも。きれる事はなりいせん。わつちや。正直ぬしの推量のとふり。あの客人にほれていんすはな。〔客〕でへぶ。てめへ

はしらばけに。ごふてきをいふな。それじやあもふ。料簡がならねへはへ。女郎 りやうけんとは。兩方の手に劔をもたせる事かへ。あぶなふおす。およしなんし。客 何だこいつァ。いゝかと思やあがつて。おれがこふいふ何を出ス日になつちやあ。覺ごうしろ。まづ。でへ一チ。この枕の紋所も氣にくわねへ。此きものゝ裾もようのあたりもはくじよう仕てしまへ。女郎 これさ。そねへに足げにしなんすな。大事の色男の紋でおさアナ。客 こふすりやア。どふする。これへ。しやうぶ刀の身をみるよふに。白ィ粉ばかりぬつて。つら斗うつくしくつても。いきしにのねへ女郎はきれへだ。此女郎は此くらいなやつ。こいつは此位なやつと。てへげへ女郎のねうちをして。つきやつてやれば。いゝかと思つて。陸へあがつた河童をみるよふに。ぐにや／＼する女郎はこつちから。おさらばだはへ。女郎 サア／＼それを聞こふばつかりでおす。そんな氣に入らぬ女郎なら。はやくおさらばをして。お歸んなんし。客 歸らうが歸るめへが。うつちやつておきやあがれ。おれがいちやあ。そねへにこはいか。道理でふる／＼ふるへるな。この中の町の何屋のうちにやあ。せつちんが何軒あつて。何やの裏にやあはきだめがいくつあると 四ッ手にわかざりのかゝつている時分から。きつねのまいこむ時分まで。ミッぶとんの上におしずまつていりやあ どけへいつても色男一疋の役はしてくる男だあ。手めへの顏をふむには手間隙は入らねへ。跡でかまるめへぞよ。女郎 ぬしやあ紙屑拾かへ。よく聞所やはきだめを知てお出なんす 男一疋といゝなんすからは。たゞし犬の生かはりかへ ヲヤきみの惡い。じゆずかけとやら。なべかぶりとやらじやおつせんかへ。もふいゝなんす事がなかア。ゆるりつとお休なんし。 トいゝながら枕とはな紙をもち出て行。客 はらがたつてならねども。せんかたなく。ねるにもねられず。あんどうのむだ書をよんで。まぢ／＼しているうち。七ッのひやうし木もなりて時うつり。田中の方の寺／＼にては。じやん／＼の半鐘。思はれるのも飽きられぬのも。つまるところはみな遊びのもよう。ゑん二郎はよいより。京丁のわけにておす川と大口說。それもおす川しやうとくゑん二郎をすかぬゆへ。いさゝかな事を手にしてねるつもりの。みな狂言にて。うちのまへの松かざりをみるやうに。うしろ合せの白川よぶね。夜はさらりとあけて。櫺子のすきまからさしこむあかりに。長持のほこりきらめくかわたれどき。下ではどつし／＼と米をつくをと。ねずみ男はあんどうをひきにくる。いれかはつて。茶や男 ゑんさん。おむかいに參りました。ゑん フウア、もふその時分かの。茶や男 おつしやつたよりは。少シおそいくらいでござります。ゑん 喜のや。しあんはどふした。茶男 喜のさんは只今。おしたくをなすつてお出なされます。 ト云所へ。志庵があいかたの夏いろ。ざしきへ置た羽織をとりにくる。跡より志庵をきてくる。喜之介もみすのかみにて。かほをふきながらをきてくる。なつはまもあとよ

りきたる。［ゑん］さあ。すぐにかへろう。［夏濱］羽織のゑりがおれんせん。お待なんし。［しあん］おいらんは。でへぶおつかれの。トいへども。おす川はたわいなし。みなくづをはきあつめ。あんどうは泉岳寺の石塔のやうに。ならべてある。［喜カ一］此紙屑をもやして置と。おぎやァ／＼といふやつができやす。［しあん］こふ紙屑をはき集た所は。羊のへどゝいふもんだ。［ゑん］いゝ／＼。トはしごををりる。板はなに糿がならべてあり。ほしごの下には。をくり物のからつみかさねてある。茶屋男ぞうりをなをす。［茶男］おまへさんのは。此二重ばな緒で。ござりますかね。［夏濱 夏色］此間にお出なんしへ。くどりをがら／＼とんと。みな／＼出る。［ゑん］おほきにおそくなつた。駕籠ははいつているか。［茶男］いれて置ました。［しあん］とんだわるい心持。二日ゑひになりやした。玉やにてはもふ大戸をあけ。かうしをきれいに洗いて。しきいにしほをもつてある。りやうりばん肴をかつている。［りやうりばん］此いかは。あをりじやあねへか。［肴賣］なに眞いかさ。かな川だァ。みなさへ。此あついことを。あをりやするめいかだと。安ひはな。［りやうりばん］だれかれんつに。したがいゝ。［肴］何さ。とんだ事をいゝなさらァ。此畜生めしつ／＼。此あぢやアどふだへ。いゝいほだァみなさへ。生麥だあ。羽田でも。こふいふ丈長はねへはな。トいふをよそにきゝ。三人はするがやのまへまで來る。［ゑん］こしの物を出してくりや。［茶男］マァちつとおよりなされまし。［喜の しあん］すぐがようござへしやう。［ゑん］そふさ／＼。くどりよりうちへはいり。三人のこしの物を出してわたす。むかふのひやうごやなぞにては。もふ見世をひらき。若者あげゑんをふき。暖簾をかける。竹村のまへには名札をはがした。跡のある蒸籠つんである。かしの客八ッを打て上るてやい。ふしみ町のかたより。二人づれにてかへる。一人はきりやのよこての小便所。むかふのはめへ小べんで。のゝ字をかきながら。［鬼勝］コゥ鉄へ。まてへ。いつ所にゑゝべゝ。ゆふべ。わが女がきてな。いふにやァナ。きいてくんなさへ。鉄さんといふものは。わからねへものでござへやす。こんぢう。さよじさんに一本ッかゝりて。たて引キをしてあげてやつたに。今夜もしらん顔をしていやす。あんまり押がつゑゝ。八ッを打てあがる客はみんなあの位なもんだ。なんのかのといやァがつたからな。おれがァいゝかげんに戸尻を合せておいたぜ。あいつァとうもろこしを横ぐわへにしやうといふ。面だナア。ふしみ町がしは八ッにみせを引ゆへ。八ッを打てあがるとも一本にてすむ。これこみづなきやくのする事也。［鉄］ほんにそふいつたか。とんだ氣紛じやあねへか。こんぢうは二朱銀をほうり出して。酒肴付てあすんできたァ。あいつがいふなァ。五年ほど跡のこつたあ。こん中もナ。きらずにあみをいれていつたやつで。ほぞを七八へゝつけやあがつた。あすこの屋臺ぼねは。大方あいつが食いつぶしてしまうだろ

う。あの圖體をみや。纏持にすればいいぜ。エ、くさびをそぎたくなつた。ト云は。せつゐんへ行こと也。〔鬼勝〕なんでも晩にやあ。虎やへあがるべいざへ。こいつア。思ひつきだつけな〳〵。エ、引。ト行過る。大門の口番人の火をたいてあたつている。てすりによりかゝつて。こぶまきのにこどりといふ新造。しもげたやうな禿の客をつけている。これましりみせ以下の。女郎とみへるなり。〔新造〕おつなてうしのこゑにて。ヲヤ 喜のさん。どふなんしたへ。〔喜の〕お久しいの。何今時分までうか〳〵している客があるものか。いゝかげんにして歸りねへ。とんだねむそうなめだ。みつのへさんによくいつてくんねへ。〔新造〕おさらばへ。ゑん二郎。しあん。喜之介三人は。江戸ぶしをうなりながら。大門を出る。〔茶男〕かづさやア、。ト白玉やのたな下のあたりにて。返事をする。〔かご〕アイこゝでござりやす。〔ゑん〕なぜ。こつからのせねへ。〔茶男〕高札ができてから。大門のきはへ駕籠がなりません。むかふより泉やの娘下女をつれ。朝參りよりかへる。〔ゑん〕お夕さん。でへぶお早いお出の。〔ゆふ〕ヲヤゑんさん。どふ被成ました。けさは山谷のしやうぼうじの毘沙門さまへ參りました。〔ゑん〕こゑんさんに。よくいつてくんなさへ。〔ゆふ〕さやうなら。おしづかに。〔かご〕サアめしましまし。〔茶男〕おはき物はついたか。さやうなら此間ニ。〔ゑん〕よくいつてくりや。〔かご〕こつちらの旦那。お羽をりをもちつと。おいれ被成まし。〔かご〕ぼうぐみよしか。どつことな。トかご三てふともニあぐる。〇をくられて行

うちんと。わかれ路にきくかねとは。かたげてみれば。つりあはぬ大じんきやくにこいとらう。おくるけいせい道心者。ものもらひ同士。朝咄し。口よりけむの出る比。立や今戸のかはらけむ。すはる四ッ手に三人は。にほん堤を一ッさんに。いそがせてこそ 三重引へ行空の。

山東京傳戲作

總籬大尾

表紙	ヨコ	三寸七分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸三分

田舎芝居
作者
万象亭

東西〳〵。暫〳〵。夫珍奮韓詩外傳に曰。昔黄帝の御宇かとよ。鳳凰出て東園に來儀す。豐年時に大當り。田舍芝居始りて。百姓等遊樂す。その古事を其儘に。どつさり居た大名題。爲先ッはつ春の序

開に。惠方に向て書き初メの。万硯は近江の虎班石。爲持たる椎の實三文筆。曾我兄弟のせりふまで。万工藤はあらずさらへと。ひつかく猿隈小林の。朝日に羽をのす鶴屋が板。爲齡は千代の竹杖が。師匠自慢

の鼻の先き。万高い山から谷底見れば。お萬にあらぬ万倍が。同じく息勢はる霞。ひゐきの引キ幕切リ幕を。万あくる岩戸の一番目。万五ばん續の一チから十迄。二人評判頼上まするとホ、敬白。

ホメ詞 二

序

先に遊子法言辰巳の園の二書出てより。年ン々歳々其糟粕を啜つて。似たり寄ッたりの洒落本。斗升を以ッて量るとも量り盡すべくもあらず。其洒落本を閲するに。底の底を穿んと欲して。八万ン奈落の汚泥を堀り出し。胴の胴を探さんと欲し

序
先に遊子法言辰巳の園の二書出てより。年々歳々其糟粕を啜つて。似たり寄ッたりの洒落本。斗升を以ッて量るとも量り尽すべくもあらず。其洒落本を閲するに。底の底を穿んと欲して。八万奈落の汚泥を堀出し。胴の胴

て。六万坪の塵芥を搔出し。見ぬ事清しの影穿鑿。くら闇の事をあかるみへ持出されて。娼妓の身の上には迷惑に及ふ事少なからず。是見に興なく見らるゝに害あり。實に笑を取に失して。苦笑を惹出すに至らしむ。是をや。過たるはなほ及はさるが如し

とやいはん。予か兄弟子の万象亭謂(いへる)事あり。凡稗官(しやれほん)を編(つゞる)に一ッの書法あり。能ク近く譬(たとへ)をとらば立役眞ンに劍を抜ィて實(まこと)に敵役の頭(かうべ)を刎(はね)。やつし女形をとらへて前をまくりはだえをあらはにして忍ならぬ事を仕出し。道外褌(ふんごし)をはづして睪丸(きんたま)を振り廻さば。目を驚(おどろ)かし

片腹を拘(か)ゆべけれと。正(せう)の物を正で御目に懸ずして。しかも正の物の如く見するを上手の藝(げい)と云つべし。戯作(けさく)も亦然(しか)り。實を以て實を記(しる)すは實錄(じつろく)なり。虚を以て實の如く書成は戯作なり。洒落本の洒落を見て洒落る洒落は洒落た所が洒落にもならねば。只可咲(おかしき)を

専とすべしと。此語戯作道の確論といふべし。此頃万象亭書捨の小冊あり。晒落本にあらずして野夫本なり。其筆先の穿所は。生得田舎の芋頭にして。是を讀是を味はゆれば。忽然として屁を催ほす。放る所の屁高鳴して聞ク人の耳を驚かしめ。大となく小と

り。晒落本にあらずして野夫本なり。
其筆先の穿所ハ。生得田舎の芋頭に
して。是ハ讀是を味ハゆれバ。忽然
として屁ハ催ほす。放る所の
屁高鳴して聞ク人の耳ハ驚かし
め。大となく小となく男となく
女となく頤を解腹を捧て一ツ笑を
発せざるといふなし。備[illegible]

なく男となく女となく。顧を解腹を捧て一ッ笑を發せすといふとなし。倘鼻を撮み袖を覆ふて。糞の如しといふ人ありとも。そこは万象平氣なものなり。

天明七年未のはつはる　風來山人門生無名子神田の寓居に棲遲暇　久し振にて筆を採

袖を覆ふて糞の如しといふ人
ありとも。そこは万象平氣なるもの
なり。
天明七年未のはる
風來山人門生無名子
神田の寓居に棲遲暇
久しく振に筆を採

田舎芝居

万象亭著

〇序開

越後の國は寒國にて降積雪の高入道。みこし路の一ッにして。夏さり來ば首筋も。縮の帷子暑をわするゝ。田休の畔道を。ふら／＼行若者は。大沼郡。妻有の郷。南鐙坂村の百姓與五七。立浪に水車を染出したる。手織木綿の單物。花色太織の厚肌たる帯を瓢單くびりに引縊り。髮は先年はやりたる。疫病本田に癩眉。江戸土産に貰つた自慢に。天鵞絨の龜の甲の附た腹懸を見せ懸。更紗團扇をさしかざし。山挽の下駄をから付せながら。

歌へ殿さァ殿さ毎晩きやァれぞんきがなうてもいとし。しめて寐た夜は猶いとし。とのこうといな。

と小唄まじくら行跡より。北鐙坂村の勘太郎といふ若者。縮織の孀婦をちよろまかして拵たる。柿縞の大極無類といふ縮の浴衣に。去とは不釣合なる黒棧留の帯を猫じやらしに結び。五十三次の駄賃附を摺たる油扇をかざし。草履下駄を引づりて來懸りしが。夫と見るより。［勘太］與五七どこへいく。しばやだら同士にいくべい。ト呼懸られてふり返り。［與五］勘太か。おらァはや先へいんだんべいと思つたァ。さあ／＼一所にいくべい。何でもはや今度はないたわたりやァ。去年の簾明に來たよりやァ。大入だァ。はないたとははじめた事。わたりとはわたり芝居とて歳芝居の事。簾明とは八十八夜過には越後の國のならはしにて。家／＼に見世をひらき。縮市とて縮の賣買あり。此時分は江戸よりも商人入込て殊の外賑やかなり。その節はいつでも芝居あり。［勘太］其筈でもあんべいさ。新方の山下作兵衛が座本で。櫻川豊次郎だァのといふせうよたろが來たからいゝはづだァ。醤油樽とはすぐれてよき女かたの事をいふ。何の事か詳ならず。［與五］よんべ太藪が廻つけが。今日なァ豊年踊會我田植といふ江戸狂言だげだァ。［勘太］おらァ早九日目だァから。忠臣藏だんべいと思つたァ。田舎芝居の九日目はぜひ忠臣藏をするなり。［與五］そりやァおぶちやつて。うちすてゝといふ詞なり。小泉の太左衛門のお袋が。どうかしられたじやァなかつけかの。［勘太］ヲウものしけ。あるべいこつた聞ッつせへ。此頃の晩景あのお袋が。刻昆布のうこしらつて喰ふとつて。年の氣で目のわりく成ッた上に。暗紛のこんではあり。刻煙草と取違へて。三ッ年垂へぶち込でしよつからく煮たやつのう。三年たれとは醤油の事。しよつからくとはしほからくといふ事。飯の菜に頬張て。がらゝかん飲ッだァから。咽

中へ脂がこびり付ィて。落すべいしかくかねェから。只はァ目眼のうさつくり返して。ぎつくりしやッくりしてべへ居るから。太左衞門もお方も。あんと仕べへあんと仕べへと方角のう失つたァよ。（おかたとは女房のとなり。）[與五]そりやァはァ珍事ちらやうだつけなァ。夫からどう仕けな。[勘太]そこへおらが親仁殿が逝合せてコレ太左衞門どの。こかァ動天しる所じやァござんねへ。おらが隣の大海傳龍様を賴んだが。能くござると云ハれたら。何がはァ千手町の馬市に。伯樂殿の中繼で。壹分五百で買ッた栃栗毛の馬に鄕士殿から借寄せて。置鞍のう懸て迎に遣たら。そんま傳龍様が。わつらわしと乘付さしつた。何でもはァ傳龍様は御功者だァ。御醫者の八宗兼學たァ。こりやァへへげへろの脂のう嘗たァと逢つて。五臟六腑といふ腸のうさん出いて。洒ぎ洗濯なァなるめへ。爰がはい頓智發明八算見一の入る所だァといはれて。暫く考て居られけが。何のう思はれたか。お藏半紙のはな帋のう取出いて。破ては捻り〳〵。くわんせんよりのうこしらつて。お袋の口のへし割て。そのよりのうおしこまれたァ。[與五]夫からどふ仕けな。[勘太]サアその跡のう聞ヵつせへ。其よりこんだくわんせんよりが。しんならへ拔出いたは。夫から尻のうぼつ立させて。づる〳〵と手繰出いたら。咽首にこびり付た煙草の脂が皆ャとれて本腹のうしられたァ。なら程醫者殿の居ない村には住ないものだァといふが。おらなんどが親仁殿なんだァ仕合せで。生キ薬師の傳龍様の隣に居られるお蔭で。疝氣の虫の根絶しのうしら

れたア。［與五］そりやァへへお袋なァ半死半生の目に逢れたな。そしてあの傳龍様の娘子のお匕どなァどうしられたな。［勘太］お匕どなァ茂作と色事よ。翁ぞろへの日にも。初日のとなり。しや敷へ來て居られたら。向しやじきに茂作めが來て居て。こつちから手まねぎをしれば。あつちからはほつくりを仕懸て。ねこしやめ踊の最中に。二人ながらどこへかおつぱづしたつきやァ。よくたんだへてきゝやァ。去年の盆躍の時からの知音だけだァ。［與五］そりやァへへとんだァこんだァ。しかしはやきものやけたァこんだ。トむつとした顔は。こいつおさじに氣があると見へたり。［勘太］そんだら。にしも氣があるか。［與五］あにはァ。さうでもねへけんど。トはなしもつてゆく内に。段々芝居ちかく成つてくると。見物はとろ／＼田舎囃子どもの手を引立テ。［見物］アレェ芝居がはねへたげでてへこが。してれこ／＼と鳴はへ。早くあいべェ。［見物］はやくいがじやァいゝ棧敷がふさがるべい。［三人］おらもいそいでいくべへ。

○二立目

抑田舎芝居の構といつぱ。薦垂にて四方をかこみ。栗丸太を繩ゆひにしたる鼠木戸。看板は松板に役者の名を書付たるを打付。狂言名代は紙幟に書たるを押立テ。此のぼり前のばんに太鼓をまはすとき。先へかついであるいたのを。すぐに木戸へ立る也。太鼓櫓は木戸の際へ高く組上。座元の紋所丸の内に三ッ笹龍膽の幕をはりて。間抜千万なるしやぎりを打。その下に札場あり。頭といふは近在近郷名を知られたる通り者。切竹を染たる伊達浴衣に。虎班を打たるもんぱの帶。郡内縞の褌を見せかけ。薬研錣の長刀をぼつこみ。錢ばこに褥を敷てむんづと居懸り。傍を睨で扣へたり。木戸番はちぐはぐに。思ひ／＼の半点を着し。結綿と三舛の紋を。胡粉にてべつたり書たる。茜木綿の投頭巾。揃へと見えて一ッとろに引ッかぶり。［木戸番］ヤァはねへるは／＼。此まくが對面だァ。今ッからお仕石橋の角兵衛獅子だァ。廻のふち抜迠たんだ百だァ。見ば早く這入て見さつしやりましやう。ふちぬきとは大仕懸の事也。［見物］コレ元〆どの。一ばんしやじきはいくらし申な。［かしら］一番しやじきが八百。二番棧敷が七百。三番棧じきが六百。並棧敷が五百。土しやじきが百づゝもし。つちしやじきはきりおとしのこと。［見物］そりやァ八へげへに高くござる。そんだら並しやじきを三百に負なさろ。［頭］負るの。へすのといふは。只のわたりのこんだァ。關東八十八櫓のてつぺんといふ芝居だァから。一もんだれ。二文だれねぎりこぎりはごさんねへ。［見物］そんだら弁當の運上は肩なさろ。［頭］いつせへ。いんにやといふきみのことば。辨當が一ト組で二百。酒が一舛で七拾貳文ッヽ

の運上は。わたり芝居の式目だァ。しかはい。モゥ翌切りになつたこんだァ。まけてやりますべい。サア割印のう持ていがつせへ。ト木戸札さけ弁とうの割いんをわたす。あとへ來るは六十あまりのばゞ樣。つのかくしをかぶり。珠數袋から錢をひねり出しながら。〔婆々〕コレお頭どのよ。冥加錢なごゝへさん出し申た。其お札のういなゝかせてくれさつしやりましよ。〔田舎嚊〕わしは此頃毎日つゞけて來た嚊でござりもす。けふははや札錢のしがくがござんねへから。御ていどのに隱して。引割のう貳舛たらず持て來もした。是で土棧敷へいれてくれさつしやるべいなら。忝くござります。〔頭〕こりやァへへ仕づらい相談だァが。毎日來めさるこんだ。サア札のう持ていがつせへ。ト引わりと取替る。其外あまたの見物くんじゆおし合へし合。木戸口へ與五七勘太も來る。是はど與五ふらくまのゆへ。頭も知たかほなり。〔與五勘太〕親方どの。けふもはいでかく盛ます。〔頭〕なんとしてかおそくござる。今がてうどこびりだァ。こびりとは中入の事。此まくで櫻川豊次郎殿をほめてくれさつせへ。〔二人〕譽べいとおもつてゐさわさ〳〵と來もした。わざ〳〵といふ事。木戸番どの大義でござります。ト云ながら木戸をはいる。あとにつゞいてうさんらしき男はいろうとするを引留メ。〔木戸番〕コレ待なさろ。ふだ錢のうよごさつしやい。〔かはかし〕おらは山屋むらから來たのだァ。ト云ながらはいりにかゝる。〔木戸〕なんぼ隣村のわかいしよでも。神事芝居たァ違ひ申す。しいなはなり申さない。トやり合ている所へ。同村のわかいもの二三人來懸り。〔ツレ〕惣六じやァねへか。何のうやじり合ゥのだ。〔かわかし〕何だァ角だァのしやべちやァござんねへ。おれが木戸を這入るべいといふ事もし。夫を錢の出さしやァいれまいといふから。おこつたもんちやくたァ。〔ツレ〕そんだらいゝは。コレ元〆どの。去年の出來秋に。おらが村へわたりの來た時。こゝの村かたから來めされたわかいしよは。おらが木戸ばんのうしておいたが。皆ッな只入レもしたは。こかァあいみたがひだァ。やさくさいふとはござんねへ。通しなさろ〳〵。〔頭〕わりい樣たちやァはい。こつちの水帳にない事をいふ人たちだァ。去年そつちの村方の芝居のときやァ。おらが村方から薦張の筵を百枚。杉皮のう百把。積物にしたから。夫ではい只見物のう仕たのだァ。今度こちらの芝居にやァ。一文げが物もよこさないで。見物なァたゞ仕べいとか。そりやァ成申すまい。油虫だら磽畠へ付めさろ。〔かわかし〕ならじやァならぬでよくござるは。油虫と云れては一分がたち申さない。〔ツレ〕ヲヽ一分所じやァござんねへ。二分も三分も立申さない。通せるとがならじやァ。かふして通り申すは。ト云さま木戸をやぶりにかゝるを木戸ばんとび下りたゝきのける。是より大つかみ合になれども。元〆少しもさわがず。うしろにかけたる拍子木をはづし。はやひやうしぎをうてば。かねて相圖のふせきと見へ。村はづれのども竹やりにて。おつとりまく。〔　〕外の村でほたくとはあての横槌がちがひ申すぞ。ほたくとはあばれる事。だ

まつていかじやア。おらか相手に成て突留申すぞ。ト鑓ふすまにて取まかれ。さすがのあばれものもぐんにやり。サアはやくいかつせへ。〔かはかし〕いぐめへたアやねへは。コレ元〆どの。きつとやげへしをもつて來もすぞ。〔頭〕ヲヽ持て來めされば。やたアとは云申さない。おしやらくの長介だア。よくつらのう見知ていぐがいゝ。トひげもみあげて大平らくは。何かたも同したなり。〔かはかし〕一期わすれ申さない。よく見知申た。〔　〕いかじやア突留申すぞ。〔かわかし〕いぎ申は。〔　〕いがつせへ。ト村さかいへおくり出す。跡はよび聲いさましく。〔木戸〕モウ喧嘩は濟申たア。今ッから晩景まで百だア。

○三立目

芝居の内は開扇を見るごとく。舞臺を以て要とし。先廣に棧敷をかけ。舞臺の上と棧敷の上ばかり。杉皮にて屋根を葺。落間の上は青天井。切落の處／＼に。大木立樹ぬんぬつと生てゐる。棧敷は何れも中二階にて。間々の仕切は簾を懸。前の手摺は新川の前垂の如くなりたる。花毛氈を懸たるが。代官殿の役棧敷。引つゞいて文字入の打敷を懸たるが旦那寺の棧敷。其次に机懸の破れ毛せんを掛たるが醫者殿の棧敷。夫より外は花莚蓙。渋紙。大風呂敷なんどを懸しもあり。花道は土にて築立。南方へ芝を敷。瞿麥姫百合をあしらひて植付。扨引幕は色いりにて。地獄極樂の躰想を染拔たるは。中條姫のお曼陀羅とも云つべし。〔切落見物〕どれこびりの間にばりのうこいて來べい。○おらアはこひのうぶんぬくべい。ト居たり立たりする。中うりも木戸番の如くあかね染のなげ頭巾。かわごのふたへくひ物をいれ。〔中賣〕おこしごめや／＼。あめん棒や／＼。○麥湯や／＼。ふつたおれ餅や／＼。あべかわもちの事。稗團子やもろこし團子。○濁り酒や。あま酒や。○握り飯や／＼。米の飯の握りめしや。本の飯のにぎり飯や。

〔見物〕コレ／＼こゝへひゑだんごのうくれさつせへ。○おれにはあめんぼうのう呉さつせへ。ト飴を買。江戸のあめとはちがひ田舎にてはもみぬかにてつゝてあるゆへ。まつ黒なつめでこそげおとしてくふ。〔勘太〕あんでもでかい見物だア。地頭屋敷へ强訴の來たやうだアはい。あくとがさわりますべい。よろさつしやりましよ。とすはる。あくととはかゝとの事。〔與五〕一番しやじきが代官どの。二番しやしきが傳龍様だア。しかもおさじどのも來て居られらア。代官様とおてら様とお医しや様ははや。どこでも威光が强いは。角力も芝居も錢なしだア。ト二人はそこらのさじきなど見まはしてゐる。向ふの方にて何かこうろんの聲がする。〔又六〕是孫作。さつきから百万陀羅いふこんだア。なんぼ札を先へ取てはいつても。お身はおれが尻へ付べき筈だ。跡へさがつて見物のう仕めさろ。〔孫作〕又六どの。そんな横車はやねへ物でおんじやる。〔又六〕無理も非道もござんね

へ。お身が家筋は。おらが曾祖父殿の代に。普代女郎のづばらんだ庭子だァから。おらが先へたつべきはづしやァござるめへぞ。［孫作］亦六殿。わり様も地面の見て物なァ云なさろ。大飯振舞の座席たァ違い申す。遊所で席論なァ入申さない。先へ這入たものが先に居べき筈でござらァよ。こかァ惡所でござりもす。［又六］あく所も灰小屋も入申さない。此南鐙坂の村中では指折の又六だァ。等行寺様の正月參りにも。おらが箸をとらない内は。名のし殿でも。庄屋どのでも。一番汁粉の親椀の蓋のう。だれも明る事は成ッ申さない。代〻大姉代〻居士の家柄だァ。［孫作］代〻大姉九年母大姉でもとんちやかァござんねへ。そりやァへへ。場所と所に依たらいへ柄も入申べい。今も云通りこかァ遊所だァ。遠くて見づらくは。早く來て前の方へ這入たがよくござるは。

［又六］夫をおどれにならうべいか。［孫さく］知じやァ教ますべい。ト二人とも聲高になる。折からまくを明けて口上。口上 東西〳〵さァて。此所に置まして當村他村から役者色子へ下さつた。積物のかき付のう讀上ます。しづかにしておきゝやりもし。東西〳〵。トいへば桟敷も落間もひつそりとなる。當村方彌平次様團兵衛様ゟ錢廿四文。倉橋熊吉へ下さる。是で酒でも呑とつてへ。此とつてへをながくひいていふ。小泉村のお嚊様方より。ぼた餅一じきり。やう手作の醴一とつくり。惣役者ども色子共へ下さる。よつぱら飲喰て働けとつてへ。よつぱらとはしたゝかといふこと。すがた村吉藏様の御隱居様より。絹紅二三尺。内山金三郎へ下さる。越中褌にでも仕ろとつてへ。同温飩の粉一袋。櫻川豐次郎へ下さる。是を顏へぬれとつてへ。小泉村。稲葉村。山屋村。鉢村。千手町。右五ヶ村のわかいしよ様方より。麥一かます。茄一籠。かぼちやァ十。玉味噌五ッ懸。葉煙草三斤。竹川三郎右衛門へ下さる。随分かせいで働けとつてへ。當むら等行寺の和尚様ゟ。線香五把。五種香一袋。松本濱次郎へ下さる。衣裳掛衣着をふすべろとつてへ。ほろぎとはうちかけの事。同大海傳龍様より。枇杷葉湯百服。暑氣に當た役者どもにふり出してのめとつてへ。同お娘子様ゟ花絞りの手拭一ひずッ、。櫻川豐次郎松本濱次郎へ下さる。是をかぶつてじよなめけとつてへ。山屋むら高井浦之介様より。酒一樽縮一端銀一對。森山平介へ下さる。ずいぶんかせへでぎしめけとつてへ。同村わかいしよ様かたゟ。寒生姜一袋。黒砂糖二貝。哥唄の富士田久兵衛に下さる。是をねぶつてうたへとつてへ。この外にいなゝかさつせへた物は。又跡で讀立ますべい。もはやこびりも濟ましたから。押付曾我兄弟對面のきやう言のうはないます。左様におもわ

つしやりましよ。東西〳〵。

○四 立目

代官殿は高宮縞の帷子に紺生絹の羽織。木欄色の野袴。しやちこばつて居られしが。隣棧敷の等行寺の和尚と咄をする。[代官]時に和尚さま。けふの狂言も面白ふござりました。拙者も若い時分は至て放蕩で。所〻方〻遍歴致して。旅芝居をも見物致したが。銚子の浦方の芝居では。何の狂言でも。大切に張子の赤鬼を出さねば見物が立ませぬ。仙臺の釈迦堂などの芝居は。見廻りの役人が參ると。樂屋から居合拔の形に拵た役者が出て。やつとふ〳〵のしなへ打と申て。居合をぬく眞似をするので。藥賣の体に成ます。又三人芝居といふは役者三人切の云立でござるから。舞臺へ役者が三人から上並ぶ時は。せりふの廻て來ぬ役者は。小さな屏風を膝の前へ立て置ます。又女形は女形の面。立役は立役の面を腰へぶらさげて。人形芝居の体に成て居るのもござりますて。[和尚]はてなもし。此村方ではそんな法度がなくつてよくござりもす。そしてあの幕をお見やりもし。稲葉の紺屋の惣兵衛が染たげでござる。芝居の幕に地ごく極樂の体想とは。能思ひ付でござりもす。則是が狂言綺語も讃佛乘の縁でござりもふすと。咄のとなりは傳龍老。急病用でそこら迠ゆかれ。跡にのこるは娘のお匕。所名うての品ものにて。朱ぬりの櫛に燒付の釵。六齋市に買つた匂ひ油をべた〳〵とつけ。江戸の姨子から貰た鬢差を曲もせずにその儘で差。髮は鳶の巣のやふ＝摑みちらし。駄白粉をこて〳〵と面をかぶつたごとく粧。仙臺花の取立の紅を口から頰べたへぬり。かすり越後のふり袖に。根古や絹の小六ぞめの帯を吉彌結びにむすび。忍び男の茂さくが切落から目遣ひをして立て行ば。其儘合点して手水に立ふりにて。小便所へゆくと茂作もそこに待て居る。二人は小便桶の際にたゝずみ。[おさじ]おらァはやさきつから逢たくてやるせがなかつけが。とつ様が付て居さつしやるから。拔べいやうがござらなんだァよ。[茂作]ァ＝おらに逢たかんべい。小甚太節に唄う通り。さつさせう〳〵秋の風だつぺへ。トつんとする。[お匕]何としてそんなしよちつぷりをさつしやりもふす。わしがこなさァにいつあき申た。おらは一日も早く夫婦に成べいと思つて。戸隱樣へ願のうかけたから。今年は生年で脊戸の青梨が鈴生に成て。見るたびにぐい〳〵と唾を引てかじりたいけれど。それを辛抱しるのは。立物だァからでござりもふす。おらァそれ程心中をたてますはよ。トなみだぐむ。[茂]

そりやァいつわりでござんべェ。そんだらなせせうよたろどもに手拭のうやらしつた。大方豊次郎か濱二郎に氣があるだんべェ。おさじヤレハアありやァわしが分にして爺様がやつたのでござり申ス。茂いつせへ。さうじやァござるめへ。トせり合うしろに與五七がうかゞいよつておさじがしりべた。おさじア、是尻のうしねるはつめると也。だれだかなと。横へしやくつたたなつちり。振飛されてひよろ〳〵〳〵。心得茂作が身をかわせば。小便桶へまつさかさま。お七これは。茂かまわすとござりもふし。

○五立目

口上東西〳〵。さァて此所田植曾我豊年踊對面の幕でござりもふす。左やうに心得さつしやりませう。但是が切りきやうげんでござりもふす。チョン〳〵。

舞臺正面松林を書落したる簾をかけ。大臣柱の方へそこらのいなり様から借て來て眞物の鳥居を縊つけ。目付柱へ杉の皮を卷。眞物の杉の枝を取付。一たい鶴が岡八幡神前のてい。後谷。黒彌五。海野紙でこしらへたる素袍。張子の立烏帽子。万歳扇のおや骨を折懸て末廣にしたるを持。宮神樂の心意氣なれど。何だかつまらぬ鳴物にてまくあく。

後谷イヤコレ二人の衆。今日は此鶴が岡八幡様へ。工藤左衛門介經殿が惠方參をお仕やるげでござる。その待うけのうすべいと思つて。此後谷の荒次郎ゑさわさと。出はり申たっ。黒彌五此黒彌五も其分別でござり申。海野おらもそうでござる。時にはや工藤殿は遲い事でござり申。大方朝飯の仕かけやうがおくれたァからでもござんべへ。ト云ていると切まくの内にて。○梶原平三出はつたァ。トいふ。三人ァニ平三どのがお出やつたァとか。○梶原平三出はつたァ。ト梶原さいとうじまのもめんどてらに。黒もめんのくゝり頭巾山かたなをさし。くわへきせるにて。うしろ手をくみ。江戸なら太鞁謠といふ所なれど。きつねつりのやうな相方になり。花道の見へもなく。ぶら〳〵と本舞臺へ直る。

三人コリァャ梶原殿どなァ用もござるめへに。なじよにお參りを仕やり申た。梶今日は此頃にないぬくとい日だァから。春戸のめぐりを野良廻りのうするとつて。ついぶら〳〵と爰迠來もした。お稲荷殿にでもばかされたげでござる。そして又にしたちやァとつときの着物のう着て。なじよにそこに居やり申。後谷けふは工藤どのがお參りのうめさるげでござる。夫を待受るのでござるはよ。トいふ内梶はら切まくの方を見て。梶時に三人の衆。向ふの方からしよなめきが來もすはよ。三人ホンニのんし。ト皆〳〵向ふの方を見ると。べこ〳〵三味せんの相方になり。ふじ田久兵衛さるの子だんのうをうたひ出すと。とら少將柳にけまりにぶら〳〵貝を染たるもめん衣裳。いんきんさらさの帶をむすびさげ。おさじ殿からもらつた手ぬぐいをかぶり。朝比奈は鶴の丸をそめたる半てんもめんづきんをかぶり。太鞁をたゝきながらおたすけおどりの見へにて。すつとこおどり。ごな〳〵おどりの。小ぶないよこのをおどりながら。本

ぶたいへ直り。とゞ覺兵衞禪子弓くどりあしよきこすむ。〔見物〕ヤウ／＼櫻川松本のせうよだろ。熊吉殿も太義でおんじやる。（トほめる内。與五七勘太花道へあがり。）〔與五〕東西／＼。狂言半へ邪魔だつぺへが。ちくとんばかり讃申そう。豊次郎殿のいとしさは。天にたとへば星の數。山で木の數草の數。七里が濱では砂の數。召たる小袖の糸の數。五反畠の芥子の數と。ホ、敬てつん出るこんだ。〔勘太〕つゞいておらゝも讃申そう。濱次郎殿の形振は。立ば芍藥居れば牡丹。ありく姿は百合の花。熊吉殿をも譽申。顋さに頰さに生へた髭。いわば野に咲薊の花よ。日なたぼつこをめさるなら。產毛屋鑷でおぬきやう申と。ホ、敬てぶんぬいた。（この外ひきつゞいて五ツ六ツあり。これを略ス。）〔梶〕おらアはやお助だアと思つたら。大礒の虎化粧坂の少將。太鼓ぶちなア朝比奈か。〔後黒海〕コリヤアへへたまげたこんだア。〔朝〕げへに笑ひめさるな。けふは工藤殿が惠方參りのうさつしやるから。對面のうすべいとおもつて。曾我兄弟が出はるげだ。夫のう聞かじつて。此二人のおしやらくが逹しべい用があるから。逢せてくれろとせがむから同道のうしたのだア。〔虎〕小林さァの云つしやる通り。おらが知音の十郎さァに逢べいと思つて。少將さァと云合て人の眼にたゝないやうに。こんな形にむくれて來もふしたァよ。（むくれるとはやつす事。）〔せう／＼〕虎さァの云つしやる通りだア。おんじいたちよ。戀には身をやつせでござり申ス。〔梶〕夫で別つたァよ。したがはい。曾我兄弟なァ貧乏神の申子だげて。お夷にもお大こくにもうとまれた青野良共だア。正月御だァの。田うへ浴衣だァのといふ物は。夢に見た事もない。三百六十余かんにち。野良着のぼうた一枚で。水ッぱなのうすゝり上る貧乏野良に心中つくすは。悪い分別だア。なアわかいしよさうじやァござり申さぬか。〔後〕夫さもし。虎せう／＼には介つね殿が氣が有げた。貧乏神なァおぶちやつて。工藤殿にねつれるが。沼垂の水糖のうなめるより味いせんさくでござらアよ。（ねつたりの水あめは當國のめい物也。）〔黒海〕さうでごんさる／＼。〔朝〕だまりなさろ。曾我の貧乏がお身達が厄害に成申か。人の七難より我身の八難だ。お身たちが身代がどれほどよくござる。〔梶〕なんぼたれが身代がわりくつても。曾我兄弟には叶ひ申さぬ。なぜと云めさろ。兄弟におつ惚た虎少將も。尻押のうめさるお身さまも其ざまは何でごんざる。お助の眞似のうしるとは嘘だんべい。やつはり本に錢のう貫つて兄弟にみつぐのでこさんべい。太鼓ぶちの朝比奈。お助踊の虎せう／＼。こつちの村方は三年が内法施留だア。脇の村へ通れ／＼。〔虎少〕小林様なァ。あんな雜言のうつきます

はよ。肝が焼て成ましないノ＼。（トなく。）
小林大はだぬぎになり。[朝]げぢノ＼殿よ。お身様な
ア年に恥たがよくござる。何の意恨が
有って今のやうな雑言のうつきめされ
た。そしておらやとらせうノ＼に。
い〻名をつけて下さつて。忝くごんざ
る。祇なァこうして云ますべい。（トよこぞつぼうをはれば。三人取さへる。）わいらも相手だァ。（ト立まはりになる。これも江戸の芝居とはちがひ。見へも何もなく本のつかみ合の如く也。）[虎]ヤレ
ハア存分いふだら口でいふがよくござ
る。手を出したら負に成ますべい。[せう〱]虎さァの云つしやる通りだァ。虫の
うへさへておつこたへなさろ。[朝]アニ
ハア堪忍袋の緒がきれ申た。はなしめさ
ろノ＼。[虎][少]もつけな事がおこつたァ。
だれぞ來て取さへてくれさつしやりま
しな。（ト大聲でがなり立ると。きりまくの内よりばたノ＼にて工藤左衛門。何かつまらぬ惣かみのかづら。火うち入の布子ばおり。同じ仕立の大どてら。尻をまくりながら。）[工藤]其
喧嘩はおれがもらつたァノ＼。（ト花道の見へもなく本ぶたいへかけ付。朝比奈を引留。）是あにいせく事はね
へ。此工藤左衛門がおつ留た。一番留
てくんさるなら。忝茄子の鴫焼だァも
さ。[朝]すけつねどのが留さつせへても。
聞申さない。やだァノ＼はなしなさろ。
[梶]工藤どの。い〻所へ來て下さつた。
ちくとん斗りの間違ひではや。朝比奈
殿がはんけへのうおこされて。なじや
うにも仕べいやうがござらなんだァ。
[後][黒][海]よく挨拶のうして呉さつしやり
まし。ヤレハアつらいめに逢ましたァよ。
[工]あれ程にいふこんだ。よろしてやり
なさろ。皆士ゝたへ頭のう堀込で。誤
りめさろノ＼。[皆ノ＼]朝比奈様。眞平よ
ろさつしやりもし。[朝]よくござる。り
やうけんのうしますべい。その代に工
藤どの。ちくとばかり頼たい事がござ
るはよ。[工]あんでも聞ますべい。[朝]そ
んだら云ますべい。別の事でもござん
ねへ。曾我兄弟の青野郎どもが。お身
様に對面のう仕たがり申す。逢て遣つ
て呉めさろ。[工]朝比奈殿待なさろ。曾
我兄弟のやつらはおらにはちつとさし
合だ。是はよろしてくれさつしやりも
し。[朝]そりやァ詞がちがひ申ス。わり
ア様の云事なァ聞ヵせて。おらが云事なァ
きくめへとか。夫じや損徳なしじやァ
ござんねへ。そんだらよくござる。又
けんくわのうおはだつべへ。梶原そこ
へ出され。[工]ア、是きくめへとは云申ス
めへ。なら程逢てやりますべい。[朝]又
嘘言じやァござんねへか。[工]君子に二
言なしでござるはよ。[朝]待めさろ。おれ
が爰のう退たら。介つね殿が逃べへも
しれ申さない。お身達二人で押へて居
めさろ。（トとらせうノ＼工藤がそでを引ツぱり。）[二人]死力な
ア出してへさへ申た。[朝]どりや二人の
ものを呼出しますべい。（ト切まくの方へむかい。）そ
こなァ灰小屋の陰に扣へた二人のせな
ご達。介つね殿を壓狀ずくめにしたら。

對面仕べいど云こんだ。早く出て逢めさろ。〔十五兩〕切まくの内より。心得申シた。ト江戸なら對面三番といふ所なれど。どふいふあつらへかきゞすのめりやすになると。兄弟みの笠にて。十郎は木ニてこしらへたる鍬をかたげ。五郎は鋤を眞赤にぬり。兩方へ長く下つた前がみのかづら。竹にてこしらへたる弓矢をもち。花道の眞中につゝぼりと立て案山子の思入。この見へ大おちにて切落しよりどろ〱とかけあおり。十五六人ほめゝばあり。〔兩〕曾我兄弟なアどのやうなざまだアとおもつたら。苗代の案山子か。道祖神殿のう見るやうな出立だア。あれでも虎少將が知音だげだア。みんなわらひなさろ。〔皆〱〕ロアヘヽア〱。ト大口を明て分別もなく笑ふ。〔朝〕そまにたかつた鳥のう見るやうにやかましくござるは。サア〱二人のせなごよいふべい事があらばそこで云めさろ。トいふ内どこともなしにさら〱しきゆへ。東西〱といへどもしづまらず。それもそのはづ切おとしの板のうらにせみがとまつてなくのなり。後見竹竿を持て來て追ちらす。

かけ合せりふ

曾我十郎　守山平介

同　五郎　内山金三良

〽十 夫桃栗三年柿八年。梅は酢とて十八年。五けふ吹かへすあまぼしの。かきたくる程肝玉が燒て頰さか赤澤山。十おらが親仁の河津殿。柏が峠で猪狩の。列卒に出られた歸り懸。椎の實取てくふ所を五蜂に珍寶さゝしつめて。放いた矢さきがあやまたず十ふんぐり玉なア射かぢつて。橫寐所へおつ立たア。五疝氣の虫なア香を立て。十ぐうとも五すうとも云ばこそ十そのまゝそこで五おもいば〱十これ。おもひ懸ない災難で。河津どなアお死にやつた五車前草どのゝ御ニともらひ。土午房を見るどく。穴さア掘て埋込ンだ十夫から代ゞ取付の。掃除旦那の賴朝様五今は掃除をすけつね殿。糞附馬のうま〱と。人のかぶら菜引ッこひて。漬大根追納るげだ十壓のおもたい頰の皮。川津。宇佐美に。久津美の庄。合せて三ヶの庄屋殿。紋の庵ッにもつこうに。さらへ込だる實の山五寶の山へ入ながら。只は歸らぬ介つね殿十親の敵をうつ鍬柄。天びつかりの天ちよこを五てつへんさアへいたゞかぬ。仇矢は放さぬ此弓矢。腰の骨なアぐつしやりと十立たら大事かそつ首を。五其儘取てとりおどし十まアさう思つてくんされと二人ホヽ敬て白ス。

〔朝〕ヲヤがアおつたこんだ。川つかへなしに能クしやべつたア。〔工〕コレ朝比奈殿よ。あんまり褒さつしやるな。あんだかはや氣味のわるい口上でごんざる。おらはもふいぎますべい。便氣が付申シた。〔虎少〕なつぼうでもはなし申さない。〔朝〕ヲ・さうだぞ。もしかけ出いたら。褌の下リのう引たが能ぞ。コレ二人のせなごよ。ちつとも早く爰へ來て對面のうしろ〱。〔二人〕呑込申シた。さらばそこへいぎますべい。ト本舞臺へ直る。〔朝〕ャレ鳥居先へよるな。せつかく掃ちぎ

つてある所が。藁簑のこみになるはよ。〔朝〕ごみに成てもよくごんざる。すつこんで居めさろ。〔工〕そこへねまつた二人の若者。ねまつたとは居る事。先へ出はつたは何といふ。〔十〕舍兄の一万いつかく成て。曾我の十郎祐成と云申ス。〔工〕次に出はつた甘塩は。前がみの事。〔五〕舍弟の箱王でつかく成て。曾我の五郎時宗と云申ス。〔工〕兄祐成はお袋のまんかうに似て。ぼやらこく。弟の時宗は親仁の川津に似て。岩疊な生れ付だ。親はなくてもがきつ子は育とやら。ハテでかばちなく大きく成たなア。〔二人〕介つね殿。〔工〕二人の若ィしよ。〔二人〕ハテめづらしい。〔三人〕對面だなア。〔朝〕何と工藤どの久しぶりでの參會だア。二人のものに盃のうやつてはおくりやり申さぬか。〔工〕盃なア仕申さうが。酒のう呑でやだをふんだら。大事だんべい。〔朝〕ソリヤア氣遣なござんねへ。此小林が受合申ス。幸腰へ付て來た。徳利酒がござる。サアくぬしから始めなさろ。ト腰付のびんぼう徳利に石ごきをそへて突出ス。〔工〕そんだら辭義なしに始ますべい。慮外ながらついで呉さつしやりましよ。トちやわんにうけて一口のみ。顔をしかめ。あたまをふりさまぐうまきこなしあり。〔朝〕あんどいゝ酒だつぺい。自慢ではないが。おらが手造りだア。〔工〕ア、いゝ酒でござる。近頃は不作でどこでも酒は造らないが。いゝたしなみでござり申ス。祐成さし申さう。〔十〕ヲ、。ト返事をして側へより。竹の子笠をぬぎ。茶わんを受つゝ、とほし。舌うちをして。工藤へもどす。〔工〕時宗。〔五〕あんだア。〔工〕石ごきのうさつくれべへ。こゝへねまれ。〔五〕ヲ、ねまるべい。トつるくと來て。茶わんをうけ。こわしの思入にて。石ごきをかぢりわる。三寶〔朝〕ヤレハアあきれた肝癪だア。〔見物〕ヨウく五郎やつたりく。もちつとぎしめけく。とほめる。此所かけ合にて股野川津角力もの語りあれど。丁數の登るをいとひてもらしぬ。〔朝〕時にはや余義ないむしんでござるが。二人の者に肴をはさんではおくりやり申スまいか。〔工〕わしもはアさう思ひますが。何も持合せ申さない。トそこらを見て。よくござる。ト十郎がぬいだ笠を取あげ。片手には朱ざやの山刀を持。十郎には竹の子笠。五郎には此山刀。是が肴だ。つまみなさろ。ト二人つかくとよつてうけとり思入。〔十〕〔五〕アニ是が肴だアとか。〔工〕笠のうふせればふじの山。半夏過ての竹の子笠。五月の末は駿河の國。富士の裾野の陣屋の内へ。〔十〕夜這は仕付たおらゝが兄弟。簑笠かぶつて忍び込ミ。〔五〕親仁の敵と名乘懸。すのこも通れと切り付たら。〔朝〕血はまつかいなさび刀。〔五〕此赤鰯の山刀で。〔十〕本望とげろといふとか。〔五〕とても事だら今爰で。〔朝〕ヤレハアせつ込事はない。此場は別れて歸りなさろ。〔二人〕わかれづらい所だが。せう事がない。いざますべい。〔虎〕咄が有て來申シたが。取紛て云ましない。〔少〕是から内へ歸り道。咄しながらいざますべい。

[朝] サアいゝ道連が出來申シた。行道筋は向ふの田の畔くろ。トいふせりふをきつかけに。正面のすだれがばつたり落ると。見わたし二三里の天地自然の大仕かけ。是は江戸では出來ぬとなり。見ぶつぶちぬき／＼と云てほめる。ソレどこぞいゝ麥畠むぎはたけが有たなら。ころけこんだがよくござる。[虎少] 朝比奈さア。[朝] 二人のおしやらく。[十五] 介つね殿。[工] 二人のわかいしよ。

[皆／＼] さらばでござり申ス。ト見へわるくならび。

[工] 先今日は是切でござりもふす。

打出し

右ノ本作者書捨ノ原本ヲ以テ。校合一過セシメテ畢ヌ。師ハ大象ノ如ク弟子ハ猿松ノ如シ。三本足ラザル筆ノ毛ヲ採ツテ。其脫漏ヲ補フト爾云フ。

門人　千差萬別
天竺老人

右之本以作者書捨之原本令校合一過畢。師如大象弟子如猿松。採不足三本筆毛補其脫漏云爾

門人　千差萬別
天竺老人

後序

神代巻曰。天照世界の親玉速素盞烏尊の悪洒落を踈ませ給ひ。大癇癪の磐戸隠れより以來。世は闇雲のめつた洒落。次第〳〵に増長し。五月蝿如無駄音を小冊にさへ書著はして。世に行はるゝもの八百万巻。何レも似たり寄たりにして。阿那面白き趣向もなし。爰に

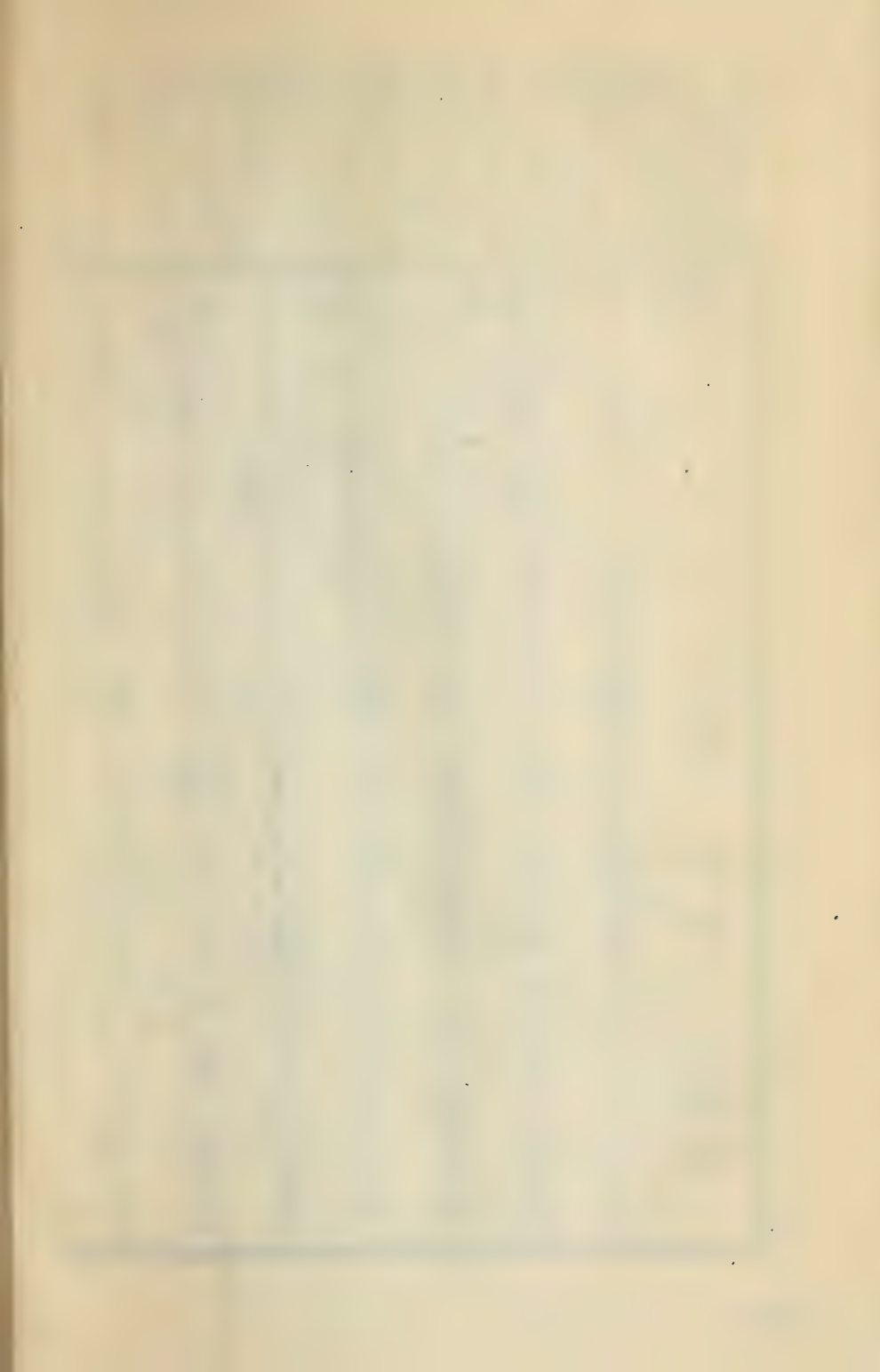
我師万象亭。鈿女命の昔を思ひ俳優ならぬ業くれは。世間の晒落の裏を行端出繩の横なまれる。夷振の可笑味にして。天照神に吹出させ。しかも磐戸の差合なく。笑ふ門には福來る。その福神の神等の。員に合たる七珍萬寶。七尺下つて後に書す。

未のはつ春

跋

此小册は。江戸前の隱士。萬象亭の戲作にして今世に行るゝ洒落本の。或は妓の耳の垢。又は娼の臍の脂を穿鑿仕たるよふな。片づんだる物とは殊なり。通となく野夫となく。一トたびよめば臑のかきかねをはづし。數腹すしのよれて。その可笑

さやめとなし。予
に清書せよとの師
命に任せ。筆にも
紙をくらはする。
未のはつ春。大高
檀帋の威に押れ
ず。おめずおくせ
ず書ちらすは。狐
めん堂の主人。其
由をしるして跋と
はなしぬ。

風來山人之
孫弟子

筆者
狐面堂柳鄉　印

表紙　ヨコ　四寸三分
　　　タテ　六寸一分

本文枠　ヨコ　三寸五分
　　　　タテ　四寸九分

百人一首和歌抄目叙

昔周暇王以翠鳳之毛為裘。一日燠贖二回暖肌矣。今也松永館深孔雀為於裳回き迹著日暇衣裳也。通之衣裳以八丈為紬藏。衣裳以木綿為錦也。如真以錦為木綿以八丈為紬。是人一對視暇衣抄而為百文

二条通用物而已

天明七年丁未孟陬

楓葉山東隱士京傳老人識

ひらるまいれさのたら。何がしあまたは。
うかれめのそとよりもよぬし。まくらどう
どちらかちかをつうらむねく。小宝山庄の色里
うれしさるからは名く。こころひたい祝ふ絵文字
ふしぎ御男がかほまし。めども、いはず。名有しめ
でし。給そうでうい。よまやむかし法性寺殿
乃道の名残をよびいきぼうあとるの大阿
らば方よのとおし。しく山乃名有人ぐ

むさうしあらしそし。やもとりでの坊(ず)うらはいせ
祢かつらの寺となんぞ。さう寺きよめすゝはきし
あらよもいそゆるかゝ。こ岐大やの歌にみくね
もとあまさきあふりどもさへ。伊川深の浦(うら)濃(の)う
かくいうるう。あるあ代乃先たち。在中将(ざいちうじやう)卷
寺のさ母紙。多津ゝの川波れをとめしや
小阪乃ゆし豊。むかしやなる蛸のめたはゝあ
まもりっ今もなほ、古刹じといそそそたしきや

ゆりよせられし。衣きてあるじの庭にあゆみ、
あれしく。讒ぞ身の罪はさく。和田の兵
つかふ。こくぞよ燃したるつかのうた歌よ
もちせるもあらんふしせ。君より深まかしらお
なぶつきさくうよか清しい。そうろ手の名も恵
むそじあまりより深どいぬ事かたぐ。帰
めぐりや多かりし。せ恵れかりつき積りとん。
なもちし面かなれもどりせんもふし人の人

かな。かの子らよほと物はみなさかしき事。
是らの人遠ざかるよその書に依で。人も
草もはさかりもあや。ともにその斎のり
もとへまでハなつけもせで。ハ言むかへの声に紀
ちとせ悦ばい。かつ秋の田のかりそめにハいへるぞ。
おほかたなくそそのかし心意歌ハその命をあ
枕かさみて如に賀娘まで志ず。此の短かいかなるの山流
思ひにおもふ。松意をのしこゝをも母すゝみ深読。

山鳥乃尾の。五濃もえりまでありけれ
ど。はらぬきいとしつけその。いとゞらず。
こりくのもとめすうとゞめびく。ふ
はゞみじかきもそもて。山どりのまずら
尾乃。ながしじゃど。はじめのかしろがえ
りたる侭ても。こうなるはらずんぐ姫

源傳

政演画

京
京

○天智天皇御製一首

○持統天皇御製一首

○柿本人麻呂一首

○山邊赤人一首

○猿丸大夫一首

天(テンニ至ル)レ持(モッテ)レ柿(カキヲ)ニ山(ヤマ)猿(サル)一ハンジ物

右以色紙口決(ケツ)ノ大事ナレバ茲(コヽ)ニ註(チウ)ヲ
ニセラス

中納言家持

天武王子日本記作者
家人親王
又作舎人(イヱヒト)

家田屋太右衛門尉
新吉原娼家

家橘
市村羽左衛門

家暮
坂東三八

家持
一説ニ此人リンキフカクテソノクセニ紋所ハ通ナモンユヘニ通ナ紋ヤキ持ト号ス

[illegible]

らうりくへけぶしたりそれおとへとけると
さめふりとんぶめいてまうらくさかなれば
よくく引書とうんろくうんがふべし

白氏文集ニ曰
誰言南国無霜雪
○南国トハ品川ノコトヲイフタモノジヤ
霜トハヲク霜ガ
雪トハ綿ノコトジヤ

白木屋引札ニ曰
生いてさ　ふろふれい　大安賣仕り　かく

東鑑五十二巻ニ曰
被レ行泰山府君百怪白鷺等祭云々
今掛りまこいろもさぎ娘の
ちやぶんどやアゆくり

毛詩ニ曰
振鷺ニ王之後來助レ祭也
○振鷺トハ振袖ノムスメガ鷺娘ヲヲドルコトデアル。二王トハ妙国寺ノ。二王ノコトゾ。助祭トハ天王サマノ祭ジヤ

一説
宇治の系つこの
せゞれありといふ
今一ぶく一せんの
りけあんどうにその
系のこれあり

喜撰法師（きせんほうし）

四十七騎一人
喜太八 竹森
喜三太 御厩

喜三二 画双紙作者
喜三郎 小野川

喜四郎 吉原越前屋

喜六 佐川田
喜長 沢村長十郎

喜撰
喜瀬川 大磯遊女
喜代三 若女形

陽成院（やうぜいゐん）

楊柳観世音（やうりうくわんぜおん）〔佛像圖彙〕

楊貴妃（やうきひ）事ハ見〔長恨哥〕〔楊妃外傳〕

楊枝屋阿幾（やうじやおいく）浅艸寺内 事見〔指面艸（サシモグサ）〕

楊名介（やうめいのすけ）〔源氏夕良巻〕三ケノ口決〔つれ〲艸〕

楊香（やうきやう）〔二十四孝詩〕追テ虎ヲ助ク父ヲ

陽成院

名頭文字ニ曰

峯。定鶴。亀

松竹

画本八十宇治川

猿人狂ノ哥ニ

よりともハせんにつる
あきらいありつるつるつる
なおそつるそれかし　つる

莊子ニ曰

鶴ハ不シテ日ニ浴セ而白シ

おつるハ一日ゆあミせずとも
うつくしくしろくあり

男女代八卦

十二うんそうゆうの
やしなひの母まつわらは
つるの子が千代をうける
ふるさとのかて

おやしなひの峯らく羽子ハ川へおちい
りとのおつるが羽子世へおちけるがお峯ハそ
したなく川へおちし羽子さへもとめてかけて
とりあげて来るおつるハ世へおちし羽子を
急しゆくしてとりえずそのまくもとそてとく
此根子を地蔵何がしどの母りかりうんのひお
つるが来しやうとせうびしのよひめうけまかくのふ
こいぞつめりて○孫たちまハ一家中のこいとる
ゆうふとをみせ付られおやしさ中のこいをたて
とりてかこいちうのひゆくしゆうへうりその代
がはけりくて今ハ太の諸とみることか顔のゆげ之
ふちとなりわる○そのうへおつるハ代々つぎ給

和漢朗詠集

鶴帰ニ旧里一

おつるがふしぎとききて

ふるさとへかへりしるしを

つくれり

相鶴経ニ曰

鶴ハ陽鳥也

因ニ金気ニ

おつるハとうく

花扇書待乳山碑銘

名月やところの

二ちやうとまつちの山

五町

児女唱唄ニ曰

おつるがうばをあけてござよ

わらのけ

江戸砂子

東海道中双六ニ曰

二ちやうこのまんぢう

川の名物とアリ

在原業平朝臣

本院左太臣
時平 基經男

金平 坂田

川越平 川越産
コイツハ人ノ名デハナカツタ
ハカマニスルモノダヲキヤアガレ

實平 土肥二郎
仕ニ鎌倉殿ニ

兼平 今井四郎
仕ニ木曽殿ニ

大平 一名シツポコトモ云
又コイツモバンクル
ワセダ

業平

一 ちはやぶる
道外百人一首
なり平のあそん
「ちはやぶるくゝくゝて
くゑふさらんうり
下ノ句略
毒虫去ル家
十日 正午
道自めぐをすきてき

ちはやぶる神代もきかん龍田川
からくれなゐに水くゝるとは
此哥はあまねく人のしる所なれどもあ
またちとたがし口傳をしるす
ちはやぶる○ちはやといふ女郎ありけるが
ある角力取その女郎をあげてあそびけるよ
此女郎よくよく其女郎をふるうせありてかの
角力とりをそのよさんざんふりける
神代もきかん○その角力とりはちはやに
ふられてさびしくひとりねしてゐる夜更

伊勢（いせ）

伊勢平氏嫡流

伊勢喜　豊竹伊勢太夫門弟廿歳子

アメノオシヲトウナストモ云

伊勢三郎　義経ノ臣

四天王ノ一人

伊勢四郎（しろ）　御藏前

伊勢　竹村氏

吉原住菓子屋伊勢

あわて此よくとさとく〳〵
ことよとや

[矢根五郎せりふ]曰
こいしとねむどうさま
それえぶんのまくらぞとめん
ぞりくくつて此世ハ 下略

ヲランダ本艸
[DODONÆUS ドドネウス]ニ曰

AWANOMOTI MO（アワノモチモ）
IJAIJA ZOBAKIRI（イヤイヤツバキリ）
ZOOMEN KOBITAI（リヲメンシイタイ）
NA（ナ）

ヒダリヨリヨムベシ

[異聞集]ニ曰
呂翁（ロヲウ）廬生（ロセイ）ニ取ツテ一枕ヲ授レ之ヲ 中略
寤（サメテ）夢（ユメ）而黄粱（アハ）未ダ熟（スレ）ニ 又見[枕中記]ニ

[謡曲耶鄲]ニ曰
さてゆめのまの粟飯の 下略

又考ニ[画双紙金々先生栄花夢]ヲ侍ルカ

又一説ニ水の泡（あわ）で此世をとつくりとかんがみりと云
引ありまたうんうんべきこして

[維摩経]方便品ニ曰
是（ゼ）身（シン）如（ニヨ）泡（ハウ）不（フ）得（ウ）久（ク）立（リツ）云々
このみはあわのごとくひさしくたつことをえず

素性法師

素盞烏尊 神社考 神代巻

素々法都 道心者

辨天經ヲヨンデ町中ヲ
クワンケス

素傳 東野州
千葉氏

神田玉池住
素外 谷氏ノ俳人
一陽井ト号ス

素性

神祇拾遺ニ曰

和銅四年稲荷神影向偶了ニ仲春ノ初午ノ日ニ故至今ニ用ユ此日ヲ云々

白狐社ハ在一條ノ北ニ

著聞集ニ曰

稲荷ノ末社ニ号ス福大明神ト

舌音譜ニ曰

ゲヤマノゲツ子ハ゜ゲノ子ヨクバヘテ。バヾゲヤ。
ゲヤ゛ゲヤ

昔流行唄ニ曰

むかふの山から狐がこまでてさく〳〵でさかなれど
んさく〳〵さつやよふく〳〵よろの〳〵云く

長おもしろ面

人をいろちることをのこゝろさ
つきさとまろちいしゆうの下界

大内鑑

子けりきの段ニ曰
どうやらじや狐の子じやものと

三條右大臣

三條小鍛治宗近
刀工

三條右衛門
熊坂ガ手下

三條勘太郎
哥舞妓娘形
京下リ

三條小六
曲マリニ名アリ
マリノ小六共云

三條右大臣

本朝俗諺ニ曰

三十振袖(フリソデ)四十嶋田(シマダ)

和漢朗詠集

白樂天ガ詩曰

昔(ムカシハ)為(タリ)京(ケイ)洛(ラクノ)聲(ハナヤカナル)華客(カク)

此おきなもむかしハ
京のいなかのきやくなり
まておもはらくをなりし
むすめなりしがところう
らくいの詩あり
中むかし今その
むすめをうちまもてと
ふるきのえいなりしも
此おなごがふるきときを
いふなるべし

一説に此人女ござらは
さそはれて六あそびへ
まふでけるところに春
やよひのころなりしが
としよりての是をえん
てつらびぞといひし
より世の人春なのつら
きといふことがよろこんで
此句もさかえければよい
とらひしを是をしる
も此人らのうらき
なるべし

春道列樹(はるみちのつらき)

作本　春太夫

正傳フジ元祖　春冨士(ふと)正傳

春信(のふ)　鈴樹(スヾキ)氏　浮世繪師

春道列樹

一説

哥舞妓惣藝頭

慶子　中村冨十郎

弘慶子　セミノ人

辨慶　義経臣

運慶　佛工

恵慶　未詳

恵慶法師

恵美須屋八郎左衛門　尾張町

恵美押勝　道鏡ト仝時ヲ

恵心僧都　名ハ源信

恵慶法師

事アイソノツキルハ
ジヤウノモノ云々

本草綱目

土豹（ウコロモチ）
土中ニ住ム虫形チ
似タリ鼠ニ
ヽユレ俗ニムグラ
モチト云モノ

ヽさびし氣よ

茶道大全ニ曰
茶事ハ寂の積
るを好むよあらず
氣の積るを好む也
云々

まざつてばかりゐるなり
ヽさびしきよ○積氣（さびしきは）より漱山ハ幼少の時より
茶事をこのみるゆへさびし氣しつまて住
居ののぞきさもこの漱山がこのこのなれど
さびさののぞきさそ
ヽ人よそこそね○これなどのぞきなののぞきこの作者
もかんじんの人そわらうくるへこえねとなげ
きそよあり
ヽ何さはさよろり○漱山ものさいさそすね人
とそらすとのへしんがうがてきさよ○ろーう
あきがさそあるよいそうに生のび出いづら
へり坊ちんそのさとあきはさよろりとよめるそ

謡曲景清ニ曰
こゑをこそきけども すがたをこそみね盲目ぞ かなしき

老子經ニ曰
五（ゴ）色（シキハ）令（ム）二人（ノ）目（メヲ）盲（マウラ）一（メ）

左傳巻ノ六
目（ノ）不（ルヲ）レ別（ワカラ）二五（ゴ）色（シキノ）之章（アキラカニ）一為（スヲ）レ眛（クラシト）

城州嵯峨五臺山清涼教寺藏版
栴檀瑞像記二十五丁目ニ曰
文明九年の比本尊の眼光破損しけるを鳥山の何某とよばれる細工の者ありけるに仰付て修造（しうざう）しけるとぞ
（これ此鳥山が先祖也）

貴家御文庫
二条家口傳秘書ニ曰
一 繪をかゝる經冊書様のこと
月日の下絵いたしたとへ墨次すとも筆こまかに書てかけさせ給ふ事あるべし
蝶鳥のるいは目を書けさせ申す事あるべし かるがゆゑに鳥花鳥魚なとの類は眼をところにつぶして書すまじく
しからば口傳あるべし云々
今様子これは此鳥山より以来の書法なるべし

源重之（こふりくしりせいさ）

畠山庄司
重忠

善、茶琴ヲ
景清ㇾ全時

重ノ井

御乳人

重太夫ブシ元祖
重太夫

重政
字ハ勝助
為勝家ニカ
忠死ス

鼯受（ゾンジヤウ）

重政
北尾
字ハ左助
浮世画工

重山
四目屋抱
遊女

重之

豊（とよ）重
富本門第
田所町住ス

風をいふこと

病源論ニ曰

風邪寒熱毒

氣

竹取物語ニ云

風おもき人そそはら

いとふくれ

傷寒論ニ曰

發陰者七日

發陽者六日

又詳 徒然振出能書ニ

醫療手引艸ニ曰

風邪六七日不

小便頭痛者

風といふこと病のいきとのまゝのみ

くさけてからの紙れのふところびつれ

いづれの所々ありけるところどころ一盛りのたく

ふみをとのりしてひとつの病をなをり小

ふらせてきーらのとよめるおほく

風をいふこと○ゐる一盛まて病人のきこえあり

まとりさりとのところ風のことにまて身をよ

いさころれともちかびれんのあせをとりてよ

くそてちよく仲呂のまとりさりとなく

やうひろよりて風といふことよあり

病といふ波の○あらうらよあるをおもきを病と

「おのれ

［小野篁歌字尽］ニ曰

巳己已

みはへびなかばすでにおのれは
したにつきにけり

「ここでよりくと全部の
なおのれへしもまつとよ
すうといふの硯なりの
なりと

「のく

［玉篇］ニ

鑿ノミ　穿ウガツ木ヲ　器也

［めやもと筆］

硯のうへを身としめ
さむいつわいとるまあ
ちろとこそしてらぞんせ

藤原義孝

朝夷名三郎義秀

新田小太郎義峯

大星由良介義雄

義亮 本田義光男

義松 天川屋長男

義孝

いのちさへ
伊之助 此ことひとくおつて浮世按ら於ト云
新内ブシ
仇競恋浮橋ニ曰
とこをとわけ出あさ
べや子忌のびてひとり
ゐの女が

君ゆゑなれしかゝるきりしいのちさへ
なつくもかなしと神りひろるこのね
むかしを今あり伊勢の御師のつまと
なりしがいつさてらなうぬいさうひして伊勢
とふちのこゝろをとつけてされけるがその後
かさ目なる男のなへさいるんをむすびしを
をよめるなりし
君かなめ○人はなめよりたびんといへばたとへ
さてかゝさ目なりとも
とらかゝるきりしいのちさへ○此せうに御師たし

山海經 曰

一目国北海之在東

人皆一眼

一説
此女子源氏物語作者の
養ことこころふかくへしく
きこう尊人のなのこゝま
あらんなれ山寺ふとすり
かの御よりところて
むらさき式部の事とぞ
ふとんきさころより
むらさきこきさぶと
とひたのとんとふみう
子を下アをやしてなん
とす
[河東松の内]ニ曰
「とんとむかしなべ
なんやさとん

紫式部（むらさきしきぶ）

後小松院落胤
紫野一休（むらさきの ろきう） 大徳寺

紫姑女（しこめ） 姓ハ何字ハ媢 見ユ[紀原][代醉]ニ

紫夕（しせき） 又濃紫（コムラサキ）ト云 能（ヨク）ス書画香（シヨクワカウ）ヲ 角玉屋抱遊女太夫ノ名跡（ミヤウセキ）

紫式部 源氏物語作者

左京大夫道雅

道端賣餅家太郎兵衛殿

道長
御堂関白

道實
天神サマノヒヤウトク

道成
ヨウ曲道成寺ニ

道無
ヌサクサニノワ古者コヲタヅヌレバチキニシレヤス

女子
松葉屋新造
道汗
○ミチシヲホドナクコノゴロハ袖ヲトメヤシタ

道雅

女手習状
あさとく稽古つかま
ふで習ひのこま
あしざまに人とわたり
ておもうされ候なく
るすあれかしらでとしこと
ことぐらし

古状揃
禱登山之時状曰
執閑花栽藏
悔ゟ萬也

「いふよしもうか

申臣六殺
申事乃由於ヲ

「これよりおこる句へ

「いふよしもうか○あとへのこゝろすどなへいひとく
るもこゝなかなてかくならぬしもくとぞつひ
とけくるのんぞいふよしもうかとよめるへ

【論語】人之将死其言也善「いふこともよからんなり」
遊女白目か哥に
「いのちたにこゝろにかなふものならは何かわかれのかなしからまし」

【摩訶摩耶経】ニ曰
譬如旃陀羅駆羊至屠所歩歩近死地人命亦如是ト云ゝ○人ノ命ハヒツジノアユミノコトシト云
△センダラトハ天ヂクノ言ニテ狩人ノコトヲ云ゾ

権中納言定頼

定之進　猿楽　見二染分手綱一ニ

定九郎　斧九太夫男　為ニ勘平ガ横死ス

定光　頼光ノ臣　又作二貞光一ニ

定頼

朝ぼらけうぢの川ぎりたえ〴〵に
あらはれわたるせゞのあじろ木

祐子内親王家紀伊
然阿上人
紀全禅師
紀文
紀伊国屋文左衛門ノ事ハ
見吉原大全ニ奈良屋茂左衛門ト全時
紀上太郎
浄瑠璃作者
見白石噺ノ跋ニ
紀名虎
見ユ文徳實録ニ
紀伊國屋
沢村宗十郎
訥子
紀伊

松本幸四郎ハ琴高仙人の
生れかはりとも云説有

列仙傳ニ曰

琴高善鼓琴后得
仙乗赤鯉来人間

○錦考善鼓琴后得給金乗
赤鯉至京都○事ハ詳也

三ヶ津評判記

これらより出る
せりふなるべし
あとくんなるべし

おもかげは長鴻の
つらねの作なりと云

漢書註ニ
鴻聲肪傳
之也

○漢ニハ過事ヲ
大鴻肪ト号ス

△今スナハチ文字ヲ
アラタメコウロヲ
サカシマニシテ
孝ト云

源俊頼朝臣

俊蔭事ハ詳ニうつほ物語ニ也

俊頼

一説此人百人一首ノウチニニノイツチ年寄ユヘ名トス

うかりける人をはつ瀬乃山おろし

はげしかれとはいのらぬものを

やまとのうましろぐとのこほりまひとりの

和哥八重垣ニ云
はつせの枕言と
てかくといふ
此女ちゝはゝもなくて
こもりさしのかはく
はかりなのはつせと
いふなるべし
くとこしよみ書
不通

はつ瀬乃○その女の名を初瀬ともおさく
いふに此やうに名をつくれり
山おろし○はつせはさんけいに女あまたの人を
いけどんに男どもおもいれおろしとる
山とははつ瀬のお山ての名也
はげしかれとはいのらぬものを○そのやう
にはげしくなれつけとは此はつ瀬へもい
のらぬものをと毎のうらみをいふを下の句
にこめてよめり

崇徳院（しゆとくゐん）

人王八十一代帝
安徳天皇（あんとくてんわう）―徳宗権現（とくそうごんげん）相州鎌倉

大威徳明王（だいゐとくめうわう）―聖徳太子（しやうとくたいし）　厩戸皇子（ウマヤドノワウジ）　未来記（ミライキ）作者

八大龍王九代後胤（コウイン）
徳叉迦龍王（とくしやかりうわう）―徳願寺（とくぐわんじ）　行徳

中家徳（なかやとく）　高輪（たかなは）　茶屋―一寸徳兵衛

三国志
玄徳（げんとく）　蜀ノ　劉備―貞徳（ていとく）　松永ト云―誹士―桝徳（ますとく）　哥妓

〽山名よせろ〳〵
[兒女哥]に
とらちく〳〵ちく〳〵とん
ゑさむどんのおとひめが
岩まおされてなくとまい
〽せらろて
[四十八手恋所訳]
氷のまかれのせられハせるなど
よどむもつゝきその人を
〽われても末ほ
[助六所月見] 河東ブシ
ひくめさあひく〳〵あがうさ
末の松山まちかけてわれても
末まあちへといむまんの
袂のちらひろ〳〵合
[助六所縁江戸桜]
てちうくまでまみして
めるあめのこふとのぶへうつ
けんとよあり

祭ル金比羅ニ
崇徳院(しゆとくゐん)
徳治 名見崎
徳治 大谷
徳竹(とくたけ) 御厩(ヲムマヤ) [芝居番附]

〽瀬をはやミ岩ねにせかるゝ瀬川乃
われても末のあはんと毛思ふ
大いその〳〵荻屋(をぎや)の瀬川(せがは)と云遊女(うかれめ)
のうたとよめる哥也く
〽瀬をはやミ○瀬尾(せを)隼(はやみ)見る〳〵すさまじいは瀬

参議雅経

経若丸——文字経 常盤津門弟

清経 鳥居氏 浮世画工

祐経 工藤左衛門尉——雅経

みよし野の山の秋風さよふけて
ふるさとさむく衣うつなり

さるおてらのほうきやうきうかつてまてかられ

本朝武家評林 六巻三十六
秋田城介怨女物語
文言曰
行末ハ秋風ノ
一夜ニ替ル人ノ
心見弃ラレンハ
一定也左アランニ
於テハ悔共何ノ
益カアラン

初衣抄終

江次第 十四巻ニ曰
あり平をのこころハ在中ねまして 中略
出家せられしがそのかたくささとくや
さんとあそびのくさやさしおまいらする 下略
あり平さんもがうじぞでん
りてあんどとうさ

琵琶行
粧成毎被秋娘妬
秋風ガコトヲ云
秋風ハとんざやきめちやきこで
おいとそうさ

かげろふ日記 上
世の中におもふこともある あき風のそしあど
とこれぞよふおもふるそらつごとくおまおり
そらごとは秋風がかけりのめす
そらつごとくし

京極黄門殿小倉山荘ノ色紙

百人一首和歌抄中ノ折一帖

青樓妓女駒治ニ雖モ傳レ之ヲ堅ク可キ

禁ニ外ス見ヲ者也

茶飯吉奈良京橋（チヤメシヨシナラノキヤウハシ）

山東源京傳　在判

天明七歳丁未正月初吉日

跋

此書は荻江氏駒治が文庫なりしと。
むかしうつし給の枕にはさみてありけるをあげまき。
乎しいてこふ求てそのふみうつしむ油町のはやま
あふふ。師のこころにたがふのつく　いふなれど。
人のはのともいへりくもまな採字をまつまくもあん　哉
いのちをなかばすてぞ。ともこれすまれさる。おそ魂
往遊て。ゐのく〳〵　選集をとゝのへし。跡着衣抄
と題しく〳〵　後編とん

京傳門子月池

朱翁鶏告誌

百人一首 古今狂歌袋 宿屋飯盛撰 古人今人の像并自詠 彩色入 全一冊

五十人一首 東都曲狂歌文庫 同作 当時名人像自詠 さいしきすりと 全一冊

四方のあか 四方山人の狂歌狂文を集 全二冊

狂歌 才蔵集 四方大人撰 四季恋雑神祇釈教賀 全二冊

通詩選七言古 四方先生著 当世を言とぞ作す 中本 全一冊

同 諺解 同作 詳しき訳を施す 中本 全一冊

同 笑知 同作 上のでく奥書き本 中本 全一冊

狂歌觽 鹿都部真顔撰 詠歌の秀作をあつむ 中本 全一冊

不老不死 仙家長壽臺 四方山人集 ふきうふしの祝ぞ彩色あり 全五冊

狂詩 十才子名月集 四方山人序 同社中詩文 全一冊

狂歌 故混馬鹿集 朱樂漢江撰 全二冊

狂歌 濱のきさご 狂歌のよみ安き事はどをあつむ 小本 全一冊

狂歌 新玉集 四方山人撰 年の始乃歌をあつむ 全一冊

狂歌 百鬼夜狂 四方山人出席 名人等百物語狂歌 全一冊

繪本武者鞋（ゑほんむしやわらじ） 北尾重政画 さいしきずり 大本全二冊

同 詞乃花（ことばのはな） 喜多川哥麿画 當世風俗画狂哥 全二冊

同 數寄屋盆（すきやぼん） 同筆 武者景色等 全二冊

同 百千鳥（もゝちどり） 北尾重政画 全三冊

同 八十宇治川（やそうぢがは） 同筆 武者絵 全三冊

同 吾妻扶（あづまからげ） 同筆 江戸名所 全三冊

同 江戸爵（えどすゞめ） 喜多川哥麿画 江戸名所 全三冊

狂歌評判記（ひやうばんき） 名ある先生方に 芳哉の役割の趣向 全二冊

狂歌立春抄（りつしゆんせう） えのもとわき撰 さいしきの狂哥集 全一冊

狂歌福人双六（ふくじんすごろく） 四方山人撰 さいしきずり 折本全一冊

暦便覧（こよみびんらん） こよみよくかしくえんをあらうてんのあんねしとを分くこうもつべくす 全一冊

通言總籬（つうげんさうまがき） 山東京傳作 りうかうのしやれをあつめ こゝろゆうするか 小本全一冊

百人一首初衣抄（はついしよう） 馬鹿講釈 同作 百人一首のおもむきをおかしく くるつけふるおかしく 中本全一冊

娼妃地理記（じやうひちりき） 喜三二作 五丁町と流行の風俗 名所にたとへたる也 小本全一冊

画圖勢勇談　鳥山石燕筆　あやしきものゝゑづくし　全三冊

吉原新美人合自筆鏡　北尾政演画　折本全一冊

烟花清談　駿守亭作　古代花君名人の孫語　全五冊

挿花手毎乃清水　師をかゝらずしてさし入のりことするの　全一冊

䜛都洒美撰　吉原のけいせいのてうちんのわけとしる　中本全一冊

契情手管智恵鏡　こんらんてくだのでんじゆをおしゆるかゞみ　全一冊

狂訓彙軌本記　おかしみのきかいぶんく大つうこうでんかく　全一冊

氣のくすり　同作　當世のおもしろばなし　全一冊

座奥腹筋三略巻　ざしきのきのどくをあらわす　一枚摺

小紋新法　山東京傳作　おもしろくひやうばんよきこもんちやう　全一冊

客衆肝照子　同作　あそびのてくだとくふうしくおもしろし　全一冊

遊君傕言 柳巷化言　おかしみのふかんど作　名ぐせいのおもしろ古ことをあらわす　全一冊

通神孔釋 三教色　唐來三和作　儒佛神の道でこれをとく　全一冊

江戸本町筋北エ八町目通油町
書肆　蔦屋重三郎

表紙	ヨコ三寸六分 タテ五寸二分
本文枠	ヨコ三寸一分 タテ四寸二分

遊里雲談

古契三娼

陶淵明菊寿帯青楼捨僧慧遠遊
南驛稱山陸子静乗猪牙入油堀

古契三娼自叙

潮光や浪速の葦は伊勢の濱荻。北廓にふるといふ言あれば。河東にてらすといふ言あり。所かはれば南驛育の蓮も。朝艸

古契三娼自叙
潮光や浪速の葦は伊勢の濱荻。北廓にふるといふ言あれば。河東にてらすといふ言あり。所かはれば南驛育の蓮も。朝艸乃

の名によぶ。さりやみつの女肆言風俗各異にして。人情亦異也。今。中。吉。品。の人物をこしらへて。楚の人情をかたらしむ。これを知るもの

は。これを好むものには如ず。これをこのむ者は。これをたのしむものにはしかず。我未レ楽何ンぞ竹邑が上臘を饗ひ。白菓梅家が黄鯝を喰ひ。

むものは如ず。これをこのむ
者はこれをたのしむもの
にはしかず。我未楽
何ぞ竹邑が上臘を饗ひ。
白菓梅家が黄鯝を喰ひ
大木たの餺飥餅の笑ふ

大木戸の餺飥餅の大イなることをしらんや。誠にしかり。こや古契の三ン娼にあらで。こけの殘笑とも見たまへかし。ときに天明七ツやのひどくめ

ことをしらんや。誠にしかり。
あや 古契の三娼にあ
らで。こけの殘笑とも見たまへ
かし。ときに
天明七ツやのひどくめん。
紙花倉ひらしの筆。

ん。紙花喰(カミバナクラ)ふひつじの年。通人の羽織(ハヲリ)長き春の日。花川戸羅月(ラゲツ)が別(ベツ)業(ゲウ)。松風(セウフウ)亭(テイ)に毫(フンデ)をとる。

作者 京傳誌㊞

通人の羽織(ハヲリ)長き春の日。花川戸羅月(ゲツ)が別(ベツ)業(ゲウ)。松風(セウフウ)亭(テイ)に毫(フンデ)をとる

作者 京傳誌

序

京傳きはめて三ツの色町にあかるく。今一册子を著（アラハ）す。是をひらけば。ゆふべけの晝寐（ヒルネ）の貞のをほひとなり。これをたゝめば傾城（ケイセイ）の酒あたゝむるあふぎともなれり。されど大纏（マトヒ）ふりにし代より。竹ばしごくだれる今も。人の口に戸ざしなければ。何某（ナニガシ）

是をうれひざらんや。我はな鳶(トビ)町抱(テウカヽヘ)の身のさちなれ。もしあぎとをならすぼんくらあらば。腕(ウデ)づくをもて是をふせがん。そのこゝろざしを。此書の鼻(ハナ)のさきにむすぶてふ。たなだひのはしにしかいふ。

山王町鳶のものあふさか市事　かふ峨自書㊞

新鄭江都ノ地青樓美人多シ。瑠璃翡翠ノ枕。錦綉鴛鴦ノ茵。思ヲ武藏鐙ニ懸ケ。情ヲ常陸紳ニ繋ル。朝々雲雨ノ契。夜々郎親ヲ換フ。

深川

晋謝安携妓遊東土

おもふひと

品川
家交江河南北岬心通
上下往来船
北尾政演画

古契三娼

鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春。されば御江戸の繁榮を申は。大引の手赤の助言をするにひとしかるべし。誠に土一舛金一舛と申せば。塵塚を穿ても。金のなる木の實生はあるぞかし。わきて遊里の全盛はいふもさらなり。大門の仕置場たえて。堤に飛びこふ螢も。刑鞭の朽たるなるかと思はれ。櫓下の火の見櫓に。風見の烏おどろかず。馬を四ツ谷の新宿につなぎ。牛を高輪の南にはなつ。かゝる江戸にすみては。夕に笛をふいて。朝に紫の衣を着し。きのふまで櫻飴あきないし番太郎も。けふは地主の花をさかするぞかし。通町のほかに横町あれば。横町の外に新道をひらき。八百八町は。深川本所の中にもかぞえたらず。町鑑にもれ。江戸繪圖にかきつくしがたき。小路小路又すくなからず。稲荷新道に白虎湯の看板かけしは。所の名にめでし間遠なるべく。下踏新道と聞ては。燒餡のにほひなつかしく。樂屋新道を通りては。見たきものといへる清女のとのはを思ひあたる。藥師新道も壺のゑんによらば。朝鮮の弘慶子が住べく。不動新道に繩暖簾かけしは。ばくもの屋の門ド口ならん。猫屋新道に鰹ぶし屋はなけれど。厩新道にみごと厩はあり。瓢箪新道に鰻屋はあれども。鯰のなきこそ殘念なれ。觀世新道の童は。有難の影向やとうたひ。狩野新道の藏の壁に馬を画しは。勸學院の雀なるべし。かゝる名高き新道にもあらず。爰にきんご新道といへるは。金吾中納言の住給ひぬる古跡にもあらず。主馬の小金吾が所縁もなけれど。圍ものゝ多くある故に。かく名づけしも尤ぞかし。人通りは常にたえず。らうのすげかゑ世帶のやにを通し。鏡とぎは佛の日〻にかはるをかなしみ。祭文となふ山ぶしのこゝに哀をとゞむれば。長〻の浪人來りて。御子孫も御繁昌と祝す。ちやらつく雪踏のおとは。日なしかしの歩行ぶり。駒下踏の虛無僧は。藏のむだ書よりぬけ出たるかとあやまたる。川越極樂寺本堂建立。たかア〳〵。かし本屋の風呂敷包は。片〻へかしぎ。鍋釜ゐかけのへな土入は。そばやのうどん箱なり。鷄は砂水に羽虫を拾ひ。日間のぺん〳〵艸は。犬の屎をつらぬひてはゆ。己とふるき軒のつりしのぶ。やれたる竹すだれかけしゑんさきに。將碁さしていたるが。お手にわと問へば。金銀二枚に墨のすりかけ一ッとこたえしは。歩のたらざるなり。勝手よりそばやのかつぎよびかけて。ぶつかけ二ッとあつらゆるに。女房が盛にし給へ

とすゝめしは。殘りたるしやうゆを。ひや飯へかけてくはんのぞみなるべし。大屋どのゝ娘子が寒彈に目を覺し。向ふの親父が看經にねむけを催す。つねに日のめさへ見ぬ新道の住ひも。園生に植てかくれなき。くれなひとよばれて。きのふまで川竹をつとめしも。其身の果報とて。さる大盡にうけられ。けふはおのしの名をつけて。よしとあらためさせ。ゆく／＼は内の首尾とゝのえて。御新造さまともよばせん心ざしなれど。しばらく玆に圍となりけるに。およしははや歩行ぶりにも。八文字のくせをかくして。急に白地めかすれど。まだ里言葉の折ふし雜も。おかしかりき。男女に小僧までつけおかれ。一日のわざとては。芝居咄と飼猫のせわやかるゝのみ。はち植のまんりやうは愛せど。己が身をうけられし代金の事ははやわすれ。淺草の梅ぼりに人仕事して。その日をくらすは母。文づかひの間には。紋附持てあるきし兄も。泥龜がおとし米見つけし如く。一度にうかみ出。日なしの七口をかたみに殘し。去年世をさりし親父まで。草葉のかげにかた肌ぬいで。鮪のさしみ引寄て。茶椀酒あをる身とはなりぬ。日の本は姬氏國とやらんきけど。からもやまともとゝく女の世の中にこそ。此圍の向ふは。表に藍にて古文字書たる障子を立。大山石尊の御札にならべて打たる宿札に。女中御かみゆひ仲と筆ぶとに記しは。もと深川下モ木場の川並。鳶の娘にて。おさなき時は。まさきの葉で拵たぴい／＼を吹。雛草で嶋田わげこしらへて遊び。ぎし／＼なるあしだはいて。船虫のはふうどんやの汁つぎ持て。醬油買に行し身の。おやはらからのためとて。十七のとし新ッ子となりて土橋へ出てより。あたまのうへは日々にふえ。藍上田の光りも夜々あきらかになりて。呉服屋の屋敷通ひをつけのぼせにさせ。新川の灘染を宿あづけにさする程の全盛。其後じまへとなり仲町へ出てより。藝者衆とよばるゝも所の習ひ也。光陰は三間ッ堂の通し矢よりも早く。はや中ゥどしまといふもふるくなれば。又かしをかえて表櫓へ出。はを白くして新造と化てより。額に小じわができ。ばゝあお仲とあだ名され。ばゝあ／＼とよばるれば。己がことゝて返事するも。うきつとめぞかし。ゑちご縮のめきゝするにはあらねど。たゞかすりへのみまわりて。情なしといはれしも。さすがまきのそげにもあらぬかして。わぐらといふ所に下三ッの何某とて。句拾ひしたり。うかしのはなつぱりして渡世を送り。あだ名で幕の通つたる男と夫婦のやくそくして。去年の春より務をひき。此新道の

住ひ。昔は人に結せし身の。今は人の髮に憂世をむすぶ世渡り。九尺二間の借家に疊四疊敷て。のこりの二疊はうすべりにてくろめ。越張は三庄太夫の淨留理本にてはり。さる程に哀也。かべ一重隣は。丸竹のぶつつけ格子。張物の戸板に隱て見えねど。相州箱根御藥湯。二度入廿四銅。四五度入四十八銅。一ト廻り六十四銅としるせし看板をかけ。四百四病のなをるしかけも。ひんの病は請合れず。信濃の一ト季奉公人相手にして夫婦暮し。亭主は金川在で名にふれた長屋門づくりの。大百姓の獨息子にて。蕉風の面白くなき誹諧も少しはやり。碁も下手といはるゝ程にはうちて。江戸の流行唄も。先此人がさきへ聞出し。稻毛。厚木の。作左衞門天王丸の。五郎介。なぞは直下に見くだせし。かな川での通もの。女房お品は伊豆の大嶋の生れ。新嶋村といふ所に。嶋薪あきなふ者の娘なりしが。何故にや十一のとしかな川の宿へ賣られ。いづみやといふうちへ抱られ。實の入ッたとうもろこしの毛みる樣な髮をそつて坊主にされ。ひろ袖の布子にこんのたびはいて。ひせんかきながら小ぢよくつとめしも。いつしか爰のうちの通り名をついて。おしよくとなりしが。ふと今の亭主となじみてより。燒蟹喰合ふ中となり。榎堂で取れたなまこのけて置て。おますする程の眞實に。外心はなかりき。あるとし品川宿の夏坂屋の亭主。湯治の歸りがけ。此女郎に見所ありてより。相談極めて品川へのくらがえ。品川の水にみがきあげてから。掘だしものとよろこび。野風。すゞし野。村芝かれつにならべて。名も袖うらとあらためられ。九曜の星の合印付らるゝ身となりければ。今の亭主ことさら此袖浦が事わすれ兼。神奈川より馬で通ひ。鳥はものかわ馬のいなゝくに。そのわかれをおしみしがこうじてより。五百石の田地を質入レして。出來秋の勘定合ねば。おやぢ今はたまりかね。庄屋宿老の耳へ入レて勘當し。在所を追はらわれければ。袖浦も薩摩の何がし山のたれさんに。うけらるべき場所をはづして。まことをたて。其年のくれ年ゝ明ケて。南ばんばに海苔をとつて渡世する。伯父をおやぶんにして。此新ゝ道の借家も。今は袖うらのおく口したる住居なり。女郎ノじみたるはくせとて。むしやうにしわきものなれど。さすが座敷持のはてとて。せたいのくりまはしよく。風呂の薪にふすぼりて。いつしか家のすみ／＼もくろみ。棚のはしの蜘も住家をかゆれば。夫婦もはや江戸なれてみゆれど。女房は故郷忘じがたきや。一チばん塩二ばん塩として。嶋干物の目利と。日和見る事の上手な

るもおかしかりき。貝寄の吹春の旦より。鰯雲の雨催す秋のゆふべまで。貧乏とをつかけくらのみするぞ。やるせなきせたいなり。されば人のゆくえと水のながれ程。さだめなきはなく。ことさら川竹の身は。なくと笑とに一トとせをおくり。まつとわかるゝとに一日をすごして。いづこいかなる人に身をまかせんもしれず。たゞ出雲の衆議評にまかする事ぞかし。孝ゝにうられ不孝にうけ出さるも。ゑんのあるのが實なるべし。此三ッ人のふじん。所はかはれど。おなじ川竹の末葉とて。合借家同士の心安さ。折ふしはうしとみし流れの昔を。かたり合て暮ぬ。ころは卯月の半。心なしにはやとはれなと。心有人のいひ置しも尤。圍れのおよしは。あまり樂すぎて一チ日を暮かね。近所のおさな子かりよせても。人みしりして。こはく丹後の藍縞に。小便を置キ土産して歸れば。せんかたなく。罔兩にゆげのたつ手焙引よせて。富士のすそ野みるやうに灰をならしながら。旦那にねだるべき下タ心。袷小袖の摸様の案じにせいをつかし。木地ろいろの用だんすに。たてかけし三絃とつて。めりやす禿だち〽人の末水のながれと身のゆくえ。禿だちから廓に住ば。たゞいつとなくあけくれて。厤くり出す品さだめ。けふはかねつけ袖とめの。もん日〳〵をかぞえてあかす里の花。との子待夜はひさしうて。首尾のなるよのみじかさよ。ふかう成程なれそめ心。おもひにそわでおもわねにっそふもゑんなりやしやう事がないぞへ。といふ。すえの文句は。旦那へきこえてもすこしゑんりよゆへ。口のうちにてうたひ居る折ふし。むかふの女かみゆひお仲。きしじまのあぶらでよごれたる袷。かたはだぬいで。〔お仲〕モシお品さん。けふはうちでもるすだから。又はなそふじやァねへかね。トかべごしにいふ。となりのくすりゆの女房は。青茶のいろあげ。つたのもんの付たぬの子のたすきはづして。長らうのきせる。くはえぎせるにして。たち出て。〔お品〕ム、わつちも今ちつとはなそふと思て居たのよ。マァみねへ。此ながい日に。一チ日臺所もとにかゝつて居るわな。喰物こしらえほど。うるさいものはねへよノゥ。〔お仲〕ぜんてへおめへは奇麗ずきだからよ。そしておしなどんが氣がきゝすぎて居ると。いふもんだから。おめへがてへ〳〵じやァねへよ。モシおむかふのおよしさん。ちつとお咄なせへせんか。トお仲は三人のうちでのおしやべりゆへ。ほう〳〵をよび出す。およしはきゝ付て。三味せんを下にをき。かうしの所へたち出て。〔およし〕わたしもけふは体屈して。身にもちあつかつておりいす。けふはさんをば梅堀へつかはしいしたから。小僧と久介ばかりさ。トいふ所へ小僧たばこぼんへ火を入てもちきたる。此子をご覧じいし。ゆふべねぼけてながしへおちて。此様に疵をつけいした。〔お仲〕ヲャ〳〵あぶねへ。小僧どん。きのふの事を。いつつけまうそふか。小ぞうしたを出しながらひつこむ。〔およし〕けふはお休かへ。〔お仲〕けさ。いつそしやく

がいたうござりやしたから。休みやした。おめへさんもあすはおいゝなさへし。せんてへおめへさんには。しのぶ（しのぶとはかみのふうの名ナリ。）が。よくお似合なさへすよ。〔およし〕みんながそふおつせへすが。わたしはあつちにいゝす時から。手がらが（これもよしはらのかみのふうナリ。）すきさ。〔お品〕お仲さんは。よく廓の風をのみこんだよ。品川なんぞじやァむすび兵庫がはやつたよ。まへどくら田のひめづるといつた女郎しゆが。すきでいつたつけ。〔お仲〕としまの風には。しの字わげ。こしかけ。京ぐる。なぞがいゝふうさ。深川でまへどはやつた。天神むすび。まおとこ本ッ田は。きざな髮よ。〔およし〕稻城むすびは。扇屋のおかねさんが。いゝはじめた風ゥさ。〔お品〕およしさんなぞは。品川といふ所は。おしんなさるめへね。〔およし〕ぞんじいせんよ。道中ゥ双六で見たばかりさ。それでも湯治から歸た客人ッに聞ィしたが。氣色のいゝ處だとねへ。〔お品〕先高輪の茶屋からして。新かとく。中かとく。一チ力。七チ力なぞと。他所にない家名がござりやす。〔およし〕石橋萬とやらは。留主居しゆの咄で聞ィした。〔お品〕そして女郎しゆの名に。三ッ字名の中に。おの字名がござりやす。六七年跡はいゝ女郎衆がそろつてござりやした。さど屋デつき出しのたいそふであつたは。榮山ッさ。藏田で。ひな菊。りよ。松坂にはいゝ女郎が揃てをりやした。柏屋で。なには。花まち。津の國で。豊山。なをえ。藝者では。新内で鶴賀がはやりやした。河東は秀彌といふのひとりさ。哥に狄江惣介といふがありやした。高輪には壽樂さんが坐本で。おどり子がだいぶござりやした。義大夫で。春治と云がいゝ淨るりさ。せんてへ宿のげい者は高輪へゆかず。高輪のげいしやは宿へ來ぬといふが法さ。げいしやをよぶと新造がひとりづゝつきやす。男げいしやは。明朝坐料をとりにまわりやす。引ヶをとられるもんだから。錢でうけとるのさ。それだからどんすやびらうどで。いきなさいふをこしらへて。自身にとりにまわりやす。人にとりにやつてもよさそうなものだが。そうするとしさいらしいなぞといつて。やかましい所さ。女郎も今はうつりかはりやした。今では新松坂の。此春。其君。佐渡屋で。町づる。あやぎぬ。村田で。その哥。ましてる。大松坂で。其朝。野の芝。新叶で。三ッ花。鳰瀧。ときわ屋ノ。から哥。梅崎。なぞがきゝものさ。はやる女郎は。初くわいニうらやくそくをさせやす。新造がふたり付て昼夜さ。もの日もそふさ。わきとちがつて。若者の祝義も三ッくわい目さ。そしてたれさま御仕廻誰と下タへ。その女郎の名を書て。かげみせへはり

やす。それを仕廻札といゝやす。みせをおもてみせといゝやす。どこのうちもみな三人つゝさだまりで。みせへ出やす。それをみせばんと云やす。五ツにかはるのさ。此ことを正めんをはるともいひやす。みせばんでないものは。みな内みせにおりやす。お見たてといふと。みんなかげ見せへならびやす。よしはらは中ヵ座といつて。まん中に居るがいゝ女郎しゆだそうだが。品川じやァ。両方のはしへすはるがいゝ女郎さ。見とうしの事を濱といひやす。穴ぐらの様に下タにある座敷を。下タ家といひやす。天王のじぶんがにぎやかさ。六月の七日から十九日までゝござりやす。そして燈籠が出やす。廿六夜は大もの日さ。妙國寺の仁王さん。岸行寺のちうやなぞは。べつしてにぎやかさ。恵美子講をはでにする所さ。大見せの若ィ者は。橋向へあそびに行やす。よしはらなら。川岸へ行クといふものさ。[お仲]つる吉といつた新内のげい者は。どこに今はおりやすへ。[お品]やつぱり村田屋のむかふに居やす。モシそして旦那やかみさんの居る所を。お部家と申やす。[およし]ヲャよしはらじやア。ないしやうといひすよ。[お品]ほかに客のあるのをまわしといひやす。[およし]それもよしはらじやァ。名代のきやく人シといひすよ。[お仲]深川なんぞじやアそんな手おもい事はねへが。よひどまりを付たきやくのくる間に。ぬすみといふをうりやす。[お品]ム、はてね。品川の法でなじみのきやくが。ほかへかくれて行のをしると。その先キの女郎の所へ臺の物をおくりやす。[およし]よしはらじや。そふいふときは。つけとゞけのふみと云をやりいすョ。[お仲]深川じやァなじみ茶屋へかくして。外の茶やへ行てその事をけどられると。ぢきにその茶屋から先へしらせやす。そふするとくわしなぞを。女かうちの娘がもつてくるのさ。そうすると跡がむつかしうござりやす。またいろ客があつて。子どもやから。茶屋へあの客へはだされぬなぞといつてやかましいと。そのきやくが名をかえて。外のちや屋であふ事がありやす。しれると大かぶりさ。[お品]品川はおとまりの有ときがなんぎさ。今じやァほう/\の亭主たちが。茶をすることがはやるそうさ。[およし]まへど美月さんや萬千さん。賀達さんなんぞが。くら前をおつき合なんすじぶんは。よくよしはらへきなんしたよ。[お品]そのじぶんは品川も。さかりさ。[お仲]ふか川じやァ。かゝえをしてやるといふが。客のはでさ。廓でいはゞ新造を出スといふやうなものさ。そしてしかけや何かのさみしいことを。黄楊だのといゝやす。是は都

合のわるいとき。あたまのものもみんなまげてしまつて。つげの櫛をちよいとさしてゐたり。何かするから。それが通りになつて。つぶりのものでもわるいか。しかけがさみしいと。このごろはとんだつげさなどゝいひやす。きやくが茶屋のおんなに。まへだれなどを出しやす。しん子をだすにも。もん所や名をそめたまへだれをくばりやす。春子ども屋から抱にわたすしかけは。小袖二ッづゝさ。襦袢を付てわたすうちもござりやす。そのあとはみんなてんでのきりやうさ。それだからはたらきのねへ子は。下帯なんぞも下タのほうばかり三尺。新しいのをとりかえて。きざなことなんぞもするのさ。山びらきは三月廿一日から廿七日までさ。八まんさまのまつりは。八月の十四日十五日さ。十四日は舟まつりといつて。木場を舟で御輿がわたりやす。それはなせといふに。木場は橋がせまいから御輿がとをらぬのさ。一ノ鳥居は代々木場からおさまりやす。まへど木場が槻家臺と云まつりが出やした。わつちらが子どもの時分は。ゑびすのみやのこつちらに。そばきり稲荷といふがはやりやした。その時分はしほばまがはつかふしやした。今はすさきのざるそばも名ばかりさ。ふぢ棚の石やき豆腐は。お鷹じやうと岡釣のたて場になりやした。いまじやァ弉屋がはつかふさ。いまの惣介さんがりかうものさ。かみさんはおさち。むすめはおゑつといひやす。[およし]祝あみさんはゐんきよしやしたかへ。一ト節ぎりとやら云ふえをふきなんすねへ。[お仲]土ばしのげいしやじやァ。春吉。小吉。三喜藏。おみきなぞがうつたものさ。おとこげいしやでは。千蝶がふるいものさ。新次。五介。清二。喜六。なぞもとをつたものさ。ふた見やといふ子ども屋から。どれもいゝ子が出やす。[およし]ひなまつとやらも。そこから出たじやァねへかね。[お仲]土ばしの子ども屋は。みんないゑきといふところにをりやす。仲町の。梅むら。生松。山本。がいゝふしんに出來やした。をりをりよく家名のかはる所さ。梅もとのていしゆは。あたま七といつていろしさ。おもてやぐらにも地がござりやしたつけ。今居る所もてまへの地めんさ。今で口きゝは。子ども屋のうちできま屋七右衛門。六十ッたんといふかし元。白ロ舟の清七なんぞさ。仲町のはおりは。大きち。八十吉。今きち。乙吉は廓へいきやした。仲きち。だん子。ちんす。太夫で。八重太夫。三吉。伊八。千てう。長治。せん次。喜三。つる太夫。なんぞさ。[およし]礒八はよしはらへまいりやしたね。去年ゝのゑびすこうニ。長七いせ屋の筒

井さんの。きやく人のおもひ付で。介六を磯八がしいしたつけ。その時うちのむすめが。ほめことばをしいした。[お仲] おもてやぐらへ出た路考かめが。はまむら屋はあかるいものさ。さかい丁の安五郎が半四郎と。ひこべい。なんぞでやると。ごふてきさ。（ひこべいとは。かけあいの事なり。こはいろのとをりく也。）三ッやぐらでも。ばゞァおたきなンぞが。とをつたものさ。ふる石じやァ今は豊倉がはやりやす。いゝ子どもがあるからさ。あすこはふせ玉さ。はやる子は四ッあけにいつちやァござりやせん。新石場じやァ金子屋がにぎやかさ。げいしやは。奴嶋八。さみせんが文てふ。哥で五郎治。三味せんが宇八。はおりで。さよ吉。むめ吉。さ。佃四けんもまたできたそうさ。まへど仲丁へおくめといつて出た子が。やく年ッで廓へいつて。大かな屋とやらの。粂川とやらいひやしたが。およしさん。しつてお出なるかへ。[およし] その女郎しゆはたしか。二丁めの新見せのきつかう屋におりひすよ。わつちもちつとよしはらの咄をしたふすが。ことし総籬といふしやれ本に。書盡しひしたから。いふはむだでおすよ。このぢう旦那がもつてきておきいしたから。よんで見いしたが。すつぱり松葉屋せかいさ。女郎衆のくせまでかきひした。[お品] 品川で宿のうちへ出る。かごかきは横目をするがやくさ。かごかきにもいろ〳〵ふてうがあるそふさ。またげん。正六。なんぞといふがありやす。[およし] よしはらのかごやにも。ふてうがおすよ。茶屋なぞへいつテきいておりひすに。ふりまし。おもたまし。みちまし。あぶれ。なぞといひす。五とくといふは。夜かごの三てふ並で行とき云ふてうさ。[お仲] きをつけてごらうじやし。深川通は吉原客と違つて。猪牙にのりやうが違ひやす。艫の方をむいて。逆様にのりやす。これは船頭と咄をするに勝手がいゝからさ。急ぐ時は二人船頭にするのさ。深川にも三十年程まへは。米蝶。べんてんおかん。木綿屋おきち。なぞと云名とりの床げいしやがあつて。そのじぶんはをしなべて。仲丁のことを。八まん丁といつたそふさ。ふるい深川通はしつて居る事さ。[お品] お仲さん。もじ五郎はどふしたねへ。[お仲] きつねが付てから死やした。深川じやァおとこげいしやがわり合で。八まん様へ護摩經あげやす。仲丁や土ばしの子どもは。山からかよひ帳で喰物をとりよせるのさ。地めへの子どもは。十二もんめのうちを。茶屋へ六もんめとられて。子ども屋へ腮を。（あごとはぞう用の事ナリ。）三百二十四文とられやす。そして人をだました事を。とうがらしを。くはせてやつたと申やす。又もの〳〵結着せぬ事

を。ふがきれねへといゝやす。こいらは櫛のぬきゝから出たことばさ。今じやァ堤側や六軒でもいふそうさ。八まんの鐘は茶屋から。やくでかはりばんに。つきに出やす。［お品］品川でまつざか屋の野風といつた女郎しゆが。わかつたものさ。その時分芝に介といつて。けしからず手のあるきやくがあつて。その人の友だちが。まつざか屋へなじんで來やしたが。その介といふ人は。さのみいろおとこでもねへが。どこへいつて一チ坐しても。とかくひとりもてるそふさ。それだから折ふしは。高慢もいふそふさ。それを友だちがにくがつて。どうぞ一チ度たれぞにふらせて。此末かうまんをいはせぬやうに。してやりたいといふ咄を。野風が聞てゐて。わたしがところへつれてきなせへし。をもひれふつて見せやしやうと。ふと請合つたから。さいわいにして。二三人ですゝめて。つれてきたのさ。先さかづきが一トとをりすむと。そのきやくがつね〴〵はげこだそうだが。どふ云氣か。茶わんでさけをはじめて。野風にさしたのさ。野かせもかねてたくんで居る事だから。たべやせんといつたばかり。うけつけねへでてらしたのを。むりにしいるとつて。ついそのきやくが。銚子をひつくりかへして野風が着物へぐつつりさけをかけたのさ。きりたての八丈のむくもうちかけも。黒びらうどの帶も。さけだらけになつたが。さすが野風だから。へい氣ですつとたつて。又きらびやかにきかえて來て。そふかふするうち。床もおさまつて。一チ坐のきやくは。いよ〳〵こんやは。とんだめにあふだらうと。となりのまわし坐敷に。聞てゐると。思の外野風が。大ぼれにほれたやうすで。とんだもてるから。一チざの客があつくなつて。野風をよび出して。約束がちがつたと。うらみをいつたのさ。野かせが云にやァ。なるほどあの客人は。女郎かひに妙をえた。人でござりやす。おまへがたのさそひやうで。悟たかして。さつきざしきで。酒をわたしにかけたのは。そゝうのふりでした狂言でござりやす。それはなせと云に。こんやわたしに振れても。あの女郎はとんだけちな女郎だ。をれがそゝうでかけたから。その意趣にふつたのだ。酒をかけねへと。ふられやァしねへと。ぬけ句にするつもりでござりやす。わたしもまた。此宿では。まつざかのたれとをり名を付られたふしやうには。名がだいじだから。手だとしりながら。どふも今夜はふられやせん。それだから今夜はぐつとほれたかほで。うら約束をしてかへしやす。そふしてうらに來たとき。面白くふつて。みせやしやうと云たか

ら。みんな野風が發明を。かんしんしてそのゐさはかへつたのさ。それからやくそくの日に。その介といふ客のところへ。その一座がいつて。けふはせひゐゆびやれとすゝめたら。そのときその人のいふには。こんやうらに行と。あの女郎は。たしかにふるから行まいと。見ぬいたやうにいつたとさ。そのことを野かせが聞て。その手にほんとうにほれてきて。たび／＼文をやつてよびたがりやしたが。とんとその後はきやしなんだ。［お仲］深川に黒さんと云きやくがあつたがね。とんだじやうなしで。そのくせぶ男さ。仇名をびわえうとうとも。能のめんともいひやした。あんまり情なしがとをつて。だれもとりとめて出たものがねへのさ。ふつとお鷹といふ子が。わつちがよんで見せやうといつて。黒さんに出たものさ。そふするとお蝶といふ子も。よんで見せやうといつて出たのさ。それをおたかが聞て。ぐつと知らぬかほで。おてふにいふにやア。モシわつちや。おてふさんおめへと。兄弟分になりたふごせへすと。いひ出したものさ。おてふがいふにやア。わつちやアどふもおめへと。兄弟分になる。わけはごせへせんとはねたのさ。又おたかゞいふにやア。そのわけといふは。黒さんの事でごせへやす。ぬしはわたしがせんでごせへやす。それをうつくしくおめへに。黒さんをかしてをくから。見事によびとげねへ。そふするには兄弟ぶんのよしみがなくつちやア。かす事もならねへから。さつきのやうにいふのさと。お鷹もさる者だから。おてふをしばりにかけて。たか見で見物をしやうといふ。悪しんさ。それからおてふは黒さんをよんで。いふにやア。おめへといふものァ。わからねへものでごせへす。わつちやァおたかさんを。よびなつた事はしりやしねへが。どふもこふなつた日にやア。此うへおたかさんをよびなつちやア。わつちが立やしねへから。おたかさんを切れなせへしときめたのさ。黒さんがいふにやア。どふもてめへにやア。忠といふきざがついて居るから。いやだといふから。なるほど忠さんと云きやくもごせへすさ。ごせへすがそれが氣にくわざア。忠さんを切れやしやうといふうち。八幡さんのをひだしがなるから。ぐつとせきこんで。なんでも朝なをしにして居なせへし。此かたをつけて見せやしやうと。いつて。その忠と云客のところへ。手がみをやつて。けふはなしてへ事がちつとあるからこいといつてやつたから。忠はおりを二三ヶめへ。かつたり何かしてさわいで居ると。おてふが癪がいた

いとか。なんとかいつてたつたものだから。忠がぐつと疳癪で。これへなんのこつたへ。用があるのしまつてゐるのとよびによこしやァがつて。をいて。しやくがいてへの米がたけへのと。とんだ奴じやァねへかと云と。おてふはこゝがかみすりといふものだから。モシ忠さん。餘りてへそふな。こはいろをつけへなさんな。印幡沼じやァねへが。あとでうまるめへによと。つよみをいふ。忠はなを〳〵あつくなつて。ムヽそんならうまるめへとは。きれると云事か。これへわれときれたといつてな。他所いきに煙管をもたねへほども。ふしやうじやァねへわへと。いひつのつタから。おてふはさいわいにして。つきだしてしまつたのさ。それが忠はいろおとこ。黒さんはぶおとこだが。おたかゞめへの。たてひきばつかりでそふしたのさ。それだから深川といふ所は。客人のあすびに。でへぶあんばいのある所さ。いろ男にかえても金にかえても。子どもどうしのたてひきを。おもにする所さ。

〔およし〕よしはらでも。今はとをり名を付て。たいそうにして居る女郎衆が。みんな子どもさ。そしておしよくの女郎と。二まいめの女郎とは。どこのうちでも中ヵのわるいものさ。今で繁昌なのは。ひなづるさん。きしやうのいゝのは。すがはらさんさ。まへど手をとつた女郎衆は。松賀屋の。はつ嶋さんさ。いろきやくがくら前からまいりしたが。あるときくら前のきやくのやくそくのばんに。かねてためになるさる大盡の客がまいりしたのさ。くら前のほうへは心やすだてをして。その大盡をざしきへ入レたものさ。河東ぶしなぞでしやれて居る所へ。藏前のがきて見た所が。約束だに。坐敷に客があるから。ぐつと大疳癪でざしきへふん込で。その大盡をさん〳〵惡口したのさ。大じんもやくそくで居た事を。いはずにざしきへ入レられたものだから。まわしかたややり手をよんで。大騒動になりひしたが。はつ島さんはぐつとへい氣で。その大盡のまへゝいつて。モシヒこんやはせんてへくら前の客人の。やくそくでおりひしたが。くるまでもまづざしきに。おきまうそふと思ひして。坐敷へ入レまふしひしたが。やくそくの事をいひしないのは。わつちが惡ふをした。ぬしもあの客人に。あつこうされなんしては。たちひすまいから。これでぬしの顔はたつておくんなんしと。指をきりひしたのさ。そのひやうしに。ゆびがどこへかとんで。見えなくなつたのさ。これでは氣がすみひせんと。又左のゆびをきらうとする所を。しんぞうやたいこもちがよつて。もふそれで心ッ中ゥは見

えやしたと。やう/\とめひしたのさ。それでその大盡も得心して。さかんになつてまいりしたが。それではくら前のきやくが。腹をたつて來そうもないものだに。是もやつぱり。そのまへよりも結句しげ/\に來ひして。それほどのそふどふも。しづまつたのさ。どつちかひとりはしくじるばだが。なるほど手のある女郎しゆだ。大じんの機嫌のなをつたは。きこえたが。くら前のがよく默つてくると。評判しひした。あとできけば。ゆびを切たとき。なくなつたふりで新造といひ合て。そのゆびをかくして。藏前のきやくの所へ。もたせてやりひしたとさ。はつ嶋さんがうけられていきなんす時。ぬしの口からはじめて明してお咄なんした。それでわかつたのさ。ヲヤさんか。はやかつたの。下女[さん]たゞ今かへりました。[お仲]ホンニもふあぶら屋がきた。もふ日がくれるそふだ。[お品]わたしどものうちでも。もふ帰るだらう。およながのしたくでもしやしやう。○女といへる文字を三ッ書て。姦とよむもむべなるかな。予ひとゝせ池魚のわざはひにあひて。此新道にかり居せしとき。此三人の物がたりヲきゝはべりしを。今そのまゝにこゝにしるしぬ。

作者 山東京傳
閲 同 けいこう

古契三娼大尾

へきゞすたくのべがねのきせるは。はい吹をたゝいて。かんしやくのつけびやうしとなり。おもひにはどうしたはなのさくらばりも。くびをながくして名代のきやくのごとし。合今はりわけし三ッのさと。

すいつけたばこのすいなるも。あげぎせるのやにこきも。とをるとをらざるたがひは。たゞくわんぜよりの一すぢに。たのむはほかにないぞへ。テツンシャン
きやら傳みづからばつす。

るも。あげぎせるのやにこきも。とをらざるたがひは。たゞくわんぜより一すぢ。たのむはほかにないぞへ
テツレシャン
きやら傳みづからばつ

表紙　ヨコ三寸七分
　　　タテ五寸二分

本文枠　ヨコ三寸
　　　　タテ四寸

序

五ッのまちを三ッまたにうつせしはかの融の大臣のをごりもはだしでおかよひなさるにちかの塩竈ちかころ塩屋かしらねども。こんな世界は唐にもなかず。此川なかにばつと花火の時ならぬさかりを何がし。一まきの册子にしるせしとて。書肆子に其題号をこふ。艶なるまきをけがさんはと。いなむにゆるしなければゆふべの口舌水にして。とみにほの神のはらう云爾。

山東京傳述

自叙

世人みな酔らば。何ぞその糟を喰つて。其汁をすゝらさる。との珍芬翰は。毛通人の寐言にして。のたまくになれとの教なり。予はまた女郎買の糠みそ汁を喰つて。其糠臭き新酒のほろ酔きげんに。臂をまげて枕とし。楽また其中にありと。火燵へころりと転寐の。夢ともなくうつゝ共なき。遊びの始終さめての後に。覚しまゝを。所〱かいづまんで。秋色庵の閑窓に欠びしながら書付侍る。

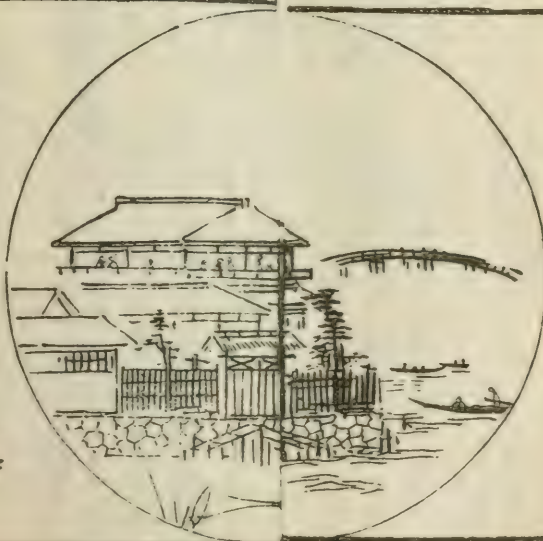
天明らけき八ッの
はつ春　赤蜻蛉著 印

女郎買之糠味噌汁

○発端

日落張流三派連と。からうたにつらねし大江も。今は中洲の新地とて。地ごく極らくふた道の繁華はいふもさらなりけり。然るに名高き五丁まち。去りし頃。祝ゆふの災にかゝり。名におふ娼家とふざいに離散せしに。此處風流の士なれば。かりに青樓をいとなみ。遊客をひきけるなかに。濱荻やとなんいへる娼家あり。しかるに彼樓のせまきをいとひ。諸客おゝくは。丸藤といへる酒樓にあつまり。はまおきの佳人をむかへ。ゆふらくをなしにける。けふしも此處へいりきたるは。千丈。頭谷。英江などいへる正風ていの大通三人。あとにつゞいて。医者のどん庵。焼みそ酒の一杯きげん。あたりもひゞく大音聲にて。七公〳〵とよびかけ。どや〳〵とおしこむ。

［ていしゆ七兵衛］これは〳〵。けふはめづらしく。どなたもお揃で。よふおいでなさりやした。まづ〳〵。お二階へ。ソレおのぶ。おみよ。おさかづきをあげもふしや。あいとこたへて。娘おみよ。盆に茶を三ツのせてもつてくる。［娘おみよ］どなたも。よふお出なさりやした。まづお茶をおあがりなせへし。［四人］あい〳〵。［ゑい］これ。おみよさん。今日はまだみんなが酒がたりねへから。いつもやうに騒ぎやせん。はやく酒をもつてきな。そして七かうをよんでくんな。［七］さあいといつて。はしごとん〳〵。しばらくして。七兵へくる。娘銚子杯もつてくる。あ〳〵。どなたもおあがんなさりやし。時に頭谷さん。このごろア。こゝにもとんだ美しい者がござりやす。ちつとお呼びなさりやし。［谷］そうだろう〳〵。今日みんながこゝへきたも。その下心さ。どふも美しい奴ときいちやア。こいつアこたへられぬ。トあたまをにぎり挙で。一ツたゝきヒイといつては。またたゝく。とかくこの通人ヒイといつて。あたまをたゝく癖有。［呑アン］わつちやア。フロウよりウエインがいゝ。おみよさん。一ツつぎな。をつとよし〳〵と。一ツのんで。千丈へさす。フロウとは女の事。ウエインとは酒の事。いづれもおらんだことばなり。この醫者。おらんだがくとみへたり。［千］これは。とんだいゝさけだのからくりだ。とむだをいゝながら。谷へさす。［谷］わつちやア此ごろア。目がわるいからきんしゆだが。かふなつちやアやぶれかぶれだ。壹ツのめ。とぐつとのみ。どふもいへぬ。と又あたまを一ツたゝく。これより酒にてさかづきをくる〳〵まはして。無性にしやれる。［呑］これ英江さん。わつちやア。ロードゲシクトになりやしたろふね。ゴロウトにせつなふごせへす。もふウエインは止にして。ちつとヒスクでも。荒しやしよふ。ロードゲシクトは。かほの

あかき事也。ヒスクは魚なり。いづれも幽語也。〔亭〕さあ。子供衆をおよびなさりやし。たゞ酒斗のんでいちやァ。ねつからはじまりやせん。せんさんどふでござりやす。〔千〕そんならよぼふちやァねへか。〔三人〕よかろう〳〵。〔千〕藝者もたれぞ呼んでくんな。二ちやうつゞみが賑でよかろふ。〔亭〕しよふち〳〵。と立てゆく程なく二ちやうつゞみ。〔マル キシ〕まる次。岸次きたる。どなたもよふおいでなせいした。とんだお寒うござりやす。といゝながら。火鉢で鼓をほうじる。〔千〕お近附のため。一トツあげやしよふ。〔マル〕ちとおさはりもふしやしよふ。〔千〕まづ〳〵。〔英〕時にあのまる次さんわ。みや岸のおきくぼうによく似てだせ。目もとなら口もとなら。そのまゝだよ。〔谷〕なァに。川岸の山もとの。おもよといふもんだよ。〔娘みよ〕いゝゑ。英江さんのおつせいすとをり。みや岸のおきくさんによく似てござせいす。わつちらもそふ思ひやして。此ごろもみんなにそう申しやした。〔英〕それ見や。ちがやァしめい。おいらが目はおそろなものよ。ァ、つがもねへ。しかし。おきくぼうに似ちやァ。おや〳〵どふしよふの。〔呑〕あやまるぜ〳〵。サアちつとひいてくんな。これより二ちやう鼓にて。大さわぎ。しばらくして。おいらんきたる。ふざん。みつをぎ。江川。住の戸。どなた。よふおいでなんした。と四人ならぶ。〔テイ〕サアおさかづきをなさりやし。と。これより杯初り。谷より。千。どん。ゑいとすむ。〔テイ〕みなさん。ちつと火ばちのそばへお寄りなせいし。だいぶお寒うござりやす。頭谷さん。おさわぎなせいし。〔英〕騒ぐなといつても。さわぎやすよ。頭こくさん。てんびんぼうを。三人しておどろふぢやァねへか。〔谷〕よふごせいしよふ。〔キシ〕サア岸次さん。ひいてくんな。アイ。哥〔千〕てんびんぼう。〔谷〕とちめんぼう。〔エイ〕上野にごほんぼ

う。〔セ〕三尺ぼう。〔こ〕六尺ぼう。〔おいらん〕をやく〳〵。いつそ。おつな身をなんすよ。〔谷〕どふもおかしくつてなりいせんよ。そふ笑つちやア。どふもおどられねへ。これから狐つりにしよふ。サアつろな〳〵。狐をつろな。こん〳〵ちき。こんちきち。ア、つつた〳〵。どふも。七かうが身が妙だよ。とみな〳〵笑い。おいらんもうきたつ。格別にぎやかなり。ほどなく床もまわり。許さねる。〔マルキシ〕どなたも。ご機嫌さまよふ。といつてかへる。〔江川〕サアお休みなんしよ。よく騒ぎなんすぞ。ぬしたちやア。見申したよふでありいす。近所かへ。〔医〕アイ随分きんじよさ。このごろア。こゝもとんだ賑かだね。おめい方も町にいるよりやア面白かろふ。〔江川〕ナアニわたしどもア。はやくてふへ帰りとふおすよ。いつそもふ地獄とやらのやふで。方ゝへていして。何だかきざでありいす。も　と。　つ　へ　よ　なん　とこれより　そとなり。無性〔ふさん〕しよ。　い　や　く。又隣さしきでは。

モシへ頭こくさんとやら。わたしらア。こよひはいゝ年忘れをしいした。焼んしてから今夜のやうに。わらいゝした事はおざんせん。とんだ面白ふありいした。ぬしたちやア。この近所だといゝなんすが。どのお屋敷だへ。〔谷〕アイ。やしきは遠方の近所さ。〔ふさん〕そふ茶になんすなら。きゝいすまい。あのね。わたしらが内の格子から見ていゝすりやア。むかふの方を。大名さん方がとをりなんすが。とんだ大勢な人でありいすよ。近所へ。ちよつとでなんすにもあの通りかへ。〔谷〕いんにや。あれでも又忍びのときア ちがふのさ。〔ふさん〕そふでおつしよふ。あの通りの人で。あそびなんぞにおいでなんしちやア。みんなの居所がありいすまい。此頃もどこのかね。若殿さんが。お馬で通んなんしたがね。いつそ美しうありいした。わたしやア。いつそもふ見とれいして。

うつかりとしいした。どふぞならふ事なら。汝でもあげいしたいもんでありいす。及ばぬ事とは思ひながら。いつそもふ。とはぎしみする。〔谷〕ヲヤ〳〵とんちき大騒ぎだ。そのお屋敷をきいておいていきなせい。ア、目がいたくなつてきた。もふ静かにしてねやしよふ。〔ふさん〕ねかし申すこつちやアごせいしない。擽りいすにへ。もつとお話しなんしよ。どふもぬしなぞの様に。見得のない客衆はありいせん。何でもいひたいまゝをいゝなんして。騒ぎたいよふに騒ぎなんすがよふおすよ。いつそ見得をなんしたり。をつな身をなんす客衆は。おかしうおすよ。通といふも外でもありいすまい。人にあたる事もいゝなんせず。見得もなく。もちまへで面白く遊びなんすが。通といふものでありいしよふ。などゝ。無性にかきのめす。向座敷から千は眞名意題のしやれ風にて。奥州訛のこはいろにて。ど

すごへを與へねゐて。千アンダカいしたちやア。おかなく口說とやらをおつばじめなすつたの。コ。リヤ。ふとのめいもあるもんだつチヤ。ふさんなんとへ。ねつから分りいせんよ。もつといつておきかせなんしな。千にて。唐いん好一朶鮮花。有潮的一日。落在我的家。我情緣。不出門。那對着那鮮花。呵々。ふさんおや〳〵。ほんの唐人の寐言とか。いゝすもんでおざんしよふ。みつ荻さん。江川さん。きゝなんしたか。おつな事をいわつしやるよ。とみな〳〵わらふ。千火。みつをぎをつゝき。千コ。リ。ヤいしに。ちつくと無心がある。きいてくれめすか。みつ荻何とおすへ。無心があるとへ。ぬしの無心なら。なんでもきゝいしよふ。千スンダラいふべし。コ。リ。ヤくらわれがおかなくしこつたから。いきびいたくらせやれ。みつ何とへ。いきびとへ。いちびがらの事かへ。千いんにや此事いし。ゝくし。みつ荻ヲヤついぞねへ。色〻なむだをよくいゝなんす。ちつとほんの事をお話しなんしな。ぬしたちやア。とんだ藝者でありいす。いつそ好きんしたよ。もつとこつちへおよりなんしな。寒うありいすはな。千わつちやア。酒によつていつそあついから。もつとそつちへ寄つてねなよ。みつ荻とんだあいそづかしをよくいゝなんす。ぬしが退けといゝなんすほど。のきいすまい。ふし　。どふなんす。ふころかてき しる。かどおをく。千わつちをにしてどふするつもりだ。いつそ寒い風でもひいちやァならぬ。大事の体だよ。みつその大事のからだを。ちとふてあいよふ。く。千アイタヽ。これぢやァ堪忍ならぬわへ。みつ堪忍ならざア。どふともしなんし。わつちも堪忍なりいせん。千どふして。みつかて。こよひつとな。はしらなみ〳〵。又向座敷では。呑アンセールトロンコ〳〵。ア、しまいのコツヒイで。壹ツがすぎたそふな。とげつふう〳〵といゝながら。胸をなでる。住の戸ぬしもとんだ唐人だね。そんな事をいゝなんしちやア。わつちどもにやア。一ツもわかりいせん。そんな事は長崎とやらへでも。いつていゝなんすりやア。よふおすに。こんな所でいゝなんしちやア。聞分けいす者がなくつて。いゝちからがありいすまい。すきいせん。じれつとふおす。とあちらをむいてたばこをのむ。呑そんなら。もふいゝやすめい。ア、ウエインわいやだが。スマッカがなんぞ食いたい。住のそれ。いふまいといゝながら。又いゝなんす。ほんの毛唐人だね。スマッカとは何の事だへ。呑むまいものゝ事さ。スミヲヤ〳〵ぬし達がむまい物といゝなんすものは。大方猪や豚でありいしよふ。そして犬なぞもくいなんしよふね。呑何でもくふのさ。スミエ、モいつそけがらはしい。氣がついてみいすりやア。何だか。ぬしやァおつな

匂がしいすよ。いつそ胸が悪くなりいした。とむしやうに。つばを吐き。ひんしやんとすねる。呑アンはづつと通のきで。呑どふも。そふおめへのつん〳〵して。わつちをこなす所が有難い。氣がたかくつて。とんだ風流だ。とむしやうに獨でのみこむ。むかふから英さあ。皆歸ろふぜ。しくぢつちやァならぬよ。千丈子も。頭谷子も。ちふ起やよ。江川なぜ。そのよふに急ぎなんすな。もつと。かふしておいでなんしよ。エイわつちも。かふして居たいは山〳〵だが。どふも屋敷は門がやかましくつてならぬから。早く歸らにやァならぬよ。江川なぜその様に。やかましくいゝすねェ。英なに。門ばかりじやァねへ。惣体。屋敷はいろ〳〵の作法があつて。折目正しいものよ。身の自由になるは。町の事だよ。わつちらも。どふぞ一年ばかりも。町にいてみたいよ。江川わたしどもは。お屋敷へいつてみたふおすよ。いつやらもね。米屋

をこわしいした時分に。町へも來いすとつて。皆が騒ぎいしたによつて。もふ〳〵いつそ怖くつてね。わたしとしいした事が。上草履をはきいしたまゝ。坐つていゝして。みんなにいつそ笑はれいした。その時なんぞは。お屋敷じやァ。どふしていなんしたへ。英ナニあんな事にや。屋敷でとんぢやくするもんだ。又やしきへ指でもさして見たがいゝ。ぶつた切つてしもふばかりだ。わつちらァ。どふぞ來ればいゝと思つて。まつていたのさ。江川それ。おみなんし。そふいふ時やァ。お屋敷がよふありすは。ぬしの所へ。わたしやァいつて見たふおすよ。エイおめへのよふな者が來てみなさい。おゝかぶりだ。サァ〳〵かへろふぜ。皆いゝ加減に。いちやつきやよ。かへるせ〳〵。三人おい〳〵。

江川英さんは。どふもかへし申しやァしいしねい。といつて。帶をひつたくつて腰へまく。英これさよこしやよ。もふどふもいられねへ。と帶をひつはりやら。そのうち。千丈。頭谷は拵へてくる。ゑいも帶をむりにとり。しめながら出る。呑あんは大ふさぎの様子なり。江川そんなら。どふ申してもかへりなんすかへ。又いつ來なんす。エイいつでも來やしよふ。女郎三人そんならあした。三人あしたは。どふも來られやせん。二三日中さ。女郎どふもお名殘りをしいが。おさらばへ。四人又お

ふ迄はさらばだァ。チヽチン／＼。どこのか鐘がごん／＼。

○秋色庵の段

こゝに秋色庵蘭支とて。風雅でもなくしやれでなく。世を秋風のくさのいほ。庭もおちばに冬がれの。ききやう。かるかや。女郎花。籬がもとにのこる菊。ふりおく雪に埋もれて。景色さびしき閑窓に。ひとりごちたる晝さがり。蘭しさん。おやどにか。とおとなふ人は。千丈。頭谷の爾子。

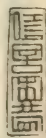
〔蘭支〕頭谷さん。千丈さんか。サア／＼。おはいり／＼。いつもご盛んでいゝの。わつちどもァ。寂寥としているのみで面白い事といつちやァ。つゆほどもございせん。なんぞあたらしいはなしでもあるなら。ちつとお話しなせへし。〔頭〕時に蘭支さん。此ごろの丸ふじの理屈ァ。どふつけなすつた。千丈子に。けさちらと聞いた斗りで。どふも分りやせん。くわしい事がきゝとふごせへす。〔ランシ〕そふでごせいしよふ。大分いりくんだこつたから。一朝一せきにやァ話されやせんよ。まづかい摘んでいゝやしよふなら。おのぶがいゝよふがそふでごせいせん。わたし共がしよふをあしくおぼしめすなら。こゝばかりが茶屋でもごせいすめいから。御氣にいつたところへおいでなせいしとさ。そふいふところへ客のほうから。あやまつていく馬鹿もねへもんさ。これ斗りで。わたしどもァ。もふ丸ふじへゆく氣はごせいしねへ。千丈さんどふおもいなさる。〔千丈〕さよふさ。わたしどもぁ。もふ行く氣はごせいしねへ。何の事ァねへ。これからまるふじをやめて。はまをぎへゆくがいゝじやァごせいしねへか。〔ツコク〕そふなら。そふしやしよふ。けふはわつちも暇だから。ひらや山をさそつて。はまをぎとでやしよふ。もし七がやかましくいつたら。そりやァその時の事さ。〔千丈〕なんにやかましくいゝもしやすめい。もしいつたら。蘭支さん。おめいわけを付なんすか。〔ラン〕そりやァ。わつちにまかせなよ。いゝ様にいゝやしよふ。時に常住わつちがいふこつたが。こふはじまつちやァどふも詰りやせんよ。なるほど傾城。傾國の名を。古人がつけたはづでごせいす。それ。おめいたちも。わつちらも。相應に四角なもじも讀習つて。りかふそふに。子曰の口まねもしやして。世上の遊冶どもをそしる者が。かふちァどふもなりやせんよ。まだおめいがたァ。息子株でおもしろ盛りだから。人もゆるしやしよふが。わつちどもァ。どふもゆるしやせんよ。もふ思ひきつてしまいやしよふ。〔千〕それちやァどふも

わつちどもが。先へたちやせん。かふなつちやア。何もかもうつちやつてしめいなせいし。[谷]そふさ。學問もする時アする。また和といふものもあるもんだ。なんでもこれから拵へなせいし。わつちやァもふこたへられぬ。とヒイといつて。あたまをたゝく。[ラン]そんならまづ行つてみやしよふ。あァどふもつまらぬか。といゝながら拵へ。みな／＼つれたち出る。ほどなくはまをぎへいたり。いつもの通り。丸炙きし炙が拔好にてさわぐ。内よりしらせたるゆへ。まるふじの亭主くる。蘭支何かわけをつけて歸す。これより一トしほにぎやかにて。臺のものなど出る。みな／＼花をはづむ。[ヤリテ]みな樣へ。かつてから申あけます。こゝは殊のほか手せまにもござりますから。此あいだ此四五軒隣りのうちを借をきました。どふぞあれへいらつしやりまして。賑かにお騷ぎなさつてくださりませと願ひまする。サア／＼皆さんおつれ申な。[三人]よかろふ／＼。さアいつてひろい所でさわがふ／＼。といづれも。おいらんをせをい。道行といふみにて。

隣へなりこみ。又面白くさわぐ。ほどなく床にて皆〻ねる。となり座敷には。おこうそ頭巾にて額をかくせし役者とみへし者ふたり。木戸ばんとみへし者一人。惡しやれのすばらしき男ひとり。四人一座にて。何か。むしやうにしやれのめす。[木戸]もし。鯉てふさん。なぜか今夜は。酒をあがりやせん。わつちばかり。かふ飲んぢやァつまりやせん。しかし此ごろァ。しばいもやすんぢやァいるし。あす一日ねよふとさへおもやァすむが。それぢやァめくられねへで。勘定がわるいす。[りてふ]これさ。そんなげびはいゝつこなしさ。ととんだ見得坊にて。酒ものまず。つん／＼して高くとまつている。[ワルジャレ]コウ中村やさん。わつちどもァ。口やァまづいが。ほんに。何處へいつても。やすかァされやせんよ。味噌ぢやァねへが。この中洲でも。勘さんといつちやア顔のうれたもんさ。けふも。それ。づゝと居續の歸りがけに。どこへしけこんで。額をいぢらして。それからひまちやァあるし。ぐつとねやした。目がさめてみたら。鯉てふさんが來てい

なんして。こいといゝなさるから。きやした。太夫さんにやア。はじめておつきやい申しやす。こんな野郎だが。これからお心やすくとか。なんとか。かたく出ちやァはじまりやせん。憚りながら。おちかづきのため一トツあげやしよふ。とぐつとあをりきりにてさし。いろ／＼しやれるうち。おいらん四人でる。座敷を一へん見廻し。かみの二人さがる。しはらくしてやりてきたり。勘へ何かさゝやく。[カン]てめいたちァをつな事をいふもんだ。この假宅で役者はいやだの。何のかのと。そんなことァ。町でいゝなせい。この土地じやァはじまりやせん。そしてわつち共がつれだつてきて。女郎衆がさがつたといわれちやア。此勘さんの顔がたちやせん。なんでも二人ともに出しなせい。嫌だといゝなすつちやア。荒の幕がはじまりやすぜ。とにらみつける。やりても荒れられては困るゆへ。下へいつて。どふわけをつけしか。また女郎でる。それより杯もすみ。とこへまわる。[女郎いさめ]もふ頭巾をとりなんしな。

よくこんな所へ來なッんした。上の着物をぬいでねなんしよ。〔傳〕そんなら着物をぬぎのあをばとしやしよふ。しかし今夜はとんだ寒いす。〔いさめ〕もしへ。あの鯉てふさんといゝなんす客人は。ねつからみもふした事がありいせん。ありやァ新下りかへ。〔傳〕なァにありやァ。素人衆さ。けふ中村やからつれだつてきたのさ。〔いさめ〕ほんにそふかへ。わたしどもァ。ぬし達と同じこつたとおもいした。なんでも。とんだ見得坊だね。あれでも通かへ。〔傳〕何。ねつからわからんてやィさ。とこれより。何かむしやうにいちやつく。○向ふのざしきでは。おしまが聲で。〔おしま〕エ、モいつそ。ぢれつてへぞよふ。と大聲でいつて。こんな様ながかしにもあろかと鼻唄でづゝとたち。うわぎを屛風からひきずり落し着ながら蘭支などが座敷へ來てはなす。〔おしま〕ふざん様。みつをぎさん。江川さん。きいておくんなんし。わつちが今夜の客人は。とんだ化物でありいす。初手座敷でみいすりやァ。役者のよふでありいすから。とんだいろ男でありいしよふと思ひして。床へまわつてみいしたら。いつそ顏はね。赤銅の斜子とやらのよふでね。黒い顏にとんだ菊石がありいすよ。そして又氣できいていゝすりやァよふおすが。とんだ見得坊で。ねつぐぢ／＼ばつかりしていゝして。ねつから好きいしねへ。いつそじれつとふおすよ。〔ふざん〕そりやァ。とんちきだね。それでも此方へ來ていなんしちやァ。すみいせん。いゝ加減につきやつてねなんしな。〔おじま〕いゝへ。もふ／＼どふおつせいしても。わつちやァ參りす事ァ。嫌でありいす。と泣聲になる。〔みな／＼〕それぢやァ。どふも惡い。こんやぎりと思つて勘忍してねなよ。と皆々なだめる。おしまは泣く。かれするうちに八聲のとりがこけつこう／＼。火の用心さつしやりましよふ引。

表紙	ヨコ	三寸五分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸

田舎談義發端

予去年の秋。いでや市中のかしましきを避て。鄙の月みんと。刀禰の河北にしたしき朋友のありけるに。心ざして。艸庵をうかれ出るに。秋聲鼻を酸め。烁色腸を斷。目に見るほどの景物皆風流を帶たり。わきて田家の軒に。萩尾花の露にふしたるなど。我身ひとつの秋なるかと往往ほどな

うして。草加の驛に至り。酒肆に柱をとゞめて。一椀の酒を求め。心ゆるみしまゝに。思はず床机に眠りけるに。人有て起よ起よといふ。目をひらきて見るに一人の翁なり。翁の曰。客好で。戯作をなすことをしり。傖父嘗て述たる一冊子をあたふ。一度閲時は腮の釣匙をはづし。臍忽に店かえをすべし。賈大夫が妻といふとも。一笑を

催す事速なり。我ハ竹の塚の翁也とて。かの草稿を予が袖にをし入て去ぬと思ひ。目さめて袖をさぐるに。はたして一巻を得たり。未審と其書を開けハ。左の如し云〻

江戸市隠

山東京傳誌[印]

自序

稲苅て天地に怖きものはなし。と誠に秀吟なり。今や聖賢の御代にして。萬國みな仁讓あり。故に天よく萬物を育したまひ。地に預りしもの。十重二十重に實のる。見るにいさましく。粒ゝ皆心苦と語せしも。豊作にわすれ。民屋の賑ひいふもさらなり。予かつしかの郷

に行くことあり。時もひがんにして。廣田の稲みなぼさつとなり。金色の光り黄ゝと照らす。あたりにいみじき佛室の有ば幸に結縁せんと。導場に至り見れば。あなたふとげなる説法のあり。和尚の流辯は三毒の塵をはらひ。聴聞衆の頭數は菩提樹に似たり。おもはず感喜なしつゝ。嗚呼予も法の友ならなくにと。尉と姥の中を

かきわけ。高坐の下にすゝみより。木耳(に)を
かたぶけ。首より尾まで默然として。腐銅
に納め置(をき)しが。烁寂のつれ〳〵に一册子
となしぬ。見て笑ん歟。いなか談義と有の
まゝに。竹の塚の翁東子なるもの。みづか
ら題し侍りぬ。

田舎談義

爰に花のお江戸を百町余去つて。葛飾の郷あり。東は利根川の流れ渺々として。順風の帆影稙井に移り。西に中河の青水帯流して。呂拍子の音水田にひゞく。其地洪水にうれひあれど。豊作に倦ず。雨順都合せば。穂に穂咲の名郷なり。此秋こそいつとしに覚えぬ豊作にして。四石とりの説あり。訳て金田村の滿作他にことなり。一村の賑ひ落穂につみあく贋金も。羽を休日の三日正月。村でも若いものゝ頭を押す家持の杢助（小の川染のひとへものに。両国尾張や出の紺はかたの帯を尻下りにメ。丸木桐の下駄に赤いかはをゝすげ。銀流しの毛ぼりのきせるに朱らうをすけ。そら色ちりめんのきせるづゝを結びつけ。はまむらやと。紀の国のもん所のさらさうちはをもち。肩にさらしの手拭をかけ。細道を一はいにひろがりながら。）そけへいくのは風つはりの兄じやァねへか。げへにはやく出かけたァな。まちさへ。一所にいくばへはナと。呼かけられ

助右衛門（ひがんじぶん事なれば。青ちや目引の小紋の袷に。黒さん留の半ゑりをかけ。こはくじまの七ツ過といふ帯をメ。肩に花染の手ぬくひをかけ。かは草履をはいて。）ヲャだれだァとおもつたりやァ。家持のおせなァか。どけへ行氣だァ。

杢 おらァ法福寺の物讀へいくべいと思つて。（物よみとは談義説法の事をいふ。）

助 そりやァ寄どくだァね。物讀も昼間のうちはあんぢん事べへで。ねつからおもしろくねへよ。よさつせへ。ばんげ。いぎますべへ。何ンだァか。敵ぶちだァとよ。そりやァさうと。お身らがとなりの茂平なァ。ふけたァげだァ。けへり申たかな。（ふけたとは欠落の事を云。）あんでふけましたァ。ばくちやァ。御はつとだァし。どうしましたな。

杢 何サ。ものよ。松戸河岸の。おん女郎でふけたァ。それもはァ。べらぼうな咄しよ。

助 すんだら。女郎でか。どうしてな。

杢 とんだァ事よ。いけげへぶんの悪い。兄嫁のおばァが。江戸のお屋鋪にゐて。去年の冬。死ましたァ。そのかたみだつてよこした。淺黄縮緬の褌を。そつと持だへてれて。それでふけ申たァ。いけへくそだはけだァよと。咄して行向ふから。隣村の通り者。小松與東金の茂右衛門が。背戸で鳥がなく。トうたひながら。（身なりは似たものなれば。こゝにりやくす。）ヲャ／＼そろつてこりやァどけへ。物讀いかでかく盛るさうだね。

両人 松あにいか。此ごろはあへましねへ。工面はよくごさるか。

小松 いゝじやァねへのさ。ねこい物だァ。錢もうけはすがねへのさ。だへぶ店が賑かだ。いつて。一ッぱへづゝ呑ンますべいト。三人連れ立。店のまへにいたる。（まづ在方の店といふは。こもかぶりを壹本をし立。其外酢。醤油。ざうり。わらじ。紙。ろうそく。附木。きざみたばこ。其外いろ／＼の物を正面の戸棚にならべ。勝手よろしければ。小質でもとる。惣而とふりものゝしまりたるが。此店を出す。在方は似たものニて。三日正月の

時は。村中の老若男女より集り。ちうや酒もりをして。おどりうたひ。すさましく賑か也。わけて豊年の時はくんじゆなす也。

［小松］亭主。ゐたァか。［てい主］ヲ、松せなァ。どれもよく出やしつた。サァよらへ。家持のおせなァ。ひさしぶりだね。［亭］何ァにハァ。びやうどくるが。いつでもうちにやァめへなへ。かみ様べへ。ゐるから小氣づけへだァによつて。一ッ盃のんじやァ。じきさまかへります。［助］ちくべい。いはねへがいゝ。かみ様べへなら。いゝ㕝にして。呑んで居べいナァ。かみさん。又聞ねへふりをするよ。［女房］しさしいもんだァ。助左衞門どんナァは。來ると惡口べいきゝ申ス。にくい人だァ。サァみんなあがらつしやりもせ。［三入］何ンぞ。さかなはねへか。なまづでもあんべい。亭主此頃ァ網代ァどふだ。［てい主］何ンだか。とれ申さぬ。鮒の焼たァがある。是で呑つせへト。弁慶より四五本ぬいて。酒をかん鍋に五合程いれて。茶碗をそへて出す。三人大あぐらにて呑はじめる。片わきには村のおとしより百姓弐人。奴豆腐で濁り酒をひかえながら。［茂作］お旦那。ことしはおめへの田を作つたおかげで。去年ゟ五俵ばへ。とうにとりました。いつにねへ事。其替りにやァ。ちいさへ娘を新田の舎弟がとこへさつくればへと思つて。せんど馬喰丁へいつた時。大丸で古着をかうべいトおもつていつたら。こつちにやァ古着はござらぬ。富沢丁へいかつせへといふから。すぐにだへまるを出て。とび澤町をからうつちやすれて。鳥町はどこでござるとたづねたら。鳥町と

云は江戸にやァない。枇杷葉湯なら烏丸だ。雉子町は神田。とび坂は本郷だァ。何をたづね申すといふから。古着を買ひに行ますといつたら。そんならとび沢町だとおそはつて。やう／＼尋ねて。でかく古着屋の有處へいつて。いゝきる物を二ッ買つて來ました。【お頭】ツリヤアハァいけへ物いりだァ。ひとつでよかんばへに。【茂作】何サ二ッを直して。ひとつにすべいとおもつてサ。とんだァ掘出し物だァよ。地は淺黄のきぬで。金ばくでめでたへ紋所よ。奏竹に鶴龜がでつかくついて居ます。二ッでたんだ壹分で買ましたよ。【お頭】そりやァおぶぎだんべい。直してもやくにやァ立チますめへ。【百姓甚八】サァ咄しばへし申さずと。呑でさしめさろ。のどが。ぐび／＼いひます。【茂作】ヲヽすんだらかさねて物すべいと。手杓でぐう／＼呑んで。甚八へさせば。【甚八】こりァ見事だァ。おつへすばへ。其代に肴にひとつ諷ひませうと。どつちやう声をはりあげて。謡＼高砂やあの松の木を臼にして其うらほちを杵にして餅をつくこそ目出たけれ引ハ、、、。是じやァひますばへ。【茂】こりやァおめい付だァと。顔をしかめて呑かける。見世の片隅には。若者ひとり馬工郎貮人交リて。鍋をひかえながら。とほうもなく高調子で咄す。コレハ馬工郎の持前也。【はくらう吉】コレ戸が崎のおせなァ。きけへ。せんどをれが金町の三ぶとばくろうしたとち栗毛の馬ァな。三ぶやろうが稲毛へ乗つて行きやァがつて。十粒負をぶたした。（小粒一チ分を一トつぶといふ。）下馬も。いゝちくせうでな。土浦の馬市へ乗つてゆきやァがつた。とんだ虫のいゝやろうよ。そりやァそうと權八。龜割の金はすんだか。【權】何ニハァぶつてもはてへても。よくしやァがんねへ。此頃ァ水戸へうしやァがつたとよ。【おかん】そんだら嬶ァでもぶつたくればいゝ。【ごん】エミあんなものをあんにする物か。ふきげへろが。欠伸をしてゐるやうな。かゝァを五兩ぶつてもやだァよ。【吉】そんなに。さますな。いしやァ。それでも足をつけたじァねへか。頬はきた（な）くつても。味はがんだんべへ。【ごん八】たァことをつくな。面白くもねへ。エミモウ酒がねへ。コレてい主濁りを割ッて。モウ一トツかん鍋。くれさへと。銚子切りついで。するめのつイたをむしり／＼。コレ吉。昨日勘二に見せたあげつ歯は（あげつ歯とは馬の手のあかりたるを云。）どけへもひいて。いかれねへから。いゝ加減にたゝき付てしまへ。【吉】とんだ事をいふもんだ。あの馬にやァ。をれが軍が。あるといふ内酒を出す。いよ／＼高調子にてさへつおさへつ。奥の座敷には。大百姓の小旦那とみえて。（淺黄きぬ小紋の紋付の單羽織に。空色ぶとりのひとへ物に。黑どんすの帯を。むね高にメて。）

何か詩をかいた扇子をもち。一年に二三度づゝは。吉原へもゆくといふ風俗。相手はそがみのゐしや迯留賀徳庵。ようかん色のろの羽をりに。片めん小紋のひとへ物に。眞田をりの帶。ふところはとほうもなく大く。したちものと見へて。ものいひ鼻へかゝり。〔徳庵〕小旦那もし。となり村へ。江戸から放蕩子といふじゆしやが。でばつて大學ナア。講訳サ。するげだ。申わぬしサア。聞もしたか。でかふ高慢サア。いふともし。〔小旦那〕聞キませぬが。江戸から流れて來た。くらへだァから。高のしれたァもんだんべい。ほんに徳庵老にやァ。まァだ見せねへッけ。先ど。をれが樋の口河岸の女郎に題して。狂詩のものした。（ひの口河岸とは松戸のかしなり。）書いて見せべへ。コレかみ様。硯箱をちつとかさへ。〔かゝ〕アイと。いふて掛硯を持て來る。〔小旦那〕懐から小半紙をとり出し。筆をとりて書。サア徳庵老とだす。〔徳庵〕フヽ。何ンだモシ。濁酒大酔對夕風。四文銭一本懐中。女郎買往權八殿。廣大夜長今五鐘。ハアヽこりやァ出來もした。東冬の韻サアでおもしらへ。小旦那も中／＼あじをやりもす。イヤヘヤ我がへけもしたァ。と（此徳庵。小旦那のかみと見えて。むせうにつとめる。國者にもゆだんはならず。）〔杢〕何ンだか通しやしきにやァ。毛唐人の寐ごとでげへに。むづかしいこんだァ。おらづれがにやァ。ずでへわからねへ。サアもうお談儀もおへたんべい。だへもんへいつて。名主どのゝ。娵のけへりを見ばへじやァねへか。〔助〕けふいつたァかな。あの娵ナア。とんだじかうなァ女だァ。こんど豐年だつて哥をものしたとよ。〔小松〕ハアヽ。あんとよんだナァ。〔助〕ヲヽきけへ。アヽなんだつけなァ。それよ。

〽滿作やうつたまげたる稲の出來
孫彦やしや子喰ひあまるべい

〔杢〕コイツハアいゝ。とんだァ作者だァ。〔小松〕江戸にもあんめへ。モウ日くれるさうだ。〔小松〕なる程。おらァだへぶ用があり申す。サアわかれますべい。〔助〕又うまへ事か。はん口のりたへな。〔小松〕のりたへも氣イつやへ。サア亭主爰は。をれが一ッ所にはらへますよ。〔てい主〕ヲヽよし。呑込ました。〔助〕〔杢〕いんにやァ。それじやァ。わりい。作／＼割にしますべい。〔小松〕はて。らチもねへ。ようおんすはナ。てい主。をれげへ。ものしてをけへ。すんなら。みんなァゆるりと遊ばつせへ。ばんげお談義へ來て。しりでもしねるべい。かみさま。せわでござつた。〔かゝ〕マァ遊ばつせへ。そんならよく出なさつたよ。

金田村の法福寺といふは。一チ村一ヶ寺の舊地にして。本尊は弘法大師の御作の阿彌陀如來なり。此秋大滿作なれば。本堂修覆のため。近郷に名高き談義僧。佛相寺の天鳳和尚を頼み。彼岸中晝夜說法ありければ。近郷近在はい

ふに及ばす。方壹貳里が間の。老若男女。群集なすゆへ。客殿に松板を次て張出シをなし。村内の檀方世話役。庫理楽寮に詰かけ。奉納のはり札は。本堂のなげしに張あまり。佛餉袋の杉なりは。伊せ町。小網町の入リ舟にことならず。取わけ。夜は參詣おほく。本尊の前には。手前造りの花をかざり。盃てうちんの白張を。一面に燈しつれ。双鉦二挺に鎮守の。太鼓を交て。鐵がれたる念仏亂調に打たつれば。秋風にさそはれ。隣郷隣在に響き渡り。近來比類なき大當りにて。村中の小道もせばく。大薩摩。飴おこしの呼聲。耕地にひゞいて。夜の更る事をしらず。最はや夜談義のはじまると見えて。半鐘の音聞えければ。[ばゝかゝ]子ども引つれ。やれ長柰へ。はやくあいべ。居場がなくなるはへ。[若者]コレ吉やへはやく來ねへかへ。モウおだん義がはじまらア。いけ埒のあかねへと。われも／＼といそぎ。門ンの入口を押合て這入る。門の内の杉垣の陰に。十七八の娘。鳴海絞のゆかたに。黄糸すがの立しまの帶に。上田の紙の三ツおりを前の方にはさみ。朱らうのきせるをあたまにさし。そのうへから染わけの手拭をかぶり。人まつふぜいに立つていれば。らんとうの竹やぶをかさ／＼とおしわけ。はたち斗りの二才。茶びろうどの袷に。油しまの帶をしめ。こんの手拭をかぶり。日より下駄で。ぬきあしをしながら。[二才]そこなア。おかねじやアねへか。

[娘]だれだ。徳どんか。いかく待ましたアよ。あせハアそんなに遲くござる。

[二才]おれもハア。氣イせくから。日イくれると。とつかとうかんたしてナ。本道をくると。遠から次郎作らア。背戸のなすく道を來るとつて。權右衛門どんの糞溜へがら。おつこち申て。數々ハア。つらもからだも。糞だらけになり申た。とんだ目に。あひましたよ。どふもハア。すべい樣がござんねへから。用水堀へ。どんぶりととびこんで。あにかア。洗濯のうしもうして。彌兵衛後家を頼んで。袷のうそつと兄嫁のとけへそう云つてやつて。やう／＼うまきました。コレみさへ。まだ糞の匂へがします。[娘]ほんにナア。薄ぐさくござる。どこも怪我ナアしもうさねか。

[二才]あにハアけがはしなへが。たゞ糞にばへなつた事よ。[娘]そんだらいゝ。こん夜は内の首尾も。でかくいゝから。思入にあそんばへ。何處へいくべいかナ。[二才]待さへ。あすけへ。誰かくる。めつかつちやアよくねへ。こつちへ來さへと。娘の手をひき。藪の中へはいつて。息を殺してすくんでいれば。やぶ蚊がきてむせうにくいつけども。手のひらでおしつぶし／＼。隠密にいちやついてる。△撞鐘堂のわきより。としごろ五十ちかき道心坊。白もめんのひとへ物に。麻衣を首にまき。しぶうちはをもちながら出る。其後から。四十四五の女後家とみへて。空いろ木綿のひとへ物に。さん留嶋の帶を前へむすび。是もあたまにきせるをさし。其うへから手ぬぐひをかぶり。二人ながらくらい所にたゞずみ。

[後家]これ坊さま。いしやアおゑねへ人だアよ。此頃は。ねつから寄つつかず。ついぞ。つらち見せねへ。あせハアそんなアに。生が悪くござる。おみさまと

ねんごろを。せしはじめ申たは。それ忘れもしめさるめへ。去年の盆の棚經の時。内の者はみんな。踊見に出て。おれべい居たら。こなたのいふにやァ。これ後家どの。そんたァも御亭に離レ申て。ひとりじやァ寂しくごさるべい。道心坊の身で。こういふも。氣の毒だァが。とつくからお身に。かつぼれて居申た。うそじやァごさらぬ。ほんのこんだァよ。托鉢してもらへためた。引割が蛭になる法も。あれしんじつだァと。おいやつたによつて。ついわしもその氣になり申て。人トの目なこ玉を。しのんでものして。眼へ入れても。いづくねへほど。いとしく思つてゐるに。此頃らァ秋風だんべへ。かげも見せねへ。大方外にいゝ生根ができたんべい。ありたへに。白状しめさろ。それがやだなら。その着て居るひてへ物と。盆前淺草のお觀音參りの時。かした百の錢と。越中褌のきれをけへしてもらひますべいと。泣声での大くせつ。道心 そりやァヘァ。らちもねへ恨みこんだァ。そうゆふ氣は目薬程もねへよ。此頃らァ腰ねへらがおこつて。いごく事がならねへから。軒向の伯樂殿にみせたら。人間のねへらにやァおれが薬はきかねへ。死で牛になつたら療治してやるべへ。とおれが道樂をしるのを知つているか。こすられ申た。それゆへに。ぶ沙汰をしまふした。鮒雜魚をくはねへ法もあれ。外をかせぐやうな道心じやァござらぬ。隣のおぢさまがいうにやァ。腰の痛むにやァ。またゝびと。鰹節がいゝとおいやつたから。昨日市で買ッてもらつて。食へかけて喰たら。そのせへか。だへぶいゝから。おだん義イは。大方お身さまのうでべへと思つて。片あかりいから來て待ました。うたげへをはらさへ。こゝじやァ人トざかしいから。本ン堂のうしろで。咄しませうと。（後家の手を取。本堂のかたへつれてゆく。）一せは役 サァ〳〵燈明銭を銘〳〵に。あげさつせへ。あぶらが。たけへとつて。お佛へ魚油あぶらもあげられねへよ。參詣 コレあんまりおつぺすめへよ。子供が居ます。同 ヲ、込むから。ちくとんべい。ふせうしなさろと。（押合へし合ふ群集の中は。女に若イ男ともみこみにたつているゆへ。途方なくさはがしければ。物音聞えず。）一せは役 東西〳〵。（芝居のやうに東西〳〵といふ事は。談義又そう禮の引導の時。お定りにて在方の風なり。）談義僧は高座に皺面をつくり。參詣を見おろし。りんを十ヲ斗リうちならし。天鳳和尚 ヱヘン〳〵ヱヽ志すところの燈明錢。施主の面々。有緣無緣。愛みんご念。南無阿み〳〵。（參詣同音十念ある畧。）和尚 さァ〳〵此間中は。天氣も能ごさつて。ぢいさま達ばァ様たち。かみ樣。若イ衆。子ども等迄。奇特によくまいらしやります。當寺の本堂も。見やつしやる。とふ

りで。かくて火へ破に。およびに申たによつて。他力のため。おれさァに。說法を物して。建立をたのむと。お住寺の。たのみやつたに。よつて。此頃中から。おつぱじめた所が。仕合とつて。でかい參詣で。よろこび申す。扨又おの／＼の。ほふなふめされた物を。爰で鳥渡ひろうしますべいと。いふより番僧帳面をさしだせば。[和尚]手にとりあげて。ヱ。佛餉一俵。當村佐治兵衞どの先祖ぼだいのため。同二袋。金町村八六殿。諸生靈のため。青銅拾疋。當村久助母一ッさい聖靈のため。引割壹ト袋。當村太郎左衞門殿先祖のため。ぼたもち壹重。おいわだ村おすけ後家どのゟ拙者へ見舞のため。秋粟壹袋。鳥目百銅。草見便庵老ゟ盛り殺したる諸聖靈のため。右こゝろざす所の。諸聖靈菩提。家内安全そく才延命。南むあみ／＼。同音十ねん畧ス。[和尚]さてはや。昼の内は。どふでも年よりが。おゝいから。ありがたへ事ぐへ。けふは父母恩重經の香壽丸が身持りの。所を說申たが。とかく夜談儀は。若ィ衆がおゝいから。ちつと又きつい事も。とかねへじやァ耳にへへり申サぬから。夕ァから敵ぶち鉄炮物語といふ。おもしろい。はなしを始メ申た。随分。しんびやうに聞かせべ。マァだ。談義もしまいマじやァ。日數もあるから。段／＼とおもしらへところを。說ませう。爰でまた隣村の所左衞門どのゝ。娘ッ子去年のなつ死やつた。そのため風誦文を。あげられたによつて。みんなが同音に。ゑかうしてやらしやれと。りんを鳴し。ふじゆもんをうや／＼しくお開き。[せは役]東西／＼。どれも靜かにしめさろ。[參詣]コレかみさま。其子をだまさつせへ。よく泣く子だァ。なかねへ子とりけへてきさへ。いけやかましい。[せは役]東西／＼。[和尚]つゝしんで申す。風誦文の事。それつら／＼おもんみれば。三ン月時分の桃の花は。でつかい南風にさつちり。うんざら寒い秋の月は。わら灰のほこりにかくれ。正舍濕熱は。不換金正氣散なり。爰に。涼夜螢光信女。俗名お鍋。艶なる男を見つかぢりしより。朝夕戀こがれものすれども。さすがに。口へさんだす事もならず。ぶらァり／＼と。やまいの床に。ふんぞりぬ。兩親でかくてうあいして。いしやよ藥よ。はりよやへとよとさわぎ。又は神を賴み。佛を。いぢり。せつてうしても。定る。いのちだんべい。更に其かいも。そうすひもくはず。去年六月廿六日の曉。くんねむるがごとく。此世を去りおはんぬ。ァヽかなしいかな。としは十六さゝぎのとしで。れんぼれゝつの。闇にまよひ。終にあの世へうつばしる事。むごちねへ事どもなり。これによつて。本ッ

尊へ風誦文をさゝげ。又は大勢の人に。一ぺんのゑかうを受て。生念成佛をねがふもの也。時に寛政元酉秋彼岸施主所左衛門妻。どれもゑこうを頼んますと。松虫の鉦うちならし。六字詰を念シ仏同音ンにて。しばらくゑかうある。

[和尚]みむなも。ずいぶん。ねん仏を申なさろ。若ィとつて死ナぬといふ事はねへこんだ。扨ハアこんやは色／＼の事ばへで。かんぢんの。敵ぶちを。咄しませぬ。さて。其時にナア と。高座をぐはつたりとならし。熊鷹權太左衛門は。伊勢の山田の。村ッはづれに。手ならへの師匠をして。村のわけへもんどもに。劍じゆつのふ。敎へてかくれて。居申シた所に。兄弟の者共は。小食になり申ておやの敵を尋る所に。兄の八兵衛は。道でせんきが。おこり申て。きん玉が。でつかくなつたによつて。あるく事がなり申さず。コレ しやてへよ。いしやァ何と思ふ。おれがきん玉がコレ見さへ。あて事もなく。でかばちなくなり申た。是が邪魔になり申て。おやじいの敵ぶちァ。おぼつかなくござる。エくやしいこんだァと。唐茄子のやうな。泪を流して。いゝ申となァ。弟の七助が そりやァハァあんとすべい。何たるきん玉だァよ。醫者に。見てもらつてよくし申て。敵をたづね申すべいと。いひ申て。そこでもつて。兄の八兵衛をば辻堂へ背負て行キ。ちつとの內愛に。いめさろ。おれが村中へいつて。醫者殿を頼んでこべいと。はしり申す。兄の八兵衛はきん玉をさんだけへて。い申す所へ。山田に居申す熊鷹權太左衛門が。隣村からけへりかけ。辻堂の八兵衛を。め付てな。ャヘわりやァ。作太夫がきの八藏じやァねへか。でつかくなつたによつて。おやぢいの敵をぶちに出ばつたァかといへば。八兵衛も權太左衛門が顏を見て。うぬは。よくおんらがおやぢいを切ッ殺しやァがつたな。サア おやぢいの敵じんじやうに勝負しやァがれと。たちそうにしても。きん玉が邪魔になつて。へたァり／＼と尻もちをつけば。熊たかは口をでかくあへて。けら／＼笑ひをして。わりやァそのきん玉ァ何の樣だ。べちやァねへはへ。小屋の家根に這てる夕皃ふくべを見るやうだァ。そんなァ邪魔物もつてる身ぶんで。親仁ィの敵ぶつべいとは。てんこちもねへこんだァ。覺悟しろ。けへりぶちだァぞと。何かなまなげへ物をつらゝひんぬくとナァ。八兵衛も杖にしこんだァ刀をぬくべいと。あせり申せど。とかくきん玉が荷になり申て立つ事がならず。無念の泪だ夕立程流申て。舍弟やへ／＼と。どなり申すを。熊たはあんとも思はず。此おふぎん玉やろうめ。でけへ聲をも

のすると。いけつ口からさつきるぞと。刀をつきつけ〳〵すれば。ヱヽ因果なァきん玉だァ。どんなきん玉だァと。もがけどもかなはず。やれハァ熊鷹殿よ。どうでおれもこふなる上じやァ。仕方がねへ。成程けへりぶちにしめされ。しかしハァたんだ一通りいふ事がござる。どうぞごせうだァから。聞てくれさへと。涙をほッたァ〳〵とこぼして頼めば。惡黨なァ熊鷹も。ふびんだァと思つたァか。刀をわきへ物して。サァ〳〵早くぬかせ。云ふ事とは何だァといへば。そんだらいゝませう。かへり打にしねへめへに。勸化をとつてくれさへ。トいへば世話役勸化でござると。ひしやくをふり立て參詣の中を廻る。[參けいばゝ]やれハァ熊たかてやらは。むげへ男だァ。八兵衛の大きん玉はころされ申すか。[ぢゝ]ヲヽサ大かたそうだんべいよ。[ばゝ]おやつかな。なんまみだふつ。[和尚]勸化志のめん〳〵。諸聖靈ぼだいの為。なむあみ〳〵。同音十念。畧ス。△それより引つゞいて闇をいだし。紙ひやうぐの守り本尊をとらせ。そのあとにて。塔婆供養とて。京木に銘〳〵の忌日をかき。和尚六字詰にてゑからありて。いろ〳〵の雑談おかしき事あれど。あまり長くなるゆへに畧す。[和尚]りんをならし。又十念をだす。扨ハァそこでもつて。熊たか權太左衛門がと。いゝだすと。本堂の片隅にて。生酔口論ありければ。談義しばらくとぎれる。[生酔]コレおれがさつま芋を食いかけておいたら。なせぬすんでくらやがつた。おれを誰だとおもやァがつて。とつてくらつた。此でろぼうやろうめへ。[相手]このくらへ倒れめ。おれがいつうぬが薩摩芋を盗んだ。とんだやろうだァ。人を見そくなつたァか。くさむらの權六といつて。糞舟仲間じやァ。頭のおしてはなへ男だ。どろばうにされちやァ濟まねへ。やろう。でやァがれと。既につかみ合そうになれば。世話役村の若ィ者ども。大勢かゝつて。外へ引ずり出す。[せは役]東西〳〵。みんなたゝつしやんな。お談義はマァだなげへと。靜めるゆへ。くづれかゝりし。參詣もおちついてしづまる。[和尚]イヤはやお談義も。此やうにさかり申て。喧嘩の出來るよふでなければ。おれサァも張合がねへ。しかし今夜もよつぽど夜が更申したから。けへりぶちの所は。あすのばんに咄しませう。跡でゆるりと踊りでも踊らしやれと。お定りの十ねんおはれば。はん鐘が。ちやん〳〵〳〵。

双鉦がぐはん〳〵〳〵

田舍談義 大尾

みさあとやらで見しらせまいらせ候。いまだいきれつよく候へども。それさままめでうるしくぞんじまいらせ候。まあづいふべい事には。過し田うへの時分。夫さまのじよなめきめされたを。一まなこ見かぢりまいらせ候て。居(ゐ)べいにも。立(た)つべいにも。忘(わす)れべいにも。ほうがくなくうつたはけまいらせ候。たあだしひだあと思(おも)ひめされべいなら。せどさあのはい小屋(ごや)でなりとも。すぐさま思ひをおつはらしたく存まいらせ候。それともかつほれたをうそだあと思(おも)ひめされべいなら。四ばんげも。五(いつ)ばんげも。むだ足(あし)だとおもつて。かよひ申べいにて候。それさあで。うらが根性骨(こんしやうほね)も知(し)れべいにて候。よく〳〵思案(しやん)のおしやつて。返事さあこしめされ。はなすべい㕝は。しゝりはの草のやうだつちや。めでたくかしく。

哥に

それさまがやあだと
　ほんにおもしやらば
うらがまなこは
　ほへつぶすべい

おなじくかへし

やれ〳〵それさまは。あらたまりめさつた心(こゝろ)から。うらあにかつぽれ召(め)されたてゝみさあくださつたが。やう〳〵よみ申まいらせ候。うらが田うへの姿(すがた)に。くびつたけとは申しやるが。じつほんの事であるべいなら。うらもあんまりにくゝはおもひ申さぬ㕝にて候。大かた壹二ばんもしめされたら。よしにしやうといふべいかと存(ぞん)じまいらせ候。なんにしろ。ほんだあといふ證據(しやうこ)をば見せめされぬうちは。うめえ返事はなり申さず候。此やうにいつたら。うたがひぶかいやつだとおもひめさるべく候へども。たび〳〵此やうな事にこりまいらせ候ゆへ。かういひ申まいらせ候。めでたくかしく

猶〻哥とやらは。身どもかいつくれ申さず候　かしく

附録終

跋

閲をはつて獨笑やまず。懐にして茅屋に
かへり。頓に四方の君子の笑をまねかば。
翁が本ゐなるべしと。書肆に授て。櫻木に
うつし。寛政ふたつの年庚戌の春の。華を
さかせ侍りぬ

印　印

表紙	ヨコ	三寸七分
	タテ	五寸二分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸

西江月

莫戀歌樓妓館。休貪美色嬌聲。分明是箇陷人坑。可嘆愚人不省。樂處易生愁怨。笑中眞有刀兵。等間失脚入他門。便是蝦蟆落井。

柳浪館主人

西江月

歌樓ト妓館トヲ戀フコト莫レ。美色ト嬌聲トヲ貪ルヲ休メヨ、分明ニ是箇陷人坑。歎ズ可シ愚人省ラズ。樂處愁怨ヲ生ジ易シ。笑中眞ニ刀兵有リ。等間失脚シテ。他ノ門ニ入レバ。便チ是蝦蟆ノ井ニ落ルガゴトクナラン。

柳浪館主人

手段逼物娼妓絹籭自序

煙花を将棊の局面に設。娼妓の駒下踏の往来を観に。茶店に客を待棊子あり。籬で私夫に間棊子あり。大通直して飛車先の如く。素痴曲て角道に似たり。初會の席上に初王手あり。馴染の閨中に入王あり。色は金銀に有て思案になし。堅心の石田も崩れ。櫓に圍と

も忽破る。可恐。巧計のために都逼とならんとを。桂馬は誇て歩兵の餌となり。香車の慮なきは謬自。或は飛車手王手の義理に纏られ。或は後王手の借金に苦。手のなき時は端の歩をつく〴〵苦にする茶店の借。臨期で二歩をつかひ。留守をつかふといへども。借金乞の爲に逃道を失ひ。遂に雪隱逼と成

及ざる所は段将棊の助言
を乞而已。
于時寛政三年辛亥解凍日
題於菊花亭
山東京傳 ㊞

あり。嫖客と将棊圍は一手先はみへざるべし。則娼妓絹籭を作る。予がへぼ象戯の及ざる所は。段将棊の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭

山東京傳 ㊞

客はしごを二だん上る女郎てうづのかほにてよこにゆく藝車を一まいうつ女郎二けんめのざしきへにげるひらいて大手をとる又一ツけんにげるあたまから銀とうつ女郎ふそくにおもひとらずにわきへよる又金と打女郎がそこで死ぬ

右　惣傾城

目録

第一回

第二回

第三回

手段詰物娼妓絹籭　山東京傳著

○第一回

義理と情の二タ石の間碁子もあらぬ梅川が飛車手王手

□砂糖屋の丁兒甘兒をきこし鰻鱺屋の猫兒蕊とてのあだ李白一斗詩百篇といふ執し處ね吾も斂菱ぐ居風呂を

たてゝ。三日ばかり入ておいたら。まつひら御免といふはしれた事。花の下にて死たひといふた西行も。飛鳥山に居つゞけをさせたらば。かならず欠伸をするなるべし。されば久米仙人も女湯の番人にしたら。素餃に通をもうしなふまじく。弓削某とても女護島へながしたら。たちまちおいとま申べし。どれほどに美麗でも朝夕眼前にぶらついて居ては。このましからず。女郎買も命から一番目の大切な金銀を出し。其くせゆきにくきところを。都合と工面で慢茹にした首尾をもとめ。主親の四つの眼をはじめとして。人目をしのびて通へばこそ。おもしろくもあつたもの。一舛買の足るをしらず。心のまゝに樽酒のたのしみせんと。女郎の胯ぐらに。家藏をうちこんで贖身をし。渾家にしたところが三日もたゝず。鼻につくは世間にいくらもあるかたなり。雙が岡のしれものが。花はさかりに。月はくまなきをのみ見るものかはといひしも。まとに如在なき法師也。こゝをもつて推ば。女色の迷ひもはれぬべし。鳴呼さうじやとひとり悟顔に。口ひろきとはいふものゝ。捨がたきはとかく此まよひの一ッにて。上ミは一人よりして。下モは萬人講の講頭。兎の毛のボットセの髭に。天乍で出やうといふ者夫さへも。むかしおもへば信田の森の。うらの朽家でちよろまかした徒にて。かの川柳が選に。母の名は親父の腕にしなびて居。とは頗穿なり。わつちや。こういふかなしいとが。おざんすと酸鼻ば。酒呑童子と腕をしもしかねまじき。丈夫の涅槃像の二王みるやうに。己に似あはずうちしほれて。ともに涙をこぼすをみれば。實に女色は斷骨の斧。迷心の毒にきはまりたり。佛祖三經に。浮屠子の曰。愛欲は色よりはなはだしきはなしと。宋の景之元が美色のために命を沒するをもつてみれば。忠に死と甚輕しと。かたく出かけしも理なり。賢を賢として色にかへよとは。則此場所ぞかし。又媚は比封狐。機は深穽虎などゝ。明人もいふて置れば。女郎に身を謬と。中華の人情もたがふことなく。夏の濕石と女郎の心は。つめたいがちのものなれば。いづれゆだんはなるべからず。其又戀といふ川上をたづぬれば。僅方寸にたらざる　なれど。むかしから此へ。國を陷。城をとし。家をおとし。身をおとす者。倭漢にかぞへつくしかたく。周室を陷したる褒姒が　も。波銭一ぼんおとしたる鳥梳川岸の　も。ついに塡たうはさをきかず。淸の曼翁が碧海の迷津じやといふたもうそばなし。むかし混沌未分のとき。耳か鼻からか。

子をうませ。社稷宗廟をつがせ。こんな をばあけぬ相談にきはめたら。こふいふ惑ひもあるまいもの。何につけても邪魔な厚口。怖の風ぬ。あやしむべく。おそるべきの妖なり。

○爰にむかし。大坂新町の廓ちかきにいと閑なる所あり。世を捨人のかくれ笠。地名を箕輪とよびなれしも。簑にとなえの通ずれば。ぬれのちかきにあるゆへならん。箕輪の寮とて。人もしりあたりに目だちし。一トかまへは。新町の女郎屋。槌屋治右衛門が別業なり。抱の女郎梅川といふおいらん。ぶらく\/と煩ひければ。保養のためにはしづかなる。此別莊がしかるべしと。番頭新造の梅春も。看病のためもろともに。しばらくこゝに遷居る。ころしも秋の露さむく。菊はたばこにむしられて。尾花は炭の俵につくられ。庭の草木もうつろひて。いとほそく啼すゞ虫の。音をきくにさへ苦海の身は。夜みせしらする鈴の音かと。耳おどろかすも理なり。折からそぼふる霧しぐれ。遠寺の鐘の音もしめり。いとゞあはれの秉燭ごろ。むめ川はかの福清がいつしにひとしく。幽霊の濱かせにあふたるやうにおとろへて。臥具に其身をもたれゐる。そばには。新ざうむめ春が。氣をなぐさめの本よみさし。モシおゐらんのとこへ。心持はどうでおざんすへ。アイけふはいつそようおざんす。ヲヽそれではモウ。だん\/とよくおなん\/すでおざりいしやう。風のあたらぬやうになさりんし。ドレ藥をあたためて上申ンしやう。と尻輕にとし下なれど。姉とよぶおいらん大じの心根は。妹女郎のかゞみなり。梅川は泪ぐみ。ホンニ何から何まで心づけ。しんみもをよばぬぬしの介抱。死でもわすれはいたしんせんにへ。なんのマアばからしふおざりいす。灸すへの文句のとをり。世話になるのをあねといひ。憂をかたるを妹と。名をよびかはすながれの身は。せはになつたり。又したり。互のことでおざりんすもの。そんなことに心づかひをなさりんすな。サア藥をお上んなんしへと。藥ぢやわんをさし出せば。むめ川は手にうけて。それにつけても苦勞になるは。忠兵衛さんの叓でおざんす。ヲヽそれも苦勞になさりいすな。おまへさんの病氣さへよくなれば。わたしがどふとも都合して。かけもすまして上申。內證の手まへもとりつくろひ。二階のあくやうにして上ゲ申ンす。緣といふものはあぢなもの。忠兵衛さんの初に來なんしたは。去ゝ年の三月。さくらの初日でおざんしたね。アイぬしはよく覺へて御いでなんす。アイサわたくしは。其

時のこと忘れはいたしいせん。しかも其晩忠兵衛さんの形は。羽織も小袖も。黒八丈。ヲ、それ〳〵。下着は對いの結城縞。持物や何やかやも。いつそ意氣でおざんした。、わたしも其晩。まんざらでないと思ひンしたから。床へも早くゆき。なんぞいひたいと思つても。モシヘほれた男にや。ものゝいひにくひものでおざんすねへ。それはたれしもさうでおざんす。其夜はしかもわたくしが。次の間に寐てゐんして。よく聞ておりんした。忠兵衛さんのいひなんすニハ。梅さん。初から此やうなこといふでもねへが。此間中からお前を仕廻によこしても。御全盛といふもので。ついによいばんがなく。初名代で來るも。何か己ぼれらしいから。じれつたく思てゐやしたが。今夜かうしてお目にかゝるといふは。わつちやア夢かとおもひやす。トまづをつな手を出しなんした。ホンニ忠兵衛さんの癖か。いつそぬしは上手だよ。それから。わたしがかういゝした。わたしらがやうなはかない女郎でも。マア虚にもそんなことを。いつておくんなんすは。うれしふおざんすと。よくいふものでおざりゐすが。わたしやマアうれしくおざんせん。まんざらでないと思ふ心から。ひよつとさうおつせへすを。ほんにしてとやかう思ひしても。これぎりでお出なんせん時は。大たい罪じやおざんせんにへ。それよりはやつぱり。正直にをれはわきに馴染があるが。今夜はそこがわるいゆへ。しやうことなく夜をあかすまでに來たのだから。必ずとやかうおもふても。むだゞほどに思ひきれ。と言つておくんなんすが。わたくしは嬉しふおざんす。トわたしが申ンした。アイサそれから又。忠兵衛さんがいひなんすには。フウおめへはむごひことをいふものだ。此ごろうち。茶屋からたび〳〵聞によこした事も。てへげへ知つてもゐるだらうに。それを脇へこかして。そんなことをいふのは。フウ聞へた。思ひきれといふ謎だらう。こがれ死をするまでも。さういはれては是非がねへと。一ツすねなんした。ホンニさうでおざんした。それからわたしも面白なつて來て。ヲヤじれつてへ。どうしやうのう。さう思ひんすくらゐなら。こんなに氣はもみんせん。何をいふのも。フウ初會だといふのか。こつちは久しくとやかうと思つて居た心からは。初の裏のと思ひはしねへ。したがこつちばかりさう思つて。こんな嫌らしい事いふも。つもられる所がはづかしい。モウ何もいひやすめへ。トあちら向いて寢なんしたゆへ。やう〳〵あやまつて。こつちを向かせ。モシマア聞ておくんなんし。おまへさん

も人に知られたお方なれば。今までお近付でこそなけれ。茶屋でもたび／＼お見かけ申。とうから知つておりんすもの。初會の心じやおざんせん。おまへさんさへほんに來ておくんなんすなら。わたしやシツかくごをしてよびとげ申心でおざんす。ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞ッの事。ソリヤほんにかへ。ヲヽしれた事。こんな美しいしやつつらを。なんの持ずともいゝことにこんなにおれを迷はせる。ト煙管でたゝく眞似をしなんした。はづかしいが其ときは眞にうれしくおもひんした。それがやつぱり惡緣でおざんしたと。ほれた男は噂にしても。ふさぐが女郎の習にて。梅川は梅春とかけ合の。此はなしにのりが來て。すぎこし方を思ひ出し。我身にかゝる夜具を出れば。梅春はそばから氣をつけ引かくる。ほどなく四ッの鐘なれば。氣くたびれてか梅川は。其まゝそこにすや／＼と寢いりつけば。むめはるが夜具かいつくろい屛風ひきよせ。見かけてをきし淨瑠璃本一枚あくれば。秋のかせ障子のひまより方燈の火をさつとふきけす。折から封墻のあたりと思れて。迷子の／＼の久太郎ヤイ。トヽトンチヤン／＼廡へをとす雨の音サラ／＼／＼／＼。

第二回

つかひはたして二步のこる龜屋忠兵衞は步三ッ兵でもつまらぬ身の上□潮光也浪速の色をせきとめて。黄金でかけし木擁は。ながれの里の浮しづみ。贖身あれば梳籠あり。日に新にして日〻にあらたなる。町の夜みせの賑ひは。雨かはにてひきたつるよみせのすがゝき。チヤンラ／＼ゴシ／＼／＼／＼。〔地まはり〕さいもん小ぐり清水のだん。へいたはしやてるての姬。とある所へ立よりて。口說どこそあはれなり。ずれレン／＼〇いめへましい。下踏のはなをゝふんぎつた。コレ鉄や。これから西川岸をそゝるべえ。きを付ろ。まがりつとに水ッたまりがあるせへ。まだ乾きやァしめへ。〔かぶろ〕からしへ顏をおつつけ。山本屋ェィ人ゥ／＼。こなたにはすけんの徙。〔里町〕からしをのぞ見。コゥ見さつせへ。アノ如意輪觀音が箔しろのこんりうに出たといふ身で。ほうづへをして居る女郎は。扇風が一度かつて揮られた女郎だ。〔花曉〕フゥなんたるひつてんらしい女郎だのう。茶づけ店のならづけといふうすひ櫛に。水膠をみるやうな笄をさしてゐるせへ。ふめねへあたまだ。コゥあけぼのへ脇差も一しよに。預けてくりやァよかつたのう。ごうせへ邪魔になると。からしの下にねてゐた犬。尾をふまれて。へきやん／＼。〔花〕おきやァがれ。とんだ氣のきかねへ犬だ。〔里〕犬をふんだも今道心じやァねへか。〔花〕わりい／＼。〔里〕こつちらの初だけのさひといふ色の着

ものをきて。何かふさいで居る女郎は。にげそくなつて判人の所へさがつたといふつらだ。[花]うさァねへ。アレあくびをすらァ。大きな口だせ。[里]かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎は。素人給の漬むら屋だ。ト花暁はやとなりの格子を。のぞいてゐるともしらず。やつぱりそばにいると思ひ。むしやらにしやれる。こつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着物をきてゐるしんは。茄子のさしみをこせへるとつて。鍋のふたでおつぺしたといふつらだのう。トいへども。挨拶なきゆへ。ふりむいてみれば知らぬ人。ホイこいつァ大わらひだ。トゆきすぐる。□自註ニ曰。此里丁花暁は。いづれも勘六がまたぐらをくゞらふといふともがらたり。これを唐音にて閑走といふ。長崎丸山にて十年ぶりといふ。實はすでをふつてもどるゆへ。素手瓶といふあやまりなるよし。往古吉原にては。とりんぼうと云。今は素見といふ。そこで女郎はすかんといふか。○扨此むかふより來る二人の客はやかたものと見へ。[侍客]見なへ。どれもうつくしい者でござるの。[今一人]なるほど。きれいなもいじや。こう見た所は御年始に

奥へ出たやうでござる。[客]いかさま。アノまん中に柏の定紋を付てをる女郎は。よい器量ではござらぬか。金田氏の内室に少しにてをる。[客]なるほど。イヤこちらの黒い衣裳もよくござる。[客]モノ是は何屋といふのじや。[茶屋男]つきそでのうちから。看板提灯をさげて。あとの方ニゐたるが。ハイこれは此新町で。一二をあらそふ槌屋と申のでござります。なんならこゝにおきめなされませ。さうこう致すうち。そろ〱よい女郎衆はあがります。[客]イヤもそつと。他を見物いたさう。トこいつははなはだ氣が多し。またすがゝきの音。チャンラ〱〱。かゝる折しも。表のかた。そりや喧嘩よと立さわぐ。かのむめ川とふかきなじみの亀屋忠兵衛。地まはりにけんくわをしかけられたるなり。[忠兵衛]むなぐらを取れた手をとつて。コリヤアどふするのだ。トふりはなす。[きをひ定]あんまりうぬがつらが大きいから。此定さまがむしが。がつてんしねへはへ。[鉄]うぬがやうな野郎が。此土地へへへへりこまる

から。おいらが格子へ立ても。すのこんにやくのとやかましい。崑崙兒の灸点をみるやうに。白ィつらをはりまげてやるべへ。むねつくそのわるい猿唐人じやァねへか。[定]へたに歯箱をならしやァがると。こうだぞ。ト大黒のつらへ白毫を入たやうに。しんちうのびやうをうつた。黒塗の丸げたをぬいてふりあぐる。[忠]其手をしつかととりて。コリヤアわいらァ誰にか頼れたなァ。へコロリンシャン。たそや。此夜中にさいたる門をたゝくは。たゝくともよもあけじ。宵のやくそくなければ。トむかふの二かいの琴きこゆる。又[鉄]すきをみて。[忠]にぶつてかゝる。[忠]しづんで身をひねる[鉄]はづみにて天水桶へころびかゝる。すかさず[定]又ぶつてかゝる。[忠]ひらいて横にはらふ。[定]よろ〱としてどぶへ片足ふみこむ。琴へ七尺の屏風もをどらばなどか越ざらん。[定][鉄]両ほうより一度にむなぐらをむづとゝる。琴へ羅綾のたもとも。ひかばなどかきれざらん。所へ人〱出やひ引わくる。てうど二かいの琴きれる。○扨此つちやの樓上には。おもてざしきのおいらんむめ川。きやく人あつて。もはやほん間にとこおさまつてゐる。次の間には番

頭新ざうむめ春。しかみ火鉢へどびんをかけ。わる紙であをいでいる。〔梅春〕じれつてへ火だのう。なせおこらねへのう。ト折から廊下にて新造。〔浮浪〕ほんにかへ。はりさけすね。ト何かいひながら。かけて此ざしきへ来り。むめはるさんへ。御つぎの物をおあんなんしたか。〔梅〕ゥ、おかたじけ。のちに喰ふと思つてしまつておいたよ。きやく人はおめへどうした。〔浮〕あいサ聞ておくんなんしへ。憎くつてなりヒせん。あれからとう／＼かけだして參りした。茶屋からも人をよこしいしたけれども。わたくしやァかまいせん。ひさしいもんでおざりいさァな。〔梅〕おめへもほんに。あれはど惚れられたがつているものを。モウちつと惚れてやればいゝ。〔浮〕おめへさんさうおつせへすけれ共。わたくしだつても。そねへにやァ惚れられんせんものを。此ざしきのふりしん。〔さよ舟〕あの人さんもばからしい。よくおかけ出しなんすねへ。〔浮〕ホンニいつでもせはをやかせる客人でおざりイすよ。トいひながら。長もちのふちをなで〻ゐる。〔梅〕コレ戀路や。今いひ付たことをきり／＼しねへか。何をして居るのだ。〔禿〕アイ今こゝに。〔梅〕久しいもんだ。早くいかねへか。トいふ折ふし。本ン間のびやうぶのうちにて手をたゝく。〔梅〕アレよばつしやる。マァあすこへゆきや。〔禿〕アイ。ト此用をたす。ふりしんのこえで。廊下に浮なみさん／＼。ちよつとお出なんしッサ。おいらんでサ。〔浮〕アイ今參りイしやう。トたつ所へ来るきやく。下着のまゝおびをじだらくにむすび。今とこから出たといふなり。ふところ手してはいり口から。〔柳嬢〕浮なみさん。でへぶそは／＼するの。格子へ地いろでもきたか。〔浮〕よしておくんなんし。わたくしらァ色と土用干はついにしたとがおつせん。いろといふものはどんなものだへ。どこの井戸からわきんすねへ。〔柳〕井戸からはわかねへが。へその下からわく虫よ。こいつにひよつとたかられると。女郎衆もしめへだ。まづ二朱壹歩の小金から喰ひはじめて。櫛笄から着物をくひ。それから髪をくひきり。小指をくひ。だん／＼臓腑へくひこんで。いろ／＼な氣をださせ。とう／＼命をとりおはんぬ。なんぼうおそろしき物がたりにて候。さこれをなづけて。死ゝ心中の虫といふはな。こいつをよけるにやァ。鍋屋のうは氣うせぐすりといふがある。おめへがたもちつと用心にしめなせへ。〔梅〕ぬしも女郎衆にほれられなんすから。其虫の部だね。〔柳〕おきやァがれ。〔みな〕ヲホ、、、、、。ト笑ふ。〔浮〕たんとおしやべんなんし。ト出てゆく。〔梅〕ぬしやァ。なせそねへに廊下鳶をしなんすへ。色でもできなんしたかへ。今おつせへした虫にでもなるきかへ。〔柳〕爰の二階ひろしといへど。〔梅〕ぬしたちの相手になるやうな。手のある女郎衆はねへといひなんすのかへ。〔柳〕あるといふこさ。マァ茶

ア一ッくんねへ。[梅]ぬしやァ口果報がおゝなすよ。今丁ど茶を入ヒした。[柳]くふものなら口がほうだが。こりやァ呑ものだから咽がほうだ（梅わらいしやれだれ[illegible]小夜衣さん、ついであげ申さな[illegible]ト火鉢のかけにあつた茶碗を[illegible]頭のからを　まんどうのた[illegible]いへすて。茶をついで出す。[柳]こいつァいゝ茶だ。コウそこの紙につゝんだ物はなんだ。トあけてみれば。火鉢の灰のかたちを[illegible]い出しておいたを[illegible]おきやァがれ、おらァ文[illegible]かと思つた。[舟]わらひながら。きついげびざうなこつたね。[illegible]十二せんのはきれたと申シイすから。わきでとつて參りした。トのり入六まいつぎのまきかみを出す。[梅]馬鹿らしい。この子ァ。柳嫖さんだからいゝけども。おんまり遠慮がねへぞよ。ちつと氣をつけや[illegible]氣をつけずともいゝぞよ。やつぱりこんだからおいらんノ客人のめへでもかまはず。此笄は二百はかしィせん。なまつげのかう／＼は。たつた二ッはうつてよこしいせん。と正直にいやョ。[梅]馬鹿らしふおざりいすはな。おぶしやれなんすな。わたくしらァそんなげびはしいせん。[柳]それでも。いろ男の所へさつまいもの。無心をいつてやつたさうだ。[梅]うそうおつきなんし。だがさう申しいした。トいふ所へきたるへやもち女郎。左の袖で口をかくし。右の手にみすがみをもちそへてつまをとる。なりは柴のいたじめのむくに。心は茶縮緬のしごき。べちやアねへ。すみ彩色のにしき系といふ衣裳つけ[illegible]ヲヤ柳嫖さん。でへぶましておざんすね。ト火ばちのそばへつくばひしが。おや氣味のわりい。たれぞすはつておりィしたかへ。[梅]なせへ[illegible]いつそ[illegible]があつたけへ。ト[illegible]つめて二ッ三ッはじいてすはる。[柳]ませがきさん。かういつちやァ。それ鏡らしいが。どうせへにきれゐだせ。そして愛敬がこぼれるやうだ。必ずそこらへこぼしてゝんなさんな。ひよつとふんづけると氣がもめらァ。おめへの紋はおつなもんだの。枝巴か。きついものを系だつきにしたの。雷の鉢植じやァあるめへし。系だがしは。系だきゝようなどにならひて。あやまりて。まゝ。系だたかのは。系だきつこう。系だ七ほうなどを紋に付るなり。こ[illegible]の情なるべし。こいつァあんじだ。おやすきに二葉葵か。べちやァねへ。芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ。[ませ]そんなにわる口をおつせへすと。くらァしんすにへ。トにいたの茶[illegible]。[柳]コウあやまつた。おりよすば野郎のまらだと思ふさうだ。おつとまちけへ。羽根だとおもふさうだ。[梅]ヲホ、、、、、トたばこをすい付て出シ。ぬしやァ今夜は誰さんだへ。松さんかへ。ませいゝへ。何此ちうい松屋からまいりしたらうさ。[梅]色おとこじやァねへかへ。ませ後生でおざりィす。

甘露梅のすくなつたといふいろの。むいさんでおさりイすよ。[梅]イヤごうせいにむつかしくたとへるせ。晦日ばきの鼠いらずじやァあるめへし。コウトもちつとなんぞ。悪くいひてへもんだ。トそこらをみまはし。梅さん。此びやうぶの虎は。女郎衆の座しきにやァ目出たくねへせ。[梅]なぜへ。それでもとらは。千里もちつとのうちにあるくと申ッすから。待人が早く來るとよふおさんす。[梅]それはさうだが。又千里もどるといふからわりい。[柳]あんまり歸らねへと。うちをしくじりんすは。[柳]なるほど。こいつァさうだの。したが此虎のつくばつてゐたをいからして居る所は。なんの事はねへ。たばこやの賃粉切といふ身だ。此むだは。けいせいにはおちぬゆへ。だれもわらはず。梅さん。笄をさしつとかしな。[梅]ぬいてかす。[梅]おめへもいゝ年をして。酒中花をからみつけてをくこともねへ。おとなげねへ。トみゝのあかを取。[梅]馬鹿らつしひ。まだとしがいきんせんは。[柳]としがいかねへも氣がつゐへ。おめへとしで三ンど斗。琉球人にあふだらう。[梅]どうしんしたとへ。ト是もあまりおちがこず。[梅]これさ。ませがさきさんさはんなさんな。耳があふねへ。ト此ちあんどうの傍に。ふりしんさよ舟いねむつてゐる。[梅]みねへ。小夜舟さんがはじめたり。ソレごらうじろ。釜ひつくりかへつて。たことかはる。傘ひつくりかへつて介六とかはる。八文〳〵。[ませ]ヲホヽヽヽ。[梅]此こへでめをさまし。目をこする。[梅]さよ舟さんどうだ。氣がついたか。トいふところへ。朝〳〵とり上られるしきせのふり袖をきたしんざう[初雁]かをかけて來て。モシへ柳嬢さんに。はなが出來たから。おいらんがきて。おまんまをおあんなんしッせ。ハヽ、せつねへ。トためいきをつく。[柳]がうせへに鼻息のあらひ才だぜ。箱屋のうちへはおかれねへ。なんぞうめへものがあるか。[梅]いけへことおさんす。[梅]先へいきねへ。今いかふ。[梅]サァ早く御出なんし。そしてね。百代さんがね。此狐をごらうじいしと サ。トしんぞうの狐とみへ。わるかみへ書た。あく筆の狐をいだす。これ夜みせのたいくつのまゝのわざくれ也。[梅]とつてひらいてみて。フウなんだ〇一寸申上り〳〵。りうひやうづらに。こんやはよくきた。なぜ御やくそくのまげいはへのきれをもつてこねへ。にくいやつだ。御うらみにぞんじり〳〵〇ぶしやれな文句だ。サアよめねへ。沈金ぼりの唐草をみるやうな字の狐だ。[初]マアあつちへいつてお讀なんし。トむりに引ずつてゆく。此客へしてほれられる氣もなく。又きいた風のともがらにもあらず。たゞむだ口をきいて。二階中で心やすだてをされ。所々のざしきへあそびにゆくをたのしみに來るきやくなり。此風の客まゝあるものなり。[ませ]柳嬢さんのむだがおかしくつて。遊すぎんした。まいりしやう。[梅]モウ一ッぷくおあんなんしな。[ませ]又いつて參りしやう。ト出てゆく。あとには[梅]さよ舟さん。硯箱を出してくんな。ト狐を書かふと。折か

らひけ四ツのひやうし木をうつ。廊下にて。

[かぶろまはし]子ども衆寝なさへよ〳〵〳〵。ト二階中ふれる○これなかゐの役にて。かふろ一しきの世話をやく。これをかぶろまはしといふなり。○下には簾をおろす音のきこへ。夜鄽ひければ。おちやを挽た妓は。大赦にあふた罪人をみるやうなこゝちにて。欠をし伸をしながら。梯ばた〳〵二かいへ上り。わが局〳〵へ散乱する。かつかちめへでおまんまを喰ふ雛姫は。恰も飢たる虎のごく。器にのこりし魚の骨は。化野に異ならず。とやかくするうち音もなく。右も左もしづまりて。此所に海誓山盟あれば。彼所に顚鸞倒鳳ありて。襄王が夢をむすぶときなりけり○亀屋忠兵衛は梅川と深くなじみて。金にはつまれど身はつまらず。あげ代がたゝまりて。此二かいかとまつてゐれば。ばんとう梅春がはたらきにてねずのばんに金をやり。こよひやり手部やのひくるをあいづに。下ざしきへかくしをく。忠兵衛は下ざしきくらい所に。つめたいよぎふとんの中へはいり。身をしのびゐる。折からむめ川はざしきのきやくをねどかして。てうづのかほでこゝへ来り。[梅川]さぞきうくつでおざりヒしやう。モシみはとゞきいしたかへ。[忠兵衛]きのふとゞいてくはしくみた。手前もいよ〳〵懐妊にちがひなく。近〳〵に引こみ。寮へいつて脱すとのこと。むかしの身なら相談のしやうもあれど。何をいふも金がさきだつ。しつてのとをり勘當の。今の身の上。むかしわすれぬ朋友のよしみにて。少〻づゝの合力でかすかの暮し。[梅川]初にはなしにならぬけちなしぎ。去おめにかゝつたは忘れもしんせん。去〻年の三月。それから一夜が二夜とたびかさなり。じれつたいとあひたいといふ癖を心につけてから。とやかくとするうちに。[忠]コレサ愚痴な。今さらそんなことをいつたとつて。借金の云わけにもなるめへ。みゝをだしや。ト何かさゝやく。[梅川]わたしもとうから其りやうけん。引込で寮へゆけば。ぬしには逢れす。みのたよりもしにくゝなりんす。

それにまだきくさへ怖いおろしぐすりとやら。ひよつと死ぬまいものでもおざんせん。よしや身にけがもなく出勤をしてからが。傍輩衆に顔みらるゝもはづかしふおざんす。それに知つておいでなんすとをり。おまへをせいて客衆もきれ。おもだつた馴染もなく。あの八右衛門づらの外は。此ごろの客衆はみな初ばかり。それにつけては。だん〳〵たゝまる呉服屋のかり。所〳〵のかけとても。つまらぬ譯なれば。[忠]そんなら逃るりやうけんか。[梅川]あたりにきをつけ。うなづく。[忠]其りやうけんなりや仕様がある。實はむめ春が此智恵を付てくれた。聞ばあしたアノ八右衛門めがしまつて。下の飲へ手めへをつれていくさうだ。おれをせき。てめへに氣をもませたかはり。あいつがおちどになるやうに。いけすからふけるがいゝ。宵に地まはりめらがおれに喧嘩をしかけたが。あれ

も八右衛門めがたのんだに違はねへ。何かにつけて憎ひやつだ。折よくあすは宵闇なれば。たんぼへ出る庭のうら口。おれはさきへまわつてゐやう。逃さへすればこつちのものだ。折もなく今まではははなしもせぬが。こゝからは四里半わきの田舍。二の口村といふ所に。おれが實の親ご孫右衛門どのといふのがある。おちつき所はまづそこサ。梅川 そんならアノ。梅春さんもしやうちで。忠 にがしてくれる註文で。あの子が胸におさめてゐる。あすの手はづもあの子にきゝや。梅川 ホンニ梅はるさんは戀しりでおざんすよ。つき出しから。ぬしがせはについてくんなんしてから。わたしが苦勞を身に引うけて。おなじ時に突だしに出た女郎衆より。夜具もはやくしなをして。又内證のせはも早くはなれ。新造出しもはなやかにしてしまひ。つね〳〵も。客衆のもめ。其ほかにちつとも人にひけをとらせず。たいこ持や何やかやにも。切はなれがよいと評判され。着ものゝ摸様のあんじ迄。人にこれはとほめられるも。みんなぬしのせはゆへでおざんす。わたしが逃たらば。てつきりあとでぬしに疑ひがかゝりんしやう。そればつかりがわたくしや苦勞でおざんす。ト思ひがけなき次の間より。おいらんへ。トいはれてびつくり。梅春 さつきにからあすこで始終聞ヒした。跡のとはわたしが呑込でおりゐすから。かならずお案じなんすな。ひとまづこゝを立のいて。身二ツになつてから。忠兵衛さんも勘當のおわびをしなんして。おもて向からおいらんの身うけをし。日かげのお身にならぬやう。目出たく女夫におなんなんし。わたくしもかげで祈つておりんすにへ。トいふ折から。ねづのばん八ツのひやうし木をうつてまわる。てうちんかた手に茶屋のおとこがさきへ立。はやかへりの客はしごをおりる。此きやくは風流の人とみへ。はしごををりながら即興を口ずさむ。

鷄鳴曲

（頭書）柝はよばんのひやうしぎ也

青樓擊柝唱鷄鳴
夢裡陽臺雲雨淸
唐突佳人彈枕起
無情亦復是多情

客 駕ははいつてゐるか。茶屋男 とうにはいつてをります。

○第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横に行は女郎の眞と卵の角道

□世の中は道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる。とはとつと昔淺草に鹿茶屋のなき時代の哥なりけり。今繁花のときなれば。鴎鷀もさみしきとをしらす。熊谷の堤で小判をかぞ

へても氣づかひなし。されば人の心もおのづから豁達にて。烟花のにぎはひなどはいふもさらなり。やぼにはあらぬ水戸尻。色と戀との飫の二かい。水の底なる鯉までも。浮れうきたつ大さわぎは。むめ川がけふの客。中の嶋の八右衛門といふは。金銀まん／＼の金貸にて。女郎のにくがるにくていづら。正めんに大あぐら。【八右衛門】コウかれ野を見はらした所は。どうもいへぬではねへか。たいこ持。【闇子】左やうでございます。【茶屋てい主】こゝは二かいの眺望は妙さ。袖ふり新ざう【さよ舟】モシおいらんのとこへ。お富士さんがみへんすはえ。【梅川】ほんにノウ。トふさいでゐる。女げいしや【平吉】観音さんの塔もみへます。【八】なんだか面白くねへ日だ。【闇】なせでごせへます。御酒がしみますめへ。サアこれではじめましやう。【八】いんや。猩々が出番にでやァしめへし。さけばかりもはじまらねへ。【茶屋てい主】まづおいらんが浮ねへ。ちつとうかし申さうじやァねへか。【梅川】ちつと心持がわるふおざりいす。番とうしんざう【梅春】モシおいらんへ。ちつとうき／＼しなんしな。こゝがしらけんすにへ。トむめ川にさとられるなとめくばせす。たいこもち【闇】モシ一ツおとしばなしがございます。トゑもんをちよいとつくり。袖をひざのうへゝのせ。花櫚板に紫檀棹の三絃が會所の棚にゐて。朋友の象牙の撥にいふにやァ。聞ば三河嶋に湯治ができたさうだ。芝居の三みせんなんざァ。土用休の内いつたといふこつたが。ナントおいらも。いつてみやうじやァねいかと咄す。そばに食客の樫棹犬皮の見世ざみせんが聞てゐて。モシ湯治をなさるなら。わたくしもお供をいたしたうございます。三ツ星の膏薬でも。と角なをりませんというから。紫檀棹がどふした。よこねでも出來たかといへば。鄽三みせんが。ハイちとかの　を痛めましたが。こいつァどうでございます。【茶屋てい主】おきァがれ。【みな／＼】ばからしいねへ。ヲホ、、、、、、トほどなく目もくれ燭臺など出し みな／＼八右衛門がきげんをなほさんとうかしたて。さと吉がめりやす。やみ子が おかし身のおどりなどあつてやゝ時うつる。○かくてむめ川は。忠兵衛がさぞ待どをならんと心せき。ざしきのやうすうかゞひて。はづして出る庭の面。さいはい宵闇折よしと。心はさきへ飛石づたひ。番頭女郎梅春は。萬事に心築山の。うしろにしばし立どまり。【梅春】小ごえにて。モシおいらん。そのうちかけは人目だつ。わたしが下着の此小袖を。上へきて御出なんし。【梅川】ホンニにげる今になつてまで此おせは。死んでもわすれはいたしいせん。【梅春】ナンノおれいにをよびんしやう。二の日村へ落付たら様子をくはしゝ。【梅川】文の便で。【梅春】かならず待て おりひすにへ。あれ／＼／＼おまへさんをよぶのは。たしか八右衛門づらがこゑでおざんす。みつけ

られては一大事と。梅川が手をとつて足ばやにはしりゆき。庭のしをり戸をしひらけば。さぐりよつて。〔忠兵衛〕梅川、か。〔梅川〕忠兵衛さんか。トむめ川が思はず聲をはつすれば。そばに本を讀居たる梅はるが。モシおいらん。何をひとりごとおつせへす。と氣をつけられて氣のつくは。夢野の鹿のゆめにはあらで。やはり箕輪の別荘に。寝そびれしまゝ梅川が。とつゝをつゝの胸算用。おもひに迫る此時節。モシこふしてにげたらば。いかゞあらんと心のうちに思ひしは。さだめてかくもあるべしと。推量したる其始終。筆のゆくまゝかきつゞり。色情に終身を謬ともがらの。すこしは戒ともならんかと。蔦の唐丸がもとめにまかせ。紙くずかごよりひろひ出し。そこらこゝらをつゞりあはせて。ついに小冊となし侍りぬ。

娼妓絹籭終

跋娼妓絹籭後

山東京傳。金馬門にあらぬ。牛糞橋の傍に世を避て。性氣の長き叓。牛の小解のごとし。上は天人の屁を摘。下は閻羅の鼻を撮。滑稽處を以て實を獲。好で著述をなす。中に娼妓絹籭あり。嫖客と娼妓の風情を細碎て。恰も飛切の糝粉のごとし。僕一たび味て其美なるをしる。嗚呼京傳子が筆頭の滓。奇とするに堪たり。須評而求。

寛政辛亥孟陬

飯顆山　曼鬼武識

印 印

青樓晝之世界錦之裏

表紙	ヨコ	三寸四分
	タテ	五寸一分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸一分

（ひる）乃世界錦の
裏自序
一日書肆蔦唐丸来りて
曰例の小冊の案じ
ありやとあやしやと。

予答て曰まづあらず
しくしく。素瀬なる道
念ある様に安請合に
うけがひしより。執筆さ
所がら。無もなきは銭金と

よん思案也蓋妄作乃
茶表紙も。手く筆く
穴相似て。歳く年く
一向新しからざれば。一ツ
ごりと捻くくする楼の

（ひる）のを世界。夜の景色を
いふ美しくみて書こと
案じ乃小冊。此好みを一ツ
新織にしめて其儘錦
乃裏と題する而已

観琉球人入江戸日

山東

菊　京傳撰

青樓(ひいる)の世界錦之裏自序　印　印

一日書肆蔦唐丸來て曰。例の小册の案じはありやなしやと。予答て曰。まだある〳〵と。素癡な道念みる樣に。安請合にうけがひて。ト執筆た所が。無ものは錢金とよい思案也。盍安作の茶表紙も。年〻歳〻穴相似て。歳〻年〻趣向新しからざれば、一ッぐつと捻てみた。青樓の(ひいる)の世界。夜の景色の花美とは。うつて變た案じの小册。此奴は一ッ新織ならめと。其儘錦の裏と題す而已。

観琉球人入江戸日

山東　菊　京傳撰

借門ニ至ル日

亭午之圖

附言

宋玉ハ好色の賦を作りて色情を戒め紫氏ハ五十四帖に艶言を述て色欲を戒む是皆佛の譬諭方便と異なることなし予屢妄乃著述をなし淫蕩を傳ふるに似たれども必其戒を忘れず喜怒哀楽の人情を述て勸善懲悪乃微意あり遍く諭さんとならば幼童を誘し戒るに飴を以し灸をすゑるがごとし則飴ハ譬諭方便なり則灸ハ仁義五常なり然れバ此小冊に教訓の二字を冠しむること所以なきといふべからざるか視人宜察也

附言

宋玉は好色の賦を作りて色情を戒め、紫氏は五十四帖に艶言を述て色欲を戒む。是皆佛の譬諭方便と異なることなし。予屢妄の著述をなし、淫蕩を傳ふるに似たれども、必其戒を忘れず。喜怒哀樂の人情を述て勸善懲惡の微意あり。遍く諭をとらば幼童を賺し戒るに、飴を以し、灸を以てするがごとし。則飴は譬諭方便なり。則灸は仁義五常なり。然れば此小冊に教訓の二字を冠しむること。所以なきといふべからざる乎。覗人宜察也。

つと持つてきな。〔そら〕アイ。ト下へゆく。〔夕〕りをあたみまはし次の間の戸だなの戸を。四五寸あけて顔さしいれ。さぞ氣づまりでおざりんしやう。トいふ所へやりての聲するゆへ。びつくり戸棚の戸をぴつしやり。ほどなく來る。〔やりて〕おいらん。お早ふござります。〔夕〕は戸だなに。身をよせかけてさあらぬ体。見なんし。〔やり〕何さ。いゝ天氣でおざんすねへ。昨日はモウ大に曇つておりますもの。〔夕〕やう〳〵おち付。くたびれましたよ。ホンニ堀の内さんは。賑かでおざんしたかへ。〔やり〕アイ納手ぬぐひは。すぐに懸させて參りましたよ。〔夕〕ソリヤアもふおかたじけなふおざんした。モシへ寸間みなんし。夜舟さんの寐たなりを。〔やり〕ホンニねへ。トこなたをみれば番頭女郎〔川竹〕かどみぶとんの七つすぎを。柏餅にしてねてゐる。其わきにふりしんの〔よふね〕同しく〔あしかの〕疊の上へじかにねて。ふとん冠り枕をはづして死人のごとし。〔やり〕此子たちもなりばかり大きくつて。客人に出ろといへば嫌がるし。困つたものでござります。〔夕〕さきつからわからぬ寢言をいつてゐゝすはな。トいふ所へ〔そらね〕は火入へ火を入て持來る〔やり〕馬鹿らしいねへ。○折から廊下はかまびすく。新だち大ぜい客をつかまへてきたる。〔客〕靜かにしてくれ。げへぶんが悪い。留袖の新〔なべづる〕氣がちがつたさふさ。てん〳〵が悪いとをしなんして。人の知つたとのやうに。〔客〕きのぼせがするはへ。ふりしん〔うで巻〕わたしらはぬしのお蔭で。暗いうちから。冷へかたまりいしたは。〔懸かぜ〕いゝむしだア。ぬしがはじめなんしたらう。トロ〳〵にわめきて廊下を引てゆく。新だちはこれなぐさみ半ぶん也。きやくは蜘蛛のすにかゝつた蜻蛉のやうに大きなりをして。智慧もなく。頭巾はよこつちよにおちかゝり。のろきなりにて奥二階。〔ぐち里〕おざしきへ入られる。このとき中の間の〔玉ノ井〕かくて仕着せの古いふり袖をきせ。ふくろうに小島のたかつたやうに。新造とりまきむだをいつてちやらす。〔うで〕烟草もなりんせん。〔なべ〕今に坊さんにしておあげアンス。〔懸〕ぬしを坊さんにしたら。どんなだらうノウ。〔うで〕しう〳〵だの坊さんに似てきなんすだらう。〔なべ〕どうかもう氣のせへかゝ坊さんじみて來さしつたよ。〔うで〕ホンニ〔懸〕ねへ。〔うで〕茶やもにくうおざんす。こんちうのれんをはづしてきた時。〔なべ〕あんなに口ひろいとをいつてノウ。〔懸〕マア此町をとめてやりイすがいゝのサ。〔なべ〕戀かせさん。竹村のめへゝひきずりをぬぎすてゝきたから。とつて來なんしよ。むだ夕さんはどうしたの。〔懸〕あの子は。二町めの溝へふんごみんして。下で足をあらつて居なんすヨ。ぬしはわたくしをひつかきなんした。ちよつと見なんし。血がでんすは。〔うで〕わたくしが袖をばおやぶんなんすし。又お針衆に小言をいはれんすは。トすきな事をいつてゐる。客は多勢に無勢だまりんでゐるところへ。威儀堂々としておいらん〔ぐち里〕來り。ばからしい。おめへがたア靜かになんしへ。どふでよび申さねへ客人だ

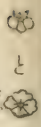
から。こつちのりやうけんの通りにするまでは。ぶしつけが有ちやわるふおざんす。ト是よりむつかしくなる。茶屋もいろ／＼手を入る。こいつもとゞ高くて夜具。安くて着ものぐらいのいたみと見へるなり。此となりの部屋持の女郎。今おきたとみへ。かゞみにむかつて。おがいつかつて居る所へかぶろ。〔つなじ〕下よりをきて來る。仕着せ布子のよごれて黒光りにひかるやつに。板〆ののろまいろになつた細帶をしめ。目をこすり／＼わほけたやうな面なり。〔車〕つなじか。〔つな〕アイ。〔車〕い丶ところへ來た。たばこを吸付てくりや。〔つな〕アイ。トまだ此座敷には火がなきゆへ。やりてべやから吸付て來ていだす。〔車〕ヱ、モべらぼうらしい。火がきへたは。ト煙管でたゝく所へ。〔茶屋男〕いそぎきたり。モシおいらん。蛙聲様がおたばこ入をお忘れなすつたさうでござります。〔車〕床の中にあるか。見ていつてくだせへ。〔男〕ヘイ。トさがして。爰にござりました。〔車〕まだこんたの内に居さつしやるか。〔男〕左様でござります。トまたいそぎゆく所へまた〔茶屋女〕來りモシおいらん。御〆をお出しなされまし。〔車〕けふは人がいくか。女つかはします。〔車〕そんならちつと待つてくだせへナ。コレこんたのとこの。いつもの瓜の香／＼はもうねへか。〔女〕まだござります。上ケましやうか。〔車〕そんなら〆を書うち持て來てくだせへ。後生だヨ。ト下には地を柿にして文字を藍にて吉田屋と筆ぶとにそめ出したるのうれんを。半分まき上ケてあり。こちらの牛臺にはかぶろが。をちさうに腰をかけ。きんかんのほうづきを。もちあそびにしながら髪をいつてもらつてゐる。〇もつとも。かぶろの髪は男のかみゆいがゆふなり。〔かみゆい吉平〕コレじつとして居ねへか。手めへのやうに動くものはねへ。そばにまつてゐる〔かぶろ〕吉平どん。おれうはモウ奴嶋田はよして針うちにいつてくだせへ。おいらんがさういはしつた。今一人の〔かぶろ〕あのつぎはおれだよ。今一人の〔かぶろ〕あつかましい。何きさまなものか。おれが先へ來たは。〔吉〕此子どもいらア。ようめへ朝／＼いがみやふ。ちつとしづかにしねへか。又こちらの庭には山の術からくる出入の肴やゝはんだいを持こみならべ。そばにはう料理番の〔文七〕かるさんをはき立て居る。した料理番の〔惣七〕もゐる。大黒ばしらのきはたりはなたには亭主〔喜左衛門〕煙管のさきでさしづしてゐる。〔さかなや〕コリヤおめへさん。い丶鯵でござります。生麥でなくッちやア。こんな丈長はとれません。〔喜〕文助。すいもの肴はそれでい丶か。〔文〕ハイ此生貝はみんな女貝たノウ。こいつアい丶地鮃だ。〔さかなや〕い丶魚でござります。〔源〕旦那さん。生海鼠もちつとおとんなさりまし。〔さかな〕此海鼠は榎堂でござります。〔文〕車をもちつと入レさつせへ。〔喜〕なぜ。魚がありながらそねへに高イノウ。〔さかな〕しけの擧句でござりますから。安くござりません。かくて〔一番〕時〔二かい〕お座敷には。新造皆／＼おきる。番頭新造は紫の中かた小もんの七ツ半ごろの小袖をき。唐ごはくの帯ぐけ。黒縮のあづまもやうのこいつも少しきたつた小袖をうちかけ。あたまにはけさ起きて。髪の乱れをかきあげたまゝ。すぐにさしたよみ

へるつげの櫛を。ちよゐとおつこちそふにさしてゐる。これはこゝの二階の新ぞう頭にて。よほどさばくかたちなり。しかし年ンのあくるも近ければは。骸骨のすて所にまごつかぬやうにしな。トいゝたき風の女郎なり。ふり袖〔あしかの〕〔よふね〕皆あいびろうどの油やの雑巾のやうなぬのこ細帯。ゑりはまつくろ。白粉所〳〵に雪のきへのこりたるがごとし。〔夕きり〕は無心をいつてやつた客のところから來た返事に來をよんでゐる、〔川〕自身番をしかけ。ほうきを持てうしろからのぞいて居る。

（此所の二人がすがたさも女らうのかんざんじつとくのごとし。）

〔よふね〕ゆふべみへなんだ哥がるたが。夜着のそでからでんしたよ。〔夕〕それみなんし。〔川〕おめへかたァきり〳〵湯へはいつて來て。床の間やれんじをふきなよ。何もかもごみだらけになつて居るは。いつでもあすこらが。くさらしいョ。トいひながら。しかみの灰のかたまりを拾い出し。炭がらを刷きき。火ばちのふちをふいて居る所へ。かふろ雪のや來る。〔川〕雪のや。湯にだれが居るみてきや。〔雪〕今見てめへりイしたが。そこの人はだれもおりイせん。〔川〕おいらんお出なんせんかへ。〔夕〕わたしはもちつと今考へて居ることがおざんす。〔川〕コレあしかのさん。わつちが湯へいつて來るうち。おいらん膳も。わつちか膳もしておこうし。お茶もわかしておかうし。それからァノ。まあ〳〵それをきり〳〵しなんしへ。雪のや。糠をいれて。浴衣をもつてゐゆびや。そしてからァノ。ほう〴〵へいつて書付をとつて來や。早くしやョ。埒があかねへときかねへョ。おいらんがあんまり氣をよくさつしやるから。みん(な)ずるくつてなるもんじやァねへ。トいひすて〻湯へゆく

（かき付さいわふ事の前けは囲へん手十くわに。よしこつて註ゝにゝをかず。）

○湯へゆく時。つとの所へつげの櫛をさかさにさすは。髪の癖をなをすためなり。（）その跡へ小まもの屋。あたまへかんざしを二三本さし。荷をかたにかけて來り。座敷をのぞきみて。小間物あたりまへさしてゐた。つたのつくりものゝかんざしをぬいて。おいらんへ。此笄はこんだ挽せやしたが。とんだ甲がいゝから取てをきなされませんか。トみせる。〔夕〕とつて日にすかしみてホンニこりァいゝよ。死ぬほどほしいが。今はちつと相談ができんせんから。あした迄うれずにゐたらもしけふ中に賣れずは。あしたもつて參りましやう。おめへさんの氣にいらねへとおつしやつた方のしのぎを。こつちへ遣はさるとやすくとられます。トいふ所へ。〔夕〕ソリャアどうともしんしやう。〔川〕湯からかへつたわたしが此ちうのかうがいをうきが出んした。〔小間物〕直して上ましやう。所へ奥二階より〔あだ崎〕モシへ此やうに持の女郎來り。櫛をついで來ておくんなんしな。どふぞ早くおたのん申イすよ。〔小間物〕畏りました。トいふはこいつゆふべ色男と口舌して。をられた櫛の死骸とみへるなり。所へま〔ふりしん〕來り。た指の輪はまだできんせんかへ。〔小間物〕あすは出來ます。紋所は

❀と✿をひよくだつけね。[しん]これさ。静に云ておくんなんしナ。馬鹿らしい。トはづかしがるも。しんざうのせい一杯の楽みならん。[小間物]ちよつと浮里さんの所へいかねばならぬ。[しん]浮さとさんのとこにはゝたしか居つゝけが有よ。小間物ホイ。トおくの方へゆく。〇ツボざしきには此うちふりしん。箸箱と蒔繪の八寸を出し。ちやずけ茶わんをならべる。火鉢にかゝりし土瓶の湯はチン／＼とわく。そばには湖月集の本のうへゝ茶をのせてをき。煙草盆の引出しを引出してをき。たばこ入にしてをく。[川]コレゆきのや。おれがくし箱の。鎖のをりる引出シに金があるから。二朱持ていつて。おあしをかつてきな。鍵は用だんすのひき出しにあるぞよ。[雪]アイ。ト用たんすの引出しへ指をたてつけ。あいたゝトゆびをなめ。こゝにやア鍵はおさりイせんよ。[川]エ、うそ／＼しめへヨ。手めへゆふべ入れたじやアねへか。トかぶろがとつて來たかのきんじやの書つけをみて。きに入たよものへしるしをつけ。とりにやる。夜舟さん。茶だんすにじやせん豆と。とうがらしがあつたらう。こゝへ出しな。[夕]貝のはしらを取にやつて。帆立貝で煮やうしやアおさんせんか[川]とりにやらんしやう。[夕]行平鍋はどふしたノウ。[川]誰か。とふにわつてしまひンした。あしかのさん。けさの惣ざいはなんだ。[あし]たしか芋に油揚でござりイすヨ。[川]おそれるね。[夕]あやまりいす。トいろ／＼食このみをして。やら／＼朝おまんまを食べてしまひ。[夕]は。わる長くうがひをつかひ。たばこ二三ぷくのんで。すぐに湯へゆく。かぶろは浴衣を持ついて行。そのあとへ田まちの[ごふくや]來り。昨日の雛形はお氣に入りましたか。[川]いつそようおざりイす。あれにきめんしやう。[ごふく]むくはやつぱり。[川]ともむくにしておくんなんし。そしてこんどは禿物の丈をもちつと長くしておくんなんしへ。[ごふく]かしこまりました。トゆく。[川]ア、モシ／＼。トよびかへし。序にわつちがはきかけにするきれを。

はきかけとはすそまはしのこ此里にかぎりしことばなり。

何ぞ見つくろつておくんなんし。コウトそして紫鹿子のゑりを一トかけよこしておくんなんし。[ごふく]かしこまりました。トいふ所へ。[かぶろ]一人來り。八十兵衛さんへおいらんがちよつとお出なんしッサ。[ごふく]手めへはどこの子だ。[川]車井さんの所の子サ。トごふくやは奥へゆく。[夕]はほどなく湯から上り。浴衣でふき／＼來る。聞なんしたかへ。ぐち里さんの客人は。つかまつて來なんしたそうだね。[川]さうでござりイすとさ。ちやッたァすみんすめへ。夜舟さん。身ごしれへをするやうに。何かを出しなんし。[夕]あしかのさん。髪ゆひのお吉さんが。二階へきちやアいねへか。見てきてくんなんし。お針部屋もみてきなんしよ。もしまだ來ざア。下タの中郎の人をたのんで呼にやつてくんなんし。中郎と言は。内しやうの小づかひをする下男の事也。是も此里にかぎりたることばなり。[川]雪のや。おはぐろをとつて來て。それから楓屋のかよひをもつていつて。板を

本とゑりつけと。くこと。すきと。黒もつてへを取てきや。ついでにわる紙と。煙草もとつてきや。夜舟さん。筆楊子をだしな。トいひつける。ふでやうじはおはぐろ筆の事なり。[よし川]は[夕]と[琴]が鏡臺をならべ。くし。たとう。はんざうなど取揃へる。ほとなく[琴]はおはぐろを買つてきて。火ばちへのせてをく。[夕川]はんざうを簪のうへゝのせ。まづ筆やうじを火ばちのじやうの中にてかきまはし。鏡にむかひ。かねをつける。〇むかふ座敷には。床の間の上にさかづきを下メでしばつてのせてある。これまち人の願なるべし。とめ袖のしんかんざしで火入の火をはさみ。火ばちへ入れながら。[花哥]モシヘどうしてやりんしやうねへ。腹がたつて口惜くつてはりさけイす。おいらん[夜琴]めしつぶだらけなすゞり箱ひきよせ。本にとおたゐを一心にかいて居ながら。それだつてもおめへ。手しやうもみねへ事が。何といはれるものか。胸でおさめてゐて氣をつけなんしな。[花]何でもわつちが推量にちがひおざんせん。ゆふべのやうすがさふでおざりイすもの。トいふは客がほかの女郎とのいろ事をけとつたとみへるなり。ところへふりしん。總高架へいつてかへり。ふり袖をはたきながら來り。[丘]がのんでおいた煙管のまださめぬやけ煙管のうへゝ。うつかりト手をつき。[げび川]ヲ、アツ、ノヽ。[花]そゝつかしィ子だョ。[げび]わたくしは月水虫がかぶつてなりイせん。モシヘ今身のうへを見てもらいんしたかね。わるい星にあたつておりイすッサ。どふしやうノウ。いつそ苦勞だよ。[花]おめへ。かゝさんがさつき逢ひにきたじやァねへか。[げび]もふ歸りんした。[琴]はしんに文を書て居る所へまはしかたの[牛吉]來り。お茶を一ツくださりまし。ト茶をくみ。兩の手をかけてもち。茶碗で手をあたゝめながら。あついやつをすゝり〳〵。いめへましい。中の町へいつて來たが。さつはりかけがよらねへ。これじやァ此もののめへは蜜柑でこせへた猿をみるやうに。首でもくゝらにやァならねへ。かけびまのでたも恰好のわりゐもんだ。[げび]みんなさう申したつけ。[牛]人の氣も知らねへでしやれるよ。なんぼしやれても。また燒場の道で。いきものはとをらねへ。おれが水あげをしてやらうといふに。[げび]象牙まきゑの櫛で鬢をなでつけながら。しつたか。むしがいゝは。[牛]何むしがいゝ。なまびのむしがいゝが聞てあきれらァ。[げび]わりィ酒だ。よつたら供部屋へいつて寝さつせへナ。[琴]げび川さん。ふうじ紙をもつて來てくんな。そしてたんすの金物もちつと磨てくんなんしョ。[牛]ホンニちつとみがきなせへ。賣藥店と女郎衆のさしきは。簞笥が光らねへとしんこうがうすい。[琴]さう吉ッどん。男の手でなくつちやァ。惡ィことがあるから。のちに文の上書を一つしてくだせへ。そして田まちへいくものがあるなら。知らせてくだせへ。治丹坊の三百丸をかつてもらひてへ。[牛]大かただれぞめへりましやう。ト行。[琴]わつちや翰郎さんのとけへ。淋病の藥をこせへてやりてへが。

けふは、まにあいせん。淋病のくすりを手製にする事は。どこのニかいでもよくするとなり。予さるおいらんより此祕法を傳る。あまりたわけなれば。こゝにしるす。○黃蓮。甘艸。丁字。山梔子。隈篠。燈心。梅干黑燒。阿膠。松子。三スジ黑ヤキ 以上十味等分ニ合煎シ用ユ。三すじだけが大わらひなり。[琴]そりやァそうと。けふは幾日だのゥ。[花]いつかでおざんすか。[げび]わつちも知りイしなイ。折から表にはいろ〳〵の商人通り。さま〴〵のよびこゑきこへる。▲さんばさう〳〵。なんきんあやつり。▲鏡磨〳〵。▲さくら草〳〵〳〵。▲針がね〳〵。[げび]モシへあれ。はりがね〳〵が來いしたから。十二日でおざんしやう。ヲヤこもさうがきたよ。花哥さんごらうじいし。ちよつと立ばなこもそうざんす。[花]どれ。ト立てみるうちにはや。しもの方へゆきすぎるゆへ。そばにある姿見をとつておもての連子へうつしてみてゐる所へ。したより[中郎]來り。たのまれましたが。此勸化をちつとおつきなすつて下さりまし。ト勸化帳を[琴]みせる。[琴]いくらほどやるのだよ。[中]一トすじばかりおつきなさりまし。[琴]ゥ、今だしておかう。ト云所へ來る。[中居]げび川さん。こつちの御座數に皿が一ッ來ておりやしやう。見ておくんなせへ。[げび]おざりいせん。[中居]おめへがたはめへよう。そんな事をいゝなさる。此ぢうもこつちに平の蓋がござりやした。わたしらが預りだから。なくなつちやァ迷惑でござりやす。馬鹿らしい。ト小言をいひ〳〵ゆく。[げび]しつたかしらねへは。とはぐらかす折ふし。廊下にてざしき持の女郎。[うはき木]すこし心わるいとみへ。白ねりの鉢卷。おはぐろおとして。白歯はすごきかたち。[禿]にみゝこすり。[うは]コレあのゝあきんどやへいつて。すゞの香箱との。下モの木藥屋へいつて。血どめと銀箔をかつてきや。そしてかへりにお針部やで。綿をちつともらつてきや。ちつと氣をきかせやヨ。トこいつ晩の支度とみへるなり○折からあらひはりやはみのはから來り。かし本やはなくした本をせがみ。茶わんばち屋は代ロものをみせ。みつかひは所書をうけとり。炭屋はすみのはねてやけどした屁をくらふ。ところへもはや。[ゆばん]湯をしまひます〳〵。ト二かい中をふれる。こなたの[夕ぎり]が座敷には女かみゆひ[お吉]來り。かみをいふ。[夕]はかな付の唐詩選をよみながら。いわせて居る。大道直如髪春日佳氣多。ヲャばからしい。此子はよくすいつけてくりや。[お吉]おいらんまだ塩だちをなされますかへ。[夕]おとついで日きりがきれんした。[吉]そりやようござります。トいふ所へちや屋の[下女]もみのきれで目をふきながら來り。モシおいらんへ。此間の扇を書てくださりましたか。たび〳〵客人の方からとりに參ります。[夕]なんぞ好みがあるかノゥ。[女]おまへさんのお名さへあれば。[夕]なんでもいゝかねへ。書ておきんしやう。[女]おたのん申シます。トかへる。[吉]せんてへ。おめへさんにやァ。てがらよりしのぶがよく似合ます。[夕]それでもしのぶにゆうと。いつでもお茶を挽ンすから。緣起が惡ふおざんす。

ト此うち[川]たばこつけて[亭]にやる。あぶら手ゆへ紙でもたそへてのむ。[川]雪野や。これをこぼしてきや。トはんぞうをつき出す。はんぞうの中には。おはぐろの壺が八ぶんめほどあつて。まん中に紅のつばきがふたちよぼあり。わる紙とみす紙のくづ。ふきがら五ッ六ッあり。櫺子には小そでかけてほしてあり。所〲紅のつきたるさらしの手ぬぐひのあらひこ臭きやつもほしてあり ○ほどなく髪もゆひしまひ。[亭]は外へゆき。[川]は手水にゆき。あとには[夕]ひとり火鉢のまへにしよんぼりと。襟にかほ半ぶん埋めて。もの案じ姿にてゐる。杉ばしを火箸にしたやつ。燃へしさりてけぶる。此とき中の間の [夕]はあたりへ氣をつけたゝんとする所へ。[茶屋ノ男]来り。モシおいらん。晝狐さんがお出なされましたよ。[夕]ホンニか今じきさまいくから。マア雪野を先へつれていつてくだせへ。[男]ハイ おはやうお出なされまし。トいひすて行。[川]来る。[夕]モシへ。[夕]

[川]かてゝくわへて馬鹿らしいねへ。[夕]どうしんしやうねへ。[川]わたくしがむねにおざんすから。氣づかひせずといつて御出なんし。夜舟さん。着ものをだして上ヶさうしな。[夕]はせんかたなく着物きかへる。○上着は白なゝこに紫のふきゑおとしの源氏雲の中に。四季の草花を極彩色の筆仕上げ。もん所は蔦の丸むらさきのよりいとにてぬひ。むくは緋緞子のどうにへりは鳶色のむぢ八丈に。おなじ模様をいろ糸にてすがぬひ。こび茶緞子に緋縮緬のうらをつけしごきをしめ。ト姿見にむかつてゑもんをなをした所は。どんなこけな判人にみせても七十五匁とみへるおいらん也。[夕]ゆきのや。となりの浮里さんの所に。居つゞけがあるじやァねへか。[雪]おざりィすョ。[夕]おれがさふいふとつて。おめへの所の子どもをかして。銚子を一ッけへさしておくんなんしといつてきや。モシへおたのん申ンすにへ。[川]氣づかひなさりィすな。[夕]必ずへ。トいふ所へ。てうしをもつて来る。[夕]は茶碗でぐつと一ッのみ。其勢でいづる。中の間には[亭主喜左衛門]いろりのそばに。かんばん板を本帳へうつしてゐる ○かんばん板といふは。女郎のうつた數をかりに控へてをく。ぬり札のこたり。[三分の印は三 一分二朱は一 △これ也。][夕]をみて。おいらん。おはやいの。ト聲をかけるゆへ。[夕]そばへゆき。

旦那さん。ゆふべはお有難ふおざりィした。[喜]好だときいたから。持たしてやつた。けふは何か店の衆の出番か。[夕]イヽへ萍里の客衆でおざりィす。[喜]フゥちよつと後をむいてみせな。ヲヽでへぶ髪の風が人がらがよくなつた。サア〱客人がまつてゐやう。早くいきな。[夕]いつてまいりィしやう。トしんを同道して。ちや屋へゆく。[喜][夕]がうしろ姿を見をくり。夕霧も頃日は。ひれがでへぶついたノウ。[女房]左やうサ。だん〱よくなります。○料理所のけしきは料理番のしこみの最中。かまぼこをたゝく音。井戸の車のまはる音。どんぶりのわれた音。米をつく音かしましく。かふろは大ぜい長はんだいをとりまいて。冷飯をくひ。火入をもつて来るふりそでしんざうあれば。茶のきうじするひつこみかぶろあり。庭には臺のものゝ花をもちこみ。かたへには酒だるの口を立るあり。いりざけのにほひはなをつらぬき。湯氣はきりのふかきがごとし。[酒好]三河嶋の内證へあそびにきてゐる男。湯へお出なすつたか。[喜]此間めへりやした。[酒]おへゝけへはへ。[喜]ゆふべ茶屋のてやいをよんで。一妓点をいたしやし

た。「突出しの白鞘ものをとりたてゝ。といふ句をしたが。どうだらうね。〔酒〕ウ、句づくりがおもしれへ。こいつァいきやしやう。 トはなしの所へ病氣で親のもとへあづけてをくとみへる女郎の〔おやる〕來。〔喜〕ヲ、ござつたか。どふだのう。ちつともいゝかの。〔おや〕とかくどうへんでござりまして。〔喜〕ソリヤアこまつたもんだ。早くよくしてへもんだのう。〔おや〕ハイ。〔喜〕マア飯でもくつていかつせへ。折から暖簾の内へさま／＼の物もらひは入る。〔天台道心〕南無薩婆咃哆伽多轉盧枳帝唵三摩囉三摩囉吽。 喜 あの子や。そこへ進ぜろ。 ト一文なげ出す。そのあとへ〔こつじき〕四ツ竹「すまふヲ、とりイ、にイ、てしらァふちイ、げんウ、だアチヨコチヨ。〔らう人〕江口クセ[illegible]らん。〔喜〕ア、うるせへ。 ト又やる所へ。〔やりて〕月花さんのかぶろがござりません。どうぞひとりお貸なすつてくださりまし。〔女房〕このちう隣からかりた子はどうしたの。〔やり〕ひつで歸しました。〔女〕こなたの知つた所に。やとふかぶろはあるめへかの。〔やり〕きうに心あたりがござりません。〔喜〕どふでけふの間にはあふまい。 トみせの格子には〔かぶろ〕貸場やゝィ人ウ引／＼。五色の糸とやうじを持つてきさつせへ。 トいふは。こうか神へ願をかける女郎のつかひなるべし。扨又二かいにはおくの方にて。〔女郎〕澤邊やァノ＼。〔かぶろ〕アイ／＼。〔女郎〕コレヨ。楓屋へいつての。その二朱と百のたばこ箱を紙で包んで。水引でいはへてもらつてきや。又大神樂をみていめへよ。 こいつ三兩ぐらゐのとこ花のかへしとみへるなり。〔女郎〕はらうか中をふいてゐるところへ。〔ふりしん〕ゆふべの三みせん番はだれだノウ。撥がみへねへとつてこし元衆がこゞとをいふよ。 といふ所へ。〔夕〕息をきつてかへり。がみゝへ口をつけ。〔川〕「モシへけふは内の首尾がわりいとつて。すぐにけへりイしたよ。ヲ、せつねへ。〔川〕蚊帳をつけてゐたりしが。そりやァよかつたねへ。〔夕〕今まで水戸屁の籞におりイしすよ。〔川〕こゑをひそめ。モシ晩にはかへつて人めが多くなりんすから。きうに癪のおこつた顔で。本ン間へはいつておやすみなんし。〔夕〕さうしてもようざんしやうかねへ。〔川〕わたくしがいゝように計ひンす。 ト人をうかゞひ。かの戸棚へかくしおきし色男を出し。とう／＼しな玉をつかひをほせて。屛風の中へ入る ○そも／＼此いろ男といつぱ。ふぢ屋のひとりむすこ〔伊左衞門〕といふもの也。〔夕ぎり〕とあひぼれの。それが高じて不首尾となり。かんどうの身とならのはや。このてかしはのうら店に。〔夕ぎり〕が情にてかくまひをきしが。ゆふべ人めをうかゞいて。二階へ上ゲ。戸だなへかくせし。折わるく出そびれて。けふ一日しのばせをきたるなり。〔伊左衞門〕屛風のうちへはいるなやうし。筆のかさをひつしやりふんでびつくりせしも。すねにきず持人心也。〔夕〕小ごゑにて。さぞたいくつしなんしたでおざりイしやう。わたくしが自身にしてはゝ目にたちんすから。いひ付てはおきんしたが。ひもじうはおざんせなんだかへ。〔伊〕イヤ川たけがおり／＼氣

をつけてくれたから。ひもじくはなかつた。それに小便も氣をきかせて。椽へ蒲團の綿をむしつて入レ。音のせぬやうにしてくれたから。何から何まで困つたとはなかつた。[夕]トいふかほ。つく/＼みて。ホンニおまへさんを。こういふはかなひ身にしたも。みんなわたくしが咎でおざんす。堪忍しておくんなんしへ。ト抱きつきたるきり/＼す。なくより外のことぞなき。[伊]愚癡なことをいふものだ。あまねく世の中の女郎買。金の澤山あるうちは。女郎の眞實はあらはれぬ。こういふ身になつた所を。みついでくれるがまことの心でい。ト此とき中の間の[八つ時]もはやひるみせ出て。中あふみ流の本てうしのすがゝきをひく。二かいはしづかになる○折から此となりうき里が次の間には。新造[花まち][なには][みやこ]等がるたをとつてゐる。[夕]その心はとゝいても。とゞきんせんは。わたくしが願ひ。人目があるから人なみに笑ひ顏もしてゐんすが。お前さんの事を思ひ出しんすと。いつそ死たくなりイす。「隣[ゑど]三條院。こゝろにもあらでうき世にながらへば。[みやこ]戀しかるべき夜半の月かな。[なには]ヲットこゝにおざりイした。[みやこ]ちらさぬやうにおとんなんしへ。[ゑど]和泉式部あらざらん此世の外の思ひでに。[伊]今一たび勘當のわびもすみ。此二階へもはれて來てあはるゝやうになりたいものじや。[夕]ホンニまいばんあはれんした時は。澤さんさうにおもひゝしたが。此頃は此やうなはかない事さへ。大ていの心遣ひじやおざんせん。[伊]さうさのう。[ゑど]うしとみし世ぞ今は戀しき。[みやこ]たしかこゝらにおざりイしたよ。[ゑど]そこにある。取ておくんなんし。藤原義孝君がためをしからざりし命さへ。[夕]思ひなをして。たまさかにお目にかゝりイすを。樂みにながらへておりんす。[伊]ヘテしんで花實が。[夕]咲もしんすめへ。[伊]命あつての物だねサ。[なには]ながくもかなと思ひけるかな。[ゑど]コレまんがちにしなんすなへ。[夕]とは思ひすが。まだ丸で八年といふねんなれば。[みやこ]いかに久しきものとかはしる。[夕]もしそれ迄にひよつとマア。[ゑど]右近。わすらるゝ身をばおもはずちかひてし。[夕]それを思ふとしんにかなしくなりんす。[伊]ハテ。たとへ此うへどのやうに。[なには]身をつくしてもあはんとぞ思ふ。[夕]そりやほんでおざんすかへ。[伊]これさ聲が。[ゑど]たかしのはまのあたなみは。[みやこ]かけしや袖のぬれもこそすれ。へかゝるところへやり手のおよく。やうすは殘らずみとゞけた。と聲かけて屏風引あけ。頃日うちあやしいとおもふたが。けさ程ちらと見つけてをいて。戸棚のうちとぼけた顏で氣をつけたが。あんにたがはず此しだら。わたしがかほをふみつけて。なんで役儀がたつものぞ。此とをり内證へゆき。だんなさんに申ンす。これ若衆や。此男めを引ずり出

したがよいわいのとわめくを聞つけ。わかい者われも〳〵とかけ來り。にぎりこぶしの雨あられ。むざんや伊左衛門があたまの上にふりかゝる。夕霧なみだもろともに。中をへだてて身をおしまず。伊左衛門が身をかこひ。是やむごらしい。どふぞいの。皆の衆またしやんせ。伊左衛門さんにとがはない。この人さんをぶつならば。まづわたしからさきへ。ぶちころしてしまはんせ。きゝいれなくば是こう。とそばにありあふ鏡臺の。かみそり箱に手をかくる。やり手はあはてをしとゞめ。是夕霧さん。大事の代物。おまへにけがさせてなるものか。ともぎとる其間に大勢より。伊左衛門がたぶさつかんで引出す。かゝる折から。おもひかけなき次の間の長持のうちよりも。ヤア〳〵夕霧どの。心底みへたと十段目の。大星もどきに聲をかけ。ふたをしあけ。ぬつと出たる一人の男。若いものゝきゝ腕つかんでねぢり上ゲ。今一人をば力にまかせてをし倒し。こちらも蹴る。あちらも蹴る。ける〳〵〳〵とけちらかしてぞ立たるは。こゝちよくこそみへにける。やり手はそれとみるよりも。ヤアお前さんは浮里さんのお客人。いつの間にどふしてマア其中に。といふにもかまはず。此男伊左衛門がまへに手をつかへ。いまだ顔をばおみしりなきゆへ。御ふしんに思召ましやうが。わたくし事は京都の出店に居り。番頭を仕る算右衛門と申ものでござります。此度用事あつて此地へ出。大旦那におめにかゝり。うけ給れば。あなたさまは御かんどうとの事。これはしたり。おわかい事なれば。一ッたんの御あやまちはしかたなし。御心底もなをしならば。御勘當のおわびも申。二ッには是なる夕霧殿に。さほどまで御執心なさるゝも。是赤縄のむすびしならん。心さへたゞしければ。遊女とてもくるしかるまじ。夕ぎりどのゝ心底。虚か實をとつくりと。正した上にて根引をし。目出度祝言させ申ンと。扨こそあとの月より隣ざしきの浮里が客となり。律義といふかへ名を呼。入こみしが。猶も實否をたゞさんと。今日わざとゐつゞけをし。先ほど茶屋に申

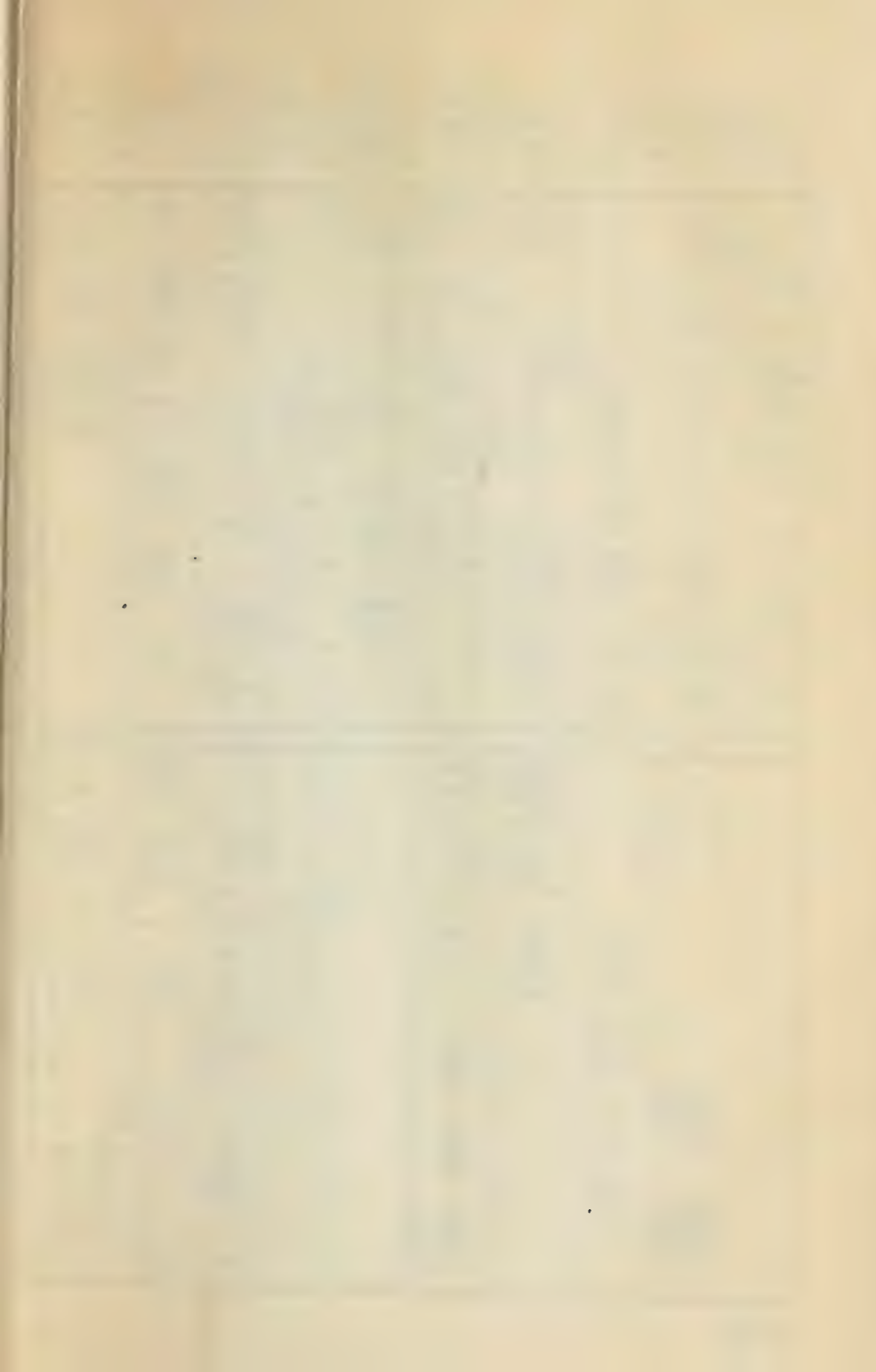
シふくめ。かへりしていにもてなして。人なき折をさいはいに。是なる長持に身をしのび。屏風のうちのむつましきをきゝとゞけ。夕ぎりどのゝまきの心をみぬいたうへは。今日中にてい主吉田屋喜左衛門に逢ひ。身うけの埒をあけ申さん。其手附金は則こゝにと。くわい中よりさいふとり出し。伊左衛門が手にわたす。うけ取て中をみれば。縞の財布の一ばいまし。是は錦のさいふだけ耳をそろへし五百兩。金にそへたる一ッ通あり。いぶかしとひらきみれば。何〳〵。其方儀。心ていなをりはよしきこへは間。今日より勘當ゆるしはものなり。と書しはたしかに親の手跡。アヽかたじけなし。ありがたし。と伊左衛門夕ぎりも。もろともに手をあはせてふしおがむ。折からてうど中の間の七ッ時

前路日将レ斜。

是より錦の表とへんず。夜の景色のはなやかは。今まで多くあり来りの小冊で御らうじろ。

後叙㊞
夫熟大門視ば。實に鬼貫が句の如く。骸骨のうへを粧ふて。花の郭の喜怒哀樂。迷へば眼中西施を出し。悟ば鼻中臭氣をいだす。迷ふも悟るも。有漏路より。無漏路へ送る。茶屋が提燈。人間わづかナツレ五十間道。一切の衆生身の用心。さつしやいましやう。
寛政三年
辛亥春正月
京傳自跋
㊞㊞

後叙㊞
夫熟大門視バ。實ニ鬼貫が句乃如く。骸骨のうへを粧ふて。花郭の喜怒哀樂。迷へバ眼中西施を出し。悟バ鼻中臭氣を出す。迷ふても悟るも。有漏路より。無漏路へ送る。茶屋一の提燈。

人間ハわづかナツレ五十間道。一切乃衆生身乃用心さつしやいましやう。
皆寛政三年辛亥
春正月
京傳自跋
㊞㊞

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸三分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸二分

京傳著
仕懸文庫
大礒廓中光景
鎌倉遊子傳記
蔦唐丸梓
不許半時

乃井の深く戒且惡所ぞかし
北條時方寛政三郎
祐安辛亥の荒次郎
鬼王の正月和田醼の
三日目
京傳醉中誌（印）

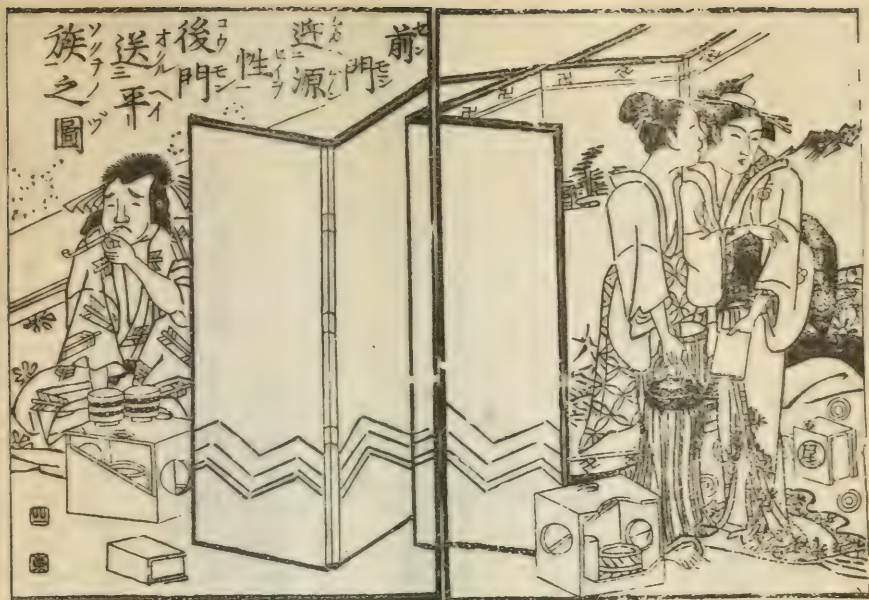
自序

夫頼朝公の御顔會より。大は獨大磯の鬪ひなり。虎少將を初として。許多の妓女色をあらそひ。萬客爰に通ひ乍。梶原か佞は。霄宿りの矢筈を違へ。小林が慢は。左右の掖をかき撫。祐成が二日醉の御足。時致が癎積は煙筒の皿を挫ぐ。羽織工藤あれば。羽織歌妓あり。兄弟の男子等あれば。梳籠の妓女衆あり或恍惚て近江の實情あり。八幡で首の義理づくあり。汐息の豬牙舟に範頼公は。鳴子の音に神を飛し。一切遊びは對面の三方のごく披れ。外へ出て居る妓女をば。寸間狩場の切手あり。於是友切丸とともに魂を紛失し。赤木作とともに家を鞘ばしる。豈滿江心を痛さらんや。鬼王が忠言。却て耳に逆ふ。是鎌倉時世の妖境にして。星月夜の井の深く戒。且惡所ぞかし。

北條時方寛政三郎
祐安辛亥の荒次郎
鬼王の正月和田醼の
三日目

京傳醉中誌［印］

仕懸文庫目錄

前門進源性後門送平族之圖

大磯風俗 仕懸文庫　山東京傳著

第一回

東山に妓を携し漢士の驕者も。いまだ綵邑舗の出番のちよつきり遊び。酒肆の枝藏がへりのたのしき事を知るべからず。爰に後鳥羽院の御宇文治建久の昔。鎌倉の巽にあたつて。一ツの女肆あり。大礒と名づく。爰に來りては。陶朱倚頓が富も。桂林の一枝のごとく。こゝに居ては。昭君楊妃が美も。崑山の片玉にひとしく。黄金の塵塚。欝氣の捨場。湯氣盛の場所にして。顱巻安座の失禮も。所からとて目にたゝず。サッサおせ〳〵の鄭聲。じつに雅樂をみだし。忠臣もまよひ。孝子もうかれ。老たるとなく。若きとなく。權介となく。八兵衛となく。やたらに行むしやうに通ひ。振らるゝあれば。照らさるゝあり。或は討或は被り。陸を行ものは稀に。舟を行者多し。ゆく舟のいさみある風情。かへる舟のおもひあるやうす。猪牙舟の柏餅は。苫舟のまんちうを過り。舟棧橋へつけば。心とんで先へ上り。おちかいうちと港板をつき出せば。神あとにのこる。船頭たつとまれて君のごとく。客人茶にされて臣のごとく。羽織といふは衣服にあらず。新子とよぶは。もち米にあらず。昨日の娘分は。今日のかみさんと變じ。羽をり化して子どもとなるなんどは。いまだ礼記の月令にもみず。初會をもらひ。ぬすみを賣。跡をつけて待あれば。なをして鼻をあかする有。宵どまりの客のをちつきがほ。朝なをしのねむたき顏。四ツあけのしつぽり。昼あそびのいさみある。妓の厶は獨立の草書のごとくよめず。蜜言は蠻夷の風調にして解ず。呼れて來り。おくられてかへり。いやがられてのぼせるあれば。すかれてすゝまぬもあり。うはきの風は鼻のさきをふき。實情の雨は膝のあたりへふる。きやくは千差万別　妓の臨氣應變。實に是平康の盛事なるぞかし。◯

こゝに相州平塚の宿。花水橋の上を通る武家［御所五郎丸］半ざらしのあいさびのぶつさきばをり。十ばん仕立のお馬やひらの馬のりばかま。大小のこしらへに氣をつくれば。刀はつがもなく長く。てつのふちがしら。鉄のもく目つばに。うでぬきの付たやつ。つかは鷹のへをのもろびねり。鞘はにかはだゝき。身はびぜんものゝ三分ぞりぐらいと思はれ。わきざしはぐつとみじかく。竹のこがたといふやつ。もつとも木づか。さやは四分一のどうがね入。ぼく刀こじりのとぎ出し。みは長刀ごしらへの關打などゝおもはれ。小づかはするがののべうち。下緒は具足のおどし糸をうつたやつ。ぶつさきのうしろへ扇をさし。てつのくさりと矢立をこしへつけ。髪の風はをしどりといふやつ。もつとも小びた

ゐあり。手に花色のめりやすをかけ。菅のふかき笠をかぶる。年は廿四五ぐらいなり。[供]は十三四の小さむらい。しらくも頭の野郎。黒きぬのひとへ羽織。おとなの着るやうなやつを肩であげをし。大小もはかまもふ相應に大きく。竹の子笠をかぶり。はり弓をしやうぶかはぞめの袋へ入。ゆがけ袋と。つる袋と。厂まとを一所にゆひつけてかつぎ。かた手にべんとうをさげる。○一たい大いそ三めん堂の稽古がへりとみへるなり。

[五郎丸]コレ風でまとをふきとられるな。氣をつけろ。[小侍]ハイ／＼モシさきほどのお矢は。とう／＼見えませなんだか。[五郎丸]ウ、三面堂も場所はいゝが。草がおほゐから。惡くするると矢をしてやられる。コレあすは又由比がはまで見せ馬が有が。ふりはせまいか。[小侍]どふござりませうか。モシあの佐々木さまはよふおあてなされます。[五郎丸]何てうしあたりだ。ゆるみがある。

トすこしかゞまん。ア、此橋で上足を騎てみたい。

トつき袖にてしやつきばり。花水橋の上をゆきすぐる。○折から秋のはじめつかたにて。ざんしよあればし。川にはすゞみ舟。長たは舟。をしおくりぶねなんど。さま／＼の舟ゆきかふ中に。なめり川の青砥屋の舟とみへ。一そうのやね舟。すこし南けなればしんつのはなをひらきにのる。船中一人のきやくは。[小林の朝ひな]としは三十ぐらい。ゆうき縞のひとへもの。絽の小もんの羽織ぬいで。そばにをく。これはかねて大いその通なり。今一人の客は。[そがの十郎]としは廿三四。もゝさじまの越後に白じゆばん。黒ろの羽織。しぶ地紙の扇をもつ。これは青樓きやくにて。大いそはまだ不通なり。今一人は。[團三郎]とてそがの十郎がかみなり。こしらへは推量あるへし。

[十郎]コゥ朝さん。今花水橋のうへを通つた侍は。かのやつがつとめてゐた屋敷の次男だぜ。[朝ひな]フゥなんだか。ごうせへに武ばつたなりだのう。みねへ。檜垣もこうしてみると。大きなもんじやァねへか。[團三]此おや船には。大ぶんいみとばがありやすねへ。茶わんなどのこわれた事を。はじたといひやす。わつちやァ一度へゝッてみやした。[朝]おぢい。此ごろはなはゝどふだの。長なはのと。[せんどう久]あんまり照りつゞくから。にがしほでいけやせん。[朝]さうだらう。ヲ、けふもよつぼど南がでゝきたはへ。でへぶうねりがある。波の立事。けふはいつかだのヲ。十二日だの。コウー二四八。ウ、八ツ八ぶだから。てうど今上るせへちうだ。のりにくい筈だ。しほどきにくはしきは。大礒つうの情なり。[十郎]アレ鵜がうなぎをとつた。[朝]ホンニ。[團]ごうせへなうなぎだ。アレもふ呑んでしまつた。[十]又しりから出た。ト船はしんつへわたる橋をくゞる。むかふからもちよき一艘こぎくる。いゝさがりがあつたナ。

[向の船頭]ヲイおぢさん。どけへいく。[久]縄町だア。[向の船]しづかに往きねへ。トすれちがふ。[久]アノやらうも。でへぶ艫ぶりがよくなつた。久むかふから。鎌倉ほ引丁の舟。たなものとみへる客。おくられてくる。女げいしや二人。女郎一人。茶屋の娘ぶんがつき。やね舟のすだれを上げさせへしとさわぎきたる。[團]こけが心學をならやァしめへし。むしやうに茶わんをたゝくやつサ。[十]こりやァできだ。[朝]まんざらでねへくびだの。おぢい。鳥羽瀬だの。[久]アイついていくナア。鳥羽瀬の釣屋の娘ぶんサ。ト新市葉のまへゝ來る。亀子屋あたりの二かいにて。イタコへおまへしゆうもちわたしはかゝへ天じよつ

かへてまゝならぬ。セヘ〳〵〳〵。トウ〳〵〳〵。【十】こゝが大礒の新市葉といふのか。【朝】そうサ。【團】こゝの坂戸屋のうちへ。京の次郎さんときた事がござりやした。いゝうちだねへ。【久】こゝの新みせも。すだてができたばかりで。【朝】今にこうしてあるのう。船中のたばこぼんは。おくりの時茶屋からかりて來しを。すぐに入てきたりし也。火がきへる。【久】モシ枕箱の引出しに。ほくちがござりやす。【十】ヲットしやうち。ト火なは箱のふかい引出しをあぐれば。舟手がたと。あたらしいろぐいが二本。四文せんが十五六もん。うちに仙臺通寳が一文有。ほくちをさがし出してうつ。こいつァいつこうだ。【團】ドレうつて上ヶやしやう。【朝】引出シの中から札を引きずり出し。上がきをよむ。なんだ青砥屋にて藤綱さま。夢の戸にてしげより。コウおぢい。此おしげといふナア。どつから出る。【久】ホンニその札をとゞけるのだつけ。なにさ。中うらのちゝぶ屋のかゝへサ。大いそなは丁の子どもやある所を。なかうらといふ。ほどなく舟はふる市場のまへゝきたる。【十】大いその振市葉といふのはこゝかへ。

だいぶ舟がついてる。にぎやかださふだ。【朝】よくするから賑かサ。【十】こゝの大智屋とやらいふはどれだね。【朝】大ちやといふナア。あれァノ下駄うりの荷のをりてあるうちがそだ。【十】冨倉とやらはへ。【朝】とみくらは。アノ赤くぬつた燈籠の出てゐるうちさ。【團】モシ爰のとみくらの出見せが。花川にござりやすねへ。きよねん山のかへりに寄つてしやれやした。モシはやりやすねへ。【朝】コウおぢい。アノ湯川屋のわきの。ちいさな稲荷りやァなんといふ。【久】山田いなりといひやす。【朝】コウ祐成さん。此左の堀が日記とのぼりといふヨ。大いそつうのよくしつてる所だ。トいふ折から。あとより鎌倉さや丁川岸のちよき。おくりの歸りをのせてくる。船中には子どもと。ちや屋の女とのつてゐる。【子ども】おくめどん。しつかり持ちなよ。日傘をふきとられるよ。【茶屋女】こつちの舟をみつけ。チヤあをと屋のおぢさん。どけへ行きなはる。わつちらがほうへは。きつゐも

んだね。【久】おくりげへりか。【茶屋女】アイちつと來なせへしな。トいふむかふから。又一さうのちよき客をひとりのせ。かへり來る。たがひニみつけると。【子ども】ヲヤ青砥屋のおぢさん。どけへ行きなはる。わつちらが方へは。きついもんだぞ。【久】おくりげへりか。【茶女】アイサちつと來なせへしな。トいふむかふから。又一さうのちよき。客をひとりのせかへり來る。たがひに見つけると。【子ども】ヲヤ善さんだよ。【茶女】ヲヤ〳〵よくお出でナせへしたね。【客】今歸りか。おくりだといつたから。けへつてきた。てうどいゝ所で逢つた。サア舟をけへしてくれ。トたがひにそう〳〵しくわめき。舟を引かへし二そふならべて。何か話しながらいそぎゆく。〇これは此きやく。此女郎がなじみにてきた所が。他所へおくりにいつたと聞き。むなしくかへつて。こゝまで來りしなり。てうどよい所であひ。舟を引かへしたるなり。【朝】こいつァいゝ〳〵。あゝいふ所が大いそ遊びだよ。そしていゝ中年増だ。おぢい。鳥羽瀬の女郎だの。【久】さうさ。あの子なんざァみへきでの板がしらさ。

板かしらとは。よせばの板かしらだといふ事。大いその通詞也。此舟はさのみいそぎもせねば。やうやう右に白ふねいなり。左にしゆみの四てん川岸をみて。ゆきすぐるなり。[朝]祐なりさん。コレ此右りが白船いなり。左がしみの四天河岸。すなはちあの堂がしみの四天だ。こつちらの礒井といふ。のれんのかゝつてある藏づくりが。繩町のてやいの遣り繰りをする七ツやだ。トからしやくする所へ。又あとより二人せんどうのちよき。奉公人らしきやつをのせ。いそぎ來る。又そのあとより。おなじく二人船どうにて。一そうこぎきたる。跡より來りし舟の客。何か船頭にさゝやきしが。しみの四天がしへ舟をつけ。一人の船頭あがり。一さんにかけ行。さきの船はもはやいなり川岸あたりまで行すぎる。[十]コレ朝ひなさん。今あの舟はなぜあすこへつけて。船頭を上ケたのう。[朝]よくある事だが。あれは大いそあそびのきもといふ所さ。鳥羽瀬の客とみへるが。あのりくつは。先へいつた舟の客と。跡からきた舟の客と。同じ女郎をならんで買といふやつさ。あとからきたやつは。先のやつを見知つてゐるから。船頭をおかをかけさせて。さきへ口をきりにやつたのさ。先のやつは跡のやつを見しらぬから。うか〳〵いつたが。なんぼ急いでいつても。モウ後手になるといふやつサ。跡の舟はいくらおそくいつても。先へ口をきつておきやア。此方のものさ。聞へやしたか。其又口をきるといふ事は。大いその通言で青樓なら。しまひにやると。をなじとだ。あとから來たやつは。如才のねへやつサ。[十]かんしん〳〵。其道によつて賢しだ。こいらはもつともな理屈だ。[團]宇治川といふものだね。トはなしのうち。よう〳〵舟は繩町のかし棧橋へつく。[朝]大ぶにぎやかだはへ。ト舟のならんでついてゐるを。かぞへてみて。こいつァ出てゐるもしれねへはへ。トいふは。一たい繩丁の子どもは。かず少なきゆへ。舟の高で大てい客のたかも知れ。子どものきれるとを早くしるは。大いそ通の情也。[團]こゝにむきずな胡瓜がながれ付てゐる。[久]そりやァ河童へやるといつてながしたのさ。ト久はさきへ上り。ちや屋へしらせに行所へ。おくりとみへて。客と子供と娘ぶんつきそひ。あとより下女すゞりふた物を丼へ入。ちよくと共にひろぶたへのせ。かた手に大きな銚子をさげ來る。船頭うけ取舟へ入る。[船頭]おあぶなうござります。[客]清吉。もう何ン時だ。[船]八ツがちつとまはりやしたらう。ト客も子どもゝ舟へのる。娘ぶんものり。銚子の口をみよしの方へなげる。これは舟がゆれても。酒のこぼれぬやうにとの心づかひ。なれたもの也。[久]しらせてかへり。モシへ出ていなさいやすョ。[朝]いま〳〵しい。さうだらう〳〵。サア祐なりさん。上ンねへ。[十]マア闘三。さきへあがらつし。[團]そんなら。おさきへでやしやう。[十]ヲ、コレ〳〵。こいつァ大さわぎだ。ア、氣味がわりい。コレ早くとつてくれ。襟へ舟虫がはいこんだ。[團]それ。とりやした。ト三人舟を上る。朝ひなは桐のまさの下駄をはく。祐なりはわきざしをたばさむ。三人小べんをする。[久]雪よしの貸蒲團をかたにかけ。はま本からおくりの時。借りて來たたばこぼんを片手にさげ。わたくしは此かり物を返して。おあとから參りやす。[朝]早く來たがい

い。ト三人ゆめのとのわき。ほぞ小路を繩丁へぬける。折からゆめのとの二かいにて。枕ひやうし哥へわしがひいきのナアあのはまむらやそして瀧野屋かうらいや[そう]

[笑のこへ]ヘミノ〳〵〳〵のホミノ〳〵〳〵コホミノ〳〵〳〵。

第二回

暖簾風に靡て家名人を招くとは。殘口か筆勢にして。前の家名は風呂敷にのこるとは。風來が妙言なり。爰にかまくらの巽。大いその繩町に鶴が岡屋といふ大暖簾をかけたる茶店の賑ひ。煎酒の香ひ。万客の鼻をつらぬき。厨下は湯氣上ッて。霧のふかきがごとく。駒下駄を持てかへる廻しあれば。火棚箱に上草履をゆひ付て。提來る船頭あり。口のかゝる妓女あればあいてかへる舞妓あり。婢女素足で飛で會所にいたり。鰈の煮つけは細生姜をせをつて器におどる。[下女おいね]なるみ絞のゆかたに。黒どんすの帶。紺兼白にもへぎのいと眞田の紐つけたる前だれをしめ。帶のうしろへあふぎを立にさし。髪は櫛まき。今日はけしからねへあつい日だよ。モシなをし肴が一ッ　るよ。[りやうりばん]ヲイ〳〵今のふたと。三ッつみをだしなよ。ふたとは。硯ぶたを。しやれて斯くいふ。[いね]できたかへ。ト云所へ。[廻シ]來り。おはくさん。お迎ひでござりやす。[いね]おはくさんは出なをりだよ。でなをりとは。すぐに外の客へだした事なり。[廻シ]アイ。トかへる。[いね]だし物をもつて。二かいへゆく。入れかはつて。[下女おふさ]利久小もんのゆかた。こびちやなゝこの帶。かんとう縞まがひの前だれ。横座敷のお客は。濱本のおなじみださうだからしらせてくんなよ。そして和田屋の送りのおくり物をつんだかのう。[りやうりばん]そんな遅蒔とうがらしじやァねへ。[ふさ]ヲヽこつさにしやれるもんだの。[ゆきよしの女]さきほどから。上り口に立てゐて。モシへ　おひきさんの事は。どうしておくんなせへやす。お互のこつてごぜへやす。お頼ん申やす。トいふのは。雪よしにおひきがなじみの客がきてゐるゆへ。かりにきたのなり。しかれども。此間こゝから雪よしへかりにいつたとき。義理をわるくした事があるゆへ。そのいしゆにて埒があかず。わざとつてをくの也。[ふさ]アイ今さう申やしたが。一座にちつと揉があるから。すんだら上ケ申やしやう。マァ行つて來なせへ。[雪よし女]そんなら。お早くおたのん申やす。トそとへいで。馬鹿〳〵しい。したゝか待せた。もめがあるも氣がつゑゝ。トロ小言。[ふさ]きゝつけ。氣がつゑゝも。氣がつゑゝ。すかねへ女つつちやァねへよ。ト云所へ。[朝][十][蘭]三人來る。[ふさ]ヲヤ〳〵朝比奈さん。ようお出なせへしたね。どなたもサァおあがんなさへし。嬢ぶん。[おたき]よくお出なせへした。お履物をあげてくんな。[ふさ]九本ぐらいのてうしにて。お客だよッ。[朝]はしごを上りかけて。奥をみれば。しかけぶんこ十四五。三みせんけ箱五ッ六ッあるゆへ。胸どきつき。今日はこり

やァごうせへに賑かだ。しかけ文庫といふは。子どもの着更を入てもたせて來る文庫也。大いそにて着物をしかけといふ事。人のしる所なり。尤しかけぶんこを持せる事は。丁にかぎる。編［ゆへに此冊子のげだいとなす。］〔朝〕〔十〕〔團〕三人二かいへ行。〔たき〕おつつけ涼い所があきますから。マアこゝへ。〔ふさ〕茶をぼんに三ッのせて來り。モシ此ごろはお遠〳〵しうござりやしたねへ。〔朝〕いそがしいわな。大分にぎやかだの。〔たき〕此ごろは相應でござります。〔いね〕さかづき持きたる。朝さん。ようお出なせへした。〔朝〕おとつい雪の下の堀井町でみかけたぜ。〔いね〕あいサ。かけにめへりやした。トいふうち。いろいろ出しもの出る。〔久〕羽織を着て來り。こゝは風のへゝりさうもねへ座敷だの。モシ舟におたばこ入がござりやした。ト出す。〔ふさ〕おぢさん。一ッ飲みなさんねへか。サアどなたもお一ッお上んなされやし。ト少しさかづきまはる所へ。こゝの内でのさばく女。だんごとあだなをとりし。〔おひで〕來り。朝さん。ようらつしやりました。モシへどう致しやしやうねへ。お鶴さんはおわるふござりやすよ。はま本に出ていなせへすとさ。此方にでも出てゐなせへすりやァ。貰ひひきものう。〔ふさ〕さうサ。〔朝〕そりやァ覺悟のめへだが。こゝの二人をはたらいてくだせへ。〔久〕おふたりはお初會だよ。〔朝〕いゝゆかただ。本國寺ぎれのかたゞな。〔ひで〕此ごろお客がそろひにお出しなせへした。けふはもう生憎だねへ。今わつちらがうちから。美しゐのが二三人あいて歸りやしたが。すぐに出やした。マアはたらいて見やしやう。トゆきさうにする。〔朝〕まちな〳〵。そしてこうとな。おつト稲ぎト魚介をよんでくんねへ。〔ふさ〕魚介さんは成田へたちなせへしたよ。〔朝〕そんなら鬼丈をよんでくだせへ。〔ひで〕おつさんはたしか雪よしの出番のしうへ出てゐなはるのう。マア寄場へきゝにやりやしやう。ト此うち二ッ三ッ話しゐる所へほどなく。〔いね〕寄場へいつて板をみて來やしたが。いゝ子どもしはさつばりさ。やう〳〵はたらいて。おだんさんに。おとらさんが來なせへす。おとらさんといふナア。新子でごせへすが。かはいらしい子サ。朝さん。おつるさんをかりてめへらうと思いやしたが。おつゝけむかひだと申やすから。あとをつけておきやした。そしておつるさんはござりやせん。鬼丈さんと。稲吉さんは。今きなせへす。いつそ暑いヨ。トおびのうしろへさした壬生狂言の畫を書し扇をとつて。胸のあたりを仰ぐ。朝 諸事おいねでなけりやァ。わからねへといふもんだ。〔いね〕又あんなだんごをおつせへす。ついぞねへ。久 おきさんはどうした。〔いね〕いな村が崎の鯛門屋へめへりやした。朝 出ばんか。〔いね〕いゝへ。お店のしじやァござりやせん。トいふ所へ。子ども出かゝり。障子のやぶれからのぞひて見る。これはもしさしではないかと念のためなり。〔いね〕もし。どなたもお出

なせへし。ト二人座敷へ出る。おとらはまだしゆかぬゆへ。先へだされる。此さとにはかみ座しも座のしやべつなきゆへ。さきへ出るをいやがり。いつでも歳のゆかぬ者が。さきへたゝせられる也。氣［お虎］十七ばかり。紫縮のひとへもの。ふた葉あふひのあづまもやうの振袖。もん所は五三の桐のすがぬひ。下ニひの板じめのかさね。せんさい寺ちやどんすの帶。髮はふくらびんのかた。天神べつかうの造り物をさす。總丁だけニ人がらよし。［おだん］廿ばかり。ひねつてたんご縮緬のやまとがきの單物。もん所桔梗。これはとめ袖。緋縮緬の長じゆばん。極上の黒じゆすの帶。ひとへ結んでさげ。髮はぐるりおとしのつり舟。さし物も餘程ふるなり。惜いことにひき眉。此ごろ仕掛がはいつたとみへて。どれもりつぱなり。〇おさだまりの盃すみ。おとらは禿なり。おだんは團三ときまる。〇女三みせん箱もち來る。〇たゞし。大いそにて三みせんばこの紋を小口へ付る事は。寄場にてはやく見わかるためなり。［久］おめへ方。ちつと此方へよんなせへ。［朝］おちい。こゝの隣の格子づくりの內はなんだ。久アリヤ男げいしやの寄場さ。トいふ所へ。鬼丈。通次。稻吉來る。［鬼丈］一座のかほを。づらりと一べんみて。コレハ朝さん。ようこん日は。［通次］ゑびすの宮のまゝでござります。ゑびすのみやは。むぎめしの名代也。［朝］さうだつけかノ。［通］團三さん。よく來なはへしたの。［團］モシ此ごろは本藏といふまくはどふでござりやす。［通］そりよを言てくん通次おり〳〵虛無僧にでるゆへにかくいふ。なさんな。［朝］おきやアがれ。［稻吉］鬼丈さん。おめへの髮は夏どんか。とんだいゝョ。總丁の手やい。みな此なつと云ニゆはせる。［鬼］ほれたか。［稻］フゥやるせがねへ。朝さん。此間鶴が岡の山の今本でおうはさを申しました。［朝］稻むらが崎の白軒が所へ。此ごろにいかふ。此間にいろ〳〵おもむきあり。いな吉ちよつとしたものを一ッひき。撥をうしろの帶へさす。〇折からきやく二人あがり。となり座敷へはいる。〇一人は［近江や小藤太］四十四五ぐらい。さんとめ縞の單物。きぬのとをし小もんの單羽織。紬縞の帶よき酒みせのかひ出しとみへるふう。〇一人は［八幡屋三郎兵衛］廿七八。つよさうな男。くりむめの木綿のひとへ物。花色ぐん內ぶとりの帶。花もうせんの前垂を疊んで肩にかけ。釘木を髮へさす。鎌倉ゆきあひ川の酒店五軒店あたりのわかひしゆと見へる風。これは今日ゑだ藏がへりなり。

［三郎兵衛］は座敷のとこの間へ。いけぞんざいに尻をまくつて腰をかけてゐる。［小藤太］はたつてゐる所へ。［女ひさ］茶を持て來る。［三郎］だきつく。［ひさ］ついぞねへ。惡じやれをしなせへすな。［三郎］やかましいは。［ひさ］けふは藏だしかへ。小藤太さん。どこで三郎さんとおちやひなすつたへ。［小藤］翁そばから一ッしよにきた。大ぶ賑かだの。［ひさ］こゝともに五ッ座敷サ。けふは誰をよびなはる。［三郎］ちゝぶ屋のおしげをきいてみてくりや。［小藤］げい者をだれぞ。［ひさ］太夫しか。はをりしかへ。［三郎］つゝ茶碗をむかふへころ〳〵と轉しながら。はをりサ〳〵。同くならおみんがいゝ。［ひさ］あれはいゝがマア板をみてきやしやう。小藤太さんのも。だれぞ美しい所を見つくろつてきやしやう。此ごろはこんなに賑かな日と。又ぐつとひまな日があるから。うつかりと買こみもならず。こんなだと手こづりやす。かひこみといふは。むほんしやうぶに茶屋でかひこんでを

く事なり。〔三郎〕（むかふにかゝつてゐるあさづま舟の額をみて。）なんだ。此額の繪はゑぼしをかぶつて舟にのつてるの。　様の舟まんちうださうだ。〔ひき〕すきな事をいゝなへヱます。と行。（嫖ぶん）〔八重〕（さかづき持て來る。）〔三郎〕けふはわづかの駄で。大きに手間をとつた。うはつきのあるやつはみんなたして。香のつきのやつはなをしやへやつた。（うはつきとは酒のへつた事。かつきとはわるいかの付た事。）ちつともいくやつは。鍋町か。すじけへか來たら。門前にたゝかふとおもひやす。（もんぜんとは。たゝきばなしに賣るといふと。たゝかふとは手をたゝかふときといふ事。これみな酒店の通言也。）にこう。爰の内へ北條のおやかたがくるじやァねへか。〔八重〕わたしどもへはお出なせへせん。〔三郎〕そんなら化粧坂へばかりいくだらう。〔小藤〕コウ三ぶ公。舟の來たにしちやァ。でへぶたけへのう。〔三郎〕したじのかはいた所だから。やすくは賣りやすめへ。なんぞたしなすつたか。（たしなすつたかとは。かつたかといふ事。）〔小藤〕雁新の手めへをちつとばかり。〔三郎〕どうたしなすつた。〔小藤〕（三ぶがそでへ手をいれ。）判の分さ。（トゆびをにぎる。）〔三郎〕かつこうもんだ。〔八重〕モシお一ッおあがんなさいまし。〔三郎〕（一ッうけて飲み。舌うちをして。）こいつァあんまりあめへ。〓（おてら）か。〓（すやま）だらう。〓（たき）があらば。ちつとわつてくんねへ。したが三河へ水をかめちやァあやまるぜ。（三河ものへ水をわるとけんびしと飲めるゆへにかくいふ。すいをかめるとは。みづを入る事。酒だなのつう言なり。）〔小藤〕そんな事をいつたつて。通じるものか。〔ひき〕（ト云所へきたり。）モシヘ三ぶさん。夢の戸からお京さんがあいて來たが。おめへの氣が知れねへから。つつといてきやした。どうしやうね。〔三郎〕イヤ〳〵あいつをよんじやァ。跡がむつかしい。〔ひき〕そんなら變げへて來にやァならねへ。（ト又ゆく〇つつてをくとは。きゝにくるうちを外へ出ねやうに。ちよつと待せてをく事也。大いそはたばこ一ふくのあいだを爭ふゆへ。此やうなとあり。）△（こなたの座しきには）〔おとら〕〔おだん〕（着かへて來る。）〔とら〕（はくり茶がへしの小紋縮緬の單もの。）〔だん〕（は一ッぺん水へはいつたといふ越後のあいさび。これは床着と道中着と兩方へ用るいしやうなり。二人ともにかけ香のひもを。むねの所で十文字にとり。鼻紙入をみす紙にてまき。帶のまへゝ。たてニはさむ。）〔通矢〕イヨはやごしらへ。きついもの〳〵。（はやごしらへとは芝居の詞。）〔とら・だん〕ついぞねへ。〔女〕モシどなたもちとあちらへ。〔鬼丈〕なるほど。チトぶんまはしの道具がはりといふ所がよからう。（トみな〳〵たつ所へ。あとをつけておきし。）〔おつる〕（もあいて來り。すてぜりふあつて。トゝむかふざしきへ床がまはり。）〔鬼・いな吉・通〕さやうなら。御きげんよう。〔十朝〕ごくらう〳〵。（らうかにて。）〔鬼〕青砥屋の久公。つりがたまつたらちつと海へつき合ゥせへ。〔久〕此ごろはそんな元氣はなしさ。〔通〕うそをつくせ。（トみな〳〵下へゆく。〇つりは船頭の居まちになるなり。ためて置てとり。それで海などへゆくなり。海といふはつるがおか八まんのむかふ海手にあ

る四六みせなり。〇又男げいしやは。床がまはると。じき二かへれども。はをりはむかひのかゝるまで。下に待つてゐるなり。〇大いそのならひとて。八疊じきへ三人わりどこ。屏風と〳〵のせなかあはせ。纒丁はやぐを茶屋から出すゆへ。あまりよろしからず。纒丁のほうは藝者をころばすといふたてゆへに。夜具もちや屋からいだすなり。しきがみをとぢつけた味噌せんべいを見るやうな麻の蒲團に。比翼どざ。あさのなつ夜着。やき印をおしたかんりやくまくらなり。女は三人のはをりを下へもち行。めい〳〵に貸ゆかたをきせる。〔朝〕祐成さんモウねたか。〔十〕何まだサ。なせこねへ二夜具がわりいねへ。〔朝〕こゝは茶屋から床がでるからわるしサ。鳥羽瀬なんざア。女郎がもつてくるからみんないたじめなどさ。それだから夜具つゝみのはしに付ィでる札を見ると。こゝはだか床だといふもしれるよ。ナントまあこうとこへはいつた所は。むしあついじやァねへか。極樂の塩風呂がこんなだらう。〔團〕コリヤァできた。トいふところへ。〔おとら〕來り。はながみをとつてまくらへあて。祐なりが烟管をかりて。おびの間からららぼたんの龜甲がたの烟草入をだし。うすまひのたばこをすい付てだす所へ。〔女〕つゝ茶わんに茶をくんで。二ツちよいとゆびでつまみ來り。たばこ盆の上へのせて行。おとらは祐成をまんざらとも思はぬゆへ。おびをときもへぎのいとさなだの下じめばかりにてねる。一たいこゝの法は。初會なぞには。大きなおびもとかぬといふがさだめなるよし。しかれども取組によるべし。〔とら〕モシへ。何かあじにじれつてへねへ。〔十〕おめへじれつてへを。何處ぞではきけへてきたか。〔とら〕茶ばつかいひなはる。〔十〕おめへも歳はいくめへが如才はねへ。〔とら〕ついぞねへ。おめへがたのやうな革じやァごせへせん。おめしサ。かはとはかわはをり。おめしとは羽二重といふ事也。〔十〕ゑてこんな事から。やみつくものよ。〔とら〕わたいらがやうなもので。マァどふして及びもねへこと。猿猴の月とやらサ。〔十〕でいふおめへはものしりだ。トむかふは團三とおだんとの閨中。となりは朝ひなとおつるはなじみだけ。別して趣あれども。事しげゝれば畧す。」折ふしむかふ座敷には上方ものとみへ。ものずきな客むしやうにあなを聞きたがるやうすにて。〔客〕コレごふく店の客の穴を。少しいふてきかしやいの。〔船頭〕ごふく店の衆の遊山にでるのを。出番と申やすが。出ばんのあたるのは。正二六八の月サ。仲間の通言にやァ。つけのぼせになる事を。つけ衆になると申やす。又それをしやれていふときは。〔淺黄のもゝ引松坂縞〕共申やす。床のまはる事を〔大の字〕とも。又〔ランチ〕とも申やす。金一分のことを。〔ナル升一チ〕とも又〔シンヲ一チ〕とも。酒のことを〔ヘル〕。よい女郎の事を〔ト一チ〕。わるい女郎を〔くはをり〕。げいしやの事を。〔かは〕と申やす。まだいろ〳〵穴もござりやすが。くはしくは申されやせん。〔客〕コリヤゑらい穴じやわい。ハヽハヽ。トむだ話のうちよほど時うつりければ。〔朝〕〔十〕〔團〕三人おきてとこを出る。三人のあひかたは下へゆく。〔朝〕コウ祐成さん。日くれまで居ちやァわりいか。〔十〕よくもねへが。おめへがいらばどふするもんだ。〔朝〕モシ氣にいらざア。あの子をさげて外のをよびねへ。〔十〕何サ。まんざらでもねへはな。〔朝〕さうはにらんだて。コウ團三。て

めへもおつう本よみをしたな。狂言がおさまつたとみへるせへ。[團]何サ。わつちやア。トロ〳〵とやらかしやした。そんな事をいつておくんなせへすな。わつちが身のうへでござりやす。身の上とは役者の通言。[十]朝比奈さん。こゝじやア。男げいしやはいくらだ。やつぱりおなじとか。[朝]何男げいしやは一分サ。[十]鳥羽瀬のげいしやも。こゝへよばれるかへ。[朝]ソリヤ鳥羽瀬をこゝへも。こゝのを鳥羽瀬へもよばれるのサ。其かはり一ッで二ッになるのサ。そしてこゝじやア子ども。羽をり。といふが鳥羽瀬じやアやつぱり。女郎。げいしやととなへるによ。それゟまだ脇にねへ。妙な事がある。鳥羽瀬のみへきなぞじやア。襟子ども屋へくる女かみゆひの外ニ。ばかりこしらへに來る女がある。それで渡世になるのサ。そいつをゑりのおばさんとつけておくわな。[十]ハテ變つ

たことだの。トはなしのところへ。新頭[久]來り。もしへ。どふなさりやす。朝もう一きりゐるつもりだ。[久]それもよふござりやしやう。ト小ごゑにて。[朝]稻きもなをしてやらつせへ。おぢい。おつるもくびは相應だが。一ツかふな棒だぜ。かるやきをうしほ煮にしたやうな女郎だ。ちつと又かしをけへやう。[久]御めへのやうな。物飽をしなさるお客は。みた事がねへ。[團]久しいどうけをいはつしやる。トいふ所へ。三人ゆかたに着かへて來る。[おつる]は木綿ちゞみの縞のゆかた。[おだん]は鳥羽瀬の八わたやから染だしたとばせ紋のゆかた。[おとら]は銅丸仕入のしぐれ小もんのゆかた。[いな吉]もきたり。なをしざかななど出る。此客折〳〵料理番にはづむゆへ。だしものは氣をつけて出すやうす。又さへかへつて賑かになり。さかづきまはり。娘ぶんや。女入かはり。立かはり來れども。事しげければりやくす。[いな吉]モシ朝さん。此ごろに芝居へつれてお出なせへせんか。[つる]ホンニわたいらも行きてへよ。ト帯へ手をはさむも。

きつひ此さとの癖也。といふ所へ。女知をもつてきて。いな吉にわたす。いな吉ひらいて見る。みすの紙へ。べにゝて書た文なり。[團]何かおもしろさうなことね。[いな]ナアにけうでい分の所からきたのサ。[つる]これ〳〵にごりが。[いな]ざうサ。[朝]しかたでするふちやうも古い〳〵。よせ〳〵。ト此うち。おとら。おだんは初會だけだまりこんでゐる。[朝]コウおぢい。此ごろは鳥羽瀬はどうだ。[久]あつちも賑かさ。ゆふべもお客をつれていきやしたが。舟宿部屋までふさがつて。ざしきがなくつてけへりやした。[團]コウ青砥屋。燗がごうせへいゝ。一ッのみねへ。といふ所へ。[おひで]あさいなさん。おめへさんはこれ組だから。煮茶といふ所をさせやした。サアこれを一ッおとんなせへやし。ト高杯に越後やの松かぜせんべい。こはく餅。きぬたまきなど。積あはせたるを出す。[朝]こいつァありがてへ。ゑちごやの松風煎餅ときちァ。竹むらのもなかの月といふもんだ。[つる]朝が耳へ口をつけ。モシ今日

はどうぞ。まはしにちかづきになつておくんなせへし。〔朝〕しやうち／＼。

第三回

戀と情の中裏とて大いそ通にしられしは。うら屋住ゐの小路にして。妓家軒をつらねつゝ。棟をならべて櫛の歯を。挽くにひとしき人出入。片ときたへぬ駒下踏の。音は寄場にかしましき。夫が中にも鶴といふ。字を鏤したる竹簾かけたるは。舞鶴屋傳三といふ妓家なり。内に〔居候〕惣どうこをみがいてゐる。〔子供〕はそばにはとやに付てるとみへ。しちりんで中ふくを煎じてゐる。こちらには〔子ちよく〕金魚鉢の水をかえてゐる。折からかまくら朝いな切通シの判人。〔長谷觀六〕來り。おやかたは御やどか。〔居候〕アイおられます。〔てい主〕〔傳三〕通俗すいこ傳をよみかけて。ひるねしてゐたるが。目をさまし。ヲイ觀六さん。御出。〔觀〕ときにいゝ奉公人がありやすから來やした。突出しだがとをりはよし。身のしねへなざァごうせいニいゝ女だ。とをりとは鼻すじの事。身のしねへとは風俗の事。皆此道の詞也。〔傳〕此節ほうこう人もほしいが。わりい足でもついちやァいねへかノ。〔觀〕何サ。根をよくたゞして來やした。いさくさのねへのさ。ホンニ此頃一人とんなすつたじやァねへか。おや判かへ。よび出し判はだれを入レなすつた。〔傳〕二人リ取たが。聞きねへ。ひとりは四五日つかふと。ゐんばらむしをやみだす。ひとりは髪どやでひつこんでゐるはな。つきだしの子どもは。ゐんばらむしといふをよく病むもの也。ふのりを煎じて飲ませるなり。かみとやと云は。とやにかゝりて。髪の毛のぬける事也。そして其奉公人はどの位のものだ。〔觀〕五年で。金五まいぐらゐといふあたりサ。マア明日あたりみなせへ。〔傳〕あしたは勘定日だ。〔觀〕おしい奉公人だから。早くとらせてへ。〔傳〕仕切あけにせずに。親判をとをすだらうの。〔觀〕ばんばやの忠太がほうこう人だが。なんなら親からそへ證文をとつてあげやしやう。相だんが出來たら。かげをばちつと付てくんなせへ。かげとはかげにて儲ける事なり。〔傳〕そりやァどうともしやう。〔觀〕そんならおめへ。見てからむなぐらの五兩もかしてくんなせへ。手つけ金のことを。むらぐらといふ。此道の詞也。〔傳〕それともよく洗つてみてくんねへ。〔觀〕氣遣しなせへすな。洗ひかたは如才はねへわたしだから。ふみ玉なんざァつかやァしやせんはな。ト觀六はかへる。○ふみ玉とはあとでいさくさのあるほうこう人の事なり。○折ふしかゝへの子供。〔おてう〕二かいより手水ニ下る。〔傳〕おてう。ちよつと來や。ト奥の障子をたてきり。二人さしむかひ。外のとでもねへが。手まへがアノ曾我の五郎とやらいふ客をよぶ事は。とうにきいてゐるから。せいてよけりやァ。五軒の茶屋へとはつて。あはせぬ事も知つてゐるが。外の子どもにやァきかされねへと。長家一ばんあきねへをよくしてくれた手まへだから。今まで大目に

見てゐたが。此ごろはさしをついたりねたりすると茶屋の評判もわるく。コレ黒木の客もきれたげなの。きけばその時宗とやらいふ客も内をかぶつてゐるそうだが。ヘテすへ〲コウア、トおもふ心があらば。もふ一年もしんぼうして。をれにちつと息をさしてくれろ。おれも男だ。さうすれァ半年や一年の年季はくれてもやる。さうして手めへが地めへになり。其男とひとつになつてかせぎやァ。又おれも世話をして。かゝへの一人もするやうにしてやる。手まへも知つてのとをり。おれも長屋で相應に口もきく玉をあづかつて。土地ところの世話もしてゐれば。内の子供に万一のとでもありやァ。長屋中へおれが顔がたゝねへナ。きこへたか。合點がいつたか。トふく淸もどきのお談義の最中。おもてから。[まは]しおてうさん。鶴が岡屋から。口がかゝりました。

第四回

[女ひで]まへだれで手をふきながら。朝比奈さんモゥお歸りなりますかへ。[朝]此ごろに來やしやう。[みな〲]さやうなら。どなたも御機嫌よう。[十]ちつと風が。[團]でやしたね。[朝]おぢい。のつきれやうかの。[久]氣づけへはござりやせん。[朝][十][團]はしごをおりる。女刀かけぐるみ持てきて見せる。諸なりわきざしを見分けてさす。奥から番附を書た札のついてる履物を持てきてなをす。娘ぶん下女など川岸までおくつてゆく。[つるがおか八まんの入あひ。]ボヲウン〲〲。[これより夜分の体はじまりさやうに御らん下されましやう。]折から曾我の五郎時宗と云きやく來ル。[女]ヲヤ五郎さん。[五郎]表のくゞりから。顔ばかりいだし。[女]サァお上んなせへましな。いゝか。聞てみてくんねへ。[女]わつちらが内に出ていなせへすョ。[五]そんなら。あとをつけておいてくだせへ。表の畠山屋に友だちがきてゐるから。其うち付やつて來やう。

[女]モシマァそれじやァ。おてうさんの前へ惡ふござりやす。[五]いゝやうにいつておいて下せへ。直に行てくらァ。トいへども。女ども承知せず。むりにひきずりあげる。[五]は二かいへあがりたつた今。朝いなャ諸なりがかへつて。まだ出しものや三みせん箱の。とりちらしてある座敷へはいる。[五]そんなら。今のうち八もんじやの湯へはいつて。汗を流してこよう。[女]そこらをかたつけ。はき出しながら。よしなせへナ。そんな事をいつて。又表へ行きなはるだらう。性わるをしなはると。おてうさんに言つけやすよ。[五]は。かねて。舞鶴やのかゝへおてうと古き中にて。こゝの内へも度〲來りし也。こよいは心のもめる事あつて來たりしゆへ。はたへそれと氣どられまじと思ひ。わざと元氣にてゐると。ほどなく。[おてう]は女が知らせしゆへ。座敷をあけて。ちよつと逢ひニ來り。心まちをしてゐたに。なせ遲かつた。[五]しよけへか。[てう]さうさ。貰つてもいゝが。もふ今にむけへだから。羽織染でもよんでゐてくんねへ。どけ

へもいきなさんなよ。コウおふさどん。憚りだがの。たばこと紙を。おばあにそういつて。とりよせてくんねへ。ごしやうだにョ。トヌゆく。長く他のざしきにいられぬが。すべて大いその法なり。また寄場におばあといふありて。子供のせはをやくなり。△其となり座敷には。客はかへつたが。まだむかいのかゝらぬ子どもとみへ。〔おきつ〕ソレヨわたいがてへこに出て。しかゝそのばん。雪よしで一座アしたァな。〔おたぬ〕ヲ、それ〳〵。ホンニあの扇が谷の末廣屋にしんぞうおろしが有さうだが。おめへどうする。祝義をやらざァなるめへ。ナル升一でよかろうかの。出ばんの詞を覺へて。しやれにいふのなり。二分狂言ではおそれるのう。〔きつ〕わたいらア。此ごろは大ひつ天で。さし物もみんなやつてしまつたしきだ。殺されてもねへ。〔たぬ〕うさァねへ。ホンニおいらア。もう明日ア。さはり用事をつけて引こもう。これじやァ出られねへ。さはりをふかく見るときは用事を付る。〔きつ〕なるほど奉公人根性とはよく言たもんだよ。わたいらもかゝへでいた時にやァ。むしやうに引こんだが。ぢめへになつたら。一日もよけへ出てへ。〔たぬ〕よく氣は微塵もねへの。トわらふ所へ。むすめぶん。〔おキ〕何。へこむ氣がちがつたさうだ。ツウ〳〵うれしい心いきだ。ト何か廊下をすてぜりふをいひ〳〵きたる。おきつさん。ちよつと後をむいて見せな。おめへの髪はとんだすいたかつかふだよ。誰がゆふ。おりたさんか。〔きつ〕何。わたいらが内へは。おつよさんが來やすはな。〔おき〕おつよさんは。たしか表へもいひに行くのう。鳥羽瀬のおよめさんもよくゆふよ。〔きつ〕ほんにかへ。〔たぬ〕モシへ。〔おき〕何サ。ねずみに出てゐなはらァな。トいふうちニ手がなるゆへ。あいゝ引 トいひながら立て行。○ねすみとは。しまつてある子供。その客のくるまをほかへ出ると也。〔たぬ〕此ごろ隣へ大瀧からでいしにきてゐる子は。とんだ大キな顔をするによ。どこぞじやァへこむだらう。〔きつ〕ウ、ヨ。わたいらァ。まだ一座アしねへが。長家中でそういわァな。それでもよくうるさうだよ。だがまはすのう。〔たぬ〕犬兵衛さんがまはさァな。ホンニそりやァさうと。あしたァ雪の下へ文をださうにョ。〔きつ〕一しよに狀づかひにもたしてやらうはな。ト一人は下へ行○町では文づかひといふを。此とちでは狀づかひト云。△こなたの座敷ニは。〔おてう〕そがの五郎へがきてゐろうへならず。心のうちにいろ〳〵と苦勞のすじあれば。何かそは〳〵心おちつかず。たび〳〵らうかへ出。又蚊屋をくゞつて出さうにする。此客きほひはだの半通とみへ。名は。〔梶原源太〕その裾をつかまへ。コウどけへ行くのだ。〔てう〕ちよつと手水にいつてめへりやす。〔梶〕なんだ。こいつァとんだ尿瓶じやァねへか。さきつから度〳〵出るが。わりやァ雪隠へとうもろこしの食ひかけでも忘れて來たのか。〔てう〕おめへ。さうあじに思つてくんなはる

事ァごせへせん。さつき二三度出たナァあの。「梶」やかましいわへ。トおき上り。大あぐら。〇三四ほん流つたおの川しまの貸ゆかたのつんつら短いやつを。腕まくりして。竹口がはつたけいらばりの煙管で。薄紅梅といふ一きんで。一分二朱ぐらいもする煙草を。一ッぷくのんでちよいとはたき。これへ。わりやァおりやうば初午の晩の狸をみるやうに。氣ばつかりあじにさせやァがるが。ひつてんな客とみて悪しくするのか。但シかまくら沖でとれた。通り者を喰つた事がなくつて。おそれをなすのか知らねへが。近江の湖水へ目だかをはなしたやうに。あつけにとられる生息子や。夕顔の暑氣あたりといふ。色の青い出番のやつらをとり扱ふとは。あてがちがふぞ。鯛門屋の芋のにへたもしらねへでいゝかとおもつて。宵から菅次が内のたばこぼんより高いつらをしやァがるが。大かた内じやァ。出しッこをしてこしらへたきらずに鯷の汁の中へ。一ト袋三文のとうがらしをふりかけて。小びんから汗をかいてくらうだらう。「てう」モシへ。まあ静かにしておくんなせへやし。わつちが悪かァあやまりやしやう。餘りでごせへす。怪しからねへ。「梶」なんだ。けしからねへ。けしが辛けりやアナ。唐辛や。山葵はナ。かぶを賣つて裏店へ引ッこむは。これ。われやァまあ何屋から出る奉公人だ。たゞし名まへ出居衆で。亭主をすぐすのか。ウ、きこへたァ。さつきからたび／＼廊下へ出るが。なんだな客が來たから。こつちのあくのをまたせてをくのか。經師屋の達摩か。宗十郎が似顔じやァねへが。横目で睨んでも。遣るもんじやァねへはへ。是から一ばん胸わるで。おれがけへきり根くらべだ。マァさう思つて。むかふの野郎にも往生させ身上へ繩を付て引ずつてきてから。待てゐろといえ。かういつちやァほんのこつたが。お袋のまたぐらからぎやつといつて。鎌倉風のひより下駄をはいてから。さかわ川の猪牙船で鶴が岡の八まんさまへ宮參りをして。稲村がさきのざるそばと。いてう屋の鰻でそだち。たまごの四角を枕にして。女郎の實をふとんにしき。晦日の月の屏風をたて。十二匁の場所から七匁五分の場所かけて。隅からすみへ寝げへりをうち。正月の初勘定から買はじめ。一年中の客帳は。をれが表徳でよごさせ。大いそ一とをりの夢はみつくして。脊にやァ舟梁の瘤がいつてる梶原さまだ。どこの出居衆勘定は一ッうつていくらッ、。子供がつかふ床屋の損料は。どのくらいな床でいくらする。といふとも。茶屋のさんばしの鳴子の札に。どこの内には何流で。何屋と書てあるとまで。づつうにのみこんでゐるのだはへ。なんだの。かだのと。上手をつかやァいゝかと思つて。

すつぽんのうち首をみるやうに。餘りびく／＼しやァがるな。トだん／＼聲が高くなるゆへ。おてう呆れかへり。言葉をやはらげて。いろ／＼と和めてゐるところへ。下から此客をのせてきた舟宿や。女どもが來て。よつてたかつて立ごかしにして。やう／＼歸してしまふ。あとはひつそりとなり。はじめて外の座敷のわらひ聲もきこへる。おてうは。すぐに五郎が方へ。出なをりニして出る。〔てう〕とんだ毒氣をふくばけ物も。來れば來るもんだぞ。やう／＼まるめてけへしやした。〔五〕アノ客は大ぶしつたかぶりをならべたナア。どこぞじやァいはうと思つて。内でふくしてをくだらう。なんのとはねへ。石菖鉢で鯨を飼ふやうな太平樂だ。それにてめへのかけ引が氣がきかねへから。こゝできゐてゐても。日よけの穴から狂言をみるやうでじれつてへ。〔てう〕ホンニサ此頃どやをしまつた新子かなんぞのやうに。こゝのうちの前へもかつこうが悪ふごせへす。縁喜なをしに。あをつきりをついでくんなせへし。〔五〕よせへ。又癪をおこすだらう。〔てう〕一ツぐらゐはいゝわな。〔女ふさ〕來り。時宗さん。おちやづけはへ。〔五〕モウこんやは喰ふめへよ。折から下にて。〔女ひて〕モシへ大たかやへ。ちよきを一艘こせへさせてくんなせへ。馬入川のしほどめまでだよ。そして起番はひとりでいゝよ。今夜はとまりがすけないから。トいふ聲がきこへる。これ門つあけのせりふ也。○大たかやといふは纜丁のかしなり。こゝのちや屋／＼へ出入の舟宿なり。又おきばんといふは。北國でいふ。ねずのばんの事なり。

△かくてとこがまはり。〔五〕〔てう〕はとこのうちへはいる。〔てう〕はとしが十八ばかり。洗ひ髪をおとしばらげの島田に藁でゆひ。つげの小な櫛をちよいとおつこちそうにさし。前髪の所へ銀の短いかんざしをさし。三兩ぐらいもするべつこう物を二本ほどさす。おしろいなしの素顔。いしやらは素肌にすき屋ちゞみ。花いろじゆすの帶。白ちりの下おび。たゞし是は着かへたたり也。こいつは五日勘定に。三十もうりつめるといふ奉公人なり。〔五〕もまだ歳はいたつて若く。にがみのある色男。こしらへは藍微塵のめんちりのゆかた。無地のこンはかたの帶。下おびは紺ちりめんなり。〔てう〕はとこの中にはらばへになり。じにしん好みの玉のきれてこしらへた小サなかみ入の中から。黒ぬりにしたらぬぼれ鏡を出してみながら。かんざしで前髪のほつれをなをしてゐる。〔五〕コレてめへ。指の輪はうらみだせ。もうやめにしろ。おとなげねへ。紋所はなんだ。ドレみせろ。〔てう〕いゝよ。うつちやッておきなよ。モシこりう踏みなさんなよ。守りだよ。〔五〕なんの守りだ。〔てう〕鳥羽瀬のむかふの秋葉さんから出る災難よけのまもりさ。ト云所へ。まひづるやからおてうが藥を煎じてよこしたるを。下女〔ひさ〕持くる。〔てう〕コリヤア。くわんのまゝ。おひさどん。憚だよ。とてもの事に。もひとつ頼れてくんな。おひらさんがあいてけへるならの。ちよつとこゝへ顔をださしてくんねへナ。〔ひさ〕アイさう申やしやう。トゆく。〔五〕瘡のくすりか。〔てう〕知りやせん。〔五〕枇杷葉湯だなァ。てめへののむにやァいゝ藥だ。〔てう〕にてさ。ほどなく〔おひら〕來り。おてうさ

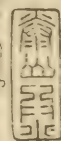
ん。なんだへ。〔てう〕おめへうらみなもんだ。兄弟ぶんのやうでもねへ。宵ッから五郎さんがきてゐらアナ。〔ひら〕ヲヤわつちやア。けへしき知らなんだ。五郎さんよく來なつたの。〔五〕でへぶ今夜はまじめだの。〔てう〕ちよつと耳をだしな。ト おひらにみゝうち。 おめへうちへいつたらの。ソレおれがくし箱の上の引だしに櫛があるからの。あれを深本へもたしてやつての。二兩かりてのたばこ入の中へいれて。たばこのつらでよこしてくんねへ。又客帳を出しちらかしておいてくんなさんなよ。如才はあるめへが。〔ひら〕ウ、小ゆびに悟られねへやうによ。〔五〕ヲイ／＼承知さ。五郎さんおさらばへ。ト ひらはかへ歸る。〔てう〕煙草をすいつける。火がきへてなし。手をたゝきさうにして思ひだし。紙入のなかからほたる火うちを出してうち。すいつける。〔五〕閻羅あたりの女郎を見やうに。そんなものをもつなへ。やすくッて惡いせ。〔てう〕何客のめへで出すもんか。〔五〕コウこのごろは仕懸がはいつたの。〔てう〕さうサ。茶屋からたのみでしかけがはいつたから。地めへのてやいは。しゆかいまけがするとつて。さがつてわきへ出るものもあるよ。〔五〕あじなもんで。しかけがはいると賑かになるナア。ト いろ／＼はなしの所へ。かの金子入のたばこ入を。子ぢよくもち來ル。〔てう〕ウ、よし／＼。おひらさんに御世話でごぜへしたといつてくりや。そつとよ。ト 子ぢよくはかへる。モシ五郎さん。さつきの話しのをこゝへ入ておくによ。ト 時宗か紙入の中へ金を入る。〔五〕ウ、どふもそいつが無くつちやア。かれこれが落着しねへ。〔てう〕もしたらざア。あしたにも又さう言つてよこしねへ。ト いふうち。外の座敷もひけて。二かいはしんとしめる。表ざしきのあたりにて。羽をりのおゆまが聲とおぼしくて。メリヤス万ぎく。〽宵はまちわびわくせきとふけてみれどもまださゝごとの。ト あたりにきをつけ。〔五〕晝ほどの遊をさだめてみたであらう。〔てう〕くわしく見やしたよ。今日もけふとて旦那さんがいやと言れぬもつともな意見はきけど。わつちが身の上も何をかくさう。べつこうの數がへり。仕懸文庫が輕くなつて。此さし物も着たものも。みな損料のつがふ物。おまへの身のうへといへば。だん／＼のあのわかち。はてどうするもんでごぜへす。此からだをつき出して。〔五〕主人のぎりも。〔てう〕おまへにみかへて。〔五〕そんなら晝の遊のとをりに。〔てう〕にげやしやう。〔五〕ウ

〇コリヤ。

仕懸文庫 畢

追加

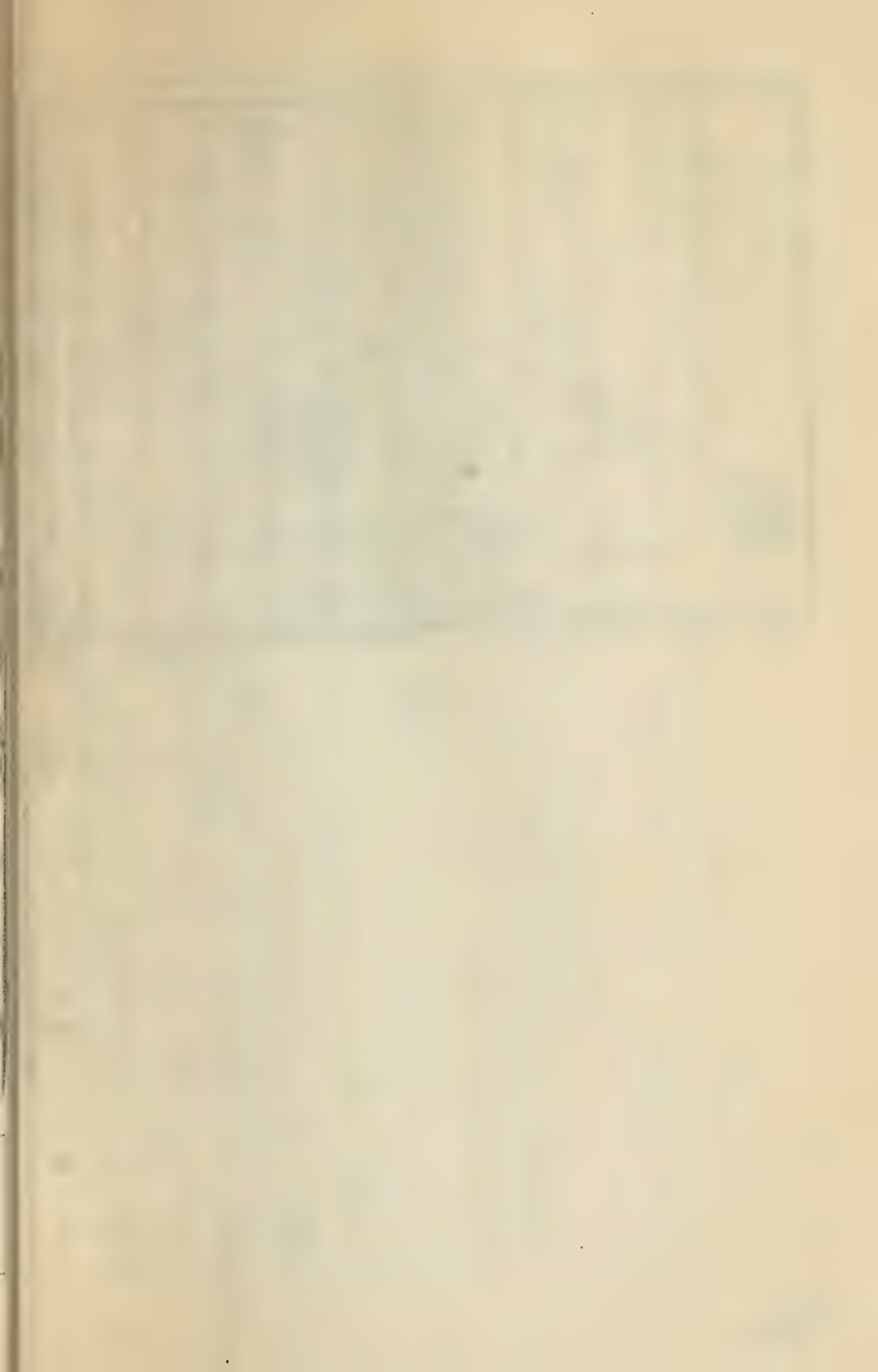
前に許多の小冊出て。此大礒の地に於ゐて。妓客の情至り盡せり。雖然コンコヽリキコヽマカリキの時代にして。はや十年の物換星移。よくいふもんの上下も。いつしか着ふるして。わづかに吸物椀の袋とはなる。古今人情かはらざれど。風のうつり俗のかはるは。息の強ひ吹矢のとく。昨夜の鬢さしの翌に飜がことく。流行のはやきは。都て烟花のならはせなり。故に今再ひ此地を穿鑿して。十二銭目の筆のはつみに。三銭目の胸のうははをくはへ。合て以て一部の書となす。猶予が穿のいたらざる所は。此地の博子のくはしきを待而已。

跋

河豚羮を不食愚鹵あり。くふ癡呆あり。くはぬ愚昧は美味を不知。くふ素痴は有毒をしらず。毒あるをしらずして。くらふ人は論に不足。美味をしらずして。くはざる人は一概にして危し。不佞京傳。嘗好色淫蕩を著述すといへども。實は前に美味あることを述て。後に毒あることを示し。戒を垂がため也。不如美味を知り毒をしつて恐愼には。河豚はくひたし命は惜しとは。豈此境を悟したる。君子の言といはんや。孔夫子衛國の煮賣家を過りて曰ことあり。吾未

德を好者。吹肚魚を好が如くする者をみず
と。嗟夫ホンニ。傾國傾城ものは。此鐵
炮汁の勢ひにあらすして。何ぞや。みづか
ら後にしるす。

京　傳

表紙	ヨコ	三寸六分
	タテ	五寸一分
本文枠	ヨコ	三寸
	タテ	四寸四分

序

二上りのいたこに曰。手鍋さげふと口にはいへど。實は乘たや。玉の輿とは。豈酌女の言ならんや。其手鍋提るが。ふせ玉の輿にも勝る心意氣を。

すつぱりかひたる作意の妙。河奈川の豊倉を見通す。什麼生。達磨も古石に三年。子曰。君子も中島町の小徑によらん。嗚呼三河樓の料理番が甘口も。大津樓

の水の鹹もの。味ふる者。此本に口をかけよと。序の一丁點す叓爾。關東米誌 ㊞

口をかけよと。序の一丁點す叓爾。

關東米誌

自序

色好ざらんはといへる。日本の放蕩家。傾國とそゝなかす。漢土の狂費家。貴妃が淫婦。無塩女が醜女。薄情愚意心實も。悉皆皮一枚の戯ならずや。蓋義理一遍の通

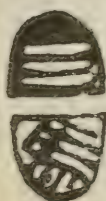
自序

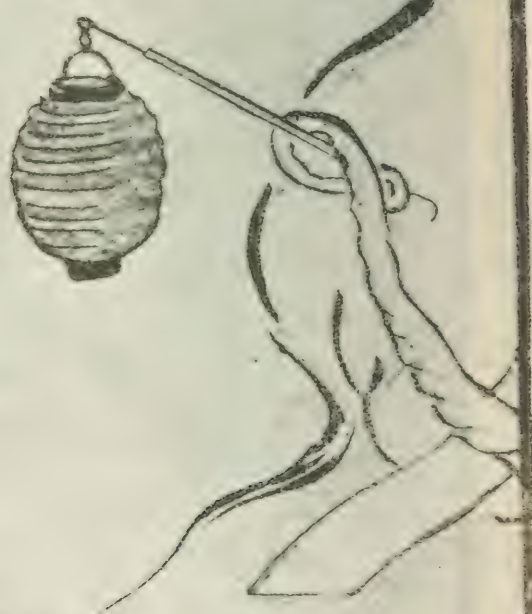
色好ざらんはといへる。日本の放蕩家。傾國とそゝなかす。漢土の狂費家。貴妃が淫婦。無塩女が醜女。薄情愚意に實も。悉皆皮一枚の戯ならずや。蓋義理一遍の通

情は。結句心のもめる種。割て見せたき女郎の腸。呑込姿の江戸ツ子の根生骨を。酔道の眞水に晒して。一寸南鐐一篇の書を著し。金の饒簡販打たる。諸君子の覽に呈す。

元來戯謔の書と雖も聊悟道の捷徑ならん。ハテ足下人間一生處生が夢と樂しみ僅二十年ナソレおちかひ内と云爾。

于時戊午春初仕舞翌日於三河樓見通

式亭三馬採筆㊞

凡例述意

○先に雷名の諸先生。東妓。南品。北廓。西娼の遊里。小説を著述し。滑稽妙文普く海内に震ふ。其穴を穿つ亘高くは高慢の鼻盧空无天に至り。低くは糀町の井戸を浅として。混底那落閻羅王の天窓に屆。於テ之短才の小子等。書せんとする筆頭の文およばず。依て今諸君子の非言を不レ顧。名家の糟粕を嘗て。予が分に應じたる新市場の世界を著す。文くた〳〵しく符合せざるは。覧者の

哥麿筆

増校言を希ふ而已。○此書の趣。女郎一人に三客の意味を穿ち。嘘と實の迷悟を示す。然と雖、東曲通の覽に呈すとには非ず。○廓通の目より見ば外國夷狄の如くなれば。言語もおすざんすに變て。はんなと耳立ば其鄙俚を改ず。○舟宿衆。私等の類ひ。其儘に出して。片言の誤を正さず。唯有容になして三太郎權七に與ふる而已

已上

哆囉哩樓主人　戲著

發語

戀別の後朝。ハイお迎ひに別の鐘。間夫と女郎に惡まるゝ。鳥が啼吾妻なる。辰巳の里に舟はあれど。君をおもへば歩行よりぞ。行も歸りも心から。俤の目先にちらつく。ぶら提灯の火と共に。おさき眞闇行當ばつたりと。お座鋪子供衆の斷に。一身のねぐらに迷ふも。おのがさま〴〵氣風にや有りなん。爰に一場の娼家あり。所謂戸橋赤町裾櫓。おの〳〵列國を分ッが中にも。古石新石の繁昌。此里惣別客品有り。平代橋と共に長〳〵し夜を。一ト切遊びのいと短きに。遊子純通。サツサ押せ〳〵の猪牙舟に乗じて。闇雲たる有頂天へ昇り詰。終には違ねへのまん中を取はづし。トツチリとんと身を落せば。食客の權八さんとなる事。是則水道の醉は。身を喰ふ喩のごとく。夕に千金の角座鋪。朝に〓男山の重着するも。通と不通の譯合ならず。兎角世界は竹田近江が積細工のごとし。爰に群來る遊人は。中通い下の人物にて。棧留青梅の店者は。屋鋪通ひの初馴染より。年に二ッの出番を誓ふは。聊二星の契りにや比すべき。彼放蕩家の呉王。姑蘇臺に西施をして。チヨン〳〵幕の樂も。かくやあらじと未至通の貧君子。適〳〵價安きをもて喜見城の思ひをなし。爰に兩三個の妓藝を揚れば。晋の謝安が東山に新狂言も是にはしかじと。やに下りに高ぶり。自ら錢湯の湯氣に上ッて。黄色な潮來に湯番を恐させるの徒。潮來を以て。克ビハヨウトウを度し。新手を以てよくスツツパリを殺す。此世界の風土といへるは。長鬢羽織の細身指。黑縮首のぱつち尻はしよりといへる。きん〳〵姿の青樓風を廢し。或は晒の手拭を肩にかけ。花色繻子の帶。貝の口に結び。或は前垂腰にまとふ。丸額の大銀杏。客人か。將船頭か。船頭とも見へ。また客ともみへ。大きに賓主の禮を亂して。二上り騷唄。夕しこげんの程もなふ。又ぞや内の御首尾の程と。〆のさき目の口紅粉は。萬客嘗となめられて。行客の詠めは絶ずして。しかも元の客にあらず。流に浮ぶ川竹の。且切れ。且睦びて長明が。方丈の文にはあらねど。實や賑ふ繁花の地。爰も名にあふ鎌倉の。大磯小磯化粧阪。爰もわけて名高き手越の宿。戀の船着。情の湊。新地の端に漕寄る。一艘の棚なし小船。新市場の橋の下。洲へ當らじとする處へ。はるか古市場の方より來る。贈り舟の潮來洒落。たがひに摺れ合ふ舟と船。客と客とが見合す顏。胸にぎつくり。ぱつたり落すぶら燈灯。ヘ今のは慥に。ト胸と胸。ヘムそれよ。チヨン〳〵〳〵〳〵。折柄時も〔四ツ明の拍子木〕

石場妓談 辰巳婦言

式亭主人著

［半夜鐘］ボヲン／＼。［夜番拍子木］カチリ／＼につれて。バタ／＼トン／＼たる料理番の俎板も。良音なくして。棧橋の声何屋／＼アイ、、引の返詞。階子ばた／＼も盡て。船頭の魂廊下に納て勤番部屋の刀掛のどく。お客だよヲの美音。忽ちに鼾眠と變て柿鮓のどし。傍に熟柿臭き船頭の柏餅あれば。恰も薬盤硯蓋に等しく。臺所に算を亂し。鼠天井に踊て料理場を馬場と競ひ。遠く望ば波風見通に寒く。高調子の乙唱哥も風輪蕎麥の音に淋敷。寐言の掛合を視合て。舟宿の兄さん色変の廻部屋へ這ひ込。不寐番のお針麻苧桶を片寄せ。醴を温て呑む時分。遙に米相場の迷ひ子。火の用心さつしやいませうの鐵棒に響て。爰に聞ゆるは。へたしか

鎌倉古市場二川屋の二階と見へて。客と娼妓の差向ひ。寂莫として手管の意説

［客人藤兵衛］稲村が崎新川あたりの酒問屋の伴頭と見へて。年は三十五六。すこしさびの有でつぷりとした人物。衣裳付ヶ。藍おなんどの羽織をたゝんで。まくら元へ置。同じ仕立の上着をぬひて夜着の上へほうりあげ。中着もつむぎの鼠返しにうきす小もんまがひ八丈のがく小袖の下着。二ッながら黒のはんゑり。らせん絞のちりめん半袖。襦伴におなんど七子の帯ぐる／＼と前で結び。越川仕入たかおりのたばこ入。尤中へは丸角仕出しのちりめん蝦引を入。こしらへは惣白鐵さびそぎつぎの銀ぎせるで。うす舞をくゆらせ。ぐつと上ゲあぐらで居る。

［女郎おとま］爰の内の板もと也。但し子共やによりて板がしらといふ家も有。青樓ならおしよくといふもの。しかし是はいはずと御ぞんじならんが念の爲巳上。「中どしま。せいすらりとして少々りきみのある姿。あいらうへだの三すじ立のこり／＼するやつ。下着はしまちりめんのせいらつ。襦伴はひぢりめんに白ねりのはんゑり。尤ゑりははゞひろく。鼠の二重どんすの帯をしめて。あんどうのそばにすはり。片手ついて。片手はまへがみのぶらさがるを。ぼらしがんざしでさしこんでゐる。

［藤兵衛］コゥわけをいゝな。何もふさぎのすじやァねへ。なんのこつた。庖丁を引ッたくられたちんこ切か。すみ繪の虎じやァあんめへし。口上書を出して藏前へすはつてゐやな。ア、おもしろくもねへ。［おとま］おめへも又あんまりでごぜへす。かぼちや畑へ凧をおつことしたやうに。おつにからんだ事をいひなへへす。ソゥ又穴の穴までほつて聞たくは。わけを話してきかせやせふ。［藤］しれたとよ。穴を堀るのほらねェのと。水場の施主か。堀抜井戸の地主か。聞てあきれらア。ふさ／＼しひ。［と］何がふさ／＼しひか。譯も聞ねェで腹を立なはるか。ねッから氣がしれねへ。［藤］よしてくれ。くそ落付にあやなしかけるな。面白くもねへ。こういつちやアごてへそうな噺だが。トすこし聲高に成てしやべりださふ

とする處へ。廻し方の女。南部縞の綿入に。黒と鼠のくじら帯を〆。前だれは淺黄色にすそへ貝盡しをちらし。つまさきへとまといふ字を。白ぬきに染出したるは。此男の摺ひと見へて。少し酒じみのかゝりしむらさき縮緬ひらぐけのひも。右の方へだらりと結びさげ。あたまは天神結びのすこびん。ちよびと白のかんざし。さわつたら落さふにさし。銀むねのつげの櫛横ッてうへひねり。鄰座舗のてふし盃をさげて。廊下をとび/\に來り。[お八重]エ、ぞんせへな廊下を酒だらけにした。誰だかおそれるせ。ヲヤおとまさんエ。藤さんのお声が致ますね。[藤]コウお八重坊/\。一寸來さつし。[と]お八重どんか。ちつと咄て行ねへ。[や]何で有ますそ。ちつと面白ひとでもお聞せなはいまし。ト障子を明てはいる。[藤]ぬしやァさつきどけへいつた。雪の下の箱崎で見かけたッけ。[や]ハイ今日は汐富から西川岸の方へ掛取に參りました。[藤]よくあるくせ。しかし爰の内のばァさんと稽者の目ッかち樽治か。此土地じやァ古ひもんだ。[や]烏のなかぬ日はあれどかね。藤さん此間はいつそお遠/\しふごせへますそ。定めて何方にか。[と]大有りとみへるわな。それにこつちの仕内がわるひから。どふで。お氣にやァいらねへはづさ。ト引ッからんであてる。藤はむつとすれどもそらさず。[藤]コウ一ッ呑ねェか。爰に硯蓋がある。サア/\のまつし/\。[や]イエモウ有がたふごせへますが。こよひはいつそ過ましたから。[藤]ハテすぎてもいゝわな。モウねるじやァねェか。ト一はい呑でさす。[と]てふしをとる。[や]ハイこりやァおとまさん。おはゞかりでごせへます。ト一ッうけ半分のんで下へ置。その内に藤兵衛。鼻紙袋より壹角とり出して紙にひねり。サアといつて出す。[や]ハイ是は。トいたゞいて。懐の紙ちよいとはさむ。是は此女が藤兵衛えのむしんなれども。流石じかづけにはいわれぬと故。おとまにいひかけたるとみへたり。[や]モウ/\此間は。とんと御酒がよはりました。ナンニうそじやァごせへません。モウ是で御免なはいまし。ト顔をしかめて盃をしたみ。元トのところへ直す。[と]マアいゝわな。モット噺て行ねエ。[や]イエモウみんな臥せりました。藤さん是は。おとまさんよろしふ。トいつてたつ。[藤]そんなら休な。コウあしたはいつもの通り早ひせへ。[や]ハイ/\いづれ承知のまくでございます。ハイごきげんよふ。トらうかをばた/\。跡にはふたり。何かつまらぬかたちにて居たりしが。[藤]コレさつき富貴岡の廻しが來て。手めへを階子の下へ呼出して。何か隱密に咄やつて行たのは。なんでもいつかの大智屋の傳に違ねへ。[と]おめへがあちに廻すだけ若ひわな。何もかまつたこつちやァごせへせん。[藤]ムンニヤ其譯はとつくに御存だ。ありやァ大方烏居町から乘て來る喜之とかいふ野良が來て。お定りをやらかすのだ。彼奴も又しがねへやらうだ。ナゼ男らしく貰引にわたらねェ。外の茶やから名ざしてくれば。といふ潮來文句もいめへましひ。忝くも藤さんのおよびなすつたあまつちよを。盗とかゝられちやァ面白くねへ。なんぼ手めへも枕だこの入たもんで如在ねへつらァしても。ソウうまくは

化されめへ。そりやァねェおちやつぴいだ。富澤町の朝市から。ぼろ壹〆五百に買て天道干へぶらさげる様な。古革羽織でも。こう又おれが天眼鏡で。待ェ、と一番怪られては。何がなんといふ場もなく。成程こう〳〵いふ利屈の狂言でごせへすと。嵐が立をする様に。平つたくあらわせろ。御勿躰ねェこつたが。おいらァやりてが目たく玉と婦ばゝァの胸ッ屎を根付にして。覗眼嗅鼻を緒〆に付ケ。化の皮を引ッぱひで。提たばこ入に捺て。浮世をぐつと薄色に呑こんでいるせうがには。何はどふだ。角はかふだ。附木板のへぎ残りはち。や。ちんころの舞臺になる。拂扇笥が菖蒲刀に化るの。料理場の鮑ッ貝は。やたひ店の出來合卓朴。しかも料理番のほまちになると。こいらァちよつくり。むくおきのうがちだ。サアナント世界はあかるひもんだらふ。どふだ返詞をしやな。只うつむひて何にもいわずのお牛きどりもモゥうるせェ。そんなしうちは切落へ落るとも。桟敷連のジャ〳〵はこねへ。よしてくれ。そつくりと犬のくそのねへ處へ置にしろ。たとへ左交と五瓶が近松巳來の新手をかいて。千手観音が化身して働かふが。ぴくともくふ男じやァねへぞ。なんのこつた。あきれが中返りをして。葺屋町川岸へ輕わざを出さァ。ばか〳〵しひ。

トまき舌をまじへて。りき身をならべた處が。すこししやべりあきたと見へて。暫とぎれて。ほんのこつたアエ、つがもねへ。面白くもねへ。などゝたばこを呑ながら。小音であく〳〵たいのねじめをして居る。おとまは先刻よりちよびり〳〵とあつくなるやふな水を向ケ。段〳〵と圖にのらせる工面にて。なんともいわず。あんどうのぶゆをかんざしで追かけたり。ぺん〳〵ぐさのかげぼうしを勘定したり。むだ書のいたこ節をたどりちらして居たりしが。さてこそこんたんの時刻到來と。そろ〳〵ころし文句ヲ考へ。芝居の魂すゞ紙で張た月といふもんで。上たりさげたり。井戸がへのつるべときめかける。

【と】成程おめへのいゝなはるとを聞やしちやァ。一〳〵御尤さ。けれど又わたいがいふわけをもちつとは聞分てくんなせへし。そりやァおめへあんまりお情ねェといふもんでごせへす。わけも聞かずに腹を立なはるから。【藤】おきやァがれ。いたこをじかに燒なをすな。譯もへちまもモゥきかねェ。【と】ハテそんなにしからずに聞なせへし。なんぼしがねへわたいらが様なもんだつて。相應に蟲といふ物は持て居やす。ヨシカエ。今おめへのいゝなはる。喜之さんといふ客人は。めど橋の大こくやの源さんが連て來て。初の時からしてちつとわけのあるこつて。船宿衆とも噺合に。いつそ義理だらけで馴染になりやした。それだつておめへと是程の中だから。何も外の客人へは。是程も實を盡したとはごせへせん。マアそりやァうつちやつて置て。此初仕舞をたのむにも。知つていなはる通り手も足もねへ身分

だから。客人はさつぱりなし。誰といつて相談してくれるお方もねェ。といつておめへに。[藤]なんだ。おれに相談しかけても。所詮できねへと。見くびつてしたやりくりか。ほんのこつたが。古市から新石切て。者が幾人。子供が何人。その内よび出し。是〳〵がふせ玉。出居衆がどれ〳〵。あすこの内の娘分や。爰のお針は扨おひて。どこの内じやァ火入炭團がいくついる。蠟燭油はどれ程つかふと。しがく所の穴の穴までしつている。朝は大島町のむきみ賣の出端を切ッかけ。日が暮れば白魚の篝と一所に一年三百六十日。内にねる夜を遊びと心得。夜着の半ゑりの天鵞絨すれに首筋をいため。尻の先へ猪牙舟だこのいつた男だ。是程につき合ッても心いきは呑込ねへか。こんなに安く見られちやァ。猶此腹がおすわんなさらねへっ（トちつとすれば腹をたつて。太平をならべる。一躰此男は酒によふといつでもしやべり出し。さめての後は常のごとくなれば。おとまもふだんのこと承知して。さのみおどろきもせず。機にのぞみ。へんに應じて。意味無量のかき文句をあらはす。此あくたい。すなはち女郎の腹よりなせることにて。大詰となればついに一ツのおとし穴へ落入る。はなはだおそろしきやつ也。）[と]おめへの様にばんいちに熱くなんなすつちやァ。どふもわからねへ。ぬしの心いきはどふかふといわねェでも。如在ねへといふこたァ。しり切て居やさァ。夫だつて又。こつちの心もちつとは摑でくんなせへし。こりやァわたいが遊れたのかはしらねへが。新市場の氏田屋とやらに。わかつた子供衆が有て。おめへを深く呼申スとき〻ねへ身だつても。ホンニしみ〴〵と腹も立。くやしく思ッても諸事。苦界といふもんだから。道柴の露程もおめへを恨む心はごせへせん。よもやそふいふ譯合じやァ。こんな手もねェ女に乗て。嘶てくんなはる心も有めへと思へば。いつそじれつたく。ナゼこんなしみッたれに生レて來たかと。心でわたいを恨んでおりやす。（トなき聲でもたれかゝる。[藤]も。しんめりとして。何かぼうぜんとなり。目をむしやうにぱち〳〵しながら。）ム、そんなことァ覺ねへ。また有たにもしろサ。手めへはごふぎときれいなことばつかりならべたてるが。ナゼそんなら喜之助が名を腕へほつた。イヤサどふいふ譯合でおれを出し者にする。モウ〳〵是をいやァ胸ッぱらしが澤山ある。うでをほるとも。かじるとも。勝手にしろェ。もゝんがァめ。[と]そりやァ。おめへでもねへいゝぶんさ。此ほり物のわけもよんどころねへ義理にからんで彫やしたが。是だつて根をたんでへて見りやァ。みんなおめへにつくす心でごせへすはな。[藤]ソリヤァなぜ。[と]ヘテ初仕舞を頼ッても外と違て人も多けりやァ。つい六兩と七兩はいること也。夫に又いつかちよつくり咄した。とつざんの病氣

が今にやつぱりむつかしくッて。人參の代ャ何角八兩程入用だから。年ンをかき入レてなりと工面してくれといつて來やした。ソレニおめへの方へは來年行ふと約束はするし、どふもかふも思案につきて。金故こんな不義理をするも。とつざんャ。おめへの働ばかりさ。ホンニわたいがちつとは不便だと思ひなはるなら。腹を立すと堪忍してくんなせへし。ト物思ひにうつむく。[藤]岩木ならねば。さすがに此一言にはなはだのろくなり。[藤]おれだッても。すへ始終。屁をひり合ふといふ中だから。腹をたつでもねェが。彫ものゝことはどふもく／＼いめへましくッてならねへからいふとよ。一躰又鳥居町から來るやらうが。さつぱりと氣に喰ねへよし。そふ云理屈なら。十兩が十五兩でもたて引にもおれが出す。その代にやァ喜之助ヲすつぱりと突出して見せてくれ。壹年早くこつちへとりやァ十兩だしても氣持がいゝ。ト段／＼りくつにのぼせてくれば。おとまはうぬがゑつぼへもち込ミ。心の内では舌ヲ出している。[と]そふいゝなはる程どふも其金はもらはれやせん。[藤]其はづよ。金ヲ遣はせねへつらで。やつぱり引込のがいやでもあるし。又喜之が方へのつらもたつめへ。[と]そりやァおめへ愚痴ッぽひ。今も咄た譯合だからどふも心がすみやせん。[藤]すまぬ心の内にもしばしだ。何でもすつぱりつき出すといふ證據を見せやな。[と]證據といふは。マァ此彫物をけして仕舞ふ。[藤]笑ひをかくして。そりやァどふとも勝手にしろ。しかしそいつを消すには。ろせもでもかけずは行めへ。[と]きついしやれさ。そふいわれてけしかねるものか。ト兼て用意の枕の引出しより。切艾をとり出し。色と欲とに緣切艾。あつきは女郎のつらのかわ。切火はゑん／＼と立のぼるに。おとまは是も金ゆへと。口の内には唱名ならで。十兩／＼ととなへながら。すつぱりとすへけしてしまふ。[と]ヲ、あつかつた。サァよく見なせへし。ト前へさし出す。[藤]ムヽよし／＼違へねェの眞中だ。夫ですつぱりとわかつたが。ついでにそつちの腕を見せや。[と]うでをまくり。しらきてふめんだョ。よく改てみなせへ。トはなのさきへつき出す。藤兵衞はとつくと改。枕もとの紙入より遠州どんすの金子入レをとり出して。小判五兩なげ出して。[藤]ソレまあ是をとつて置がいゝ。跡は明後日持ッて來よふ。ねしまだ用が有ならば。舟宿迄いつてよこせ。ソシテ内へも大事にしろと云てやりや。[と]なんにもいわず。只いたゞいて紙入へはさみ。泪ヲふくまねをしている。モシちつと寐なはんねへか。[藤]ムヽ、モウごうてきに夜がふけた。サァねよふ／＼。トよぎをまくつてはいる。折から隣の座鋪より友達女郎。[お角]大じまの八丈に鐵炮しぼりのじゆばん。白縮緬のしごきヲだらりとぶらさげ。匂ひ袋をいれた鼻紙をたてにはさみ。前髮とびんぎりは額口へおひかゝり。大嶋田のがつくり返しに髮がらはモゥ故いとかで。平ラ元結のじみにしばり。ぬまきのすそをぐるりとまくつて兩手でかへゝ。廊下をつまだつてひよい／＼。いたこへしやかや。あみだや。おちおば二タ親の異見でも。ほれたおまへがどうまあ思ひ切らりよかそりやむりじや。ト字あまりの二上りを諷ひながら。[角]おとまさん。あけてもよ

しか。〔と〕おかくさんか。這入ねへな。〔角〕障子を明んとすれども。がたびし／＼とつかへる。エ、じれッてへ。ナゼこんなにあかねエ。いけずふ／＼しい障子だぞョゥ。トばたアりあけて這入。ヲヤ藤さん。ナゼだんまりでお出なはるエ。恨でごせへますよ。ト懐手でひざからさきへばたアリトすわり。ぶる／＼としてしやがんでいる。其内おとまはきせるを出し。藤兵衛が烟草をついで。あんどうは魚油ゆへ。紙へちり／＼ともやして出す。お角は一二ふくくわへてすひ。あんどうの臺へはたく。此内藤兵衛はだんまりのいびきゴウ／＼。〔藤〕ム、ム、ムウだれだ。〔角〕誰だもすさまじひ。とつぴんちやんさ。〔藤〕ム、奴か。〔角〕いやだのふ。奴とはなんだへ。〔藤〕そんなら大ぼやか。〔角〕きついしやれさ。トきせるでたゝくまねヲする。〔藤〕夫でも平代團子よりは。はらぶとがいゝと。掛取ニ頼んだじやァねへか。〔角〕ヲャはづかしい。いろんなとを云なはるねエ。きついお豆だ。うつちやつて置なはいましョ。トしたを出す。〔藤〕ヲ、長い舌だ。只今舌の上へ長刀のよふな

客人をのせて。水車のごく。おしやべりを出します。コリヤ娘ョ。アイ、といゝな。氣味の悪ひ。化され客が。まち／＼して待ッて居るだらう。〔と〕エ、モウやかましい。チツト相談が有からだまんなせへし。やかましくッてならねへ。トせなかを雨方からこそぐる。〔藤〕ア、あやまり／＼。あやまつたのかんざらしだ。モウねるよ／＼。トキニお角さん今夜の客人は初か。〔角〕イ、エ。〔藤〕裏か。〔角〕ムンニエ。〔藤〕何のこつた天川やの伊吾か大薩摩の朝比名と來ている。〔三人〕ハ、、、、、、ヲホ、、、、、。〔と〕隣の部屋は誰だのふ。とんだやかましい。〔角〕アリヤアお百さんの客人さ。三人一座で。くせとして廊下駕だから。いつそ。いやがつているョ。〔と〕なんだかおそろしくしやべるのふ。ト杉戸のすきより三人のぞきみるに。曰

後堂貧客三個交席段

中座鋪三人割床にて床納ッて。いまだ女郎の來らぬ躰。眞ン中の屏風の内に坊主天窓をくびッ切り夜ぐへつつこんで。やに下りにふんぞり返り。壁のらくがきをよんで居るは。醫者の内弟子ト見へて。口チには張仲景が声色をつかつて。内證は醫躰手引草。傷寒論國字解などをそらんじ。何どもよく差出たるが性にて。切り抜覺への蘭言唐音學語などを。しツたかぶりにならべたがるくせあり。

〔片達〕黒八丈の七ツ時分な羽織に。上着は松葉色のふとりの下着に。花色はかたの帶をメ。まだ寐所へすわつたまゝで居る。

〔吐逆〕こつちらの屏風ヲひんめくつて。大あぐらで居る人物。田舍廻りの太夫か。人形遣イか。但しは茶飯已下のにるりでもうなりさふにて。まきびんの大たぶさなるいてふ。三日頃のあたま。めんちりせいらつじまの羽織は。廻しの女にあづけず。是おさとのしれやすき故也。大縞の丁子茶の上着をぬひて。すその方へ置とお納戸返し小紋の下着に。もおかの鳴海しぼりの襦ばん。不殘黒七子の半ゑり。黒八丈の帶ヲメて。なんだかつまみ喰をしている。こいつに樂屋方言のセンボをつかふくせ有り。

〔東吉〕醫者さまの玄關取次と見へて。黒縮緬の上着。定てようかん色なるべし。下着はとんだふつり合にて。さんとめの三すぢたち少々ぼろのさがるやつに。黒こはくの帶。ところ／＼はらわたのぶらさがり有り。むしやうにみる物ヲつらまへて。おもたいくちのしやれ。ちぐちなどをやらかしたがる風なり。

片達隣尾の雨雅人娼婦未至。是何の謂ぞやだ。鳴呼可嘆。腹中大ひに北山の豊心丹だ。吐逆 トキニモシちつと古い白だが。「やん」はどふいふもんだの。埒のあかねヱ。「につてん」が幽靈になるまでまだ來ねへとは。あんまり。ばか／＼しい。東たつた今廻しの「おゆき」の聲がしたッけ。呼付ケのいざ並べはどふだの。吐とゞ大詰の「そり出さう」は「がんどう」めくやつだぜ。片うさアねヱ。如斯不利時は巴豆を配劑といふ場だ。吐直に手前酒落だぞ。東モシちつと「孫右衛門」を「孫三」としてへ「せめ」が「孫右衛門入レ」此通りだ。吐ム、いゝ／＼きび／＼。雁首ですくつて呑むが居候川柳／＼。トふるひ上をいゝながら。たばこいれを出し。サア「てうけい」は有りか。東有やす。ト一服すひ。いめへましい。所詮此から／＼じやア咄合が解らねヱ。ト廻し枕を摑へて。破る程煙管をはたく。吐コウ片達さん。

ちつとこつちへ來なせへ。片達は廻し枕の四角ではあたまがいたむ故。ふとんの下へ入レて。其上へふとんヲのせて枕とし。坊主あたまは爰が妙だなどゝ。ひとりねていたりしが。むつくりとおきて。こちらの屛風へ來り。ハヽア此屛風はなんだ。妙画／＼宋紫石。沈南蘋はだしといふ画だ。こいつァ鬮取にさせる繪だわい。和漢ませこせちくらが沖だ。節分の晩にやァチト恐れるス。トキニ「せいざ」を「やつかい」に吃したせいか。スコ「しぶたら」と出てへ。が所詮モゥ幕は切めへ。ト黄色な声にてあたりをきよろ／＼と見廻し、ヲツト有り／＼こいつァいゝ。奇ゝ妙ゝ絶類な鹽梅だ。ト硯ぶたのわきに引のこして置たる。麥の茶碗物のひやつこくなつたやつを。むしやうとすゝつている。東なんだ／＼ちといき山としよふ。沙汰なしは。大キに恨だ。吐がうぎと「のせ」かけるもんだの。夫じやァ「かくやつかい」と見へるわい。片こつちの畑にやァねへこつたの。そこらはぐつとナ。ソレ俗物とかなんとか別世界にして。諸事色情は離たもんさ。ソリヤアそふと此

妓婦はどふだ。根ッから氣がしれねへ。足下は不佞が婦人を。とくと熟覧したか。おそらく醜女。彼俗に云しみッたれだらふ。東デモあいつァざらまんでもねヱが。わつちがのは首ッつきが妙だ。吐逆さんおめへ見たか。吐大キにサ。餹細工の鳥が南風をくらつたといふ首だ。片ム、いゝ／＼妙言／＼。コレ此枕を見さつし。ト吐逆が女郎は廻してなきゆへ。ぬり枕の古ひのを出してある。吐廻し枕の名代に。馴染の客へ恩に着せて。出そふといふやつだ。片ム、いゝ／＼妙言／＼甚哉滑稽の大ひなる。實に當世可恐だ。東爰の比よく紋を見ねヱ。すこしきざはりだの。金箔の古へも今斯なつちやァ霜枯の藥罐天窓。燒原場所付といふ見へだ。片ム、いゝ／＼妙言／＼。吐ドレうさァねへ。へんちきな紋だ。べちやァねヱ。どぶ漬きうりの輪切へ。どらやきをくッつけたやふ

だ。東是でもなき殺した狂言だらふネ。しかしァノつらで「こだれ」ちやァ。掃溜の地震。雪隠へおつこちた雷。といふつらだらふ。何分恐れる。片ム、い〻〳〵妙言〳〵。何ンでもソレ方便を用ひて。あいつが懸河の辯をふるつちやァ。どんなやつでもひたいへ江戸繪圖の川といふ筋を出して。一ばんひねッて見るのサ。恰も竪板へ詰り小便をするがどしたらう。吐大笑ひだ。横板へ泥もあきれらァ。片コゥ爰の內も。めんがまぶな子供はねへゼエ。そして出物がい〻なぞといふやつもあるが。おいらにやァさつぱり解せねへ。疊の酒じみと。茶のしほッぱやいと。壁の落書を見ちやァ。晝遊びのあいそづかしだ。コゥいかねェこつたが。此頃の世界をりしまさねへか。是はしらぬかといふと。吐イヽエまだりしやせん。又おめへ「與太郎」じやァねへか。

東チト承りてへネ。片話說する所は五六日以前のこと。兩三個の社友と。去る學館の歸りから。ぐつと北方へ飛ばせやした。そこでおつりきなとがあるもんだ。わつちが盃をトさしたやつはモシがふてきさ。吐ム、ありがてへ。定てサありが〳〵。片聞なせへ。床の內は初會にしては。おそらく妙手。なか〳〵九目もおかねへじやァうてやせん。そのくせ國色尤物。イヤモ至ッての佳人さ。吐ム、有がてへ〳〵。片大きにのりが來てむしやうと首をふり廻し。黃いろなこわいろが段〻と高てふしになる。此內東吉は一向てれぼうにて。なんともいわず。片達がくびをふるかたち屛風へうつるを見て。おかしけれどもわらひをかくし足をばた〳〵している。片そこで兩座面につらなる歌妓封間。こいつまた虛誕を交てドントナソレ二階中が引ッくり返りの大どん〳〵。流石の大廈高堂土佐の大仕掛を見るがごく。イヤモ愚僕大酩酊。諸事夢のご

くで閨房へ入やした。吐ム、そこでおめへの名句。確論がありやしたらふ。トしつたかぶりに挨拶はすれども。何かさつぱりわからず。さすがだんまりでも居られぬゆへ。ム、ありがてへ〳〵妙だ。ム、い〻〳〵トばかりあわせかゞみている。東吉は勿論先刻より大てれぼうにて。口の內でいたこをうたつていたりしが。東その世界もい〻が。今宵はどふだ。モゥたいくつの筋だ。吐初會廻しはとらねへ所を。むりにあがつたから。こいつは覺悟のめへだ。東お〻かた女郎やか。あんどんべやへおつかたまつて。出しッこのおでんしら菊。そばイ〳〵で。しやれてるだらふ。片但シはなめかたでも初めたらふ。東ヲ、さむい〳〵。マア一トちんぼうふり出してへもんだが。コゥとてもこふなつちやアナ。彼。ナソレ。吐ム、何か。よし〳〵片公「さくら」を出しな。トさゝやく。片こりやァおそろだ。そんならこいつから先へ。東シイこりや。三人口をふさいで見へあり。チヽチン〳〵〳〵ぐわァんー。吐此所黑幕忍び三重。片大

臣柱に松の立木有り。東蛙の啼音寐鳥の笛チ、チ、〳〵カタリ 吐 モツト「七兵衛」を高くまくりねへ。併し「ぐる」を取ッて眞裸もいゝ。こいつァ「はちや」へ「かめ」たくせが兎角うせねヱ。はちやへかめるとは質のこと也。夫でも此頃は「ごうま」だから。チト「けまん」をうめるつもりだ。がうまトハ工面のよきこと けまんトハ損ヲしたこと也。片 こいつァふり「どつしん」面白し〳〵。トのこらず丸はだかになりて。そこらあたりとりちらしたるだし物の引殘りを。らうかへ引ずりだし。夜具をたゝんでらうかのまんなかへつみ上ゲ。その上へ屏風をのせて障子を外し。東吉がかるわざのまねをしてどし〳〵はね廻れば。片達は坊主天窓をふり廻して。ちやるめらの大さわぎ。吐逆は口上の事八が声色ヲ遣ひ。皆さんさよじや見ておくれなどゝ。さま〴〵のあくザヤリあれども。くはしくはこゝに畧す。

○一躰此里にては。わるじやれ遊の人物多く。此くらひのことたび〳〵なれば。内所にてもさのみかまはず。されども餘りにさふ〴〵しきゆへ。三人の女郎もかけ來り。ヲヤ何でござへますヱ。とんだお客だヨ。きついしやれさ。などゝちやらかしても。一向聞つけずに。おどりさはぐゆへ。いびきさいちうの廻シ方。若イ者など。目をこすり〳〵出來り。お定りに女郎をしかりて。むりむたいねかし付る。そちこちする内。夜もはや明方にちかづけば。こちらの座鋪にとり紛れ。いかゞなりしや跡はしらず。

おとま コゥ藤さん〳〵。モシ〳〵。モシ。モゥおきなせへしナ。よく寐なはるのふ。トゆりおこされて。目をひらき。のびをしながら。藤 ム、ム、ア、。一ト息に。やつつけた。モゥいゝ時分か。と まだ トいひながら。たばこを吸ひつけて出し。サア。藤 取て一ぷく呑。はいふきへはたきて。サア〳〵モゥ歸らふ〳〵。と マアいゝわな。モツト しづかにしなせへ。折ふし廊下を廻しのお八重通る。藤 誰だコウ。や ハイ私。藤さん モゥかへ。まだおめへさん。お早ふござへますよ。藤 ウン ニヤ早くもねへ。下へ行たら船頭をおこしてくんねヱ。や ハイ〳〵。トはしごをばた〳〵おりながら下をのぞき。八どん〳〵。だまっているゆへ。大きな聲で。はァちイどヲ、ん。エ、ずふ〳〵しいぞ。おめへはいつでも世話がやける。おいねヱ權七さんだ。船頭八 おきて來り。なんだやかましひ。勘忍しねへ。まだ歯もはへねヱ。ト口をおさへていふは此頃のはやり也。其譯は作者にも未詳。ハイ お舟がよろしふござります。ト屏風をのぞいて。おとまさんバァ、引。トしたをぺろり。と 何ンだすかねヱ。其内藤兵衛もしたくして屏風を片よせ。サア行ふ〳〵。コレそんなら。夕べのことをわすれめへヨ。と 呑こんで居やすから。わるくはしやせん。そしておめへいつ來なはる。藤 コウトあしたはなんだによつて。ヘエ。トしばらく考へ。ム、あさつての晩來よふ。と そんなら宵泊を付てまつて居るヨ。八 ヲヤあつかましい。と エ、いらぬ世話だは。トつめる。八 アイタ、、、。まだ歯もはゑねヱ。トまた口をふさぐ。と エ、よしなといふに。トふりむひて。おめへほんとふかへ。藤 やかましい。どふともしろヱ。トはしごばた〳〵。若イ者はき物ヲなをし。くゞり戸をあける。と おさらばヱ。廻し ハイおちかひ内。トくゞりぐはら〳〵。舟へずいのり。かしあげの 若イ者 もやいをときてぐつとつきだし。ハイごきげんよふ。藤 アイ。トばかり。八幡鐘 のゴヲンと共に寺〴〵の鐘。月落

鳥啼て霜棧橋に白く滿。宵の口舌に朝直あれば。首尾を苦にする七ッ立あり。醉も不醉も悉皆是。朝河岸を漕ぐ舟の賣聲し バカ／＼馬鹿の至りにして。其傾城の心の内。明の鳥も鶏も。惡や可愛や裏表。

△前席の客心は只おのれ獨吞込すがたに。しりもせぬ穴をさぐり。傾城をかゝアにしこなし。おらア遊びに行ても女郎を遊ばせてやるのだなどゝ。高慢をはきたがる風なり。是等の類ひかく／＼として己がかゝれる物なり。よく／＼此跡幕をこゝろみ給へ。ナントもしおそろしいやつだ子。

△後座に述べたる三人一坐は。何となくむだヲならべ。しツたり自慢に氣性高く。唯通人の口まねをして。惡点をのみ樂しみとなし。寒夜に衣をぬいで延喜帝のとしなどゝふざける。是あくる日髮結床のだみそにあるべし。

晝遊の部

喜之助　しつかりとした商人のひとりむすこ。まだ部屋住のことなれば。金の都合はチトわるけれど。随分小利口に立まはり。餘りやすき遊びヲきらひ。いつも藝者の二三組も揚ゲ。諸芸きれいづくし。いやみなしに。むつくりとした風にて。女郎の持てくる客也。けふは寺参りとこじつけ。今床の廻つた鉢。

衣裝付。上田の小袖にりうもんの合着。黒手八丈の下タ着。淺黄縮緬黒なゝこの半ゑりのかゝつた襦ばん。花色の唐ごはくの帶を。ちやんと猫じやらしに結び。金から皮にりうきん金ナ物の前さげ。花色らしやの文魚形の鼻紙袋。さのみ懐大キからず。たつた今小便所から見通しへ上り。綱舟を詠ながらなじみのげいしやに出合。二ツ三ツすてぜりふ有て。廊下ヲとん／＼とはこばせて。ふとんの上へふわりとすわる。

喜　どうか雪でもふりさふな景色だの。　トいゝながら上田の羽織ヲぬいで。船頭へわたす。かたはらに。船宿のむすこ。

源　棧留闘東縞の綿入。花色繻子の帶。しりツこけにさらしの手拭を腰にはさみ。紅革いぼ結びの煙草入。角つなきの金物ヲうつたるをさげ。天窓はすがけのさきを左まきにちらし。兄さん／＼と客人よりもてる。尤。此里のならひなり。いつも喜之助と合口とて。けふものせて來り。羽おりをたゝみながら。うらの面賛を見て。

源　モシこりやァ女郎でごぜへやすね。

喜　ム、宗理に書て貰つたから。華溪に澤庵の賛をたのんだ。

源　どふぞお讀なすつてお聞せなせへ。

喜　ム、こうさ佛は法を賣。祖師は佛を賣。末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺のからだを賣て一切衆生の煩惱を安んず。柳は緑花は紅ひの色／＼か。哥にへ水の面によな／＼月は通へども心も留ず蔭ものこさず。ナント妙だらふ。おらァよつ程よく出來たと思ふ。　すこし考へて。

源　こいつァ面白ひ。ム、なる程違へごせへやせん。是はどふか。道理先生とやらの。いゝさふなせりふでごせへす。モシさつき摩利支天河岸のこつちらで。物ヲおつしやッつたのは。わつちもどふか見申したやふで。

喜　ム、ありやァ友達だが。一ト頃小橋へつき合たこともあるが。此頃は河岸をかへて町へ行そふだ。あんまりさへねェやつさ。　トはなしの折から。廻しの女來りて。お定りとすみ。船頭も網打場とはづして。跡は喜之助一人り。火鉢ヲかゝへ。灰の中へ五言絶句を火箸で書きちらし居たりしが。かたへに在ル枕の引だしの明かゝりてありければ。引出し見るに玉帳あり。ひろげて見やふとする處へ。おとまはやうじヲつかひながら來り。此鉢ヲ見て。

おとま　ヲヤ喜之さんなんでごせへす。めつたに見るもんじやァねへ。アレマアこつちへお

よこし。喜いゝわな。見せねへ。ナンダごうぎにいそがしひの。是じやァ病氣ヲ付るも尤だ。[と]よしなせへ。きついしやれさ。ト玉帳ヲ引たくるひやうしに。間より文一通ヲおとす。喜之助手早くとらふとするを。おとまはよしなせへとたがひにうばひ合ふとたんに。中よりやぶれる。[喜]ヲット妙〳〵。文がらの三の切が殘ッた。ト手に殘たる文のはしをさし上ゲて。よまんとする。よまれてはチトむづかしきすじなれば。いろ〳〵さま〴〵もがけども。喜之助に両手ヲしかれて。はたらかれず。[喜]何だかおかしくかくすだけ氣がしれねへ。トわらひながらおしひらき。

トよみ下す内。色青ざめ〳〵わつとせきくる胸撫おろし。おとまを見つめて身ヲふるわし。しばらくことばもなかりしが。何思ひけん物やはらか。[喜]コレおとまさん。しばらくして聲のふるゑを隠しながら。エおとまさん。おとまは詞なくたゞうつむいて云分ンを考へている。コウ是にやァおゝかた。ふかひ道理の有こつたらうが。モウこういふしぎになつちやァ。どふこうの譯も聞たくねェ。ガ浮世といふものは面白ひやふな。悲しひやふな。はかねへ物トハいゝながら。おれが體もこんなじやァ有ルめへと思つたが。けふの今で。愛相がつきた。モウ〳〵ふつつり思ひ切る。コレすつぱりと手ぎれいに。船宿前でつき出しねェ。ダガ去年中たがひにほつた此片腕。ホンニあんまりのろい文句だが。蚊が喰ても字のあたりは撫さすつて辛抱する。夫に引かへ此頃はそつちの腕の彫物は。とつくに消たと友達の噂。よもやとは思つても。やぼッたく改られもせず。ひよつとたき付ケられたのじやァ。見くびられるもしがねェから。だんまりで。けふ迄すました。モウこうなつちや違ねェ。たとへまんぞくで有にしろ。こつちから突消べェ。トそばに有合ふ火鉢の中より。黒煙たつかた炭ヲはさみ出し。うで引まくりて燒けさんとする。おとまはおどろき。両手にすがりて。[と]コレ申。喜之さんそりやァあんまり短氣でごせへす。マアとつくりと氣をしづめて。こつちの心もしらねェよふに。わたいがいふことを聞なせへし。[喜]やかましい。短氣もせんきも發らねェでどふするもんだェ。トうつむひて口おし泪。折から隣に大一座の廻りいたこ。○「わたしや出雲にとり殘されて男冥理につきたのか。[と]ホンニモウわたい程苦勞性な者はねへ。其手紙の入譯も委しく咄せば。おめへの腹立も休るこつたけれど。こんなに又物叓が行違になつちやァ跡のまつり定ておまへは。わたいがにくゝッて成りやすめェ。[喜]しれたことだァ。[と]それだつて。お。[喜]やかましひわい。○二上リ〽譯も聞ずに腹立さんす。夫はいちづじや。だまらんせ。〽松といふ字は木扁に公ョ。きみに離てきが殘る。[と]今更おめへヲ何しに突だすの。引のといふことがあるもんでごせへすか。

おめへばつかりを頼にして。くるしひ世叓をつかつたり。つらい苦界をおくッて居やす。又彫物のことも。ソウいゝなはるを聞ちやァ尤とも何ともいわれやせん。一圖に思ひなすつちやァ腹もたつから。とつくりとマア聞なせへし。成程つれ衆のいゝなはる通り。よんどころねェことがあつて。（トいゝかねて只もじ/\。）おめへに。けふいわふか。今云ふかと。思ひ出してもどふもあんまりしがねへこつたから。つい一日/\とおくつて。今更云ひだし悪ひこつたが。その彫物はけしやした。（ト聞よりそばなる枕追取。おとまがたぶさを引つかんで。つゞけ打にぶちのめす。）△此内始終兩人だんまり。隣り二上りへぶたれたゝかれあゑられもまれ。よごしにされて又つきだされては。何處で立ましよわしが身は。[喜]ア、是もやつぱりおれがこけから發たことだ。むせへきたねェ古狸め。雨が降らふが鑓が降らふが。内の首尾をば小女に頼んで。そんじよどこそこと拵どして出てくるのを。お袋は内に居てあんじ。おひへもたんと下タへ着て。風引カぬやふ頭巾ヲかぶつてゆきやれの。何ンのと。お悲慈にあまへてつき上り。只夢の間も通ひたく。是程迄にのろく見られちやァ。よつぽどおれもうわきなもんだ。ホンニ思ひだしやァ。いつぞや新市場の橋の下で行違ッた舟の内は。新川邊の客だといふこと。しかも手前の處へくるそふだ。アあいつもゑり元はひかるやらうだが。（ト少しときれて。）ムヽ、是もいつたつてつまらねェ。兎角不孝のばちだと思ッて。つきだされてあきらめやふ。（トきれい盡しのせりふにて。あくたいもなく余程色仕掛のしうちにて。かんしやくの思入ばかり。兩方うつむいている。）〇二上りへつらい勤もおまへを便り。夫レに邪見なこと斗リ。[と]（ひそ/\聲にて。）喜之さん。マアこういふ譯ヲ一ッ聞ねへ。たとへどんな目にあつても。わたやァ一言もごせへせん。（ト耳へくちヲよせれども。一向ふりむかず。）〇二上りへ心がらとはわしや云ながら。ひよんな苦勞をするわいな。（むりに喜之助が耳もとをとらへて。こんたんをさゝやく。按ずるに先段に述たる新川藤兵衛があらましを面しろおかしくはなし。義理ゆへつらいほりものヲけしたること。親とおまへえ心づくし。みんな金からおこつたしぎ。わたいも大躰くらうだヨと。定てさま/\のこもり句有べし。此内こつそりのさし向ひなれば。隣のまはりいたこにまぎれて。作者にもわからず。但シ此密談は諸通子の御すいもじにあらんか。）〇へおまへばかりに苦勞をさせて。わしは苦勞をせぬかひナ。へ鳥にうたはれ鐘にはせかれ。夜着にもたれし思案顔。へつらやはかなや勤の身なりや。心ないことうたがはれ。[と]アレ隣でうたふいたこの文句を聞な。みんなわたいが心だ。[喜]おきやァがれ。しれたもんだ。藤兵衛が方から金を取て。おれが名當で仕舞札を下ゲさせ。其上であいつヲつきだして見せやふトハ。なんぼおれでも心持が面白くねェ。人の實の十兩で。仕舞たつらも何のたのしみ。お爲ごかしのしよにんもいやだ。モウ/\何にもいつてくれるな。其かき文句

もおそまきだァ。〇二上りへかくのだますといわんすけれど。わしにかゝれるぬしじやない。[と]ハテそう。うたぐりなはるならば。おめへゑの面ぱれに。藤兵衛さんをすつぱりとつきだすから。跡でわたいをつきだすとも。どふともしなせェ。そふしたら腹の立こともごせへすめへ。どふで又おめへにつきだされちやァ。迚もあきた浮世だから。生ている気じやァごせへせん。〇二上りへちゑもきりやふもないわしゆへに。心つくせどあたになる。[喜]べら坊なことをいへ。その狂言の跡のでる内。金も命も寂滅だは。けふ有て翌ねへ命。去年の影物も今年の焼原。どふのかふのと一ッ寸先は闇の浮世だ。 トすこしツゝあたり文句はいへ共。先刻のみゝこすりにて。やふすはわかり。段〻と心の内で了簡してみれば。なるほどゝいふ気も付。よもやといふ迷ひも出。又かわゆいといふ情はかゝる深きなじみなれば。いふもさらなり。されども中直りの切小口もなければ。たゞやんわり〳〵とあしらつている。〇へ三味の糸さへ三筋に分る。なせにわからぬ主の気は。[と]は。ひとりしあんを極メ。のべ紙にて小よりヲこしらへ。小ゆびをゆわゑてかけ出さふとする。[喜]すそをとらへて。 コレどこへ行クのだ。[と]チットあすこ迄。[喜]あすこも変も一寸でもやるこたァならねェ。小指ヲいわへてすゞの香箱。むかしのこつた。よしにしろ。浅黄裏とは違だらふ。トさきをくゞられて猶つまらず。そろ〳〵枕もとへすりいだし。屏風のかげへくすね置たる料理場のうすばヲもつて乱れほどけし髪とり上ゲ。かきなでる間にふつつり切りて。何気なくふとんへすはり。[と]アゝ天窓がかゆい。 ト首をばら〳〵とふれば切髪ばつたりおちる。サアどふぞ堪忍して是を取てくんねエ。[喜]横目でじろりだまつて居る。[と]お心にやァ叶ふめへが。折角わたいが胸はらしを。どふぞ納てくんなせへ。[喜]いやだ。[と]なぜナ。[喜]なぜでも。[と]そりやァ近頃比興でごせへす。[喜]比興でも何でもいやだからいやだわい。ト横の方ヲ向キ眼下につこり。[と]いらざァうつちやつて仕舞ふ。そんなに。むきなとばつかり。いゝなはるからわかりやせん。[喜]うつちやる位のものだから。おしげなく切て見せたか。[と]エゝモおめへもしちッくどひ。モゥ是ほどあやまつたら。堪忍してくんなせへし。何の因果かこんねェに。ぶたれてもどふしても。しんそこおめへが。 ト喜之助が顔を泪ぐんでつく〴〵ながめ。エゝいつそじれッてへ。見ればみる程此顔がにくいぞョゥ。 トしつかりふし隣の二上りも仕舞。折と見へ二上りへぶつもたゝくもしかるもおまへ。情かけるもぬしばかり。[喜]アゝこんなに愚痴に迷つたも。此うつくしひしやつつらから。チヨツいめへましい。ト引よせて夜着へはいる。〇此うつくしひしやつつらとは。さすがにかわゆひ情にして。ナント有がたき所ならずや。かくのときあだなるかたちに。魂天外にとばすもむりならず。若き心にないせうの辛苦迄くみわけんとしては。ひくに引かれぬたて引にて。おやぢの目玉ヲぬすみ。お袋のへそくりを引だしても。初仕舞の札ヲさげさせて見たく。また藤兵衛といふじやま者もあれば。どふぞしてつき出させんと。工面にかゝるも尤ぞかし。[と]ヲヤ〳〵 いつそつめてへ足だョ。 モットこつちへよんな。アレ

あつかましひこりやァなんだェ。ト喜之助がを　てへた出し。わがもてゝ。四ッらみにと鼻。定てどこもかしこもなるべし。此ときに至ツて。〔唯雨人〕ヲ、さむい。の聲ばかりして混沌たる床。〔ぬれ六ツの鐘〕ボヲン。〔作者〕もこいつのうち。は。ヘヱヘン。

宵立の部

〔若イ者〕夜具包を肩ニかけ。片手に蝋燭ヲ二三挺持。コウお澤どん。〔女〕ふり返りて。ヲャなんだ。〔若〕お虎さんとおしづさんと口をかけてやんな。一チ坐の衆がお出なすッた。〔女〕フムこふと。今夜は二人りながら出て居なはるヨ。廻しでもよくば。舟宿衆しでへだ。〔若〕お馴染だからいゝはな。奥座で手の音。チョン〳〵。〔若〕アイ、、引。〔娘分〕しよく臺ヲおもさふに引さげて。吉兵衛どん〔女〕見通シはあひたか。〔若〕イ、エふさがりでごせへす。お初會のお三人は。中の八疊へいれ申なせへ。〔娘〕ソレお手がなるよ。〔大ぜい〕アイ、、引。ハイ、、、引。はるか見通しの隣座敷には。客〔長五郎〕としは二十七八。中さびの色男。めんうゑだのやわらか裏に。太織さいとらじまの下着。黒の半ゑりはゞ廣なるに。花色じゆすの帶ヲメ。くすべかわの半ぐつに。花色もんぱの下タ足袋ヲはき。なめしがはの三日月形のたばこ入に。くりからの金物ヲ打チ。鼠や張のきせるをひねくり。大あぐらでいる。人がらは。仕𠂤師のかしらと見へて。月代中チばへニ當世はやりの丸びたい。細いてふのさきヲ平ラなでにした處は。どこの丁場でもぐつと口チのきけそふな風なり。かゝへげいしや〔つる吉〕めりやすへ云たき心かすく〳〵の。胸にせまるを云ひ殘す。めいきくゆらすそのふしに。忘れぬ君をたゝみざん。〔大ぜい〕ヤンヤア。〔長〕サア一ッのみな。〔つる〕とんだ口早に。チトお押へ。〔長〕マア〳〵。ト盃をなげる。〔つる〕猪牙で來なさい。にたりはおそい。ヲャふさつても鯛といふ古い酒落かネ。そりやふさりました。ハ、、、、。男げいしや〔たる次〕但シめつかちの。ナ。ソレ何レも御存ならんか。是はどふだいよ〳〵お取上といふ處カネ。そこで一ッちぐりヲお肴。エ、お取上〳〵お取上名代。〔つ〕ソリャアなんだ。〔た〕千鳥糖名代ス。〔つ〕ヲャ〳〵。ホ、、、、。大ぜい笑ふ。〔た〕そんならお取上ゲの駄賃か。ソレ。ナ。カノもどりがけの駄賃。ナント新らしからふ。〔皆々〕ハ、、、、ハ、、、、。〔長〕こいつアつらい。ト盃ヲとり上る。〔女〕つぐ。〔長〕呑ほして胸ヲたゝきながら。アヽ、モウのめねへ〳〵。〔つ〕さやふならのめんの蒙りまして。一ッいたゞきませふ。ト三みせんをかゝへていながら盃をうける。〔た〕ドレ〳〵おしやく。〔つ〕コリャアおそれやす。〔た〕ナニサねしとおれが中だ物を。ネェだんな。ト妙な屖をする。〔長〕違ねへまん中だ。〔つ〕しかし目ッかちじやァあやまりますねェ。〔た〕ヲャ此子は大それたとをいんなんちやからか。とつぴんちやん。〔長〕又おかぶの唐人か。〔た〕ヲット夫はいわずかたらず。ナ。〔つ〕へわが心チ、チン〳〵チかね。〔長〕コウたか公ぬしやア。湯島の時分からみるのに。いつもかはらねェの。そこの身振は二丁町にも有めへ。〔た〕イャ是は恐レます。此内盃事にてげ

いしやのむだ口さま／＼あれども。お定りなればこゝに畧す。△とゞつる吉はつぎざほをはづして。三絃箱へ入レ。鄽下へつき出し。[二人]さやふなら御機嫌よふ。[つる]モシおとまさんは廻しでごせへますかヱ。[長]ム、又から／＼だ。[つ]ヘヱそりやおさみしふごせへませふ。[た]モシとかく女は氣がつさますぞ。トすてぜりふにて障子をたて。皆／＼かへる。[長]みんな休ねへ。▲此客一跡工面はわるけれども。此頃は子供や泛せく噂あるゆへ。女郎おとまがやせがまんにて。ひとめんくのげいしやヲかひ。或はほうばひ女郎をおたいこに買せ杯して。内の目をくろめる。是皆おとま壹人りのやりくりなり。○かくて八幡のいりあひに。こぎよする舟。もどる舟「ヲイかはらねへ／＼の聲。くゞり戸の音と共にかまびすく。神棚の十二燈はりこのしめ繩にかゞやき。ふせだまの子供。帳場のわきに居ならびて。耳ッこすりをすれば。口チのかゝる積者。はしごの下タに。しやがんで。音メヲ合せ。娘分ンのおつれまふしなは。聲と裾とを。内中に引ずるも。早よひどまりの床納て。五ッの拍子木カチ／＼。[長]五郎酒はねヱか。[おとま]よしねへ。[長]ナぜ。ひさしひもんだ。[と]毒だといふのに。[長]ばかァいやナ。好な酒をばやめろじやないが。茶椀酒をばやめさんせといふいたこがあらァ。夫だから俺ァ。ぐい呑はしねへ。てめへこそ時ゝ癇癪で青るじやァねヱか。[と]ヱ、きついしやれさ。[長]まだ歯もはゑねヱ。[と]よしねへ。いゝきせんな。[長]ナンダあんまりしかるなヱ。此頃は久しくさがらねへは。[と]しれたヿサ。誰さがりを承知するもんか。コレよくこんちう裾研へ行たの。[長]フウ。ウンニヤしらねへ。[と]ナニしらねヱヿが有ルもんか。隠なはんな。よくしつているヨ。トこそぐりかゝる。[長]ア、あやまつた／＼。ム、ありやァなんだァ。ヱ、なによ。友達のつき合で。せふヿなしに上嶋へ行たのだ。だがかな棒ひいた。[と]誰でもサ。ほんにむだァのけて。此頃も子供屋のおばさんがしみ／＼と異見したよ。夫レだつて又。人の異見をこはがる位なら。こんなにはだかに迠なつて。是迠おめへを呼とげるとはならねへはな。どふするもんか。かふなつちやァ。わたいも意地づくだから。たとへくらげへされるッても。離れやァしねヱ。いつぞやも何やかや。あんまり考たらば。いつそ氣色が惡くなつたから。用事を付て引込で居やした。そふするとモウ爰の内を始。なんのかのとやかましく云ふし。モウ／＼何ンのヿも思はねへ。なぜこんなにはかねヱやら。何角に付ても此頃は。一日も早く行たくッてならねへ。まだも便になるのはお巻さん斗りだァな。ホンニモウあの子は兄弟分とは云ながら。いつそ情があるよ。トしんのはなし。[長]は始終ふさいでだんまりなりしが。[長]たばこを吸付ながら。愚痴なヿヲいやな。てめへらしくもねへ。どふするもんだ。よしんば又ゑこぢなヿをぬかすがさいご。やてへぼねをたゝませて。ばつたこうろぎの寐處にして。女郎の有ッた古跡には。ぺん／＼草にかやつり艸。角力取草。女郎花の花の盛を見せてやる

べヱ。〔と〕アレサ大きな聲をしなさんな。トしかられて少シ小聲になり。〔長〕何をいふも借だらけだから初らねへ。そりやァそふと。こんちう頼んだことをどふしてくれる。いつか中の櫛としのぎも。色〻面工して見たが。てつこにおいねヱから。漸〻利上でくゝり付た。アヽなんにしろ今年は初中ひつてんだから。さつぱり出入はできねへ。〔と〕其事もわたいが吞込で居るョ。それについてはなしがあつたつけ。おめへもしつてる。ソレ新川の客人の。〔長〕だれ。〔と〕ソレ藤印さ。〔長〕ム、あいつがどふした。〔と〕此ごろ内度〳〵くるからいろ〳〵とつうくつしてノ。マア耳をだしな。トさゝやくいふ聲ばかり。〔と〕ノ。〔長〕ム、〳〵としばらくして。〔と〕トいふかたちだから漸〻五兩トソシテ外ニ壹兩貳分もらつたが。此頃は金八どんが居ねへから。おめへのくるのを待ていたョ。是でどふぞ借方をちつとづゝもなすやふニしねへきやァ此すへおめへの所へ行くッても猶つまらねへじやァねヱか。〔長〕ム、そいつァ。面黒い。そいつが有りャアよつ程いゝ。實にモウ此恩はわすれねへ。〔と〕恩も何もいらねへ。こりやァする筈のこつた物ヲ。しかしおめへ早吞込だから氣になるョ。夫を又むだ遣ひニしなはんな。命から二番目と云ふ金だによ。〔長〕べらぼういふな。うはきらしい。コウトあいつが所へ是と。ム、。こふだから。此たらず前は。又こつちに。さんだんがあらァ。いゝ〳〵。少し考へて。是からト。あげさげヲして皮羽織を引ださにやァならねへ。〔と〕おめへ有ルじやァねへか。〔長〕アリャアふだん着だ。〔と〕そしてまだ鳥居丁から來る客人にも。チットばかりあてゝおいたが。コリヤアどふも初仕舞の客だから。ちつとしにくひ。〔長〕でへぶいゝ鳥がかゝつたナ。何か喜之とやらか。畜生めヱ金持にやァ何がなる。〔と〕貧乏人にやァ何がなるだ。ホンニおめへかゝさんの病氣は此頃はどふだへ。〔長〕まだよい〳〵だァ。わりい時にお袋の病氣だから。一チべへ鹽梅しきがわりい。〔と〕おまんまは能あがんなはるかヱ。〔長〕ム、ちつとづゝ喰るそふだ。〔と〕そふだじやァねへ。おめへもちつと氣をつけなせへ。内には誰を付ておきなはる。〔長〕ム、やとひばゝァをしてもおんなじこつたから。丁場へ出た跡にやァ。瘡をかいてる野郎共や。建前からおッこちた居候や。何角にあてがつて置から。どふでろくなことはしねへのさ。〔と〕夫レじやァさつぱり氣が付めへのふ。〔長〕ナニ氣がつくもんか。こつぱげんくわをしちやァ酒を喰ふとばッかり考てらァ。〔と〕それについても。早くおめへの所へ行てへョ。こんな時が女房の役だのに何をいつても金にかはれた身の上だから。しがくの仕様もねへ。正直わたやァ

實のかゝさんのわづらふよりは。氣になつてならねヱ。あつちこつちを思つて見ても。おめへもチットおとなしくなんなはらねへきやァすまねへョ。[長]ム、おれも禁酒でもしやふ。[と]アレそふいへばそんな堅ひとを云なはる。何も夫程にせずともいゝはな。[長]てめへがそんなにあんじて呉るに。おらァよつ程不孝もんだ。けふ此頃はおれが氣でもつまらねへやふだ。ア、いつそ。早く死がましだらふ。トうつむひて大きにふさぐ。[と]こうしていろんなとを思ふせいか。常不斷おめへの所へ行た夢を見るョ。ト是もふさぎて。しばらくとぎれる。[長]ア、ふさいだ／＼。ふさぎの蟲や赤蛙だ。おれもモゥお袋がせふちだから。早く早込せて見てへ。[と]きげんをなをし。そふしたら。いろんな人が來て。喧嘩ばつかり有だらふの。[長]何ンのきついとが有もんか。喧嘩をこはがつて。おいらがかゝァになれるもんか。眉間へ三寸とびぐちをぶつ込んだの。出刃庖丁で。どてつ腹をゑぐるといふとは。馴ッこになつちやァ屁とも思はねへ。ア、モゥねよふ。[と]ホンに頭になるのも附合のうるせへもんだ子。いかねへこつたが。おめへ日なしの口はどふかたづけた。[長]だまつている。[と]顔をのぞいて見て。ヲヤおめへねなはるか。起なせへし。トせなかをつめり上る。[長]よせヱ／＼ゆんべ親分が所で。子方のやつらが中直りをしたから。よつぴてへねねヱ。[と]いやだョ情のねへ。まだ咄が有ルから。ねかしやァしねへ。トゆすぶれどもしやア／＼としている。鼻ヲつまんだり。わきの下ヲこそぐりたり。いろ／＼して横にねかさぬじやまヲする。[長]コレおがまア／＼。ちつとねかしてくれ。今夜はなをさア。[と]直す工面があるか。又こつちかぶりだらう。[長]しれたこつた。[と]夫だから。なをねかさねへ。[長]そんならどふとも勝手にしろ。トうしろを向ひて脊中合。ちわをする間も早四ッの鐘。[船頭]ハイお迎ひでござります。

朝直の部　宵泊の部

追而後編ニ奉入御覧候。趣向は出來あれども。丁數余れるをいとひこゝに不レ着。

[作者曰]予おとまが出所をかんがみるに定て本所邊りの片はづれに。御日印青紙のと刷毛書の水油有りの障子ヲ立たる。九尺店のろじ口。本道外科と割て書たる醫者の表札。さんげ／＼の梵典と共に。雨晒となり。屑家葺の棟割に蛇の這出る流し元。大やさん鐵棒ヲ引きずり。火の用心ト觸れば。隣りの飴賣向ふの神道者に雇はれ。はつち坊主の木魚。花賣の火打筥と朝飯を爭ひ。神儒佛もみ込の大長屋に住む親仁といえるは。屑ワイ／＼に

その日を送り。夜はよもすがら。おでん白菊鹽梅よしも。内の工面はあんばいわるく。母親の賃仕事も。お花荒神松のりやの間を見合せ。いとけなき時はめけたらたん切大ころばしを口にほふばり。南京小紋ニ鳴海絞りのつぎ／＼。油揚のどきを引ッぱり。うどんやの汁つぎをもつて。醬油を六文。壹文の糠袋。ふすま磨きの小むすめなりしも。十五といへる春の頃。親仁が中風の爲に。終には金にかへられ。抑成長てひらぶとの半ゑり。縮緬の二布錦／＼たるといへども。心は生來をうしなはず。先に著したる新川の伴頭。鳥居町の息子株を廢して。かゝる貧困の俠客に實責を盡す。是なるか。非なるか。嗚呼是非もねへ。實や。色は思案の外とはいへど。迷ふといふも。悟るといふも。色道の識不識に可依歟。世界の通君子。ソレさつ しておみなんし。

石場妓談 辰巳婦言 大尾

跋

式亭主人戯作の力任に。古石新石を穿。是を新手に持て。土題となす。僅石などの玉。ふせたりと雖。礫にうてる座鋪もなく。將投らるゝ床だに非ず。されば間夫に盡せる實情には。望夫石をも輕石と安んじ。「コンコヽリキ「マカリキの古へならで。方言能通じ合へるは。鸚鵡石の潜るかと疑ふ。眞の咄の効じては。夜啼の

石も珍しからず。髪の飾の風流なるは。赤松仙が羊の手際か。何にもせよ。未一部の砕も不知。猥りに玄能を打振り。唯野暮にもてるといふ而巳をもて。五十五貫目。内一巻中ッ腹にしるす亥しッかり。

純ミ亭主人
祭和樽述㊞

羽根なくして百増の猪牙。魂と共に虚空に飛び。手無して凝夫。克傾城をあやなすとは。是銭術の徳ならんか。這箇先生。ぶら提灯の光を以てゆふしけふしの日牘を探り。妄言の趣向をかきがら道。おもひ辰巳の古石を見

羽根なくして百増の猪牙に魂と共に虚空に飛び手無して凝夫克傾城をあやなすとハ是銭術の徳ならんか這箇先生ぶら提灯の光を以て由ふしけふしの日牘を探り。妄言の趣向をかきながら道おもひ辰巳の古石を見て其洒落を責。新地の端に稽古

通す。其洒落たる叓。新地の端の棒杭に等しく。予も又此書の一座に加り。チョビとおんぶの跋文を認メ。即三馬子へ贈り申ス叓しかり。

式亭門人

樂山人馬笑㊞

予も又此書の一座に加りチョビとおんぶの跋文を認メ即三馬子へ贈り申ス叓しかり。

式亭門人

樂山人馬笑

辰巳婦言後篇　通俗通　近刻　小本一冊

[illegible]

傾城買嘘の誠　近刻　中本一冊

[illegible]

表紙	ヨコ	三寸五分
	タテ	四寸九分
本文枠	ヨコ	二寸九分
	タテ	四寸一分

序

孝行に賣れ。不孝に受出されとは。實に川柳点の妙なるかな。虚と實の中街。通と不通を汲頒て。意氣路を磨く心の駒下駄。いやな風には蹴出シ褄の外八文字。ふるも有

序

孝行ニ賣レ不孝ニ受出されとハ。實ニ川柳点の妙なるかな。虚と實の中街。通と不通を汲頒て意氣路を磨く心の駒下駄。いやな風にハ蹴出シ褄の外八文字ふるも有り又照ハ、

り。又照とは茶屋が軒端の燈灯か。其蝋燭の流れの身。辛氣辛苦の苦界十年。たとへ一文が鐵醬を買ふとも。豈千金を尊しとせん。てれん手管の長文を見世雅裥の音色に連て。通ひ廓の裏茶樓まで。

茶屋が軒端の燈灯の。其蝋燭の流れの身。辛氣辛苦乃苦界十年。たとへ一文が鉄醬を買ふとも。豈千金を尊しとせん。てれん手管の長文を見世雅裥の音色に連て。通ひ廓の裏茶樓まで。

娼婆もおよばぬ穴を探して。酔を味はふ梅暮里谷我子。嗚呼其才の高きことゝ。水道尻の火見櫓も足下に低く。筆頭の走れる事。南一の罾駕も遅しとせん。不佞此書の伴頭新造となり。惣菜の芋

を喰て。屁の如き序文を作し。謹でもつて。一寸マアお見なんしとしかいふ。

于時寛政戊午春視初衣裳日

於嘔囉哩樓上

京ばしの

息子

喰て。屁の如き序文を作し。謹でもつて。一寸マアお見なんしとしかいふ。

于時寛政戊午春視初衣裳日

於嘔囉哩樓上京はしの息子

傾城買二筋道

序

智者にも。一失あれば。愚者の一徳あり。加賀絹の弱も。薩摩布の強も。または御姆の棚尻も。脊負に。利あれば。捨がた

傾城買二筋道序

智者尓も。一失ハ禮ば。愚者乃一徳あり。加賀絹の弱も。薩摩布の強も。また八御姆の棚尻毛。脊負り。利あれバ。捨がたく

く通子の云。遊冶郎(おとこ)の乖功(ゆきすぎ)は。醜夫(ぶおとこ)の温柔(うちは)にも。猶及(およば)ざるがごとしとは。宜(むべ)なり。人は只心のやさしきこそ。尊(たつと)けれと。不佞かつてを書事(かくこと)

通子の云。遊冶郎乃乖功は。
醜丈夫温柔ふも。猶及ざる
がごとしとは。宜なり。人は只
心やさしきこそ。尊け
れと。ふ佞かつ川くを書事

しかり
午のはつ春
梅暮里谷峨述

志かの里
午乃はつ春
梅暮里谷峨述

史記
南齋書

雪華画

目録

○夏の床

○冬の床

ミしこの秋に
往よ紀笈の　谷峨
盡う事

傾城買二筋道

谷峨作

〇夏の床

世界は小見勢。客は廿五六のそつぺいのなきいろ男ニて。惚どころなきほど己惚の末至通。尤地廻り同前。逢方は二十一二。たいていはうつくしく。はなはだうわ氣まんさらでもなき四五會め。

水調子てへ合めりやす夜半の短かはよけれども。おもふとのごと添寐の。ふしに口ではいへどしんじつの。中を隔るあつさの垣ね。又にくらしいあの蚊の声。とこよりをとつて。かやのかを焼つ。やかれつ。うわき同士。とりどころなきなつの床。チヤンと引仕廻。〔須磨衣〕いつそぬしの声はいきだよ。〔五郎〕声斗ほめづときみやいもほめてくりやァ。廣小路の十哲のうちでは。顔淵といふものだせ。〔須磨〕何のこつたへ。〔五郎〕いゝやよ。ふでかしらだといふ事よ。〔須磨〕ヲャむづかしいものだね。百さんとやらもいゝ声だね。あれもなんぞといふのかへ。〔五郎〕なァに。しかし。そふ声できゝ知られては。百もいろ男だぞ。〔須磨〕そりやァぬしたちのよふに入こんでおいでなんすものを。だれでも知らぬものはおつせんのさ。おふかたぬしもそこいら中がいろとだらけも。あいそうの盡きたもんだぞ。じらさづとも眞においでなんすところを。今日はあかしておきかせなんし。〔五郎〕そんなにてまへに氣をもませる事はねへから。話してへかゞ。ほんに此頃はちつといろとがしげ〳〵だ。そのかわりに内へかいると。お袋の小どがある。かつぶし一本でもらう氣はねへか。〔すま〕ヲャ猫じやァあるめへし。勿體ねへ。ばちがあたりいすにへ。そしてほんのかゝさんかへ。〔五郎〕ほんのでねへと。今頃はおさらば迯んふせいなりだ。〔須磨〕よふむだをいゝなんす。口のはたをつねりいすにへ。あれきざな。また人の顔をみてわる口をいおふとおもつて。〔五郎〕わる口はいわねへが。まあ手前はいくつだ。〔須磨〕あてゝみなんし。〔五郎〕まづ手前いくつの時うられて判はたがした。〔すま〕でへぶむづかしいね。ハイ十三で賣れて親判さ。〔五郎〕十三で賣れて親判なればかふと。指ををりながら十三。十四。十五。十六。此四年ははなせねへから。跡せうみ十年六兩づゝめぐらいな女だが。子がいだけねんいつぱい十五兩か。〔須磨〕歳をあてなんすとお

もやァ。［五郎］おつと氣のみじかへもんだ。こゝから割出さねへけりやァ。きつい所はあてられねへ。まあそつちを向いてみせや。［須磨］わつちやァいや。［五郎］瘦地にして髮うすく。枕だこのいつた處まで。よくふんで廿三で御不足なら。おてまへにおゝきなさる方がおとくよふだ。［すま］むごひ事ばつかりいゝなんす。ほんとうわね。深川にいゝした。［五郎］なに深川にいた。どふりで。［すま］人がわるいといゝなんすのかへ。［五郎］イヤいきだといふ事よ。［須磨］あのうそばつかり。ほんにいやとおもふ客人は。腹いたつほど心がしれる。またなんとかおもふ客人は。と此處しばしかんがへて。じれつてへもいだ。とかんざしにてあたまをかく。［五郎］コヲもちと手をあげてみや。何かあるせ。［すま］わつちやァいや。［五郎］いやじやァ不承知だ。とむりに手をあたゝめる。［すま］まあまちなんし。ずいぶんみせへすが。人の名をきく時はわが名をなのるとかいゝすから。まあぬしの手から見せなんし。［五郎］それを覺へるに本屋をいくら倒した。［須磨］しりいせん。［五郎］さあみや〳〵。おらが手にやァ。そんなやぼはなしだ。そこへいつちやァ。高麗やでむかふにばかりさせた。さあ。これからは手前の手をじんじようにみせや。［須磨］見せるのさ。サアみなんし。とじしん手をまくりみせるは。まんざらでなきゆへ。かくたんといふところなり。［五郎］まあ。こりやァなんだ。貧乏寺の過去帳ははだしだ。是を見ては。［すま］三年の戀もさめるかへ。［五郎］はらがたつ。［須磨］なぜ。［五郎］はて。こら程あるうちには。まだ心の殘つているのがあろふと思へば。［すま］こふ見せもふすぐらひじやァ。たとへどふいふ事があろふとも。ぬしの心いき次第で。どふともしいすのさ。疑りなんすなら。何でもしいせう。又客人をつきだせなら。ぬしの不承知な客人はつき出しいせう。［五郎］ばかな。とがもねへ客人をつき出す事もなし。また指切髮切でわかつたとおもふは。むかしの事よ。［須磨］そして。どふすれば心がすみいすへ。［五郎］そんなら一番はやい事をいおふ。［すま］なんだへ。［五郎］金をかしてくりや。ヲイびつくりしめへ。［すま］そして外へ持つてくのかへ。［五郎］いゝや。外へは持つてかねへが。まあ手前どふいふめちかへで呼かしらねへが。おれだとつて金がありあまつて遊びにきやァしねへ。とんだ内は火の車だけれど。手前が水車のよふな口車にまよつて。あき車が坂をおりるよふに。了簡もなく來る氣だか。爰だよ。それ。おればかりおもしろいめをして。お袋を日干にもされねへわな。尤手前が勤ぐらいは。たて引をする覺悟でもあろふが。それじやァまあ當分こられねへといふものだ。また手前もじつに

呼氣があらば。そのしのきを二三本かしてくりや。そふすりやおれもあふきに內も出よいといふものだ。また手前の心いきもすつぱりわかりやす。これ。なぜだまつている。不承知か。何もその様に。茶碗をわつておつけてみよふといふ顔をしている事はねへわな。またおれにかぎらず。手前のよぼうとおもふ客。はちつとは地切をきらねへけりやァならねへ。それともあたまのものは借物なら。あすの晩までに壹兩貳分ばかりかしておいてくりや。これだまつているはできねへか。［すま］そんなら。ぬしは欲得づくだね。［五郎］できざあいゝが。手前もたゞよぼうとは餘程むしのいゝものだ。少しぐらいはどふか算段のありそふな物だ。

まだなじみもうすきに。あまりのいろ男に。逢方あじな氣になり。たがひにしばし話もたへ。たばこに程なく夜もしらみ。歸りし跡にて。傍輩の評もよからず。引かたと心づき。そこ爰のあらが見へ。あふかたこれはまき直しと見へたり。またつくる

夜のむしあつさに。

［五郎］コヲなんだ。そわ／＼と何をしていた。また八重がりのやりくりか。［すま］きついきいた風だね。［五郎］燒つぎの火かげんのちがつたよふに。そふ。ひんとする事はねへ。マアねやな。今夜はすつぱりおれが心いきをはなして。安堵させてやろふ。［すま］あんどさせるへ。あんどたァ燈をともす物かへ。［五郎］コヲおつにはぐらかすが。おれがいつた事ができねへによつて。いゝわけなしの我慢だな。ハテ出來ざあきいた風をせずと。生得はたらきのねへむまれつきで。三文のくめんもむづかしうござりやすと。しらでいふほうがいゝ。大道で藥を賣よふにのみこみすがたをいつても。せうが入れ智惠といふものだから。人形芝居の太刀打を見るよふに。小サな袖から大きな手がでたり。なにかするから。ねつから不都合だ。なんぼ水犬のとやといふ前髪をきつても。めんびろふどのふるきんちやくを見るよふに。地がすいてへんだぜ。それで耳のはたまで口がきけると。智惠のねへ所をとりへに。ふきや町川岸へやるといゝ錢もうけだ。［須磨］わつちもいゝ錢もふけをおしへておくんなんしたから。氣が丈ぶになりいした。まだ智惠のできるには。ぬしを黑燒にしてそれをのんだらよかろふがね。どふぞ智惠をほしうござんす。そふするとかわいゝ男にやァいきなりでもさせてよんでやりいす。［五郎］何。いろおとこ。手前のいろ男はどんなだろふな。たしかにりうぐうの使はんといふもんだろふ。其心はもちがすきだ。尻こだまをぬか

れねへよふにしや。［すま］ぬしは見かけによらねへ。いつそ苦勞せうだね。いゝかげんにしなんし。年がよりいすにへ。［花園］すまきぬさん。ほち／＼でいながら。いゝかげんになんしよ。（隣座敷よりしらしをいふ。）［すま］ヲヤいやよ。それでもね。はじめは少しそうだつたがね。もふもふ大ちやき／＼さ。［五郎］なんだ。此すりこぎめら。うぬらにほち／＼のちやき／＼のと。鼠が米櫃をかぢりはしめいし。なんぼ玉屋のせりふを小耳にひつはさんでも。うぬらにかきまわされてなるものか。いゝかとおもつてほち／＼のちやき／＼のと。とふもろこしか。冬ならさつま芋を賣といふ。こんな貧乏屋台にやァにやわねへ。よしやなまあ。全体てんぼうをあつかふよふに。こしからめくされ錢じやァまにあわぬ。五郎殿なぞと取組ふとおもわば。千手觀音へ塩だちをして。むとりを三年ももみ。三谷の毘沙門から百足を後見にたのんでも。まだおかつたるい。［須磨］それだから。とり組ねへからいゝじやァねへかへ。［五郎］（ぐつときて。）よふ口かうじやをいふあまだ。［須磨］まだ出世の身だよ。あまもお慮外だね。［五郎］なに出世もきがつよひ。火口売のてんびんにおからのつへで。地ごくえとうしみをうりにいかふといふつらでもか。あふかた手前の寺證文にやァ。あやまつて手はきりんしたゆへ。手はござなく候とかいたろふ。［すま］ぬしはまた代／＼一向な仕打の者にまぎれござなく候かへ。［五郎］なんだ。此女はわるくしやれるぜ。よしやたとへ。惣菜のあらめに百が梅漬を食つて。五町まち中へ黒飛の糞をたれても。はりあふ事がなるものかへ。盲蛇とはわが事だ。五郎さまなぞのまへでは。ちつとはしよげそうなものを。おさき眞闇でしやれるが。おれを知らねへけりやァ。耻のよふにおもふ世の中だ。手前らがよふなやぼとばけものは。箱根の御關所でとふさぬはづだがさ。［すま］ヲヤこわいのふ。花園さん。おきゝなんしへ。やぼから化ものが出いすとさ。いつそ氣味がわるうござんすよ。［五郎］こんにやくの幽靈が。ところてんのお傳馬にのりはしめいし。そふぶる／＼する事はねへ。ばけものがこわいのか。そりやァ氣づかいしやんな。手前のかほが化ものとあいかうといふ物だから。むかふでゆびをくわいて逃るわな。ほんの人間のふりをして。あだにおもわぬがいゝ。おれなればごそしんぼうして。五六たびもきてやつた。もふいろ男のよびはじめのよびおさめとおもや。跡で泣てもわめいても。とりあげはねへせ。［須磨］ほんに主のよふな客人が來さつしやらねへと。力がおちて。あしたから役所

へも出られづ。ほんにかなしい事だぞ。泣てへけれど。なぜか泪がでへせん。泣れるか。小便にでもいつて泣てみよふ。と

平氣に出行ば。残念にもまたせんかたなく。意趣をせんとはおもへども。毎夜素見のじやまなれば。今はむなしくとろ〳〵と寐入しが。ふつと目覺。白壁土藏へ月のあたるを夜の明たとおもひ。さもいかつげに若い者をおこし。戸をあけさせ表へいづると。犬わん〳〵〳〵。

〇冬の床

世界は大見勢。客は三十一二。甚ぶ男。脊中に縁のある顔なれども。万事いきにして如才なき通人なり。逢方は中三。としは十七八。きりう風俗。小町もそつちのけにて。一休發明にて。張強。情深きなれども。まだとしわかのおぼこ氣にて。此客を嫌ふ事いわんかたなし。折節隣座敷にて藤吉がめりやす。

〽合雪の夜中のつめたくて。しよては隔てゝいつとなく。枕と枕顔と顔。いじのわるさの透間から。あれ邪間をする夜寒の風と。ゑりと〳〵をかけ合おふて。勤も戀もうちこして。實こもりし冬の床。チヤンヤンヤ〳〵。一重氣散じなものだの。コウくれはや。またたれか筆をもつていつたこつたぞ。おふかたまた外山さんだらふ。はやくとつてきや。茂葉あのね。外山さんがおすせいす。ごめんなんし。つい急にいりいしたによつて。おかりもふしいした。おありがたふおすとさ。一重きついふしやれよふだね。といゝながら。どうかきたてる。あんなぜ此灯はこんなだのふ。すゞり引よせ。むだ書する。客文里どふぞしたか。一重どふもしいせんのさ。文里それでも。おかしな顔つきだぜ。一重生れつきでおすものを。文里そのよふにいわづとものとだらふ。マアあいそづかしをやめて。一ッ呑はどふだ。氣がはれよふぜ。一重わたくしはなぜか。人にものをいわれると。腹がたつてなりいせん。ごせうだからちつとものをいわづに居ておくんなんし。文里こりやァきついぞ。成程十七八の時分はおかしくもねへ事に笑つたり。なんでもねへ事にはらをたつものよ。まあ〳〵どふとも氣儘がいゝ。しかし風をひかふぜ。羽織でも着ていればいゝ。

いたいけにいわるゝ程。猶はらたてどもあたろふしまもあらざれば。我と我手に書く〆の。かきそこのふは筆のとが。とがなき紙を引裂て。硯にあたり立いづる。折からこれもよび出し中三。一重が姉女郎九重は。障子をあけて見て。おやといつたばかりにて。跡を振かへり。廊下をと

ふる胡蝶をよび。
[九重]こんな〳〵。よしのさんに。文里さんがおいでなんしたから。お知らせ申しいすといつてくりや。[文里]おいらん。さあ〳〵待かねていた。きついいそがしい事だの。[九重]なァにマァなぜ此頃はおいでなんせんへ。晝もよしのさんやたれかと。噂をしていゝした。おめへさんこそいそがしいこつたね。[文里]ソウサおれもいつそなつかしかつたけれども。浮世のよふにせめられて。こになりそふだわな。
折しも。胡蝶のしらせに。ほどなくこれも心やすき中三。
[吉野]ヲヤ文里さん。よふおいでなんした。なぜ久しくおいでなんせんと。みんなと待ちかねて噂ばかりしておりいした。ほんにわつちとした事が。いふ事ばかりいつて。九重さん。よく知らせておくんなんした。マアひとえさんをきいておくんなんし。幾度も逢ながらしらねへ顔をしておいりいすわな。[九重]わつちにさへだんまりさ。[文里]ほんにうそにもその様にいつてくれるから嬉しい。ほんに友だちとよると。おめへがたの噂ばかりしているよ。[よしの]わるくかへ。ごせうざんす。[文里]おめへがたを悪くいふと。罰があたるわな。[よしの]堪忍なんし。また文里さんのせじがはじまつた。サァ久しぶりであげいせう。[文里]まづおせへにせう。[よしの]そんなら。九重さん。おあいをお頼もふしいす。[九重]ひとつたべいせうね。こんな櫻野うつかりなもんだの。此度さかづき出す。禿はんぶんついでかほを見ている。いゝから一ッつぎやな。[文里]おめへがた。どふゆふ縁か。こふ心やすく。みへもすてゝはなしてくれるから。なんぞおめへがたの好きそうなものをと考へていゝつけてきたが。アノ忠七はもふ持つてきそふなものだ。[九重 よしの]そりやァ楽しみでざんすね。間もなく茶屋男忠七はいろ〳〵もちきたり。座敷せましとならべる。[忠七]あふきにおまちかねでござりませう。あいにく客人がおちあいまして。勝手がとりこみ。おふきに氣をもみました。[文里]よし〳〵。まあ一ッのまねへか。[忠七]まづあとの物をもつて參つて。ゆるりつと戴きませう。とそう〳〵出行。[九重]よしのさん。今のおあいをあげいせう。[よしの]文里さん。あげもふしいすにへ。とうけほす。[文里]肴がきたからまづおゝせへだ。[吉野]わつちやァいや。いゝむしだつけね。[文里]のめるくらいならあこぎはしねへが。こんやは酒の匂ひをかぐもいやだからさ。[吉野]そんならまあもふ一ッうけいせうか。何ンざんすね。[文里]ふさぐからさ。さァ〳〵おれに構わづとたべてくんな。[よしの]そりや悪うざんすね。あのひとへさんはどふしなんしたね。[文里]いま來よふわな。[九重]それで

もかんじんの。と立そふにする。[文里]そふいつて迯よふとおもつて。[九重]きついわる氣だね。今夜はよしのさんも。わたくしもてうどいゝからおひ出されるまでおりいす氣さ。[文里]さあそりやうれしいが。一ッかゞみに二ッ顔じやァねへかへ。[九重]うそはきらいさ。[文里]そんならたべてくれねへけりやァ氣がすまねへ。[九重]文里さんも少し。[文里]わつちにかまわづ/\。[九重]なせだのふ。

扨此二階中甚よくおもわれて。皆心やすければ。くるあればかへるあり。障子越に言葉をかけるあれば。とつちりと咄す有。まよにみへもなく。かざりもなく。傾城もがくやは只の女にて。爰にいろ/\あれども。こ繁くまたあからさまにはあらわしがたく。ごぞんじのお方はたいがひにごさつしと略す。跡に四五人殘て。[初瀬路]文里さんはなせたべなんせんへ。[文里]なんにもいやさ。[あすかの]ほんにいつものよふに元氣もござんせん。どふか顔のいろも惡いよふでござんす。[よしの]むりに一ッのみなんしな。[文里]どふぞあやまつた。[九重]まあァノひとえさんは何をしているこつたね。[文里]ハテまつうちが花。またるゝがつぼみ。ひらケぬうちの樂しみさ。[九重]それでもあんまり。とたつを引とめ。[文里]おめへがたがかけると花が散わな。まあ下にいな。あの子の來ねへうち。おめへがたに話しておきてへ事がある。かならず笑つてくれちやァうらみだせ。[一重]なんの事だか。氣にかゝりいすわな。[初瀬路]何ンだんす。早くおきかせなんし。[文里]イヽヤヨおめへがたも知つてるとふり。一トえさんもよく/\嫌なればこそ。こふ久しく來るうちにも。ついぞわらつた顔をみせた事もねへに。かわいそうにコフべん/\と來るも。あんまり知恵がねへとおもふから。もふ來めへ/\といく度かおもふけれども。此樣におめへがたが心やすくしてくれるがうれしさ。またはあの子もまだ年がいかねへからきずいだろふとおもへば。わるくされる事はなんともおもわず。おめへがたのめへだが。人のかみにたつものは人にゆびをさゝれねへよふにしねへきやァならぬが。一トえさんのよふによくがなくつては。次第に身づまりになるだろふと。行末が思ひすごしがしられて案じられるから。こん夜ははなそふか。あすははなそふかとおもふが。此よふな事をいつたら。また氣にさわろふとおもつていゝかねていたよ。あの子はあのよふに思ふが。おらァ。一と跡をのこして。まあそれはともあれ。こふ久しく來るといふも緣だろふとおもつて。異見をいつたら。もふこめへとおもふが。どふでおれがいつちやァ

あの子のためにもなるめへから。九重さんは格別の事だが。おめへがたもとも〳〵よく苦界のいりわけをいつて。氣のなおるよふに異見をしてやつてくんなせへ。頼ぜ。これでもふ思ひのこす事はねへが。こんやが此二階の暇乞だとおもへば。ばかなあじな氣になつた。と（ほろりと涙こぼす。一座は一どになきいだす。）こふ久しくこゝろやすくしたものだから。來ねへといつても。もしつきやいで來たくらいなら。階子迄來るから。いま迄のよふに心やすく逢つてくんなよ。といへど返答あらざれども。なかに九重座しきいで。せつ成る心をかんじいり。思ひあまつて泣きながら。ひとえをともない。我部屋にて。

［九重］おめへはあきれけへるよ。［一トえ］ヲヤなんでおすへ。［九重］なせ。文里さんはいやだか。と（うらみらしく云。またもらい泣して。）［御室路］いまたつてきいておりいしたが。文里さんの心根がかわいそふで泣てばかりおりいした。［九重］おむろ路さん。いつてつかわそうとおもひゝすが。胸がいつぱいになつて申されいせん。いつて聞かせておくんなんし。［おむろ路］アイ。（とすゝり泣ながら。）じよう中もふしいすが。よくものがわかりながら。おきゝなんせん。もつとも久しくおいでもなんすけれども。二階中で一座をせぬものまでがこころやすく。だれでもわるくおもふものは壹人もおすせん。文里さんがちつと足がとおひと。おめへさんはなんともおもひなんせんが。みんなが待ちどふがつて。噂ばかりいつていゝす。それよりまあ茶屋のまへもおつす。もつとも文里さんの事だから人にしらせもなんすまいが。それだけ氣の毒でありそふなものでおす。［九重］まあ文里さんをよぶきはござんせんかへ。それじやアすみいすめへによ。そしてまあ不人情といふものでだんす。［一トえ］（うつむきらうをひねつている。）もつとも胸にもおぼへがありいせうが。あのよふに深切にしなんすほど。意地にかゝつてわるくしなんすが。ついぞ腹をたちなんした事もなく。今も今とていとまごひをしなんして。おれが來ぬあとでもおめへがあんまり氣ずいだから。行末があんじると。みんなにも頼みなんした。わるくされる事はなんともおもわづ。こんな深切な客人があろふとおもひなんすか。女郎めうりがつきいすにへ。ほんにちつと公界と儀理をお知りなんし。こふ申しいすもおもひゝすからでだんす。［一トえ］そのよふにおめへさんがたが。わたくしを思つていつておくんなんすとおもへば。いつそうれしうおす。ほんに文里さんは久しくおいでなんす内も。いやらしい事もなく。勤めにくゝもおすせんし。物前の苦勞をせぬも何やかやぬ

しのせ話ゆへだとおもひすが。なせかそのよふに深切にされるほど。猶いやでなりいせんから。つい悪くしいすけれども。いつでも機嫌よくおかへりなんすゆへ。跡では氣の毒になりいして。こんどきなんした時はよくしいせうとおもつても。顔を見いすと腹がたつてなりいせん。大方敵どふしとやらでおすせう。堪忍しておくんなんし。［九重］あきれけへるよ。そんならどふともなんし。と

いゝきれば。たつもたゝれずうぢ〱と。座敷へ行との言葉をしほに。きのどくそふに立ちいでゝ。何心なくうかゞへば。文里をはじめ一座の傍輩。座敷は泪の露時雨。一トこといふてはむせかへり。顔見合ては泣しづみ。名殘を惜むそのふぜい。しばしためろふそのうちに。つく〲とおもへば。ほんに今更に。仮初ならぬ三ト年の恩。またも掛がへあるよふに。なせあのよふにした事かと。まさか名殘のおしまれて。しきりに哀と胸せまり。またそのうへに此身のうへ。これまであたのにくしみなく。行末までをあんじると。のこるかたなくなさけぞと。心で繰だす我身のあやまり。わかれとそゞろに氣も乱れ。うつてかわりしひとえが心底。わつとばかりに泣ふせば。たゞさへ哀な此座の模様。またも一座はもらい泣。前後もわかず臥しづむ。文里はよふ〱氣をとりなおし。

［文里］そふみんなが名殘を惜んでくれるは。ほんにうれしい。かたじけねへが。それじやァ猶さら歸られねへ。わつさりと笑ひ顔を見せてくんな。とうるみごへにてなみだふきながらいふ。ほんにどふで限のねへ事だ。いればいる程おもひのたねだ。さあ〱かへらふ。と

側にありおふ茶碗にて。手酌のむり酒二ッ三ッ。みんなへもと。跡は涙の暇ごひ。行んとするを一トえは。あるにあられぬ思ひ。裾にとりつき泣ふせば。文里は振切り下につくばい。

［文里］みやげ心のあいそうは嬉しいが。これよくきゝな。外の者にはそふでもあるめへが。たとへおれがよふにしんにいやとおもふ客人がきても。おめへのよふにしては身のためにならぬから。ちつと欲をしんなせへ。若さはわかし。むりもねへが。はてすいた男はまれにして。いやな男の多ければ社苦界といふもの。そこを随分しんぼうして。かげながらいゝ耳をきゝてへ。またこんなのろひ句をいつて。氣にあたらばかんにんしな。と

たちあがれば。一トえは何とせんかたち。どふぞしておくんなんし。とはんぶん跡はむせかへり。涙をおさ

へて。初瀬路は
〔初瀬路〕これ文里さん。今夜ばかりはどふぞいて。あの子の胸もきいておくんなんし。〔文里〕ハテとめてくれては恨だ。はじをいふのも心やすいとおもふから。〔初瀬路〕サアずいぶん無理とはおもひませんか。一トえさんもあのよふにいゝすから。〔文里〕ありやァ三年もこふ來たものだから。まさかにあいそうぶりだわな。〔よしの〕なんでもわたくしどもが一生のたのみでざんす。〔文里〕おめへがたがそのよふにいつてくれるを。やぼに歸られもしめいか。〔よしの〕なんにも申しいせん。嬉しうざんす。〔あすかの〕九重さんは泣ておいでなんすから。此由をしらせて喜ばせもふしいせう。と。
よふ／＼一座も氣をとりなおし。座敷おさめて床へ入。いとまごひやら。禮いふやら。我部や／＼へ立かへる。一トえは涙よふ／＼と。おかたじけのふござんすといふたまゝにも捨がたく。せ話に成し禮いわんと。なく／＼座敷を立出る。文里はうわ着ぬぎ捨て。帶くる／＼と引しめて。たばこくゆらし居る所へ。間もなくばた／＼一トえが足音。こなたはうしろへむきかへて寐たる樣子にもてなせば。一トえは眼ぶち泣はらし。泪をふくしみす紙を。手にもじ／＼とひねつても。何かしきいのたかければ。氣の毒そうに床に入。少しは心おちつけど。まだ氣にかゝるは文里が胸。何からいふてあやまらん。とのぞいて見たり考へたり。惚た初會の如くにて。いわんとすれどいゝかねて。おもひ／＼て時うつり。拍子木の數かぞうれは。もはや七ッのあけちかければ。おもひきつて。もしへ／＼といへど。いつかふいらへなく。今宵いわねばわかれての跡でいふてはかへらぬ事と。お　ひまわせば氣もせかれ。なんとせんとは思ひしが。おもひあまりて堪忍してと。わつとさけべば。文里は目覺しよふすにて。〔文里〕なんだびつくりした。と振向たばこをつぎながら。どふした。また癪がおこつたのか。〔一トえ〕段／＼のお腹立ち。むりとはさら／＼思ひゝせん。どふぞかんにんして。と向ば。〔文里〕これはあらたまつた。はらをたつぐらいなら。今迄人の口歯にかゝつて來わしねへが。そのよふに嫌がるものを。べん／＼ときたはおれが罪だつけよ。〔一トえ〕そのよふにおつせいす程。なぜあのよふな氣であつたとおもへば。いつそ死にとふおつす。今迄が今迄だから。どふで承知はしなんすめへ。と
兼而よふいの髮剃にて。手ばやく袂を口に入。枕へあてゝ小指をおしきり。紙に包てなげいだし。

【一トえ】これまでの事はかんにんして。うたぐり晴しておくんなんし。ともれくる血しほを紙にてふせぎ。みれんをみせじと歯をくいしめ。こらへて見てもふるへしは。眞實見へていじらしき。文里はとつてなげ出しお面をかへて。

【文里】いらねへわへ。こんな物をゐばにしてかゝれるよふな咎はしねへは。これ今迄は年はがゆかぬゆへ。あどけねへ。欲のねへ子だとおもふから。悪くされるもいとわづきたが。うつてかわつてこふづぶとい仕打をされては。もふ癇癪にさわる。これまづ惣たい苦界といふものは錦の夜着にからまるも。こも一枚のよたかでも。めん〳〵のすきでつとめするのは一人もねへ。親はらからのために身をしづめ。それをおもへば不便さに氣隨氣儘も里のならいと。とふしてやるぞよ。つらからば只一筋につらからで心におもわぬそらなみだ。今になつてなんのたわ事。いゝたへ事はかず〳〵あれど。われとわがでに恥をいふのがはづかしさにこらへているぞ。どこへぞ賣つて金にしろ。といゝはなせば。一トえはしじうしやくりあげ〳〵。

【一トえ】成程腹もたちいせう。それもわたくしが心からだと身をうらんでおりいすが。せめて一ト言堪忍したといゝなんすをきいたうへでは。命はさら〳〵おしうおすせん。と

いゝたい事もせきくる涙にへだてられ。心はどこへ飛ゆきしか。もはや別れと思ひつめ。【一トえ】どふでもぬしは。といへど。見むかず小声にて。

【文里】へかいておくるはみの噓。誠すくなき命げも。鹿毛もなく音やしとふらん。

一トえは。今はこれまでと以前のかみそりとり出し。すでにあやうく見へたるに。文里はあわてゝとむれども。はなしてころして〳〵と。しばしあらそふそのうちに。髮剃とりあげ口へ手をあて。【文里】やれはやまるな。何ゆへ死ぬ。といふこへ聞てうらめしげに。顔うちまもり。【一トえ】何ゆへとはきこへいせん。どふでうたぐりはれはせず。未來で言訳しいすから。かまわずはなしてころして。と髮も乱れ。氣も乱し。文里はまたもゆだんなく。

【文里】これさ〳〵うたぐりはれた。これさ。もふいゝはな〳〵。まあ〳〵顔でもふきやよさ。【一トえ】そんなら堪忍しなんすかへ。【文里】ムヴかんにんするよさ。

爰にほつとためいきあると。中庭の連理木にて。よろこび烏

カア〳〵。

自跋

二筋道とは。世に行るゝの。大道の善にあらで。右も左も銀世界。うかれ鳥のまよひ來る。はかなき雪の粧ひに。はたして水堀へはまりやすきは。是人

されば吉原へは入ぬこそ。實の通意と高雄が金言雨降ずして地固ふするは。此書に足る事を知らば。何ぞ心の雪解に。泥す愁ひなからん。

大尾

されば吉原へ入ぬこそ。實の通意と高雄か金言雨降て地固ふするぞ。此書足るを知らは。何ぞ心の雪解に。泥す愁ひなからん

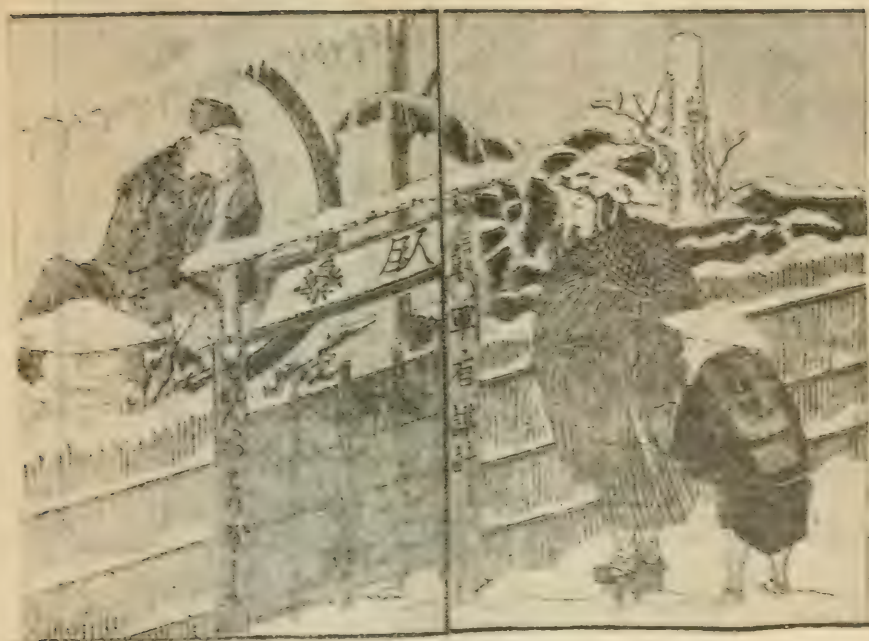
大尾

表紙	ヨコ	三寸四分
	タテ	四寸九分
本文枠	ヨコ	二寸九分
	タテ	四寸三分

讃極史序

二一天作と。險約の攻道具をもて。執權職の貨殖積たる。雄兵百万兩の家產も。呉魏蜀の三ッ蒲團に籠城して。床豆を生ずるに至ては。薄望坡の火の車。白河の水のあわれ世の中と。獨草の扉に。悟を開て。穴の穴を探。目八分に三分五厘を定て。一分自慢の孔明氣取も。惡からぬ千代丘草菴のぬしが。此妙作。虛言と思はゞ。讀で御覽。孟德新書の上を飛越す。上ゝ吉飛切の新書也。イザ これを呼で。讃極史と譽そやさんと。右を祖ぐものは。

鶴邊菴のあるじ

さ ほ 丸 佐保

三國の英雄。蜀玄德。吳孫權。魏曹操。天下を三ッにしてこれを守り。その意をうつて一統せんとはかりしが。吳魏蜀おかしおかす事を得ずして。こん氣つき。ぐつとし(や)れるきで。玄德は孔明にしんたいをあづけ。かれが別莊南陽の臥龍岡を引かへ。今は臥樂岡と名づけ。冬木の植込にし。利休が物數寄の夜燈。庭石は青の野面苔のさびよく。青桐に。垣根は芭蕉の氣どり。馬の鞍に。もゝの肉の不足になつたむかしもついいつしかなをりて。茶と通との物ずきをないませて。今は德玄と名をかへ。小僧一人つかひて。氣樂に暮す。この日雪ふりて。まつさき向ふ島とひねりたき心ちするに。それに引かへて。老馬にまたがり。小坊主に美酒と雞鹿等ヲもたせ來るものあり。これ吳主孫權なり。古松の枝に雪をもたせたるをみては。中の町松の内雪の面

影あり。猿鶴の遊びたわむるゝを見て。かむろの行かふがどしと。一人ゑみをふくみてはや臥樂岡に至り。老馬よりおり雪を拂ひながら。路ぢをあけて。德玄さん御宿かねへ。德まる窓をあけてこれは稀人の御出。こちらへあがりなさへ。孫白雪に心うかれ。雪見といふ氣どりで宿を出かけやしたが。おめへも今じや通に浮世はなかしと聞たから。それでめへりやした。德こいつサアありがてへ。切の。破のは。やぼなてんさ。そこもはやくらくにならつせへと云ながら二人共ゝ内に入。サ、こたつによるがいゝ。孫こふあつたまつちやア。三ッ蒲團をおもふせ。德皮の布團よりは忘れられねへよ。小僧口とりをあきや。小ハイ。德馬かいのかせいたがよかろふ。小僧菓子を出す。孫これは遠來妙だ。御せんじ茶をねがへやす。德幸ひ今いれやした。御心まかせにト浪華の蒹葭堂好みのきびしやうをそのまゝそばへやる。孫これはよい茶だ。蘭茶でもねへ。こそ製かな。德いや／＼日本の宇治さ。孫名はなんと云の。德喜撰といゝやす。せんじ茶の一さ。喜撰の新ときては。煎茶家のひねる所さ。折鷹。厂金もよいが。喜撰にや及ばねへ。孫先達而董卓が所へいつたきや。妙な菓子をくわせやした。萬やの名はわすれたが。白イ丸イ物さ。なにか。口へ入るゝと妙にとけやす。德ソリャ最中の月といふ菓子さ。水どふの水をのまにや。アノ菓子はしるめへよ。ちつとそこも遊ぶがいゝ。周瑜に諸事まかしにさつしやれ。孫おれもそふ思ひやす。ちんせつをききやした。德なんだねへ。孫呂布が此頃司徒王允が方から。貂蟬といふ美なる封きらずを貰ひやして。まだ内へはいれやせんが。女房にきまりさ。それを董卓がみて。むりに司徒が方から。横どりして。内へ連ていつたのさ。日本の五明樓でなければ。あんな美しいのはないといふことで。その婦人の仇名を日本でゴゼヘスといふげな。德こいつサアごうてきをだしたな。孫そこで呂布も兄ぶんの事ゆへ。司徒にだん／＼いつたら。司徒も一寸のがれに。くるめたそうさ。そこで呂布も。ころりとなつていやした。其後。董卓が留主の時。鳳儀亭の次の間で。むりに貂蟬をいつてうおめにかけんとしたそうさ。そこへ。悋氣のふとつちようが來て。大騷動であつたそうさ。德あいつもゑへ年だろうにすきなものさ。呂布はおふつけてあつたの。孫時にめづらしい一軸があるの。このころお手に入やしたか。日本平安の宮鈞圃が竹ときちやア。今文人のひねる所さ。日本にもすけねへとみへて。新渡の近世畸人位といふ書を見たが。宮奇か竹の圖かでゝゐる。日本人も好事になつて。おらがほうのあきなひ唐人の書画などは。うれしが

らぬそうさ。〔徳〕そふさ〳〵。日本人はとかくおらが國ひゐきがおほいが。俗語などを分解するは。こつちの手合はおよばねへよ。日本でもちかごろ大雅堂の書畫がはやつたが。もふ此ごろは見あきたとみへて。祇南海の山水。柳里恭の画讃などゝひねるそふな。〔孫〕きのふは道具屋が日本渡りだといつて。吉野が文に大橋が自畫讃。高尾が自詠の色帋。山本勝山の短冊などをはりまぜた小屏風をもつてきて。これはおまへさまのはぐちてござります。今時もふ堂上や連歌師のたんざくでもござりますめへと。三味線をひいておいていきやした。新渡りの應擧や。月仙もたくさんあつてひねらねへぞ。〔徳〕日本人も。元明あたりの書画でなければ。よろこばぬさふさ。（ト玄德時代ちがいの未來をさつして云。）〔孫〕このごろ日本では何がはやるの。〔徳〕まづ五大力のめりやす。しぼりはなしのまげいはい。あなごのかば燒。くすべのたばこ入。煎茶の會に墨跡の交易さ。百膳の安うり。茶やなしの女郎買などは。げびなはやりさ。とにかくに世の中は三日見ぬ間に櫻かなだ。じきに流行におくれやす。〔孫〕もちつとむまい菓子がねへかの。〔徳〕小倉野がありやす。〔孫〕きかねへ菓子だ。おらんだか。天ぢくか。〔徳〕やはり日本さ。おらんだ天竺ときいちやァむさくつてあやまりやす。（ト小僧を呼菓子を取寄）いだす。〔孫〕（菓子を喰）これは妙だ。雲片香。かるめいらよりは。よつぽどいゝの。〔徳〕菓子と女と紙は日本がきつい物さ。〔孫〕どふして。〔徳〕まづ女が牛はくわねへから臭くねへ。紙はちやのやうにさけ易くねへよ。〔孫〕紙はいらねへが。女は浦山だ。どふもおいらが奥の女中部やで。ぶたや牛猿の帆立貝をせゝるから。いきがくさくつてこまりやす。そこが劉表が所へいつておふきなめにであつて。檀溪といふ大河を。ごふてきに馬でとばしたと聞たが。ほんの事か。〔徳〕ナニそんな事じやねへ。劉表も通さ。大のみがあつての。げいしやが十枚ほどきて大騒ぎさ。それから大飲みになつて。こりやながく居ちやァぐつから。手水と見せてにげやした。あとからみな銚子をもつておいくる。檀溪ト言どぶがありやす。跡からはうかむ瀬くらいの盃をもつてきやす。あれのんぢやァたまらねへから。一跳にしやした。〔孫〕そのまちげへだの。世間ぢやァ檀溪は大きな川のやふにいふぜ。〔徳〕なにさ。大門の小便所よりも小さかつた。（トいふ所へ曹操が來り暖簾をあけながら）徳さん。どふだ。寒いおきこたつに隅田川にあつたまる氣がなしか。〔徳〕先生。ゐへ所へござつた。呉主もさきから來てさ。〔孫〕これは〳〵。赤壁以來不首尾さ。〔曹〕またいやみをいふぜ。〔徳〕マア〳〵。此こたつに入たがゐへ。〔曹〕こふ寄た所が。三ごく

した。〔孫〕むだをいわずといゝ。先生にあつたら聞ふと思ふてゐやした。そこが董貴妃をしめころしたといふ沙汰があるせ。〔曹〕そんな不作ばなしはながしにさつせへ。〔徳〕孫ぼう。その董貴妃が大間違だ。先生が腰元にいけねへのがあるのさ。疱瘡でかほがみつちやになつたから。みなが唐黍と云やす。それをしめこの山とでかけて。あんまりよろこびがすぎたか。先生がしめころしたそふさ。それを世間ぢや。まちがつて董貴妃をころしたといゝやす。〔孫〕こ一つア。面白たぬきのはらつゞみだ。よつぼどはなしになるの。〔曹〕徳さんの云違ねへよ。トみな笑ふ。〔孫〕先生は許田で鹿を射たそふだねへ。〔曹〕あの楊弓にこつた時分は。ごふてきに。弓はよかつたよ。〔徳〕又うそうをいふせ。おれもあの時でやしたが。承知のならねへ射やうであつたよ。〔曹〕イヤ實は矢のついた鹿がかけてきやしたから。そこで芝居で弓を射るやうにしたのさ。こいつはどふだ。妙なしうちであらふの。〔孫〕近所に人がいたか。よふみつけなんだの。〔曹〕見たものもあつたろうが。そこが英雄人を欺くのさ。〔徳〕ソリヤ〳〵持前がでるよ。それだから。きらはるゝぜ。〔曹〕徳ぼうのいふ通りだ。兎角おれをばかたき役にするよ。〔孫〕徳玄さんほど。贔屓せらるゝ者はねへぜ。〔徳〕そふ又白くのせるなよ。〔孫〕そふじやねへ。ノゥ曹公。〔曹〕呉主がいふ通りだ。百姓にも。おやまにも。すかれる男さ。めへと長坂坡でおれと大とりあひをしやしたその時も。百姓が徳さんの徳をしたうてみなくぶさ。〔徳〕曹公いやみな事をおかつせへ。あの時は百姓も道づれがなかつたから。一所に行やした。あの時はおれもおほつけさ。しかし先生も弟のごふてきものにはおそれたぜ。〔曹〕そふでもねへが。どふもそこと違つて。弟のめつぽうけいものだから話せぬよ。〔孫〕先生もこれにやあやまるの。トいふてみな笑ふ。徳玄小僧をよび。口とりを出す。〔曹〕むまそふな菓子だ。名はなんといふの。〔徳〕橘やのせんべいまんぢうさ。〔曹〕おれにはちつとこの御菓子は御免だ。とても御馳走にあまくねへのをねげへやす。〔徳〕わがまゝな客だぞ。ト小僧をよびくわしを出す。〔曹〕コリヤなんだ。蠟石の卦算のやうなものだぜ〔徳〕そふ見られちやァあやまるよ。圓山の一葉岡からもらひやした氷餅さ。〔孫〕おれも初てだ。ちつとげびを許さつせいと菓子をとらんとす。〔曹〕孫ぼう。そこはこういふ宗旨ちげへだろう。おかつせい。〔孫〕おいらは。なんでも口に入るがよしさ。徳さん司馬徽が借やへゐかしやつた事はあるかの〔徳〕此頃はいきやせぬが。めへとはちかづきさ。よふ笑おやぢだよ。〔曹〕あいつがよし〳〵も久しいものだの。〔孫〕よふ口くせのある男だねへ。〔曹〕さふさ。松葉のお

つす。鷄舌のざんす。五明のほんさんすかへト。わたくし。みな口くせだよ。[德]なんぞ。むまいものでも御持參か。[孫]角田川に鷄鹿さ。[德]こいつはよかろふ。先生はなにを御持參だ。[曹]おれは氣をきかして。てつぽうとしやした。鷄鹿も久しいから。ひねつたのさ。[德]おそろ〳〵おれもこふ山にいるから。ふぐには久しぶりだサ。はじめやしやう。ト小僧をよび。みぎの品を料理いゝ付る。曹德玄子。きゝや。ゑへばんとうを入たそふだ。名はなんといゝやす。[德]はやうきいたせ。孔明といふよ。漸〻の事でかけへやした。[孫]雪ふりに度〻いつたそふな。風でもひかねへかの。[德]なにさ。羊のちばんに銀鼠の羽織で。かゞみの雪踏。ぶつかむり頭巾といふ身で。内からはぶとふ酒じや。いかねへとおもつたから。淡盛としかけていつたよ。[曹]よふばける男だせ。[德]よつぼど通なものだよ。[孫]日本に何とやらいふ作者があつて。德さんが孔明の宅へいつた所の繪に。讃をしたを聞やした。

三たび草菴を見かへり柳に
お蜀の大盡床花をおします
梁甫の吟の歌藝者は客を
えらみて見番にかくろふ

とやらかしたげな。日本人も口はかるいぞ。[曹]孔明が呉の群儒と舌戰したといふ沙汰がある。ほんの事か。[孫]世上ではそふいふそふな。そふじやねへ。わしが方へきやして。みなと地口のてんとりをしやしたが。孔明にかつものがねへよ。[德]先生の次男曹子建は。狂哥は妙だ。先度角半で一座しやしたが。日本の雄長老。豊藏坊。未得。貞柳もはだしだ。よつぱらいながら。七足のうちに豆の狂哥をしたがおそろしいよ。[孫]兄さんに似ねへおちやつぴいだ。[曹]あゝ云ものになつたから。養子にほしがる方もありやせん。しようとの氣にいらねへ事は見へているよ。トいふ所へ酒と肴を出す。[德]おかんを見やしやう。ト云ながら。一ツのみ呉主の御持參ほどある。先生ひとつあげやす。[曹]このさむさじや。礼をばながしにしやす。トのみ肴をみてなんだ。粕づけのたけのこか。醍醐のむし竹をおもふせ。[孫]おれは御酒はあやまる。菓子の事さ。亭主ぶりに。もつとだしねへ。[德]モウ菓子もなしさ。[孫]そふいわずと。何ぞあろうせ。げびぞうを出そふとトたつてたなを明とりかいの九重まんぢうあるよ。これぢやアおめへかたの樂むうち。てれはしねへぞ。[德]魏主龐統が連環の謀には。ころりとしたの。[曹]なにさ。あれくらいの手は承知さ。船を數つなぎやすと。ふら〳〵しねへよ。醉ばらいもあぶなくねへさ。中洲のはつかふな時ぶん。花火を見る船からあんじた謀計サ。[德]鉾を横たへて詩を賦すと。あのやぶなうぬ

ぼれをだすから。大きなめにあつたさ。曹そふじやねへ。あのときやァ茶番のしやした。跡は大のみさ。孫その大のみがすぎて。あげくに喧嘩になつたそうだせ。曹そんなきざは通者はいわねへもんだ。みな笑ふ。孫公赤壁ぢや。じつにころすきであつたけへ。孫實さ。曹めつぼつけへな。おれはそふと思はなんだ。周瑜も。徳さんの弟の張飛に似た氣だせ。徳周瑜もむりはなしさ。董卓と云しうちに。かみさんをとろふとするから。周ばうもあれくれへにはするのさ。曹そふじやねへ。風のつよいに。むしやうに火をかけやす。おれをば鰻のかば焼にするきとりざかしれねへ。孔明があの風をいのつたといふがほんかの。孫ほんの事さ。曹承知しねへぞ。万八だろう。徳いゝ時に風がふいたのさ。あれで孔明も名をあげやした。曹わしが方に管輅といふ占へ者があるが。妙にあたるよ。徳いかぬ躰にてしんない節をうたふ。田町にござる法印さんの守り御札やうらやさん。孫餘程いゝせ。いつちまわりをやつたの。徳おれもかふならねへ先は。あれぐれへのものさ。曹そことちがつて。弟の關羽はよい人だ。ほんの兄弟か。徳三人共兄弟ぶんさ。しろがね町の出みせの。高なはの桃林で。義をむすんだのさ。曹どふりで似ねへよ。貴様は中てびんぼうらしいせ。徳おきやあがれ。この耳を見ていふがいゝ。おれが目で見ゆる大福みゝだ。孫弟のひげは珍しいものだ。拂子にして賣つたらよかろうせい曹松葉のけいに見せたら。ばからしうほつすといふであろふ。人がよすぎてだまそふよ。ちつと兄きをあやからしてへ。徳そこが華容道であぶねへ所を。弟をかろりとだました。それでそふいふのか。曹あの時は。おれも仕方がなかつたから。何でも。つよく出ちやァ。大きなめにあふとおもつたから。ぐつとやつしかたといふ身で。此太夫がうれい場の氣どりをしていつたよ。そこで關羽もあの正直だから。眞受にして其場はにげやした。しかし兄さんよりは人がいゝよ。徳弟をば雪ころがしのやうにするせ。孫先生のひげも。もちつと長くおもつたが。みぢけへせ。曹あまりなげへと。女はきろうよ。それで少しきつたのさ。徳うそだ／＼。馬超にはひどへめにであつて。たびうど客に夜具をきつかけた傾城のかみを見るやうに。せびなくきつたげな。曹よふ穴をおぼいている男だ。この事はしるめへと思つたが。孫どんなめにばかりあふの。徳先生許諸はよくしてやらつせへ。貴様の命の親だよ。あの時あれがいねへと。貴様は今時分は。何居士とかいわれるせ。曹あれはよくのねへ男さ。酒さいかつてあづけておくといゝよ。孫おれが方の

甘寧といふものだの。トいふ所へ。小僧朱ぬりの大丸盆に。どんぶり二ツ三ツのせ手しほ。利休かたの數寄屋箸二三せん付持出る。徳先生御待かねだろう。曹これじやァ雪のふるも一しほ詠めになりやす。孫公の御持參。先雞鹿と致しましやう。孫おれはぶたとひねつて見やしやう。香川流じや兎角鹿をば病人にくわしたがるの。徳そふさ。かたくなにおぼへた醫者さ。藥撰には。あれさへくゑば無病になるやうだせ。しかし狩人にはゑてけへどくがあるよ。曹おれは鷄はきついすきさ。孫貴様の鷄介も久しいものだよ。徳けびぞふな魏王だ。曹そこがおとなしそふにみゆるから。世間じや女きれへのやふにいふよ。徳おれ程沙汰のねへ者はあるめい。曹なにさ。孫ぼうが　んの孫夫人をさへせゝつたでねへかの。徳ゑんりよをいふ男だ。このかわりは。むすこの子桓がいる所で。大橋小橋をよこ所にして。兄弟ぐるめにとほしかきやうと赤壁の大つけをいふぞ。とはなしながら。ぶた鷄鹿を喰しまい。しばらくあつて。小僧ふぐしるを出す。珍味なるかな／＼。かんにんならぬふぐと吉原とは。よつぽど出來やした。曹こいつサア妙だ。その上の句はなんといふの。徳北むきはいづれも毒とはしりながらさ孫おそろ／＼日本だ。曹孫ぼう。きつい和言をいふせ。貴様の國から船ぢやァ長崎へちけへから。よつぽどいきな文句をだすせ。ト三人うちより。ふぐじるをたべる。徳これくれへむめへ物を。どふして日本でいやがるの。外にむめいものがある所だから。それではやるめへ。孫平安の宮川町で。ふぐ汁によつぽどあたつたそうさ。曹どふりで。新渡りの書物に。京色里町中はやり哥。ふぐ汁やめてほしいと言標題があるせへ。孫その哥をうたつてみやうかねへ。徳孫ぼう。ちつとうてへなさへ。と言。したんのほそ掉。たがやさんのどうに。蛇皮はどうやらさゑんと言氣どりで。いつか日本風の三味線となり。てふしを合して。サアどふだの。曹むすことみゆるが。ころは面白かろふ。トいわれて。じきに孫すこし醉た氣げん。かぬ聲でい歌をなじ魚やの見せにあるふぐみるたびに思ひだす。いつそゆくなら三人づれで。のこる三人がたのしみじや。そうじやそぢや／＼。その氣でなければやめられぬ。徳そうじやいな。どくじやいな。ト古渡りの靈からと言こゑ也。三人大きに笑ふ。孫ついでだから聞やすが。おめへ方。青梅酒煮。おいらがうはさをしたそうだの。徳むすこもこわいせ。曹なに。そんなきざな事ちやねへよ。おれと徳さんと役者のひやうばんをしやした。孫徳さん程仕合な者はねへよ。諸事孔明にまかしじやの。曹さんもあのしうちがよかろうせ。曹おれもきんねん中に。徳房といふ身になりやす。徳おれが方の孔明といふ者はあるめへせ。曹仲達といふ者があるよ。徳そこが諸事まかせにすると言事もきいたよ。しかしど

ふも合點のいかねへもんだ。マア口あたりがむめへが。ふぐ汁といふしうちの男にみへるせ。【曹】なにさ。そんな男じやねへ。せつきに勘定所へひとりおいても。あやうくねへ人物さ。【德】先生のお目がねはちかうめへが。此頃おいらがむすこの近所でね。ひぞふのかへ犬が。きうに病がついてゐるのを。そこの亭主が氣がつかぬから。ぐつと寵愛しやした。そこでやめへたと言もんだから。ごうてきにくれへついたそうさ。それで亭主も。其日のうちに極樂めへりさ。そこもかい犬にくはれめへせ。【曹】そのやうな白い曹公じやねへよ。しかししやばの極樂へゆくめへかの。【孫】おいらはいつでも承知さ。德さんはどふだ。【德】あまり極樂へめへりすぎると。孔明が方のしゆびがふできさ。【曹】びんぼうな蜀主だ。今夜はおれがふるまつてやりやす。【德】おきやあがれ。渇してもとうせんの水をくらはず。つれの女郎といちやつかずだと。それより仕度にかゝり。三人共大通のいしやうつけにて居る所へ。四ッでが三丁くる。【德】小ぞうをよび。留主の內へ孔明がきたなら。ちとひへあたりで寝ていたといへ。弟が來たなら。獵にでたといへと言捨。三人草庵より四ッ手にのる。たれがばつたり。いぎつゑがからり／＼。棒組いそぎだ。ヲイやつちやへ。こらちやへ。〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

松風の里

千代丘草菴主人

跋

歳々年々晒落新し。そが中に。近來未熟の小册に。晒落の晒落たる晒落もなし。管見の輩にして。古人の粕をなめ。淨るりの文段。祭文のあはれを切拔。中坐は細見の近付。貳朱壹分も。逗中にわからず。穴の穴たるひじまつげ。金もつかはぬ穴知振。見るも氣のどく。積のどく。夫とはあちらこちらから。まいたる小判の種おろし。正じん正銘まじりなし。一つぶゑりの小つぶながら。一部につゞまる大悟悟道。競は雪とすみつこから。作者の氏神外にはない。とほめ申ものは　泉樓主人一丸

	ヨコ	タテ
表紙	三寸七分	五寸
本文枠	三寸	四寸一分

とんと。杵墳の主人
鼻山人誌

ひのとのうしのはつはる

自序

娼妓の。誠と。雞卵の四角。あれば。晦朔に大陰も顯と。謠ひ物せしは。其理を不究の論。可耻の妄誕也。夫鳥はよく。木を撰で棲ども。木はよく鳥を選ざる理り。悉皆遊才の。短きをもつて獨室閨。夜の長きを譏は。天を仰て唾唾に均しく。天を汚ずして還て己が面を汚。老子の所謂。その白を知て黒を守の術を。おもふべし。嗚呼傾城には何がなる。於客／＼の。氣がしれぬ。街の別業にゐて。昔しとつた。杵墳の主人

鼻山人誌

蕭章ハ宝晋斎
其角が発句に云
うぐひすや梅はさかれどふおのゝ綺ど
おりゐんからう香のふうきにまよふ
朧月みゆもさぶらふにあどけなきけれ
けんのちぎ

後章ハ自在庵
祇徳が名吟に云
うぐひすやあまりに迷てこがれむか
おぼしめんハきかまくふうきにまよふ
朧月ゆの桜かくげのふ桃なかべしけん
ぜんのまると

唱妓美談 籬の花

鼻山人著

○前章は寶晉齋其角が秀句
宇久爲壽や梅はさほどにおもはねど

本朝文粋巻の九。論文の巾に。古えの人いえる事あり。荊山の璞美なりと雖も。琢ざればその寳とならずとは。實なる哉。蘭姿蕙質傾國の色と情の仲の町。張と意氣地の大湊。人も志案の帆かけて走る放蕩の風のまに〳〵に。入船のたそがれあれば出舟と急ぐきぬ〳〵あり。錠を卸す居續客。まはし坐敷の名代雛妓。夜船こぐかたはらに。帆柱建て待わびしは唯木枕の罪なるべし。されば百ねんの樂も一睡の夢の中に止り。生涯の望は四季折〳〵の美景に残る。籬の花も散去て。

こゝに梅川がざしきには中のしま屋の客八右衛門。羽織なしの襲袴にて大あぐら。火鉢のうへにゆき平鍋をかけ。大平の残物を入てぐつ〳〵〳〵トにえてゐる。そばにはあひ方の梅川。かたひざ立て火ばしをもち。灰をならしたり。かきまはしたりして。すこしふさぎし体。八右衛門は南京ちよくの盃を左りの手のひらへのせ。右の手にて人さしゆびより。中ゆび。くすりゆび。小ゆびトじゆんにおやゆびで弾き。りん〳〵トならしながら。〔八〕宵にしま屋のお仲ぼうが一寸はなした節句の事も。承知とはいふもの〻。忠兵衛といふ色客のあるを知つ〻。むだな金を出すも。獣子事かとおもへば。愚痴ぼく〳〵いふ理窟ョ。〔梅〕ぬしのうたぐりなんすも無理じやァおつせんけれど。島屋のおかさんも。ぞつこんしつてゐなんす忠兵衛さんの事。一ッ茶屋からお出なんす主にかくしたとつて。直にしれへすこつざんす。よく察してもごらうじいし。ぬしだつても苦界のとァ。もつてへねへほど汲分てお出なんすものを。一ト通りにおもいひすくらゐなら。何も此やうに打あけては申しんせん。〔八〕自惚らしいが。迷た心からは。よもやさうじやァあるめへトおもつても。人の噂に。梅川と忠兵衛は深ひ中トいわれて見るト。友達の手まへもめんぼくなく。一チばん計較たのが。こつちのおやまり。見切どころが肝腎とあきらめて見ても。悪縁のかなしさには。是もやつぱり歎言かと氣で氣をとり直しては來るやうなもの〻。どふも愚痴がい〻たくなる。〔梅〕ばからしい。それはぬしの廻り氣ざんす。此間もいろ〳〵とをわけておつせへすから。そりやァどふとも主の心のはれるやうにいたしいしやう。忠兵衛さんの事は。かならずさう

おもひなんしては罪になりいすと。あらほどまでに打あけて申しいした。ぬしが今夜お出なんすトいゝなんしたゆへ。先キとつておきいした。ト唐机の上にのせてある西のうちの紙を。じろりと目でしらせ。心にもねへ事を。とやかふといわれるほど。しみ〴〵つらひものァおざりいせん。トなみだぐむ。八今宵起請を書くやくそくが胸にあれば此とばをきゝ。又西の内の紙を見て。もふ〳〵何もかも。愚痴ぼい事はやめにして。まァ一ッ呑事だろう。梅行平鍋のふたをとつてヲヤ〳〵。いつそ煮つまりいしたやうざんす。一寸すつておみなんし。此とき廊下をばた〳〵トかけて来るしんぞう梅里。ごめんなんしトしやうじをあけて。里モシィ あの硯筥をちよつトお貸しなんしョ。梅そこにあるからおもちなんし。里そして梅がえさんがおとづけがありいした。アノ先刻の事をおねがひ申しんすッサト。いゝながら硯筥をもつていそぎ行。廊下にてたいこ持。万里ヲット梅ざとさん。うめへものか。里サア。おあんなんし。ト硯筥を鼻のさきへいだす。万又お針衆のところへ豆煎の催促じやァねへか。壽飴はわつちがはづみやしやうせ。里知つたかよふ引ト行。これ豆いりをくつた口は。かならずそのにほひがするゆへにあとで飴をくふ事なり。飴はにほひをけす大妙薬也。万やたらとせきばらいをしながら。梅川がざしきの障子をあけ。おゐらんへ。万里でござります。トいゝながらはいり。次の間へ蟾蜍といふ身に手をついて。八右衛門さま。御沙汰なしは。ちとおうらみでござりますチ。八わらひながらこつちへ来る時兵庫屋のまへで見懸たが。何かいそがしさうに。見ねへふりをしたゆへ。その事ァこつちからいふとばだ。万ハヽァ。さうでござりましたか。それは恐入ました。尾張丁の出ばんで大キに酔いました。時におゐらん。昼間の一件はすみましたかへ。梅まだすみいせん。その事で梅がえさんも。いつそ苦労しなんすのさ。万モシ。八右衛門さま。どふも色男は罪が深ふござります。あなたなぞもマァ御用心なされませ。八そんな事ァ夢にもだ。チトあやかりてへもんだ。ト梅川がかほを見る。梅にっこりしながらつめりいすョ。八アタヽヽ万それ。ごらうじませ。そこらが用心をする所だチ。八おきやァがれ。サア一ッやらう。トちよくを手のひらへのせて出す。万コレハありがたう。トいたゞきおゐらんのお酌とは。あまり結構すぎます。トひとつうける。八紙いれのあいだから一分たし。かみにひねつて。サアおさかな。万これは。両の手に桃とさくらでござります。トいたゞく。今宵万里のこゝへ来るは梅川がたのみにてふかきわけあり。おゐらん。梅がえさんも源太さんにやァ苦労をなさりますチ。梅女郎衆のまよつたのはみんなあァしたもんでおつせへすョ。万何に致ても。昼間のおはなしじやァ。せひ今夜のうちにどふとか。かふとか。お

言葉がそはずばすみますまい。梅それゆへさつきから呼びにおよこしなんすけれど。何もわつちが客人をひとり座敷へおき申て。よその客人の世話を致しいス譯もおざりいせんからまだまいりいせんのサ。八梅がえさんがどふした。梅かうでおざりいすのサ。箙屋の客人で。源太さんといふに。梅がえさんもおまよひなんして。内しやうへも度〳〵よばれて。旦那さんにまで異見をいわれなんしたくらゐなこつざんすのサ。それに源太さんが。すこし浮氣なことがおざりいして。新造衆のげび川さんとわけがおあんなんすトいつて。やかましくいゝなんしたら。源太さんが癇癪を起しなんして。駈出しておしまいなんしたのサ。梅がえさんも。それじヤアすみいせんから。箙屋へもそふ申て遣はしたところが。矢筈玉屋へおあんなんして。梶の葉さんをお買なんしたわけサ。そこで梅がえさんが。つけ斷りをおあげなんすト。梶の葉さんの所から。源太さんの事は。しばらく此方へおいでなんす客人ゆへ。人まちがひのようにいつて。その客を戻しておよこしなんしたのサ。その事について梅がえさんも。箙屋へだん〴〵むづかしくおかけ合なんしたら。箙屋のごつさんが。わつちが所へきなんして。梅がえさんの事をおたのみなんしたわけさ。トはなすもとより嘘なれば。しまいのおさまりがつかずいつまでいふてもはてしなければ梅川もこまりし樣子なり。勿論まんざら形代のなきこヽにはあらず。晝間此騷動がすこしあつて茶やなどをよびにやりし事あれば。それへおにをヽつけてはなしはやくこヽをぬけ出んの謀なり。万梅川が話のおさまりかねしを察し。モシおゐらん。そのおはなしを。しめへまでなさるト夜があけますせ。八いかさま。しやれ本一ツ冊ぶりはたつぷりある。ちつとも早く行て。片をつけてやるがいゝ。トいふも今宵起請をかゝせる約束あれば。すこしもはやく用をしまはせてよぶつもりなり。梅いつそ。つらうおざりいす。トいやさうなふた身ぶりを見せて立ども魂はいつかとんだところへ行てゐる。おきにめへりいすから。あんまり酒をおあんなんすなよ。トすてぜりふをいつて出て行。万梅川が出てゆきしあとを見おくりて。あなたなざア。いつてへ深川のお世界だから。こちらへいらしつては。ものがてきぱきいたさんで。まだるうござりましやう。六まんざらさふでもねへものヨ。こつちへ來て見ると。又こつちがよくなる。すめば都とやらで。近ひ所をすてゝ遠ひ所へ來るも。戀には身をやつすやつサ。万なるほど。いかさまァ。それについて面白いおはなしがござります。ト扇をぱちりといわせて。さる所に六十ばかりなおやぢが。老もんして。今いつた事も直に忘れるゆへ。むすこがグツト案じに。京傳が所の讀書丸一ト

包一匁五分。第一氣根をつよくし。もりおぼえを能するといふ所から思ひ付て。其親父に呑せるト。今までわすれきつて居た古ひ事までが胸へうかんで來て。おれが若ひ時は。よし原も強勢だつた。俄のとき。まつがねやのその卷が。河津と股野の角力なぞは。きもが潰れる。大かなやの白妙が。雨龍の襠を着て仲の丁へ出るト雨が降た吉野やの隱居の唄にやア。さすがの藤兵衛もおそれをなした。小間物やの里八が三味子といつて。たいこ持に出た時分は。おれも中近江の内で大色事師と。魂膽のいくたてをすッぱりはなすトむす子も親父の事なれば。よその人の聞手まへもめんぼくなく。余り不思議と能書をよんで見るト。一切さし合なしはどふでございます。一八おきやアがれ。さし合なしは。ありがてへ／＼

こゝは梅川は八右衛門をうまくだましてざしきをぬけ出し／＼ニう梅ざとがねどころへこツそりといたれば。梅ざともそれとしつて梅川を屏風の中へいれ。あんどうをくちもとへいだして。すゞりばこをとりいだし。むだ書のふみをかいてゐる。これ此屏風のうちの客に。ことよひ梅ざとが初会の客とばけて上りし。梅川が台屋小ごへきぞ待ちどとおもふ忠兵衛なり。

ふなんしたらう。　ま　ら。二　の　へは　もに　り。あ　を

すつかる。忠かえ玉であがつたほど。心遣ひのものアねへ。したが。あの東八が（これわかいものなり。）よくのみこんで。床も小便所のわきへまはしてくれたは。よつぽどありがてへ。梅梅ざとさんと。いろ事をしていゝすをしつておりいすから。そこへつけこみいして。主の事を打あけてたのみいしたのサ。忠どふりで。梅ざとも。おそろしく心遣ひをしたヨ。それはさうト。まアふつとした張りあひから。此よふに迷ふたも。悪縁とはいゝながら。今さらかんがへて見れば見るほどはかなひ身のうへ。しつての通り内は養子の事なれば。何かにつけて異質だらけ。しんるいは一同に親孫右衛門どのゝ方へかへして仕廻と。たび／＼の相談。おふくろひとり不承知で。六ッの時にもらいうけて育あげた忠兵衛が事。實の子じやとおもへば。腹も立ぬ。若ひものゝ事なれば。引に引れぬ義理合で。金つかふやうな事もあるものなれば。まあ／＼しつても知らんふりとありがたいおぼしめし。これほどまでにおもふて下さるおふくろに。ついぞ。いちどもやさしい言葉をかけた事もない不孝な身と。おもへば穴へもはいりたく。もふ／＼此廓をばふりむいても見まひとおもふても。思ひ切れぬ悪縁のかなしさ。身で身をくふとしりつゝ。あはねばとかくあんじられて。内にゐるそらはなく。見世の帳面も手につかねば。一寸外へ小便に出ても。からだがひとりでに。こつちへ來るやうな事で。片時もわすられねへ。梅川。かわいさうだとおも

つてくりや。〔梅〕もつてへねへ。ぬしをそのやうな身のうへにしたも。みんなわつちが悪ふおざりいす。といふて。今さらこがれ死ぬまでも。おもひ切る事はどふもできいせん。それに此やうに。たま〳〵お目にかゝりいす上からは。もしひよつと。どふいふことがおざりいして。これきりにでもなりいしたら。まァその時はどふしいしやうと。おもひすごせば。いつそ死にたくなりいす。此間も東八どんに内證をきゝいしたら。ぬしも二階をとめられなんしたトいふわけでもおざりいせんとサ。ぬしの勘定がさつばり片がつきいせんから。そこで中の嶋やへ相談のうへ。そんならまづすこしでも片のつくまではト。かうなりいしたわけざんす。トきいて腹がたちいすが。此事をぬしもおいゝなんすと。東八どんの迷惑にもなりいすから。もふちつと猶をこらへておいでなんし。あの八右衛門づらのところから。十五まいほど來るつもりでおざりいすから。來たらすぐに嶋やへおやんなんし。すこしでも片がつけば。何も苦勞をしておあがんなんすわけもおざりいせん。そしてもとのとふり龜やからおいでなんし。主はとかく八右衛門づらの事をうたぐりなんして。一ツ茶屋にもおなんなんしたけれど。しみ眞實ぬしに見かへるやうな客人はおざりいせん。ちつとでも。うはきらしい事がぬしの耳へきこへたら。その時はどふともしておしまいなんし。たとへぬしの手にかゝつて死んでもいといゝせん心でおざりいすョ。〔忠〕なんにしろ。二かいのあくまでは。手めへも仲の丁へ出る事ァよすがいゝ。こつちも氣がもめてはらがたつ。〔梅〕とふから仲の丁へはまいりいせんョ。そして初會の客人は斷し。馴染の客人といつちやァ。あの八右衛門づらばかりでおざりいス。

作者曰。梅川が忠兵衛にいろ〳〵はかない物語は。これまでの通本にいくらもありてめづらしからねば。たゞあたりまえ斗をしるす。此やうに互ひにおもひこむと。ほりもの起請はとるにたらず。女郎の顏を墨でぬり。又來るまで此なりで待て居よと。やく〳〵そくにたがはず。女郎は夜着をあたまからかぶり。めし給ふ禿にまで顏を見せず。癪がいたいといふて。昼も屏風引廻して朋輩にも逢ず。三ツどの食事もくはず。たゞその客の事のみおもふて寢て待て居るの類ひ。あるひは又いろ〳〵なるものをかみくだいて。これをほき出して喰せるに。きたないと思はずくふ眞實があるやうになつて來ると。ついに身をはたすなかだちとなる。おそる

べし／＼。
【梅】いつそ。あいだから風が這入て。さむくつてなりいせん。トしきをつてひたる。
【忠】どふもこれが因果だ。此とき八ツ半のひやうし木カチ／＼／＼。やゝしばらくありて。【梅】そんなら。あすの晩はかならず格子までも來ておくんなんし。【忠】承知だョ。梅忠兵衛がかほの上へ。かほつて。しいつそ。こゝを離れてゆくがかなしうおざりいす。トほろりとこぼすひとつぶのなみだ。忠兵衛が額におちて思ひをます。【忠】ぐちをいわずと。はやく行て肝腎のものをとりはづさぬやうにするがいゝ。【梅】かならずおあんじなさりいすな。あすのばんはきつと。【忠】そんなら。その氣で。【梅】格子まできつと。トべらぶをあけていで梅ざとさん。わすれはいたしいせんョ。【里】ばからしうおざりいす。トせうじをあけて見おくりながら下へ行。火入へ火をいれてもち來り。べらぶをあけて。大方消イしたろう。サアたばこをおあんなんし。【忠】ありがてへ／＼。かう。梅ざとさん。おめへはまだ年もいくめへが。此やうに心遣ひをして。しんじつにおもつてくんなさる心意氣が。泪のこぼれるほど。かわいさうだョ。【里】さうおもつておくんなんせば。お世話をいたした甲斐がおざんして。うれしうおざりいす。【忠】二かいでもあいて來るやうになつたら。きツトお禮はするぜ。【里】どふぞおたのみ申しんす。いゝ客人をひとりつれて來ておくんなんし。【忠】そりやァいわずともだ。トおきてしたくをするやうすに。【里】どふなんすへ。【忠】もふけへりやす。【里】ばからしい。まだ早うおざりいすはな。【忠】はやくねへと。内の都合も惡し。又人目にでもかゝつちやア。梅川までがなんぎになる。おめへまでも。うたぐられて益もねへ事だ。【里】それでも。あんまり早うおざりいす。【忠】ハテおれがわりいとはいはねへ。ト頭巾にてかほをすつぱりかくし。はをりを手にもちはしごをおりる。【若】はきものを出すうち。下にてはをりを着る。これ人に風俗をさとられねしうち。【里】おさらばよ。トいふをきつかけに【忠】くゞりの外へいでゝ。ため息をほつとつく。【七ツの】ひやうし木チョン／＼

これ忠兵衛が如才なきしうちにて。此梅ざと若ひ者東八と。いろ事の譯をきゝしゆへ。わざとはやくこゝを出立て。そのぬけがらのあとへ色男をいれさせんはからひなり。こゝらがものを言ずして。人をよろこばせる心いきなるべし。

【梅】ざしきへはいり万里が顔を見てヲヤ。まだおゐでなんしたかへ。【万】おゐらんのおかへりまでトつい長話になりました。時におほねおりはどふでござります。【梅】あらかたすみいしたョ。【万】それはおめでたうござります。そんならわたくしもちよつと梅がえさんの所へ。トきせるをしまい。御機嫌よふ。トそこ／＼にいとまごひしてたちいづる。これ梅川にたのまれて。ざしきのあいてゐるうちお伽をしたの也。【八】ア、大に酔た。ちと寐やう。ト夜ぎを引かける。【梅】おねかし申事ァなりいせ

ん。あらほど酒をお飲んなんすなと申しんすに。いつでもおきゝなんせんョ。頭痛がいたしいすかへ。もんでおあげ申しんしやう。一八 なァにいゝよ。何だかいつそ目がしぶくなつたやうだ。梅 義理一ッぺんでおかいなんす女郎だからさうでおざりいせうが。ほれられた因果だとおもつておくんなんし。トつくえのうへにおきし西の内の紙をまくらもとへもち来り。きやらだいの引出しからかみそりをいだし。八右衛門が目のまへにてくすりゆびの爪の下をおもひきつて切り。血のぼた〳〵おちるを紅ちよこの中へうけて起請を書く。これを血起請といふ。又常にて書く時はおのれが名のところへ血をつけるなり。又牛王のうらへ書くときは名のところへ。一からす目のところと〳〵く血をつける。いづれも起請文の事ト書出し。それよりいろ〳〵たる手まへがつてを書きならべて。もし背かばあらゆる神〳〵の郷名をしるして御ばつをかふむらんとしたゝむるなり。そも〳〵此起請の嘘か誠を見わくるじんびの法あり。○御ばつをかふむらんと書しはまことなり。又○御ばつらをかふむらんとしたゝめしは。みな嘘なり。なぜといふに御ばつうとしたゝむれば文字にあたらざるゆへ。たとへ誓をやぶりても罰にならずといふことなり。諸客この心得あるべし。梅川が此時の起請も。さだめて御ばつうとしたゝめしにうたがひなし。一八 始終のやうすを窺たふりして。見る心のうち。綿のどし。梅 氣にいらずとも。どふぞとつておくんなんし。一八 もふ。これで何もかもわかつた。節句もおれが仕舞つもりに。しま屋へさういつて札をかけさせやう。又十五兩の金も。あした八ッ時分までには持つて來てやるから。まつてゐるがいゝ。梅 夜ぎの中へはいり かならず見すてゝおくんなんすなよ。ト たばこをすい付て出す。此あとの書き文句にたいがいお定りなればこれを畧す。とやかくするうち。はやあけ六ッのかねボヲン〳〵。中の嶋屋の お仲 ハイ八右衛門さま。おむかひでござりますョ。

○後章は自在庵祇徳が名吟
鶯やあまりにめでゝこぼれ梅

玉兎昼眠雲母の地。金雞夜宿不萠の枝。花の五街の會者定離。悟れば何のへちまの皮も。迷えば憂氣身をやつす事。今さらいふも愚痴なれど。嬉しいはいとしさの初め。じれつてへはまゝならぬのおはり。待身なりやこそ疊ざん。トねづみなきする梅川が座敷には。新造梅はる掃除番の禿にさしづをして。おゐらんのたばこぼんや何やかをふかせてゐるところへ。三味線番にあたつた新造。はねたの モシイ梅はるさん。夕ァの三味線番はだれだいふ。はる たしか。あしかのさんだつけ。はね 又こまがおざりいせん。はる あきれ

もしねへ。此間も叱られイしたよ。もふ今月も七ッほど請とりいした。けしからねへ。よくあしかいさんをお聞なんし。

トいふは。清掻をひくさみせんは。糸こまともに内せうがうけとるゆへ。もしなくす時はその番のしんぞうがわきまへて出すか。又は内せうへさういつてうけとるかせねばならず。よつて次の番へあたりしものへそろへてわたした。イヤうけとらぬといふ論。時〳〵ある事なり。又家〳〵によりて清掻のひきやうすこしづゝちがふなり。二上り。三下り。本調子あつてテンテツン〳〵〳〵トひき出す内あり。又あたまからチヤラ〳〵〳〵ゴシ〳〵〳〵トひく家あり。よく〳〵氣をつけて見るべし。

引かはりて中の島屋の女房。お仲 春さん。おはやくお身じまいが出來ましたね。はる たつた今ざんス。お仲 おゐらんはお湯でござりますか。はる 身じまいでおざりいすヨ。お仲 さう申て下さりまし。たゞ今八右衛門さまがいらしつて。せひこちらへよんでくれろとおつしやるゆへ。おしらせ申ながら。おむかひにまいりました。昼間の事でもござりますれば。とふぞいらつしやるやうに。はる さう申しんしやう。まア一ッぷくおあんなんし。トたばこをすい付て出す。お仲 ハイ。ありがたふ。トいたゞいてのみながら。春さん。おまへのお客も。けふ八右衛門さんがつれてお出なんしたヨ。はる アノ。奴さんかへ。お仲 さやうサ。はる いやだのふ。いつそきいたふうだヨ。お仲 なにか氣めへらしいじやアござりませんか。はる ごしやうざんす。それよりそりやア。忠兵衛さんのつれて來ておくんなんした里風さんの方が。しみ〳〵ほれイしたヨ。お仲 あの客人は。ほんとふの息子株らしうござります。はる もちものや何やかが。いつそいきでおざりいすよ。お仲 忠兵衛さんも。今に又お出なさるやうになりますのサ。トきせるのすい口をそでのところでふいて下におき。まアまいりませう。さやうならおたのみ申ます。

トそこ〳〵にしてたちかへる。ほどなく梅川身じまいもでき。衣るひを着かへて今朝内せうからもらいしおまんまのさいあれいにゆく。其風俗。天桃の春を傷るよそほひ。垂柳のかぜを含る容貌。たとへ漢の李夫人をゑがきし画工も。これを寫さば。ついに筆のおよばざる事を怪み。巫山の神女を賦せし宗(宋)玉も。これを讃せば。みづからこと葉の卑しからん事を耻なん。ト作者は筆をすてゝ見とるゝ。梅はるは八右衛門がしまやへ來りしときいて。おなじく衣しやうを着かへ。かむろ梅二にもきかへさせてゐる。梅川ほどなくかへれば はる 今。しまの屋のおかさんが來なんして。八右衛門さんがお出なんしたトサ。おゐらんにこちらへ來るやうに。とおつせへす故。おむかいにめへりいしたトいゝなんすから。あとからと申てつかはしいした。どふなんすへ。梅 めへりいすめへから。いゝやうにいつておくんなんし。はる けふはちよつとでもお出なんせばいゝねへ。梅 さうはかの理窟もおざりいすから。思つてゐいすが。ひよつと仲の丁へ出

たと忠兵衛さんにしれィしたら。どふしいせう。[はる]ばからしい。それもやつぱり忠兵衛さんのためざんすものを。たとへしれィしても。腹をたちなんす譯もおざりいすめへ。[梅]そんならまア。一寸でもめへりいせう。トいふはけふ十五兩といふ金を引とらんやくそくなれば。これよんどころなき所なり。梅はるは梅川が身ごしらへにかゝる。兩褄をよくそろえてほそきこし帶をもつてこれをとめるなり。帶の中へはあふぎをたてに入る。さて道中して茶屋へ上り。すはる時此こしおびを手ばやくとる。しんぞうこれをしまつして客に決して見せぬなり。そのしやうこは客とつれ立て茶やを出るに。來る時のやうに兩づまをそろへてかへる女郎ひとりもなし。みな兩つまのはしをむづとつかんで行。又道中して客のむかひに出る時。よその茶やゝとばをかけらるゝ事あり。此時はその茶やのまへをよほど通りすぐして。アイトふりむいてへんじをするなり。ことばをかけられてすぐにふりむくときは。すがたくづれて見にくしといふ。これ女郎のつねにこゝろがけるところなり。

梅川。梅ざと。禿梅二いそぎ中の嶋屋へいたる。これ一寸逢ふて直に歸ん趣向なり。

[梅]中の嶋やへあがらんとする時。こなたのろじの内からとんでいづる。[忠]梅川が帶をつかんで。此ふんばりめ。トくらはせる。かんざし折て左右へとびちる。[はる]アレ。忠兵衛ざんが。トその手にとりすがりてとめる。しまやのていしゆ[大介]とんでいで。忠さん。これはどふしたものでござります。ト手を引ばつて。わきへつれて行。[お仲]おなじく梅川が手をとつていそぎ二かいへあがる。きうに男にいゝつけて髪結をよびにやる。むめはるは梅二にいゝつけておゐらんのかんざしをとりにやる。此時見世には八右衛門。不通といふかみをあい手に酒をのみてゐたりしが。梅川が忠兵衛にぶたれたるを見て。くわつとせきこみしが。めつたにこゝは口出しをするところにあらず。しらんふりをしてゐて梅川がやうすをみんと。ぐつとおちついて。[八]お仲ぼう。今の雷はよつぽどひかりが強かつたの。[お仲]わらひながら。さやうでござります。トそばへきたり。モシ酒亂といふものア。こわいもんでござりますョ。[通]そこで。こつちが酒らんふりか。[おなか]なるほどネ。トいふ折からはおりげいしや雛吉。ひで次。たいこもち万里きたりて。きうににぎやかになる。

種々の滑稽あれども。梅川の混雜あれば。これを畧す。

[忠]これにはだん／＼譯のある事なればいづれ晩までには來て。わけをつけやせう。[大]左樣なら。さうなされて下さりませ。さやうござりませんト。八右衛門さまの前へたいしても。はなはだ御氣のどくでござります。[忠]わつちも男だヨ。トいゝすてゝわかれる。これ梅川が仲の丁へ出ざる約束を違し怒なり。疑心暗鬼を生ずるとは是非もなし／＼。

折から若ひもの東八來かゝりしゆへ。[大]忠兵衛にわかれ。東八とつれ立。此事はだんまりにて。まづ／＼内へもどりみれば。ざしきも藝者にて大じやれゆへ。なにくわぬかほでまかり出て。八右衛門さま。一ッてうだいいたしましやう。[八]サア／＼。まつてゐた。トさかづさをやる。此とき梅川が髪もできてしたくもよければ。[お仲]八右衛門さま。ちとお二階じやればどふでござります。[万]きめうだネ。[通]二かいで二かいとしやれるがいゝ。[万]どふもきめうでござりますネ。トだしものをはこびながら。はしごを上ッて梅川を見。どふりで二かいへあがりたかつたネ。と皆々二かいへ上り又しやれとなる。梅川もこゝろならず。八右衛門もむめ川が心うたぐりて。

うきたるやうすもなければ。〔万〕めはしをきかせて。チト本ぶたいの酒落として。おゐらんのお座敷へめへりませうじやァござりませんか。〔皆〳〵〕それがよかろう〳〵。二かいのさはぎまづまくとなる。

是より。八右衛門をさきへ立。不通梅川。梅はる。梅二。げいしや筆吉。ひで次。万里。若ひ者東八。しまやのお仲。いづれもつきそひ。おもひ〳〵のしやれあつて。梅川が座敷へ至るまでの道行くわしくしるすも。くた〳〵しければ。先を急ぎて略す。

〔万〕いざ。まずこれへ入らせられませう。〔筆〕しからばごめん下され。〔通〕ふうふ中は。とんだむつましい。〔万〕イヘ。顔はうつくしいが。どふも。やきもちやきにはこまりきります。〔筆〕ヲヤ。ごせうだョ。ト梅川がざしきへ。れつを正しくすはる。八右衛門は正めんに大あぐら。わきに不通すこしそけて梅川梅はるトならびて又大さはぎとなる。おい〳〵珍味佳肴出て。あいあり。おさえあり。おもひざしお手もとてうしのかはりめに。内ぼたんあり。きつねけんあり、テミテン〳〵チリテツトンのわるじやれも。かんじんの八右衛門がうかざるにきりあげて。

〔万〕たゞいつまでも此舞臺。かはらぬはなの顔見せや。中畧千秋萬歳萬ゝ歳とゆたかにこそはまひおさむ。〔通〕おしい〳〵〳〵。折から東八ろう下を通る。〔万〕ヲツト 東印。ちよふどきめうだチ。氣がきゝすぎす皐月の空。此御座しきをまづ片づけなますトいふしやれサ。〔東〕かしこまりました。〔お仲〕春さんの所は。いつもの八疊かへ。〔東〕さやうでござります。〔筆〕〔ひで〕八さん。御手水にいらつしやりませんかへ。〔八〕いきたくつて。さつきからこらへてゐた。ト立て。ひよろ〳〵。〔万〕ハ、ア。さやうなら。小便所をこれへとりよせませうか。ト手を引。〔八〕ア、よつた〳〵。よつたほうから涙ぐみだ。〔万〕奇妙でござりますチ。トみな〳〵どや〳〵と。八右衛門につきそへ。小べん所へ行。その内床コがまはる。不通はすぐに八右衛門にあいさつして。むめはるが床コへ行。筆吉。ひで次。万里。お仲。八右衛門を出たく床へおさめて。ごきげんよふといとまごひしてかへる。

〔梅〕モシ八右衛門さん。さぞ腹がたちなんしたらうに。よく堪忍してゐておくんなんした。忠兵衛さんは酒のうへのわるい客人。どういふわけかしりいせんが。あの通りの仕打。必ずぬしのお顔のつぶれるやうな事はいたしいせんから。さうおもつて。きげんを直しておくんなんし。〔八〕はらの立のたゝぬのと言は。さゝゐな事。仲の丁のまん中で。梅川が忠兵衛にぶたれたを。八右衛門が茶屋に居ながら見物してゐたトうはさされては。どふもこの廓へ面出しがならぬ。あの時忠兵衛と意氣地をみがく事もしつて居れど。内しやうにどふいふ狂言がしてあつて。りつぱに耻をかゝせらるゝ事かトおもへば。めつたに口出しもできず。といふて負けおしみに。茶屋からすぐにかへる事もならず。いたばさみのけふの仕打。ありが

てへ御親切。一生わすれはしやせん。梅ぬしのおいゝなんすは。みな尤ざんすが。忠兵衛さんの事は。今申しいすとふり。とかく酒をのみなんすと。人でも打ちなんしたり。新造衆でもいじめなんしたりなさりいすゆへ。やり手衆も不承知で。もし怪我でもあつては。内しやうへすみいせんト嶋屋へも断。二階もとめられてゐなんすわけさ。大方そんな事を根葉にもつての仕打でもおざりいせうか。どふもわけがわかりいせん。八理屈といふものア。どふでもつきやすひもので。なんだか虚計にされたやうで。根つからうまらねへ。よしんば忠兵衛は。酒のうへが悪ひにもしろ。おもふ存分な事をして心もはれやうが。こつちの身のうへはてらぼうに駄子いやす。トだん／＼話がからんできて。かの十五両の無心もわきのけとなり。節句のしまいもおぼつかなければ。梅川はこゝぞ大事の場所と心をさだめ。屏風のそとへ出て。鏡台の引出しより髪そりを出し。勝山の髷を根元ゟ。ぶツつりときり落し。べうぶのうちへ八梅川が髪のみにいり。なんにもいわずに忍びなき。だれたるを見てびつくり。此あたまはどふしたのだ。梅お帰りなんす道で。おすてなんすまでも。どふぞ持つてつておくんなんし。八やり手にでもしれたら。どふする。梅そんな事は厭いゝせん。八そんなら忠兵衛をつき出す心か。梅きれいにつき出して。ぬしのお顔を立へす。八さういふ心なら何もかもいふ事はねへ。すつぱり。おれが世話をしてやるから。かならず苦労にしねへがいゝ。節句の仕廻も呉服屋の註文も。おもふ通りにするがいゝ。ト胴巻から十五両の金を出して梅川にわたす。梅ありがとふおざりいす。トつゝみのまゝ煙草盆のうへにのせる。八なんぞまだ。ふ自由なものがあるならさういつてよこすがいゝ。ト切た髪を鬼の首でもとつたやうに。はな紙を出してつゝむ也。梅もふしめたものとようら／＼心おちつき。あれさ。それじやア窮屈でおざりいす。トあとはぼち／＼のはなし声もとゞまる所は。たゞいとしいと。かはいゝの二ツまくらに。しばし夢をむすぶ。

八右衛門がかみにて来りし通きいたふうの肌合にて。大みせの新造にはすこしそりがあわぬ風俗なれば。梅はるもよらずさはらず。おもしろおかしくちやうらかされて少し癇癪。コウ梅はるさん。いつ来て見ても。そは／＼ばつかりして。下手の拵へた達广を見るやうに。さつぱり尻がすはらねへの。色事なら。軽ひうちに療治をしなせへ。骨がらみにでもなると。一生の不具になるせ。はるおあんじなんすな。わつちがよふな者にやア。だれもほれてがおざりいせん。通ほれてはあるめへが。おめへのほうからほれるのだから。しかたがねへ。此間まで挿てゐた。きのし屋で大平一ッ通用といふ簪も見へねへの。色男に借りられた

か。此とば甚だきいた風にて禁句也。はるぐッとして。なんとおつせへす。ぬしのやうな御如才のねへ客人は。わつちらがよふな足らはぬ大み世の新造を御買なんしちやア。どふでお氣にやァいらねへのサ。此とば甚だ痛いもんくなり。通 きいたふうをいゝなんなよ。上ゲ棲の下に名の書てある仕着を着るうちやア。どふで座敷贅六に遣はれると思ひなせへ。鉄漿どぶの蛙子を見るやうに。手も足もねへところが。おめへ方のあたりめへだ。はる そらほどにおもひなんすくらゐなら。お買なんせんければいゝねへ。ばからしい。通 こつちの腹の痛くねへ御振舞だから。しかたなしに來るのョ。はる そんならぬしァ神でお出なんすのかへ。はかねへ身のうへだねへ。通 もつてへねへ事をいゝなんナ。かみで來る客人があればこそ。おめへ方のやうなものも。まァ寐所にまごつかねへのだ。地金を出す客人が。おめへがたの歯にたつものか。そりやァ所詮およばぬ戀だョ。トしやべくつてゐる折から。廊下にて梅ざとゐこへ。梅 梅はるさんへ。ちよつト。はる 梅ざとさんお待なんし。ト出て行あとは不通たゞひとり。晝あそびのねるにもねられぬ床の中。まじり／＼してゐると。内證の時計キリ／＼チヤン／＼八右衛門は寐耳にふつと。トおきてしたくをする。八 サア／＼。おそくなつた。梅 たッた今七ッをうちいす。まァようおざりいすはな。八 夕ァの今日だから。内がむづかしい。一寸來て歸るつもりで。おそろしく手間がとれた。トいふところへ不通も仕度をして來る。通 八右衛門さん。もふ七ッでござりやす。なんだか日は短ひヰ。八 みぢかいのじやァねへ。こつちのあそびすごしたのダ。梅はる隣ざしきにて哥がるたをとつていたりしが。不通と八右衛門がお話聲をきゝていそぎ來り。はる ヲャもふお歸りなんすのかへ。あんまりあつけねへこつざんすよ。ト簞笥の引だしより羽織を出して兩人にきせる。梅 どふぞ。八 べらぶのそとから。そんなら。おさらばよ。かんにんしておくんなんし。八 せうちだよ。梅 梅はるさん。おたのみ申しんす。はる ヲャ。どふなんしたへ。八通 はしごをりるおと トン／＼／＼。

實に。女の髪の毛にてよれる綱には大象も繫るゝとは此所なるべし。蜀山の翁がそのむかし詠給ひし。夜見世を春の夕暮は。入相の鐘に花やさくらん。トその香に愛てうかれ人。中のしま屋の暖簾をくゞつてはいる客は。右往左往の其中に。忠 久しぶりで。おそろしく敷居がたかいよ。ト上る。女房。お仲 ヲヤ。忠兵衛さん。いらつしやりませ。忠 大スは留守かの。お仲 ハイ。たゞ今一寸堀までまいりました。忠 時にお仲ぼう。今夜來たは外の事でもねへ。これまで段／＼不義理にしたこつちの勘定。ちつとづゝも片を

付やうとおもつて。都合した端下金。まアこれをとつて置てくんな。ト胴巻からとりいだす小判で十兩。ざく／＼といわせてお仲にやる。[お仲]ふしぎそうな顔をしてうけとりいたゞいて。ありがたふございます。たゞ今宿で歸りますまでお預り申ます。ト勝手の方をむいて。おさかづきをはやくョ。[女]ハイ。ト銚子硯蓋。吸物。いづる。[お仲]お久しぶり。一ッめし上りませ。[忠]いかさま一ッ呑やしやう。ト酒をのんでゐる。ほどなく大介立かへる。女房立て忠兵衛が勘定のことをいつて。十兩の金をわたす。大介うけとつて行燈のそばにてあらため。はながみ袋へおさめ。内ふところへ入て。[大]これは忠兵衛さま。唯今はありがたふ。[忠]少しばかりで氣の毒ながら。ありッたけだ。[大]イエ。大にありがたふござります。[忠]まだ一ッつ言譯をする事がありやす。昼間の梅川が一件サ。よく／＼考て見ると。こつちの内へたいしても氣のどく千万。梅川がめへもめんぼくなさに。どふぞ逢ふて誤らうとおもふても。さしあたつて勘定の引あひが濟ぬうちは。まづ二階をとめられた。トいふ譯ではなけれど。ゑんりよしてくれろと。至極もつともなたのみに。よふ／＼と工面して來た今夜の十兩。所詮足りはしめへけれど。まァ相談もできよふかといふもの。お仲ぼう。さうじやァあるめへか。[お仲]そりやァおつしやらずト當りめへでござります。[大]いづれにも。ちよつと懸合てめへりませう。[忠]善はいそげだ。早ひがいゝ。[大]かしこまりました。ト出て行。しばらくありて大介立かへり。すみしやうすを話してゐるところへ。[はる]せい／＼といゝながら。むやみにかけきたり。忠兵衛さん。よふおいでなんしたよ。トひざのそばへべたりとすはり。ヲヽ、せつねへ。ト胸をたゝきながら。はやくお出なんすように。おゐらんが。トむねをさする。[お仲]忠兵衛さん。さやうならまア。あちらへいらつしやりませんかへ。

[忠]いかさま。かうなつちやア。些とも はやく。[お仲]ちやうちんをつけなよ。[男]ハイ／＼。[はる]サア。お出なんし。[お仲]モシ。おはきものはこちらに。トさきへいで男に提灯をさげさせて。[忠]ヲイ。「忠兵衛が心の内は。けふ梅川が髮を切て八右衛門にやつたる事を早くもしりて。かく計らひしなり。およそ女郎に惚らるゝ時は。萬事油斷なく。さきの心のうちを十ぶんに試し見拔ざれば。眞のいろ客とはいゝがたし。こちらの心を先へ見拔れて。色事仕かけの手管にあふを誠なりと心得るは。大キなるうぬぼれなり。[はる]さきへ行て梅川にかくとつげる。[忠]ゆう／＼とはしごを上る。[東]さきへ立て。梅川がざしきへあんないする。[お仲]じぶんのはきものをしまつして。あとよりおなじく來る。[東]よくいらつしやりました。[忠]久しぶりだの。[はる]お茶をおあんなんし。ト樂燒のちやわんへ。うす茶をたて。茶袱紗の上へのせて出す。[忠]袱紗をとつてひざのわきへおき。茶をのむ。お定り

のとふり出し物ある。梅川は八右衛門が歸りし跡にて髮ゆひをよび。入髮してもと通りのにゆひ直しければ。少しも切しやうすは見へぬなり。

梅 久しぶりでおざりいす。トそばへよりてすはり。たばこをすひつけて出す。忠 とつてのまずにしたへおいて。東八をよんでくりや。梅二 アイ。ト行。ほどなく。東 手をもみながら來る。忠 久しぶりだ。一ッやろう。トさかづきをなげてやり。ぐつと立て梅川がまげぶしをむづとつかみ。ぐひと引ぬけば。もとより入髮ゆへすつぽりとぬける。

皆〳〵 びつくり。忠 コレ東八。梅川は此通り髮を切てゐるが。これまでおかしな噂をされた此忠兵衛。梅川が色客だなどゝ。身に覺もねへ事をいわれるも。段〳〵勘定あひの不義理より。二階へもあがられぬ訳ゆへと。おもへば外ぶんのわるさに。今夜嶋屋の掛合すみをさいわい。來て見れば。大それた此しだら。かならず忠兵衛が仕業だろうなどゝおもはれてはとんだ迷惑。いらざる世話だが。誰に切てやつたのか紮して見るがよかろう。おなかぼう。おらア一寸行て來る所があるから。待ずに歸るがいゝ。トいゝすてゝ廊下へ出る。東 まづ〳〵。忠兵衛さま。忠 直に行て來る。それじやアあまり。トそでを引とめる。忠 ハテ。往て來るから理屈はねへ。まア履ものを出すがいゝ。ト急ぎはしごをおりる音トン〳〵〳〵。東 あとより來て。ト無理むたいにそでをふりはなして。いそぎ暖簾をくゞりておもてへ出るとだんのひやうし。たいこ持万甲ともしらずつきあたる。万 しりもちをついて。ホイ。

かね四ッのひやうし木 チヨン〳〵〳〵。

これより梅川。忠兵衛。八右衛門が仕打いかゞなるか。後篇をまちて見るべし。

籬の花 終

表紙	タテ	五寸一分
	ヨコ	三寸六分
本文枠	タテ	四寸一分
	ヨコ	三寸

廓宇久爲壽序

濁水情なしといえとも月を浮べて。自ら清めたり。草木言ざれども。雨に値て。自然と。花敷く。和光同塵は。結緣の始也。八相成道は以て其終を論ずるとかや。倩〻維看ば。飛花落葉の。初更鐘に。雛妓伽閨の。有爲轉變を悟り。雷光。石火の。影の中に。生死去來の睦言も。如何定離

夫世の幻相を観ずるに。市桝廃れて大和柿起り。磨草縞衰て。槿花顕る。其筆勢は。屠文の両師。鳳東弾妓は。志摩登美に。名高く。三弦の酔書は。蜀先生に止めたり。青楼の小格子は。卽席料理の。摘み物に均しく。西河岸の鶏舌風呂は。青善の献立に類す。土手八丁を照す。八里半の角燈。皆流行に闘かはずと。独嘆息あり

の。別苦なからん夫世の。幻相を観ずるに市桝廃れて。大和柿起り磨草縞衰て。槿花顕る。其筆勢は。屠文の両師。鳳東弾妓は。志摩登美に名高く。三弦の酔書は。蜀先生に止めたり青楼の小格子は。卽席料理の。摘み物に均しく。西河岸の鶏舌風呂は。青善の献立に類す。土手八丁を照す。八里半の角燈。皆流行に闘

なれば折から。訪て来れる。通子あり
書肆。鶴寿堂の主人也。千昔
先生去年編れる。籬の花れ。
後編れ。ドデス如何で萱薦の十
符から。待て居ますると。グット真
面な。催促にヲツト呑込。山桜と。
筆を採て。これや今宵の主人
とは。実に此廊の語なるべし。
落花もとより。心あれども。流水
更に意なし。行ものは。如斯廊。

からずト、獨嘆息なしたる折から、訪て來る。通子あり。書肆。編壽堂の主人也。千時先生。去年編る。籬の花の。後編は。ドデス如何で菅薦の十符から。待て居ますると。グット眞面な。催促にヲツト呑込。山櫻と。筆を採て。はれや今宵の。主人とは。實に此廓の。語なるべし。落花もとより。心あれども。流水更に意なし。行

晝夜を不捨。嗚呼繁花哉春色人を悩して。眠を得ざる㕝ぞ。
戊寅はつ春　豊樂郷之隱士
山人誌

ものは。如斯耶。晝夜を不捨。嗚呼、繁花哉春色人を惱して。眠を得ざる㕝ぞ。

戊寅はつ春　豐樂鄉之隱士　山人誌

○目録

○前章ハ

入相の鐘よりはや己が身の名あるを知らで好をまつらん。そのところに倒衰して瀬となるの声。寂しくそ口を閉ぢ

○後章ハ

見よりもおどろきながら。夫を遅しと待ちゐたるあるさ。そのところに均しくして巌となるの頃。洋くとして耳に満つ

籬の花後編　廓宇久為寿

山山人著

○前章

花街の春色。柳柏の光景。俯て察。仰で觀ば。言語はなの。四季倶に。紅白妍を争ひて。貴妃を欺き。李夫人を壓す。その章臺に。登るの驕者黄金を。礫のごとく。鼎を鐺のごとくに。擲て聊かも惜む心なきは。殆侠客の謂なるべし。榮枯哀樂の相追ふと。昨日の現今日の夢。誰か常有とせざらんや。人皆目前をのみ識て。背後を視もの少なし。只時を得。勢ひに乘じて。遂に亢龍の悔あることを知る者は。古今に稀なり。爰に龜屋の客。忠兵衛は梅川に。相馴染てより。虚をば除て。眞實づく互に漆膠の。契り深かりしが。情を鶩ぐ身の悲しさは僞惑。神も浮萍の。藻に住むしの我からと。與所にもまさなき人やあり。同じ情の捨がたくて。風に尾花のいと乱れつゝ。結ぶ契りも淺茅尾の。おのゝ篠はら忍れど。あまりて人の目にも洩れ。いつか仇名も。立田越ふた道懸る事もやと。疑ふ中の島屋のきやく八右衛門が身を。戀の敵と思ふものから。其身も龜やを當分斷。中の嶋やの客となつて。梅川がもとへ通ひしかば。梅川これを殆と心遣ひし。中〳〵忠兵衛に換て。八右衛門に身をまかすべき心は。露ばかりも。なけれど。爲には義理の憖しくも。嬉しと花の移香を。とめて見せたる。憂氣おもひ忠兵衛は。いよ〳〵心も荒礒の。浪に流るゝ捨小舟。定めなき身ぞ。恨みなりと。忍ぶにあまる戀衣おもひの丈を。梅川が色〻と。言譯しつゝ此うへは。客もとるまじ。仲の町へもいでまじと。堅く誓し約束も。けして虚では内所から會禁も金。忠兵衛が爲ぞとおもふ。一圖よりさすが如才も。仲の丁八右衛門が迎ひとて。出るを知て忠兵衛が。約を違ひし腹立に。人目も恥ず梅川を。打擲なしたる傍如無人。何解語もあらし吹。三室山のむら時雨。氣も紅葉ばの。いろ〳〵と八右衛門が手まへ今は。詮方なく〳〵も。想ひきり〳〵髪切て。漸〻濟すもみな金ゆへ。トハしら菊の露ならで。置まどはせる忠兵衛が。或夜の仕工梅川が。入髪の髷引抜て。若ひものを呼つゝ。我ために仇なる浮名も。口惜や是見よ斯る薄情女。

かならず此后。媚施容語ないはせぞ。あきれつゝと。暇乞さへそこ〳〵に。立出る折から。鐘四の拍木。カッチリそめし紅葉傘。時雨にひらきし前編の。末意は荒増かくのどし。忠かめやののふれんをくどり。久しぶりで。なんだか敷居が。高ひやうだ。お鶴ぼう。此間はよ。トいひながらずつとあがる。[つる]女ぼうなり。ヲヤ忠さん。よふ入つしやりました。誠におひさしぶりで。ござりますネ。[忠]ひさしぶりでもねへ。先刻五十間で。見かけたせ。[つる]ヲヤそふでござりましたかへ。さつぱり知ませんで。お見それ申ました。島屋へ。お出おけでござりますかへ。[忠]イヽャもふ嶋やも。面白くねへから。矢張もとの通り。此内に仕ようと。おもつて來た譯サ。ト火ばちのそばへすはる。ていしゆ[亀吉]にかいよりおりてきたり。これは忠兵衛さん。入つしやりませ。トひざを一ツとんとたゝひて。火ばちのそばへすはり。おつるにむかひ。二階のお客さまはの。此間のうらに入らつしやるつもりだから。お送り申て來させへ。行かけに竹むらの。臺の物を忘れめへョ。[つる]アイ。ト立ながら。喜八どん。挑灯だョ。お履ものもこちらへ廻してよ。トニかいへあがる。[亀]モシ梅川さんの。昨日の様子も。承給はりましたが。どふいふもんでござります。何かしまやも困たようすで。ござりましたが。濟ましたかネ。忠 井戸堀の。棚おろしを見るやうに。濟のすまねへのと言た所が。おさまらねへ譯サ。いつてへアノ梅川と言女郎は。見かけによらねへとんだ。浮氣ものだョ。昨日の譯から。些と又聞た事もあり。どふも内に居ても氣が濟ず。といつて知ての通りの譯で。上る事もならねへゆへ。遣曲工面ですこし斗。今夜片を付。直に梅川が所へ行て見た所が。すつぱり此方の思ふとふり。ゲット あいつが。入髪を引拔て。みんなにきもを潰させた理屈さ。あんな女郎たア。知ずに迷つたもこつちの不運とは。言ながら突出されたと。おもふとどふも心怒事。ぱつかりサ。夫ゆへ。ろく〳〵暇乞もせず。駈出してこつちへ來たも。本木に増る末木なし。昔馴染の所が。矢張頼母しい譯サ。[亀]すこしかんがへ。然しながら。夫じやア嶋やの前が。どふも惡ふござります。忠 何にも惡ひ事アねへ。懸の片も。すこしは附て置し。此うへとやかうと言へば。奇麗に拂て遣るばかりだ。亀 そりやーアあなたの。御氣性だから何にもそこの所じやア。ござりませんが。只梅川さんのところが。お氣の毒の譯さネ。忠 権川がとアもふ思ひ切て仕廻やした。是から又あいつが面を。踏んで見せねへけりやア。胸がはれやせん。亀 そりやアあなたの御疑心さネ。梅川さんに限ちやアどふもそふじやアござりますめへ。トはなす折から。二かいのきやくどや〳〵とおりて來る。女ぼうおつるつきそへ。おもて

へ出る。【龜】サよふなら御機嫌よふ。【忠】もふそつちこつち引だらう。まア出かけて來やしやう。【龜】まア一ツめし上て。トおさだまりのすゞりぶた。てうし。さかづき。先刻よりこゝに出しあれば。すぐにつぐ。【忠】ヲットありサ。トぐつとのんで。サアおあづけだ。今日は昼間から呑續でせつねへ〳〵。トかほをしかめて。さかつきをやる。【龜】モウおひとつ。【忠】モウいやだ〳〵。【龜】サよふなら。ト手しやくでついぐまねばかり。づれにも一寸と嶋やへ入らつしやる方が。よふござります。【忠】どふか法がありやしやう。ト又いそひで。かめやを立出る。おもてにてたいこもち万里。忠兵衛を見つけて。【万】モシ若だんな。どふいふもんで。ござりますへ。私は。あなたが入らつしやつたト聞。急ひで行た所が梅さんは。癪を起て一向むちうの大騒ぎ。嶋やの仲印に。承給はつてそりやアもふ。強勢に膽を。潰しました。それにいま〳〵しさは。あまり急ひで駈るとて。あすこへ這入といふ拍子。向ふから來るやつに。突當て。コレごらうじませ。馬鹿聟の。やつとこサトいふ。瘤が額に此通り。トなでゝ見せる。【忠】わらひながら。その突當たのは。おれだヨ。【万】エ、あなただへ。それとは知ず痛さのまゝに。今まで恨めしく。思つて居ました。夫はさふと中の嶋やも梅川さんの前が。どふも御氣の毒でござりますゆへ。いつれにも一先。お連申て來て下せへト。賴ゆへヲット呑込山水天狗と。鼻を高くして嶋屋へ駈付ました所が。お見へなされず。こいつア急度。龜やと見込で。めへりました所は。きつうござりましやう。何にいたせ是にやア。急度深ひ譯が。ござりましやうから。いづれ胸をさすつて入らつしやる事ダらう。【忠】まア〳〵おれと一緒に。來るがいゝ。ト万里を引つれ。糸丁へまがる。まん里はむめ川がもとへいたる事とおもひ。あとについて行。ト忠兵衛まひづるやの内へ上る。【万】びつくりして。モシわか旦那。トこへをかける。【忠】ヨシサ理屈はねへ。トいふゆへ。万里もしかたなしに。あとへついてあがる。【若】入らつしやりませ。トさきに立て案内し。まづ十二疊敷のざしきへともない。行燈をかきたてゝ。よふ入らつしやりました。今ばんはよほどお寒ふござります。【忠】大キにサ。コウ若衆。龜やへ人をやつて下せへ。【若】ハイ〳〵。ト出て行。引かはりて。「かむろ香煎のさゆを二ツ。盆にのせてもちきたり出す。【万】とりて。ハイ若だんな。ト忠兵衛にやり。のとりの一ツをとつて盆をかむろにかへし。かほを見て。ちつと見ねへ内に大きくなつたの。コレノなべ鶴さんによろしく申て下せへ。【禿】知りいせんよふ。トたゝくまねをして出て行。【忠】里八と藤兵衛とおゐいト おくまでもそふ言つて遣りやな。【万】かしこまりました。三味藤の二めへは。あなたのお跡を慕て來るつもりでござりますが。此等もきつと尋惑て。大方龜やへ搜してめへりませう。トいふところへお定りのすゞりぶた。銚子。盃。臺いづる。コレあの子や。分八どんにそふいつての。おゐいぼうトの。おくまぼうを呼ぶのだヨ。お客なら。筆吉ト秀次が元氣でよから

う。〔禿〕アイ。トたつてゆく。〔万〕まづ一ッめしあがりませ。〔忠〕いかさま心のおち付た所で。一杯やらうかノ。トさかづきをうける。かめやのていしゆかめ吉〔藤兵衛〕〔里〕八つれ立來る。〔亀〕大方如斯事でござりませうトぞんじて。お迎ひの來るをまつて居りました。〔藤〕ヘイ御機嫌よふ。〔里〕だんな。些斗おうらみで。ござります。〔藤〕こゝに罪の深へやつが。一人居やす。〔万〕定ておまごつきト。たつた今その噂サ。〔忠〕亀。今夜の趣向は。舞鶴だョ。トいふは一トくらゐたかきにのぼりて。むめ川がつらをふまんとおもふしうちなり。むめ川〔亀〕これをさとり。むめ川よりすこし手おもき舞鶴をかはば。あとむづかしとおもへども。意氣張づくの矢さきなれば。ゐけんするともきゝ入れまじと承知して。随分よろしう。ござります。さりながら一寸承給はつて。まいりましやう。トたつて行。

一体此亀やは通りよき。茶やゆへ舞鶴も幸ひ客なきまゝに。座敷のようすも殊の外。よければ大に歓び。若ひ者分八に。斯とつげて來り。〔亀〕モシ忠さん上首尾で。ござりました。〔忠〕そいつァありがてへ。お骨折〳〵。トいふところへ。げいしやふで吉ひで次きたる。〔筆〕〔ひで〕ヲャ忠さん御機嫌よふ。わきをむひて。どなたも。〔藤〕サア〳〵賑やかに成て來た。兎角色好ようだが婦人の事だ。折からかむろ〔ひな次つる次〕おもたさうな首をして來る。引つゞいてしんぞう〔ひなづる〕來る。わかいものも來り。〔分〕かめやにむかひ。さやうならあちらの。お座敷へ。ト案内につれて。みな〳〵舞鶴がざしきにいたる。そも〳〵舞鶴が。座敷の光景といつぱ。先上の間どりは。十二疊敷床の間には。探幽の山水の懸物。風袋は紺地の古金襴。一文字は竹屋丁。薄端の花器に四季咲の。杜若を挿たるは。淺草遠忍と見へる根〆。違棚の上には。湖月萬葉の哥書廿一代集をはじめとして。題林八重垣秋の寐覺。種〳〵の書物を飾り。唐机には王義之。文徴明の。法帖物をならべ。臺硯の脇に筑朱の筆立。孔雀の尾。勿論あり。琴は瀧の俤を移し。双六盤は。廣氏のおもひをなす。惣体襖にいたるまで。張付は金紺青の。舞鶴の模様。中の間は。八疊敷。こゝには何にもなし。末の間はお定まりの。六疊敷高蒔繪の長持の。上には二重純子に。緋びらうどの。額蒲團きん糸で。舞鶴の縫ある。黒びらうどの夜着。都て重ね單笥に。至るまでさすが見る目も。光榮てあたりも。照くばかりなり。〔忠〕かみくらに大火鉢をかまへて。くわん〳〵たる容貌。いわゆるくわん平ほうわうとは。かゝる事こそいふなるべし。おの〳〵座さだまつて。〔筆〕三味線のてうしをあはせてひく。〔ひで〕二てつゞみ。〔藤〕うたよろこびありや有明のトほんの座付ごしらぎなれば。袖をかへしておもしろや。チャン。〔里〕〔万〕ヤンャ〳〵〳〵。〔亀〕一寸おいの狂言に。忠さん

お盃。トあんないにしたがつて。優々然と入來るは。
花街に羽をのす舞鶴が勢ひ。さすが威
あつて猛からず。巫女廟の花は。黄
昏の露に色まし。照君村の柳は。雨
の外に翠をなす。知ず月宮の綾伽。
天より影向けん。龍宮の乙姫地
よりや。爰に湧出しかと。暫時言
葉なくして。お定まりの盃カッチリ
お着替ト。舞鶴座を立前後の光景。
種々の興增。色々の滑稽流行
の花言等。數多ありといへども。
混乱しければ。これを畧言。分腰をかゞめて。手をもみ/\來チトお片付にいり。かめやにむかひ小聲にて。
たしては。どふでございませう。亀いかさま。もふ引過だの。トうなづき。モシ忠
さん。チト切あげのちよん/\幕は。
どふでございます。万いかさまチト。
おやすみの江に月は入けり。などもよふございませう。亀むかひ。ふて吉に先商賣道具
を。寶藏へ収めなせへ。忠まだいゝじやァねへか。紺屋丁の夕立を見るやう
に。周章て仕廻ふ事もねへ。ふでしか
しながら。おゐらんの思召も。如何な
れば。里おきァがれ。矢張はやく歸り
てへやつよ。藤秀ぼうなざァ。さつき
から後を向ひて。屈意を幾したか知ね
へ。ひでヲャいやだョ。万大方千ほど。
出たらう。あくび千出と。いふから。里こ
いつァ惡ひ/\。亀サアまづお小用に。
入らつしやりませ。ト忠兵へをさきにたてゝ廊下へいづる。
藤秀さきにたつて小べん所へあんない。藤里万も跡に付添
て。小便所まで送る。此内に若い者兩人
して。手ばやく取片付て。床ヲをま
はし。本間の光景忽ち寂寞となり。
次の間は。膳椀皿さ鉢。ろうせき
として煤拂のごとし。禿おひ/\是
を梯の下口迄運び出す。只屛風の
外には。大廣蓋の三ッ物銚子さか
づきのみぞ。殘りける。忠小べん所より歸りきたり。ア、强氣に醉た/\。亀サア/\ちと。お休みなさるがよふございます。
忠ナア二寐むひ事ァ。些ともなしだ。トいゝながら。床ヨの上へあがる。もつともきたる羽織は先剋ぬがせて。しんぞうが仕まひしなり。
ひな樂燒のちやわんへうすちやを立て。もち來りいだす。忠こいつァき
めうだ。トとりてのむ。亀さやうなら。ごきげ
んよふ。お迎ひは例の通り。忠なんだ
か内を。案じるやつだノ。亀どふも恍
惚ござります。忠つてふ地がねを出され
ちやァ。むり止も罪だ。はやく歸て。顔
を見るがいゝ。亀ありがたふござりま
す。サア/\お暇が出たから。御勝手次
第。ト筆にむかつて。ひでに。おひらきにしなせへ。藤
みんな一緒に。目高鉢と致やせう。ト
めい/\ごきげんよふ/\と頭をさげてぢんを引。かめやはすこしあとへ殘りて。亀雛
鶴さん。おゐらんへ宜敷お頼み申ます。
ひなモウお歸りなんすかへ。おかさんへ
よろしく。トわかれる。今まで賑やかなるも。
大風の吹し跡のごく。靜穩として

唯ボッチ〳〵ト私語声の間には。雛妓の妄言。酒客の。鼾のみ残りて。夜もはや全くに更にけり。舞鶴は今宵初會の。客なれども。仲の丁では度〻見懸。又梅川と深き中なるとは。誰知らぬものもなき。忠兵へなれば。不審所爲とおもひつゝ。床に到る。舞おやすみなんしたかへ。忠まだサ。舞たばこをすいつけ　アイおあんなんし。忠こりやアおかたじけ。トうつむけに起かへりてのむ。舞モシイ主アどふしてまア此方へは。お出なんしたへ。忠なぜへ來ちやア。悪ひかね。舞梅川さんといふ馴染の。あらつしやる客人を呼串ちやア。悪うおざりいす。忠そ、をふり捨て來るもよく〳〵な事ト。察して不便だと思つてくんなせへ。舞ヲヤそんな想はせぶりを。お言なんすト罪になりいすヨ。忠實の事サ。初會からこんな事を。いふのもあんまり馴〻敷譯だけれど。まんざら見ずしらずといふ。理屈でもなし。嶋やの内でも。落逢ふて度〻見懸た。おめへの事なれば。秘隠ず打あけて。今夜初會に上ッたも。はやく言ばまア梅川に突出された譯サ。舞なんぼ主が。そふ言なんしてもみんな知て居ゐす。梅川さんとの譯どふして。そふいふ事がおざりいせう。嘘をおつきなんし。忠おめへ方にまで。そふ思はれるといふも。身に取ては嬉しいけれど、梅川が薄情事には。娼妓こんせうの木地を顯し八右衛門といふ客の。襟に付て欲張きつた。さむしい心あの約束も。此約束も今じやアみんな。反古となり。そでねへ仕打をされて見りやア。足元のあかるいうち。此方から身を引て。あいつが面を踏ねへけりやアもふ此廓へ。つら出しも出來ねへ譯。それゆへわざと爰の内へ上ッたと。言ちやアどふか氣まづひ。よふなれども。是も苦界と堪忍して。どふぞ突合たく(て)んせへ。舞そりやアぬしの。短氣といふもんで。おざりいす。梅川さんに。どふしてそんな心は。おあんなんすめへけれど。それにやア深ひ譯もありいせうし。餘心ばまた悪ひ事が。おあんなんすならよく異見して。おあげなんすが。よふおざりいす。しんに迷いゝすト。どふしても愚痴に。なりいすもんで。おざりいすっ。忠人の異見を聞よふな。女郎なら頼母しいけれど。只欲心にばかり迷つて。客のゑりに附よふになつちやアもふ愛想盡しさ子。舞そりやア主の。疑心といふもんで。おざりいす。欲ばるのも矢張。恍惚男の爲と苦勞を致いして勤めへすを。夫をそふとも想はれへせんとしんに心怒て。逢愛想盡しも申しいすが。言つた後じやア後悔して。誤いすが女郎衆のあたりめへでおざりいす。梅川さんだつてな

か〳〵主を。袖になんす事ァもつてへねへこつざんすが。觀音さんかけておざりいすめへと思い〻すゆへ。堪忍してどふぞ行て。おあげなんし。ト火ばちのそばにつくばつて。左りの手をよこつ腹へあて。右の手で火ばしをもち。灰の中への丶字を。むせうに書ながらいふ。〔忠〕そのよふに眞實に。いつてくんなはる所ァうれしいが。梅川がおめへのよふな心意氣なら。何にも言分なしサ。わつちもあの女郎にやァ。騙されてむだ金も意地づくと。まァ外聞の惡くねへよふに。是迄突合たも。末始終は世話にもしよふと。深く迷つた丈。つきだされたと思やァ。グット腹が立てもふ〳〵。二度と再三ふり向て。見るも嫌になる譯サ。何も手めへの耻を手めへがこんなに。並べ立て猶〳〵耻を。かくよふなれど。又そこにやァ。捨る神あれば。助る神もひよつとして有たなら。あいつが面を踏やうな。事にもならうし。今と成ちやァ。はかねへ事だが。木から落た猿を見るやうに。取付枝もねへ身のうへサ。トすこしふさぐ。〔舞〕しんにそふいふ譯で。おざりいすかへ。夫じやァ梅川さんも。つまらねへ女郎衆で。おざりいす。主と梅川さんとの事ァ。仲の丁でも噂が。ありいす中で其よふにぬしに。思はれなんすといふも。よく〳〵な事でおざりいす。一ッたん浮名も立られた。くれへなら何所がどこ迄も。呼とげ申さねへけりやァ。遣手衆の手めへも。外聞が惡ふおざりいす。〔忠〕義理と意氣地を。立る心じやァ。まァそふいふものサ。おゐらんのよふな女郎衆ばかり。廓にありやァ何にも。客人の腹の立とァねへ。〔舞〕ヲヤわつちも客人にやァ。度〻腹を立せへして。氣のどくな思ひを致しいすョ。〔忠〕そりやァ客人の惡ひのだ。ハテ女郎衆だつて面白事ばかり。あるものでもなし。心持でも惡ひ時に。嬉しくもねへ事を言れると腹も立。客人にも心を怒るような事があるものサ。そりやァ女郎衆の身のうへにありうちと了簡すりやァ。なんにも腹のたつ事ァ些ともなし。馴染で來るうへからは。しんじつづくの所が賴母しい譯サ。〔舞〕そふ主のように捌分客人ばかりお出なんすト。女郎衆に苦勞はおざりいせんが。どふも想ふやうな客人のおざんせんには。しんに苦勞になりいす。〔忠〕外の女郎衆は知らねへが。おゐらんにおひちやァ。其苦勞はなしだらう。〔舞〕傾城に苦はなひものト。見やしやんしたら間違のト。矢口の道行にありいす通りでおざりいすのサ。〔忠〕いかさま全盛に。おもてをはれば張るほど又それだけの。苦勞が內證にあらうといふもんさ。〔舞〕そふでおざりいすから。どふぞしんじつな。相談あひ手になる客人の有いす。よう

に信心を致しいすが。どふも不仕合で。これぞと思ふ客人も。おざりいせんから。しんに苦勞を致ひす。【忠】こりやァどふも虚らしい。【舞】アレサほんのこつざんす。見へにも有と申しいす所を。打あけてチから言すは。よく／＼の事ト。さつしておくんなんし。【忠】虚にもそふいつて。おめへも呼んでくんなはる心意氣なら。どふぞ來て世話をしてあげてへの。【舞】ヲャそりやァ。しんの事でおざりいすかへ。おだましなんすト罪に。なりいすョ。ト火鉢のそばをたつて來て。ふとんの上へ身をもたれる。【忠】馴染の女郎にやァ。突出されるし。こんな間の惡ひ時に。どふして虚がつかれるもんか。自惚らしいが嫌でもねへト思ひなはらば。どふぞ呼でくんなせへ。【舞】もつてへねへ主が。その氣でお出なんせば。すへ長くよびとげへす。氣でおざりいす。【忠】トはいふもんの今夜ばかりの。合せ鏡なら思ひのたねだから。唯ひと通りに突やつてくんなせへ。【舞】ばからしい。ぬしも梅川さんの事を。打あけておつせへすから。初會の客人とも思い丶せず。こんな事を申しいすのサ。一通りにおもひいすくらゐなら。何にも。こんなに氣は揉ひせん。トたばこをすい付て出し。屏風をぐるりつとたて廻して。襠をぬぎ。夜着の中へ。這入。作者いわく。メたものなり。【忠】今まで耻をかいた代りにやァ。是から又梅川が顏を踏んで。見せよふといふのも。おゐらんの心一ッだョ。【舞】呼びもふしいす。うへからは主の顏の。泥れへすやうな事ァ。致ィせんけれど。燒ぼつ杭には火が附安ひとか。申しいすからひよつト又。梅川さんに見皈られるやうな。事が有ィすと。どふも濟イせん譯になりいす。【忠】ハテ一旦わつちが顏を。立てくんなはるものを。何所が何處までも。またおめへの顏を立ねへけりやァ。人情が濟やせん。そんな未練な心が有りやァ。何にもこんなに氣を揉わけは。些ともねへのサ。まだわつちが運の能のには。仕合トおめへのやうな女郎衆に。出會てまんざら。わつちがいふ事も少しは。推案てくんなはるもんだから。夫をちからに梅川が顏を。見けへす氣で居やすのサ。【舞】ぬしが其氣でお出なんせば。しんに嬉しうおざりいす。再ふやうに申しいすがチ。いくら客人がおざりいしても。しんじつ相談相手に。なるやうナ客人は一人もおざりいせん。夫だからチ。どふぞ時／＼お出なんして。末始終迄世話をして。おくんなんし。【忠】來るからにやァ。言ず共すへの末まで。世話をして惡だト言れるまじやァ。女房にする氣サチ。【舞】にっこりとして。ほんでおざりいすかへ。【忠】ハテいつたん言ひ出した事ァ。反古にしねへ氣せうだから。そこで女

郎衆にやア。欺されやすいのサ。[舞]外の女郎衆は。どふおざりいすヵしりいせんが。わつちやアどふも主に罠言へすやうで。くらうに成ィすも。モシイ。はづかしい事ざんすが。しんに迷ひィしたョ。トびつたりよりて。アレサおさげしみなんすト。罪でおざりいすョ。ト跡はポッチ〳〵の閨話にて一向に聞とれず。是正に花木實を。むすぶの。時なる哉〳〵。しばらくあつて。[忠]しんじつその氣でありやア。直に翌日居續して。初會馴染も迷情やうだが。梅川に膽を潰させて。やりてへ。[舞]モゥかふ何もかも。打あけて申しいす。うへからは。どうとも主の心まかせに。成ィせうかチ。これ迄主も梅川さんの所へ。お出なんしてまア浮名も。立なんす程の中で。おざりいすものを。定めてお言ひかはしなんした。事もたんトおざりいせうし。恍惚したうへじやア。ほり物も致ィすやうな事が有ィすが。若しひよつト。そんな事でもおざりいす譯なら。主も隠さずに。いつてお聞せなんし。[忠]成程おめへのすいりやうの通り。ほり物もして居やすが。そりやア今にも消して仕廻やす。[舞]そんならきれへに。消てお仕舞なんすかへ。[忠]知れた事サ。あいつが名を火あぶりにしても。未わつちが腹は愈せん。したが人の事ばかり。咎め立をしても。おめへの身のうへに闇事があつちやア。罪が深へによ。[舞]そりやア。些ともおざりいせん。奇れいなもんで。おざりいすョ。恥かしいこつざんすが。恍惚した客人と。いつちやア今夜がはじめてゞ。おざりいすものを。[忠]こいつア。どふも虚らしい。[舞]アレサしんのこつざんす。疑意なんすなら。どこでも改めてごらうじいし。トあをむけになり兩方の腕をまくつて見せる。

[忠]その白ひ所へ疵を附させてやりてへの。[舞]梅川さんの名を。お消しなんしたうへじやア。どふとも主に此骸は。まかせへす氣で。おざりいすョ。[忠]夫じやアまふ片時も。かふして置がいやだ。トたばこをすい付ておきあがり。うでをまくり吹殺にて。ほり物をやきけさんとす。[舞]アレサお待なんし。たしか袋もぐさが。おざりいした。ト同じく起あがり。ひだなの隅にあるこだんすの引だしより艾をとり出して。こりやア此間だ客人にたのまれて。淋病の藥を。こしれへした殘でおざりいす。それがやくに立ィすといふも。矢張深ひ縁で。おざりいせう。

りん病の藥を。娼妓の製す事。諸客知る所なれば。其法を誌さず。少しづゝの劑はかはれども。艾葉の黒焼は。大概加味する事なり。

忠こいつァきめうだ。チットあかるくして。くんなせへ。舞たつてあんどうをべうぶの内へ入れる。これでようおざりいすかへ。「これより忠兵衛は。もぐさをもつて腕のほり物梅川が名を燒消す。此うち舞鶴は。しかみ火鉢の中の炭を。まん中へ搔寄煙草盆の。火入の火をとり分て。ブウ／＼／＼／＼ト吹おこし。屛風の外に有。銚子をとつて。燗をする。夫人の心を惑す事。色欲にはしかずト實なる哉。和漢ともに女の爲に。身を過まつ事。あけで算ふべからず。哲夫は城を成し。哲婦は。城を傾く。恐るべし／＼。

忠サア此とふりだ。是でいひぶんは有めへの。舞ヲヤ／＼眞赤に腫へした。さぞ炎うおざりいせうチへ。忠なァに。そんなでもねへのサ。舞まァ一ッおあんなんし。トさかづきをとつていだす。忠こいつァ有かてへ。ア、能燗だ。ト二三ばいのみ。モウそつちこつち夜が明るだらう。チット寝る事に。しやせう。トとこへはいる。舞アレサまだ色／＼。はなしがおざりいすから。おねかし申は致ィせんョ。ト屛風をもとの如くたてまはして。おなじくとこへはいる。○評に曰く。忠兵衛今宵初會とはいへども。兼て相識る中にて。舞鶴も情移に。おもはざる心より。互ひに言を明白になす事。是ひとへに人情の。然らしむる所ならん。譬へ一夜といへども。百夜の契りを結ぶは客の才不才に有か。將娼妓の愛緣奇緣に。よるならん耶。

○後　章

天地開くるの始め。淸るものは靉びいて。てんつる天となり。濁れるものは沉りて。ちんちり地となる。その中に人有て。三才の糸をかけまくも。實や賢きかみごまに。三弦の棹しかの。八乳の音じめ彈立て。客浮しに騙し給へば。金はかりに遣給ふ。神代のむかし／＼より。千早振るゝも。情染も。天の岩戶の床の中。開きこそ尙おもしろからめ。情も鈿女のみとりに。腹をたちからをの。力瘤は大に神がる事なるべし。爰に舞鶴が妹女郎。折づるが客風子會方の。とり扱ひが氣にくわねへ。と言て夜更小更に。若ひ者を呼付。床のうへに大安坐。銀の煙管を。ヤニサにかまへて。人惡の太平らく。風コレ爰の内の。家風かァ知ねへがナ。成佛不遂た幽靈を見るやうに。時々面ァ出しちやァ。姿隱去る女郞を。片じめへだの。早仕舞だのト風ッ吹の湯屋を見るやうな。名を付てお客さまへ出しても。濟と思ふかへ。此方がナおゐらんごかしで。突やつて遣ァ道具市の。入札を見るやうに。おかしく附上るのか。氣にくわねへ。若それは頓だ事で。ござります。

[風]葛西舟の元〆じやァねへが。糞おろしにする事も。知て居るがそんな事ァこつちの畑にねへてんだ。[若]至極御尤さまでござります。皆あのお子が悪ふござります。ヘイ〳〵〳〵〳〵。[風]コレ釋迦の。誕生を見るやうに。首から茶にされちやァ。猶了簡がならねへわへ。[若]イエどふ仕まつりまして。茶に致すのいたさぬのト。入仕事の普請場でもござりません。へゝゝゝどふ致して ヘイ〳〵。トむせうにあやまつて居る。客はいよ〳〵まつかくなつて。たいへいを並べるところへ。つんとして入り来る。[折鶴]何ざんすへ。ばからしい。若へ衆をおよびなんして。大きな声も氣の毒でおざりいすヨ。腹のお立なんす事が。おざりいスなら堪忍しておくんなんし。ばからしい。ト若ひ者にむかひて。モウ此たァ行せへヨ。[若]ハイ〳〵さやうなら。御機嫌よふ。ト兩の手をひねくりながら。廊下へ出て。心で大べらぼうの大はなッたらしめト。口のうちで言ながらゆく。[風]馬鹿なつらナ。

おとなしくして。居りやァあんまり安くしやァがる。[折]なんざんすへ。もつてへねへ。主のやうな客人を。麁末に致イすト罪があたりいすヨ。何事も手たらわぬがちの。事ざんすから可愛想だト。見すてずにどふぞ來ておくんなんし。[風]コレそんな。古ひ手を出してもナ。くふやうな。お客さまじやァねへわへ。[折]ヲャばからしい。主ァ手をおあんなんすかへ。大江山の酒呑童子を。見るやうで。おざりいすねへ。山伏さんの料理ばんが。切て居す所が。小冊草ざうしにおざりいすヨ。[風]コレ悪くしやれるなヨ。いくらりきんでもナ。あたまの物ァ八重借の。損料で。モウ鏡と入替も承知ァしねへ。此襠も縫を解ちやァ。色〳〵に染て返し。とゞのつまりは黒とする見込だらう。年明前の欲ばりで。お針衆へこつそりト仕事を教へてくれろも。大われへだ。トむせうやたら禁句のさしあいを知つたりぶりにならべ立るといへども。さすがに大見せの育ちゆへ。人がらよく風の柳のしなやかに。

おもしろおかしく。あやなしてどふぞはやく。夜が明ればよいトまつ心のうち。實に苦界と謂つべし。君子は和して。同じうせず。小人は同じうして和せず。后の讒種となるこそ。古今の未至なるべし。話説も忠兵衛は。舞鶴が赤心の情に。惟々として思はず。漆膠の契りを結びしも偏に。梅川が意を不審。一朝の怒りに其身を忘れ。遂ひに斯る事とはなりて。夜明ぬれど居續の。二會馴染に一際花やかなる。昼の座敷。又夜の光景とは。大ひに異なりて。湯あがりの媚妓。塩引の朱を奪ふ。紫の瘂(痣)は夕ァのくせつの。俤にして顔に畑の繼妓は。百性の娘にもあるべからず。そばかすだらけな禿。粉屋の親判にもなかるべ

し。笑窪も。あばたと。へんくわの玉磨ぬ疵の。有る無きまで顕はに知れる昼の世界錦の裏に。くわしければ今更又いふも。くだなりけり。爰にまた梅川は。此舞鶴が座敷と向ひあはせの。住居にて往來ひとつ隔つばかり。どちらも同じ表ざしきに。忠兵衛が笑ふ声幇間が。洒落る言葉。しんぞう禿がはなしまで手に取るやうに聞ゆるも。是皆聞がしと云ぬ斗の擧動に。梅川いとゞ悲しさの。泪に沉む心ねを。岩間の貝の。かいもなく只欝々ト一人寐に。昼もさびしき屏風の中。癪が邪魔してふさがせる。折から廊下をばたばたとかけて來るしんぞうの梅春。梅川が枕もとへぺつたり居りて。なみだごへ。[春]モシイおゐらんへ。舞鶴屋の。二階に忠兵衛さんがお出なんして。アノ騒ぎをお聞なんしたかへ。あんまりな仕打とおもいひすト。いつそ口惜くつてなりいせん。おいらんの客人と。いゝす事ア花街中で。みんな知ていすこつざんすから。附断のみをおあげなんすとも。亀やの御亭さんを。呼なんして一通りは。むづかしくおいゝなんすがよふおざりいす。しみ／＼腹が立て。なりいせんョ。ト肩先をふるわせて涙ぐむ。[梅]先きから何もかも聞て居ィすョ。その事も心付ては。いゝすけれど。あの矢先へ何を申て。遣はしいしたとつて。中／＼聞入なんす忠兵衛さんの。氣せうでもおざりいせんから。まァ主の心の濟いすほど。どふでもしなんすが。よふおざりいす。トしのび涙の友千鳥。ほれぬひてゐる傾城の心はなか／＼別なるべし。折からかむろむめ二一散にかけ來り。[三]モシイおゐらんへ。今忠べいさんがヰ。舞鶴さんをお連なんして。仲の丁へお出なんした。格子先でヰ。いつそおいらんの事を。悪くお言ひなんして。夫が悲しくつてなりいせん。ト廓になれたる子雀のないてあわれやましにけり。[梅]モゥなんにもおいゝなんすな。これほどまでに。苦労を致いして。どふぞ主の都合のいゝよふト思いゝす心が。届きいせんで。こんな災難に合ィすといふも。なんぞの罸でおざりいせう。邪見にされれば。されへすほど尚未練がおこりいして。何の事も思いゝせん。たゞ主のそばつかり。氣に懸りいすも染々。悪縁でおざりいす。[春]おいらんの心が。それでお出なんすを。脇にしてあァいふ仕打をなさりいすから。しみ／＼腹が立ィす。トハ申いすものゝ。忠兵衛さん達ても。その分ッてお出なんす客人で。おざりいすからよく其譯さへ。立いしたら。今にもお出なんすは。急度でおざりいす。今仲の丁へお出なんしたなら。大方亀やでおざりいせうから。梅二を連てチョットめへりいして。忠兵衛さんによく。その譯を申ィして。おいらんの

あかりの。立いすやうに致しいせう。舞おありがたふ。おざりいすが。舞鶴さんも。お出なんすもんだから。若そこがひよつと。意氣張づくでチ。忠兵へさんもいろ〳〵。愛想盡しな事でも。お言ひなんすやうになりいしちやァ。猶〳〵恥をかく譯ざんすから。まァ打捨て置て。様子をごらうじいし。春それでもあんまりでおさりいすト。「意氣地をみがく廓の。ならひ眞實誠に。恍惚ては凡そ。娼妓ほど情の深きはなし。夫にはあらで忠兵へは。まひつるを伴ひ。仲の丁の鑑やの二階。一しほ晴れた。ひるの遊びも。いつしか金烏西山に隱れ。玉兎東海に顯れて。花また紅葉の色深く。誰かこゝに春秋の。時を知らんや。夜見せのすがゝき。チャミラ ゴシ〳〵〳〵。素見。地まはりの。そゝりぶしイタコ「むさし野の原に夜昼あのきり〳〵す。思ひ切れきれ切れと鳴く。「おばこ來るかやァと。田歩のはしこやまで出て見たが。「いふとも。ろく〳〵聞すに。腹たつ木至てん。聞た風りん。そばうり。あまざけ。あつたかいコリヤいよさの。すいしよで。氣はざんザ。○有造無造の往來を。狹しと歩行一隊は。舞鶴が客忠兵へ。酒の機嫌の。千鳥あし實あかしのうら馴染み。今宵もなかして。居續に南華のゆめおやや結ぶらん。爰に又幇間万里は。かねて梅川より恩澤を蒙りければ。忠兵へが今日の仕打を。氣の毒におもひ。舞鶴やの戻り懸。ひそかに立寄。下座敷にて。新妓梅春に逢ふて。何かひそ〳〵耳うちし。[万]いづれにも翌日の朝。鑑やまで一寸チ。[春]おいらんト相談して。置いしたが。そのつもりでおざりいすョ。[万]さやうならかならず。おゐらんへよろしく。トそでをふり〳〵いでゝゆく。○花と寐る。霞も鐘の別れかないとし可愛もおさらばに。その移香は殘りけり。忠兵へは鑑やへ立歸り。湯豆ふの熱燗は。ひつかけるとも。引懸られぬ。今朝の拂ひ〆て八兩三分二朱。あァひよんな張合から。とんだむだ金を遣ふたト。おもひそろへくそろばんの。玉けて居たるその所へ入來る。梅川がしんぞう梅春。夫と見るより。忠梅春さんお早への。お客をおくつて歸懸かへ。春イヽヱ主に。ちつとはなしが。おざりいして。めへりいしたョ。忠ハヽア おれも。おめへにやァちつト。はなしがある。サア湯どうふだ一ッ吞な。春おありがたふ。おざりいす。一ッおいたゞき申いせう。トそばにある茶椀をとつて。これに致しいせう。トあをつきりで一ッうけるも。忠兵へにいゝぐさあれば。さけのいきほひに乘じて。發言せん下タごゝろなり。忠サア〳〵

豆ふをくひナ。春おありがたふ。ト湯どうふの湯を一トすゝい。モシイ忠さん。おゐらんの事ざんすがネ。トいひ出すを。忠梅春さん。その噺も聞かふがノ。まアわつちが噺を先へ聞てくんなせへ。外の事でもねへ。ふつとした張合で。乙日の晩から舞鶴やに。居續はじめて行た内とい〻。又こ〻の内も知てのとふり。暫らく馴の道にして。今朝の勘定はまア。貸てくれろ共いひにくし。人を頼んで取よせるまでも。懐中を見られる口惜サ。なんと梅川に些の間。十兩ばかり働イて貰て來て。くれる事ァ出來めへかの。春ぬしのお困りなんす事を。申いしたら。よもやおゐらんもいやとは。おつせへすめへ。悪イとなつちやァ假令いやと言れても仕方ァねへが。そこが背馴染と。紅花染だ。春そんなら一寸行て。あへりいせう。ト急ぎたち戻りて。斯と梅川に告げければ。梅川は兼て忠兵へに遣らんと。八右衛門より貰し十兩の金を。ざつト封して置けるを直に。梅春にわたしけるま〻。梅春は又鶴やにいたりひそかに。これを忠兵へにわたせば。忠兵へも。思ひがけなき金を得て。歡びつ〻見れば。ざつト封して上書は。忠兵へさま梅より。とするしあれば。封おし切て。これを讀に。その文言にいわく。

一すじにまよふ心も二すじに。今ぞわかる〻道のくの忍ぶにあまるうらみをは。いきてものおもはんよりも。さへて嬉しき命にてこそれへ。さるにてもはかなきは。かくとも知らぬ睦言に。ともに遠山の雪を見んとよそふは。しらぬかねとを。さよの枕にかはせしも。みな僞りの世なりしを。まこととたのむあた心。さこそおかしくおほすらめと。いにし事を罪深く。くやみはべり〳〵し。

ト讀より忠兵へ心のうちで。扨は梅川は我に見捨られしとて死る覺悟か。可愛やト おもはづ。泪のハラ〳〵。又立皈る執着の想に迫る。眞實誠暫らく。言葉もなかりける。春おゐらんの苦勞も。みんな主のためで。おざりいすものを。少しはさつしてお上なんし。忠みんな此方が悪るかつた。其言譯には歸りがけ。ちよつト立寄て謝らうから。さきへつて此禮を。よく梅川へ言てくりや。春そんならかならず。お出なんしョ。ト立ところへまん甲來り。万コレハ梅春さんけしからず。お早い事ネ。時にモウお歸りかへ。ト白ばつくれて別れるも。かねて承知の事なるべし。旦那如何で。ござりますネ。忠イヤきついものサ。これ

じやアどふも。未練が起る。したが舞鶴が事も。氣の毒なもんだの。[五]ハヽア兩の手に。桃と櫻の花角力取組でから。負たものがふ運サ。[忠]いかさま今と成ちやア。さふより外に志案はねへト。これより総やへ勘定を仕廻。万里を引連て。西河岸の丁子風呂にいたる。抑〳〵此泉湯は當世流行にして。都て會席の風流善盡し。美盡せり。折鷹極揃の。煎茶。南京の器に薫りを染め。舟ばし屋の菓子。樂燒の皿に奇麗なり。青竹の灰吹は。口切の式を學び。屠龍先生の画は。賓客の目を驚す。のしこんぶの。盃事は。萬歳の始めを祝し。青善の献立。もつともきり目を正しうす。莚上の雅品。俗樣をはなれて。古今別の世界なりけり。忠兵へは是より万里に別れて。只獨梅川が。もとへ來りしも。舞鶴が手まへを

忍ぶ頬包。隠せど色か梅ばちの。紋はたしかに忠兵衛さんト。見咎られしに氣も付ず。上るやいなや。禿が使ひ舞づるがふみ。梅川が返事もさすがつのめ立。うしと見しよぞ今は。意氣地の張合に。妹脊へだつる山〳〵の。恨みもよしやよしの川。おなじ流れの身をくみて。舞づるが座敷には。繼妓禿口〳〵に。「よふおざりいす。性悪な。客人ならお歸りなんす時。大門に附へして。お連申て來いす斗で。おざりいすヨウ。覺悟をしてお出なんしヨウト。いふ声に又梅川がざしきより。「與所へ馴染んでお出なんす。客人をおあげなんすトいふは。万治以來でおざりいすヨウ。此方の客人へ。指てもおさしなんすト。罰があたりいすヨウ。トロ〳〵にいふを。[梅]モウだまつて お出なんし。こつちから彼是申ィしちア。悪ふおさりいす。トいわれて

だんまり。[忠]そんな事ァ打捨ておいて。皆か酒を呑がいゝ。ト是より車座に居り。色〳〵下卑喰に。暫く時を移しける。前後の光景くだ〳〵しければ略す。忠兵へは大酩酊となつて。梅川に伴れて床にいたれば。其儘倒れて。前後忘大の字形の。寐姿にフツト氣の附く。腕のほり物赤く腫れて消した跡。見るより梅川目にもつ涙。只一圖におもひ込。男心の嫉妬やと。身をふるはせて。ワツトばかりに嘆き沈む。こへにおどろくむめはるが。[春]モシイ おいらんへ〳〵。トゆりおこされて。[梅]ホツト。ついたるためいきに。あたりきよろ〳〵見まはして。エヽ怖ひ夢を見ひした。ト咄すは箕輪の。別荘に。病氣保養の。引籠中。繼妓梅春が。看病の枕もとにて小鍋立。[春]モシイ 粟の。粥が出來イした。トいわれて。[梅]そふでおざりいしたつけね。チツトの間トロ〳〵ト眠りいした中に。おつな夢を見いしテ。いつそ

氣にかゝりいす。トなみだはら〳〵。盧生がおもひ。呂翁が術。邯鄲の枕にかゝる憂氣おもひ。今は中〳〵堪へかねつゝ。忠兵へ方へ斯と告て。或夜月なきを幸ひ此別荘を忍び出。二の口村迄の道行は。院本に譲りて。筆をとゞめ畢ぬ。

廓宇久爲壽 大尾

来丣歳春叢販　山人著

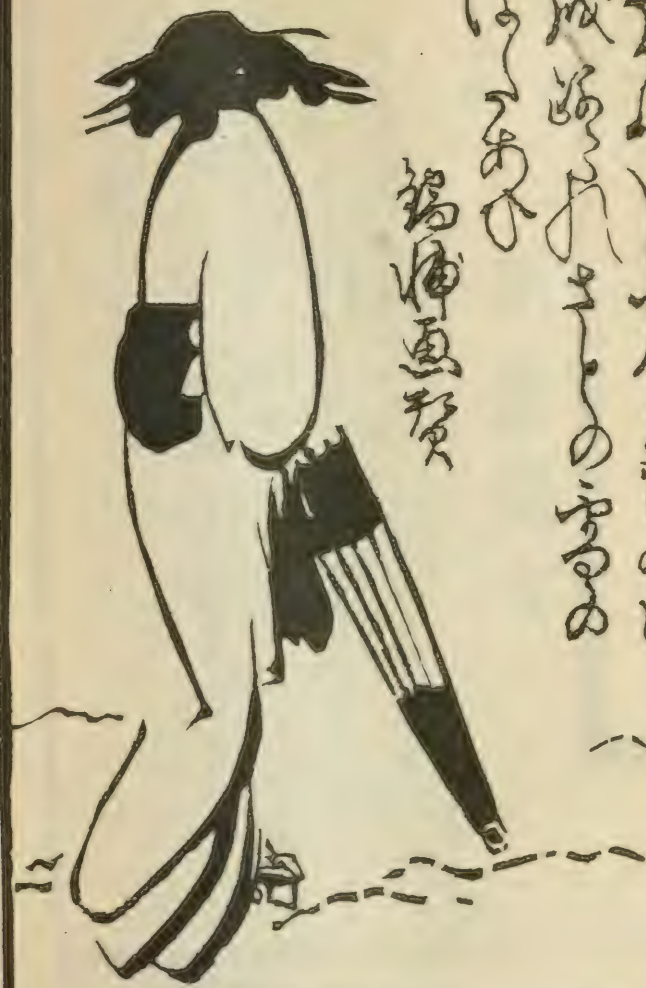
娼妓筆硯　花街壽圖女

うき川竹に身をよくしづまる。里まちめはちを八幡の
さくせんより。筆をまるめ発生舎かごを飛せしく
世に引目出て祝ひてチヨこ／＼まくまめそめし
もとし気のうんさん極秘傳の。薬と硯より不の水
されろ。新るりのあらん

新潟繁昌記
八百八後家
後乃月見 全

表紙	タテ	五寸四分
	ヨコ	三寸九分
本文枠	タテ	四寸五分
	ヨコ	三寸一分

序

越後新潟の港は。其國第一繁榮の地にして。遠近の千船百舟繋船し。奥羽信州はもふすに及ばず。諸國交易の地にして甚盛也。されば當地の名物は八百八後家と世にいゝふらし。他の國までしらざるはなし。八百屋後家と心得違いたすべからす。當地は船頭又は近鄕近國の集客多ければ。後家にも色〻あり。二朱金なげたてば大人のもふけをなし。或は甚九またおけさとかいふ北まへのうたなどにて。三線太鼓つゞみなとにてうたゐ踊る事さもゆたなるべし。すごしては鮭の名物當地

の川にて漁し。他の國と違。また濱邊に望めば大小の魚鰯網など。漁賑しきは。みな此集客後家の樂しみ思ひやるべし。

辰の年初秋日

筑紫

甘泉醉翁印

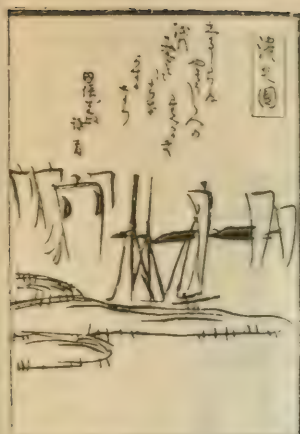
新かた後の月見

ものにあた名をおほすること。ひとの上のみならず。お初天神鮹薬師。たこに天蓋の名有。年魚をかみそりとよぶ。かどに五木の柳をうゑて。五柳先生とよばれ。松を植しを栽松の道者と唱ふ。小杢の内府を燈籠のおとゞとよべば。良覺上人を榎木の僧正とよび。源語にゆひくひ。ひるくひのおふなのたぐひいと少なからず。此八百八後家も。あるひはその人のしなにより。またはわかれしひと有さまによりて。あた名をつくるなりけり。　げて　ぬをやね石後家とよべば。　てを巾着後家と名ずくるたぐひ。皆と〳〵にゆゑよしあれば。此まきをひらき見て。其よしをしり給へね。はなのいろまひしたるたをやめに競ては。其俤のやつれたれど。霜夜の床の寐覺がちなるをり〳〵に。心をなぐさめ給ふみさわひにもと。なにがしの後家。それがしの後家と。かきあつめ。にひかた後の月見となずけて。一巻のとぢふみとはなしぬ。

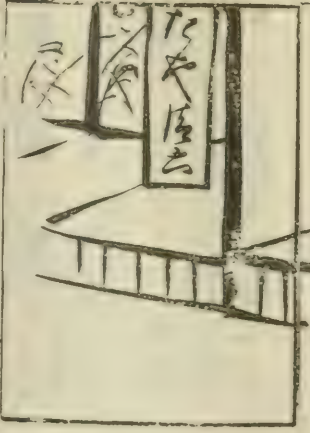
凡例

○代四匁 上着は上田しま、相着しま縮緬、地はんひかのこ、帯くろしゆす、または二重どんす、何れも美玉とし給ふべし

○代三匁 上着しまつむぎ、相着まわりむく、地はんなるみ、帯むらさきちりめん、またはどんす、まゝだれかけにて、女房きどりもあり

一後家連名不同にして順ならず、尤其さまいろ〳〵千じや万別たるべし、玉高樓の御製民のかまどの鍋にはあらねど、みな冨貴ひん福このしりにや有けむ、おもて家ニて小女子などを遣ひ、いやしからぬもあり、うら家ニて ひそかに我家ニて客とる、其ゆへ尋知り給へ

うさ虫ごけ、ちよんがれごけ、しぼりごけ これは紺屋より出づるなり、椎茸ごけ 禅寺より出づる、じざいごけ みすがらぼうずを一人りかくまふておく故なり、とちめんぼうごけ、擂鉢ごけ、やれこらごけ、角力取ごけ 嫁でもとらねば食われぬ、引だしごけ、徳利ごけ、きんちやくごけ、客をいれると戸をメるゆゑ、敦盛ごけ これはもとはくまがへ小次郎ニすがる、柳ごけ 顔はあをく柳の葉のごとく、姿はほつそり柳ごしなれば、文人ごけ これは女なれども學者也、頼政ごけ、佛供米ごけ 少づゝでもよいから時々もつてこいと

ふい、どらごけ、十八里ごけ 前からみてびつ九り、後から見てもよい妾とびつ九り、合せて十八り也、おにかみごけ、燈心おさいごけ 油屋より出づるなり、三味せんごけ つねニ気性高くして、ひんしやんするゆへ也、西行ごけ、頼朝ごけ 美大将なり、北条ごけ 紋三ッは、うろこ也、松寡ごけ まつ山村よりいづる也、神とうごけ、狐ごけ よく客をたぶらかす也、ますかたごけ、火吹竹ごけ あたまニすこし穴あるゆへなり、甘味噌ごけ、三番叟ごけ 我客は外いやらぬとほうんも、椿ごけ、やぐらごけ、百日紅ごけ 髪かざりはよけれども着ものなき故、みゝずごけ 聲はやさしうて、顔みせず、白雲ごけ、荒熊ごけ、鰹節ごけ これは味ある故也、屋根石ごけ 客をさぬ故 と、土びんごけ、本間ごけ これは、家名、芋がしらごけ、里芋ごけ、いもがらごけ これはおや、子三人なり、もみとふしごけ、往生ごけ、大名ごけ、かつぱごけ、夕立ごけ このなさけのゝ事、ニあふ人、るがどし さかねごけ 古かね買より出づる、阿弥陀ごけ いかなる者ニても頼むならば、そむかぬとの誓願なり、やげんごけ、やちげたごけ、鐵の棒ごけ これはおにごけの親類なり、火元ごけ、牡丹餅ごけ、とくしんごけ、むめぼしごけ、七尺ごけ、天文ごけ、屏風ごけ あまり風よけニなるゆへ て、糠ごけ 米やよりいづる、ほうだんごけ、田むらごけ、南京ごけ、けし炭ごけ、夏大こんごけ、なぐらごけ、棒喰りごけ これ天秤商人かちる也、くす蒲團ごけ 見かけより、ないし、よふく〳〵している、脛かぢりごけ これは姉の、蓑蟲ごけ、くねまたごけ、かう〳〵

じごけ（あまりさべるゆへ）、あい〳〵ごけ、義経ごけ、潮来ごけ、とらごけ、赤玉ごけ（これは鳥居の木ニすめる）、さどやごけ、ふじやごけ、閻魔ごけ（是はおにごけの地主なり）、辻ばしごけ、しるのごけ、助六ごけ、少々ごけ、鎧ごけ、かぶとごけ、嵐ごけ（これは瘡毒ニて鼻のつぶれしゆへ）、またはたごけ、あしべごけ、獵人ごけ（くま太郎を殺したゆへ）、、金時ごけとも、大こくごけ（むせふニさづけ給ふなり）、ふり出しごけ（たわらや小じニて、元は醫者の女ぼう也）、、薬鑵ごけ（あまりゆへやハ故なり）、、うしごけ（客をみると涎をたらすゆへ）、

やにごけ（羅宇のすげかへよりいづるゆへ）、けら〳〵ごけ、かなけごけ、魚のめごけ、七尾ごけ、火うちごけ（あまり悋くつて爪ニ火をともす）、、張抜ごけ（表ははれども中。からは空也）、なまくらごけ（客ニなじむと切る事なし）、、はな紙ごけ、けや木ごけ（氣がせうふ）、先ぶれごけ

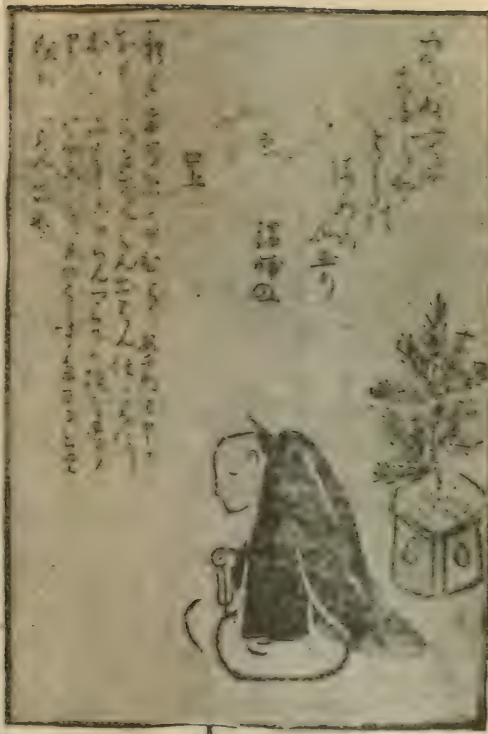
もとは蕪菁の女房也、蜜柑ごけ よく客ニ身の皮をむかれるやつさ、たいこごけ 少し気が足らぬゆへどんつく〳〵、青表紙ごけ いしやの女房、串柿ごけ いろは黒いけれどこつくりと甘味が有なり、からかさごけ りゝらほたりだ、鳥の骨ごけ 叩くほど嬉し、はぺんごけ 年寄のくいものニは、骨がなくて、柔らかで吉がる

宇治ごけ 人がなニいふても、よく茶にする故、のこぎりごけ むせうニ、人の氣を、ひへて見たがるゆへ、空俵ごけ こだしニはなれしゆへなり、たばこ楠のぼうこんごけ 村上の山しに身、をまかせるゆへ、たばここなごけ 人がめつたニ貰てはなし、時のかねごけ これは大好物ニて人嗅ゝかる時ゝ、たゝみごけ いかなる人も皆うらかへす故、うらをかへせば、とく用な代物也、線香ごけ よく灸すへてくれる、玉子ごけ おやが仕切りゆくなりと、弓ごけ あまり張が強いゆへ、くぎごけ 客ニ身打こむゆへ、雪ぐつごけ これは顔の似たるなり、名劒ごけ これはよつほど口も切れるし、[illegible]いたる代物なり、ところてんごけ 錢のない客は、さつ、とつき出すゆへ、鞘割ごけ たかに

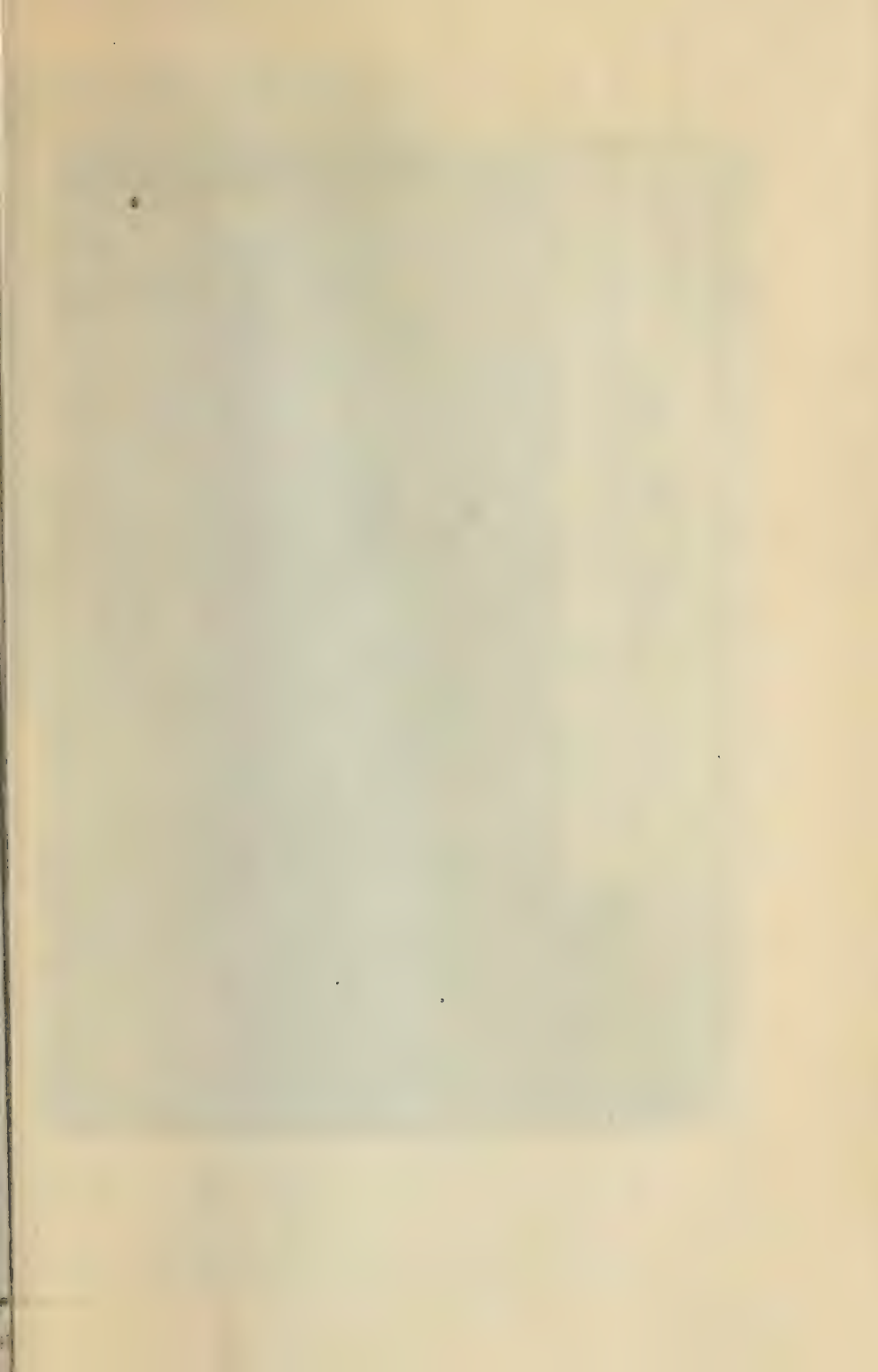
せ、鰒ごけ これはやみくもニ、人があたつて見たがる故、也、猿ごけ これよくむせうニ、人をかきのめす、外科醫者ごけ 時を用ひて客をとるゆへ、關取ごけ これはて、とるなり、立くずごけ これはたびよ、りいでしゆへ、天狗ごけ これは鼻の高いゆへ、羊ごけ 紙や、これは、たぬきごけ これはきん玉も有そうだ、鼠穴ごけ これてきそうてござります、したみごけ 是は酒やより出し也、あき杖ごけ これ座頭の内を離縁したゆへ、碁石ごけ これはかほにあざ有、半分白し、あきだるごけ これも酒やより離縁して、ごけする也、さどいかごけ 元はあいものしの女房也、人丸ごけ いつでも一人で、ねている故なり、はたけごけ よいも悪いも、ていれ次第也、けぬきごけ、廣ぶたごけ なんでもニの也、無性、なぞ〳〵ごけ 仕懸けてどらん、とけるといゝます、とうなすごけ しばたかぼちや、をしたるおんな、あたごごけ、かみくずごけ、朝比奈ごけ おにごけと口論してかつたる故、高麗犬ごけ これは天神どけの脇ニすむゆへなり、辨慶ごけ おとこの千人切をするゆへ、なすびごけ、のぞきごけ これはからくりの事也、客て

いる、それ御ろふじろ、てま、てん神ごけ これはみな様御ぞんじ、そばや四郎兵衞と申、がわるいさうだ、かんなごけ 大工のかゝあ、今はどけと成、くじらごけ、つるべごけ、寶來ごけ 家名が鉛やといふゆへ、名附たと見ゆる、蛙ごけ むせふニ客とこひ、ニこかれて鳴ゆへ、輕業ごけ、鶏ごけ、南天ごけ、姫糊ごけ 一たんは何もかもよくつくけれど、としへれば虫くい出來てはなれる、きらずごけ 豆腐やより いづる、蓮華ごけ、とろめんごけ、赤髯ごけ、熊手ごけ むせふニか、きとるゆへ、おたふくごけ、納豆ごけ れどすこしはけ、物さしごけ 客ニせうのある、ないをさぐる、山のいもごけ こいつはのよふだ、報謝ごけ 心ざし次第だ、かにごけ 手がたんと有てけしからぬ爪が、龍頭ごけ これその長イそうだニ似たり、御本山ごけ 時ニ客のほうへ無心ニまわる、せんきごけ、かんぞうごけ 少あまいほう也、茶ごけ、ほし大こんごけ、お六ごけ、口中ごけ、どしやごけ きやつニかけらるゝと、客はくにやくとする、かいらぎごけ のまゝ、からやせたも、火元ごけ なるゆへ

ごけ、赤銅ごけ（が四分一は、ゆへなり）とび口ご
け、遠方ごけ（少し耳がとふきゆひなり）、かみしもご
け、瓢ごけ（べらぼうニしりが大きい）、坊主ごけ（さつばり）
（ニがないゆへなり）も、みゝごけ（人のいふ事をよふきゝます）、胥
薬ごけは（たりゆへ）（くと）、八ツめごけ、はや
おけごけ（れるとくゆへか）、菅笠ごけ（このごけニてよく若衆が内）

（かぶる、ゆへ也）そばごけ、げたごけ、水がめご
け（むせふニといゆへなり）、和藤内ごけ（とらといふ亭主ニ）
（わかれたれば也）、鐵砲ごけ（もふてござります）よ

二編　近刻
角力一枚摺　近刻

	ヨコ	タテ
表紙	四寸	五寸八分
本文枠	三寸四分	五寸

箱枕頭題言

傀儡師の頭掛。無量の物像を現し。藪醫者の手提。万國の品類を藏む。其要いづれも箱にあり。凡多かる箱の中に。箱御秘の神祇あれば。賽錢箱の釋教あり。はこ入娘の戀あれば。

箱枕頭言

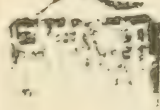
傀儡師の頭掛。無量の物像を現し。藪醫者の手提。万國の品類を藏む。其要いづれも箱にあり。凡多かる箱の中に。箱御秘の神祇あれば。賽錢箱の釋教あり。はこ入

棺に蓋する無常の世中。食て圍して寐て起て。つらく〳〵惟る所。方今や絃妓の賣せる三絃ばこほど奇しきはなし。三條の線よく三階の家庫をも牽倒し。一本の撥常に百錬の鉄肝を撃潰す。一

る人は。城を枕の討死より危く。かの武蔵野の石の枕は物かは。されば此書を閲せむ者。盧生か夢の枕に観じ曲れる肱をまくらとせば。楽しみながく其中にあらむ

文政五とせ壬午の桃月

無着舎主人印

自序

もろこしの孫楚は。流れにまくらして石に漱ぎ。今どきの哥妓は。箱を枕にして流に身を沈む。竹田のからくりは。箱を開て露れ。哥妓の爪甲は。箱を閉て蔵せ

自序

もろこし乃孫楚ハ流にまくらして石ニ漱ぎ。いまどきれの哥妓ハ箱を枕にして流れに身を沈む。竹田乃からくりハ箱を開て露れ。哥妓乃爪甲ハ閉て蔵し。哥妓乃爪甲も

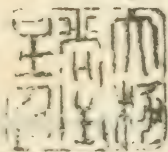
ば。近江が機關より。藝州の手管ぞ怖し。嗚呼。世人魄を有頂天の外に飛し。身を間ゝの河の底に沈むるも宜なる哉。

文政五のとし花月

大極堂主人印

春川画

金釵翠黛冶容新
三十六宮又蕩春
百錬鐵肝摧作絮
剛腸到底屬何人
春海道人

目次

河東方言　箱枕　巻之上

大極堂有長編

着色

旦　おのぼり客にて。としごろ四十余。よく肥て。顔色くろく。せい高く。緋縮緬にびろふど糸りの綛絆。郡内じまの下着。八丈じまの上着。茶うゐ袴。黒ちりめんの羽織。扇をばちく\ならしてゐ甲れん中でもなく。弁慶とも見えず。實は旦那の俳諧の先生ゆゑ。振舞ながら。丁寧にもてなす故わかり難し。

[九兵へ]　國よりつれてのぼりし手代と見ゆれど。これは國にて。金持の家へ入こんでおひげの塵をとり。世わたりするものゆゑ。京都へも兩三度ののぼつたこともあるゆゑ。どこともなふ様子よし。

[才兵へ]　一日見るからしれた宿の亭主なり。もつとも四人一座三四度めのあそび。

旦　さかづきをもちて。　ちよぼらんとついで。

[中ゐお十]　おはやい事じや。もうちよぼらんお覺えたな。旦那、此たうから太夫さんや。△さんをおよびなさるが。いつそこゝでどれぞ藝子にいろ付をなさりませぬか。[里]それはよい思ひつきじや。太夫も。白人も。かの段にいたつては。どふしてもくろうとじやが。げいこの御寐間は。お國の奥様や。おてかけと同じとで情がふかい。[旦]此間うちよんだ中に。まんざら惚た藝子のなきにしもあらずじや。[中ゐお八]誰さんでおます。わたしちよんべいいたしませう。[才]まつたり。旦那さんの御氣に入たはゝ。　コヲツ。　はる野。なつ葉。秋治。ふゆ吉のほかにはゝ。貳てうつゞみのふりそでゞもあるまいし。爰のかゝへの舞子でもなし。なんぼ。はしまめでも、太この可八がをいとへ御めもとまるまいし。察するところ。はなの中なる花の山。ながめもあかぬ。のろさんであろう。[中ゐお七]あの子はやかたちよし。おもしろい氣だてのあるげいこさんじやが。誰が目もちがはんもので。これまでお呼びなさつた子ども衆のうちでは。いつちあの子がよろしい。[中ゐお八]才さんのちやりはのけて。旦那さん。春さんにあたりがつきましたか。[旦]皆がそうほめれば。嫌でも。すきでも。さうせざなるまい。[中ゐお十]まあ。相談はあとにして。皆さんをおしらせいな。[里]それがよい。　中ゐお八。たつてよびにやる。程なく皆〻きたる。　[七]旦那さん。御袴をおとりなさりませんか。[旦]ヲイ　トたつて袴をぬぐ。お十つぎの間へもち出て。たゝんで片附ける。一體だんなの心のうちでは。祝言をするやうに。田舎氣質で。げい子にはかまをつけてゐるを。見せたいばかりで。今までつけてゐたるなり。それより三味線太鼓の大さはぎの座敷となれども。旦那はとかくふざけて。はる野がかほへばかり目がゆくを。九見てとり。才兵衛さ

ん。いまのをよろしう。[才]へ。こゝろのんでいます。 トお七がそでを引て勝手へたつ。三人の中居の内でも。お七がをもにはる野をほむるゆゑ。さては平ぜい心やすきとおもふて。色付のかけ合をする也。やくそく十ウ。まくら金五兩にて。あらまし相談できて。才兵[七]春さんへはもとの座へかへる。お七きたり。
男しゆがたゞよつと。 トいふはてれかくしにて。實は勝手へよびだし。ぐわいの相だんをする也。さて其そうだんにいろ〳〵あれど。まづやかたへは束十ばかりを通して。生の五兩はないしやうにして。子供のてどりにするとあり。内しやうに金子の入わけは。だいてゐる太こ。しめてゐる男などの入用にたしてやり。または。右の男や。かみゆひさんつれて。じまいの芝居行。あるひは生洲へつれて行はの。といふ入用なり。さて。また。茶やによりて。もつてゐる子供と見ると。わがかゝへの子どもの。やくそくをしてやつて。といぢれば。中居は。前だれをしておくれとせがむ。はる野は内證の相談をたのみて。座敷へもどれば。[太こ可八]フンじやわいな。 トいふは。春野がかつ手にてひまをいれて歸りしより。何となふはぢらふ色あつて。旦那のかほを見て。見ぬふりをしてゐるところから。こいつくはいの出來たのと知り[春]可八さん。なんじやいな。[可]ハイおめでたふ。 ト笑ふは一たい。平生おはるとあまり中もよくなく。そのうへ弁慶でも。わしへ相談かけると。花にもなるしと。すこしはらだち。其うへ。此客はおのぼりゆゑ。ながき事もなしと。心でうなづき。始終つとめ悪きは。まだ新まいげいしや也。古藝者なれば。こふ〳〵したものではなし。[九]可八がなぶるをよそうじきとと思ひ。
や。のろさん。そんなしらにせをいふても。まんざらでもあるまいがな。[はる]そのやうに問非をおかけても。なにも陽氣なとはないわへ。[可]御祝言は今よりひじやと。おだい所はどつさくさ。 ト一くち淨るりをかたる。中ゐお七は。兩人があまりなぶるを見かねて。[七]可八さん。おまへ何じやいな。そんなぬめたな。はるさんじやござりません。[冬吉]大ぶん年増ゆゑ。ちやら半ぶんに。 お七どん。その太こさんいなしてしまいゝな。[可]お七さんばかりか。おまへさんまで。そふかすをくわされては。コリヤあたらしきせるで。一向たまらん。[七]それでも口あひかい。[冬]もう。勘忍してあげいな。あれをいほふばかりに。いろ〳〵の事を。ごて〳〵いふたのじや。 トいひすぎし。言葉のとりなししてやる。[お八]わつさりと。ひとつお彈きんか。もふ夜半前でおますさかい。九兵へさん。いつものおひめさんをしらしませうなア。[九]今よひは。早いがよからふ。 トてうしを合すも。最前はる野をなぶつたがわるかつたと。後悔の所から。せめて。旦那をはやう寢させて。機嫌をそこなわぬやうとの。心づかひなるべし。[十]どれ奥様たちをしらせませう。 トたつて行。げいこみな〳〵哥一ツひきて。しらけし座敷もまた〳〵元のさはぎになる。[十]きたり。皆さん。おしまい。[可八]モウうちましたか。[十]一ぱいじやといな。 トそこら片附かける。可八とりついで勝手へひく。[七]旦那さん。さよなら。おさかづきをお預り申ませう。[旦]それもよか

らふ。〔お八〕可八さん。何をちよかついてじや。もう打やつておいて。お歸りイナ。〔可〕おまへさん。ちよかつくとおいゝるが。うたらつくよりはましでござりませうが。ハヽヽヽヽヽア。トおかしうないとを笑ひながら。旦那おありがたふ。どなた様もおありがたふ。ト歸る。〔十〕箱をいだし。どなたも男衆がまつてゞござります。藝子みな〳〵。旦那さん。今晩はだん〳〵おありがたふ。どなたも。お近いうちにお願申ます。〔冬〕お七どん。お八どんいんでこふへ。中ゐ兩人。よふお出たへ。ト冬吉をはじめ。げいこみな〳〵歸る。春野ばかり。しどう何もいはずに　みな〳〵といつしよに。勝手へ出ると。旦那びつくりして。〔旦〕九兵へどふじや。いまのはでけぬか。〔九〕よろしうござります。衣裳を着かへてまいります。〔七〕旦那さんあちらでお休みなされませ。〔旦〕いづれも達の相かたは。どふしてこぬ。〔七〕皆をもてへみへて居ます。ト燭臺一本もちて。だんなの手洗に行に。あかりを見せ。みづなどかけて。寐間へあんないして。これへお休みなさりませ。ト屏風を引まはす。〔旦〕ごふてきにゑふた。〔七〕お薄でもあげましよか。〔旦〕インヱ。それには及ばぬ。〔七〕ごゆるりとおやすみ。ト歸る。〔十〕茶。烟草盆もちきたり。今ばんは思召どふりになりまして。お樂しみでござりましよ。〔旦〕田舍者のせいか。はづかしい。ナゼ。はる野はこゝもとへ見へぬ。〔十〕こはひいなかさんじや。はるさんは今おいでゝござります。ト立て行。〔春〕衣裳を着かへきたる。としのころ貳十二三。色白く。少しこへめなるかた。勿論うつくしく。きつけは黒縮緬に。山ざくらを一トふさづゝ。本画にそめぬき。雲がたに砂子をあしらふた上着。松葉中がたのせんさい茶。なんきんのぐるりの下着二ツ。ひもんちりめんの長襦袢。帶ははじめよりしめてゐたる。すゝたけ地の古金らん。もつとも衣せうをきかへる。きかへぬにかゝはらず。色付の夜は。ほかの藝子と一度に勝手までたちて。客をさきへ寐させてから來る子ども多し。惣じてかやうな座敷にて。客もよく。どふかわしへ札がをちそふなと思ふ時は。いつにても衣裳をゆすつてくる也。この春野もまづくめんがよき方ゆゑ。着かへもうちにあつて。今夜などは少しゆすつて出たちたるなるべし。〔春〕もしへ。九兵へさんといふおかたは。よう人をおだてゝじやなア。〔旦〕あれはひようきん者じや。そして。まだ寐ぬのか。〔春〕いまみなさんがおやすみた。こちや早う參じやうと思ふてゐたけれど。九兵へさんがをなぶりによつて。見合てゐました。トあんどがあまり枕元ゆゑ。少しをゝのけ。烟草すいつけて出す。〔旦〕とつてのみ。おてまへ。これへはいるまいか。〔春〕ハイ。ト上ぎをぬぎねる。〔旦〕おてまへは。なんぼになつてじや。〔春〕齡でござりますかへ。〔旦〕さやう〳〵。〔春〕はたちでござります。〔旦〕おれらも。京都はこんどがはじめてじやが。聞たより。思ふたより。京女は。どれも

〳〵上きりやうじや。春その中にわたしのやうな。無細工な者もござります。且おてまへは。取わけいのちとりじや。春あのわたしが。なんぞ上げましたい。且イヤ〳〵。はめたとて。なにも下されるには及ばぬが。おれらが國元に。今小まちといふて。しこ名のついてをるげい者が。いちばん上きりやうじやと思ふたが。おてまへよりは劣つたものじや。春そんな美しいおかたを。常住見てござつて。わたしのやうな者を贔屓にしておくれるは。おうれしいが。いつそ氣がをけます。且おれらは氣はをけぬが。なにか取こんだ
やうで　そむない。春　と
はへ。且　はしらぬのか。ド　し
へ　らふ。る。

少計　ちよつぼりといふ事にて。此里の通言也。これはランの反しりなれば。ちよんぼりをのべて。ちよぼらんと心ある客人のいゝそめしならん。

少兵衛　ものゝ世話するとなり。これは婚礼袖かゞみの宗玄あん室のだんに。ちよんべいといふ名の。世話をやくものあるゆへ。いゝ初しにや。

包耻　なに事によらず。てれた場をいゝくろめたり。または。しらぢにてをしかくす事をいふ。

抱懐　たいこもちとわけあるをいふ。その心は越後じゝが。前にたいこをだいているといふから。いひそめしなり。

着褌　見世の男とわけあるをいふ。店の男をまはしといふより。しめてゐるといひはじめしなり。

問非　やまをかけていふと同じ事にて。無き事もあるやうにいゝかけ。又はかくしてゐるを。知つてゐるやうにいふて。繰りだされたを。問非にかゝつたといふなり。

食精　これは楽屋言葉にて。叱られたことをいふ。こゝろは。なにゝよらず。物の精をくふては。あまり心もちのよくないにたとへたるか。

西走東走　座敷に。じつとゐずにあちらへゆき。こちらへゆきして。あはてるを。ゑらいちよかじやともいふ。

白似　まことのやうに。虚言をいふたり。或はみす〳〵知れた事を。客にたづねたりするをいふ。

野暮輔評曰

御登りの閨中の趣。さしていふべきとなし。安穴先生の大平二曲に。受悪御客金故膗の場なるべし。併かゝる寳客は。得て根引の相談にをちて。思はずも川竹の憂をのがれ。中國とやら。九州とやらへ。御副室となりて行とあり。絃妓はもとより好むかたにはあらざれども。光次先生の威勢辞するによしなく。且は。まづむちやくちやしたる館のすゝはらひの爲に。いつぱいとかいふ心もありて。止事を得ず。ともなはるゝもあるべし。ポヒン〳〵のびいどろより。あぶなき買物なりけりと。發足

のあとで宿屋がいふならん。

雑魚寐

〔市兵へ〕としは廿八九にて。一とふりの男ぶり。小もんつむぎの下着。をくじまの上着。袖のこてつなんどの羽織に。博多のをびを〆ていれど。棚方の手代にて。中宿よりきかへてきたる也。此きやく大ぶんぜにをまきし御利生に。少しすいの道を覺えしかはり。大ぶん内證の工面あしく。追付ふねをもするやらすを。茶やもうす〱きゝて。つごもり〱には案じてゐるをも知らず。手代ぎやくのくせとして。茶やへくるとものゝ事。けんぺいをいふゆゑ。西石とちがひ。新地にては。アイツメといはるゝと多し。〔連中 五兵へ 十兵へ〕両人とも。市兵へ同やうの風俗にて。この茶やへも。市兵への引つけにて來る。〔鶴松〕としは廿四五にて。せいたかく。細面。色あさぐろけれど。隨分よき風ぞく。難をいへば。ちとけんな貞。紫ちりめんのゑりつますそ。白綸子に桔梗のぬいつぶし。下ぎふたつ。上ぎは當世茶ちりめんのすそのかたへ。黒いとにて。同じく桔梗をぬいたるは。なんぞあたりのある好みなるべし。〔つるの つる治〕両人ともとしは廿一二ぐらゐ。衣裳貞だちは略す。〔たいこ つる八〕きしじまの上着に。どこでらかして來たか。くろしゝこの羽織。としごろ三十ばかりにて。貞やく〱ともいはれず。子分弟子分でもなく。名まへもあんどの中より上に出てゐるたいこ。だん〱座敷の酒事しやれ有てのうへ。〔つるまつ〕市さん。つる吉さんはどふでございます。〔市〕とふに。まづにしてしまふて。今はやもめじや。〔つる松〕しらにせいゝな。〔つる八〕銀だましではござりません。しんけん。此間そく五ツで。すつぱりに成ました。 トいふは市兵へが。した地ぐわいをしていた藝子也。市兵へをいやがつてゐる故。わるうあしろふ處から。市兵へもかんてきにて。まづにはしたものゝ。心では思ひきるとならず。いまさらお山もまけをしみでよばれもせず。此鶴松をやすふこかさふと思ひ。つる八に相談すれば。太このくせにて。じぶん花をうるために。できるできぬにかゝはらず。どれでも出來ますといふもの也。しかし。此つるまつは。きまへ高ふとまつて。たとへ。此きやくよりまだ〱つと錢をまいても。手代ぎやくにはこけぬといふ奴なれども。これも花をうりたさに。よきやうにつきあふてゐるなり。〔中ゐ〕手をたゝき。白さんをおくれ。ハイ引といふて。小めろ。らうそくを持ちきたる。〔つる八〕うけとり。白さんおそしと見かへり給ふ。トたてかへて。今よひはおふきに奇妙じや。つるまつさんに。つる野さん。つる治さんに。此つる八さんじやないつる八め。合て四つるじや。四つる雪の日。下の關ぢをトきてゐるハヽヽヽ ハヽヽヽ。〔中ゐ〕ほんに。よふそろひつるじや。〔つる八〕コリヤヽ ゑらい そのわけかたらん四つるきけ。クリタイ クリタイイ 〔市〕ア、やかましい。ちう地ぐちはおくまいか。其かはりそれ。 ト白了一丁やる。これはたのみしわけある故也。〔つる八〕ヤア。コレハ。 ハヽ。 ハア引。 ありがたふ。 トいたゞき。つむりの上にのせて。たんてうのつる八とはありがたい。 小めろきたり。中ゐにさゝやきて下へおりる。〔中ゐ〕もう

夜半まへじやによつて。市鶴さん。小つるさんをきゝにやりましたが。お二人ながらできませんが。どなたぞ。お代りをよびにやりませうか。此二人のおやまは。五兵へ。十兵へのあいかたなり。[五兵へ十兵へ]もふ歸ります。ト口ではいへども。かんにさはり。それより引かけて飲む。[中ゐ]たゞ今うちまして。つる八さんの迎いがかゝりましたが。どふいたしませう。[市]今夜はもふいにませう。[中ゐ]つる八さん。おしまい。[つる八]ハイ。市さんおありがたふ。どなたもおありがたふ。トたちかけて。つる松さん。今のはよろしいか。トいふは市兵へがたのみしと。ちよと最前はなしてみたれど。つる松いやいなといふてとり合ねど。市兵へへのいひわけにていふなり。[つる松]わらひながら。よろしいわいな。つる八歸る。つるまつ煙草すいつけ。市兵へにやる。「評曰。このすいつけにじあいあり。すい付てわたすとき。客とらふとする時。はなさぬ故。客げいこの貞をみると。にっこりと笑ふてわたすとあり。いま一だん上のげいこは。煙管をわたすとき。客の手のうちをきせるでぐつと抑へると。客が貞をみる。わらふてわたせば。外よりじあいするとしれぬなり。けつのげいこは。多くかくして客にきをもたす也。」[市]五兵へさん。十兵へさん。こんやはお前がたの相かたもできず。かた〳〵。此一座雜魚寐とでかけてはどふじや。ふたりもあいかたはでけず。二人のげいこに氣のあるゆゑ。もしできるともあらうかと。[五]どふでやけた手がたではあるし。はなしの種に。うつくしもの〻ねきで。寐て見ましよ。[十]それもよかろ。[中ゐ]それはよろしうござりませう。さやうなら御酒はまはして取ませう。トさかづきをあづかり。小めろをよび。二人して。そこらを片附ける。げいこ三味線をしもふてゐるうち。中ゐ置炬燵をもちきたり。ふとんを三方にしき。上にたんとふとんをこたつへかける。[五]わしやおまへとねよふ。[中ゐ]つる松さん。大せいさんじやさかい。わたしは下でねます。[つる松]どふでもよろしい。此うち。あそこへ。こゝへ寐ると。六人のしやれあれど畧す。箱をまくらにはせねど。用心のためをびをしたまゝ。まくらして。三人のげいこねる。[つるの]つる松さん。きゝいな。此じゆ。川ばたのお茶やでじんでこなお客とざこねをしたと思ひナ。そふしたところ。花車さんも。中居さんも。きてねてくれはせず。夜中どのやうにこまつたとおもふてじや。トいふは。また〳〵今夜わやくをせられぬやうにとの謎にかくいふ也。[つる松]おまへよふしんぼうしてじや。こちやどなら下へおりてこます。[つる治]わし。そのお茶や。さして見せうか。[つるの]大てい知れたもんじや。[つる治]こちの店の子がまくうちとわけがあつて下札のとき。講外になつたお茶やであろうがの。[つるの]ア、そこじや。あこのうちは。げいこへの義理は。ちよつともかまはずと。　たらよし。　ばさんばいうるはといふ氣じやによつて。もと

をいへばかつぱのせうぞくじや。〔十〕さふかたふいふても。のろはさしたそふで。今夜は色がわるい。〔つるの〕おせはさん。うか／＼どもは。せうか知らんが。なんぼ。わたしがやうな藝子でも。さふやすふはこけぬわへ。〔市〕おほいにへこまされて。やすふ賣るついでに。太こもちはあじなもので。茶やしだいで。花に高下があるナア。〔つるの〕なせに。〔市兵へ〕大茶やで。みせじまいをかふときは。やはり花でとつて。三ばいかはしはせぬが。こゝなやうな内では。おまへがたとおなしとで。さんばい買はせられる。トいふは。じぶん太この店じまいかふた事はなけれど。きゝはつゝてゐるゆゑ。見えをいふなり。〔つるの〕さよかいな。〔つる治〕こちやどは。お客がひいきにしておくれて。大也。小也。義理をかけてをゐてから。こて／＼いはれた時に。ことわりをいふと。そのお客が。それぎりに呼んでくださらぬによつて。そのごれん中や。御茶やの人に。なせにじやと尋ねられた時。まんざら。こふ／＼じやともいわれず。どのやうに困るとおもふてじや。〔市〕それは。おまへがいやな客にても。じあいをして引つけるがわるい。〔つる治〕さふじやけれど。すきなお客ばかりに。つとめていては。商賣がでけませぬ。〔市〕そろ／＼と内證の尾がでるぞ。〔つる松〕イヘ。ほんまにいナア。商賣じやとおもふて。よいくらゐに調子を合すと。いまのお客のくせとして。をそいか。早いか。せつぴくどかれるゆゑ。そのときけるとつゐ夫なりじや。しかし。そこをけられても／＼。二年三年おふて來て。はらをうられて見いな。どんなげいこでもこけねばならぬが。その様にはらのある御客はいまはないによつて。こちらも十分にもつてゆくと。早ふくどかれて。御客がおこるから。いまは七八分にもつてゆくがよい。ト市兵へに。それといはずにきけがしにいふ。〔つるの〕とつとその通りじや。〔つる治〕こちのとなりの子も。町へひかされてじやさふな。〔つる松〕そしてあれが手はきれてや。〔つる治〕マアきゝいな。あこのかゝさんが。みんなの知つてのとふりのじや人じやよつて。せんど宇治をけんぶつに行といふて。三人づれていきしなに。ゑんきり神さんへまいつて。かゝさんがどふぞ切ますやうにと。拜んであつたといな。それからどこともなふ。つる介さんの氣もかわつたかして。いまでは三桝やの店の子をしていてじやはへ。〔つるの〕あのゑんきり神さんは。奇妙じやはへ。わしがかのあれに凝つてゐた時分に。こちや知らなんだが。かゝさんが二度も參つて。お供へのまゝと。菓子とをとつてきて。こちをだま

してたべさせてゞあつたげなが。おまへも知つての通り。あれに一生逢ふとは思はなんだが。つゐきれたが不思議じや。〔つる治〕そふかいな。〔つる松〕たとへ。まいらいでも。十八匁出して御きとふしてもらふと。どのやうな縁でもきれるといなア。

市兵へはじめ二人のものも。くどいて見やうか。わやくをして見やうか。との心にて。ざこねをしたれども。このげいこ三人とも。けつなるゆゑ。ものゝいわれぬやふ手のだせぬやうに先をこされ。心づもりもちがひ。むしやくしやしながら。つゐすや〳〵と寐入りかける。をりからおもての戸をドン〳〵。

〔まはし男〕ハイおむかいでござります。

四郎様 御ぞんじのらうそくの事也。これをしろさんといふ事は。今より弐十年ばかりまへ。井筒一力へゆく客に。上京のかぎや四郎兵へといふ人。ふと會津蠟燭をいづゝ一力へうりし故。しろさんといふきやくの名をそのまゝ。らうそくによびし也。それより今は生す料理やまでも。しろさんといへば。らうそくの事となりて。今にても。井づゝ一力は。らうそくをうりこた家名にて。近江や太郎兵衛がうりしは。あふみ太ヲおくれなどゝ。らうそくの事をいふ也。これはいまだほかへはとふらず。

神代子 野暮なきやくや。すべて當世に合ぬ事をいふものをいふなり。意は神代の子といふ事にて。當世にはづれてあはぬといふ事也。

幕内 やくしやとなじむ子をいふ。こゝろは役者のまくの内にゐるゆゑなり。

講外 神樂講とて。いまはこの外きびしく。茶や其ほか子どもにいたるまで申合をそむき。悪しきことあるときは。行事の相だんにて。茶やのあしきは。こどもたおくらず。子どものあしきは。茶や一たらさげ札にする也。其うへにて此講中をはねるゆゑ。講外になるといふ也。それをあやまりてからがいといふもおかし。

野暮輔評曰。

この條はじめ主管客の物馴良に。たま〳〵ざこねするありさまを寫出したる。眞に妙なり。しかるに。三個の絃妓すこぶる古狸連にして。一ツざしきに寐たりといへども。傍辺に人ありともせず。おのが儘なる話にこかして。余所ながら市兵衛らが奸邪をふせぎしは。其夜の形勢眼前に見るがごくにして。奇絶といひつべし。三個の絃妓が話の中へ。市兵衛のみ折々さし出たるもよし。五兵衛重兵衛兩人の心中さこそ工面のちがひしものにて。面白からぬ夜をあかす事かな。かくとしりなば宵のほどにとく立歸るべきものをと。後悔するにつけても。いよ〳〵ふさぎしとならんと。推量られて氣のどく也。すべて此段初中後の引張。おのづから眞景にかなひて感ぷく。また條々に妙言多かり。このだんをもつて。巻中第一とすべし。をしむらくは絃妓のはなしに。今一ときは是等の客に聞せても。くるしからぬはづし話をさせざるとを。

河東
方言
中

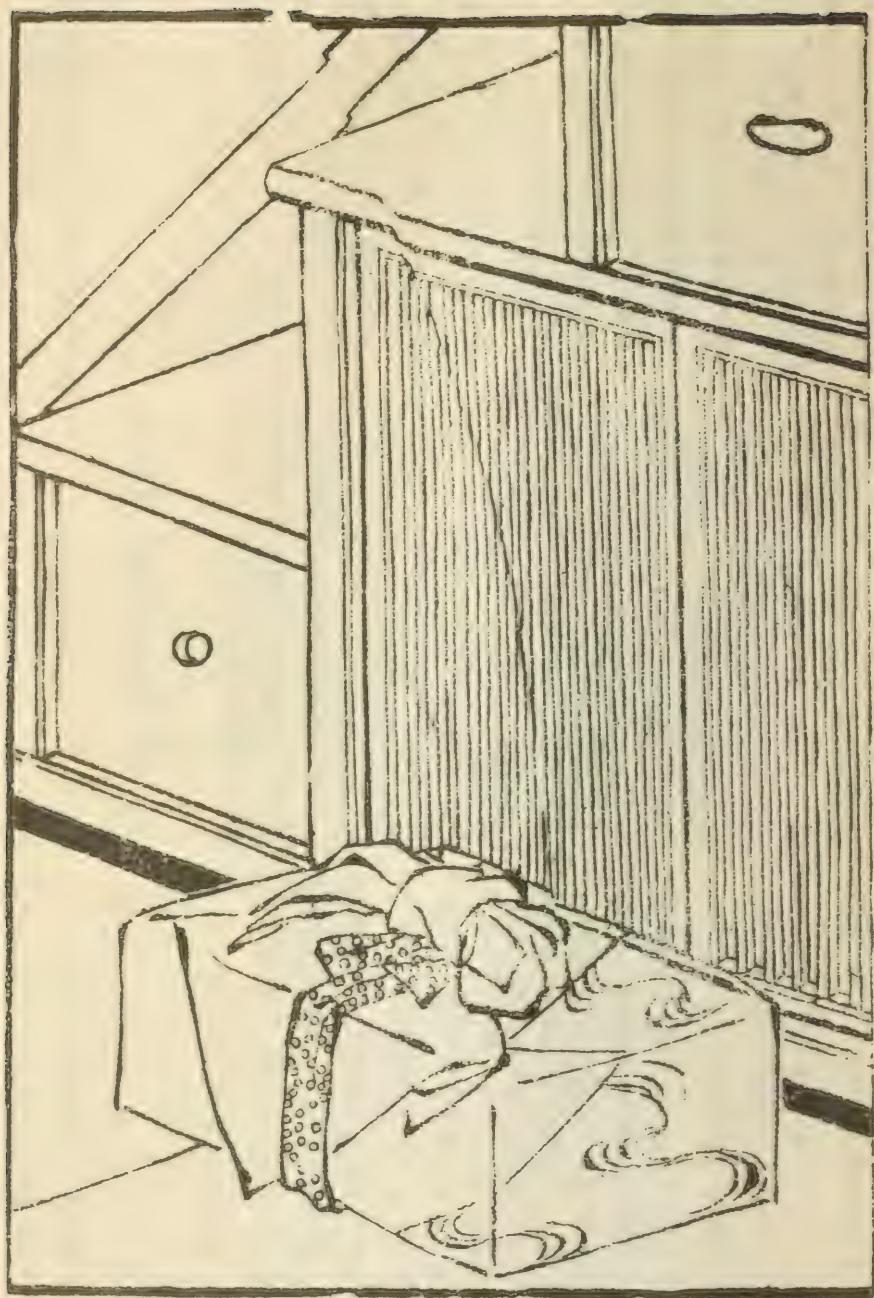
當世の藝妓皮を主とせず。此の箱を枕と作して絲を張ること稀なり。健(モノハ)啖(クヘドモモノ)少語(カズイハズ)偶口を開けば。催促す日柄何時か在る。
兎鹿齋題

當世藝妓不主皮
此箱作枕稀張絲
健啖少語偶開口
催促日柄在何時
兎鹿齋題

箱まくら

河東方言 箱まくら 巻之中

大極堂有長編

有意雑魚寐

【市村】としは廿三四にて。いろ白く中ぜい。黒はぶたへの上着に。より上田のはおり。髪のゆひやうから。取なし風俗。きつとおまへ。ちよつとしたいやみのない侍客。来いと。氣おくしたから出てきたが。かのはどふじやへ。【花車】わたしの思ふたとふりに。参じたによつて。おまへさん。なんぞいわひ事しなされ。今しらせておきましたから。ほどのふ御出るでおろふ。しかし。まだやかたへは通さぬよつて。ほかな子ひとりおよびんとわるい。といふは。此客よきほどにあそび。買の手ぎわもよきゆゑ。なじみのげいこ亀まつをすゝめたる也。しかし。枕がねや。束にもめると小口をかたふでるから。花車もすかさず。それは一とふりのお客の事。あの子もおまへさんにはきてゐるから。雑魚寐からはじめて。もしやかたへしれたとき。束の四ツ五ツ出せばよきなどゝいふから。市村もそれならばと承知ゆゑ。げいこにも。その由にてすゝめしところ。亀まつもまんざらにも思はぬ客也。とにそでつめて間もなく。やうやうこのせつられ出して。をやにも。人にも。ほめられるがうれしさに。ひとつは商賣ぎもあり。かたがたせうちゆゑ。けふ市なにもか花車より市村をよびよせたるなり。も承知じや。花車市村を二かいへあがらせ。さけさかなを出し。二人のんでゐるところ【松亀】きたる。としは十七八にて。色白くすこし丸貝にて。うつくしさいひ分なし。上着はむらさきの山まゆいりの縮緬。をきあげのきくをうち出しにしたる裾換樣。ひの下ぎふたつ。あみどりをぬひたるそろへ。だんざらさうつしの色絲いりの金らんの帯。さげをのうは〆。あたまも何かは知らず。眩きほどさしてゐる。ヲヽしんど。トすはる。花 おまへ。なんと思ふて。今夜はゆすつておいでた。【亀】市村さんに見てもらをと思ふてじやはへ。【花】ヨウヨウそれをうけていゝかへ。そうてづゝりいはれては。何ぞうけ賃もらはねばならぬ。【市】つるが。そういふてくれゝば。嘘にもうれしい。【花】ナア亀まつさん。今夜亀治さんにせうかとおもふたけれど。あの子は御託宣じやよつて。おゐて浪治さんをよびにやつた。といふは亀松あの内へ通さぬ故。万一しれたとき。此茶やへねだつてきた時には。なみ治さんもその夜ねてゞあつたから。なにも譯はないとじや。といひぬけのため。ふたつには。はなも賣りたし。両方かねての出しものなり。【亀】それがよろしい。あの子のかゝさんは。こちのうちへよう来てじやによつて。ひよつとナア。【花】そうそう。なみ治さんあげます。なみ治く下より小女郎のこゑにて。る。歳は十五六にて。もはや振袖もにあわねど。かしらが無細工なところから。そでつめかねつかふ

客もつかず。ちか〳〵に。母親が袖詰してやらねばならぬかづきもの也。花なみ治さんおまへ。今宵はざこねをせねばならぬぞへ。浪はい。ト笑ふてゐる。市わしが水上して上るは。浪どふぞ御たのみ申ます。花ゑらいませじやなア。龜ちいイと。じあいをいを〵かいな。なんぞおいしいものが欲しい。花いま御馳走がくるわいな。トいふうち。大平持ちきたる。花車木ざらにつけて皆にやる。龜どなたもおしらべんか。御先へ。トしらべてみるうち。煎海鼠を挾みあげて。ヲヽこわ。おばさん。此こはいものは何じやへ。花それはわたりものじや。龜どこの橋をじやへ。花ゑらいかけどナア。コリヤ。煎海鼠じやがな。龜こちやびつくりした。蛞蝓かとおもふた。市つるもいわぬかほしてゐて。あいさにはず〵によつて目だつ。龜いやいな。こちやはづした事はありもせんもの。市村さんもてうぶくしイじや。花いや〳〵。下着の裏はやくたいであろ。龜　ちへといふてはたべませぬゆゑ。はづす筈がない。市大かた。土用ぼしに見たら。しみだらけであろ。龜ハイ。その時分には。ちと手傳にきて見ておくれ。どんなものじや。市さあ。鈍なものであろ。花市村さんもた〵きこんであるさかい。

見る事は目がたかい。龜市村さんはなんでも承知してゐて。いはずじやさかい。こちやすきじや。浪治なあ。あねさん。市村さんのこうせきは市紅さんによふにてゐるなあ。龜こちも。そふ思ふてゐるはい。市そふ二人にほめられては。何ぞ上たい。今夜はなんにもないから。こんど持てきてあげう。花ほんにかへ。市わらいながら。しんけんじや。花どうかあやの小じの。ふや丁ときてゐる。龜そふ〳〵。おやふやしたものじや。花さつきにから見れば見るほど。市村さんと龜まつさんとは。よいころ合な女夫じやが。なんとかめ参さん。おまへ市むらさんとこへ。嫁さんにいきんか。龜わたしや行氣でも。市村さんが嫌じやといな。おばさんこのやうな勤はしてゐても。御客といふてはなし。どの様にさびしう暮してゐると思ふてじや。花そふじや。おまへばかりはそふであろ。チト　いな。今ね　す　時はないせヱ。龜なんぼうても。たれもか〵つてくれずじやものを。市わしや去年から。貴さまがきますやうにと。金毘羅や祇園へ願かけてある。龜わたしやちやらじやない。しんけんじやへ。花市村さん。御酒はどふでござります。もふとりませうか。市もふよし〳〵。花さやうなら。トあたりのある座敷ゆゑ。はやくまくをきり。そこらをかたづけ。一間の西のすみと東のすみとに。ねどころ二つしてきたる。龜今夜は三味せん出さずに

しまふた。[花]市村さん。サアおやすみ。
[市]藝子さんと仁の字でもだんないか。
トはをりとつたまゝねる。[花]仁兵へはだんないが。
とはならんぞへ。[市]酒にゑふたら
その氣もない。[花]こゝろもとない預け
ものじや。トひといつよ　浪治。[團]市村さ
んおゆるし。　し　は。わたしやよ
ぬ。　とてゐ　と　ろ　のは　ゝ。市村。[花]
上着をとりいな。しわになろうが。[團]
だんないわへ。おばさん。わたしや餘
程長田じや。ざこねといふと。いつで
もしわいわへ。[花]おまへ其やうに度々
ざこねしてか。[團]イヽへ。ふりそでの
とき一度と。袖つめてから。これがは
じめてじや。[花]そふかいな。モシ市村
さん。わるい事しなへ。[市]フヽン。

御詫宣　鹿嶋のとふれをはじめ。神々が人にのりうつりていはするを。御詫宣といゝる子を。ゑらい御たくせんじやといふ。

缺徳利　又かけどとも畧していふ。口のかけしとくりは出やすきゆゑ。よくしやべるをいふ。或は惡口をいふをもかけどといふは。くちのわるきといふ事也。又みきどくりといふとあり。これは風俗のにたふたりづれ。其外すべておたじやうなるが並びしたとへ也。かけどとは同じからず。

仁兵へ　ふたり寐るとをいふ。こゝろは人べんに二の字ゆゑ。ふたりねてゐるといふと。これは茶や。げいこによつていふ事也。いつたらには通用せぬなり。

野暮輔評曰

この條さして評すべきとなし。既に作者の目標に記せし如く。主客ともに一ト通りの代呂物といひッべし。去ながら。此客の風俗無雅の野暮にあらず。をりふしの洒落には。この絃妓と花車とを連て。南禪寺から眞如堂などゝ流しあるく人物なるべし。絃妓もまた商賣に身をいれる御蔭には。正月六月の千壽は。苦もなく月五百なれの株なるべし。御出精〳〵とはいらぬ御世話なるべし。

許情雑魚寐

[客八五郎]　としごろ三十二三。色あさぐろく中じゝよりすこし肥めなるかた。なまかべの結城つむぎの上着。かんとううつしの江戸仕立のをび。せんさい茶の毛どろめんのはをり。此客手うちれん中へも一二年ッゝは入たかほにて。よろづきいた風なり。茶やも方々へゆき。まい夜〳〵この里へくるゆゑ。げいこにもなじみ大ぜいあれども。この節どのげいこがいろで。凝つてゐるといふこともなし。

[花車]八さん。このあいだは御見かぎりで。一向おいでなんだが。をほかた外へおゆきたのであらう。[八]イヤこのじゆ内で。大かすをくわされたから。二夜さ橋をこえなんだ。[花車]うそを。たれぞ知らせませうか。[八]子ども

はおそふ知らすがよい。花が少なふついて徳じや。まあ盃いちのまふかい。〔花〕それでも。おそいと名ざしの子がなりませぬぞへ。〔八〕ならざなほよい。〔花〕ゐらあれつじや。そしてお肴は何にしませう。〔八〕なんでも見合て。ぬしの腹にはまりそふなものがよい。今宵はあけた手代じやないか。（チト二かいへあがる。これはいつもつゐ下でのめど。今よひはむねに思案のあるとゆゑ。二かいへあがりしなり。）〔花〕なんぞお好みればよい。（ト小めろに肴をいふてやり。座ぶとん火ばちさかづきなど。二かいへはこびあげ。）ちよとおしき。（トざぶとんをいだす。）〔八〕どふか今夜は大じんらしい。（トこれより花車とさしむかい飲んでゐるうち。しやれあれど畧す。）〔花〕たつた花三ッおかいんか。八すいぶんよぶが。ちつと相談がある。〔花〕あらたまつたなんでおます。〔八〕これから松江をよんで。ざこねをするによつて。おまへねきへ來て寐すと。したじから。ぐあいのあるやうにして。ねさしておくれんか。〔花〕それはあの子さへ承知なら。どふでもよろしいが。しかし。あの子はおまへさんの腹へはまる子じやないが。なんぞくり出しなさるのか。（ト小めろをよびて松江をいふてやる。）〔市〕くり出すともないが。ちとたづねたい事がある。つゐ一くちですむとならよいが。入くんだとで。はなしがながいゆゑ。三ばい買いじや。〔花〕それでも一通り。わたしがねきで寐ぬといふ事を。あの子にいはぬと外へいて。わたしをてうぶくするよつて。はなして見て。それでも嫌と。あの子がいふたら勘忍しておくれへ。〔八〕わしがあの子にほれてはゐまいし。うとおもふ腹はなし。たゞむりなざこ寐で。下手をうるばかりじやが。今いふてのと。わしがきかぬ所でいふてほしい。〔花〕それは承知じや。（トいふてゐるうちの下より。）ヘイ松江さんあげます。〔松江くる〕（としは廿二三。いろ白く。少し小づくりなるかたなれど。はな筋くちもとよく。ふたかは目にてまゆじりほそく。笑ひがほ。こぼれかゝるほど愛あり。着付はなんど七ゝ子の。すそに鶴菱のぬいとり。下着は生かべちりめんに。光琳の松を。かのこ入に染めたる下着ふたつ〳〵り。かは風つうの金入の帶。）おばさん。此あいだはおとう〳〵しう。八さん。きつい氣わるで。ちよつとも知らしておくれんぞへ。〔八〕なんじやい。歳暮のしうぎか。彼岸の茶の子じやあるまいし。あげますといふて花をつけるもおかしい。〔松え〕いゝへ。おまへさんじやによつて。花もつけませぬ。〔花車〕八さんも此間うちは。とんと御出なんだ。〔松え〕いま扇九から。もどつたとこであつたが。こゝからよびにきたによつて。八さんにしては時刻がをそし。どふいふ御客じやしらんとおもふてきた。〔八〕内ですやを引ていた。てれかくしじやないか。〔松え〕勘忍してくれ。わたしじやてゝ。ひいきに

してくれてじやお客もござります。八どふりで御客がたくさんあるかして。今夜はつむりも衣裳も大ぶんねうちがある。しかし此ちうまでは。おつめさんの通ひにとまつて。升やのくらへは入ていたのじやないか。おつめは質おきして判料に百匁ツヽとるしちやばど。升やは御存の質や。松え ソリヤはじまつた。久しいもんじや。わたしも近來は十まげもやめました。わたしのやりさきは升やじやござりませぬ。大黒やでかります。花車 ホンニ。それについてわたしの所には。升やから歳暮に小豆がくるが。粃のない衣裳でも出したり。入たりするよつて。半季に貳三匁からの日あいをやるから。けつかふなお得意じやないイな。松江そふかいな。こちのところには近來やめてゞあつたから。もうあづきもこんが。もらふて外聞のわるいは。あこの歳暮ばかりじや。

八やめたもをしがつよい。内へは賣たからだなり。店にはしきがうんとあるし。御の字のくちへは書こんである。もし今やどしんだら。首とからだとあしと。三ッぎりにしてわけざなるまいが。松えざゑんのわるい。もうおきんか。花車かげど〻いふても。八さんほどのお方はあるまい。松えあれわな。今日はこういをふ。明日はどういふてと。うちで思案しておいでるのじや。こちやすう言われても。八さんの座敷はかまはんけれど。まいばん來てゐて。外なおかたばかりよんでじやが。腹がたつ。花車今夜もき〻いな。はやう御いでたけれど。すのみにのんでゐてじやから。たれぞ一人よびんかと。せんど〳〵す〻め出したのじや。八こ〻なおばきが。松野をす〻めたけれど。花車アノまあしらにせが。よふ言われる事じや。八それでも。ゑれとのゐと。

一字ちがひじやよつて。どふぞ。まつえにしてくれと。手も足も合せてたのんだのじや松えなに事も。そこをよろしうおとりなしを。花車あの子も北方のくせに。やみちうじやな。松えア、すぢじやわへ。八もう。符てうことばおかんか。わしやちよつともわからぬ。松え ヲ、こわ。わからぬやうなお方じや。八ときに。貴さまに一生のたのみがある。きいてくれまいか。松江あなたの事なら。何でもき〻ませう。八ちやらのけて。しんけんに醉たから。今夜はとまる氣じやが。ひとり寐るちさむし。きさまとざこねがしたいが。毛も引きやせぬから。帶も衣裳もいで。あ　と　たやうにしてくれぬか。松江わたしや。どふでも致さうが。どこぞから箭のいりそふな事じやないかへ。八そふいふ幕もない。松えどふやら丁ちんもちらしい。八どうして〳〵。

トいゝながら手水に行。あとにて花車に相けんさすつもり。花車を八がゐぬまにざこねのわけをはなせば。まつえも承知して笑ふてゐるところへ。八五郎もどる。[花車]御酒をとりますから。最うおやすみ。[八]これでとろふ。ト茶わんでうけて。ゑれ。ついでおくれ。ト花車其うちにそこらをかたづけ、寐どころをする。[松え]てうしに手をあてゝ見て。ちとぬじやぞへ。トつぐ。[八]ぐつと一口にのみ。サアゑれ。繻絆ひとつできておくれ。トる。[花車]松江さん。おやすみ。トふすまをさす。[松え]ハイ。トたにはゝ。[八]えれ。わるちやれはせん。しんけん尋ねる事があるから。こゝへおはいり。[松え]アイ。　の　そゝや　。と[八]よいからいふ通り。どふぞすゆ

と　て　ておくれ。　さ　る
氣たら。　もかまはぬけれど。聞たい
事もあるし。ひとつには
おもふてじや。[松え]　はし　ゐ　だ
んないがなア　て　ゝと[八]一ぷくの

ましんか。[松え]アイ。ト八五郎が煙管をとつて。自分のたばこをすいつけてやる。[八]かんにんへ。トもたせておいてのむ。[松え]しつれいやの。[八]ヲツトよし〳〵。[松え]またつけよかへ。[八]もういや。[松え]なにがきゝたいのじやへ。[八]貴様の店の小まつと貴公とは。わけて心やすいじやないか。[松え]ア、心やすいが。おかみそりのくちかへ。[八]いゝへ。その口なら何もたづねるにはおよばぬ。[松]そんなら。おまへかゝつて見るきか。[八]その氣もないが。じつは心安いものにたのまれた事があるによつて。問ふのじやが。あれは〆てゐるではないか。トいふはうそにて。まことは自分が氣に入た小まつゆへ。かゝつて見やうと思ふて。疑はしきものをくりいださんとのたくみ也。店の男をしめてゐるかとは。遠いところからかけたるにて。實はうちにゐる兄がうたがはしきゆゑに問なり。[松]それはうそじや。あの子にはきん〳〵ものがある。[八]それは誰じや。[松]おまへお知りんか。つくつき

じやがな。[八]それはあの兄じやといふて。内にゐるやつか。[松]ア、それじや。もとは大坂で御客であつたけれど。あの子ゆゑ。うちを出てじやのじやさうな。あの子もあの人ゆゑ三四ねんまへから京へ來て出てのじや。去ねんのあきも小さんしてゞあつた。それでもわかつた御方じやよつて。御客もとらしてのじや。[八]フンさふか。實はわしもかゝつて見ようと思ふたけれど。それでは一トまわりもいやじや。[松]なぜに。[八]はらはうるかひがない。ナントものも相談じやが。貴さまわしにかゝつてみんか。トいふはくり出す事はくりだすし。松えにほれてはゐねど。もしたらしどくと思ふてかく云也。[松]わしやいやいな。[八]いやなは遠から承知じやけれど。ほれたが因果じや。[松]さ様かいな。トちら〳〵目をふさぎ無言。[八]寐たか。ねたらなほじや。トる。[松]大イきらい。おきんか。[八]嫌いかしら

んか。おれはすきじや。ト　て[松]
る。
それはおまへの粋に似合んせ。ト　を
け。
す　す。あ[八]粋も不粋もかうなつては。ぬ
れぬさきこそ露をもいとへじや。いや
なら北山なり　。　。[松]ひつかう
してじやと。下へをりるぞへ。あんま
りあほらしい。[八]もとより其やうにほれて
はゐず。こいつとても
。と思ひ。　。　きさまも。けふ此
ごろ出た子じやあるまいし。そのやう
にぼんつく事はないじやないか。面白
うもない。トいひさまうしろむき。[松江]もとより
委細かまはず　高鼾。
すこしほれてもゐるゆゑ。なに事も承知でざこね
もするし。とに久々ひいきにしてもくれる御客
ゆゑ。いやとはいふたれど。あまりぼんつきすぎ
ると氣の毒におもひ。八五郎がねがほを見れば。
何やら腹もありそふにおもわれて。あ　八さ
にな　しゆゑ。ねとぼけしこゑして。
ん／＼。[八]ム、なんじや寐むたい。[松]
一向　。も　つ　こ　い
。[八]イヤ／＼　また叱れる。

[松]もう勘忍じや。わたしがわるかつ
た。こらい。ぶ。。
[八]さむいか。[松]、。

十字曲　とは。十の字をまげれば。七ノ字に也。質置といふ事をりやくして。十まげともいふなり。

北方　わかさより。ぶきの肴をいだすゆゑ。ぶきなといふ事をいふ符牒なり。

闇中　とは。しらぬ事もしつたやうにいふものをいふなり。やみの夜はくらきもの。又本などをちらにおぼえるといふから。自分のしらぬ聞きとをよくしやべるといふ事也。それをまちがへて。アミチウといふ子も多し。

筋　今は闇中と同じこゝろ也。しらぬ事も知つたやうに。大ていはなしのすぢにていふから。能かげんなといふものを筋右衛門と云。

御剃刀（剃）　とは。一向宗には御剃刀をさづかるといふことあるを。もつて。わけのあつた子を。御かみそりのくちといふは。授かつたといふこゝろなり。

弭付　とは。荷棒にあるつくのと也。つくあるゆゑもつかうの楮のかゝりになる故。かゝりてゐる者がついてゐるといふ符牒也。

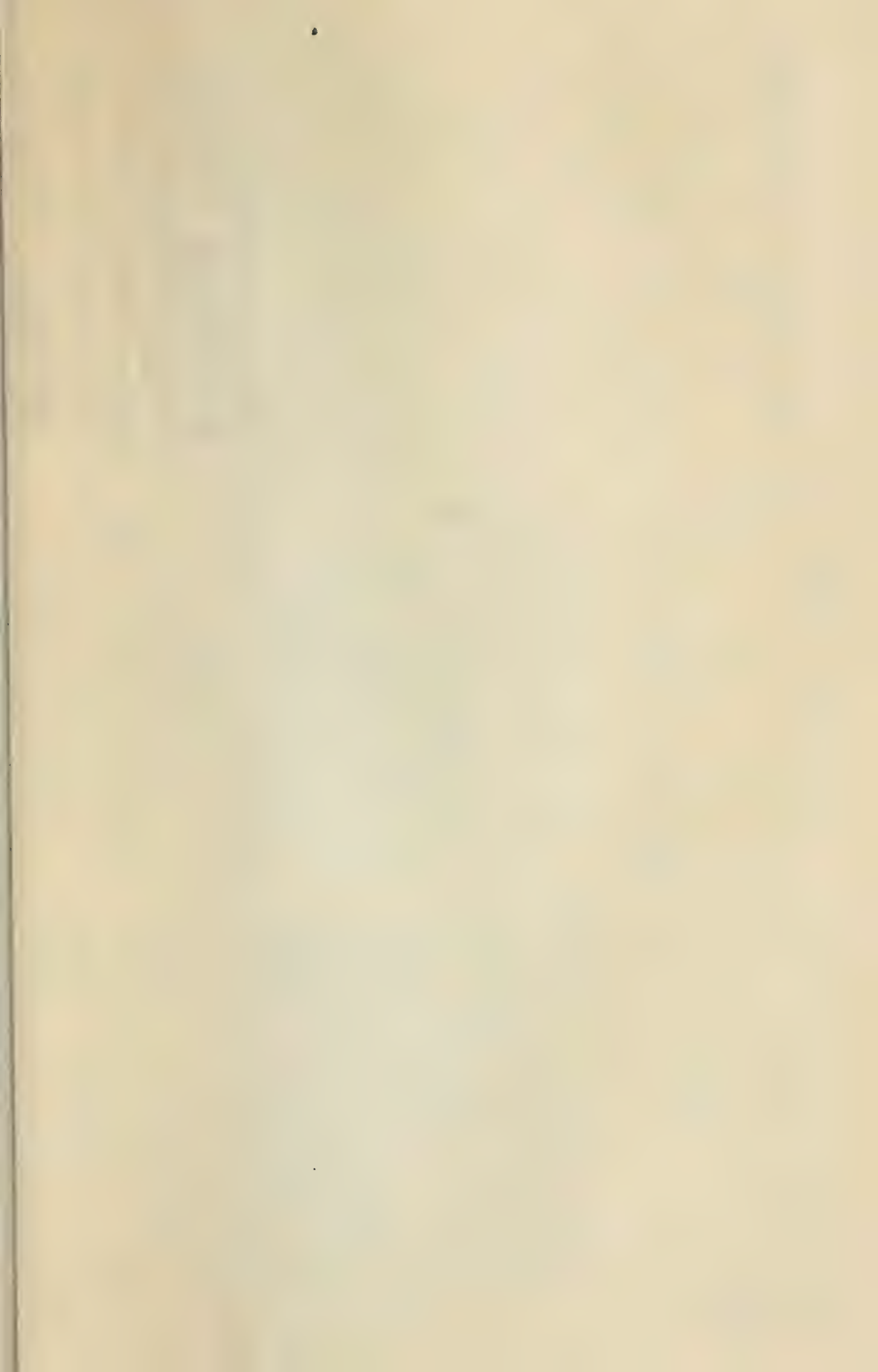
野暮輔評曰。
八五郎もと小松に心ありて。彼が身の黒白を探出さん爲に。松江をよび出したる所。小松は案の如く情夫ありときゝて愛念を斷しより。一ッ衾に添寐したる松江にふつと意うつり口説かけしなれば。松えも一度は蹴る筈なり。しかるに八五郎。ふかき執心ならざれば。小腹をたて寐入らんとするとき。松えおもひかへして持かける所。うはきのありさますべて妙なり。このうち松え一だんの手際あらば。八五郎後も前へもゆかれぬ場所にいざのふ。工夫さま／＼ある

べし。八五郎もいま一器量ある眞の通人なるべくば。叄江がもちかけしところにて。ポンと蹴かへして。狂言を下にをく手管あるべし。互にそれにをよばぬは。雙方同位のちから競にして。角力はまづあづかりなるべし。

箱まくら中巻　終

春川五七画

江東才言 翁ゑくし茶ヤ　大極堂有長編

相識

〔客 千太郎〕としは廿六七にて一とふりの男まへ。本八丈の上着にせんさい茶のりうもんの羽織。しまちりめんの下着。くろちりの頭巾をくびにまき。でつちに提灯をともさせてきたる。〔亭主〕良を見て。千さんようおいで。おくま。千さんがおいでた。トいへば。花車も中ゐも。小めろまで。とんで出て。千さんといふものあれば。旦那さんといふものあつて。手とり足とり。上へあげる。〔花車おくま〕此間はお見かぎりでござりました。〔小めろ〕三さんおあがり。〔てつち〕ハイ。トこしかけてゐる。〔中ゐ〕もし小たけさんが。ゑらこりでござります。小めろ。茶たばこぼんいだす。〔花車〕きのふもけふも。あなたま御出んかといふてみへました。〔千太郎〕あまりこりそふな事がない。トくちではいへど。尋ねてきたと聞て内心まんぞく。〔花車〕絃妓さんをつけましても。すつといかれては腹がたつが。あの子のやうにこつてくれてじやと。茶屋もどのやうにうれしいナ。これらあるやつにて。げいこの氣のきいた子なれば。これはよい客じやと心でうなづき。その茶やのまへをとふれば。ちよつとたづねて見たり。また賓の遠い日にはわざ〳〵いて見たりすると。十ぺんに一遍いてあふと。客をたよ〳〵ととくしんさす也。またいたらんげいこは。茶や氣をきかして。いつかの何時ごろには大かたお出るによつて。こちへきて見なされの。または客がしたではなしてゐる内に。下女にあすのおかずにみづ菜とつて來ておきといへば。下女もかねてこゝろえてゐる故。ハイとやかたへ知らせにいて。いまきてじやゆゑ。かういふておいてといへば。子どもゝ承知にて。門ぐちから千さんまだかといへば。これはいりとよびこむ也。客も目のまへに。このやうす見ては。かね〳〵尋ねてきたるといふたも。うそではないと。これより大きにはまることあり。〔中ゐ〕小たけさんとさゝ野さんと。みどりさんとをきいて御いで。〔小めろ〕ハイ。ト出て行。〔花車〕サアおくへ御出。〔千〕三吉あがつてまつてゐい。〔てつち〕ヘイ。みどりきたり。〔みどり〕小たけさんかへ。トいふは千太郎が相かたゆゑ。ぽんに來てゐべきがゐぬ故也。〔花車〕いまおいでる。〔みどり〕千さん此あいだは。鋳掛でさぞおたのしみ。わたしのやうな光琳は。たれもつれて行てがない。〔花車〕イヽヘ外のげいこさんは一人もなしに。あさまゝをたべにいたのじや。〔みどり〕千さん。つれて行かずのかわり。朔日のやくそくを出しておくれんか。〔千太郎〕フヽン。トわらふてゐる。〔花車〕ホンニ久しうやくそくもしてあげずじや。一日出しておあげ。トいふうち小竹。さゝの。きたる。〔みどり〕おそひ出じやなア。〔小たけ〕としは廿五六すき

がみに。珊瑚じゆの玉を入たるかんざし二本。勿論すがほにて。くつきりと色しろく。鼻筋よく通り。口びるうすく。せいもすらりと高く。見るから此里の何がしとおもはるゝ代呂もの。おく山ぞめの羽二重にくれ竹のもやうの白あがり。おなじ小もんの下着二ツ。むらさきの山まゆ入の紋ちりのじゆばんの忍り。すこし乱れがゝりたるまゝにて。花色のわな天にてうもんのきりをきらせたる帯。

イヽエこんやはおいでんかと思ふてゐた。【花車】それはなせへ。【小竹】さつきに花からもどつて。店でたゝみざんをして見たら。今夜はおいでんとあつたゆゑ。しんきにはあり。内へいんで。べゞきかへて。もふどこから呼びに來てもすらすつもりのとこへ。男衆が來て。おすきなとこでござりますといふたによつて。いつこうれしかつた。といふは手也。實は大かた外の客へいてゐたけれど。こゝならうちからと男がしらせたゆへ。ばやいをきつてでゝきたのならん。何分客をとくしんさす調也。【花車】わたしもおきせんを拵へて。あのやうにいはれてみたい。【さゝの】そりやわたしの事じや。おまへにあれができたら騒動じや。これはいつもつれてくる弁慶醫者也。

【みどり】千さん。弁庵さんはへ。【千太郎】こんやは聲がせなんだ。

【小竹】アノきんつぶは大きらい。こいてうどよい。トいふは弁あんが付てゐると。無心事がおもふやうにいはれぬゆゑ也。

【花車】ちと商賣はじめんか。【みどり】【さゝの】アイ。ト三みせんを出し。うたひとつふたつ弾く。こういふ時には。あいかたの藝子はひかずと。哥ばかりつけたりだまつていたりする也。しかし相客あればやはりひくものなり。

【さゝの】小たけさん。おまへのはらな哥をひいてかそか。ト三みせんとり上ゲて。

〽わしもたび／＼戀をばしたが。せんごわするゝこひはいま

【小たけ】わざと少しはづかしきかほをして。さゝ野さんもふおきんか。【花車】千さんあれをうけてゐゝかへ。【中居】さゝのさん。こりやどうせう。トたゝみをかく。【さゝの】こちのあれは來てくれんかしらん。あじな氣になつた。これは此げいこ三人とも平生こゝろやすく。やかたも近所と見ゆるなり。げいこどし。こんどあの客がきたら。こういふ哥をひいてくれ。またはこういふてわしをなぶつてと頼んでをくと也。けつなげいこはたのまいでも客よりあひかた次第でよんでくれるゆゑ。ふたりをよろこばすために此やうなうたをひく事もあり。また外でみどりの客の座敷へ。小たけがいても同じ場合なり。いづれ。こつた藝妓ができると。そのきやくがなんぼう氣に入た子があつても。いつともなふ相方のあいくちの藝妓ばかり呼ぶやうになつてしまふものなり。【みどり】さゝのさん。此あいだ風呂でおまへの妹さんみたら。びつくりするほどいつかうなつてゞあつたなア。【さゝの】あゝ背ばかり高ふなつてやくにたゝぬ。【花車】稽古にはどこへやつてじや。【さゝの】けいこにやると。膝付から。きわ／＼のつけとゞけがもめるによつて。手ほどきに内でわたしがをしへてゐるわへ。【みどり】きつい穿山甲じや。【ふたり】ほかばなしになつたがおかんにさはり。さゝ野があちらむいてゐるをさいわゐ。紙をまるめてあてる。これいたらぬきやく也。外のはなしをやめさす

（ためならばまだしも。茶やなれぬ客はよき事におもひ。いつまでもするなり。またげいこのひざへ盃をなげるもあり。はして鉢をたゝきたり。三昧線のうらをたゝく客は。をとこぶりよくても多くきらはれるものなり。）【小たけ】かみをあてることはおきいな。【みどり】千さん一けんさんじませうか。【千太郎】をしへてやらふ。【みどり】おばさん一つついでおくれ。【千太郎】もふ酒はいや。【みどり】それならこふいたそ。おまへさんおかちたらわたしがたべるし。わたしが勝たら朔日の約束しておくれへ。（ト打てみどりまける。）男にはまけうちじや。（トさけをのむ。）【千太郎】ときに三きちはどふしてゐる。【中居】をもての炬燵でようねてゞございます。【花車】（千が心中をすいし。）もふ御酒をとりませう。【千太郎】よかろ／＼。【さゝの】まだ四ツそこらじやものを。もちつとをいてくれたがよい。【みどり】さゝのさん。そんな事いゝな。小たけさんの心にもなつたがよい。【花車】此あいだもおとまるし。こんやは子供衆さんも待たしてあるし。はやうおかゑるがよい。【みどり】それならいんであげませう。其かはり朔日はよろしいナア。【小たけ】きついおんにきせやうなア。【さゝの】千さん。わたしもなア。小たけさんよろしう。【千太郎】糸へんにはあやまる。貴さまはけんにまけたじやないか。【さゝの】まけてあげたからしておくれ。【小竹】こちや重箱じやけれど。ばやいしてくるから。みんなしてあげいな。【みどり】此あいだ。外へ花にいてゐた所が。ふすま一つあちらに。あいかたのあくのをおきやくがまつて。酔ふてねてゐなさるねきへ。振そでの子がいて。どふぞ一ッしておくれいなァといふてじやを。こちらからきいてどのやうにおかしかつたとおもひじや。【小たけ】それ／＼ようある奴じや。（此うちげいこ三味線をしまふて。）【さゝの・みどり】朔日はおありがたふ。へんがへはなりませんぞへ。段〻おありがたふと。（トかへる。）【中ゐ】千さんあちらへ。（トこたつのある間へ。ねまをとり。二人をつれて行。茶たばこぼんをもちきたりて。）ずいぶんおたのしみ。（トふすまをさす。）【千】きさまどこぞ悪いか。小たけ ば一。。【竹】いゝへどこも悪ふはござりませんけれど。（トあじな良付していふ。）【千】それでもすきがみではゐるし。かほ色もわるいさかい。氣にかゝる。【竹】そのやうにおいゝるからいひますが。此あいだちう。どのやうに心づかひをしたと思ひるいなア。【千】なせに。【竹】おまへさんによふいふた伯父さんがきて。かゝさんや。わたしにまた無心をいふてじやけれど。そふ／＼おまへさんにもいはれず。外にたのむお客とてはなし。だん／＼ことはりいふたけれど。無理ばかりいふてじやによつて。わたしもつむりの道具を出して見せたら。遠慮もあろうと。思ひの

でゞあつた。あんまりで腹もたつし。外聞もわるし。それですねて。なじみでないお客へは。はなにもいきません。ア、まゝよ。もちつとのしんぼうじやと思ふて居ても。あんまりの事をいふてじやによつて。いつそ死んでしまいたい。ト大にふさげて見せる。千それは尤じや。わしも早ふ引したいと工夫してゐれども。今は内の工合が。もそつとむつかしい。しかし。春は番頭が別家する筈じやによつて。そうすればまたのかしてくらさすか。町へとりよせるかするゆゑ。今しばらくしんぼうして居い。竹それはうれしいが。わたしの身にもなつて見ておくれ。義理あるじやじんの親をもつて。どふしんぼうができるものじやぞいなア。千それでも今まで。いつしよにゐたではないか。竹わたしも。しら歯のときには。外へもいかつたが。女のをやといふものはつめばかりで。御客をとれば金のなる木でもこしらへたやうに。それもいへ。これも頼めといふてじやけれど。わたしやおまへさんを。ほんに〳〵一とふりの御客のやうに思ふてゐぬゆゑ。大てい氣づゝないめをする事じやないわゑ。千そして笄でなんぼほどかつてある。とへど答なく。俯伏しまゝゆゑ。さし何もそのやうにあんじることはない。いふて見たがよひ。竹モウ〳〵いふまいと思ふてゐたけれどナ。アノ八ツほどじやといな。どをぞこふしておくれんか。わたしのきる物で。三匁ほどこしらへるよつて。五匁ふん別しておくれんか。千それほどづゝなければ。工面してやろう。竹つらふなふていふものかいな。そんならどふぞ持つて來ておくれ。ア、うれしい。トながら。こんやは御とまりんか。

千いや〳〵早ふいなねば。内の手がたがやける。竹ヲ、しんき。もこ

お　い　。ち　。お　。き。

こ　ろ　い。

中ゐもしおゆるし。トふすまを少しあけて。千さんいま更でござります。どふいたしませう。

鋳懸（ゐかけ）　先年大坂にて。夫婦づれにてあるくゐかけ師があつて。評判たかゝりしより。相かたとふたりづれて歩行事を。ゐかけといふはやり言葉なり。

置錢（おきせん）　とは。こつて通ふときは。錢もたくさんにをかねばならぬゆゑ。なじみをおきせんといふ也。それを町にてもわけあるを。おきせんとはいふ。

金蘗（こんつぶ）　とは。もつさりじやといふ事也。うへは金にてよく見ゆれど。なかゞつちじやといふ事にて。なりはゆすつても。心がすいでなくにぎり客をいふ也。

穿山甲（せんざんかう）　とは。つめじやといふ事にて。せんざんかうは爪もあるし。からがかさねかゝつているゆゑ。ちよつとあたればどこいでもかゝるといふ心にて。合羽の

甃ぞくといふとおなしとなれど。近来あまりいはぬと也。

糸篇とは。やくそくの約ノ字のへんにて。約束のことなり。きんらいはたえていはずして。多く束といふ。

光琳とは。画師の名なり。此人の画はかたち俗にぶさいくに見ゆるゆゑ。貞かたちのよろしからぬを。くはうりんたちともいふ。

野暮輔評曰

千太郎の人がら○持の息子株と見えて尤よし。されども座敷つきのいまだ青く若年のありさま見えたれば。小竹が為にはいはゆる羽子板で蝶〻なるべし。またすき髪を問れてよりの着こみは澤山ある手の無心なり。千太郎ごときのボツコリ息子なればこそはまつたれ。少し修業のつみたらんものは。サヨカイナともいふべからず。小竹が虚実。千太郎の愛慕。本文にあざやかなれば。評註に及ばず。諸君よろしく御推もじと云〻。

同心

【客万介】としは三十四五。背たかく。いろ青白く。すこしみつちやはあれど。いやみのない男ぶり。かんだいじのはおりに。同じ上着をきたところ。たれが目にも年あき前の番頭と見ゆる也。さる戸をそつとあけてはいる。もつとも時刻ひるすぎごろ。【うめの】としは弐十四五に見ゆれど。実は廿七八にて。器量よく。背たかし申ぶんなきしろものなれど。大の爪らしきしろもの。藍ざしの内着。うそよごれたるわた人。おしろいてしらかべのやふになつた紫りんずの。じばんの衿りをそとへ引くりかへし。糸にしきの中帯をメたり。風呂からいまもどつたと思はれ。手ぬぐひではなすぢをふきながら。あがり口にかたひざたてゝ。小間物やと。何かはなししてゐる。尤下着なしては寒いやうにおもはるれど。燥たい出てゐる子どもは内にさへゐれば。こたつへあたつていたり。またはねてばかりゐるゆゑ。下着をきている子どももはまれなり。万介さんおいで御上り。常にこの新地へ入こむ小間物やゆゑ。それと見てとり【母親】マツといふていゐる。万介あがる。はゝおや奥にてふるつぎを引出してゐながら。万介さん。ナゼゆふべ御いでなんだ。【万介】さふかいな。よい肴をもらふたに。ゆふべもこふと思ふたれど。また帰りがたいぎなと思ふてやめた。【母】さういふおまへさんの心底じやによつて。あれがやかましういふのじや。【梅野】おまへ門ぐちで。ナゼかんがへてはいつてじや。【万】きゝなれぬ男のこえがするゆへ。おさしつかへもあらふかと思ふて。【梅】ハイわたしのうちはよそと違ふて。憚ながらたれも指やうな人は御いではしませぬ。【万】わしはまた。きさまのあみによい鳥でもかゝつて。みつ子の手をねじるやうな。せりふでもして

ゐる所へはいつてはわるいとおもふて。[梅]よい鳥がかゝらうが。かゝるまいが。いかひお世話さんじや。[母]またはじまつた。万介さん。マアこゝへきて炬燵へおあたり。[万]ヘイ。トおくへ行。こたつへあたる。うめのてぬぐひを鏡だいのうへにをき。ぬぎすてゝある茶じゆすと。むらさき縮緬のつぎ〳〵のでんちばをりをきて。炬燵のむかふへあたる。[万]おはな茶を一ツおくれ。[小めろ お花]ヘイ。ト茶をもちきたり。おちやをあげますかはり。万介さんなんぞおたてんか。[万]こいつはゑらい貳分金じや。わしがおばさんに。せにを三文かつてやるから。りうきう芋などかふてこい。[お花]ア、きたな。ナンボわたしがやうなものでも。お芋ぐらゐはほしければ。わたしの錢でかふてたべます。[母]さうじや〳〵よういふた。[梅]ヲハイわらへ。[万]わしも男のはしじやが。こゝへ來ると十九文見せか。小べんのかへものゝやうに。やすふあしらはれる。[梅]それじやさかい。とんと御いでんがよい。[万]三日來ずにゐたら。泣くじやあろ。[梅]ヲヽ身あがり。なにが悲しうてなくものか。てうどよいナアおはな。[万]よふいふた。これからとんと來んによつて。來ておくれと為おくすまいぞ。[梅]なんの罰にやるものか。御持參も大体がよい。[万]フン。いまはぼうしにはち巻で。つよい事をいふているが。あすはア、いわなんだらよかつたにと。悔まうけれど。ア、まゝよ。ドレかげでとんぼのしりといわれぬうち。もう歸りませう。[母]ねきで聞いているうち。せり合がだん〳〵あらくなり。ひよつと万介がしんけんに怒つてはわるいとおもひ。二人ながらもふおきんか。のちにはまたたゝき合たり。つめり合をふとおもふて。それよりは万介さん。しんけんに。なんぞおたてんか。よい頃合じやがなア。[万]くびをふり天井を見て。こゝなかきもちはどこにあるか知らん。[母]そふぢらさすと。ほんまに何ぞおたていなア。[万]來がけに縄手のさかなやに。でんまやのよいのをみておゐたから。あれを焼いて肴にせうか。[梅]おきんか。てんまやがほしけりや。わたしがたてます。[梅]
[母]はらぐすりに鉄がたべたいナア。さやうじや。てつにしなされ。[万]それならお望みどふりにするが。親子いつしよにしんでも此ほう。かゝり合でないといふ一札がほしい。[母]何枚でもかきます。おはなちよつと一嘉へいてあるか見てきて。[花]ハイふぐでござりますな。トてゝ行。あとへ女ひとり。すぢたてやくしをかみにつゝんできたり。おゝきに遅なはりました。[梅]ア、まだすかすにゐるわいな。コヲト。どふぞ翌きておくれと。お六さんにいふておくれ。六とはかみゆひの名。[女]はいそふ申ませう。[梅]大きにごくらうさんへ。[女]イ、へ。トかへると。

れは髪結のでしにて。かみゆひよりさきへまはり。そへをとつたり。つとしんに油をつけたりの手傳をする也。よくはやるかみゆひは。弟子をふたりもつれてあるく也。さて此里のかみゆひは。いづれも二季のしうぎのほかに。他所ゆきでもすると。一ぱんにかみゆひにはりこんで。みやげをやる也。それほどにせぬと。いふやうに来てくれぬなり。〔万〕あれがつめたいのか。〔梅〕イヽエ。あれは弟子じやへ。〔母〕それでも御亭主さんはすへやしなひにあふて。けつかうなもんじや。トいふているうち。下駄のをとがして。相長屋にゐるげいこ雪まつきたり。〔雪松〕おばさん。きのふはおやかましう。〔梅〕雪松さん。御出。マアおあがり。〔雪〕アイ。トあがり口へ腰をかける。〔万〕雪まつさん。こゝへ御出。〔雪〕どなたかと思ふたら。万介さん。此あいだは御遠〳〵しう。〔梅〕それはきのふのかへ。〔雪〕ア、よう見せておくれたけれど。まあ御かへし申ます。ト持てきた縮緬の端ものをいだす。〔母〕まだ地合が氣にいらぬかへ。〔雪〕

氣にいりすぎてあるけれど。節季のあてがない。〔万〕新地で五人ともない玉さんで。店のせん香だいに。おまへが。中じくにうごかずにゐてじやさかい。書出しも。留筆もをされて。どうもならんといふせんせいの御方が。そんな事いふものか。トいふは。店のせん香だいのせんからたてのしたに。店中のこどもの名まへをはつてある也。さて花にゆけば。右のせん香たてにせんかうをたてるなり。その名前のはりやうが。しばゐのまねきの看板とをなじ事にて。ようらる子を中じく。かきだし。とめふでと。夫〻にすへる也。尤若手。中年。良やくと。段をわけ。また妓を別にわけたるもあり。これはこの店ぎりでなく外〻の見せへも外ぶんなり。これも子どもにはりをつけるためなり。よつて賣の遠い子どもはどふぞ書出しにまはりたいとはげめば。中軸。とめ筆はその座をいごかされまいとはたらくなり。そのわけはかきだしにいても二ケ月三月うれがわるいと。外の子をかきだしへまはすゆゑなり。〔雪〕久しう出てゐるおかげで店でもたてゝくれてじやけれど。よふ賣てじや子がたんといてじやさかい。けかし

てつらい。〔梅〕いや〳〵あとの月も。八百からの花を賣てじやあつたさふな。〔雪〕八百のことはおゐて。どのやうにせい出して。刻花うつても。五百は聲がかゝらんものを。〔母〕おまへがよふうつてじやから。かゝさんは左扇じや。〔雪〕ハイみんなして宜しう調伏しておくれ。ドレいんでかう。おやかましう。トかへる。入ちがへておはなかへる。〔花〕もし。ふぐはござりません。〔母〕亀平もきいてきたか。〔花〕イヽへ。一嘉とおつしやつたから。外はきゝませなんだ。〔梅〕たいてい知れたもんじやが。〔母〕なけりや。早うもどつたがよい。なにをせうだんして居たのじや。埒のあかぬ。わし一トはしりゐて見てかう。〔万〕それは御くろう。外になんぞ小ばち一ッいふておくれ。〔母〕どんな物にしませう。〔万〕なんでも。錢さへ安ければよいじや。〔母〕久しいものじや。トでゝ

ゆく。【梅】小どゐにて。万介さん。おまへかゝさんの前では。やすふ見られんやうにしてゐておくれ。おまへの氣では無心でもいはれぬようと。またしても／＼しみたれた事をいふてじやけれど。むりに無心は。わたしがいわしはせぬ。【万】それは承知じやけれど。いまのはちよつとしやれて見たのじや。【梅】しやれも人による。今でもきねをおこして出ていたのじや。何分一ばい飲ましてをけば。御機嫌はよい。　トいふているうち。さるどをあけて。花蝶を多くもちし男きたり。　ハイ。　ト蝶をおいてかへる。これはみせ／＼におき番。そへ番。三ん番などゝいひて。ゆふべ更よりのちをつとめたる男のやくじて。あさのうちに子かたのやかた／＼へ花蝶をあつめにゆき。きのふのひるよりの蝶合して。花かずとちや屋の名をしるし。それをまたやかた／＼へくばりもどす。それよりきうそくするなり。もつともよふらる子とうらぬ子は。蝶にもうすあつありて外ぶんにすること也。其とし思ひのほかはんぜうして花蝶つまるときは。硯のすへに紙をたすことあり。これを蝶たしといひて。小かたの方にもいはふことにて。店へも祝儀などつかはす也。万介は小便に行てかへりながら。花蝶をとつて見て。

ひだうちは。よふ花がつまつてあるナ　【万】こりやア。ゆふアもよいから一ぱいうつてゐながら。わしにくればよかつたも押がつよい。【梅】ハイ。どこなとくつて見なされ。三ばいうつた夜はござりません。ト引たくり柱へかけてをく。【万】ろくだまに見せもせねば。つよい事はいゑぬ。【梅】おまへそれから富永町へ御出たか。【万】イヽヤ。わたしが花を賣とふていふではないが。ちと御出んと今は神樂講がきびしいゆへわるい。　富永町といふは。はじめぐわいのできし茶や也。近来やかたへ行てあそび。やかたの世話もしてやるゆへ。あまり此茶やへ行ぬなり。それが茶やへ知れると。客をやかたへ引込だから。さげ札じやのなんのと。やかましくいふ故也。【万】あすか。あさつての内いこふわい。　トいふてゐる内。母をやかへる。【母】おはな。そこをたきつけて。おむしを押てたも。【梅】かゝさんあつたかい。【母】アヽあつた。　もうもつて參じるが。万介さん壹〆四百といふたのを。半分かいました。【万】酒はどふじや。【母】ゆふべののこりが有よつて。足らざあとからとりにやります。【梅】外のおさかなは。【母】きゝいな。かめ平へいて鯛の子をたいておくれといふたら。はらゐぐりじやといゝをつた。【万】鉄はゐんでいやせぬか。【母】わたしも其ためヲをしたら。新らしいもあたらしい此うへなし。それでもこはけりや。どく味にさんじませうか。と笑ふてゐよつた。トかれこれするうち。肴屋より持きたり。母親かげんして。もちきたり。こたつへあたりながら四人さいつおさへつのむ。【梅】鯛の三ばい酢がほしい。おたてんか。【万】それは今度にせうまいか。【梅】おまへのやうな軍次兵衛には。もうなにもいはぬ。　此うち。四人のしやれあれど略す。

店の男きたり万介をみて。あれがきてゐるなと。おもひながら。おこしらへでございます。[梅]どこじやへ。[男]ハイいつゝでございます。[梅]ずらすよつて。よふいふておくれ。[母]コゥよい所じや。壹ッのみんか。[男]おありがたふございますが。ちよつとへん事せねばなりません。ト出て行。これはぐはいのない子のやかたで。客のながしりしていると。すやひくと思はれろもつらし。またはどこのお返事がございますと。男がいふてくれば。客もにはかによそへやるも心惡し。よんどころなくわが宿坊へ箱を入さすれば。花もられるし。両だめに小めろをかいものにやる便に。店の男へちよつとふく事あり。惣じてやかたへゆくものに。万介のやうなはかく別。たゞ一とふりにて行客に。よきとあしきとあり。よき客といふは。贔屓にもあい。またはやかたへ引をけば。なんぞのとき相談するはと思ひ。げいこよりやかたへ引をく事あり。またあしき客といふは。土地のものや。町でも弁慶はだにて。なに事にもゆきわたつた人をば引をけば。すや引じぶんのはなし相手にしたり。また金銀の事にてなく。外に客のふり合を相談相手ニする也。[母]ア、ゑふた。おまへまゝはどふじや。[梅]ねしなに食べます。おまへさんはへ。[万]イヤ〳〵。酔ふたうへは飯はいやじや。[母]そんなら。おはな。おまへと二人たべうから。火をともしイ。[花]ハイ。ト火をともし。そこらをかたづけ。ふたり茶づけをくひしまふ。此うち。万介手まくらをしてねてゐる。[母]おはな。万介さんに枕をだしてあげや。そして風呂へいかんか。[花]ハイ。トまくらを出して。万介にさす。[母]万介さん。ちとおやすみ。ト粋をとふして。おはなをつれ。とこへか行。[万]頭を上ゲねちむいて見て。ヲイはじやは。[梅]すいをきかしてどこへやら。[万]フン。[梅]それでは寒かろうがな。トふとんを出し兩人良みあわせて。につこり。

御持参 とは。あつちに。それほどに思はぬを。こちからはおれに惚れてゐると思ふてゐるをいふ。心はほれた氣を。こちから持つてゆくといふ心なり。

帽子鉢巻 とは。女の腹をたてるをいふ。女はぼうしをきてゐるものゆゑ。はらをたてゝ。其上へ鉢巻をするといふにて。坊主にははちまきのぬけなり。

蜻蛤尻 とは。ながじりするをいふ。心はとんぼは尻のながきゆへ也。

鉄 とは。ふぐの事なり。さる御國にては。ふぐをあきなふ事を禁制ゆへ。てつぽうと異名して賣買するなり。これはあたるといふ心にて。てつぽうといふ。それをまた鉄とばかりいふなり。

冷 ひやめしともいふ。これは小屋出といふと也。もらふためしをくふといふとなり。

起鬼念 とは。腹をたてると也。はらのたつときは鬼の心のやうになるゆへ也。またはらの惡いの。またはぶすいじやのといふ事を。鬼念ともいふ。キ子とばかりいふときは。はらたてるとはちがふなり。

軍次兵衛 とは。しわんぼうをいふ。かぶきの傾城倭荘子にある大和の祐國のおやぢ也。此しばゐ御らんの方は御存じ。

野暮輔評曰

この段。眞の情に似て眞情あらず。すべて館へ客を引ときこの趣ならざることなし。依て同心とはいふべからず。同心仕掛など名付べし。作者。この世界をうがち得たる中にも。梅野が言葉に。かゝさんのまへでは安ふ見られんやうにしておくれト云こと。これら誠に古狐の極秘たる文句にして。意味深長の所也。其余母親の言語動作やかたを目前みるこゝちして。奇絶甘心〳〵。さてこの本文を味はふに。梅野も。母親も。万介を客にするこゝろ言外に見えたり。いはゆるこの万介が身の上は「人は客。われは間夫じやとおもふ客。といふ名言のがれざる代呂ものなるべし。アヽ冷たいかな絃妓のはらのうち。しかしかゝる狂言の世界より。退引ならぬ場にいたり。やみがたくて生涯を其男にまかすもあれども。是等はまだ〳〵其處へはいたらぬ形勢なり。とにもかくにも虚實は水波の隔にして。是を押究めんことはいとかたかるべし。凡館に遊ばむ人かならず。情夫とならんことを思ふべからず。唯趣の異なるをもつて一時のたわふれとすべし。茶屋にて遣ふ金銀を。やかたへ蒔てやるこゝろならば。誠に安全無難なるべし。染ちんの廉からんことをおもひ。かつ眞情を得んがために。館にあそぶ人は。虎穴に入て虎の子をもてあそぶがごく。深淵にのぞみて龍の珠をさぐるに似たり。あやふきことのかぎりにして。其甲斐さらにあるべらず。恐るべし〳〵。

ちくま〵下の巻終

自跋

大廈之顚非三一木所二能支一歌妓之仆非三一本所二能止一。三年坂でこけたものは、三年のうちに性命を果し。

三味線箱で臥た者は。三ねんの内に身体を喪とかや。たゞ可恐は玉枕に擲金。可愼は日柄にすつる束と云爾
大極堂
有長

文政五年午六月

東都　山壽屋平八

浪華　河内屋茂兵衛

皇都
三条通柳馬場西へ入町　近江屋治助
蛸薬師通高倉西へ入町　山城屋佐兵衛

娼婦
侠客　花街風流解（さとふうりう）　大眼翁遺稿　伊賀丸大人補閲　全三冊　追彫

此書は娼婦の細やかなる心根をうつし又客人は侠客の拵へ
去ることを律して行きとゞかぬところをまぜてあらはす也
其の品々まことに全篇にいふべく客人どもの事を
委しく見あらはして時をかなへて川くまで事なし

文政十一年子初春

書舗

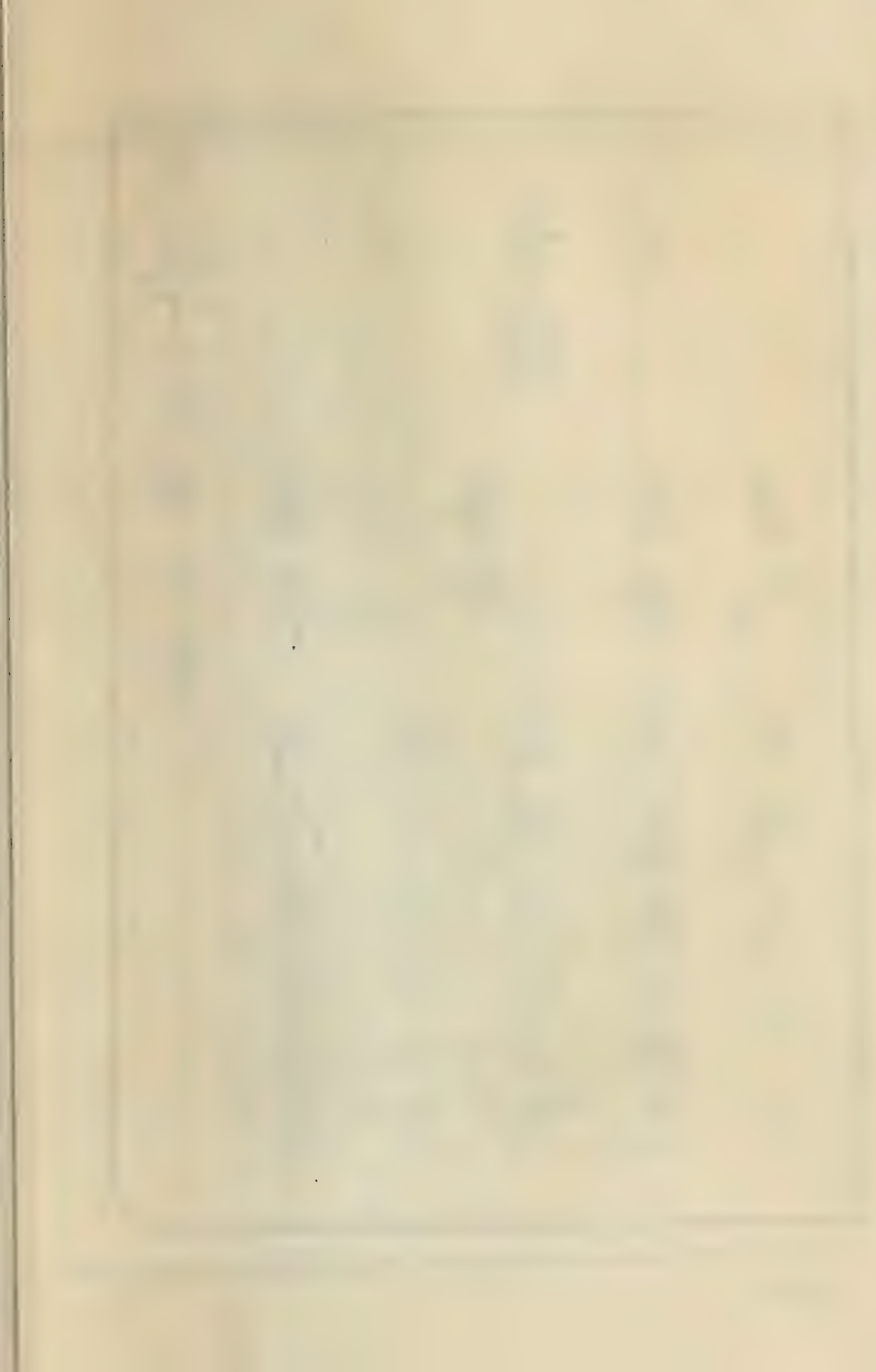
浪華　河内屋茂兵衛

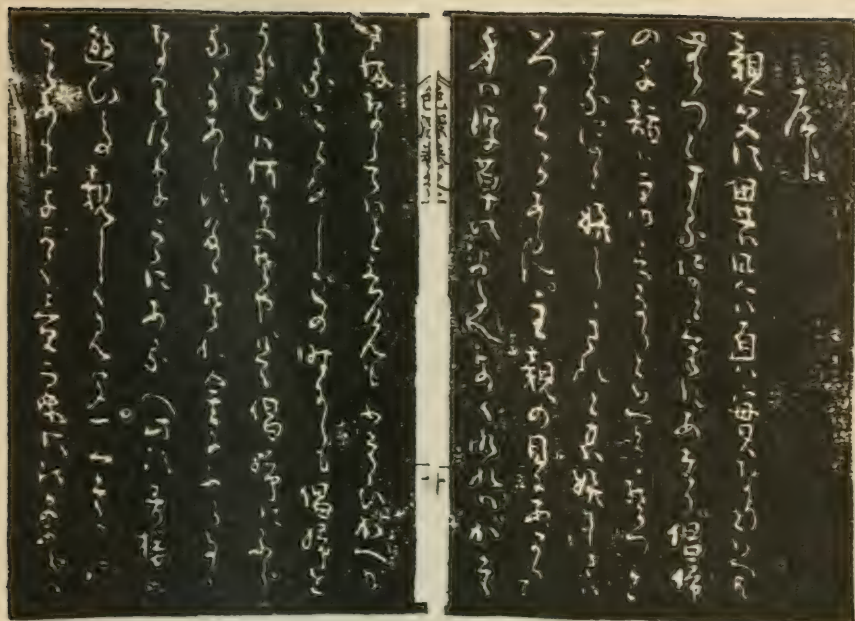
伏見屋半三郎

皇都　山城屋佐兵衛

尾陽　玉屋新右衛門

東武　大坂屋茂吉

表紙	タテ七寸三分　ヨコ五寸
本文枠	タテ五寸　ヨコ三寸三分

序

親父の異見は眞實なりといへ共。むつと
するほど氣にあたり。倡婦の千話は虚言
なりといへども。ぞつとするほど嬉しゝ。
されど其嬉しさはいつまでかあらん。主
親の目にあまりて身は浮草のよるべな
くなれば。かたさまならではと言けんも
ふたゝびかへりみることなし。この時に
しも。倡婦をうらむは何叓ぞや。是倡婦に
ふらるゝにあらず。たゞそれ金にふらる
ゝなりけり。こゝにある人此頃青楼に遊
びて。親しく見聞一くだりのことあり。子

よく昼寐のひまあらば。是を小册にあらわせよと。はじめ終をものがたりす。予空腹の茶漬さら〳〵と是を寫す。寫し〳〵てくりかへし見れば。眞に倡婦買の賜にして。しかも其客の夢を覺し。終に親父の異見に歸せんとす。予よろこびにたえず。みじかき筆にまかせ。そらねの夢と題して。おなし穴の狐にしめす事しかり。

文政九つといふ
としの彌生　　葦廼家
　　　　　　　山の高振 印

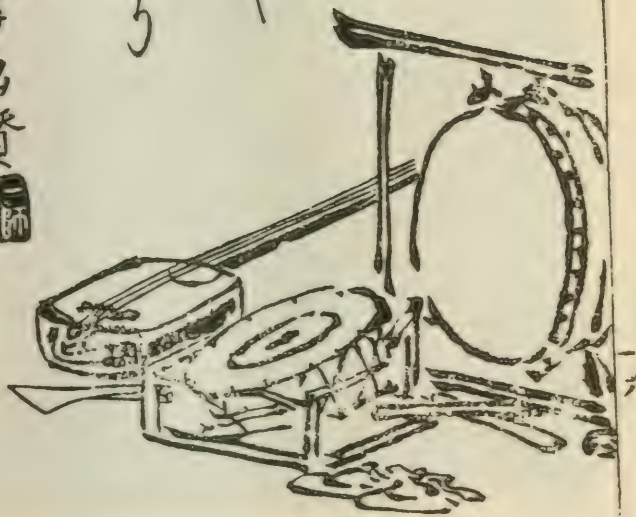
古語に曰。寸も長きをあり。尺も短きことあり。長羽織の古風あれは。みぢか羽織の當世あ理。野夫とばけものなき世の中ニ。ぐつとゐぐつたどんはらは。筆の命毛賓客の鼻毛。ながき話を短く書し。芦屋がひとふしは。名にし難波の骨髓とやいふべし。こゝに江戸勤學の種春。その卷尾を書たし。ひとつの小册子となし。此首に序せよといふに。指くわへんもいまいましく。短き才に長こしき剞劂の費をやめ。一寸さきはやみくもニ筆をとり。五分もすかぬ顔するものは。

梅その主人

上之巻　夢睡珠深色

深色狭睡夢巻之上

葦廼屋高振述
柳園種春校合

第一回

枕書おくる文月も。そよとの風のたよりだに。かれ〴〵になる虫の声。ぬしには秋のいろかはと。おもひみだるゝ糸すゝき。ほんにこの身がまゝにもならば。雲井の月に身をなさん。たゞうらめしき籠の鳥と。二上り哥のひとふしを。隣の子がいがひく三味も。わが身のうへにひし〳〵と。あたりてつらき夕闇くれ。かげほそりゆく燈火にそむけしかほやみだれがみ。ものおもはしきその人は。嶋の内なる大見やに。名高き若めの大角とて。年は二八の色ざかり。桃李の貞や楊柳の。風にさそはる姿には。西施も鏡のかげを耻。小町も花のいろをうしなふ。今宵は我家に暫しがうち。かゑれど思ひたえまなく木津甚の客柳輔と。きこゑし人に去年よりも。思はれ思ふ戀中の。いかなる故か此ごろは。文のたよりもなか〳〵に。かづらきの岩橋ならでよな〳〵の。ちぎりもたえて遠ざとの。をのにおゑてふ思ひ草。むねくるしむる折からに。大見やの廻し才助。いそかわしく門口から。もし大角さん。早ふこしらへなされ。木津甚からいふてきました。大 エ、何といひじや。木津甚からとは大かた柳さんであろ。才 ハイさやうじや。大 ヲ、嬉し。わたしがねんぐはんが届いて。思ひがかなふのじやあろ。一寸。（トたゞみさんかんさしなげて鼠なきする）ちう。ほんにもしやそれかと心せき。とはよういふた事じやに。さつきにから身じまいしておいたらよかつた。（トみじまひにかゝる。）才 叶ふか。かなわぬか。ゑい加減なとじやあろ。大 いふてもおくれなきよ嵐（トみじまいすみたちかゝる）才 コレ其様にとばついてこけなさるな。それそこに石がある。嬉しいので足もとはおろすじや。大 エゝ憎てらしい。（トたゝく。其うち木津甚へいたる。女房おみな。）みな ヲ、大角さまか。サア〳〵おまいさんの念が届いた。ちやつと二階へいきなされ。大 さやうならおゆるしなされ。（ト行んとして才介になにかさゝやく。）才 かしこまりました。外に御用はござりませんか。（ト風呂敷づゝみをおゐて立かゑる。）座鋪の客は大角が。こがれ〳〵し柳輔なり。年のころははたちばかり。いろ白く肥えず痩せず。脊は少し高きかた。いやみなき色おとこ。もつとも當世風にして。女のよろこぶ仕立。きつけはかはりじま越後ちゞみ。通し仕立のくじらをび。あられ小もんの絽の羽織。すこ

しみじかく。きせるは池のはた。かみ入たばこいれはこれに準ず。まとに五アもすかぬといふこしらへなり。此人遠國よりしばし大坂にきたり。八木やといへるに逗留のうち爰にあそび。此大角になじみたるものなり。此比はしばし遠ざかりしものと見えたり。

一坐の妓婦は酢熊の音。木津正の小貞。その外木津甚の娘粂。仲居の露。みな〳〵いせうつき略す。山海の珍味をもりてならべ立。涼しくたゝえし酒の池。肉の林に風通ひ。杯盤すでに狼藉たり。［音てい］哥へ一夜あはねばあんじられ。いやな座敷もつとめのならひ合のべのやたでをかんざしに。むすんで見たり辻うらを。むりにあはせし疊算合ねづみなきする心根は。かわいらしいじやないかいな。トひきおさむる。折からきたる大角が。かほかたちは先にもいひしごとく。衣裳色あいきやうこぼるゝばかり。この夜のきつけは。むらさきの絽のかたびら。すそもやうは唐あいおもて画きたる山水。帶は茶地の小きんらん。色糸入の眞田の上じめ。かみはわげにゆひて。たいまいの櫛笄。同じかんざし六本。外にさんごじゆの金けしかんざし。銀燭輝ふとてりわたり。天津乙女の影向せしかと。うたがはる。優ふとして柳がそばにすはり。［大］お粂さんお久しう。ハイどなたも。トわざと客にはあいさつなし。［柳］大角さん。どうかお久しいぞ。一寸あげやせふ。トさかづきをさす。［大］ハイ。トうける。幇間くま吉きたる。［くま］コレハ旦那お久しい。ヤア大角さん。なんじや。うれしそふなお皃じやナ。お姥さんじやないお粂さん。御きげん。［くめ］ヲヽ、おちいさんじやない黒ちんさん。おまへいつのまに御出た。きり物まで黒いよつて。ばんにはとんとわからぬ。高津の坂の下からお出たか。［くま］なにを。ト自分のあたまをたゝくまねする。ときに旦那。御盃をへ、。いたゞきとふごはアりまアする。［柳］なんだか。まづこは色と聞える。トさかづきをさす。［くま］これはありがた。ありがたア。ありがたつかうはお粂さん。［くめ］しらんわい。いつこいかんな。［くま］いかんきん正氣さん。［音てい］エ、なをわるい。［つゆ］わるいなら。鯉八さんにかゝり。トぐつとのむ。［くま］ハアいやまづ虫下しを一服。［みな〳〵］ハ、、、、。と酒落の緒ほころびて。拳や声色いま様を。様〳〵行ふ藝づくしは。干魚左エ門の作者よりも。皆様よくも御ぞんじ故これをりやくす。［くめ］音さん小貞さん。むかひが來ました。もふおしまい。［音てい］ハイ。と返事につれびきの。三味線箱にたゝみこみ。へ柳さんおありがたう。お粂はん大角さん。と挨拶追從あへませに。みな〳〵立ておりる。［つゆ］柳さん。ちとお休みと。いざなふ一間は雨となり。雲となるべき翠帳紅閨なり。柳は敷ござのうへに煙草くゆらせて居る。大角來たり。［大］ようまア今夜は來ておくれなさつた。トいひ〳〵帶をとく所へつゆ。寢卷のつゝみと茶をもつてきて。［つゆ］なにも御用事はおませんか。［大］

イエ　もふよろしい。［つゆ］さよなら御ゆるつとお樂しみ。トふすまをたてゝゆくと。大角浴衣にきかへ。ひしごきをくる／＼と卷き。そのまゝ枕ひきよせ紙をあて横になり。［大］もしへ。此間はどふしてあないな文をおこしなさつた。その時はあなた書から來て居ながら。ヲヽ腹わる。それに知らしても。わたしが來んことのなんのと。ようマアいふておこしなさつたナア。［柳］なアにわつちのやうな者ア。來てもこなくッても。おめへさんは何もおさし支へなしサ。清さんだの。峠やの平さんだのと。色男のうへ。第一大坂のお人といふもんだから。わつちがやうな田舍もの丶。明日にもどつちへか飛びそうなものとは。違うはな。末はからすの鳴わかれといふ哥さへあるはサ。［大］又あんな皮肉いひなさる。この間もくどいほど。文にいふてあげました通り。もしやあなたが腹をたてなさつて。おいでなさらんといふと。わたしや死でしまう氣で居ました。どふぞそれまでに。一ぺんお顔が見たいと思ふても。行れんといふておこしなさるし。そこで木津甚のおばさんに。どふぞ柳樣のところへ行たいといふたら。柳さんは兎も角も外のお方に惡いといふてじやし。それは／＼泣てばつかりをりました。［柳］そのつぎはどうだへ。馬鹿ものと笑つて居たといふことかネ。［大］エヽにくヽ。トふつつりつめる。［柳］アヽ痛へ。おめへにつめられたは。外のものに撫られたよりやァとんだ嬉しいサ。［大］其樣に人のいふ事を茶にせずと。マアとつくりと聞なされ。なんぼわたしのやうなつとめする身じやといふても。そないに嘘ばつかりつくものじ

やおません。ほれたお方しでほれん人とは違ひます。どふしたものやら。あなたには。はじめてあひました時から。千年も萬年もおなじみ申たやうに。はづかしい事もなんにも構はずに。またいろ〳〵の支迠うちあけて。おはなし申ましたを跡でおもへば。定めてあなたが。おさげしみなさつておゐでなさるじやあろと。それは〳〵案じて見たり。泣て見たり。あなたのことを思ひつゞけて。外のつとめはとんとうはのそら。柳もとさままいると。しめす心だないかの。大ヲ、いや。人にばつかり氣をもませて。じやら〳〵と。もふこれからどふあつても。かうあつても。足のうらのまゝ粒のやうに。かふして〳〵。ひつついて離れません。トぐつとひきよせいだきつく。柳そんなにしたら。わつちに罰があたつて。體がうごかれねへようにならァサ。大どふでもかまやしません。ドレ此おもじを。ト柳の帯をといてほり出す。柳コレサもつとそつちへ寄りな。あついはナ。大なんの。じつとおとおとなしうして居なされ。トじぶんも共ニひつしごきをとき。とく〳〵とあはすと。ほうせん寺のかね。鐘の音へゴヲ、、ン引 作者。ア、古ひもん句だが氣がわるくなつた ト筆のぢくにてみゝをかく。

評ニ曰 それ人として一點の情なからんや。情なきものは鳥獸にひとし。たとへ娼婦いかに實をつくさんとおもふとも。客の心眞實無からんにおゐては。いつの時か其眞のあるべきや。もしまた勤一通りの客なりとも。其客誠あらんには。終に情のいとすぢにひかれて。眞の底に至る。娼婦もとこれ世間の婦人なり。一朝千金に身をあがなはれ。十年萬客に情を商ふ。依而その眞すくなきに似たれど。却而能世情になれて。その怨なきものにあらず。只娼婦は。こと〳〵くいつはりを以客をあざむくものと。のみ心得たるは。大ひなるあやまりなるをや。畢竟この大角。柳に隅するところ。下回に說出すを閱して善分解せよ。

第二回

陌頭楊柳の枝すでに春風にふかるとは。唐土のちんぷんかんにして。いやな風にもなびかんせとは。我日本の酒落なりけり。こゝは處も名にしあふ。戀と情の中橋や。ひく三味せんの道頓堀。かいどる裾もほら〳〵と。雪より[illegible]き萩見月。遊ぶおもひは極樂の。彼岸ならで木津甚が。門も賑ふ夕ぐれすぎ。今おくの間の酒はてゝ。店の間に寄あつまりしは。かの柳輔が座敷にありし藝子。音小ていヲ、あつ。おばはん今夜はようさしこんでおくれなさつた。みなイヤ

柳さんがおいでなさつたけれど。お内の清吉さんとやら。國からついて來ていなさる白鼠がやかましいてゝ。おいそぎじやけれどナア。あの大角さんが此間から。いつこ待て居てじやよつて。今夜はあはしましよとおもふて。其内鳥渡御酒を出しますさかへ。おまはんがたをしらしてあげたんじやいナ。〔熊〕それを此はながちやんとかぎつけて。おこし遊ばしたといふものじや。〔粂〕ヱ、すかん。〔熊〕マアそれでしやわせ。お粂さんに好れたらしまいじや。〔粂〕それはなんでヱ、。〔熊〕おとがゐで蠅追はんならん。〔粂〕ヲ、しつれい。どふでおまへのとこのやといどさんのやうな。好なんとはちがひます。（此熊吉つね〴〵自分の女房を。やとい人といふ也。）〔皆〕ハ、ア。〔粂〕それはそふと。柳さんの居なはるとこい。四郎さんがつくつてじやあつた。大角さんのとやなんど。ゆかりの月の見立があるが見いたか。〔熊〕それ聞ていますけれど。まだ見ません。〔粂〕サアこれじや。〔熊〕なんじや。〽闇よりつらい世のならひ。清吉其次は。〽おもわぬ人にせきとめられて峠屋の平さん。こいつァゑらひ。いつこゑら出來じや。〔粂〕ゑいはづじや。四郎さんは鶴廼屋の流れで。狂哥の御師匠さんじやものと。そしれば影のさす月と。倶に入くるその人は。これ別人にあらず。大角にうちこんだる。峠屋の平といえるものなり。（年のころはよそじにちかく。背高からず。色あさぐろにして。少し目はまちかびたり。その上いやみたつぷりありて。みづから色男なりとおもへども。後家の質屋も受とりがたき代呂物なり。毎日毎夜此邊にうかれて。あなたの青樓。こなたの置やをまはり。多くは臺所店さきのじやまとなり。おやまをよぶ時も。座しきはなく。早くみづから寢間にまつて居るといふたちにして。しかも大ふうにして。又ひつこき方と見へたり。此夜のゐしやう付も。これにて諸君子すいりやうし給ふべし。）〔皆〕ヲ、平さん。サアおあがり。〔平〕ヲ、これは同行衆おそろひじやな。（トずいとあがつて帳ばこのまへにすはり。）これお粂ぼう。お預の番見るやうに。ものも言ずに大しけじやな。〔粂〕ハアどふで。おまはんのやうなやうきなとは違ひます。〔熊〕サアちと奥で一杯きめうてうらいとは。どふでござります。〔平〕今までよそでなめら吞で來た。よしにしよう。〔粂〕そふじや。わたしとこの酒はあたります。そじやよつて平さんはいつも吞でじやない。〔平〕時に大角はこゝへ來て居るか。〔粂〕來て居てゞ。〔平〕鳥渡あひたいものじやがあはれんか。〔粂〕今おねま。〔平〕客はだれじや。〔粂〕しれたこと。柳さんいナア。（トわきむいて笑ふ。）〔平〕ふん。（ト少しむつとなる。此人大のやきもちやきなり。）その內醉熊も木津正も迎ひ來る。〔音・てい〕アイおばさん。平さん。御ゆるり。（ト兩人ともかへる。熊吉もはじまらぬやうすと見てとり。）〔熊〕ドレわたしも。平さん。さやうなら。〔平〕

まあェ、じやないか。[熊]思ひ出したやうじがござります。内へちよつとかゑつて来ます。おみなさん。お条さん。といふてかへると。あとはいよ／＼ものさびしく。大角のことむしやくしやと。はらを立たる酵屋に。仲居などはわきむいて。くつ／＼と笑ひ出す。おみなは出ぬせきをして。エヘン／＼とまぎらかす。[平]いつたい柳とやらいふ客は。おれよりせんからのなじみか。[みな]ハイいや。トいひかけてつまる。[条]ハイ。おまはんより後のなじみいな。ト一向かまはず。[平]いつたいまアおれがなじんで居るに。外に客をつけるといふはどふしたものじや。[条]ハア。おなじみもおなじみによります。全体そのやうにやかましい言なさるくらひなら。藝子をしなされぱよいに。[平]おれも藝子も。これまでなんぼもしたものじや。[条]サア。さよじやあろが。藝子じやといふて。お客ひとりといへば。又大ぶんむつかしいじや。いつたい大角さんに。そのやうに惚れてなさりや。身ぬきでもしてあげたがよい。そふでなければおまはん。娼婦のことじやもの。お客はとりうちじや。[平]おれじやといふて。大角ぐらい身ぬきしかねんものでもない。しかしあれが心底がおもしろうのうては。トいふうち。大角二階よりひしどきのまゝ。乱れし鬢をかきなでつゝ。手水におりる。平を見てかくれんとするを見つけて。[平]コレ大角。おれがこゝに居るのにものもいはずと。[大]おまはんが来てなはるといふこと知りませんもの。[平]ヘェしらぬもすさましい。おれをちよつと見ると。そちらへ隠りよとしようがな。いつたい柳とやらいふ客は。ど

ないによいかしらんが。たかゞ田舍から來て居る人なり。なにも格別ためにもなるまい。おれじやといふておぬしが。娼婦に出た時からのなじみで。わるいしうちをしたといふでもなし。なんぼもこれまで世話したこともある。それに此せつは。おれがよんでもそは〳〵とばかりして。其上こゝのうちで見せつけた。柳さんたら龍さんたら。あたけたいのわるい。いつその事きれて仕舞かと思ふても。まさかおれがのいたら。跡でこまつておもひしるであろ。[大]これは平さん。おまはん今夜はどふしたものじやいなア。氣でもちがやしませんか。なんぼわたしがやうなものでも。おまはんばかりがお客でもなし。きれて仕舞なさつても。まんざら日の照らんことはござりますまい。トこのうちしじう。柳ねまをそつと出て。二かゐより下のやうすを見て居る。[平]イヤおのれ憎くい事をぬかす。おれも男じや。すつぱりときれて。ふたゝび見かゑりもせんは。[大]よふきれなさつた。それでおまはんの男がたつてよかろ。ドレこれから柳さんとゆつくり寐ましよ。トつつと行かふとするをひきとめて。[平]ドレきれたしるしに。と立あがる。ト其手をとつてひきはなし。サア大角さん。おくへといふは。誰なるやと。みな〳〵これを見るに。としのころはみそじばかりで茶の千すじのゑちご。帶は花いろのはかたをり。けんぼうみぢんざめの絽のはをりを着たり。すなわち是柳輔のとうりうする。八木屋の四郎といふものなり。[みな 大]ヲ、四郎さん。いつの間に。[四郎]イヤなに。かのやうすはおもてゞ聞た。爰かまはすと。サア大角さん。[大]そんならよろしう。[平]なにを。トたちかゝるを四郎ちよつととめて。[四郎]もふ何時じやあろナア。トよろしく幕

許曰今大角のする所。峠屋をふつたる樣子。眞なるや虛なるや。峠屋もかくはづかしめをうけて。此まゝきるゝの心あれど。元來大角に於て。魂をとらかしたるものなれば。いかでか口にいふ所のごとくならんや。娼婦はやくこれをさとり。且柳の心をかたくせんがために。わざと柳にきかせて。かくなせしものなり。此後重て峠屋來らば。またことばを工みになさんには。いかでか財をなげうたざらんや。誠に三寸の舌頭兩人をころす。眞に性をたつの斧なり。おそるべし。おそるべし。

色深猍睡夢巻之上畢

色深猍睡夢巻之中

華廼屋高振述
柳園種春校合

第三回

浪華の江南は。色をあつめ情をあきなふ所にして沉魚落厂のかほばせ。閉月羞花のすがた。家としてなき處なく。蕣蕣艶館のあおわひ。鄭声衛風のしらべ。樓としてたくはへざるはなし。哥妓のかごしまはくわりんとなり。幇間のわらひはどんとひゞく。おくりむかひの駕さらに千金の重きに似ず。かりかしの花かつて不落のおもひをなす。されば一たび此地にあしを入れば。飛だ茶釜の薬鑵親仁も。しのゝとふまくの鼻たれ儒者も。しんじつほれましたのことばにほだされ。今宵は是非に御めもじの為に魂をまきこまれ。家を忘れ身をわするゝにいたる。おそるべきは此里。つゝしむべきはこの迷ひなるをや。却說さきに出す所の二回。すでに木津甚の光景をあらはし。こゝにまた說出す所は坂町の風色を主とす。茶屋は女あるじにして藤屋の要。年の頃四十ばかり。むかしはそれしやといふこと。顔のつや髪のはへぎはにあらはれ。客をもてなすこつよからずよはからず。五分もすきめなき所。もつともきりやう十ぶん。きしやう七ツ下りといふかたびら。黒襦子の帯少しわたの出たる所あり。かた手にうちわもちながら。今さがりし鉢などかたづけさせゐる。こくげんは四ツ時ぶんのことなり。要 コレもふ。よそは行燈ひいてじやあつたか見や。おちよぼ名はすま。すま ハイ。今見ましたら大かたひけました。要 そんなら今夜は外にお客もあるまい。こちもひいたがよい。

と詞もいまだおわらざるに。入くる人はこれ帷屋の平にして。さきに木津甚にてもめ合。かんしやくまぎれにこゝに來るなり。要 ヲヽ平さん。サアおあがり。平 はあ。とばかりにて臺所にすはる。要 何じややら。あなたすまぬ㒵じやなア。平 いろ／＼氣のすまぬ事があるによつてじや。それはそふと吾さんが見へんな。要 ヘイさいせん木津甚へ花に居てゐまして。あなたにもお目にかゝつたといふてゐました。いんまの先歸りまして。こゝにおりましたが。大かた手水にゆきましたじやあろ。トいふうち手をふきながら出きたり。吾 平さん先刻は。トすはる。是こゝのむすめにして。嶋の内すし熊のかりみせなり。さきに木津甚にて柳のざしき大角と一座なり。要 マア平さん。ちよつと二階へ。大角さんしらしましよか。平 いや／＼。吾 要 なんでへ。平 大角はもふさつぱりじや。要 どふしてまあそないにいひなはる。平

最前木津甚に柳とやら。あいつがほれてゐる客が來て居よつて。そこへおれがゆきあはした。声も聞て居るじやあろに。ちよつとはあいさつに皃出してもよさそふなものじやに。おれの皃見ながら。しらんふりを仕よる。それからつかまへてあれこれいふたら。柳とやらに聞へるやうに。ぼん／＼といふてはむかゝしよる。腹がたつてならんゆへ。マア手を切てしまふはといふたら。勝手にせへとぬかすによつて。おれのやうな結構なものでも。もう堪忍がならん。なぐつてやろと立た處を。八木四郎が來てとめたものじや＝よつて。いましながら出てきたのじや。【要】それはめつそうな。しかし大角さんじやてゝ。あなたは今やけふのなじみといふでもなし。それにはなんぞ譯のあることでござりましよ。【平】譯があるかないか知らんが。あんまりじやないか。【要】おはらだちは御尤じやが。それぎりにしなさるといふと。何やら未熟なやうじやござりませんか。そこはま一ぺん堪忍して。よんでごろうじ。どうやらあの子が了簡あつてのやうにきこへます。なにゝもせよ。まあ二階へおあがりなされ。わたしが今大角さんよびにやります。【平】いや大角は柳がきて居るよつて出來やせん。【要】イエ／＼それは最前四郎さんがちよつとお寄なさつて。なんでも柳さんをつれてかゑらんならん。そのむかひに是から木津甚へゆくとおつしやつてゞあつた＝よつて。大かた柳さんもいんでゝござりましたであろ。これすまや。あふみやへ居て來て。【すま】ハイ。と出ゆく。【平】そんならお前の挨拶をきいて。ま一ぺんよんで見よか。（トそれをしほに二かゐへあがる。心はよろこんでゐるやつなり。）

評曰　峠屋も一朝のいかりにふれて。すでに大角にふたゝびあはじとせしは。是そのこゝろの眞にかゑらんとする所なり。されどもかれいまだ悟らず。ふたゝび藤屋へ來るこゝろざし。更に大角に魂をのこす所有。藤要よくその機をさとるがゆへ。言を工みにしてこれをすゝむ。大角もまたよく。藤要よりよびに來らん事を知る。嗚呼堂ゝたる一丈夫。なんぞ婦女子のために木偶のごとくなる。

此處まはり舞臺といふ場にて。木津甚の店となる。

八木屋の四郎。柳輔のむかひに來る。柳助今夜は泊りたいといふ所なれども。よぎなくかゑらんと。今店迠出たる處。大角おくつて出る。例のみな粂などより合て居る。【みな】今夜はいつこうお早ふござります。【柳】わつちはとまるつもりだけれど。清吉がやかましいといつて。今四郎さんが迎ひに來たか

ら。顔立て今夜はけへるつもりだ。カウ四郎さん。おめへどうか素面のやうだが。一杯やらかそふか。［四郎］それもよろしうござりましよ。しかし遅くなると。よくござりません。こゝでちよい幕とやりましよ。［みな］さよ/\。そふしておかゑりなされ。コレちよつとなんぞ。ト立てゆくと。あとは柳助。大角。四郎三人。［柳］サア大角さん。こつちへよんな。［大］ハイ。ト柳にひつついて。一身二面といふ身にてすはり。柳が耳に紅のつかんばかりによりそひてさゝやき中ごゑにて。［大］今のを。トいふてはづかしそふにうつむく。［四郎］ヲ、今の間に。ト大角のたもとへ手をさしこむと。大角きのどくそうなかほにて。柳にいだきつき。小ごゑにて。［大］段々おありがたふ。［柳］どふだか。ト大角うれしそふなかほにて。［大］四郎さん。おありがたふ。よろしうお禮を。［四郎］母者はどふじやへ。［大］泣そうなかほにて。ヘイ今日は少しお薬が通りまして。トいふ所へ。おみきりな玉子のかく切あちやらなどさかなでき。持出るとはなしやむ。［四郎］そんならおかん見ませふ。トのんで。柳さんおはゞかり。トさす。［柳］また酒がうまくなつて。面白くなりそうだ。［大］おもしろなつてきましたら。今夜はもふおとまりなされ。［四郎］どつこい。そうはとらの門の金次郎とはふるいやつナ。［柳］ふるい飛切と。まづ御へんばいといんぎんにめへりやせう。［四郎］いんぎんかけねなし。トうけて。此御盃味おふて飲ませふ。それ大角さんのおかほの色こそなをつていへ。トうたひのふしにていふ。［大］何を四郎さんじやら/\と。今いなしますので。わたしやいつこしん氣でどもなりません。どふぞ清吉さんにあんじやういふて。おとまりなさるやうにしてをくれなされ。［四郎］拙者委細承知まかりある。しかし若殿大切の御用を承りながら。けいせいとやらに魂を奪はれ。御用金をつかひ捨。只今にても御上使御逼着あらば。［大］ヲ、すかん。［みな/\］どつと笑ふ。かゝる處へ大

見屋の男。［才介］ハイ大角さん御むかひ。［大］ヲ、せはし。［才］もしちよつとお耳を。トおさへつけていふ。そトなにかさゝやく。［大］エ、すかん。の内酒もかたづけ。柳四郎たちかゝる。ちよつととめて。［大］そんならど

ふしてもおかゑりか。どふぞあした來ておくれなされ。[柳]どふか知れねい。[大]しれんではいなしません。なんでも待て居ます。どふぞ四郎さん。あしたおこしましておくれなされ。[四郎]嚴命畏り奉ります。[大]エ、また。トたゝくまね。[みなくめ]旦那。四郎さん。おちかいうち。

此時またまはり舞臺といふ場にて。藤要二階となる。

時すでに二更すぎ。處〳〵のさはぎもやゝしづまり。月落烏なくといへる。楓橋の夜のすさまじく。姑蘇城外の鐘も聞へ。物ひそやかになる閨のうち。かの峠屋の平は。宵のことなどおもひ出し。とやかくとむねをこがし。大角今やおそしとまちうけたり。隣りの床よりもりくる私語を聞ば。

[客]コレそないにびん〳〵することはない。なんぼわしが坊主じやといふて。譯のわからぬことはしやせん。[ひめ]ふりそでと見へて。いまだ歳のゆかぬこゑなり。そんなこといひなはるけれど。ほかにふかいのがあつて。またこゝで大見屋の大角さんに。なじみなさつたじやないか。

大角といふを聞て峠屋。[平]なんじや大角といふてる。こゝはきゝ處じや。トみゝをたてゝきゝ居る。

[客]あれは姉からこつち。藝子の時よりしつてゐるゆへ。娼婦に出たといふを聞て。鳥渡はいたのじや。そのせうこには。わしの連中の石岡屋の淸といふものにも。こゝでなじみになつて居るは。また其淸といふ男は。まことにかたい石岡屋であつたが。おれがだん〳〵骨折て。どふやらかうやら。角が大ぶんとれて來たら。その大角にはまりこみ。內の首尾がわるなつて。今は來られぬそうな。[ひめ]それから大角さんも。今では木津甚のうちに。柳さんといふお客が出來て。これには大角さんがいつかうほれてじやそふな。[客]また木津甚とこゝとへ來る客の。峠屋の平といふ男が。大角にゑらふほれてゐるそうなが。これは又あつちから嫌ふといふことじや。

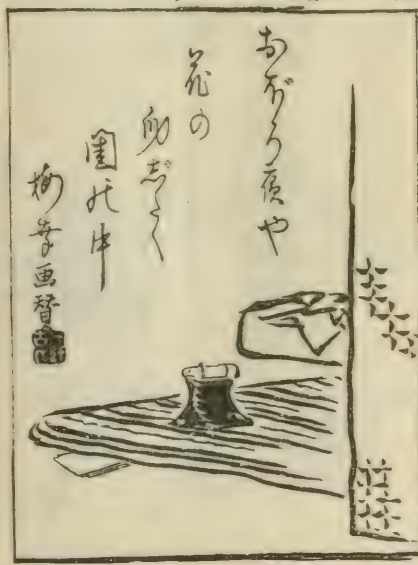
峠屋このはなしをきくより。いよ〳〵あつくなる。[平]どいつじや知らん。おれのことをぬかしていをる。いま〳〵しい晩じや。大角もまたゑらふ待たしをる。もふいつこいんでこまそか。いや〳〵もつと待つてあふて見よか。トきせるをいれたり出したりしている。どふしておそい。一ぺんよんでせかう。

(編者記　原本は此處にて第二冊目終り)

手をたゝく。〔すま〕ハア引イ。ト来たる。〔平〕コレ要さんに。大角は来ませんか。いつまでまたすことじや。あまりあほらしいよつて。もうかゑりましよといふておくれ。〔すま〕ハイ/\。トいふておりる。

作者曰。此一回すでにこと多く。入退届せんことをおそる。よつて平と大角との一篇をしばらく置て。柳助家にかゑりしところをとかんとす。前後混乱するところは。諸君子よく察したまえ。

第四回

迷ひゆく。心のやみや梓弓。ひくにひかれぬ義理となり。ともにこがるゝ夏むしの。たとへ火の中水のうち。しらぬ越路のはてとても。つれてそはんとおもひ立。あしもそゞろに柳輔が。人目をしのぶほうかぶり。さす雙刀も長き夜の。秋風ぞつと身にしむは。夜も丑みつになる鐘の声ゆび折ば早七ツ。〔柳〕さだめて大角がまちかねて居るであろ。もはやこゝが藤屋。どこもかもよく寐たか。かたつきり人声がしない。どふかして此ろじの戸を明たいものだが。トひとりごと。それと聞とる大角が。かねて今宵とやくそくの。時刻もうつると先程より。酢屋平が寐息をかんがへ。しのび/\てろじの戸のかきがねはづし。柳輔にとり付。〔大〕柳さんうれしい。とふるひごゑ。〔柳〕さだめてこはかつたであろ。なにかのとはみち/\はなそ。見つけられては一大事だから。さあはやく。とともに手をとりかけ出す。〔犬聲〕ワン/\/\。〔大〕ヲヽこは。ト柳にとりつきこはがる。〔柳〕いめいましい犬だ。これくらひやがれ。トたもとからにぎりめしをほうり出す。犬なきやむ。〔大〕あなた。ようそんな物もつてお出なはるな。〔柳〕知れたことだ。おらはかけおちにぬけ目のねい男だ。〔大〕もしな。こうなつたはうれしいが。姉さんや藤要様が。うらんでじやあろし。またほんとうの母さんは病氣なり。わしがゆきはがしれんと聞たら。さぞ悲しがつてゞござりましよなア。トなみだぐむ。〔柳〕知れたこつた。おらじやといつても。養子にいつたみぶんといひ。さきにいひなづけの娘があるといふもんだに。それを捨てこうなろと

いふこつたもの。てい／＼不義理な叓だねい。しかしそんなことぐど／＼おもつたといつて。あとのまつりだはな。まづ。はやくあよびな。と太左衛門橋をうち渡り。長堀ばしにさしかゝる。おもひがけなきこかげより。大見屋藤要のちやうちんともさせ。凡十人ばかり。まつさきに六尺棒ひつさげ。向ふはちまきに一ぽんきめしは。峠屋の平なり「平」おのれ柳助の青二才。大角の貢女め。おのれらがのぶといしうちはかねての承知。今宵わざと藤要にとまり。寐入た貞をまことゝおもひ。忍んでろうじを出るを見をき。工みいうらをかゝんと。裏口をまはり。此處にまちうけたり。かねての戀のいしゆばらし。世間へ顔の出されぬやうにしてやらふ。まづ大角をわたせよと。のゝしりかゝれば。から／＼とうちわらひ。「柳」ことおかしきうづむしども。みちを開きて通ふせばよし。邪广ひろがば息の根とめんと。大角をうしろにかこひ。身づくろひしてまちかけたり。大角はけがでもあらんかと。ふるひ／＼柳のうしろにかくるゝ。平「とかくの論は無益なり。それ一同に柳にかゝれ。おれは大角をひきつれて。まづわが内でまちうけんと。声の下より大勢が。柳助ひとりおつとりまく。今は一生懸命と。かたなをするりとぬきはなし。大勢相手にいどみあふ。そのひまに峠屋はむりむたいに大角ひきつれ。橋を北へと走りゆく。八木屋の四郎は柳助が。今宵のそぶりいぶかしと。嶋の内へと來かゝるみち。長堀橋の南に。人声もの音さはがしく。スハことなりと尻からげ。かけ行橋の北詰にてぺつたり出あふ峠屋平。くらさはくらし。

たがひにそれとわからねど。なき入女はたしかに大角。まづまてやらんとわきざしの。こじりを取てひきもどす。扨はおのれも柳助がた。邪广ひろぎなば コレかうと。するりとひきぬき切つくる。身をひねりつゝさそくのあてめ。女をひき立。[四郎]大角さんではないか。[大]四郎さんか。よいところへ。[四郎]して柳さんは。[大]今むかふに大勢と。[四郎]それこそ大事じや。おまへはあとよりと。いつさんにこそ飛でゆく。橋の南は柳助が。秘術をつくしふせげども。大角の事も氣にかゝり殊に大勢にたゞ一人。今はちからもつきはてゝ。すでにあやふく見へたる所へ。四郎は声かけ。我等これまでまいりたり。大切の御身に。あやまちあつてはならず。こゝは我等におまかせと。峠屋の落したる。六尺棒をおつとつて大勢の眞中さしてわつて入。これに氣を得て柳輔はかたなうちふりわたりあふ。今はみな/\かなひがたく。雲を霞に逃ちつたり。柳助ほつと息をつき。[柳]ア、よいところへ四郎さん。[嘉吉]もし/\旦那さん。なにをおつしやります。もしもし御目をおさましなされ/\。[柳]ム、アゝせつな。夢であつたか。

夜ふけがらす カアヽヽ

評曰 諺にいふ。聖人に夢なしと。聖人豈夢なき事を得んや。たゞおもひなく迷ひなきによつてなり。今柳輔。八木屋の座しきにかゐり。夢見るところ。全く一心のまよひよりおこる。其癡情黄河の水をもて洗ふといへども。清むる事かたし。人さとる時は。眼前のなすところ皆ゆめにして。ゆめもまた眼前のなす處とせば。現夢さらに何の差別かこれあらん。かの莊蝶のたとへもこゝなるをや。今や此書に演るところ。夢物がたりの取ところなく。たはれたるさまながら。目をとゞめてこれをよまば。おのづから癡情のいましめとなるべし。いにしへよりいえらく。金言は耳に逆ひ。良薬は口に苦しと。肝をさかれ江に沈む。みなたゞ君臣の情を全ふするとあたわず。いはんや當世の凡人。

かたくろしき書をよみて。而後行ひをあらためんや。わづかに目をよろこばす書によつて。終によむ人を諷諫せんとす。これ則作者の婆心のみ。

深色狹睡夢卷之中畢

序

杜丹花下の睡猫は。意蝶に在て。花を愛にあらずと。頃高振先醒の心花になり行。復蝶となり。甫に飛で。一齣の奇説を看。忽一小冊となし。書肆某をして。草堂に抛。編次を需る事切。予柳巷華街の趣に闇く。唯蓬頭を撫るといへ共つゆろさざれば。先筆を執て、局を結ぶことゝはなりぬ。題して深色狭睡夢といふはかの青楼上の酔姑は。意金に在て。客を戀るにあらざるゆゑなりと。妄に口ばしるものは

柳園種春

色深狭睡夢巻之下

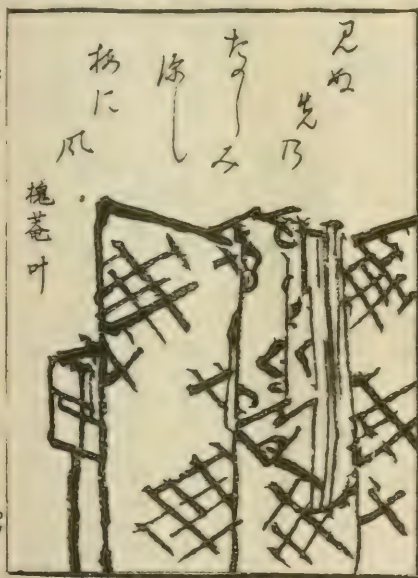
第五回

梅園種春編次

秋風の吹初てよりしら雲の。たつてふ天の川浪に。かけにし橋やかさゝぎの。みなみに飛で暁を。つげわたりたるかねのねに。やう／＼しらむ遠山の。黛凄き閨のうち。まだきえのこるともし火を。かすりてそよとさぬ／＼の。枕にかよふあさあらし。身にしみ／＼と氣のつく峠屋。むへとおきて。[平]たしかに八木四郎。コリヤ大角をどふする。トそばにふしたる大角がかた先を引つかめば。[大]アレエ、、柳さん。ト大角は起なをつて。峠屋にいだき付。たがひにかほ見あはせ。[平]そちや大角。大おまへは平さん。ほんにやつぱり平さんじや。トあたりを見まはし。[二人]夢であつたかいなア。

この所南地ふち要の二階、今両人が夢見たるは。中巻の畢に話處の八木家にありて。柳輔が見たると同じ夢なり。亦覺たるも三人同時同刻にして。東方既白とする時なり。此大角。いかなる言を述て。峠屋が怒をとき。かく枕をともになしたるや。そは左に解ところを閲て善く解せよ。

[大]ほんに柳さんにつれ出されて。[平]太左衛門ばしの北詰にて。[大]ハイ大勢にとりまかれ。[平]柳めが狂ふそのひまに。[大]おまはんと手をひいて。そつとはづして行先を。[平]邪广ひろいだはたしかに八木四郎。[大]そんなら御前様も。[平]わがみも夢を。[大]ハイ。[二人]ふしぎなとなア。平ャこれ大角。今見た夢のやうすでは。そちややつぱり柳めに。しんじつほれて居ようがの。トくみをきの茶をぐつとのみ。[大]エゝなんといひじや。トいひさまに平が右の手へかぶりつく。[平]アイタ、、、こりや何しやがるのじや。トふりはなせば。又膝にむしやぶり付。[大]コレ平はん。おまへはなつ トはぎしみして涙はら／＼。ほれたが因果じや。どふぞ身ぬきをしてもろて。どうしてなりとそふを樂しみに。これおまはんにちつとでも。苦勞をかけまいとおもふて。石閣屋の清はんに。三拾兩むしんいふて。大方出來そふになつたを。あんまりおまはんが。やきもちゆへ。清はんもとりにがした。其頭からあの柳はんが私ににこりかけたゆへ。どうぞ逸さんやうにと。いろ／＼狂言かけても。あの四郎めがちや／＼いれて。どふもならんよつて。母様を大病じやといふて。此あいだ五十兩むしんいふたら。ねつから返事もせぬゆへ。どうじやまた。す

かゝしらんと。たび/\みをやつたら。ゆふべ廿日ぶりに。木津甚へ來て。よびにおこしたよつて。たゝみざんまでして行て。寐た所へおまはんがおいでゝ。私のとからお粂はんと。かれこれいふてじやさかい。わざと二階から下そうにして。心にもない愛想づかしをいふて。かわいゝおまはんをてらしたゆへに。これあの邪人の四郎めが。五十兩といふかねを私のふところへいれてくれた。こんな心配するのも。どふぞ一日も早ふ。おまはんの女房じやといはれたいばつかりじや。それにゆふべも矢のふるほどよびにおこし。やう/\柳をいなして。おまへにあふて。此かねをわたし。身ぬけの相談をしようと。たのしんで飛立ように來たのに。人の心もしらずいきなりにふんだり蹴たり。こないに髷までへたばるやうに。うち打擲。あのお要はんや。吾はんがわけておくれんと。殺されるのじや。此かねを見せて。わけをいふたら。やう/\ときげんをなをし。寐て中なをりして。うれしやと思ふ間もなく。夢を見たが氣にいらぬと。またいやみのたら/\いふて。私を術無がらすのか。御前様なんで其様にじやけんになりなはつた。コレ此むねが割て見せたいわいナア。卜平のひざにとりつきなく。[平]おれもわがみの狂言じやあろとは思ふてゐたけれど。木津甚のやつらがおれをしゝいなしにいなしたさかい。つい癇癪がおこつたのじや。それにわがみおれをそでにして。柳の十部一も。おれにかまはぬゆへ。何やかやでついおこつたのじや。[大]なんのまた。客あつかうやうに。あなたじやの。佛檀様じやのと。あたしら/\しい。まだけいせいじやと思ふてからあきれるわいなア。ほんに粋のやうにもない。あんまりあほうらしい。卜きせるを打つける。[平]ゑいは。もふ料簡しい。おれが悪かつた。[大]エ、知らんわいな。はらいつばい人に氣をもませておゐて。いつでもあとであんなこといふのじや。卜脇むいてつんとすねる。[平]コレ大角。そないにせすと。よふきゝ。わが身やこのかねを。おれに渡そといふけれど。おれも峠屋じや。いかに此頃ふつていなといふても。わ

がみに客をすりおろさせ。そのかねで身請したといわれては。今迄みがいたかほがよごれる。わがみの志はうけて居る程に。マアこれは取ておゐて。小遣ひにでもしい。おれも京の得意に五十貫目といふものたをされ。そんなとやかれこれで。わがみの身ぬきものび〳〵になつたのじや。したが其くめんもしておゐた。かねてはなす通り。浮世小路にちよつこりしたゑい座しきをかつて。神棚から。火吹竹まで拵へさして。ちやつとはいるばかりにしてある。わがみの箪笥も二棹まで買て。きれいにすえてある。けふはそのかねが出來る日じやさかい。これからいんで。取引して。あしたはわがみの親方にかねわたし。すみやかに身うけして。柳のいなかものや。八木四郎の毛唐人やら。木津甚のやつらの。鼻をひしいでやるは。[大]わたしや嬉しい。そうしたら柳は氣ちがひになるじやあろなア。なんの小づかひもいりません。入時はおまはんにもらふさかい。どふぞ家のたしになとしておくれ。ト五十兩の封のまゝ平のそばへおく。[平]わがみいらずば。母者の寺參りのさいせんになとやりや。エヽどふしても。おれが手にとると男がすたる。トむりに大角がふところへをし込。コレちよつとこちら向きや。あたまは痛みはせぬか。[大]なんのぬしにたゝかれるは當りまへじや。おまはん。手はどうもなりやせなんだかへ。[平]かゝの口紅がついてある。[大]ヲヽうれし。ト平にいだきつきふとんのうへへいつしよにこけると。隣にとまりし坊主客めをさまし。うヽヽ引アヽヽ引トのびをするとあいかたの女郎もめをさまし小聲にて。[女]コレおまはん。ゆふべ悪いこと云たなア。[坊]隣に居たのはその平さんじやあつたそうで。大角が來てから。ゐらせりふじやあつたなア。[女]そしつたことを聞いてゐてじや有たじやあろよつて。目のさめぬうちお歸りなはれ。[坊]そふじや。また今夜來ふ。誠に口をして鼻の如くせよじや。トこはそふにして羽織きて。段階子をそつとおり。茶の下をたいてゐるおちよぼに。はきものなをさせ門へ出る。此女郎まいびきへグウ〳〵〳〵た寐間へもどつて。

このとき夜はほの〳〵と明はなれて。藤要の門をすぐる一人の男あり。頭に狐色の手拭ひを頂き。身には古布をまとひ。朽かゝりたる草鞋をはき。兩手は懷にして。股谷に在。兩の古桶荷ふの棒。肩にちよんと乘て。如天秤。秋風に嘯てうたひ行。其詞曰。

悅涙闔情濃則
我意雖眞大快
亦想對余人如此
怨氣如烈火然也
是理哉々々〳〵

是樓上に在處の大角が意中に徹。故に別に許をあげず。抑これは

何人ぞや。神か道士か。作者善是を知。難波の邑人。尿買良が流行戯哥を唱へて通行しならん。

第六回

炎景剰殘衣尚重とは。秋のあつさにたえかねて。紀の何某がつらねたる。言花剰殘頓尚著と。筆がすべつてしやれ衣。うらふきかへす涼風の。やう／＼かよふ未下刻。しのびてすだくまつむしの。むし所てふ今宮の。むし湯と名にもたつけぶり。まだ入相にとふ寺の。かねてまつとはやくそくの。二こしさすがものゝふの。にぎはふ門をしるべにて。入來るは。年のころ三十四五侍いろあさぐろく。柔和にしてふんべつらしき人物。ゑちごに見まがふなら嶋にもじの羽織を着したるは。柳助が國からの付人高瀬清吉なり。中居あんないして。仲ゐ よふおこし遊ばしました。ト茶たばこぼんなどもち出。まだいかふ暑さにござりますなア。直にお湯へめしませんか。そのうちにさゝをあげませふ。清 イヤ。つれが二人今にくるから。參つたらこれへ案内さつしやれ。浴衣も三ツ出して肴もそのつもりに澤山出さつし。先湯へはいりやせふ。ト手ぬぐひさげて湯へゆき。しばらくして出きたり。團扇にてあをぎゐると。中居さけさかな涼しく仕立て持ち出ると。清吉は仲居に酌さしひとり飲みかけ居る。此隣ざしきにも客ありと見へて。わらふ聲も聞へ。はなしの聲ふすま一重をもれくる。女の聲へコレ 共様におづ／＼する㕝はない。こゝでおごつた所がせいさい一兩じや。五十兩あるはな。男のこへ〜ヘヲ、そふじや。ト手をたゝくと。下女 ハイおよびなさつたか。男 コレもちつとおいしい物。たんと出しておくれ。下女 ハイ／＼。トいふて立て行。男 あの柳助といふひがは。まだ土けがはなりよまいがナ。女 いつこいやみじや。しかし酢屋よりましじや。ト柳助といふこゑに。清吉ふしんたて。仲居にむかひ小ごゑにて。清 となりに居るはどこのものだ。しらないか。仲ゐ 小聲にて。あれは大見屋の娼婦大角さんたらいふのでおます。すつかりとしてよいお子でおます。トこれを聞て清吉。清 コレおてまへ。用があらばよぶから。勝手へ行て居て。おれがつれが來たら。ひそかにこゝへ通して下つせへ。ト弐朱一ツ紙につゝみやる。仲ゐ これはおありがたふ。畏まりました。ト立てゆく。あとに清吉ふすまのすきより隣の座敷をうかがへば。客は二人。一人は若づめのおやま。一人は年の比二十のうへを二ツもこしたるとおぼしき男。顔の色あくまで白く。眉はほそく一文字につくり。少しやせがたちにてかみは水すきにして。わげ細く。ものいふとき。あらはるゝ。歯は白きごいしをならべしごとし。水のたるごとくみがきしすがた。紺がすりのひとへものに。はかたの帶をかいの口にむすび。すこし腕まくりして。女ともたれやい。酒飲み打けうじて。やゝたけなわのおもむき。女も小紋のゆかたに。むらさきのほそ帶。しどけなきていにて。雪のはだへあらはにして。盃を両方

からロそへて飲みあい。あるはよろこび。あるはさゝやき。水もらさじと語らふありさまなり。清吉は息をつめてきゝゐる折から。仲ゐがひそかにあんないして。あとから來たる二人のつれは。柳助八木四郎なり。四郎 清さんお待どふ。柳 清吉こゝへはどふして。清 アコレ。ト手にてしづかにといふしかたして。ひそかにこゝから隣座敷をのぞけといふしかたするゆへ。兩人のぞき見てきもをつぶし。柳 あれは大角めと。たしかに廻しの才助めじや。四郎 コレ靜に。トせいして三人いきをころしてのぞきゐる。才 コレゆふべ帥屋めがゐらもやしで。火のやうになつていよつたが。おまへ。どうして仕舞をつけた。大 何かなしに。此かねをめさきへつきつけ。眞夫ごかしに。腰をぬいてやつてどうがらをたらかした。ところがおかしいとは。同じやうな夢を見たとおもひ。そふしたら。またもん句つけて。いやみをいふさかゐ。粋ごかしにして。又此かねをつきつけたら。ほしうてたまらんのじやけれど。わしが腹でいくもんじやよつて。母様のこづかひにせいといふてわしの懐へいれよつた。そしてまだけふ中に金くめんして。明日は親方様にかけ合て。わしがみぬきをして。うき世小路たらいふ所へ。かこうといふてゐる。才 むまいな。大 そうすると。呉服屋香具屋をよびつけて。おもいれ買込それをみなまげて。ゐい道具はみなぬかして。おまへとふたり夜舟で。ほいとこさやるは。才 柳めにもつとおろしてやりたいな。大 ゆふべあのくらひかまかけて置たよつて。大方今夜はくるじやあろ。わかれに紙入なとおろしてこまそ。才 コヲ、そちが柳をかける時は。まとに眞實のように見へる。いかなおれでもおりには。迷ふてむつとするとがある。大 しれたこと。そのくらひにせにや。今の客はおろされん。才 どふでの時もおもひやられる。大 しらんわいなア。まあこれくて。せいでもつけい。ト玉子のあつやきをはさんで。才介が口にいれ。その半ぶんを自分が口へいれる。才 ち

くしやうめ。トぐつと拍手にこなたにらかどふ三人は。あきれて一どにしり居にたふれ。清吉小聲にて。清 ふらちなやつなア。

（編者記　原本第四冊目此處にて終り）

大角才助の兩人暫らく無言なり。此間何ごとをか談じ。何事をか行ひしや。作者もしらず。唯隣の三人。惘て尻餅搗たるぞおかし。やゝあつて大角をきなをり。大 てんごうしいな。トにつたりわらふ。才 ま一ぺんゆへはいろか。大 洗ふておゐで。才 いかけでいこ。大 しれたことを。今のはあるか。才 これにおはします。風呂場迄持參せう。トさいふに入て。首にかけて。二人づれにて風呂場をさしてゆく。四郎 なんと柳さん。ごろうじたか。柳 いやはや。とんだ女郎子だ。清 サアこれにておもひ切て下さりませ。四郎 女郎といふものなア。眞實ほれたと見せても。皆あの通りなものじや。あの大角めは。尻もけつも。丹けつのかたまりじや。木津甚じやの。藤要じやのと。皆女才のない茶屋じやよつて。柳さんに深入さゝんのじや。惡い茶屋じやあつて見なされ。

遠にだまされなさるのじや。それでさへ昨夜夢見がわるいよつて。是非とも今夜きやつにあひたいなどゝおつしやるゆへ。內〻清さんに吹こみ。このむしゆへ先へまたせておゐて。あなたを連てきてごゐけん申そと思ふたに。ねがふてもない古たぬきの穴の底を見ぬいて。化の皮を御ろうじたも。清 全く四郎さんのしんせつが届いたのじや。四郎 たとひ又。柳さんがうけ出しなさつて。くろがねの網を張て。おきなさつても。蟇じやないが。いつの間にやら出て行ます。清 これにてとんとおもひ切。早〻御皈國あつて。御娘さまと御祝言なされませ。柳 だん／＼の異見過分にぞんずる。これまではあの賣女めにまよふて。實は耳にはいらなんだ。今日只今夢さめて。四郎さんの手めへも。面目無へ。早く國へ皈り。母にも罪を侘ませふ。清 あやまつて。改

むるにはゞかること勿れサ。若旦那よふ思ひ切て下さりました。それでこそ皈て合すかほもあれ。しかし奧樣が內證にて。路用のたしにもと下されし五十兩。あのやうな賣女とはしらず。手ぎれのためと四郎さんを賴みくれてのけたが。思へば淵に捨たも同前。もつてへねへ。柳 ナニ犬にくはれたと思へば。きついことァねへ。これから女郎買やめたら。一月の內にやァ。五十兩とりかへすはサ。清 いつてもあまり馬鹿げ切て居る。四郎 そこらはぬからぬ此八木四郎。マア／＼。きやつ二人が爰の仕舞を見てゐなされ。妙けれゝつといふ世界になりやす。先一ぱいのみませふ。ト三人のんで居る所へ。大角才助湯よりあがりしと見へて。となりざしきにこゑする。才 ア、さつぱりした。大 おきんか。風呂の中でも　　ことして。素人らしい。トいひながらうちはをつかひて。才 もふ夕暮じや。そろ

／＼しやばへ出ようか。まんまと一日身あがりなされた。【大】五十兩あるじやないか。【才】五十兩づかひがあらいな。ト手をたゝく。【才】【下女】ハイお呼びなさつたか。【才】つけおくれなされ。【下女】ハイ。ト立てゆき又きたり。お湯の代も一處にして。三十八匁五分になります。【大】そんなら今のうち一兩あげてつりもらひ。【才】そふじや。トかの五十兩の封をきり。一兩ほり出し。此内取てあとは貳朱でおくれなはれ。トやたさがりに煙管をくわえ。あつぱれ。大通といふかほでいる。暫くして女來り。【女】もしこの小判はいきません。かえておくれなされ。ト一ことたいふて返す。【才】何のいかんことがあるもんか。【女】それでもいきません。【大】エ、外のとかへてやりいナア。たんとあるじやないか。【才】エ、邪广な。トまた一兩出してかえてやり。二人とも着ものきかへてかへる支度してゐる所へ。むし湯の銀場と見えて。三十ぐらゐなものいひそうな男。しぼりのゆかた着たるが出きたる。名は吉兵衛。【吉】コレ此かねで爰へぞめきに來たのか。一ぺんならず二へん迄。こんな戎金をつかまそと思ふて。人をくそにしたような。あほうらしい。トかねほりつける。【才】エ、何といひなはる。おいらをこんな者と見すかして。こりやぐずるのじやな。トきつとなる。【吉】ヤイふんどしめ。どうみやくを拂ふよつて。かえておこせていふを。ぐずるとは何のこつちやい。此金に戎三郎とかいてあるがおのれが眼にやよめんか。へげたれめ。ぐづ／＼ぬかすと。引くゝつて大見屋へつれて居て。親方の前でごすそよ。トこれを聞く才介あつくなり。殘りのかねをあらため見てびつくり。【才】ヤアこりやみな今宮じや。【大】エ、、、なんといひじや。トさしものけつの大角もぐにやりとなり。【吉】そんな芝居のやうなこといはずと。きり／＼算用せい。なけりや着物なと預ろかい。トやつきとなつてゐるところへ。八木四郎庭からそつとまはり。いま來たやうなかほして二人の座しきをのぞき。【四郎】吉こなんじや。ざは／＼と。トずいとあがる。【大】ヲ、四郎さん。【四郎】大角か。たれと來た。【才】旦那ヘイ／＼。ト片隅へよつてゐる【四郎】吉子どふしたのじや。【吉】八木屋の旦那。聞ておくれなはれ。此二人湯に入てたらふく飲んだり食たりして。拂ひしませんは。またそのうへに此どうみやく。【四郎】ヲ、大見屋のかゝへの大角。よふ知つて居る。つけはなんぼほどじや。【吉】たつた卅八匁五分でござります。【四郎】こゝへ來かゝつたがゐんぐわじや。おれが拂ふてやろ。ト金二兩出し吉にわたす。【吉】こりや多ござります。【四郎】あちらと一處にして。またあまつたら預つておゐてたも。【吉】ヘイ。ト才助がめさきへつきつけ。コリヤよふ見い。これがほんまの小判しや。べらぼうめ。われの出よふがよけりや。平生見るかほじやもの。なんの二ヶ月でも。三月でも。かけてやるけれど。

逆ねだりのやうなことぬかすから。とらにやきかんのじや。八木屋の旦那を拜んで居い。〔四郎〕コレ吉こ。こりや大かた大角が。どこぞの客にむしんいふて。もろたのじやあろ。其客めが。こんな内證のわけも知て居る人でわざとうらかいて。今宮をつかましたのじやあろぞい。〔吉〕そんなことでごましよふ。何じや知らんが。ふんどしと。ほんかりにくるは。ぜうじの事じや。旦那おありがたう。ト立て行。大角へいき。〔大〕四郎さん。いつの間においでなさつた。〔四郎〕今來たのじや。ちよつと行てこふ。ト庭にをりて。又隣へもどると。才助大はだぬぎ。大角をとつて引すへ。〔才〕ヤイまぬけめ。よふぬけ〳〵とこんなどうみやく握まされて。おれに耻をかゝしたな。それになんじや。心配したの。イヤ此くらゐにせにや。今の客はおろされんとの。なんのと。一体さつきにから。五十兩〳〵と大ふうな事。つくしやがつて。あたいまいましい。ト腹立まぎれにつきとばす。とたんに隔のふすまへあたつて。ぱつたりこけると。隣ざしきには右の三人。この世界をさかなにしてのんで居る。大角びつくりして。ヽヤア柳さん。四郎さんも。おまえはなア。トはぎしみして無念のありさまに。八木四郎につこと笑ひ。〔四郎〕コレ大角。びり〳〵することはない。かういふことと見ぬいたゆへ。清さんから請取た五十兩はなをしておゐて。十日戎に店ののらが買てきた五十兩を。一寸作してくわせたのにや。そのかはりにこゝの拂ひはしてやつた。柳さんもがくやを見てからお

國へおかえる氣になつた。其祝ひや何やかやに。これだけおれがもろうてやるは。ほんとうのじやぞ。ト金三両出してなげてやる。

[大二才]そんなさつきにからの。ふたりの話も。柳ナ、皆聞た。[大二才]ニ、、、、。トそりかへる。[四郎]ハテ扨。柳さんも。清さんも。近〻國へおかえりなり。またよその莨を聞たとて。手がらそうにふれあろくやうな。八木四郎じやない。又こゝの吉じやとて。商賣がらじやもの。こんなとを世間へは出しやせぬ。おれもまた味様いふてやるは。トさしもの二人もあやまり入。三両をもどし。才 大これはいたゞきましたも同前でおます。柳ナニわづかだ。取ておけサ。

[四郎]コレそれいたゞいて早くいんで。けふらい見せぬやうにはたらいたがよい。間夫はつとめのならひじや。峠屋じやといふて。まんざら二才でもあろまいし。だまされるのが向ふのあやまりじや。きりやう次第だましてとるが。娼婦の業じや。峠屋の終は。後篇に知りよぞい。大二才そんなら何でもこれ切で。[四郎]ハテ扨。そんな事をいふて。くがいの妨するやうなおれじやないは。ト三両をいたゞいてふところへいれて両人。[大二才]エ、有がたふございます。さやうなら柳はん。四郎はん。ハイあなた。ト清吉にまであいさつして。二人つれだちかへる。三人かほ見やはせて。柳四郎清〻、ハ、、、、、サア目出たふ笑ふて皈やせふ。幕

評曰これ人此道に走る則。馴馬といえども追事かたく。蘇張といへ共諫留ることあたはじ。大角が姦智も。密夫の婬におぼるが故に。其隣あるをしらず。危哉柳輔。八木四郎無かつせば。遂に虎穴に陷て一生をも誤べかりしを。清吉が精忠美鬼神を感ぜしめて。以て闇に此一席に導。狐狸の穴底を見せて。其妄念を斷せしものか。然なき則。清吉が諫言も。徒に馬耳風に比し。八木四郎が異見も爭徹べきや。智有人の惑ひ初たるは。却而愚なるよりは増りて覺ゆ。大角いまだ廿に滿ずして。能壯士を轉ばす事。須此道の豪傑。巧言令色を以。客をひくは。娼婦の業とし言ば。亦憎むべきにあらず。謀らるゝがあしきにや。古語に曰。青樓には遊ぶべし。青樓には苦しむべからずと。是微妙の場にして。遊客最熟練すべき言なり。今閱八木四郎。善此場を踏故に遊で苦しみます。然も通と賞せらる。彼子房が死せざると同じ。大角が姦謀を看知て。忽一計を施し一度両人を苦しむるといえども。柳輔が意本に皈しを見て直に

円金三片を投じて。窮を救ひ。將善情を感じて事を無事に治めたるは。客の客たる所にして。是らをや粋といふべけれ。亦峠家が所作は。あくまで恪自通と慢而。婬を恣にす。故に己を顧事あたはず。遂に一娼婦の爲に。家財を抛にいたる。是らをや愚人とはいふべし。嗚呼愼べきは此一道なり。一度紅唇を閉ば。黄金掌に集り。泪雫すれば。白銀懷に溢。家を捨身を零落も皆一婦の舌頭より起る。おそるべきもの彼が手管。清女がものゝ中にはいかでもらしぬらん。一家の主たる峠家。將柳補が有福なるを捨て。無宿の才助に身を任せたるはいかにぞや。こは大角の身にあらず。或は富家の手生となり。身には錦繡をまとひ。望心に任すといへども。いつしかに其幸を抛。髪結幇間の類ひに身を任せて。貧一生を過して。果は小町と類するたぐひ。あげてかぞへがたし。謂所牛は牛づれにして。楽亦其窮中にあるべし。然れば娼婦。強に金に恍惚ともいひがたし。只其情を慕ふものにや。されば青樓に遊ぶの人。その情を愛して。その色には更るまじき。嗚呼難哉此言。只愼しむべきは居續け。いましむべきは己惚なりけり。

深色狭睡夢巻之下　大尾

高ふは厶り升れど御免のかふむり升て。是ゟ口上をもつて申上升。これに扣へ升たるは。お江戸御ひいきの歌川國貞が門人歌川貞春と申升る者ニ厶り升る。いまだ若年に厶り升れど。繪の道至て執心に厶り升て。相改め升て五渡亭へ門入いたし。歌川の苗字をゆづられ。則五蕉亭といふ号をおくりくれ升たるやふに厶り升。私事も御當地へのぼり居升れば。貞春御引合せの口上を頼み升るゆへ。いまだうい／＼敷私。さし出がましくいかゞと差ひかへ升たれど。朋友の中にても別懇の國貞が弟子の儀に厶り升れば。貞春が改名の御披露を申上たてまつり升。末〻は御取立を持升て。浮世繪師似顔画工の数にも入升るやう。何卒御贔屓のほどをお願ひ申上升る。先は歌川貞春が御目見へ口上さやうに思召下されれ升ふ。

花笠文京

なには津の梅の莟のかうばしく
　春のめぐみに名をやひらかん

歌川貞春

御ひいきをたのもにすだく青蛙
　両手つくしの筆のとりぞめ

浪速 葦廼屋高振 著述

江戸 栁園種春 校訂

江戸 歌川貞晴 画圖

全 和田正兵衛 執筆

文政九丙戌年三月吉辰 發兌

書肆

江戸日本橋砥石店 大阪屋茂吉

名古屋巾下樽屋町 玉野屋新右衛門

京鮹薬師高倉西江入 山城屋佐兵衛

大阪心斎橋通博労町南江入 河内屋茂兵衛

表紙	ヨコ	三寸八分
	タテ	五寸七分
本文枠	ヨコ	三寸二分
	タテ	五寸

春郭裙屐多ク。紅塵凝テ浮バント欲ス。香華大蘭若。歌舞小楊州。花ハ遶ル寺邊ノ寺。柳ハ連ル樓外ノ樓。此ノ郷宜ク醉死スベシ。佳酒ハ碧トシテ油ノ如シ。

象山春日雜咏

猿赤山人

春郭多裙屐紅塵凝欲浮
香華大蘭若歌舞小楊州
花遶寺邊寺柳連樓外樓
此郷宜醉死佳酒碧如油
象山春日雜咏 猿赤山人

自序

玉藻よし。讃岐の猿の人まねは。見ざるひとさへ。イケ子ヱといはざるはなしと。夜ざるひく。庚申まちの友だちが。いさむることもきかざるは。藝なし猿のまけぬ氣で。彼大江戸の諸名家に。ましらと思ふあさ智惠は。手におよばざる水の月。とらんとするに似るのみか。毛さへたらはぬみすぢの糸。てうしはづれのこけ猿と。嗅ひ給へと。

嘉永庚戌の春讃岐のさる人云。

このこかねのさとはるのゆふばえは。わか友猿赤が名におへるさるのしりの。あか本めかして書るものから。へたのたくみのかんなもあらためず。お關所こさ子エ江戸ことばは。ナンダバカラシトおとがめなく。ア丶是ものとかなるみ代の春にうかれ。幽谷を出て。喬木にはいまだうつらぬ藪鶯。かたことまじりの一曲も。同しこ丶ろの友をもとむる心ざしは。ひなも都もかはらじと。四方の君子。かれがさがしらを憎みたまはず其もとめさんにあはしてやろと。いひつぎかたりつぎつ丶。ひろめてたまひねかし。

嘉永三とせといふとしの正月

友人狂迂しるす

金鄉春乃夕榮

猨貫　猿亦居士戯編

第一回

島原芳原もない象山に。人を動す花もさくトハ。予が友狂迂痴叟がよしこのにて。花も鮮語四季の春。むれ來る客を松尾街。五百の長市と名付しは。ずんどむかしの〳〵の事にて。今は屋數もア、三千て。魚鱗につゞく甍こそ。けに小浪花ともいふべけれ。朝まだきより燒立る混堂へ入來る少年。芋淨瑠理は古いとて。薄茱のやうな常磐津もあたまの天邊にこびきけり。中にませりし娼唱の風俗。くさしあかしの月のまる貞　首すさゝもあかつきの。眠りたらざる海棠は「からの美人にあらねども。アノ家猪くふた口中に。臭氣ばかりは似たりけん。その次は。ぼたもちすきそふな人相にて。足のごかつくあるきぶり。立ば立臼。すはれば引臼。これを蘭人に見せたなら。スワルトバアトルといふならん。その次は。丹波の國より生捕ました鬼娘のやうな麁面。草鞋でふんだ板橋の。霜の如なる白粉の。凹凸の中に殘りしを。ぬか袋にてみがきつゝ。×「梅吉さん。アノ小松さんトあひ寐間はモウおよしョ。△「ソリャどうして。×「イヤ。ゆふべ。アノ兒の浪聲のおかげで。し　まつり。三丁も四丁も五六丁もオヤとぼしたわいな蠟燭を。△「オヤおかしい子。ぶんやとやらいふものは。杜宇じやないか。一聲はイヽガ。やたらになくとイケチヱゼ。×「イヤモ八千八聲なきあかしては。むねがわるくてへどゝきすとこそいふべけれ。トしやれて居る門口より。こま屐の音クハラ〳〵と。多くの人の魂をふみくだき來るふたりの歌妓。一個はキイタうへだ嶋。藍弁慶に黑繻子の。襟にかゝりしあらひ髮。つやも奇麗に玲瓏。茶金石の簪。チョイと横へ。少し年まのやうなれど。眉毛も梨の花一枝。雨を帯たる淡粧いろけは蟻の穴よりも。千兩づゝみも崩べし。一個は。その妹分と見え。まだ初春の咲かねし。櫻の艶に梅の粹をば一味加へ。氣に入らぬ風にはなびかぬ柳ごし。いかな阿難尊者でも。ムツと煩惱おやし立て。還俗する氣になるぞかし。況て凡夫のドラ達は。うは氣心の二つもじ。牛の角もじ。

。風呂を出るにも出られはせす。ストンとこまる風情なり。

第二回

爰に。玉藻屋象之助といふ通客あり。玉の巵。底〳〵から。みがきあげたる顔は。光る源氏の君にも。をさ〳〵おとらぬ色男にて。天下第一といふ美人を。掌中に入んといふ大願をぞおこしける。その美人といふは。三十二相悉く具足したる中にも。膚のよきをもつて極上といふ説を出し。光明皇后の故事にならひ。日〻に風呂屋にいたりて。千人の女をためしけるが。今此小妓が姿を見るに。身の美しき事。芙蓉の露に咲るがごく。一點無瑕の玉子のむき立。秀色可餐肌なれば。流す涎は三千丈。ともに白髮の生るまでと。心の内に思ひつゝ。箱火鉢によりかゝり。吸付煙草のうすけふりを。運環の輪に二ツ三ツ。吹出して居る處へ。かの姫も。心はすこしあり原の。中將さんよりイヽ男。トほれてはさすがの吉粹も。やぼなおぼこの處女の如く。はづかしそうにそばへより。小妓「アヽ湯があつかつて。上氣しましたヨ。もしはゞかりながら。その御扇子チョットかしておくんなさいまし。トいへば。象之助も其道には如在なき男なれば。象「イヤ。あなたのやうな全盛のお手に觸ますとは。あふぎにうれしうこざいやす。トわたせば小妓は。「ヲホヽ。ト手にとり見れば。

　親骨にたとへのいても行末ひろく
　ぬしに扇が樂しみよ　　狂迂

トかいてあれば。大妓は見て。「ヲヤ〳〵。これは松里さんがこの間作つたよしこのだヨ。小妓「そんなら。あなたは松里さんのお友達かへ。ト嬉しそうなる心の内。看官よく〳〵推し給へ。

第三回

銀の目貫の太刀の鞘橋を。西へ渡れば名にしおふ。金の郷の春げしき。慾の世界の極樂國。輕薄郎の魂も。この里に宿がへし。有頂天人を欺く姫花の如くに粧ふたり。わけて花橘屋といふ青樓は。ぴいどろさかしにつり燈籠。一向宗の佛壇よりも。まだうるはしき座舗にて。金ほど光るあが佛。トうやまはれ來る通人は。松里といへる粹の骨長。玉藻屋象之助を伴ひて。幇間も兼てより待まうけたる亭主の狐右衞門。ヲツナあたまの凹入金くれんとぞはひかゞみ。奥の茶室へ通しける。こゝは象山の天狗達。翅をやすめる杉柱。かけ花瓶に朝良の。一輪咲し投入も。利休が流れをくんで來る。喜撰一椀のむうちに。咄嗟に間にあふ鉢肴。はやあひたいのさし身より。外にうまみの

赤貝は。ヲヽ蜃氣樓を金絲にぬひし。はでな衣裳の藝妓の小富士。姉の翰江ともろともに。二階のはしご。トコトンあがれば。松「コレ〳〵。珍肴亭の御馳走に。楊貴妃さんの御入來トハ。どふもいへぬ。サア玄宗皇帝がお待かねジヤ。ト象之助がそばへおしやれば。小富士は嫣然ト一笑し。からくれなゐの襟くつろげ。半分あけし金扇で。ふたりかけもちに煽ぎつゝ。象之助をしり目に見て。小富士「あなたは。いつぞや。風呂屋で御目にかゝりましたナア。松里「ハテ。おそろしい眼力じやナア。ト弥陀六のこなしになれば。小富士「あなたは。いつでも。程がよしつねさんじや。松「イヤわつちはけふは弁慶でございやす。トいろ〳〵しやれて酒となり。踊たり。舞たりすれど。こゝに畧す。抑この小富士といふひめは。色藝ともにならびなき全盛にて。多くの客をふり袖の。容易に帶をとかされば。人仇名して高根のさくらといふ。その心は手折がたしといふ事なり。されど象之助にはほれきつて。はや色に出る薄紅梅。ほろよひきげんのかほいろを。松里はそれと見てとりて。下女をよんで。何かひそ〳〵耳をねぶれば。はや用意をやしたりけん。松「サア酒は量なし。サモウ初學とこに入と出かけよふ。象「イヤ〳〵。賢をけんとして。色に易るとイヽリヤント。拳をうつて居る。松「ソレデモ。妓を見て為ざるは勇なしダ。トむりに一間へおしこめば。極彩色の金屏風。鴛鴦のつがひの翼をならべ。いつしか　も　雨の夢。迭に心とけ〳〵ど。雪の膚にうすけふり。空燒物の下襲。おもひ染こむ摸揉さへ。ぬしといつしよにや　梅や。ツイ一聲の鶯の。　の　の樂しみは。アヽきみが代のしるしなり。折から聞ゆる　の　に。　金釵のおとカチ〳〵〳〵〳〵。

第四回

つりばりのやうなかしくで釣りたらす。網まで張りし伏猪亭。いつか阿漕の浦ならで。たび重りし象之助。噺もつもる雪の朝。象「ドリヤ歸らふ。ト帶引しめ立あがらんとするをりしも。のきばの竹のくづれ雪。ドッサリ枕にひゞきければ。小富士は驚き抱き付。「アノ古い文句でありますが。たとへ年季がますかとて。けさの寒さにかへさりよか。トうま味を含みしその笑皃。チヨンボリあきし醫のなかへ。とんと命も穽。深く込りし象之助。宵の口舌に立腹も。さつぱりわすれて居る處へ。下女のお萩。こたつの火をもつて來て。お萩「面白妙の雪げしきでございます。ト椽側の障子さつとあくれば。象「アヽ寒い〳〵。香爐峯のゆきはむかしの事だ。ヤッパリ障子をしめておくんナア。

そしていそいで燗をおたのみ申やす。お萩は。ハイ。トいふうちわ。トン〳〵あふぐ泥爐は。香芹のかをりに鴨の脛。みじかき冬の日もたけて。午の貝ふくころになりければ。象之助も腰をする。いつそ手形もやけまくで。二寸きらるゝ覺悟の居續。さいつ。おさへつ。水いらず。酒しほ鍋へさしかげんも。女房きどりの小富士が塩梅。あまい辛の世態の味も。まだしら歯はそめねども。紙を引さき眉毛をかくし。モシヱこちの人などゝ。勤を早ふひく三絃の。てんトたまらぬ醉かげん。火燵は戀の玉手箱。あけを願ひしむらさき浦しま。ちりめんの下紐へ。そろ〳〵あしをさし込み藝妓。折から二階の下より。「姉さんたのんでおくんな。小富士「ハイ旦那は今やすんで居るから。後にいふてあげるヱ。

第五回

かゝる處へ。松里は雪をふみ分けて。あわたゞしくかけ來たり。袖うち拂ふて。一息つき。松「サア大變ナ事が出來たヨ。象「ナニどうした訳だ。松「イヤおまへの姉夫恵内どんは。かほは如來さんのやうなれど。○がほしいの御念願。石の地藏のむなぐらでも。つかむやうな有財餓鬼。おまへの性とは火水の處。此間からのゐつゞけが。あまりながいにかこつけて。一家親類相談のうへ。しばらく勘當にきはまりし。ときゝて象之助はびつくりし。寐耳に水の入たる如く。とんト途方にくれ竹の。朱らうの煙管頬杖につくねんとして居たりしが。松里ははたから氣やすめに。松「ナニサ。大丈夫屈する事も子イゼ。色男金と力はない物ダ。勘當うけた身の上も。イキナじや子ヱカ。マアかふいふ時には一杯のむとしよふ。小富士さん。その燗直して象さんにあげ子イカ。小富士は。「ハイ。トいひつゝも。襟の中へさしいれし皃を。やう〳〵半分出し。涙でしめりし火鉢の火を。紙を折りてパタ〳〵あふぎ。とつくりの尻をあぶつてさし出せば。象之助はグイとのむ。愁を掃ふ玉帚。雪にあつ湯のかんざけに。しばらくうさをなぐさめけり。

作者曰。雪中の居續。こたつの對酌。ちん〳〵鴨のなべやきは。これ人間の喜歡城。されどたのしみ極れば、かなしみおほしのことわり。象之助が身だいいつの間にやら。あし引の山とつみてしたくはへも。今はあらしの吹からに。金のなる木のしをるれば。女郎かひ變じて。ちはやふるかみくづかひにもおとるべし。かくいふ作者も。木から落たる猿なれば。まじめにいふも鳴呼がましけれど。看官。前車のくつがへるを戒とし給へかし。

第六回

去ほとに。象之助は浮浪人の身となりはて。どこからいでの山ぶき色。せかめど／＼くれなゐの。花代つもりて雪の如く。はらへばきよき袂さへ。今はよごれし結城のどてら。はなの内町へは向はれず。やう／＼姑蘇の金山寺。夜半の鐘をあひづにて。かよふ所はきたなくも。螺の曲の如き巷にて。間口三尺の一小樓。ほこりまぶれの木枕に。みじかき蒲團よぎなくも。六疊じきを三間にしきり。その次の間のあひ客は。唐のまねするからけつ醫者。和漢蘭語をなひまぜて。「コリヤ／＼老婆。風流箭のない女をきまつてくれ。酒と肴も。ついでにたのむ。」と懐中より木守の南一とり出せば。老婆は受とり。しばらく有て。調へ來る鉢の肴は。みかんに肉餅五ツきれ六きれ。箒上の雁のやうに組排べたり。醫「コンナ物は美くナイ。鰻か。鼈は子イカ。老婆「ハイ別のお肴はモウございませぬ。醫「ナニサ。べつといふはすつぽんの事だ。」俗人といふものはドウモならぬ。「ハイ鼈はありませぬが。亀はどうでございやす。醫「イヤその五四六は大の禁物じや。ゆふべも大壯はりこんで。殆裸躰に及んだ。それより。とかく易物がよひ。淮南ダ。ト湯豆腐で小半合酒をのみつくし。「アヽ頗ドロンケン。」と聲はりあげて。

子夏と顔さへ見る事ならぬ誰をたのんで閔子騫　猿赤

その又次の共客は。色も青田の苔博打うでのくりから自慢にや。廣袖鶉衣片はだぬぎ。の酒を手にもつて。※「アノ聲はナンノお經ダ。亾「ばかアいへ。アリヤよしのこだヨ。※「ヱヽ。アノやうな塩辛聲が酒の肴になる物か。と江戸ッ子風のちきばして。河豚の湯をくらひつゝ。※「アヽ鶯の味ひは又格別だ。雪のふぐ豈一命を惜まんや。亾「イヤ河トハヨクいつた句だノウ。わしや豚汁にあたら命をすてんより。いき鯛をくふはうがよい。※「ソレデモ。標鉄の中に。西子といふ美人の乳のむまさに。たとへて有トいふがヱ。亾「ナニサ。アレハ毛唐人の寐言ダヨ。日本の魚の親玉とは鯛の事だ。それをすてゝこれをくふトハ。内の嚊をそでにして。外で女郎かひするやうなものだ。※「フン。もしあたつたら。かさかいたやうな物かへ。そりやそうと。兄貴。例の彦妻呼にやるか。亾「ヲケ／＼。手めへのやうなトンチキ野郎に。ござる姫があれば。立た柱に花が咲くワイ。※「イヤそうもいはれぬ。劍菱や薦きて人がすくぞ。トしやれて居る處へ。亭主宵仕切をとりにくれば。※「こよひ

仕切はこの通りダ。ト鋼ををしへる。亭主「ふぐにくれるといふ事か。象「イヤ鉄砲ダ。亭「モウその毒氣には。たび〳〵こりて居るカライヤダヨ。と河豚のやうにつらふくらせば。ひとりの生酔むつとして。「金の代りに地がねを出そふ。ト火鉢をとつて打かへせば。火花は四方へ飛ちりて。何がやけるかしらぬ火の。只一面り沖となり。あひの屛風バッタリたふれば。以前の醫生新造に。帆柱　し　ふ　んに波をう　す「さすがの悪漢吹出して。腹をかゝへて虎渓の三笑。笑ふ門のふぐ肴。和睦の酒となりければ。みな〳〵ともに酔たふれ。しの字。くの字に打ふしける。これはさておき。小富士はかの銅山の客人を欺。みな象之助に身あがりの。雲雀の床にかよひぢも。いつしか首尾のあしくなるを。やう〳〵翰江がはからひにて。今宵は夜ふけて來りしが。小樓のいぶせさは有明の灯已にきえ。破窓の紙ピラ〳〵風に閃あなより。さしこむ月のあかりに見れば。象之助が待かねて寐入りし貞の。いつもよりは痩たるやうに見えければ。みなわしゆゑの苦勞かと。思へばいとゞ可愛さの。心のたけの長じばん。そつと寐床へはひる折しも。屋棟の上に烏の聲。カアイ〳〵〳〵。

第七回

光次は業平よりもイヽ男。ト古人の金言うべなる哉。されば三味線しらず。芝居見ず。藝なし猿のやぼ客も。たゞ〇印さへあれば。いかなる美人も。ツイ手いけのはなになる物なり。爰に。銅山の大盡。小富士をしば〳〵口説といへども。心づよくも肌ふれざれば。終には千金を抛ちて。根引にせんとひしめきけるが。元來小富士が親方は。威猛屋の長爪虎と綽号の付しほどの人物にて。鋼臭をしたふ事。蟻の西瓜の皮に附が如ければ。早速相談はまりけり。小富士はそれときくよりも。ほんに身も世もあられふる。涙を袂につゝみかね。けふは持病がおこりしとて。奥の一間へ立籠り。よぎ引かづきて打臥しける。翰江は藥に事よせて。枕のそばへそつと來て。翰江「今象さんが格子へ來たが。なんぞ用事はないカヱ。トいはれてうれしく。首をあげ。小富士「モシ姉さん。これを渡しておくんなア。ト小菊の紙に紅筆で。はしりがきなるその文も。半はなみだにしめりけり。かくて。其夜も更わたり。轟〻の太鼓もやみ。お茶をひいたる藝子の釵も。屛風に觸る折からに。小富士は起て脊戸をあけ。飛石傳ひのさし足も。心のそこの深み草。胸へさしこむ芍藥の。花壇を廻りせんすいの。菖蒲もわ

かぬ戀のやみ。さぐり〳〵て橋をこえ。誰がよい中へ垣つばたの。汀に生ふるうき草の。あすはむかふの岸に咲。トおもへばいとゞ打しをれ。露もかはかぬ朝貌架。ほんにうき世も秋萩の。しをり戸あけて忍び出る。外にはそれとすいせんの。はなの垣ねにたゝずみて。待かねて居る象之助。よひのみにて約束し。つれてとも〳〵飛梅の。心づくしのはてまでもと。にげゆくむかふの木かげより。あらはれ出たる五六人。黒装束に面をつゝみ。「ヤア欠落人をのがすな。と引執へて轎へのせ。いづくともなく飛行けり。

第八回

人間萬事塞翁が馬〳〵。ト首尾よふ計りおふせ。その行さきは夏木村の中ほどにて。卯の花垣にて表をかこみ。庭のやり水きよらかにながれ。かきつばたのはなかげに。金魚のおよぐも奇麗に見え。ほどよき處へかけ橋も。風流めきた住居なり。内の様子をうかゞへば。銅壺火鉢を拭立て。塵一點も霰かたの。鐵瓶に雨ふる聲のきこゆるは。ふだんたぎれる湯なるべし。家内は年比十三四の。氣のきゝた女の童に。猧兒一隻のその外は。猫ばゝ爺の類もなし。座しき口の二間のふすま。微塵砂子の仕立だち。四季の草花のかきまぜも。圓山風の密畫なり。ふすまをあくれば鼻さきへ。ポットかをるは青磁の獅子の。口から吐しけふりなり。床には文具を位置よくかざりし側に。琴一張を置たるは。コロリンシャントころび寐の。誰と調子か合ずみ家。ト小富士はあやしう思ひし處。一間の内に聲ありて。其譯くはしく語らん。ト立出たるはこはいかに。銅山の客人なれば。小富士はいよ〳〵驚しが。其人扇を笏にとり。「抑こんどの狂言は。小富士さんが心底をさぐらん爲の計。その作者は松里先生。此榎井藻海はちやり敵。トかぶりし頭巾をとりすつれば。あたまばかりはあかゞね山。兀としたる禿坊主。七賢人のなかまのやうな。竹の林の藪醫師なり。小富士は事の始末をきゝて。魘夢のさめたるこゝちして。いそ〳〵したる折こそあれ。出入りの料理屋。「ハイ御肴が出來ました。ト三ツ四ツさげくる鉢ざかな。酒のかんさへイヽ塩ばい。トみな〳〵ともに悦びける。

題辭

漫ニ驥才ヲ屈シテ蟻垤ヲ嘗ム。乾坤到ル處孰カ知音ノモノゾ。陽春ハ入ラズ時人ノ耳。一卷ノ狂文萬金ニ値ス。

笑叟

題辭

漫屈驥才嘗蟻垤乾坤到
處孰知音陽春不入時人
耳一卷狂文値萬金

笑叟

象山の麓に猿あなりぬ。其名龍宮にさへ響て。膽をつぶしぬ。智は孫呉空にまさる。猿冠者といはんか。太良冠者にあらねど。大名もうかるゝうつぼざる成べし。さる程に。こゝにいはざる色の黄金の里。こゝろもうごく春の夕榮。これなん又とあろかゐなア。賛なまたとあろかひな。よゐ女房の色情春情。見るにあかざる。いふにいわれざる。きくにいまだきかざるあり。三馬がくゝり猿もたかをくゝり。此赤本にしかざるは。あらじとしかいふ。

庚戌の夏小簔ほしげなる卯の花雨のそぼふる日

安原の夏澄誌

昭和四年三月二十九日印刷
昭和四年四月一日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第十二卷
洒落本集
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿九巻

書目豫定一覧

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

〇好色一代男〇好色二代男〇好色三代男〇好色一代女〇好色五人女〇男色大鑑〇武道傳來記〇武家義理物語〇新可笑記〇西鶴諸國咄〇懷硯〇近代艷隱者〇日本永代藏〇世間胸算用〇織留〇本朝二十不孝〇本朝櫻陰比事〇西鶴置土産〇萬の文反古〇名殘の友〇俗つれづれ〇一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

【正篇】〇俳句集 芭蕉句選・句選拾遺・補遺　〇連句集 江戸兩吟集・江戸三吟・次韻・俳諧集・補遺　〇俳文集 文集・補遺　〇評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・初懷紙評註・續の原　〇紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更科紀行・奥の細道・嵯峨日記　〇書簡集 消息集・眞蹟集・補遺　〇語錄集 葛の松原・去來抄・三冊子・山中問答

【外篇】〇虚栗〇冬の日〇蛙合〇春の日〇鶴の歩〇曠野〇其袋〇瓢〇猿簑〇深川集〇炭俵〇別座敷〇笈日記〇續猿簑〇韻塞〇小文庫

【附錄】枯尾花〇芭蕉翁行狀記〇全傳〇芭蕉翁繪詞傳〇年譜

第四巻 第五巻 近松名作集 上（第二回配本濟） 下（第六回配本濟）

〇上巻二十六篇・下巻二十四篇

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上（第十四回配本濟） 下（第廿三回配本濟）

〇上巻二十二篇・下巻十九篇

第八巻 歌舞伎脚本集（第十九回配本濟）

〇十二篇

第九巻 浮世草子集（第十六回配本濟）

〇十篇

第十巻 怪談名作集（第十二回配本濟）

〇十一篇

第十一卷 黄表紙廿五種（第一回配本濟）

第十二卷 洒落本集（第廿四回配本濟）

○百花評林○異素六帖○聖遊廓○月花餘情○遊子方言○辰巳之園○當世氣どり草○妓子呼子鳥○婦美車紫𨛗○深川新話○道中粋語録○大通多名於呂志○愚人贅漢居續雁金○狂訓彙軌本紀○和唐珍解○令子洞房○通言總籬○田舍芝居○傾城買二筋道○田舍談義○女郎買糠味噌汁○娼妓絹籭○錦の裏○仕懸文庫○辰巳婦言○讃極史○籬の花○廓宇久爲壽○河東方言箱まくら○色深狹睡夢○新潟後の月見○金鄉春夕榮○和歌始衣抄○古契三娼

第十三卷 讀本集（第七回配本濟）

○七篇

第十四卷 滑稽本集（第三回配本濟）

○二十五篇

第十五卷 人情本集（第廿一回配本濟）

○七篇

第十六卷 第十七卷 第十八卷 南總里見八犬傳 上（第四回配本濟）中（第九回配本濟）下（第十七回配本濟）

第十九卷 狂文狂歌集

○曉月坊酒百首○世の中百首○雄長老狂歌集○貞德狂歌百首○吾吟我集○古今夷曲集○後撰夷曲集○狂歌うた合○卜養狂歌集○狂歌鳩の枝○貞柳全集○明和十五番狂歌合○狂歌若葉集○狂歌万載集○德和歌後万載集○狂歌才藏集○四方の留槽○吾妻なまり

第廿卷 第廿一卷 修紫田舍源氏 上（第五回配本濟）下（第十五回配本濟）

第廿二卷 第廿三卷 膝栗毛其他 上（第十回配本濟）下（第十一回配本濟）

○五篇

第廿四卷 第廿五卷 和文和歌集 上（第十三回配本濟）下（第二十回配本濟）

○二十一篇

第廿六卷 川柳雜俳集（第八回配本濟）

○四篇

第廿七卷 俳文俳句集（第廿二回配本濟）

○三十三篇

第廿八卷 歌謠音曲集

義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず）○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の卷 酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の卷 鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の卷 帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の卷 新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目 揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目 志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切 小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切 道春館の段）○八陣守護城（八の切 正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市內の段）○近江源氏先陣館（八つ目切 小四郎切腹の段）○鎌倉三代記（七の切三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切 草履打の段）○太平記忠臣講譯（七つ目 喜內住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切 碁立の段）

河東節 ○松の內○神樂獅子○隅田川舟の內○秃萬歲○炎すゐ殿の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀨○ぬれ扇○亂髮夜編笠○助六所緣江戶櫻○常陸帶花柵○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

一中節 ○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○墨繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹春の鷄合

常磐津節 ○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦○積戀雪關扉○四天王大江山入○雨顏月姿繪○戾駕色相肩○帶文桂川水○倭假名色七文字○壽靱猿○松色操高砂○再夕暮雨の鉢木○寄罠娼釣髭○後之月酒宴島臺○恩愛瞳關守○願絲縱苧環○忍寄戀曲者○花舞臺霞猿曳○薪負雪間の市川○乘合船惠方萬歲○其扇屋浮名戀風○景淸○勢獅子劇花籠○釣女○戾り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章○大森彥七

富本節 ○年朝嘉例壽○四十八手戀所譯○百夜菊色の世中 ○夫婦酒替ぬ中仲 ○其俤淺間嶽○道行戀飛脚○〽連理橋○新曲高尾懺悔○花川戶身替の段○春夜障子梅○新曲かぐら獅子○徒髮戀曲物○茂懺悔睦言○道行念玉蔓○幾菊蝶初道行○拙筆力七以呂波○草枕露の音玉歌和○奈須野○御代榮益穗富種○高砂女夫

淸元節 ○梅の春○榮能春延壽○北州千歲壽○四季三葉草○其小唄夢廓○絲の五月雨○深山櫻及兼樹振○御名殘押繪交張○月雪花名殘文臺○詠梅松淸元○色山館深川○大和い手向五字○色彩間刈豆○法花姿色同○月花茲友鳥○筐花手向橋○復新三組盞○道行浮塒鷗○道行旅路の嫁入○六歌仙容彩○彌生の花淺草祭○おどけ

俄煮珠取○道行旅路の花聟○再春菘種蒔○初霞淺間嶽○メ能色相圖○造銑菊睦言○菊嬉閏睦言○倭假名色七文字○重褄閒の小夜衣○明烏花濡衣○梅柳中宵月○日月星晝夜の織分○初櫓噂高島○貸浴衣汗雪○忍逢春雪解○色増艶夕映○花雲助相肩○靑海波○助六曲輪菊

新内節 ○二重衣戀占○若木仇名草○千日寺名殘鐘○眞夢血染抱柏○歸咲名殘の命毛○傾城音羽瀧○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪○明烏後眞夢○累身賣の段

薗八節 ○道行相合巨燵○桂川戀の柵○鳥邊山○花街の色糸○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿○道行緣花房○口舌八景○小春治兵衞巨燵の段○夕霧

江戸長唄（めりやす大薩摩を含む） ○矢の根五郎 ○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子○二人椀久○英獅子亂曲○百千鳥娘道成寺○高尾さんげの段○天人羽衣京鹿子娘道成寺○英執着獅子○風流妹脊の杜建○門出京人形○亂菊枕慈童○鐘入解脫衣○劒烏帽子照葉盞○柳雛諸鳥囀○初咲法樂舞○ねこのつま○乘掛情の夏小立○鞭櫻字佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町○春調娘七種○童子戯面被○衣かづき思破車○童獅子○教草吉原雀○相生獅子○嫐染分紅葉○隈取安宅松○御代松子日初戀○其容形七枚起請○關東小六後雛形○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形○三重霞嬉敷顏鳥○舞扇薗生梅○濱松風戀歌○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪○遲櫻手術葉七字○戀男調松風○再春菘種蒔○戀罠奇掛合○四季詠寄三大字○閏茲姿八景○正札附根元草摺○寄三津再十二支○其九繪彩四季櫻○新獅子○三升猿曲舞○石橋○老松○不動○七所御攝初鐵漿○大和い手向五字○外記猿○復新三組盞○廓三番叟○歌へす〳〵餘大津畫○後月雪花蒔繪の巵○捆筆力七以呂波○八重霞賤機帶○後の月酒宴島臺○御歳玉海老手遊○吾妻八けい○六歌仙容彩○姿花後雛形○初子日○俄獅子○外記の傀儡師○初しぐれ○巽八景○花翫曆色所八景○勸進張○花兄弟十二月所作○島臺○軒端松○士農工商○秋色種○雛鶴三番叟○花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴龜○五色の絲○今様小鍛冶○柳糸引御攝○壽○鞍馬山○翁千歳三番叟○廓丹前○菖蒲ゆかた○寳三之庭○紀州道成寺○連獅子○時雨西行

歌澤 寅派、芝派の歌詞を全部收める。

小唄・端唄・雜曲集 江戸時代から唄はれて今日に何唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷 謠曲三百五十番集（第十八回配本濟）

（終）